岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (12)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

7

1976・3

岡山県教育委員会

序

大阪府下吹田インターチェンジを起点として西走する中国縦貫自動車道は，昭和50年度岡山県落合インターチェンジまで開通のはこびとなりました。この道路建設事業にかかる埋蔵文化財発掘調査は文化庁と日本道路公団との間で締結された埋蔵文化財の取り扱いに関する「覚書」にもとづき，岡山県教育委員会の直営事業として昭和43年度以来実施してまいったところであります。

本書はこの発掘調査に係る報告の第７分冊目にあたり，落合町以西のいわゆる第二整備区間に所在する宮の前遺跡・備中平遺跡・桃山遺跡の３遺跡について収録したものであります。本報告書は限られた整理期間のなかで執筆，収録したもので内容的には不充分な点があるかと思いますが，これが県北の歴史に新たな一ページを書き加えるための素材としてご活用いただけるならば望外の喜びとするところであります。

末筆ながら本発掘調査の実施にあたって日本道路公団ならびに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ関係地元教育委員会，その他関係各位のひとかたならぬご協力とご指導をいただいたことに対し厚くお礼申し上げます。

昭和51年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　言

1. 本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。
2. 岡山県内の発掘調査は，第一次整備区間と，第二次整備区間に分れ，第一次整備区間では，25遺跡あった。昭和44年３月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和48年６月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，じつに４年３カ月を要した。この調査に係る報告書は５分冊に分け刊行された。第二次整備区間の発掘調査は進行中であるが，発掘調査の終了したものから逐次刊行していくことになり本調査報告書はその第６分冊である。現在発掘調査が進行中である。
3. 中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和42年５月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて，昭和51年３月現在対策委員に下記の諸氏を委嘱している。

勝央中学校教諭	浅野克己	（昭和47年11月～）
岡山大学教授	近藤義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月壮介	（昭和44年４月～）
院庄小学校教諭	土居　徹	（昭和44年４月～）
津山高等学校教諭	宗森英之	（昭和47年11月～）
津山市文化財保護委員	渡辺健治	（昭和44年４月～）

4. 調査は，岡山県教育委員会文化課（昭和44年度は社会教育課）が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる。なお，昭和44年度～昭和47年度の構成員調査遺跡名については既刊第１～５分冊を参照されたい。

昭和48年度

担当調査員は津山教育事務所兼務であった。

文化課

教育次長（文化課長事務取扱い）　岡田政敏

参事	富岡敬之
課長補佐	水川富貴男
文化財主幹	浅原　健
文化係長	守屋　明
主任	渡辺武彦
文化財二係長	岡本明郎
主任	大山行正
文化財保護主事	河本　清（７月10日付　津山市教育委員会へ出向）
〃	栗野克己　橋本惣司

主　事　新東晃一（6月16日付　鹿児島県教育委員会へ転出）
〃　田仲満雄　松本和男　井上　弘
〃　岡田　博　山磨康平　高畑知功
〃　二宮治夫　浅倉秀昭

津山教育事務所

所　長　宮島久夫
次　長　赤木　茂
庶務係長　田中篤周
主　事　清輔脩身　難波友弘

調査遺跡名

高本遺跡・小中遺跡・下市瀬遺跡（いずれも前年度より継続調査，報告書既刊），旦原遺跡，須内遺跡，宮の前遺跡，備中平遺跡，谷尻遺跡（第一次），桃山遺跡（第一次），植木遺跡，空古墳（第一次）

昭和49年度

本年度は，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を，津山教育事務所が担当することになり，調査員は文化課から津山教育事務所へ配置換となった。

文化課

文化課長　小林孝男
参　事　富岡敬之
課長補佐　（文化財二係長事務取扱）西口秀俊
主　任　光吉勝彦
文化財保護主事　葛原克人　伊藤　晃
主　事　枝川　陽　下沢公明　樋口啓子

津山教育事務所

所　長　菱川　豪
次　長　赤木　茂
庶務係長　田中篤周
主　任　大山行正
主　事　難波友広　山本政昭
文化財保護主事　栗野克己　（社会教育課）橋本惣司
主　事　田仲満雄　井上　弘　山磨康平
〃　高畑知功　二宮治夫　浅倉秀昭
〃　竹田　勝（3月1日採用）

須内遺跡・宮の前遺跡（共に48年度より継続），谷尻遺跡（第二次），桃山遺跡（第二次），戸

谷遺跡，塔の畝遺跡，青地遺跡，岩倉古墳群，岩倉遺跡

昭和50年度

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は，本年度から新見市以西の各遺跡についても着手することになり，距離的に見ても行政上から見ても津山教育事務所が担当することは困難となった。文化課，津山・高梁両教育事務所が協議した結果，48年度からの継続調査中の遺跡については津山教育事務所で，岩倉遺跡以西については高梁教育事務所でそれぞれ担当することとなった。なお，旦原遺跡から青地遺跡までの報告書作成のための整理は津山収蔵庫で行なった。このため，調査員は文化課に配置換え（高梁教育事務所兼務）となり，48年度から継続調査中の遺跡担当調査員は終了するまでおよび報告書作成担当調査員は一定期間（１～３ケ月）津山教育事務所兼務となった。

文化課

文化課長	小林孝男			
参事	富岡敬之			
〃	西口秀俊（課長補佐二係長事務取扱）			
主任	光吉勝彦			
文化財保護主事	葛原克人	山磨康平	正岡睦夫	
	下沢公明	岡田博	高畑知功	
	井上弘			
主事	田仲満雄	二宮治夫	浅倉秀昭	
〃	竹田勝	福田正継	友成誠司	

津山教育事務所

所長	菱川豪
次長	吉田賢吾
主幹	田中篤周（庶務係長事務取扱）
主任	大山行正
主事	山本政昭

高梁教育事務所

所長	田井治太郎
次長	小林克己
主幹	守屋明
庶務係長	小野茂正
主事	丸尾洋幸　藤井守雄

調査遺跡名

谷尻遺跡・桃山遺跡（共に48年度より継続），空古墳，岩倉遺跡，岩倉古墳群（共に前年度より継続），宗金遺跡，横見古墳，横見古墳群，新見庄関連遺跡（二日市庭址・祐清塚），谷内遺

跡，迫古墳群，新市谷遺跡，岩屋城址，安信古墳群，塚谷古墳群，山根屋遺跡，中林遺跡，野田畝遺跡，西江遺跡，二野遺跡，光坊寺古墳群，土井遺跡，土井城址，塚の峰古墳群

協　力　者

各遺跡調査地周辺の地元の人々，また，北房町・大佐町・新見市・神郷町・哲西町の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

宮の前遺跡・谷尻遺跡・桃山遺跡出土の種子分析は，岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授の手をわずらわした。

5. 本書に用いたレベル値は，海抜高である。
6. 本書に用いた地形図は，国土地理院承認済である。$\frac{1}{1000}$の地形図は，日本道路公団の Express plan をトレースしたものである。
7. 本報告書で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

総　目　次

序

例　言

1 宮の前遺跡 (28) …… 1

2 備中平(ひら)遺跡 (29) …… 215

3 桃山遺跡 (31) …… 315

1 宮 の 前 遺 跡 (28)

目　　次

第１章　遺跡の立地と環境……11
第２章　調査の経過……15
　１　調査の経過……15
　２　日　誌　抄……15
第３章　一次調査の概要……18
第４章　二次調査の概要……26
　１　１　調　査　区……26
　２　２　調　査　区……95
　３　３　調　査　区……112
　４　４　調　査　区……133
第５章　種　子　分　析……145
第６章　結　　語……153

図　目　次

第１図　宮の前遺跡の位置……10
第２図　遺跡周辺の地形……12
第３図　遺跡付近の字名……14
第４図　グリッド及びトレンチ配置図……19
第５図　トレンチ23土層断面図……21
第６図　トレンチ土層断面図（上：トレンチ－Ｌ，
　　下：トレンチ－25）……23
第７図　地形図，並びに遺構配置図……27
第８図　１区全体図……29
第９図　１号住居址実測図……31
第10図　住居址内出土遺物実測図……33
第11図　２号住居址実測図……32
第12図　３号住居址実測図……35
第13図　４号住居址実測図……36
第14図　５号住居址実測図……38
第15図　Ｄ－１内流入石……39
第16図　１区土壙群平面図……41

第17図　土壙，ピット実測図……43
第18図　pit －2（37）……45
第19図　土壙墓－4……45
第20図　土壙墓－19……46
第21図　土　壙－64……46
第22図　土壙内出土遺物……47
第23図　C－4・土壙内出土遺物……48
第24図　土壙内出土遺物……49
第25図　土壙，ピット内出土遺物……50
第26図　土壙，攪乱層出土遺物……52
第27図　土壙内出土遺物……51
第28図　C－2，土器溜り……52
第29図　C－2土器溜り……52
第30図　C－3実測図……55
第31図　C－4実測図……57
第32図　周湟内土器溜り……46
第33図　1区出土遺物……61
第34図　1区出土遺物……62
第35図　C－7実測図……63
第36図　1区出土遺物……68
第37図　C－8実測図……69
第38図　C－8南土器溜り……71
第39図　1区出土遺物……72
第40図　1区出土遺物……73
第41図　1区出土遺物……74
第42図　1区出土遺物……75
第43図　1区出土遺物……76
第44図　1号墳実測図……81
第45図　1号墳主体部実測図……83
第46図　1号墳主体部出土遺物，etc ……85
第47図　石蓋土壙墓－2実測図……86
第48図　石蓋土壙墓－3　3′（左－3′，右－3）実測図……87
第49図　シスト－3実測図……89
第50図　シスト－4実測図……90
第51図　シスト－5実測図……91

第52図　シスト－６実測図……90
第53図　中世墳墓実測図……92
第54図　中世墳墓出土遺物……92
第55図　Ｇ－24Ｋ不明石溜り実測図……93
第56図　炉　……95
第57図　１区出土遺物……96
第58図　２区遺構配置図……97
第59図　２区Ｋ－トレンチ（上），19－トレンチ（下）
　　断　面　図…… 100
第60図　Ｈ－01実測図…… 101
第61図　Ｈ－01出土遺物…… 101
第62図　Ｈ－02実測図…… 102
第63図　Ｈ－02出土遺物…… 104
第64図　Ｈ－03実測図…… 104
第65図　Ｈ－03出土遺物…… 105
第66図　Ｈ－04実測図…… 105
第67図　Ｈ－04出土遺物…… 105
第68図　Ｈ－05実測図…… 106
第69図　Ｈ－05出土遺物…… 107
第70図　Ｄ－01，02土層断面図…… 108
第71図　Ｄ－01出土遺物…… 109
第72図　Ｄ－02出土遺物…… 109
第73図　Ｄ－02出土須恵器…… 110
第74図　Ｐ－01実測図…… 113
第75図　Ｐ－01出土遺物…… 113
第76図　２区遺構に伴わない遺物…… 114
第77図　３区遺構配置図…… 116
第78図　Ｈ－001実測図…… 117
第79図　Ｈ－001出土遺物…… 118
第80図　Ｐ－001実測図…… 119
第81図　Ｐ－001出土遺物…… 120
第82図　Ｐ－002出土縄文式土器…… 121
第83図　Ｐ－003（１～11），Ｐ－004（12～14）及び
　　その他のピット出土遺物…… 122
第84図　Ｄ－001土層断面図…… 124

第85図　D－001上層出土遺物…… 125
第86図　D－001上層出土遺物…… 126
第87図　D－001上層出土遺物…… 127
第88図　D－001上層出土須恵器…… 128
第89図　D－001下層出土遺物…… 129
第90図　D－002（1～5）及びD－003（6～10）出土遺物…… 132
第91図　5－E包含層出土遺物…… 134
第92図　5－E包含層出土遺物…… 135
第93図　5－E包含層出土須恵器…… 136
第94図　3区表採遺物…… 137
第95図　4区全体図…… 138
第96図　住居址実測図…… 139
第97図　出土遺物…… 139
第98図　貯蔵穴平面・断面図…… 140
第99図　貯蔵穴平面・断面図…… 141
第100図 貯蔵穴平面・断面図…… 142
第101図 柱穴列，柵列…… 143

図　版　目　次

図版1　　宮の前遺跡全景（南東上空より）
図版2－1　1区全景（東より）
　　2　1区全景（西より）
図版3－1　1区全景（南東より）
　　2　1区全景（北西より）
図版4－1　C－3，C－4，石蓋土壙墓－3　3′，シスト－1～4，土壙（北より）
　　2　1号墳全景（北より）
図版5－1　G24－K不明石溜り（東より）
　　2　C－7，石蓋土壙墓－1，D－1（西より）
図版6　1　1区周湟，溝，住居址（北より）
　　2　1区周湟，溝，住居址（北より）
図版7　1　1号墳主体部（直上より）
　　2　1号墳主体部遺物出土状態（直上より）
図版8　1　石蓋土壙墓－1（南西より）

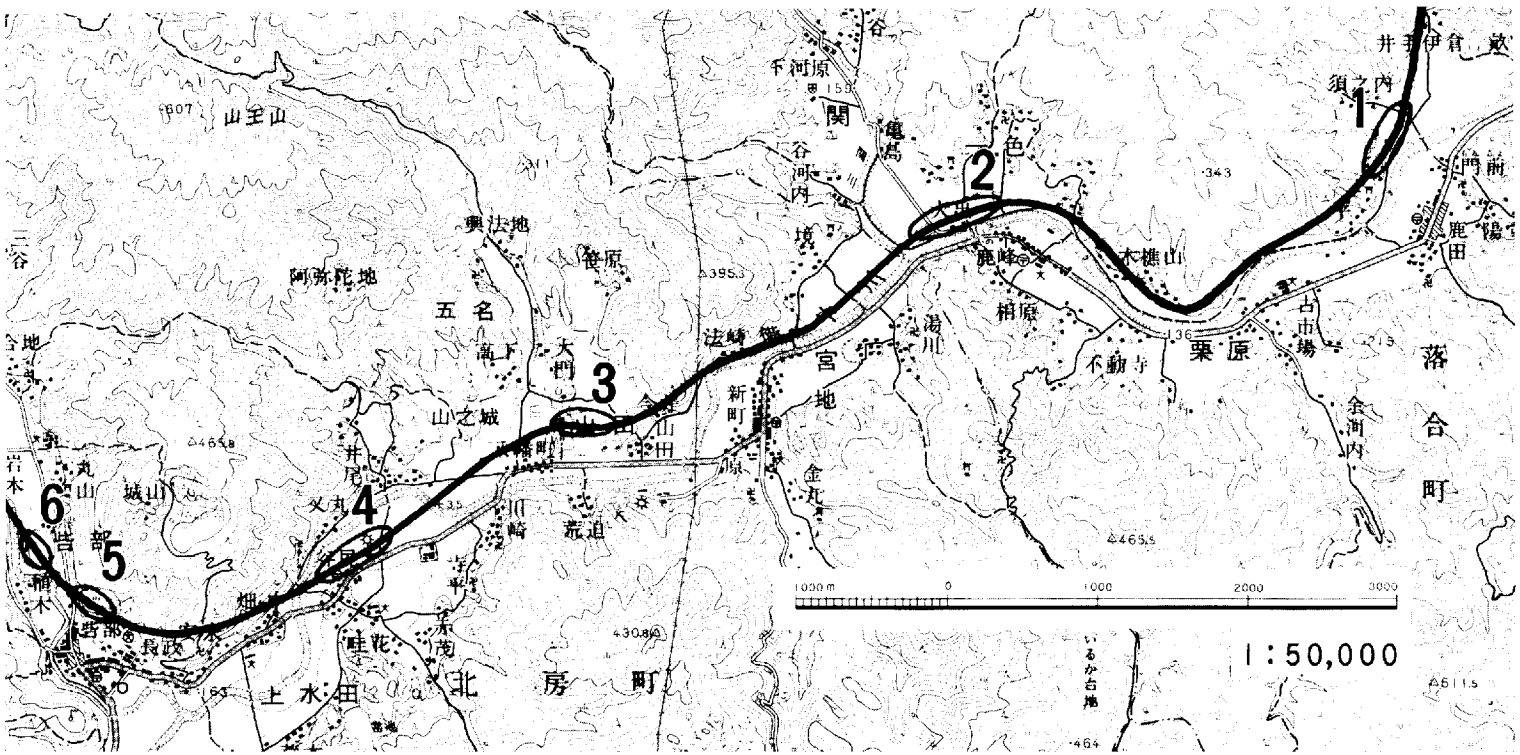
2　石蓋除去後（北西より）
図版９－１　石蓋土壙墓－２（東より）
2　石蓋除去後（左側→北より）
図版10－１　シスト－１（南より）
2　蓋石除去（西南西より）
図版11－１　シスト－２（南東より）
2　蓋石除去（東北東より）
図版12－１　シスト－３（南西より）
2　蓋石除去（南東より）
図版13－１　シスト－３断面（南西より）
2　シスト－４（南より）
図版14－１　シスト－４蓋石を１回取り除く（南より）
2　シスト－４蓋石を２回取り除く（南より）
図版15－１　シスト－４蓋石すべて除去（南より）
2　石蓋土壙墓－３・3′（西より）
図版16－１　石蓋土壙墓－３・3′（南東より）
2　蓋石除去（西より）
図版17－１　中世墳墓（西より）
2　中世墳墓内遺物出土状態
図版18－１　シスト－５・６（南西より）
2　Ｃ－３土層断面・遺物出土状態（南東より）
図版19－１　１号住居址（南より）
2　１号住居址内遺物出土状態
図版20－１　２号住居址（南より）
2　２号住居址中央ピット遺物出土状態
図版21－１　３住居址（南東より）
2　４号住居址（西より）
図版22－１　４号住居址断面（西より）
2　５号住居址（南より）
図版23－１　G24－L炉・遺物出土状態（南より）
2　土壙－55（南東より）
図版24－１・２　Ｃ－２土器溜り
図版25－１　Ｃ－８南土器溜り（南より）
2　Ｃ－４周溝内土器溜り
図版26　１号墳主体部出土鉄器

図版27　　1区出土遺物
図版28　　1区出土遺物
図版29　　1区出土遺物
図版30　　1区出土遺物
図版31　　1区出土遺物
図版32　　1区出土遺物
図版33　　1区出土遺物
図版34　　1区出土遺物
図版35　　1・4区出土遺物
図版36　　1区出土遺物
図版37　　1区出土遺物
図版38—1　2区全景（東より）
　　2　2区溝分枝点断面（東より）
図版39—1　2区H—01（南より）
　　2　2区P—01（南より）
図版40—1　2区H—02（南より）
　　2　2区H—05（南より）
図版41　　2区出土遺物
図版42—1　3区全景（東より）
　　2　3区H—001（南より）
図版43—1　3区P—001断面（西より）
　　2　3区P—001平面（南より）
図版44—1　G・5—E断面（東より）
　　2～4　遺物出土状態
図版45　　2・3区出土石器
図版46　　3区出土遺物
図版47　　3区出土遺物
図版48　　3区出土遺物
図版49　　3区出土遺物
図版50　　3区出土遺物
図版51　　3区出土遺物
図版52—1　4区ピット群全景（東より）
　　2　4区住居址およびピット群（南より）
図版53—1・2　P—1土層断面（東より）
図版54—1　P—19土層断面（南東より）

2 ・P—23土層断面（南より）
図版55—1　4区全景（東より）
2　4区全景（西より）
図版56—1　ピット群・住居址（東より）
2　住居址・ピット群（南より）
図版57—1　4区全景（南西より）
2　柱穴列・柵列（北より）
図版58　ピット内ドングリ・草木類
図版59　4区出土遺物

表　目　次

表—1　トレンチ・グリッド概要……25
表—2　住居址一覧表……30
表—3　周溝墓一覧表……53



6 植木遺跡　5 桃山遺跡　4 谷尻遺跡　3 備中平遺跡　2 宮の前遺跡　1 須之内遺跡

第1図　宮の前遺跡の位置

第1章　遺跡の立地と環境

本遺跡は行政的には岡山県真庭郡落合町一色に属する。岡山県中北部の小盆地のなかに，旭川の支流備中川が形成した狭い谷底がある。備中川は概して，北東一南西方向の構造線を刻んでいて，準秋吉層群（石灰岩）よりなる阿哲台（草間台）にその源を発し，三郡変成岩地域を流れる全長10数kmの河川である。流域の山地形は標高400 m～500 mの定高性を示す中位侵食面がみられ，山腹斜面はさほど急峻なものではない。

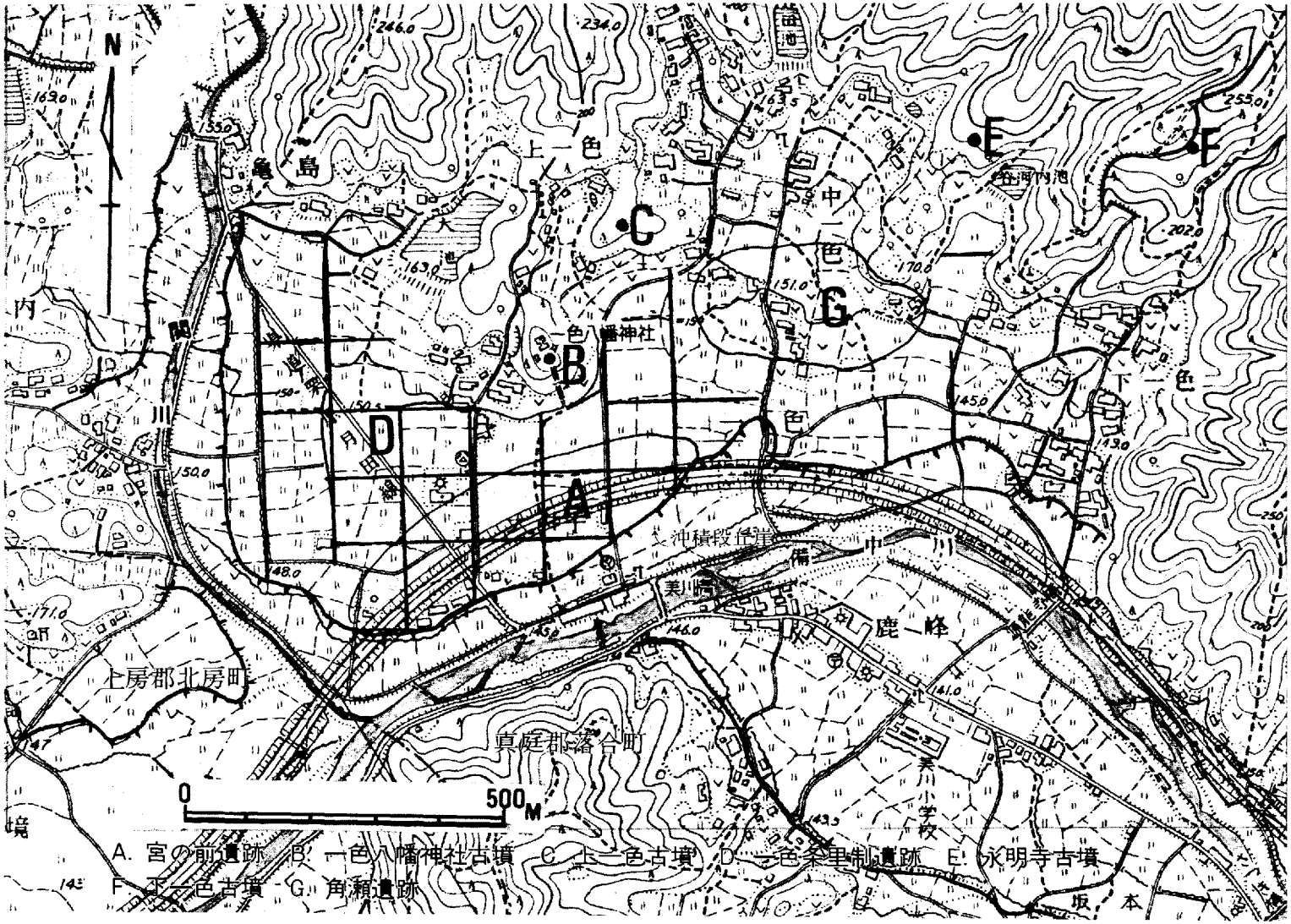
谷底の縁辺には比高30～50mの第三紀層の丘陵がほとんど全流域に分布している。それらの丘陵は低地へのびる舌状を呈するものが多い。第1図にみるように北房町上水田・山之城・興法地・山田・宮地・落合町一色・相原・不動寺・古市場・須之内・畝などの丘陵がそれにあたる。山林や畑地に利用されているが古墳や遺跡の分布が著るしい。例えば，上水田では全長約60mの前方後円墳を主墳とする古墳群，山之城・一色・相原・不動寺・古市場・畝にも小規模な古墳群が存在する。また赤茂には白鳳期建立の英賀廃寺が知られている。

これらの丘陵と氾濫原との間には比高2～3 mの低位段丘がひろがり，集落がのり，水田化がすすんでいる。北房町谷尻・井尾・新町・落合町一色・栗原・須之内などにその分布がある。

この低位段丘は冲積世に形成されたものと思われ，ルーズな砂利層よりなっている。氾濫原は河床との高低差が小さく，年に数回の冠水がある。中世以後，交通路がひらかれ，主要な集落が街村をなしている。落合町の鹿峰（かのみね）・鹿田（かつた）は氾濫原の中州上に形成された出雲街道の宿場町である。

宮の前遺跡は支流関川が備中川に合流する左岸にひろがる低位段丘上に位置する。段丘は背後から葡行した堆積物がのり，緩傾斜をなし，末端部で2～3 mの崖をなして氾濫原に接する。段丘堆積物はルーズな砂利・砂である。

今回の調査で縄文時代中期の遺構・遺物を検出しており冲積世初めに形成された段丘と考えられる。本遺跡のⅠ区に見られた砂利は段丘上が関川の氾濫をうけたことを示し，北西から南東に帯状をなしている。この帯状の砂利は弥生時代後期の遺構に切られ，その形成は弥生時代中期以前にさかのぼる。備中川が旭川と合流する付近に位置する西原遺跡において弥生時代中期の包含層を覆う洪水堆積物が検出されている。（註1）さらに旭川下流の右岸に位置する津島遺跡でも弥生時代中期後半に洪水による堆積があったことが知られている。（註2）この二例は本遺跡の砂利の堆積時期に示唆的である。


N
上一色
亀島
中一色
一色八幡神社
下一色
沖積段丘崖
美川
鹿峰
上房郡北房町
真庭郡落合町
美川小学校
0
500M
A
B
C
D
E
F
G
A. 宮の前遺跡　B. 一色八幡神社古墳　C. 上一色古墳　D. 一色条里制遺跡　E. 永明寺古墳
F. 下一色古墳　G. 角瀬遺跡

第2図　遺跡周辺の地形

本遺跡周辺の歴史的環境

概して遺跡の稀薄な地域で，盗掘をうけた横穴式石室墳が数基知られる程度であった。分布調査においても冲積段丘上は顧みられない傾向があった。しかし，本調査の結果本遺跡が立地する冲積段丘上は，縄文時代から古墳時代まで人類の生活の場所で各時代の遺構の重なりが認められた。

縄文時代

備中川流域において縄文時代の遺物は皆無であったが，近年の諸開発・中国縦貫道建設に伴う発掘調査で増大している。

本遺跡より約5㎞上流の谷尻遺跡は同じ冲積段丘上に位置する複合遺跡であるが，縄文時代早期の土器片が出土している。（註3）

本遺跡からは縄文時代中期の土器がピットから出土し，晩期と考えられる41個の貯蔵穴を検出した。住居址は検出されなかったがかなり安定した生活面であったと考えられる。

弥生時代

本遺跡出土の前期の土器は備中川流域では数少ない例である。中期から後期になって集落が拡大したと考えられ，角瀬遺跡からも土器片が採集されている。弥生時代終末～古墳時代初頭の方形周溝墓がつくられ，こうした段丘上が居住地域だけでなく墓域としても利用されたことが考えられる。

古墳時代以降

前述の方形周溝墓を古墳時代初頭と考えるならば，周辺地域に前期古墳は発見されてなく，少数の後期古墳が点在するのみで，その系譜はこの地域では断ち切れている。

現在までの分布調査による古墳は4基である。一色八幡古墳は神社の境内にある横穴式石室墳で玄室長9ｍ，巾1.5ｍの石室の規模である。周辺の石室墳のなかでは最も大きい古墳である。一色古墳は丘陵頂部にある直径9ｍ，高さ約1ｍの小型円墳で，中央に盗掘孔がある。

永明寺古墳は山麓に位置する直径14ｍ，高さ2ｍの円墳である。無袖の横穴式石室が南東に開口している。

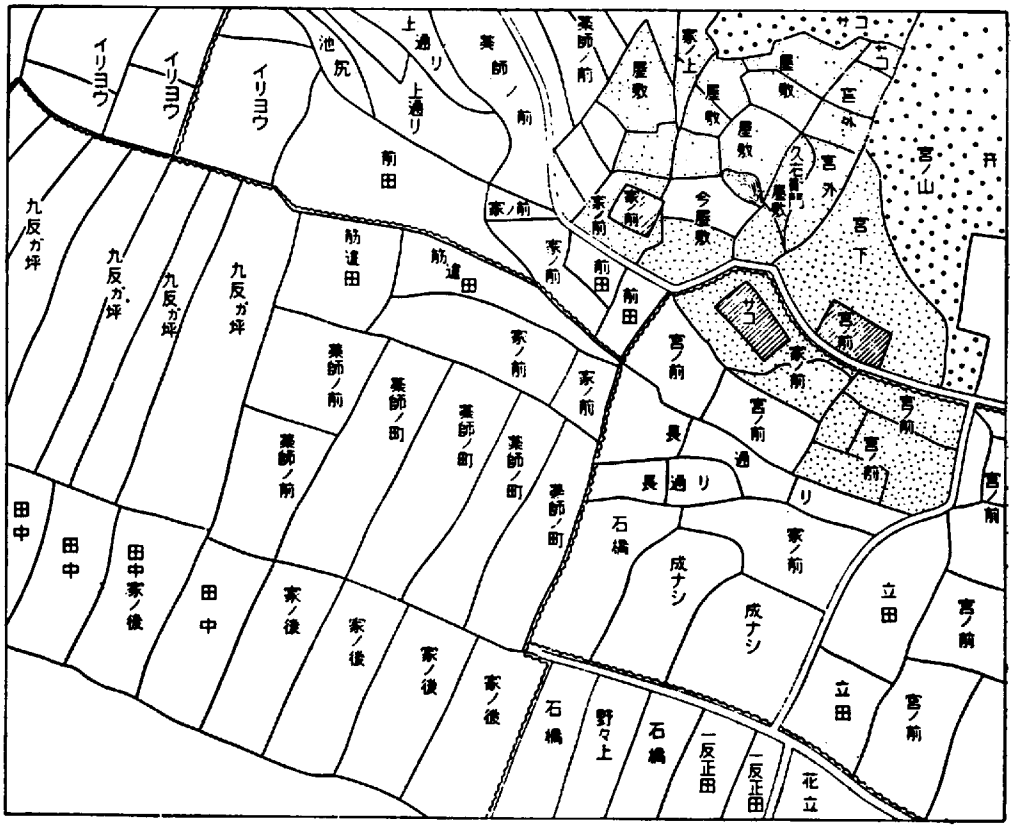
下一色古墳は山腹の山道建設時に土師質陶棺が出土した。陶棺には蓮華文の瓦当が付され，8世紀にさかのぼると考えられている。（註4）

角瀬遺跡は弥生時代後期の土器片とともに奈良・平安時代の須恵器が散布している。

条里制地割遺構は第2図にみるように遺存している。現在は構造改善事業でこの地割は全く消失してしまった。第2図中のDに「九反ケ坪」の字名が残っている。

長地型の地割であることは第3図にみることができる。東の坪は「葉師ノ町」の字名があり，やはり長地型と考えられる。条里制の復元は困難であるが関川が美作国真島郡と備中国阿賀郡の国境（郡境）をなすことが手掛りとなりうる。備中川流域においてはよく遺存しており今後の研究を待ちたい。

註　1　西原遺跡・岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 6　　1973　岡山県教育委員会
註　2　岡山県津島遺跡調査概報　　昭和45年　　岡山県教育委員会
註　3　谷尻遺跡　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　6　　1976　岡山県教育委員会
註　4　今井堯・河本清　「岡山県落合町下一色２号墳出土の瓦当文陶棺」
考古学研究　第18巻第１号　1971　考古学研究会



第３図　遺跡付近の字名　　（和歌森太郎編「美作の民俗」より）

第2章　調査の経過

1. 調査の経過

宮の前遺跡の発見のいきさつは，昭和46年に第２次構造改善基盤整備事業にともなう排水路が掘られた。この水路内断面に黒色有機土の入った落ち込みが確認された（１号墳周溝）。さらに周辺では弥生式土器，サヌカイト片等の散布が見られた。(註)以上の事によって延長約550 mを遺跡として掲げた。なお宮の前遺跡という命名は小字を用いている。

宮の前遺跡の発掘調査は，中国縦貫自動車道路建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査で，遺跡の範囲，性格，密度等を把握するため昭和48年４月23日より昭和49年９月30日まで実施したものである。途中で下層に存在する包含層を調査するために，49年７月～９月の３ケ月間が延期され，このような長期間にわたって行なった。

調査中において，屋敷跡，道路，排水路の掘り上げ土，また１区，２区の下層調査についても深さ約50～60cmの下にあるため重機（ユンボ）を利用して掘り下げた。48年８月より岡本純一氏（現岡山市教育委員会勤務）が調査に加った。また昭和49年４月より調査員が一名になり，同月上旬は２名の調査員が本遺跡と須の内遺跡の２遺跡を掛け持ち調査という変則的なものであった。調査においても工事でかかるボックス，排水路建設位置と，橋梁工事進入路の調査を先に行なうという変則的な行程で調査区も整然とせず，調査を行なった順に東より１区，２区，４区，３区と区分けをして，調査を進行させた。

当初，予定されていた路線の北側には農業用の道路が改善事業に伴なって造られていた。この地域も調査予定であったが，調査期間にも制限があったため未調査のままで工事用進入道路として使用することとなった。１，２，４の各調査区の一部に未調査区を残して調査を終了せざるを得なかった。さらに県道より西側約90mは昭和38年頃の改善事業によって掘り下げられているため調査はされていない。

なお発掘調査・整理には二宮治夫，浅倉秀昭，があたり，報告書作成には橋本惣司（現久米町教育委員会），二宮，浅倉，高畑知功が分担し，種子分析については，岡山大学農業生物研究所の笠原安夫教授にお願いした。調査期間中（昭和48年８月～49年３月まで）は岡本純一氏には終始御協力を得た。記して感謝いたします。

註　『岡山県埋蔵文化財報告』　昭和47年・岡山県教育委員会

2. 日誌抄

宮の前遺跡の発掘調査は，昭和48年４月23日から昭和49年９月30日までの期間内において行なわれたものである。

４月23日（月）　　本日より確認調査に入る。

約1ケ月間をトレンチ調査時間にあてる。その結果，溝，住居址，柱穴，土壙，ピット，焼土等が確認された。合せて断面図の作成。

5月23日（水），1調査区の表土除去遺構検出作業に取りかかる。表土除去中遺構に伴なわない遺物ではヒスイ製勾玉，石器，その他土器（弥生，土師）が出土する。G24－LMで周溝，住居址等が検出される。以下順次周溝（円形，方形周溝）が検出されてきた。

7月23日（月）2，3調査区の表土除去遺構検出作業にかゝる。

8月2日（木）　重機によって農道，屋敷跡，並びに現水路の掘り上げ土，仮農道の除去を行なう（9月7日まで）この間3調査区遺構検出もかねて行ない，主力は1調査区で遺構の検出作業を続行する。

8月24日（金）　1調査区全体写真撮影，並びに遺構掘り下げ，実測の開始（1号墳，住居址，土壙）。

9月10日（月）　周溝（C－7）掘り下げ開始順次周溝，土壙，石蓋土壙墓，箱式石棺等の写真，実測も合わせて行なっていった。

以下1調査区に主力をそそぎ掘り下げ写真撮影，実測（部分・全体）を行なっていく。その間作業員は2調査区の遺構検出，3調査区表土除去作業を行なう。

11月8日（木）　2調査区全体清掃，写真撮影掘り下げし住居址，溝，土壙，柱穴，実測を開始する。

3調査区遺構検出，全体写真撮影，掘り下げを開始する。1調査区掘り上げ後の全体，部分写真撮影。

3月1日（金）　3調査区遺構掘り下げ，写真実測，4調査区表土除去開始，並びに遺構検出，2調査区実測（全体），3区実測（全体）。

3月19日（火），4調査区表土除去，柱穴列検出される。さらにピット群が検出される。また全遺構に石灰をまき全体写真撮影（東より）またピット群の接近撮影。

4月5日（金）　4調査ピット群の掘り下げ開始，ピット内下床よりドングリが出土する。並びにピット土層面写真撮影，実測を行なう。さらに下床ドングリ包含層を種子分析を用いるため取り上げを行なう。

4月22日（月）　4調査区，住居址の写真撮影，実測を行なう。並びにピット群の排水作業，掘り下げ，写真実測，さらに1調査区を再度掘り下げを行なう。

4月30日（火）　4調査区，排水作業，並びに柱穴列写真，実測，ピット群土層断面写真，実測，並びに全体写真撮影，1調査区検出作業

6月13日（木）　4調査区ピット内ドングリ包含土壌の種子分析の為，笠原安夫教授来跡し土壌を持ち帰える。1調査区掘り下げ検出続行，並びに遺構掘り下げ。

6月28日（金）　1調査区遺構検出並びに掘り下げ，2調査区補足調査（1調査区同様）グリ

ット設定，全体掘り下げ開始，現水路の壁清掃。

7月19日（金）　2調査区掘り下げ遺構検出，器材の一部を搬出する。4調査区ピット群排水，清掃，埋めもどし（ピットはすべて河砂を用いる），1調査区清掃，写真，実測（平板），水路にかかった灰穴の流入土の排除，断面清掃，写真，実測。

9月24日（火）　2調査区遺構検出，掘り下げ，道具小屋解体，器材運搬（津山収蔵庫へ）

9月26日（木）～30日（月）　プレハブの段にT字にトレンチ設定掘り下げ，遺物，器材を津山収蔵庫へ運搬する。器材の一部は桃山遺跡，宗金遺跡へ搬出する。

第3章　一次調査の概要

本遺跡の一次調査は，トレンチ調査を主体とし，わずかにグリッド調査を併用しつつ遺跡の範囲と遺構の密度を，的確に判断する目的をもって，昭和48年4月23日から着手することになり約1ケ月間を要した。すでに調査開始前に津山教育事務所から発注した測量専門業者によってステーション番号ＳＴＡ52を中心とし，磁北を基準線にとって東西および南北に20m間隔でグリッド杭を打ち格子組が出来上っていた。このグリッド杭を基準にしてトレンチを次々に設定していった。本遺跡は，冲積地でありほぼ平坦であるため地形に沿ったトレンチの設定を考える必要はなかったし，遺跡およびその周辺には条里が残っておりその方向はグリッドの方向とほゞ一致するのでグリッド杭を基準にすることが最もよい方法と考えた。グリッドの番号は東西方向を数字で，南北方向をアルファベッドで表示し，西から1，2，3，……，南からA，B，C，……と決定して以後の混乱をさけるよう配慮した。トレンチの数とグリッドの数およびそれらの長さ，巾，深さ等の数値と，遺構，遺物は，表で示す。なおトレンチ，グリッドの設定は，東から行なっていった。

表－1のように，トレンチ14本，グリッド3ケ所を約1ケ月で掘り上げ，これらの面積は実に約1,500㎡にのぼり，土量は約900㎥に達した。各トレンチの観察からつぎの事柄が明らかになった。

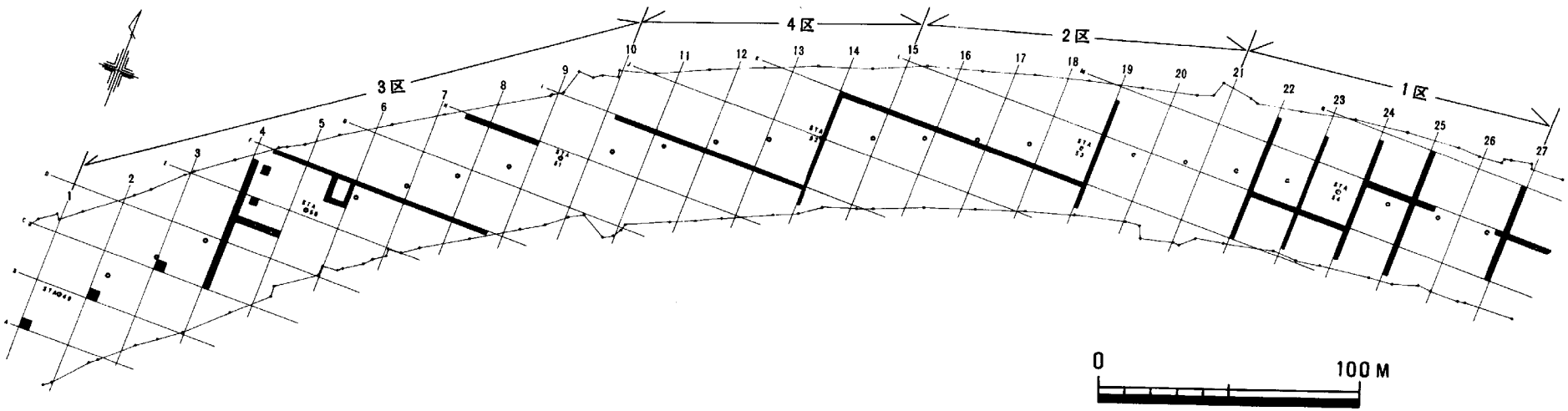
1．遺跡の範囲は，G－4ライン（Gはグリッドの略称）からG－25ラインまでの約420m間である。G－4ライン以西には遺物の採集はみられず，水田面も一段とひくいこと。また，G－25ライン以東においても同様の立地条件を示すとともに，すでに農道工事によって東端は1m以上えぐりとられていた。これらの状況から遺跡対象地として上記の距離をおさえたのである。

2．遺構は幾本かの溝状遺構を中心として，住居址，土壙，柱穴等がどの区にも均等に見られ，遺構密度の高さを物語っていた。

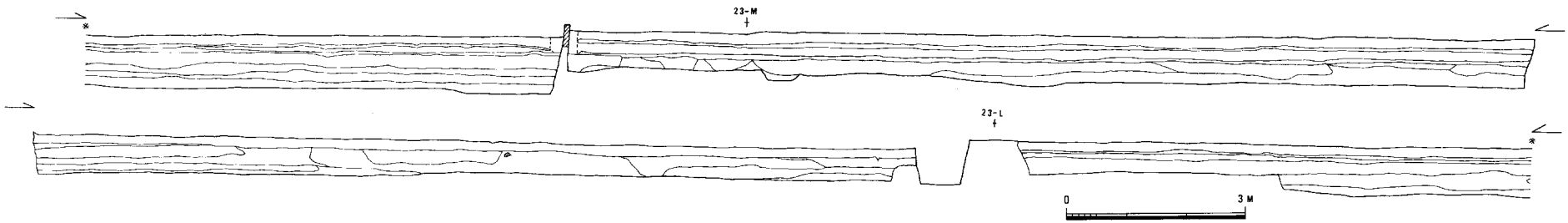
3．遺物は，弥生中期の土器が量的には最も多く，丹塗りの土師器もかなりの数量でみとめられ，その他，須恵器，青磁，陶器等が若干採集されている。さらに特徴的なのは，サヌカイト製の石鏃とともに剥片多数が検出されたことも注目された。

4．土層についての所見は，最も安定した1区，2区のトレンチによって土壌柱状図的に述べることにしょう。つまり，第1層現水田耕作土，第2層床土，第3層灰色客土，第4層黄褐色粘質土，第5層黒褐色有機質粘土，第6層黄褐色粘土である。そして，遺構の検出できる面は，第4層の上面であり，遺構の埋土を充填した土は黒色土で，したがって遺構面を検出することは容易であったが，逆に，遺構の底部を検出することが極めて困難であると予想された。それは，遺構内の埋土と第5層の土とは，色調や土質が，近似しているからである。

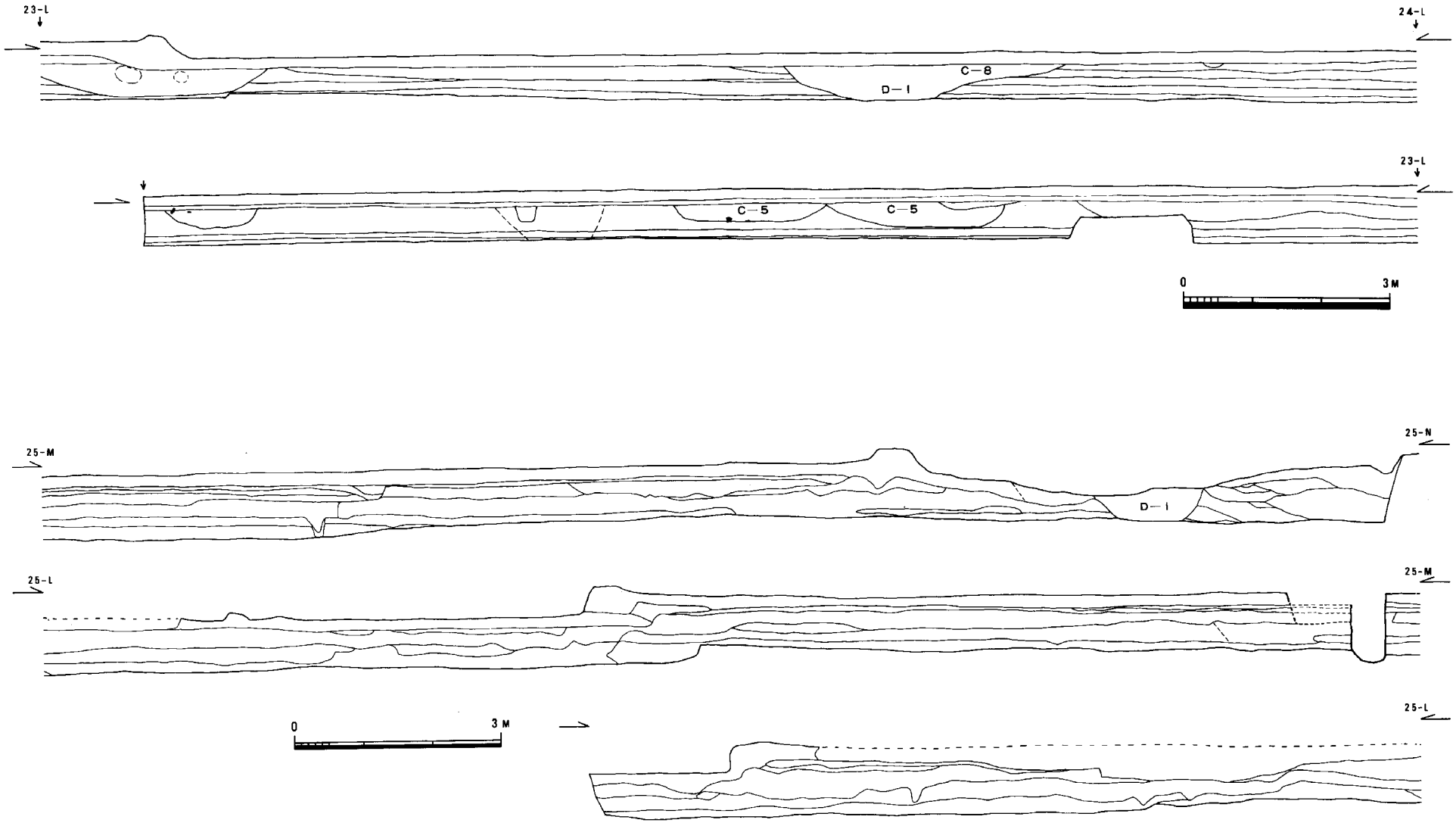
以上の点を理解しつつ，全面発掘を始めた。



第4図　グリッド及びトレンチ配置図



第５図　トレンチ23土層断面図

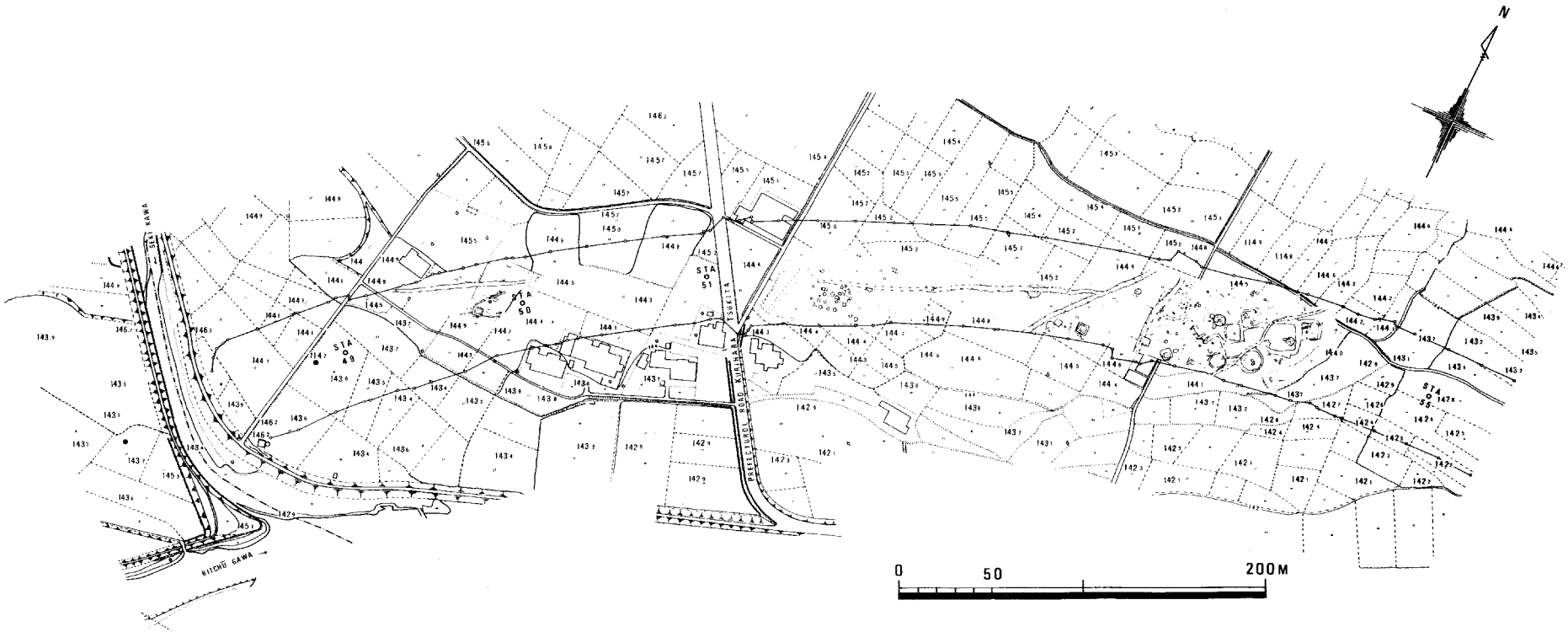


第6図　トレンチ土層断面図（上：トレンチーL，下：トレンチー25）

表—1　　トレンチ・グリッド概要

（T……トレンチ・G……グリッド・単位m）

トレンチ グリッド	区	長さ	幅	深さ	㎡	遺構	遺物
T — M	1	80	1.5	0.7	84	溝	弥生・青磁
27	1	40	1.5	0.3	18		
25	1	50	1.5	0.7	52.5	溝	弥生・石鏃
24	1	55	1.5	0.7	57.75	〃	〃・〃
23	1	50	1.5	0.7	52.5	〃	〃・土師
22	1	45	1.5	0.7	47.25	〃・土壙	〃
T — L	1	60	1.5	0.7	63	〃・〃	〃・土師・石匙
19	2	45	1.5	0.7	47.25	〃	〃
K	2	120	1.5	0.5	90	〃・住居址	〃
14	4	50	1.5	0.7	52.5	〃	〃・須恵
I	4	75	1.5	0.7	78.75	〃	〃
H	3	30	1.5	1.0	45	柱穴	陶磁器
F	3	90	1.5	1.0	135	溝	土師・須恵
4	3	55	1.5	0.3	24.75	〃・炉址	土師・羽口・鉱滓
G・3—C	3	4	4	1.0	16		
G・2—B	3	4	4	1.0	16		
G・1—A	3	4	4	1.0	16		



第７図　地形図並びに遺構配置図

第4章　二次調査の概要

1．1　調　査　区

1）住　居　祉

1号住居址（第9図・図版19—1）

宮の前遺跡の東端の位置に一部分砂礫層を掘り込んだ竪穴住居址である。この住居址は，南西の位置にある土壙—60を切断して建てられている。平面形から見た住居址は胴張り隅丸方形である。出土遺物は，第10図—1，4，7，図版32がある。

柱間の外側の北西壁には高さ14㎝，幅50㎝，長さ1.25mのベッド状遺構がつくられていた。中央ピットは楕円形を呈している。さらに，壁帯溝は，全体にめぐらされず，南側が消えていた。これは，明らかに当初から作られてはいないようである。

住居址内の上層にはサヌカイト片がかなりの量出土している。下層では，（図版19—2），高坏，鉢型土器，石鏃等の遺物が出土している。

2号住居址（第11図・図版20—1）

1調査区のほぼ中央よりやや西側に位置する胴張り隅丸方形の竪穴住居址である。四本柱であるが，建て替えによって8本の柱穴を検出した。

中央ピットは不定形で，ほぼ中央で建て替えられた時点でも同一の位置で使用されている。さらにこのピット内より，埦型土器がある。（第10図—6・図版20—2）

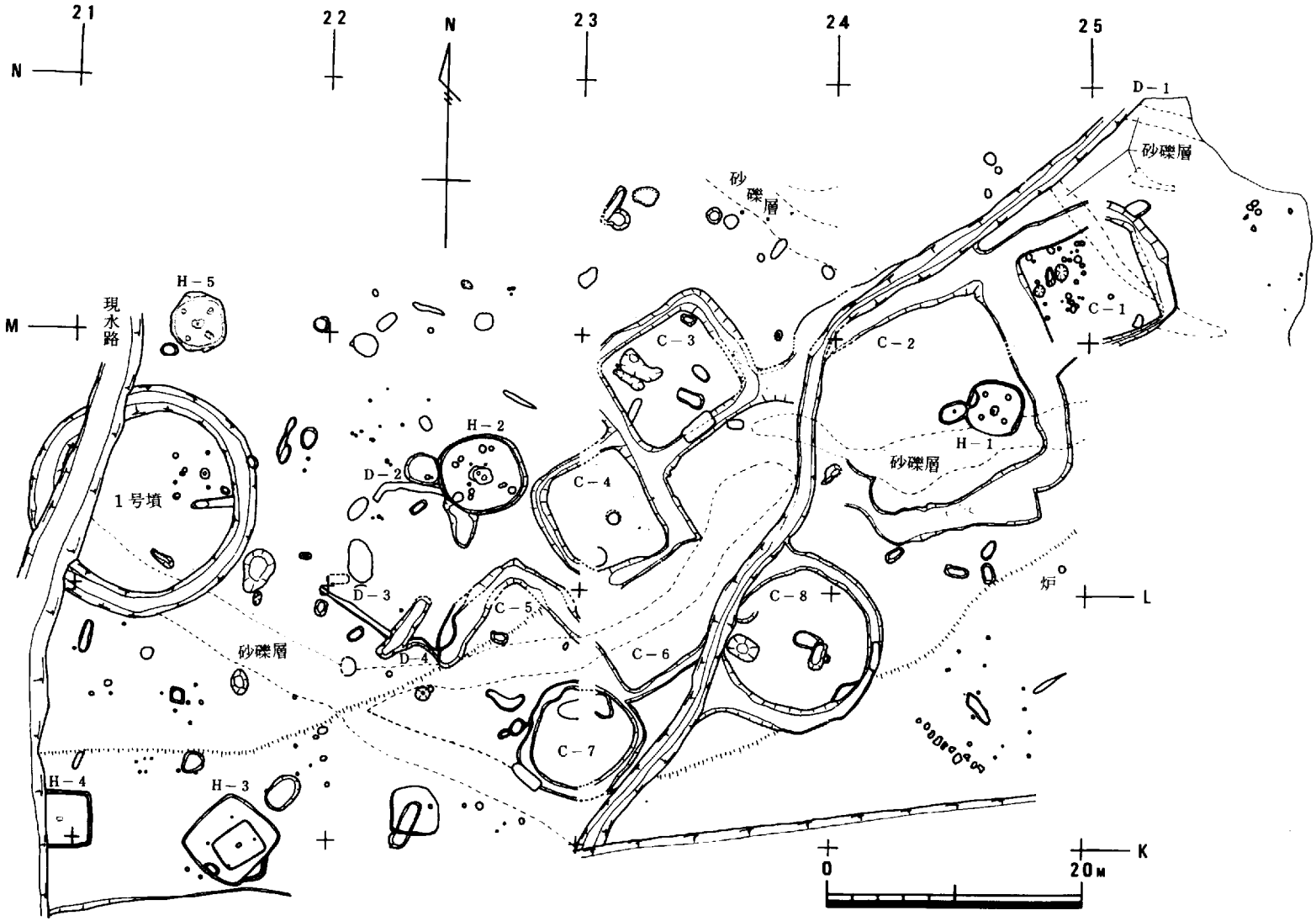
住居址内の中層～下層の主な出土遺物としては，土錘，鉢型土器，第10図—2，3，図版32，サヌカイト片等があり，上層～中層にかけてはサヌカイト片はかなりの量が出土している。

3号住居址（第12図・図版21—1）

1調査区南西の現水路の近くに位置する。この住居址は3軒が重複している。Ⅰ期～Ⅲ期とする。Ⅰ期は現存するものは，壁帯溝，中央ピット，それにピットのみが見うけられるだけである。柱穴は検出されなかった。一辺約3.1m～3.3mと推定される。北東～南西に長い住居址と考えられる。Ⅱ期は南東コーナーの一部分と，柱穴四本で中央ピットは北東コーナー柱穴に近い位置に見うけられるものか。このⅡ期のものではなかろうかと思う。いずれにしても，これらⅠ・Ⅱ期のものは，Ⅲ期の建て替えの時点で消えさったものである。なお，Ⅰ，Ⅱ期の時代決定をする資料は出土していない。

Ⅲ期は四本柱で，中央ピット，さらに北西辺（P—a）と南西辺（P—b）にピットが見られる。なおP—b内下層において弥生時代中期の甕型土器が出土している。しかしこのP—bはこの住居に共なうピットではなくて，住居建築以前の遺構が他にもあったと思われる。

この住居址は，北東，南西辺約5.2m，北西，南東辺約6.0mで北東，南西に長く，わずかに胴張りの長方形をなす竪穴住居址である。住居址内上層～下層においての出土遺物は大部分


21
22
23
24
25
N
M
L
K
現水路
1号墳
H－1
H－2
H－3
H－4
H－5
C－1
C－2
C－3
C－4
C－5
C－6
C－7
C－8
D－1
D－2
D－3
D－4
砂礫層
炉
0
20M

第8図　1区全体図

が弥生後期のもので少量ではあるが，中期のものも含まれていたようである。いずれにしても，この住居址は弥生後期のものと考えてよいと思う。

4号住居址（第13図・図版21－2，－22－1）

1調査区南西端に位置し，現水路によって西壁よりが切り取られた形で現在していた住居址である。一辺（東壁）約4mを測るのみでその他の辺は不明，さらに柱穴は存在せず，ほぼ中央と思える位置に粘土を盛った炉が築かれている。埋土中下層において，高坏の脚部第10図－8のみの出土，上層～中層にかけては大部分が弥生前期の遺物で，少量ではあるが，サヌカイト片も出土している。

5号住居址（第14図・図版22－2）

1調査区の西北端に位置する胴張りの隅丸方形の竪穴住居址である。四本の柱穴と，中央ピットが検出された。柱穴掘り方には河原石が裏込めされている。北，南辺には土壙が切られている。第10図－9は南辺の土壙から出土したものである。住居址内よりの出土遺物は，中央ピット内において高坏脚が出土している。これから見て弥生後期と推定される住居址であろう。

さらに住居址内にはほかにサヌカイト片その他の遺物が出土している。また第10図－5の遺物は弥生時代中期中葉に位置されたものであろう。これらは住居址の検出面で確認されたものであって，直接の住居址にともなう遺物ではないものである。

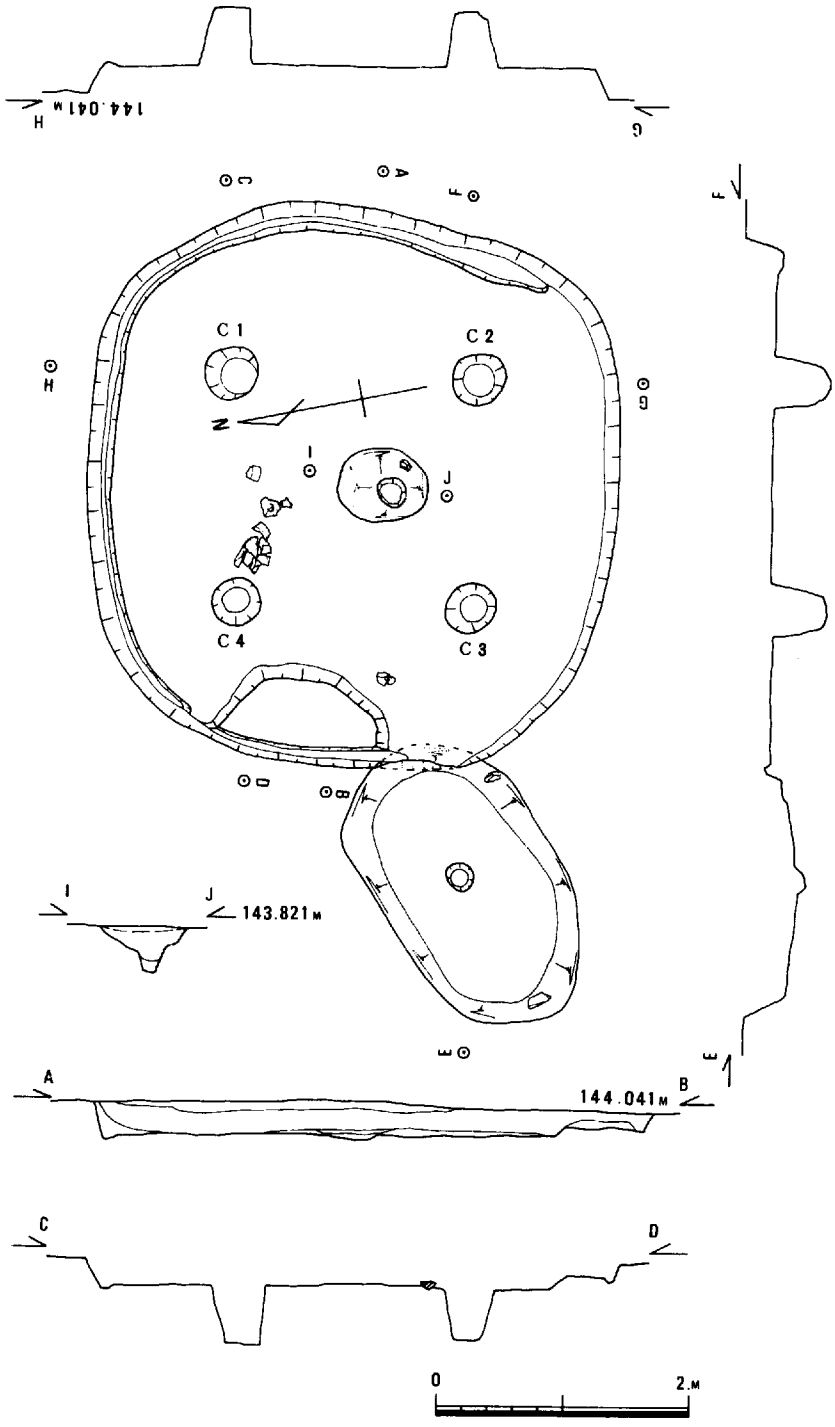
2） 炉

炉（第56図，図版23－1）

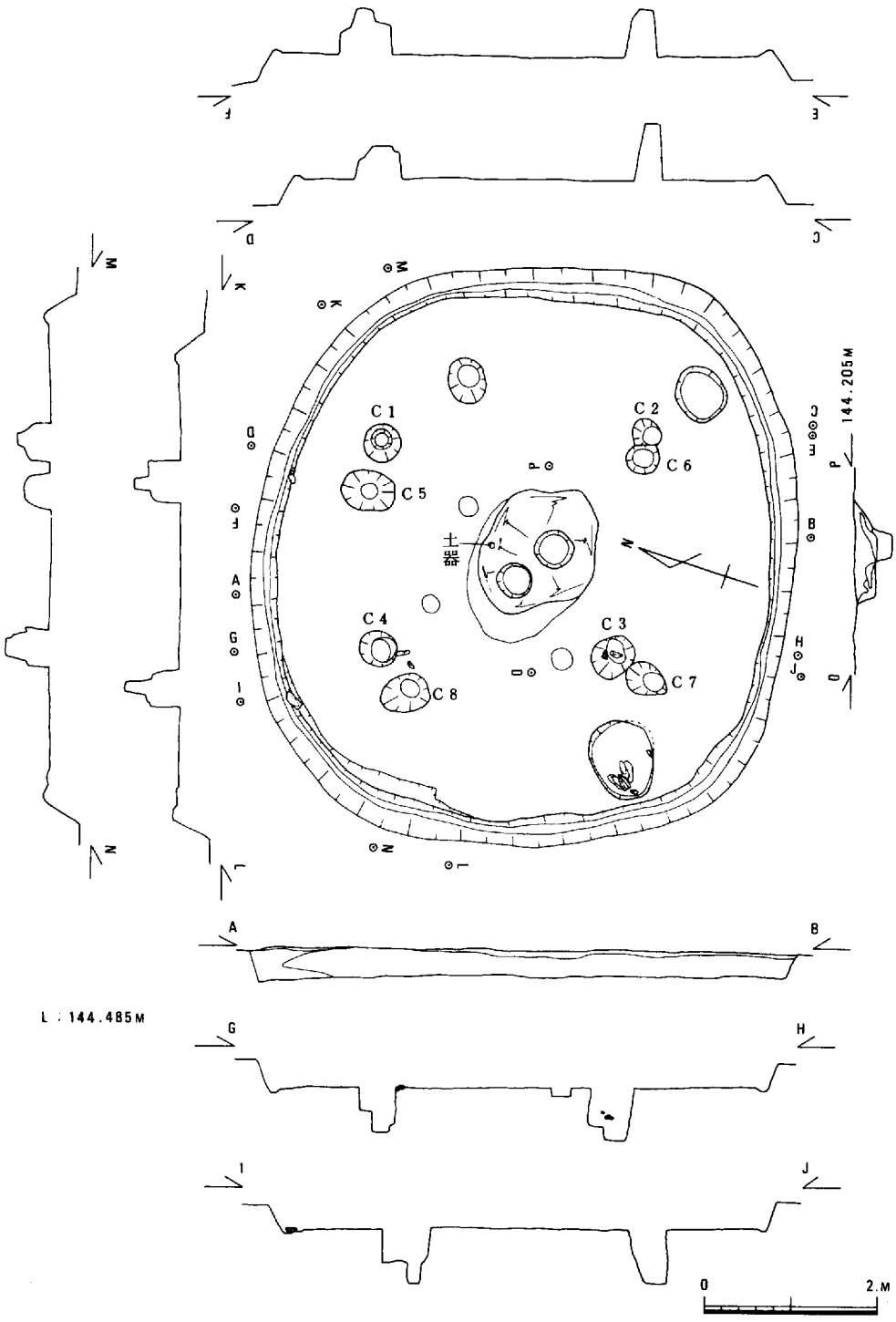
G・24－L南東コーナーの近くの位置で検出された。炉の形は歪（いびつ）な瓢箪形をしている。周辺

表－2　　住居址一覧表

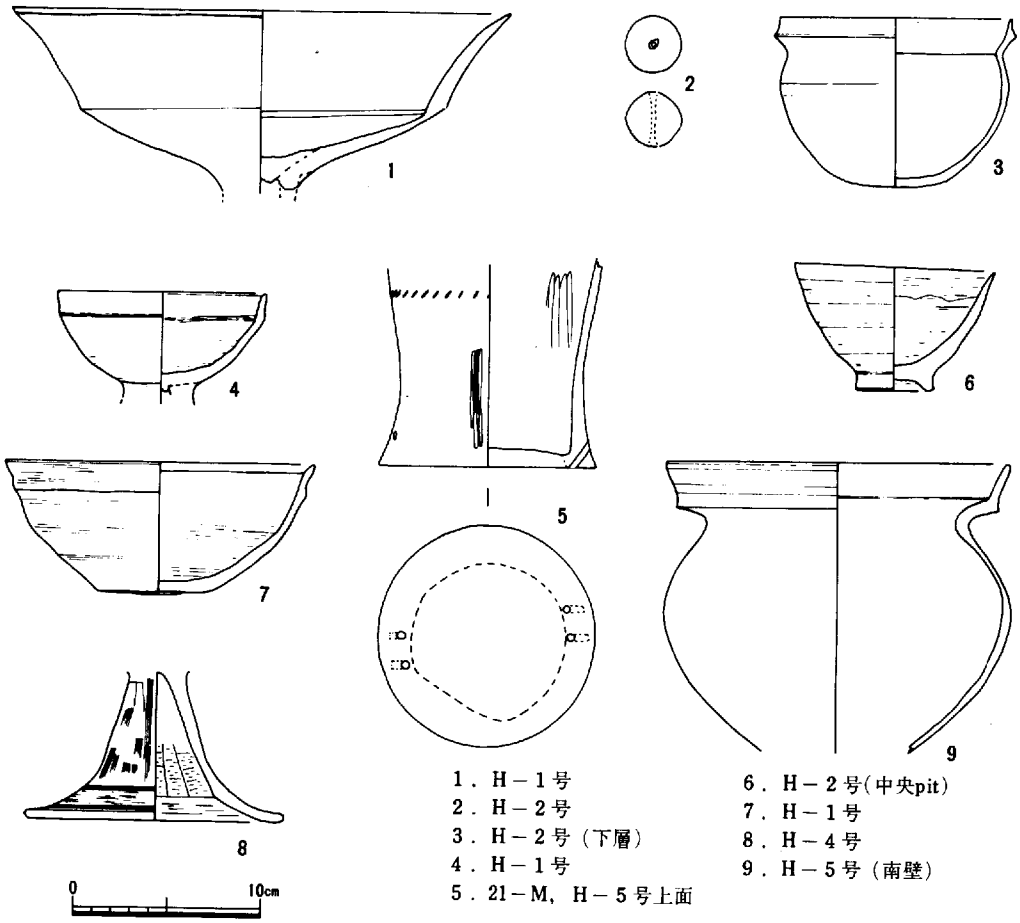
番号	地点	中央ピット	形態	建てかえ	柱 数	柱 柱間（単位cm）	付属設備	時期	備考
1	1区	1.楕円	隅丸方形		4	C_1～C_2・194, C_2～C_3・181, C_3～C_4・190, C_4～C_1・179,	中央pitベットを有する	弥生後期	
2	〃	1.楕円	〃	2	8	C_1～C_2・316, C_2～C_3・250, C_3～C_4・275, C_4～C_1・244, C_5～C_6・320, C_6～C_7・260, G_7～C_8・284, C_8～C_5・234,	中央pit	弥生後期	
3	〃	3.円楕円	方形	3	8	C_1～C_2・264, C_2～C^3・264, C_3～C_4・248, C_4～C_1・266, C_5～C_6・258, C_6～C_7・286, C_7～C_8・260, C_8～C_5・278,	中央pit	弥生後期	
4	〃		〃				中央に炉（楕円）	弥生後期	約⅙破壊
5	〃	1.楕円	隅丸方形		4	C_1～C_2・248, C_2～C_3・218, C_3～C_4・240, C_4～C_1・244,	中央pit	弥生後期	
6	4区	1.楕円	方形		4	C^1～C_2・268, C_2～C_3・264, C_3～C_4・292, C_4～C_1・268,	中央pit	弥生後期	床面下には貯蔵穴が埋没している。



第9図　1号住居址実測図



第11図　2号住居址実測図



1．H－1号
2．H－2号
3．H－2号（下層）
4．H－1号
5．21－M，H－5号上面
6．H－2号(中央pit)
7．H－1号
8．H－4号
9．H－5号（南壁）

第10図　住居址内出土遺物実測図

は水田の拡張のための削平をうけて，炉にともなう遺構は確認されなかった。なお周辺には，数片の弥生中期の無頸壷が散在していた。よって炉の時期はおよそ弥生中期と推定してよいものであろう。

3）　ピット・袋状ピット

ピット，袋状ピットは生活に直接関係する遺構である。平面形は円形と楕円形で，底部にかけての形態はすり鉢形状と袋状になっているものとに分かれている。これらの流入土中に遺物は含まれているが，植物性のものはまったく確認されなかった。なおこれらのピットの出土遺物，土層状態はほかの土壙に類似しているように，一部の層において炭化物の層が含まれている。しかし，形態からみて埋葬に使用した遺構ではないものであろう。

ピット－1（第17図－7・第24図－3）

直径約135㎝の円形で，深さ約50㎝のピットである。土層中には炭化物の層も含まれている。このピット内からの遺物には図のような無頸壷（弥生中期）が出土している。

ピット－2（第18図）

楕円形のプランを示している袋状のピットである。これは明らかに食糧を貯えることを目的とした貯蔵穴と考える方が妥当である。なおこのピットの流入土中は全体に炭と灰を多量に含む層から成り立っていた。時代を決定するための出土遺物は認められなかった。

ピット－3（第17図－5）

直径約120㎝，深さ約25㎝のほゞ円形に近いプランで，すり鉢形の浅いピットである。中層に炭を含んだ層が堆積していた。時代を決定する出土遺物はまったく認められなかった。

ピット－4（第17図－8）

直径約150㎝，深さ30㎝と浅いすり鉢形で円形プランをしている。このピットは土壙50によって切られている。土層中の1層には炭を含んだ焼土層で，特に2層においては炭化木片，植物（カヤ，etc）の炭化したものがブロック状に多量含まれた層であった。ピット内より弥生時代中期の甕型土器（底部がかけている）が出土している。なお土壙－50はピット－4との時代差というもは，わずかに後の遺構ではないかと思われる。なぜならば，土壙－50はほかの土壙と類似したところがあるからである。従ってこの土壙－50は中期中葉後，相前後して作られたものと推定する。

ピット－5（第25図－9）

直径約120㎝の円形プランを示すピットであり，前述のピットと同様の形態になっているが，出土遺物よりみると，弥生時代中期前葉のように思われる。従ってピット－5はこの時期のものであろう。

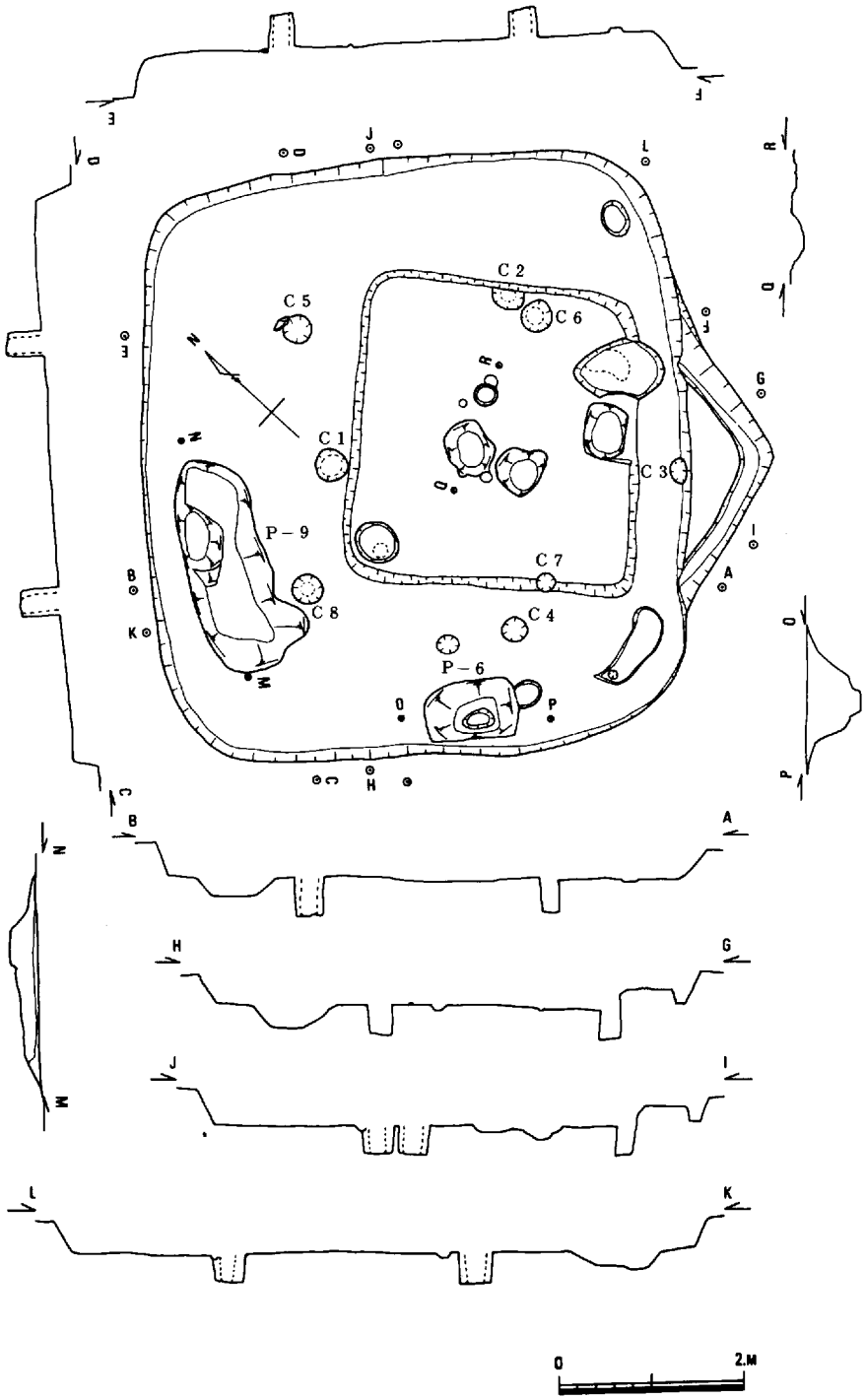
4） 土壙・土壙墓ピット

宮の前遺跡における土壙，土壙墓，ピットは整理不十分なため，とりまとめて一部の遺構，遺物を取り上げてみた。従って，これらの中には形態も，大きさもことなるところから土壙墓から貯蔵穴まで含まれている。第16図の1区全体図には調査時点に付したままの土壙，ピット番号を用いている。

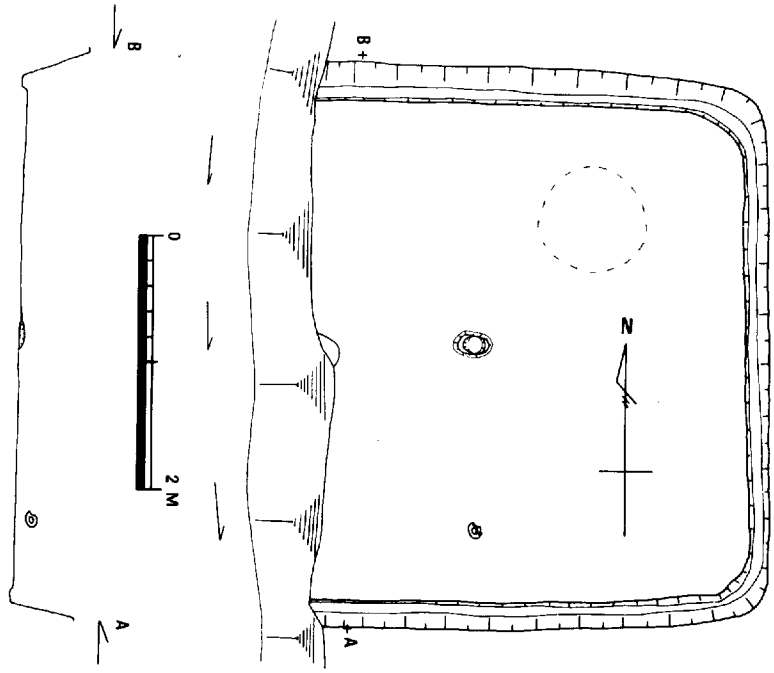
平面形は隅丸長方形ないし不整楕円形で底部は一方または一部が低く2段になっているものもある。ある土壙では遺物が灰，焼土，炭化物等がまざって多量に入っている。また底部まで焼けた状態のものも確認されている。掘り込みは，すり鉢型のもので現状では浅く，下部が残存するのみのものが多かった。

時代は弥生時代中期が大部分である。そのほかに無遺物の遺構も含まれているがいずれにしても他の遺構に比較してすべてが弥生時代のものであろう。南方遺跡(1)でも灰のつまった土壙が確認されている。

註 (1) 「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会 1971年



第12図　3号住居址実測図



第13図　4号住居址実測図

土壙墓－1（第17図－1，第22図－2，3）

土壙墓は長楕円形のプランを示し，いずれの土層中にも土器を含む。さらに1，2，3，4層には炭化物を含み，特に3層は灰と炭から成っている層である。なおこの土壙の土層全層にわたって骨片，骨粉が検出されているが，3層には特に多く確認された。このように骨片，骨粉等の検出で，これが人骨か他の動物のものであるか否かは確かでない。その他の出土遺物は甕型土器，無頸壷（第22図2，3），いずれも弥生時代中期の遺物である。従って，この土壙墓は中期のものと思われる。

土壙－2（第17図－6）

土壙－2は変形した方形のプランを示す。北端の遺構上層の一部が耕作のための削平を受けて攪乱されていた。埋没土層は5層に分かれ，2層を除いて，その他の層には殆んど炭化物と土器が含まれていた。特に5層においては炭化物，灰，焼土の堆積となっている。この土壙からの出土遺物は，二次的に底部を穿口され，甑（こしき）に転用されたと思われる土器片（第23図－2）そのほかに，弥生中期の壷形土器片（第24図－4，6，8，11）が出土している。これらの遺物から見て中期の土壙と思われる。

土壙－3（第22図－7，10，13，17，18）

一辺約4m程度の方形の掘り込みの南西隅において検出された。

方形の掘り込みの中からは，須恵器，瓦器，古銭等が出土している。この掘り込みは歴史時代（奈良～平安の時代）の遺構であろうと思われるが何の為に使用されたものかは確認しえな

かった。

方形の掘り込みの掘り上げ後，床面に土壙の続きが確認された。南西から北東に細長い土壙である。出土遺物は第22図10，17，18の弥生中期のものであるが，その他７，13は弥生後期に属するものと思える。従って，これらは後に流れ込みの遺物と考えてよいであろう。

土壙墓－4（第19図，第22図—22，第23図－３，４，５，６，７）

この土壙は洋梨型の不整形楕円のプランを示し，２段に掘り込みが行なわれているのが確認された。土層が削平を受けているため下層部分が存在しているにすぎない。土層においては，２層で多量の炭化物の堆積がみられた。この層において遺物も出土している。これらの出土遺物は弥生時代後期に属するものである。従って土壙も同時代と推定される。

土壙墓－10（第17図－２，第24図－１，２，５，７・第41図－６，７）

Ｃ－８内側に存在し，平面形は長楕円のプランを示す土壙である。この土壙内のいずれの土層内にも遺物を含んでいる。これらの出土遺物は弥生時代中期のものである。

土壙墓－19（第20図，第22図—19，21，23～29・第42図－１）

ほぼ南北に胴張りの長楕円のプランを示す土壙であり，比較的他の土壙に比べて残存状態は良好なものである。土壙の掘り方も南，北では垂直に近く，東，西辺はやゝ傾斜して掘られている。埋土中の１層，３層下部，４層下部には炭，土器が含まれている。５層には焼土，炭化物が含まれているのが確認された。なお出土遺物等から見て弥生時代中期中葉の時期に推定される。

土壙－31（第25図－１，３，６，第43図－６）

平面形は南北に長い楕円形のプランを示している。埋土中において遺物の出土が見うけられた。下層には少量の骨片も確認されている。また最下層には灰，炭化物層からなっていて，灰は多量に含まれていた。

出土遺物は弥生中期，後期と混在している。従って時期の決定するにあたっては新しい遺物を持って決めるのが妥当であると思われる。

土壙－34（第23図－８～12）

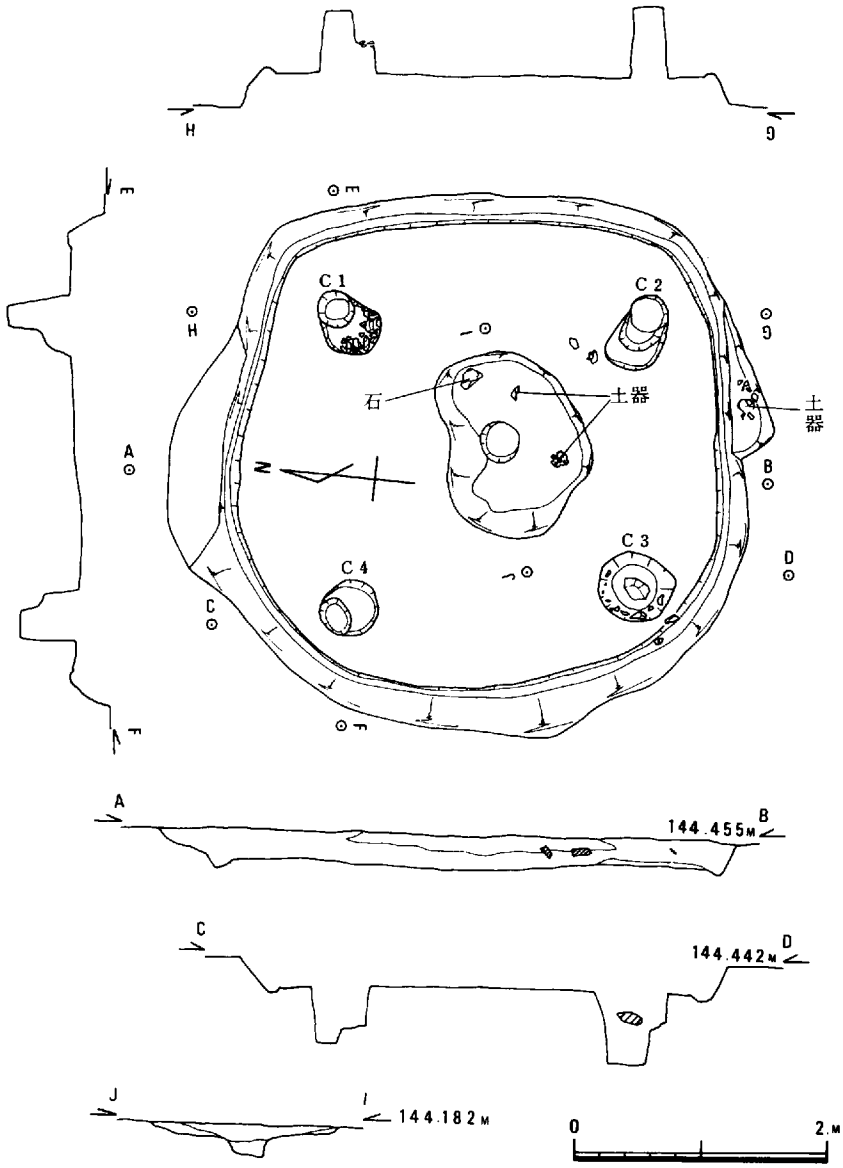
２号住居址によって切られ，北が広く南が狭くなった変形長楕円のプランを示している。深さ約40㎝で下層において炭，灰がわずかに確認された。出土遺物も各時期のものが混入して出土している。

土壙－42（第17図－４・第25図－２）

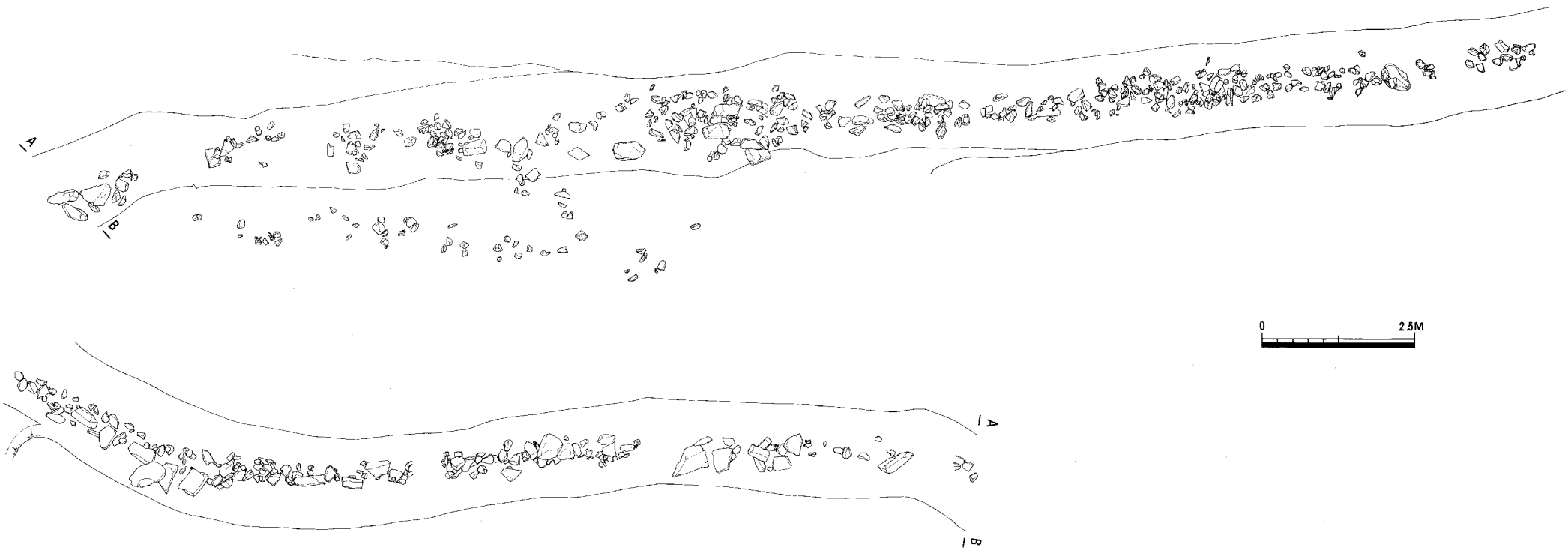
トレンチ調査の時点で一部分を削り取ったが現状はとゞめ，北東が変形した長楕円のプランを示している土壙である。２層には炭を含み，４層は灰，炭化物層から成っていた。出土した甕形土器からみて弥生中期と思われる。

土壙－48（第26図－２）

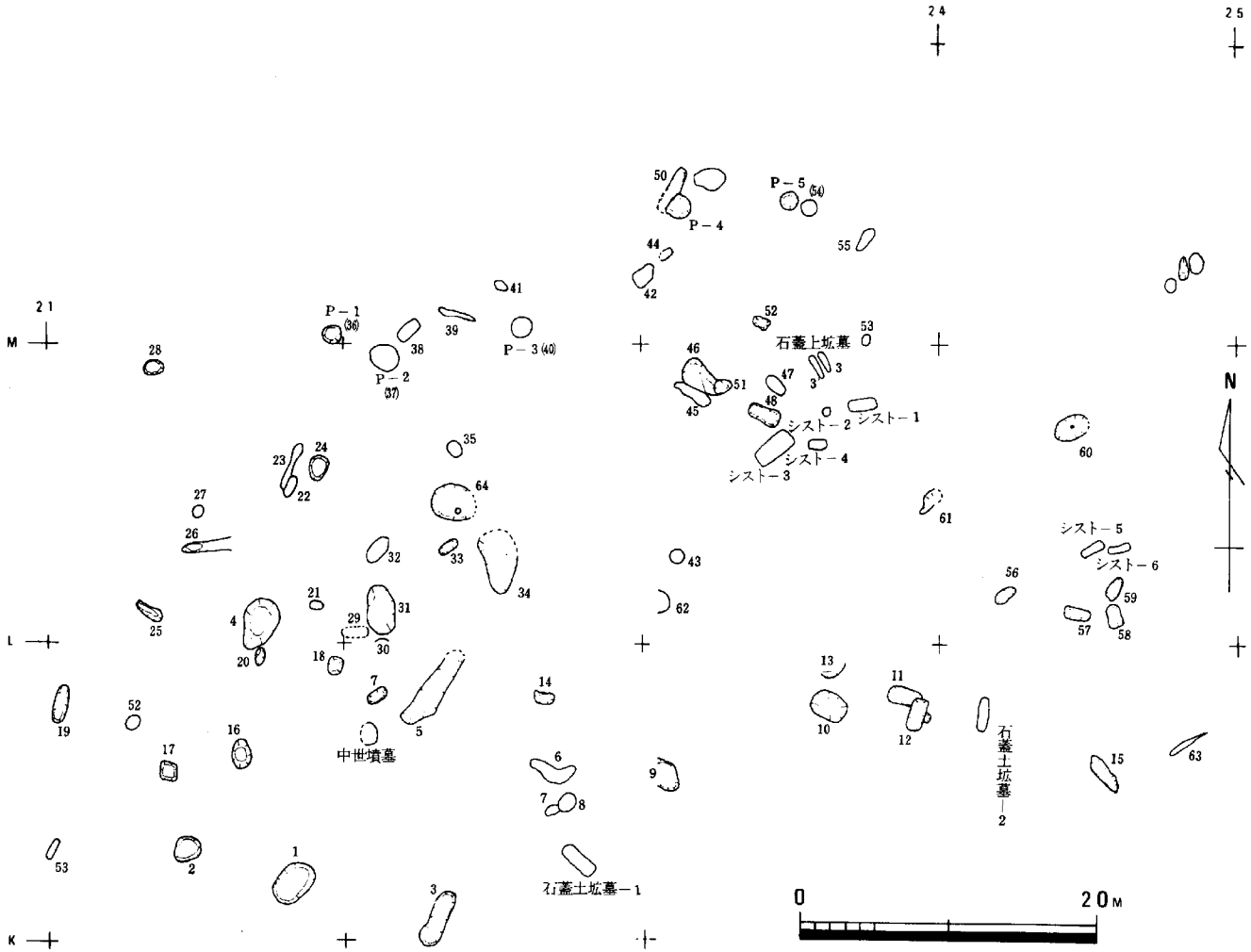
方形周溝（Ｃ－３）の南東の位置にあたり一方が広い長方形に近いプランを示す。この土壙は上部は水田による削平のため，下部がわずかに存在するのみであった。出土遺物は図に示さ



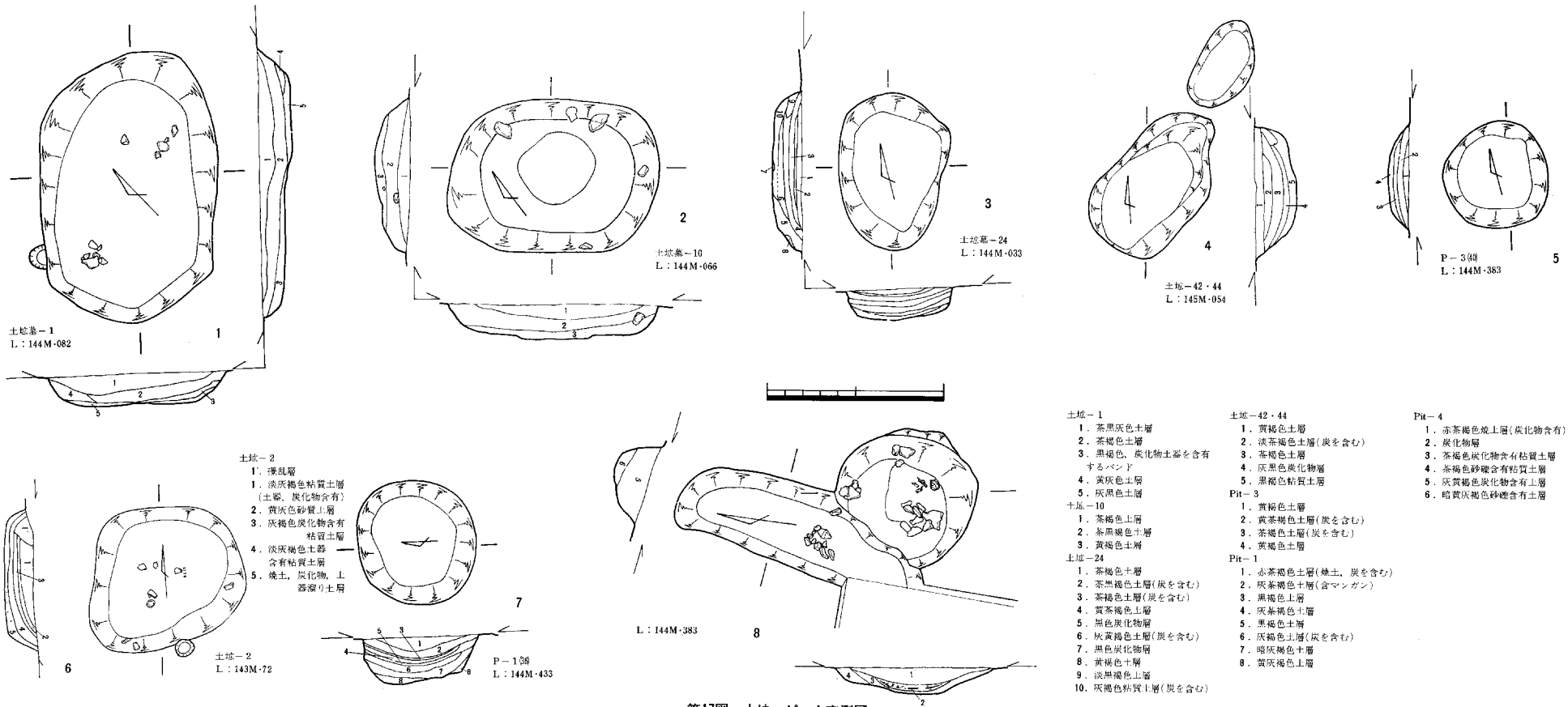
第14図　5号住居址実測図



第15図　D－1内流入石



第16図　1区土坑群平面図



土坑－1
1．茶黒灰色土層
2．茶褐色土層
3．黒褐色，炭化物土器を含有するバンド
4．黄灰色土層
5．灰黒色土層

土坑－10
1．茶褐色土層
2．茶黒褐色土層
3．黄褐色土層

土坑－24
1．茶褐色土層
2．茶黒褐色土層（炭を含む）
3．茶褐色土層（炭を含む）
4．黄茶褐色土層
5．黒色炭化物層
6．灰黄褐色土層（炭を含む）
7．黒色炭化物層
8．黄褐色土層
9．淡黒褐色土層
10．灰褐色粘質土層（炭を含む）

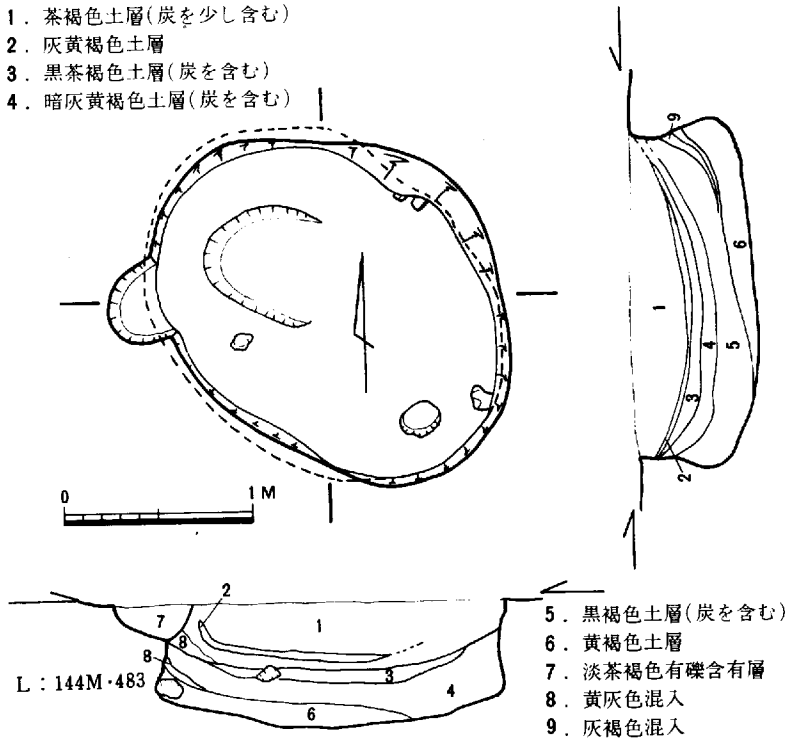
土坑－42・44
1．黄褐色土層
2．淡茶褐色土層（炭を含む）
3．茶褐色土層
4．灰黒色炭化物層
5．黒褐色粘質土層

Pit－3
1．黄褐色土層
2．黄茶褐色土層（炭を含む）
3．茶褐色土層（炭を含む）
4．黄褐色土層

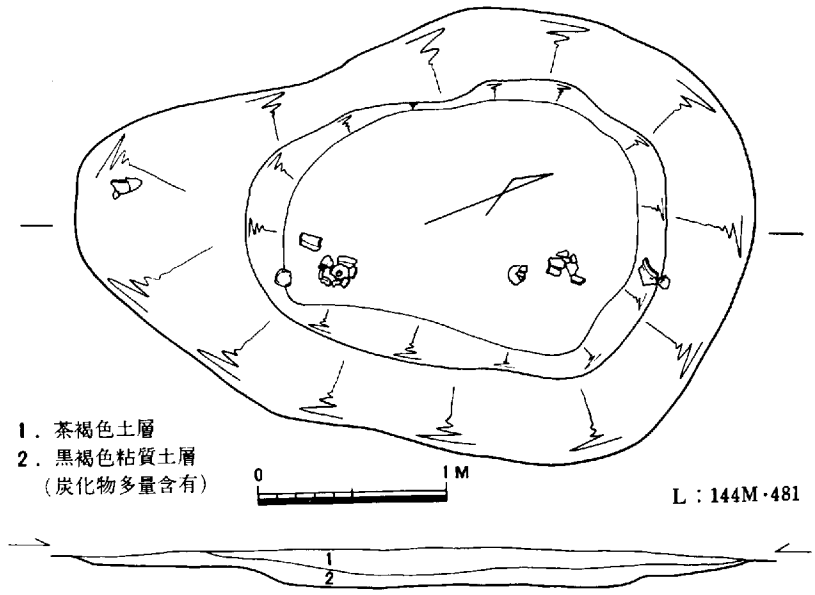
Pit－1
1．赤茶褐色土層（焼土，炭を含む）
2．灰茶褐色土層（含マンガン）
3．黒褐色土層
4．灰茶褐色土層
5．黒褐色土層
6．灰褐色土層（炭を含む）
7．暗灰褐色土層
8．黄灰褐色土層

Pit－4
1．赤茶褐色焼土層（炭化物含有）
2．炭化物層
3．茶褐色炭化物含有粘質土層
4．茶褐色砂礫含有粘質土層
5．灰黄褐色炭化物含有土層
6．暗黄灰褐色砂礫含有土層

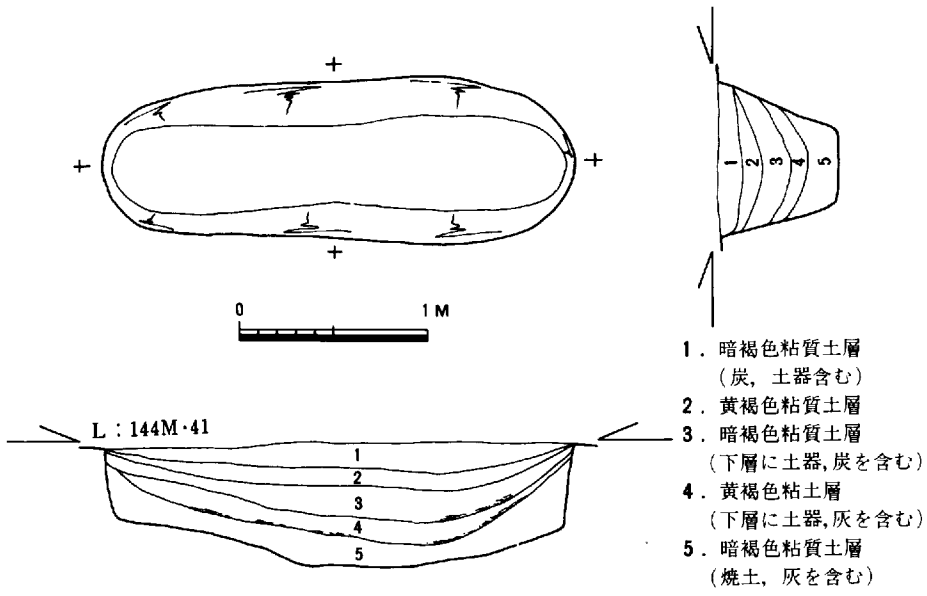
第17図　土坑・ピット実測図



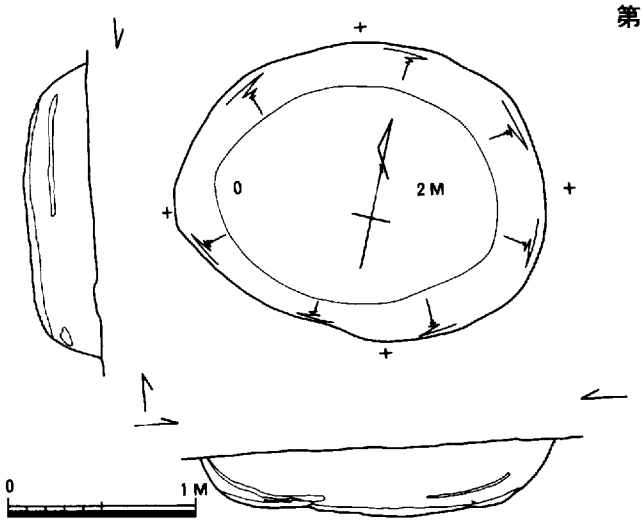
第18図　Pit－2（37）



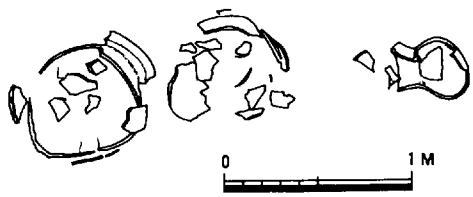
第19図　土坑墓－4



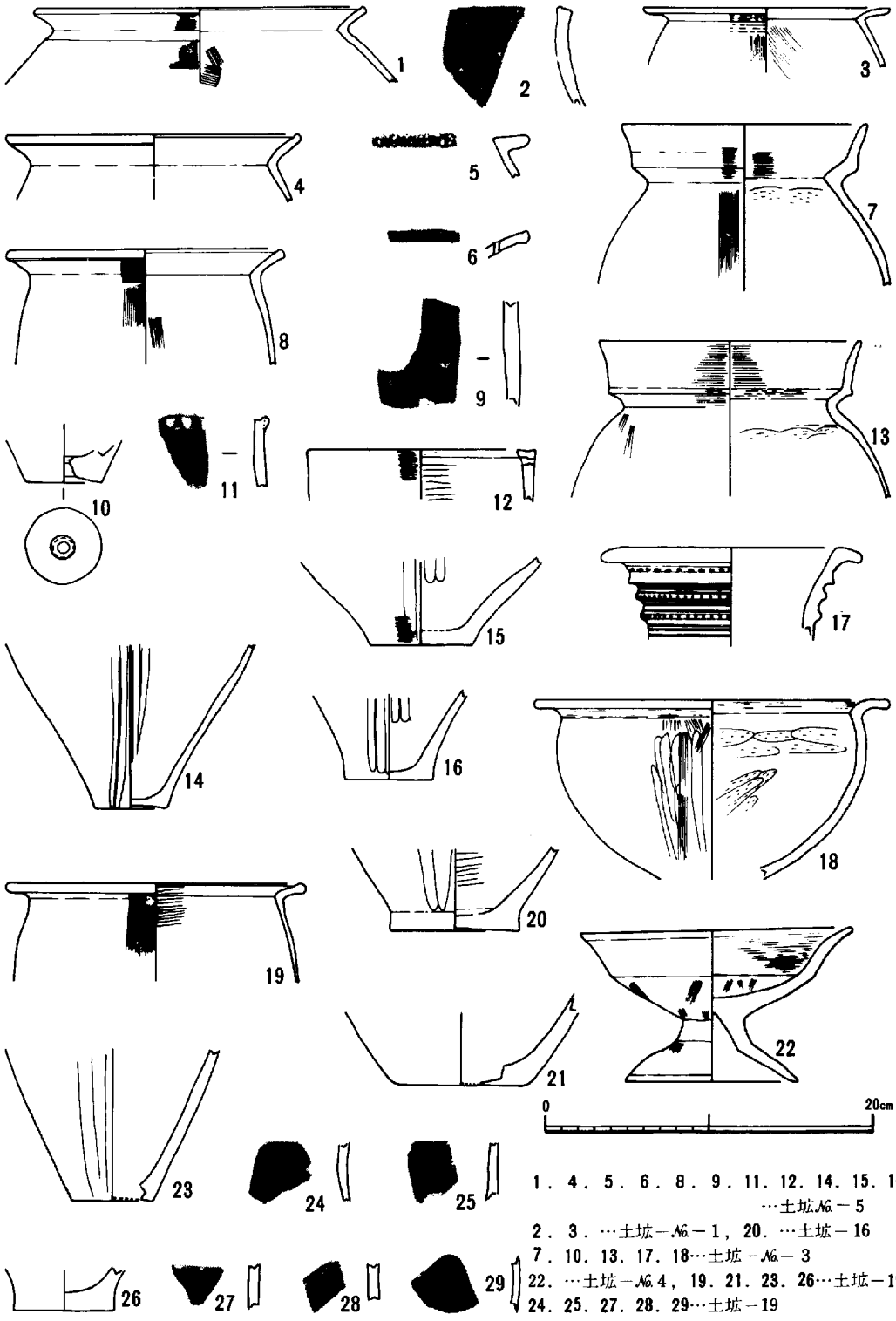
第20図　土壙墓－19



第21図　土壙－64

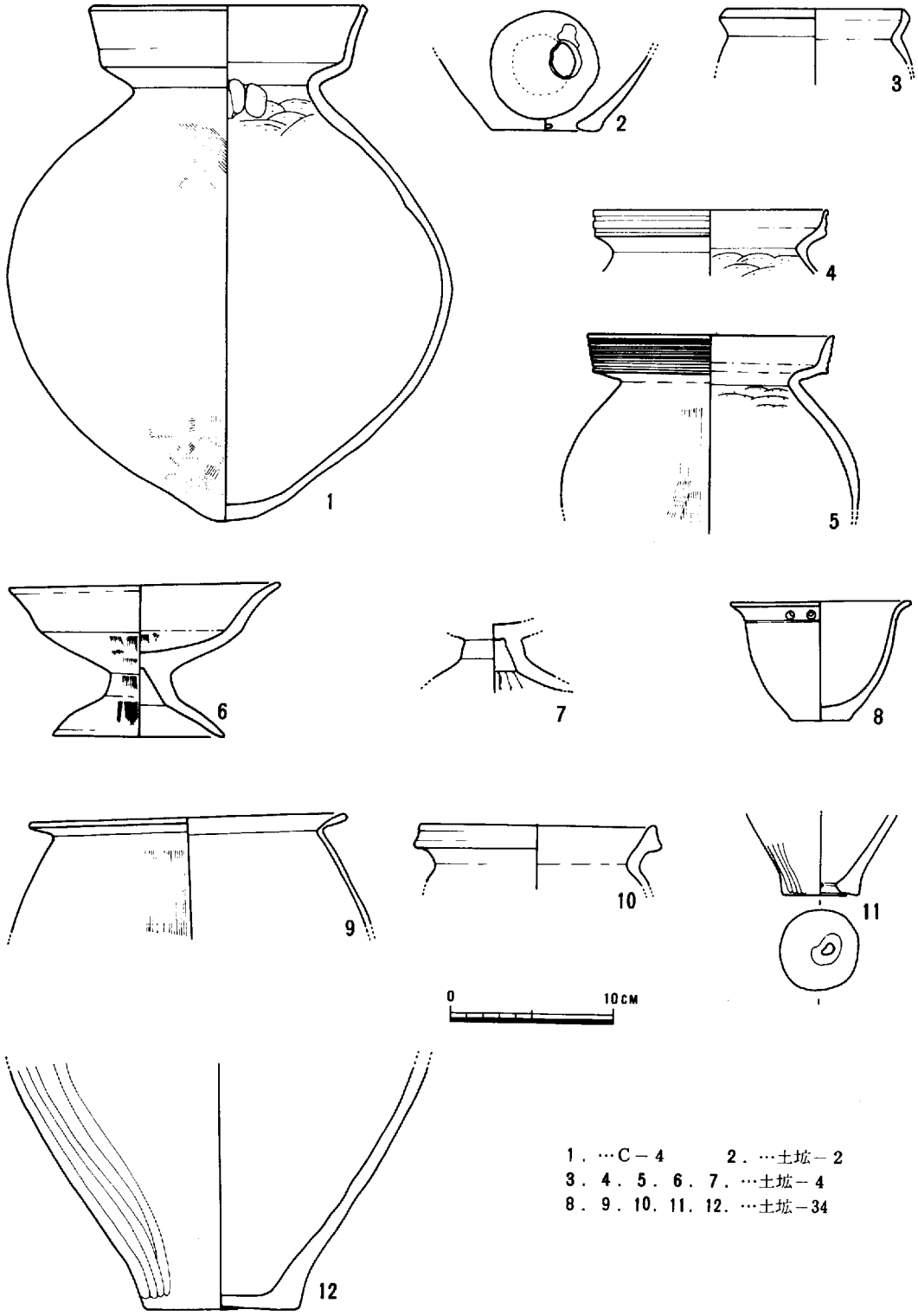


第32図　周湟内土器溜り



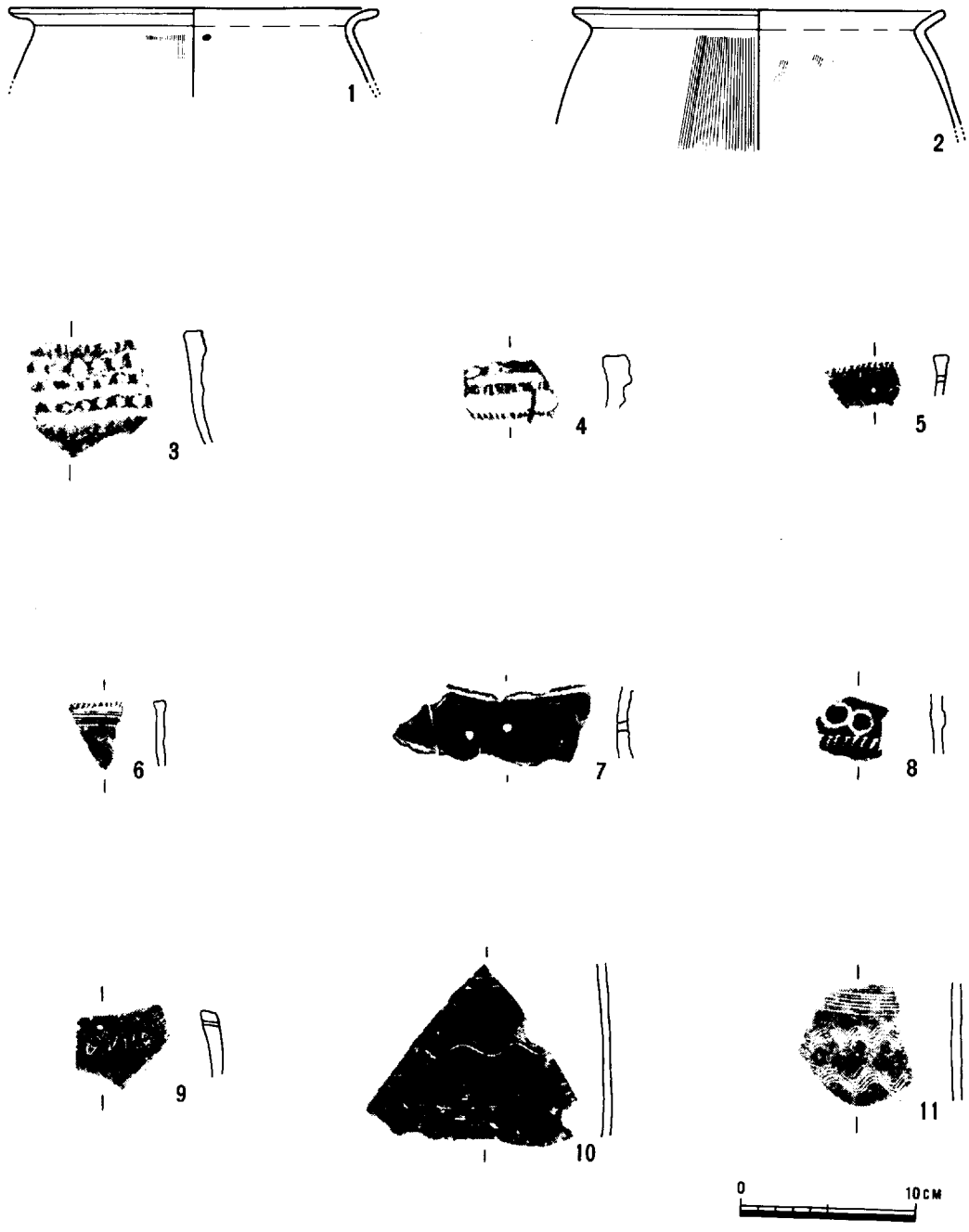
1．4．5．6．8．9．11．12．14．15．16．…土坑№－5
2．3．…土坑－№－1，20．…土坑－16
7．10．13．17．18…土坑－№－3
22．…土坑－№4，19．21．23．26…土坑－19
24．25．27．28．29…土坑－19

第22図　土坑内出土遺物



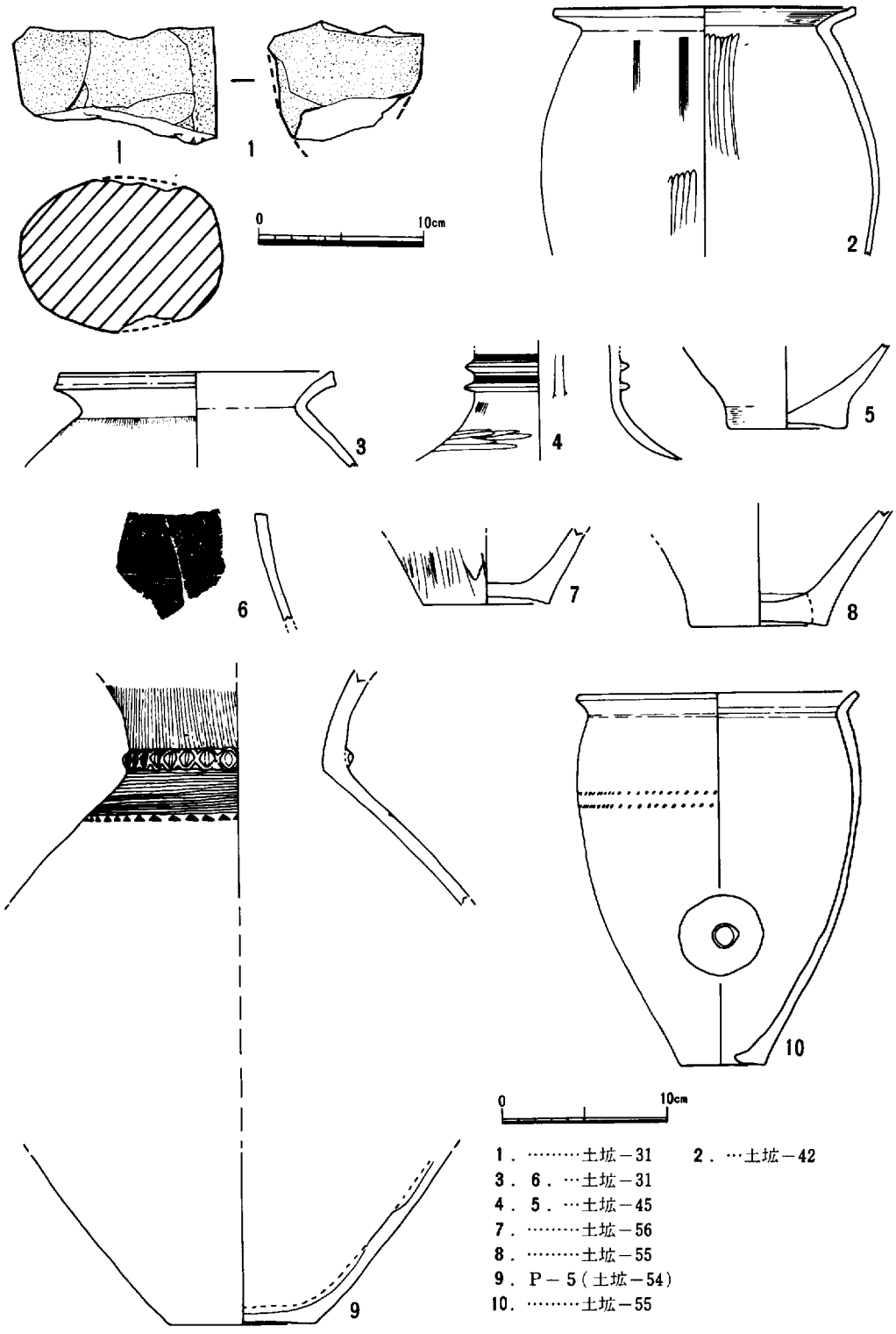
1．…C－4　　2．…土坑－2
3．4．5．6．7．…土坑－4
8．9．10．11．12．…土坑－34

第23図　C－4・土坑内出土遺物



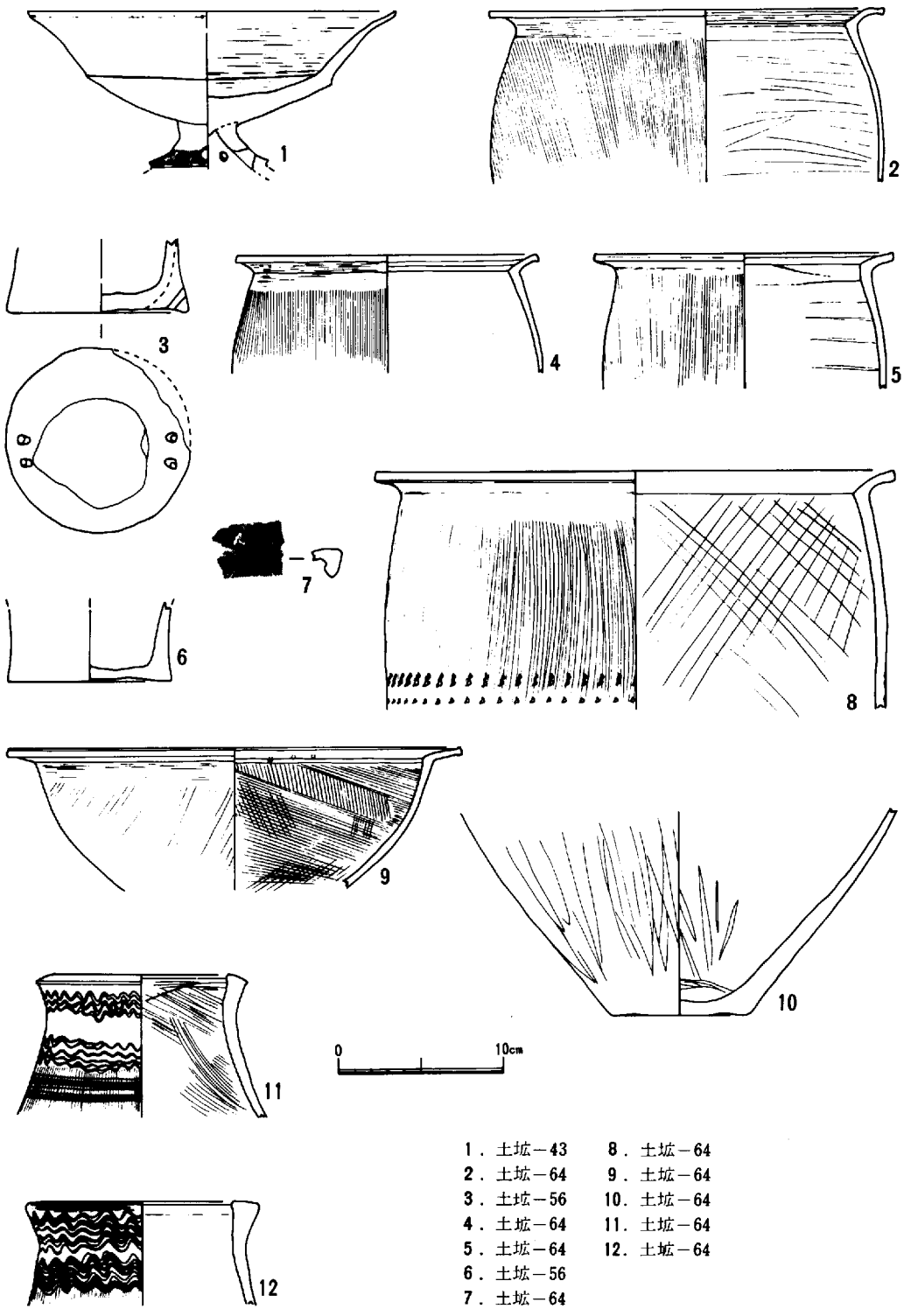
1．2．5．7．…土坑－10
3．…Pit－1
4．6．8．11．…土坑－2
9．10．…土坑－62

第24図　土坑内出土遺物



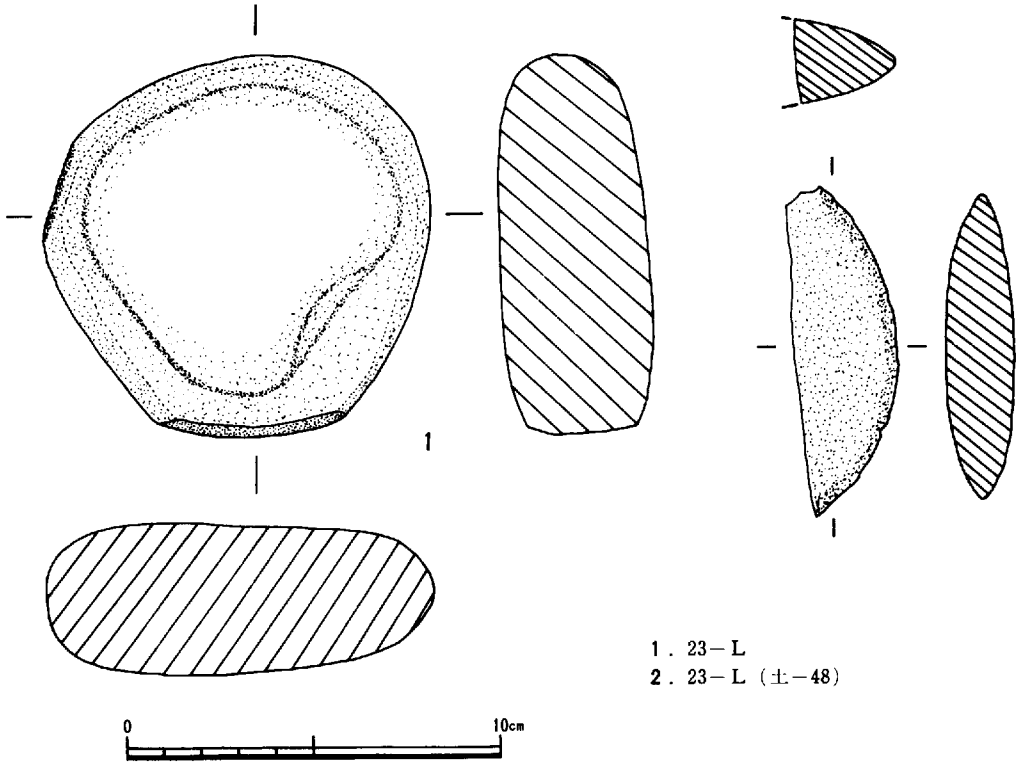
1．……土坑－31　　2．…土坑－42
3．6．…土坑－31
4．5．…土坑－45
7．……土坑－56
8．……土坑－55
9．P－5（土坑－54）
10．……土坑－55

第25図　土坑，ピット内出土遺物



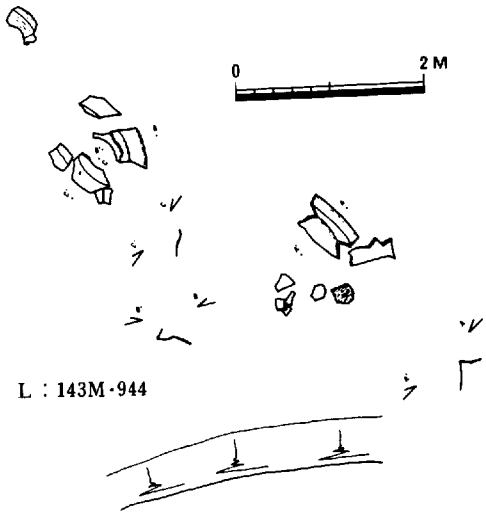
1．土坑－43
2．土坑－64
3．土坑－56
4．土坑－64
5．土坑－64
6．土坑－56
7．土坑－64
8．土坑－64
9．土坑－64
10．土坑－64
11．土坑－64
12．土坑－64

第27図　土坑内出土遺物

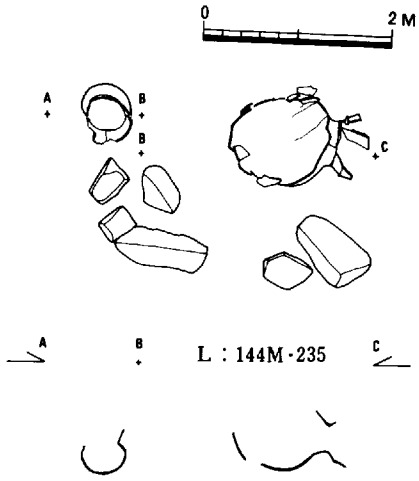


1．23－L
2．23－L（土－48）

第26図　土坑・攪乱層出土遺物



第28図　C－2，土器溜り



第29図　C－2，土器溜り

表－3　　周　溝　墓　一　覧　表

方形円形周溝墓	形	規　模 m	主体部	遺　物	周溝内遺物	備　考
C － 1	方　形	11.5×11.5	—	—	○	周溝墓群東端に位置するC－2と接す
C － 2	方　形	21×(20+α)	—	—	○	周溝内南側に箱式石棺が2基ある 底部穿孔土器出土
C － 3	方　形	125×10.5	—	—	○	周溝内南，東側に石蓋土壙シストが計4基　底部穿孔土器出土
C － 4	方　形	10.5×10.5	—	—	○	底部穿孔土器出土
C － 5	方　形	10.5×(9+α)	—	—	○	半壊している
C － 6	方　形	(8+α)×(6+α)	—	—	○	底部穿孔土器出土
C － 7	不整形	10× 9	—	—	○	周溝内南々西に石蓋土壙が1基ある 底部穿孔土器出土
C － 8	円　形	14	—	—	○	東側周溝内に石蓋土壙が1基，底部穿孔土器出土
一号墳	円　形	18～18.5	箱式石棺	刀子(3) 鉄鏃(16) 鉇　(1)	○	底部穿孔土器出土

れている環状石斧の一部が確認されたのみで，そのほか，サヌカイト片が少量出土しているのみである。

土壙－60

1号住居址によって東部の端一部が切られてはいるが，南西に向いた舟型のようなプランを示している土壙で，中央部分に柱穴を有している。規模は長径245㎝，短径140㎝，深さ約40㎝，柱穴部分の深さ50㎝を計る。このように中央部に柱穴を持っているものは土壙墓と推定するより，むしろ貯蔵庫と考えるのが妥当だと判断する。出土遺物は埋土中より少量の弥生式土器片，サヌカイト片の出土が確認されたにすぎない。従って時代決定にいたるような資料がないため時代不明確な土壙である。しかしながら，1号住居址によって切断されていることから見て，住居址以前のものであることは確かである。

土壙－64（第27図－2，4，5，7～12・第41図－8～11）

2号住居址によって東端部が切り取られてはいるが楕円形のプランと推定される。この土壙内からは，甕形土器，無頸壷，鉢型土器，石鏃，そのほかに多数の土器片，サヌカイト片等も出土している。土壙－64は出土遺物からみれば，弥生中期のものと推定することができる。

5）　円形，方形周溝墓　（第8図）

用地内にかぎれば，東西約90m，南北約40m内に総数9基からなる円，方形周溝墓群が構成されている。各周溝墓とも他を破壊するような出土状態ではなく，整然と並んでおり計画的な

築造の跡をうかゞうことができる。

方形のもの6基は，周溝方位をほぼ同一にとり，溝一部を共有し，方形周溝間のまとまりをもつものである。C－8，1号墳は明確な円形を呈するが，C－7は不整形なプランを有する。埋葬施設を有するものは，一号墳のみであり，他のものには検出されなかった。周溝内に石蓋土壙，箱式石棺，土壙等の埋葬施設をもつものがあり，C－2・C－3，C－7，C－8がそれらである。しかし，それらに伴うものか，否かは明確ではなく，今後検討の余地がある。

これらの周溝墓の時期を決定するものに，周溝内出土の土器が存在する。これら大半の遺物は周溝底に密着した状態で出土したものであり，各遺構とも底部穿孔（焼成後）を受けているものが含まれている。遺物は第34，36，39，40図に示している。

C－1

2（第40図）は，上端径19.3㎝，下端径15.9㎝，高さ9.3㎝を測り，淡茶褐色を呈する鼓形器台である。外面上半にみられる屈曲部稜線は丸みを持ち，下半のものは幾分痕跡をとゞめる程度の横なでが行なわれている。内面の上半，下半は右廻りのへら削りが行なわれており，上半の削り後の整形は若干荒い感がするものである。器外面に巾約5～6㎝の黒斑が縦にみられる。

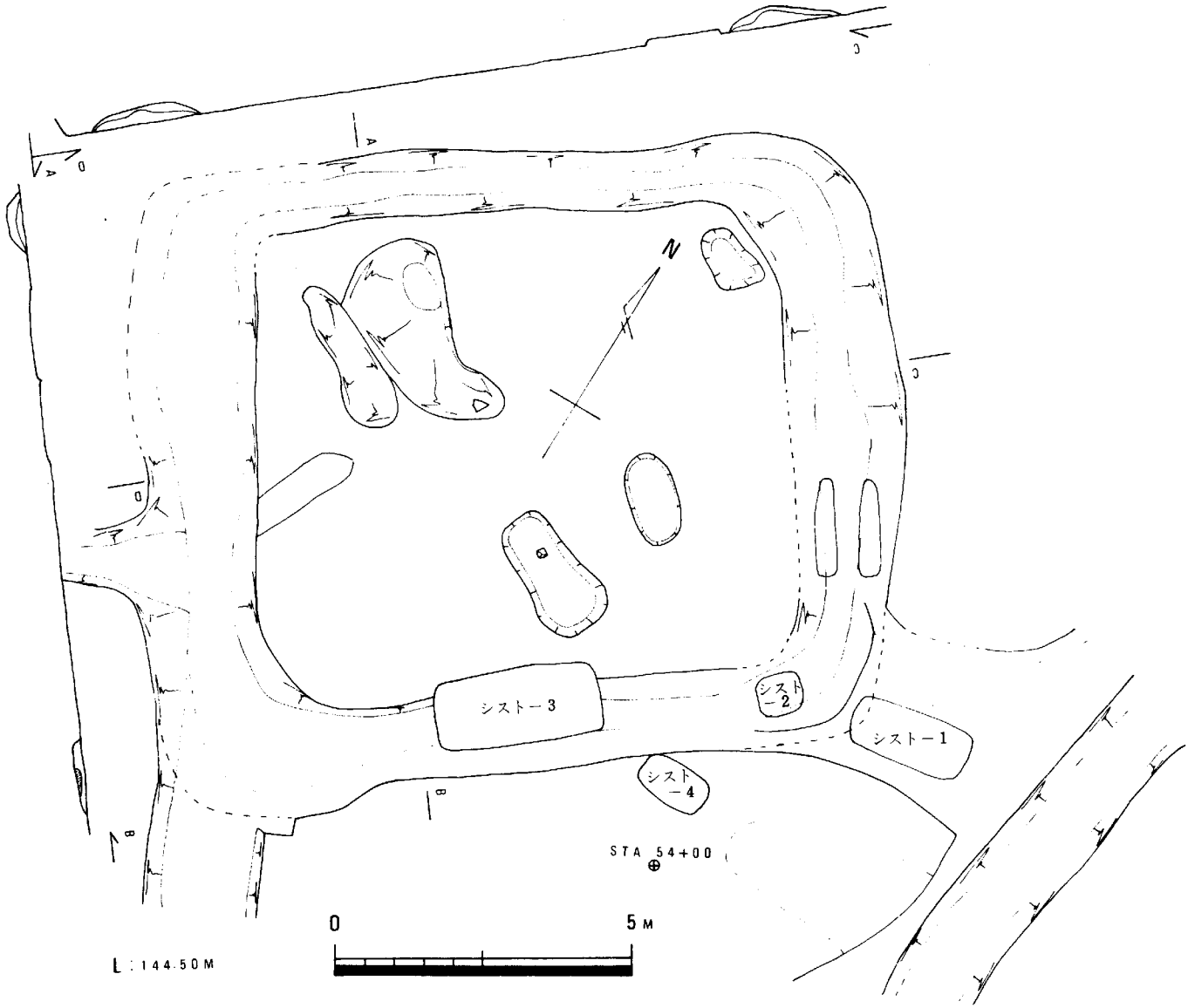
3（第40図）は，胴部下半を欠損した複合口縁を有する甕形土器である。口径12.8㎝を測り，球体に近い胴部を有する。外面は櫛状の縦刷毛ナデが施され，内面は右廻りのヘラ削りが行なわれている。焼成良好にて，口縁，胴部に黒斑が一部みられる。

C－2

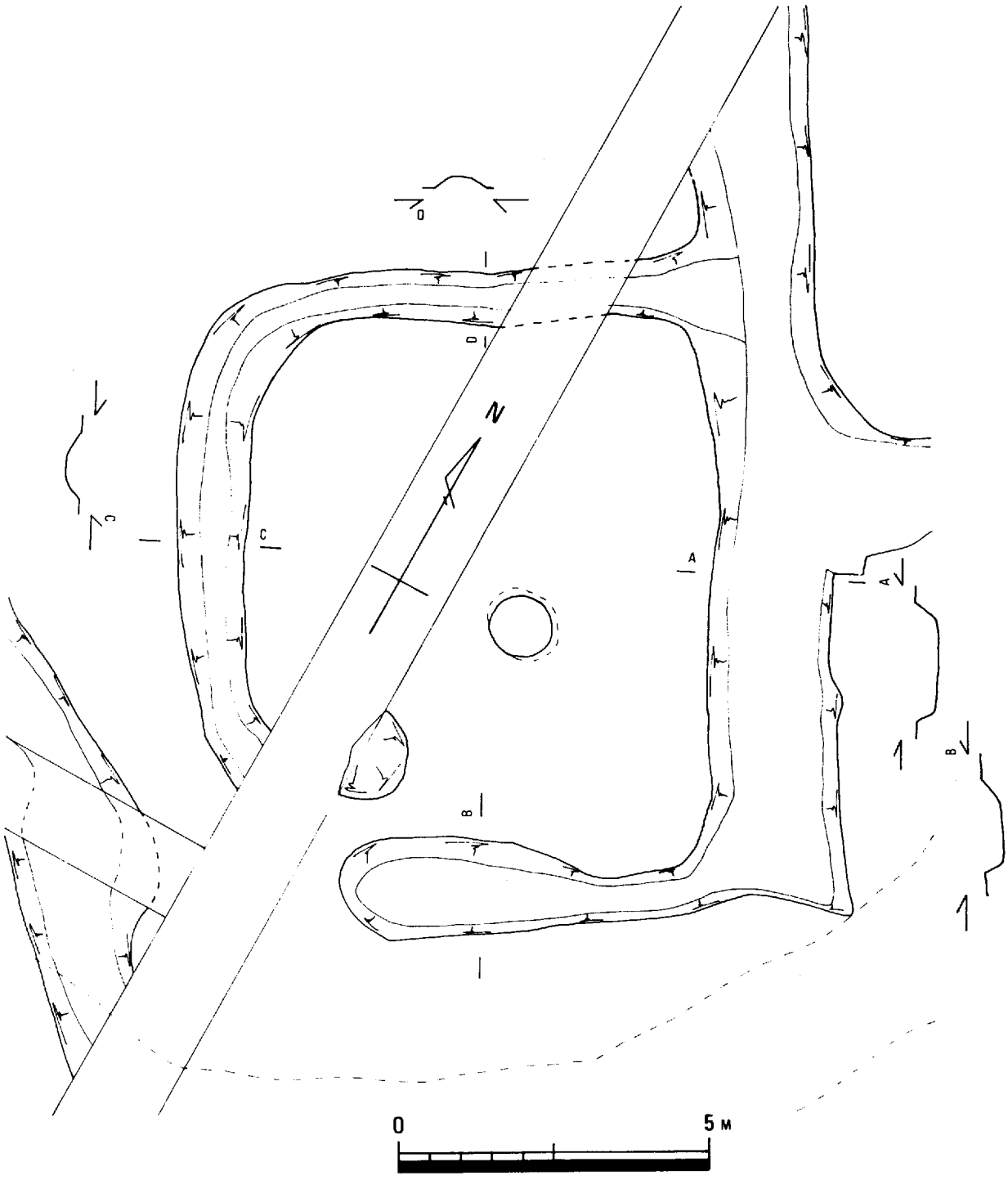
4（第33図）は，口径17㎝，胴部最大径24.5㎝，器高28.8㎝を測り，色調淡黒，黄褐色を呈する壷形土器である。若干外傾する複合口縁，球体丸底の形態を持つ。口縁部内外横ナデが施され，胴部外面は荒い横刷毛ナデがみられるが，下位までは及んでいない。内面は上位$\frac{2}{3}$までに右廻りのへら削り，下位$\frac{1}{3}$に指頭圧痕が残り，非常に薄く仕上げられている。外面胴部上半から口縁にかけて巾15㎝，長さ23㎝の黒斑がみられる。底部に径6×7㎝の外側からの穿孔がみられる。

14（第36図）は，上端径16.7㎝，下端径16㎝，高さ8.1㎝を測り，色調乳灰色を呈する鼓形器台である。外面の上半，下半にみられる屈曲部稜線は比較的明瞭な段を有し，横ナデにより仕上げられている。外面丹塗りが行なわれ，内面上半にもおよんでいる。内面へラ削りは下半に左廻りのものが顕著に残っており，上半はへラ磨きにより仕上げられている。

5（第40図）は，口径12.5㎝，胴部最大径12.6㎝，器高11.6㎝を測り，丹塗りの施された小形丸底壷である。口縁端部は横ナデ，胴部外面は横刷毛ナデが全体に及んでいる。口縁内面は横刷毛ナデがみられ，胴部内面はへラ削り後，指頭等のナデにより薄く仕上げられている。



第30図　C－3実測図



第31図　C－4実測図

C－3（第30図）

1（第33図）は，口径18㎝，胴部最大径30.3㎝，高さ34㎝を測り，色調淡赤褐色を呈する甕形土器である。複合口縁，球体丸底の形態をもつ。口縁部内外面は横ナデが施されている。内面は上位$\frac{2}{3}$までに右廻りのヘラ削り，下位$\frac{1}{3}$には指頭圧痕が施され非常に薄く仕上げられている。外面胴部上半から口縁部にかけて巾18㎝，長さ20㎝の黒斑がみられる。底部に径７㎝の外側からの穿孔がみられる。

6（第39図）は，胴部下半を破損している。口径12.2㎝を測り，複合口縁を有する甕形土器である。色調黄褐色を呈する。口縁部内外面は横ナデが行なわれ，胴部外面は櫛状の縦刷毛ナデ後に横刷毛ナデが行なわれており，その上を指頭で若干ナデた部分がみられる。器壁を非常に薄く仕上げた土器である。

7（第40図）は，口径17㎝，胴部最大径28.1㎝，器高36㎝を測り，色調赤褐色を呈する壷形土器である。頸部と胴部の接合点上位にタガ状の帯が一周している。口縁外面は横ナデと縦刷毛ナデ両者が，内面は横刷毛ナデが施されている。胴部外面は，粗雑ではあるが左上より右下に向かう刷毛ナデが底部まで施されている。内面は上位$\frac{2}{3}$までに右廻りのヘラ削り下位$\frac{1}{3}$に指頭圧痕が施され，非常に薄く仕上げられた土器である。外面胴部上半に巾11㎝長さ15㎝の黒斑がみられる。底部に径13㎝の外側よりの穿孔がみられ，焼成後のものである。

11（第34図）は，口径13.4㎝，胴部最大径17㎝を測り，茶褐色を呈する甕形土器である。口縁部内外面は横ナデが，胴部外面は縦刷毛ナデが行なわれている。部分的ではあるがススが付着している所がある。内面はヘラ削りが行なわれ，器壁を薄く仕上げている。

C－4（第31図）

1（第40図）は，口径21.3㎝，胴部最大径26.7㎝を測り，色調暗灰黄色を呈する甕形土器である。口縁部内面は横ナデ，胴部外面は刷毛ナデ後，指頭等によるナデにて円滑に仕上げられている。内面は右廻りのヘラ削りが行なわれている。器壁が非常に厚く，若干鈍さを持つ土器である。

3（第34図）は，口径12.5㎝，胴部最大径16㎝，器高19.2㎝を測り，色調暗乳灰色を呈する壷形土器である。完全な球体を呈するものである。口縁内外面は横ナデにより，胴部外面はヘラ描き波状文が一本，櫛状工具による横位の刷毛ナデ，さらに斜行，交差する刷毛ナデがみられる。下半はスス付着がみとめられる。内面ヘラ削りにより器壁は薄く仕上げられている。

3（第36図）は，口径19.5㎝，底径14.2㎝，器高12㎝を測り，黄褐色を呈する高杯形土器である。内外面とも剥離が激しく整形痕をとどめていない。脚部外面に櫛状の縦刷毛ナデが残存している。脚屈曲部に３孔を有し，２～３㎜と薄く仕上げられた土器である。杯部・脚部の接合部分に円球状の粘土栓が使用され，杯底としている。

3（第39図）は，胴部下半を欠損した複合口縁を有する壷形土器である。口径18.6㎝，頸部12㎝が測れるのみである。口縁内外面は横ナデ，頸部外面横ナデ，内面しぼり目の上にナデが行なわれている。胴部外面は縦刷毛ナデが行なわれ，内面は右廻りの荒いヘラ削りがみられ

る。器壁は，６～８㎜を測る厚手の土器である。

４（第40図）は，口径16.3㎝，胴部最大径23㎝，器高27㎝を測り，色調淡灰褐色を呈する壷形土器である。垂直に立つ頸部より若干傾きながら水平にのびる口縁部と，球体に近い胴部をもつ。口縁端部に２条の沈線を有し，胴部外面下半は荒い縦刷毛ナデが行なわれている。胴部上半は指頭等による入念，円滑な整形がみられる。丸底部は刷毛工具による押圧痕がみられ，内部から穿孔を受けている。胴部下半より底部にかけて巾17㎝，長さ12㎝の黒斑がみられる。器内面は，口縁部横ナデ，胴部はナデを施し円滑に整形している。この内面整形は，ヘラ削りが主流をしめる中にあって特異なものである。

５（第39図）は，口径17.6㎝，胴部最大径31.4㎝，器高37.5㎝を測り，色調淡茶色を呈する大形の壷形土器である。口縁部内外面は，横ナデが施され，頸部接合部分は回転による凸凹が目立つ。内面は口縁端部より約５㎝巾でススが環状に付着している。胴部外面は縦方向の刷毛ナデが底部まで行なわれ，上半に顕著にその痕跡がみられる。内面は右廻りのヘラ削りが行なわれ，下位には指頭圧痕がみられる。外面肩部に巾５㎝，長さ８㎝の黒斑がみられる。丸底部分は，破損して明らかではないが，破損状態から穿孔された可能性がうかがえる。

６（第34図）は，口径11.6㎝，器高 7.9 ㎝を測り，器内外面とも丹塗りの施された小形丸底壷である。口辺高に比較して，胴部高の非常に低い形態を呈する。器内外面は入念な整形が行なわれ円滑である。内面は若干刷毛目痕がみられる。丹塗り剥離面下より黄灰色がのぞいている。

12（第36図）は，上端径20.3㎝，下端径15.9㎝，高さ 9.3 ㎝を測り，淡茶色を呈する鼓形器台である。外面の上半，下半にみられる屈曲部稜線は明確な段を有し，横ナデにより仕上げられている。内面ヘラ削りは，下半に右廻りのものがみられ，上半部は研磨されている。内面上半端部にみられる稜線はなく，丸みをもって仕上げられている。器面に回転による凸凹をもち薄く仕上げられたものである。

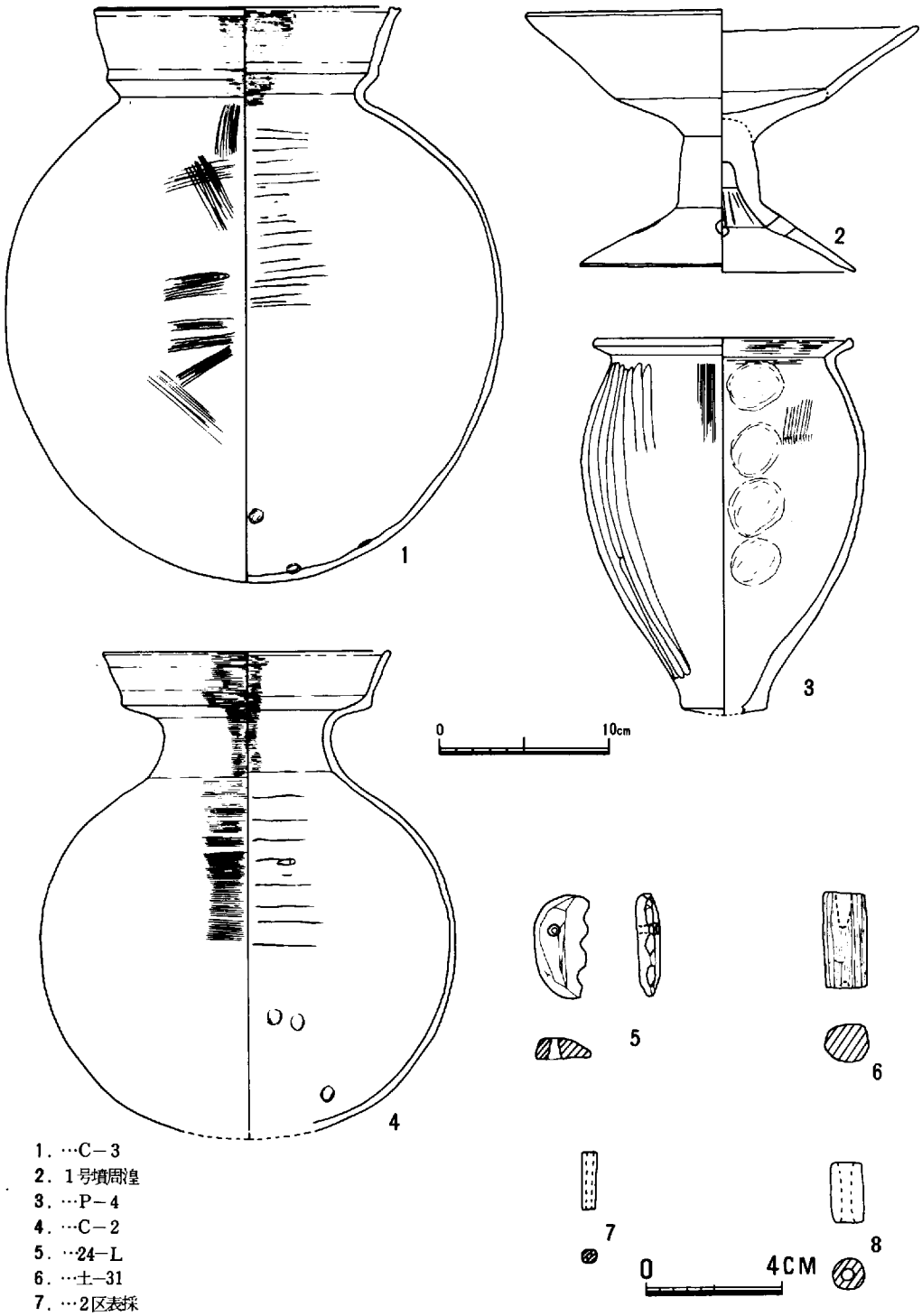
12（第34図）は，杯部を欠損した赤褐色を呈する高杯形土器である。外面に荒い縦刷毛ナデが行なわれ，内面は剥離が著しく整形が不鮮明である。屈曲部下位に４孔を有する。

13（第34図）は，杯部の破損した高杯形土器である。脚底13㎝を測り，外面は細目刷毛ナデ中空内面ヘラ削りが行なわれている。屈曲部下位に４孔がみられる。端部にススが部分的に付着している。

３（第40図）は，胴部下半が破損した，複合口縁を有する甕形土器である。口径12.8㎝，胴部最大径16.3㎝を測り，暗褐色を呈する。

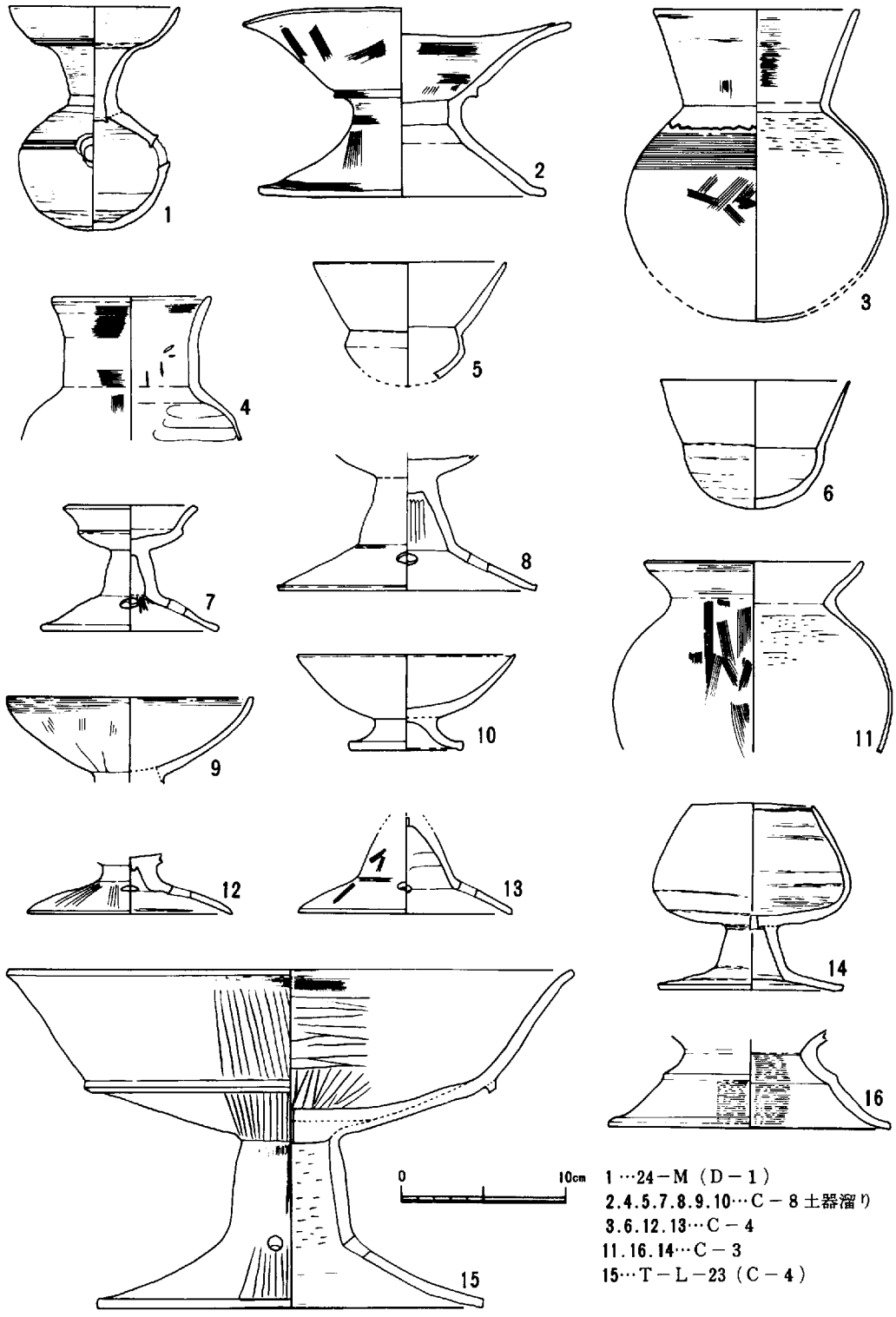
口縁内外面は横ナデにより，胴部外面は櫛状の縦刷毛ナデにより仕上げられている。器内面は右廻りのヘラ削りが行なわれ，器壁を薄く仕上げている。

15（第34図）は，口径34.5㎝底形23.6㎝，器高20.8㎝を測り，色調黄褐色を呈する大形の高杯形土器である。器内外面とも入念な縦ヘラ磨きが行なわれており，口縁端部内外面に横ナデ，外面部柱状部分に櫛状の荒い縦刷毛ナデがみられるのみである。



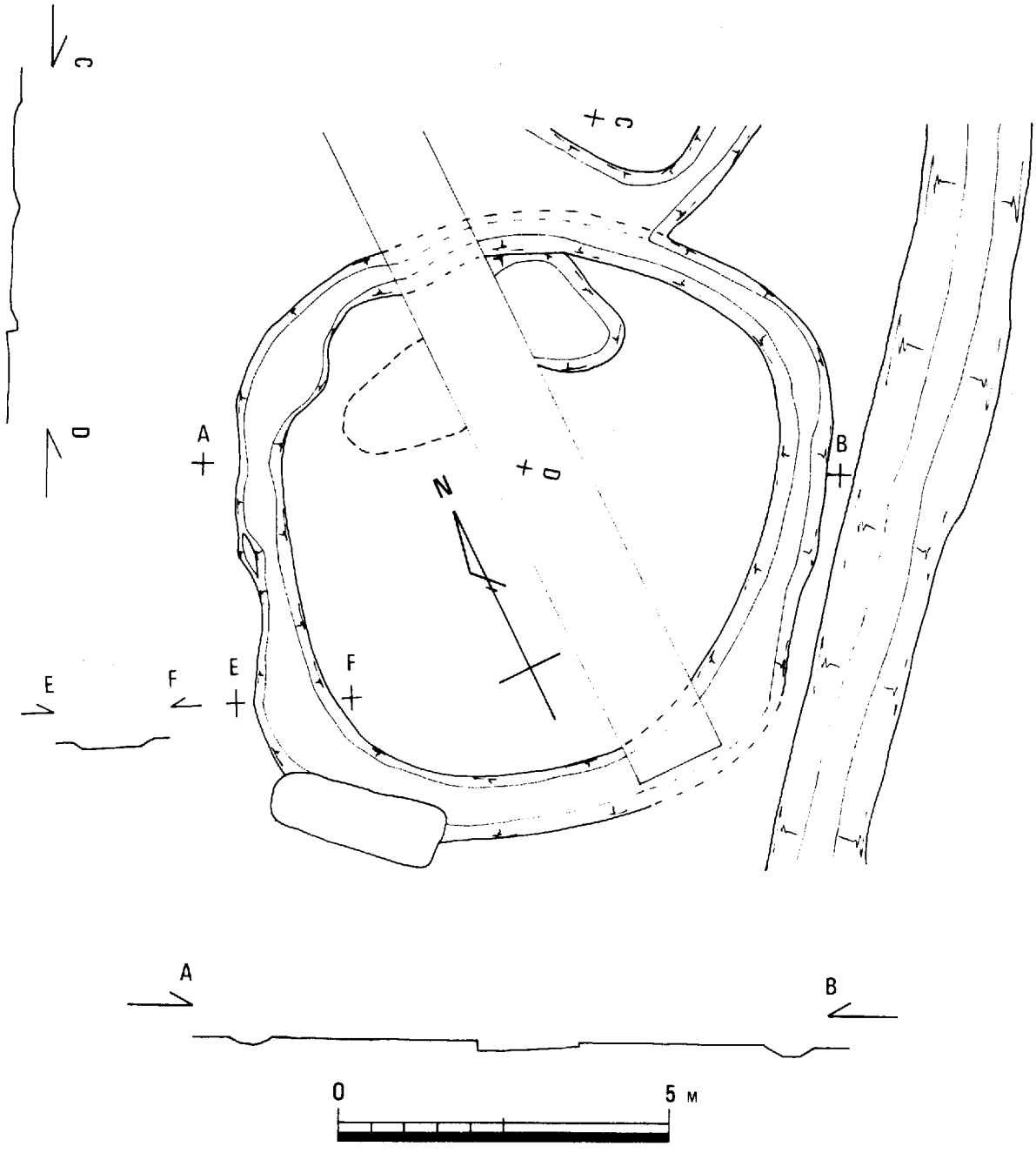
1．…C－3
2．1号墳周溝
3．…P－4
4．…C－2
5．…24－L
6．…土－31
7．…2区表採
8．…3区表採

第33図　1区出土遺物



1…24－M（D－1）
2.4.5.7.8.9.10…C－8 土器溜り
3.6.12.13…C－4
11.16.14…C－3
15…T－L－23（C－4）

第34図　1区出土遺物



第35図　C－7実測図

C－5，C－6

図示できなかったが，周溝内より若干の土器片が出土している。C－6よりは，4（第39図）の甕形土器に近似したものが出土している。

杯形土器では，口径14.4cm，高さ3.1cmを測り，黄褐色を呈するものがある。杯外面下半はヘラ削りが行なわれている。杯部接合部にあたる屈曲外面に貼り付けのタガ状凸帯が一周している。脚屈曲部分下位に3孔を有し，底端部は面をもって仕上げられている。中空部分は右廻りのヘラ削りがみられ，屈曲部下位は刷毛ナデが行なわれている。また，杯部・脚部接合部分には半球状の粘土栓がもちいられ，その上に粘土を貼り付けて杯底としている。

C－7（第35図）

8（第36図）は，口径13.2cm，胴部最大径13cm，器高11cmを測り，色調赤褐色を呈する小形壷形土器である。内外面伴に丹塗りが施され，特に外面は鮮明である。口縁内外面は横ナデが施され，胴部内外面は入念な整形が行なわれ丁寧に仕上げられている。底部に径5×5cm，の内面からの穿孔が行なわれており，胴部下半にはススが付着している。煮沸用具から墓の供献に転用されたものであろう。10（第36図）も外面から穿孔がおこなわれている。

9（第36図）は，口径16.8cm，胴部最大径22.4cm，器高23cmを測り，赤褐色を呈する壷形土器である。「くの字状」に外反する口縁，胴部中位に最大径を有し，丸底の形態を持つ。口縁内外面は横ナデにより仕上げられている。胴部外面は，刷毛状工具による縦右下りの整形が全体におよんでいる。内面は上位ヘラ削り後，下位は指頭圧痕後，縦刷毛ナデにより仕上げられている。丸底部分は，径5×8cm位の穿孔がみとめられた。内面整形の特異なものである。

11（第36図）は，上端径19.2cm，器高7.3＋αcmを測り，乳灰色を呈し外面に丹塗りの行なわれた鼓形器台である。外面上半，下半にみられる屈曲部稜線は横ナデにより丸みをもって仕上げられている。下半のものが上半のものよりさらに丸みをます。内面上半はヘラ削り後，指頭等により丁寧に仕上げられている。下半部は左廻りのヘラ削りが行なわれている。図上では天地逆になっている。

13（第36図）は，上端径19.6cm，下端径15.9cm，高さ9.3cmを測り，淡褐色を呈する鼓形器台である。外面の上半，下半にみられる屈曲部稜線は横ナデにより丸みをもって仕上げられている。内面は上半・下半部伴にヘラ削りが行なわれており，上半部のみ削り後丁寧に研磨されている。下半部は右廻りのヘラ削りを残している。その下半部に焼成前の小孔（径3.5mm）が1ケ所みられるが，相対する部分が破損しており，2孔にて利用されたものであろう。

C－8（第37図）

2（第34図）は，上端径19.9cm，下端径17.5cm，器高11cmを測り，内面下半以外に丹塗りの施された鼓形器台である。外面上半部にみられる屈曲部稜線は明瞭な段を有し，不規則な刷毛ナデにより仕上げられている。下半には，屈曲部分はみられず，同じく刷毛ナデが行なわれている。内面上半は不規則な刷毛ナデが施され，下半はヘラ削り後ナデが行なわれている。非常に焼成のよいものである。

4（第34図）は，胴部下半が破損しており，口径9.5㎝を測る壷形土器である。外面は横ナデにより，胴部内はヘラ削りが行なわれている。外面及び内面頸部下まで丹塗りが施されている。

5（第34図）は，口径11.7㎝，器高7.7㎝を測り，器外面に丹塗りの施された小形丸底壷である。口径が胴部径にくらべて著しく広がっており，胴部高が低い形態を呈する。器内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されていたであろうが，剥離が著しく部分的に残存するものである。底部に4～5㎝の穴がみられる。これは焼成後，内面より外面に向って穿孔され竪内に供献されたものであろう。非常に焼成の良好な土器である。

7（第34図）は，口径8.6㎝，底径11.4㎝，器高7.8㎝を測り，脚内面を除いて丹塗りの施されれた高杯形土器である。口径が底径に比べて小さく，短脚に，4孔を有する。外面横ナデ，脚内部は，中空部分にしぼりがみられ，他はナデが行なわれている。非常に焼成の良好な土器である。

8（第34図）は，杯部が欠損しており，底径15.8㎝，脚高7㎝を測る高杯形土器である。外面丹塗りが施されている。脚内中空部分にヘラ削り，脚屈曲部分下位に横ナデが施されている。屈曲部下位に4孔がみられる。

9（第34図）は，脚部が欠損しており杯部のみが残存するものである。内外面に丹塗りが施されており，内面下位はススが付着している。口径15㎝，杯部高5㎝を測り，色調赤褐色を呈する。

10（第34図）は，口径13.4㎝，底径7㎝，器高5.9㎝を測り，色調淡黄色を呈する低脚杯形土器である。内外面の剥離が激しく，整形は不明である。

土器について

円，方形周溝内出土土器は，壷形土器・甕形土器・高杯形土器・杯形土器・鼓形器台等の器種がみられる。

◦壷形土器――複合口縁を有するもの・直口にて若干外傾する口縁を有するもの・長頸からラッパ状に開く口縁を有するもの・小形丸底の精製壷の4種類がある。

これらの土器は，胴部中位に最大径を有し，丸底であるという点を共有している。

整形方法においては，小形精製土器2点を除き，口縁部内外面は横ナデ，胴部外面は方向の異なる刷毛ナデによって仕上げられている。内面は横位のヘラ削りが普通である。中には，4（第40図）のように他の土器と整形の異なるものが存在する。これは，器内面のヘラ削りがみられず，指頭等により入念に整形のなされたものである。

◦甕形土器――複合口縁を有するもの・「くの字状」に開く口縁を有するもの・の二種類がある。これらも壷形土器と同様の形態・整形の特徴がうかがえる。9（第36図）は，他と整形を異にするものである。器内面ヘラ削りにて仕上げているものではなく，ヘラ削り・指頭圧後に縦刷毛ナデにより仕上げているものである。前記した4（第40図）とも異なる。これら2点

に他との整形相異点がみい出せた。又９（第36図）は，大阪府松原市上田町遺跡第Ⅱ層の土器（第５図—23）（註１）に器形に限れば近似している。１（第40図）の胎土は若干他と異なり，後出的様相を呈すると思われる。

◦高杯形土器——杯部が接合部分で屈曲するもの，椀形のもの，脚部は短脚・長脚の二種類がある。長脚が多くみられるようである。長脚中空のものは，屈曲部分内側に鈍い稜線ができ，その下位に孔を有するものと，無いものとがある。屈曲部分内側に鈍い稜線が入るものは，一号墳周溝内でみられた。大部分は器壁が薄く，「せんべい」の感じがするものである。とくに，３（第36図）はその好例であろう。

◦杯形土器——椀形のものと，底部に低い脚のつくものの二種類がみられる。両者とも器壁の薄いものであり，Ｃ－６出土のものは，体部下半にヘラ削りのみられるものがある。Ｃ－７出土のなかには，杯底に穿孔をうけているものが認められた。

◦鼓形器台——図示できたものは６点であるが，１号墳・Ｃ－８にも小片が認められる。Ｃ－５・Ｃ－６を除き，各周溝内より出土している。整形は，下半内面にヘラ削り，上半は，ヘラ削り後ナデたものと，明確にヘラ削りの認められない二種類がある。刷毛ナデのものは認められない。上端部径は13.6㎝～20.3㎝の間にあり，20㎝前後のものが多い。下端部径は約13㎝～18㎝の間にあり，17㎝に近いものが多い。器高は，8.1㎝～11㎝の間にあり，９㎝に近いものが多い。丹塗りの行なわれているものが２点ある。器台全体をみて，この時期のものは器高と中位径（くびれ部）の計測値が近似しており，これらより先出的な時期のものは器高と中位径（くびれ部）の計測値が開くようである。ここでは，墓の供献土器としての鼓形器台の状態を知ることができる。

これらの土器のもつ特徴を近隣の遺跡と比較してみる。まず，本遺跡の南を東流する備中川上流，約５㎞の所に同様の立地をもった谷尻遺跡が存在する。（註２）

谷尻遺跡のⅤ期としている№100・106溝状遺構，№120住居址，№104住居址出土土器に近似する特徴をみい出すことができる。

複合口縁を有する甕形土器・壷形土器の口縁はさらに外傾拡張され，胴部は丸みをまし，丸底が普遍化している。器壁はさらに薄くなり，赤褐色系から淡黄色系に変化している。胎土においても，比較的精製された小砂粒が全面にみられ，せんべいのような感をうける。器外面刷毛ナデ・内面ヘラ削り等々と近似点が多々ある。

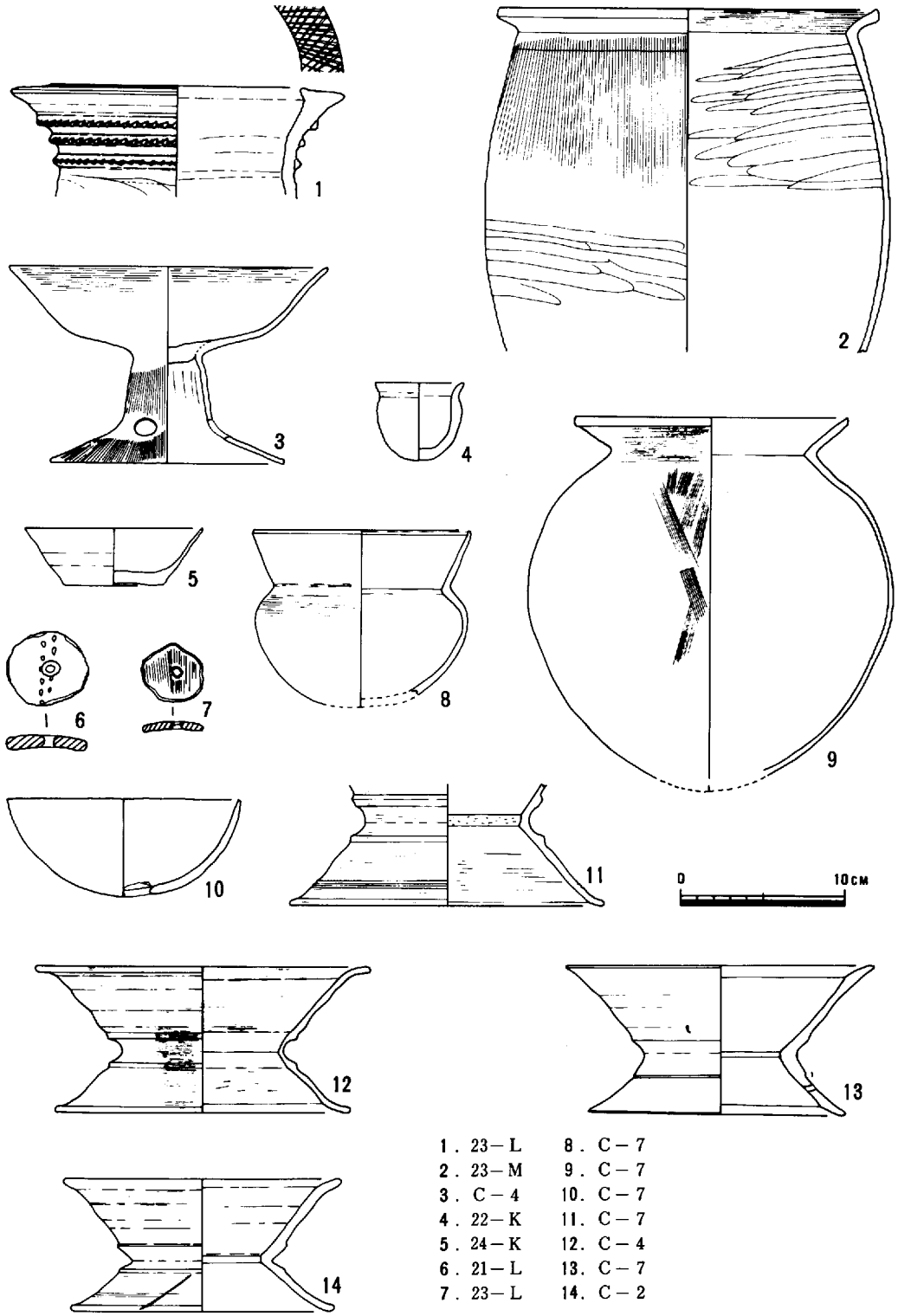
谷尻第Ⅴ期の巾にほとんど比定でき，第Ⅵ期に一部が入るものと考えておきたい。

谷尻では，Ⅴ期を大泊六層期，Ⅵ期を大泊五層（註３）の時期に比定している。

（註１）原口正三・「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊第３号

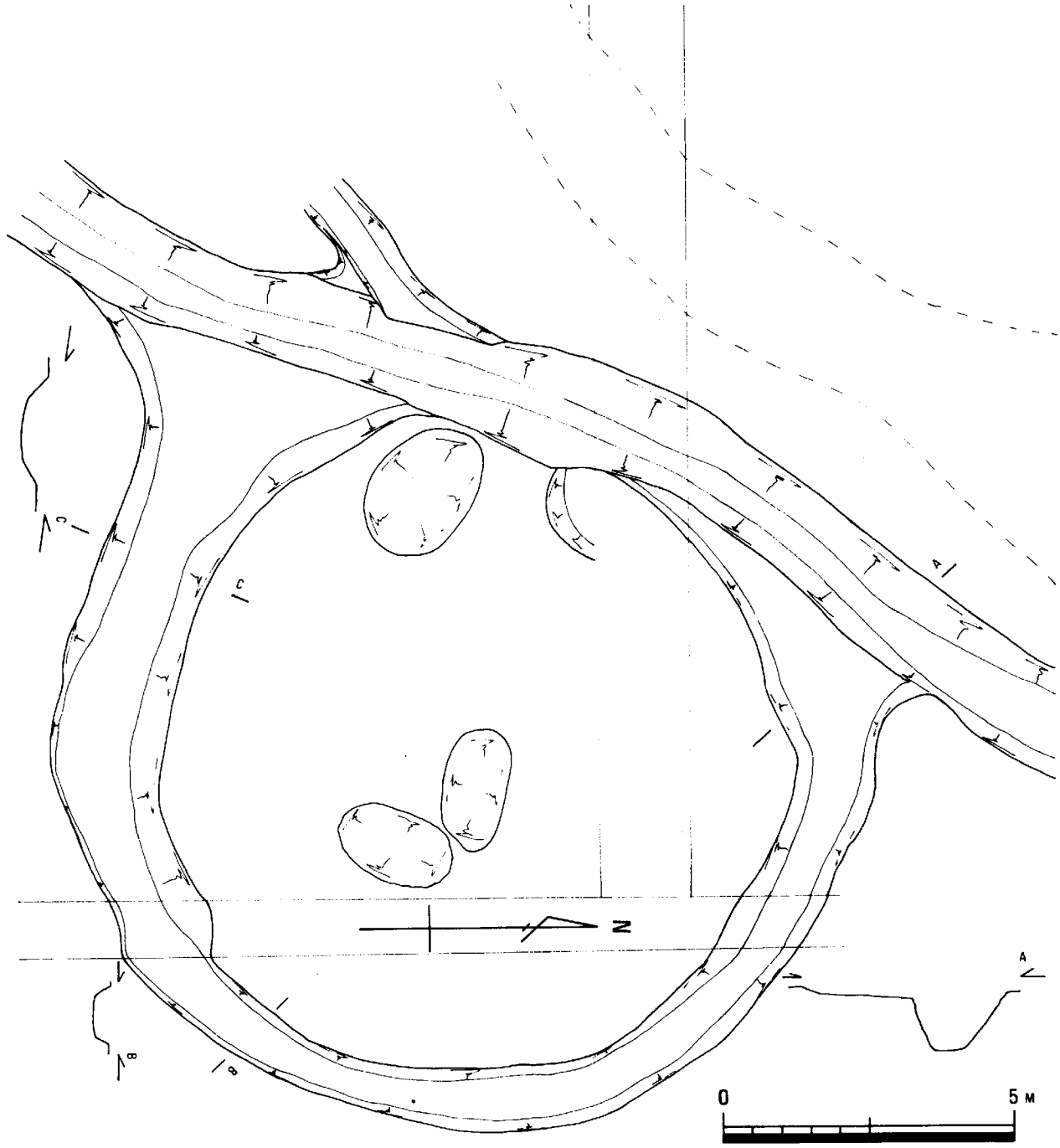
（註２）岡山県教育委員会「谷尻遺跡」中国縦貫道自動車道建設に伴う発掘調査Ⅱ1976,3

（註３）坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」1951年

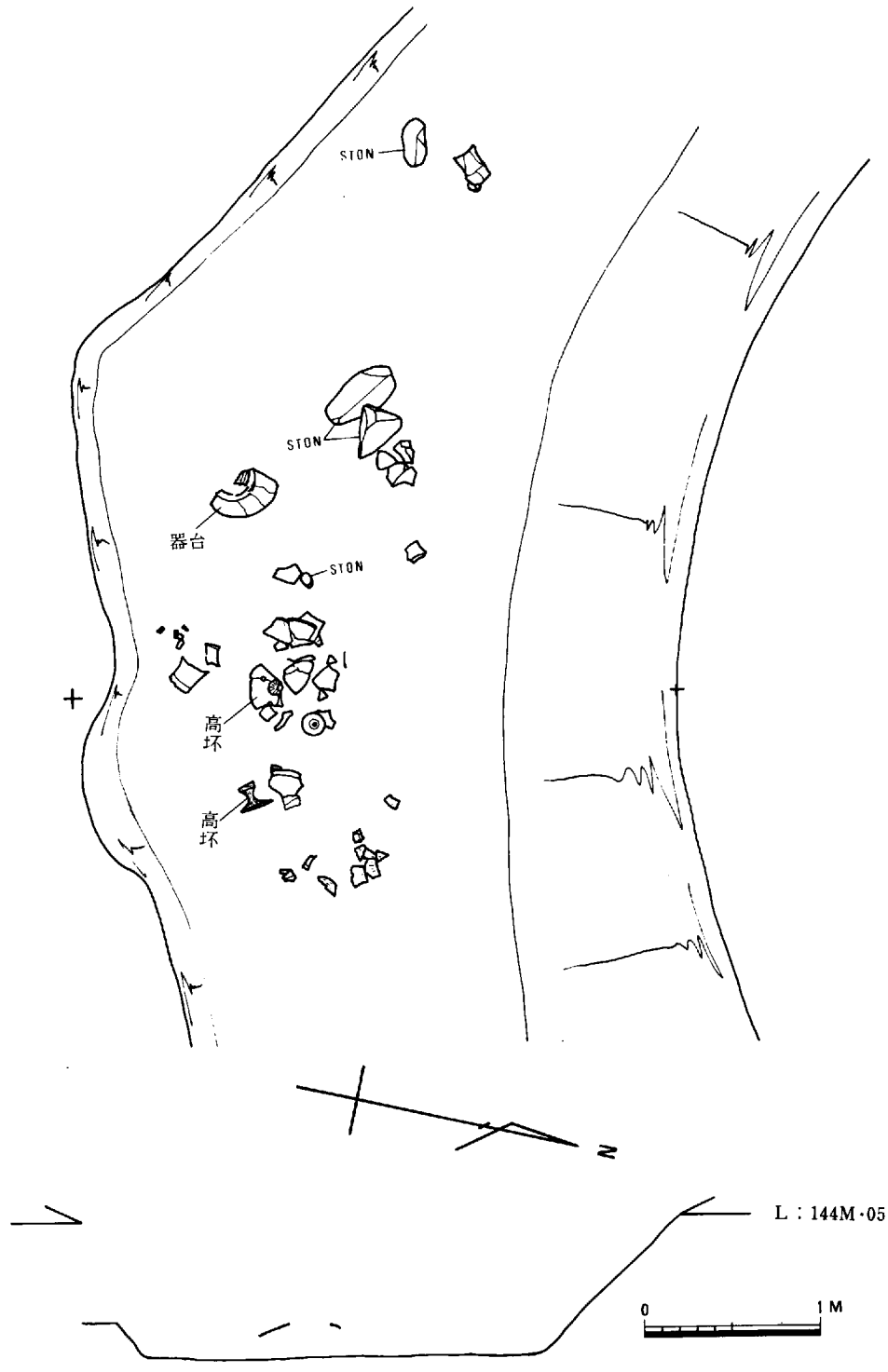


1．23－L　8．C－7
2．23－M　9．C－7
3．C－4　10．C－7
4．22－K　11．C－7
5．24－K　12．C－4
6．21－L　13．C－7
7．23－L　14．C－2

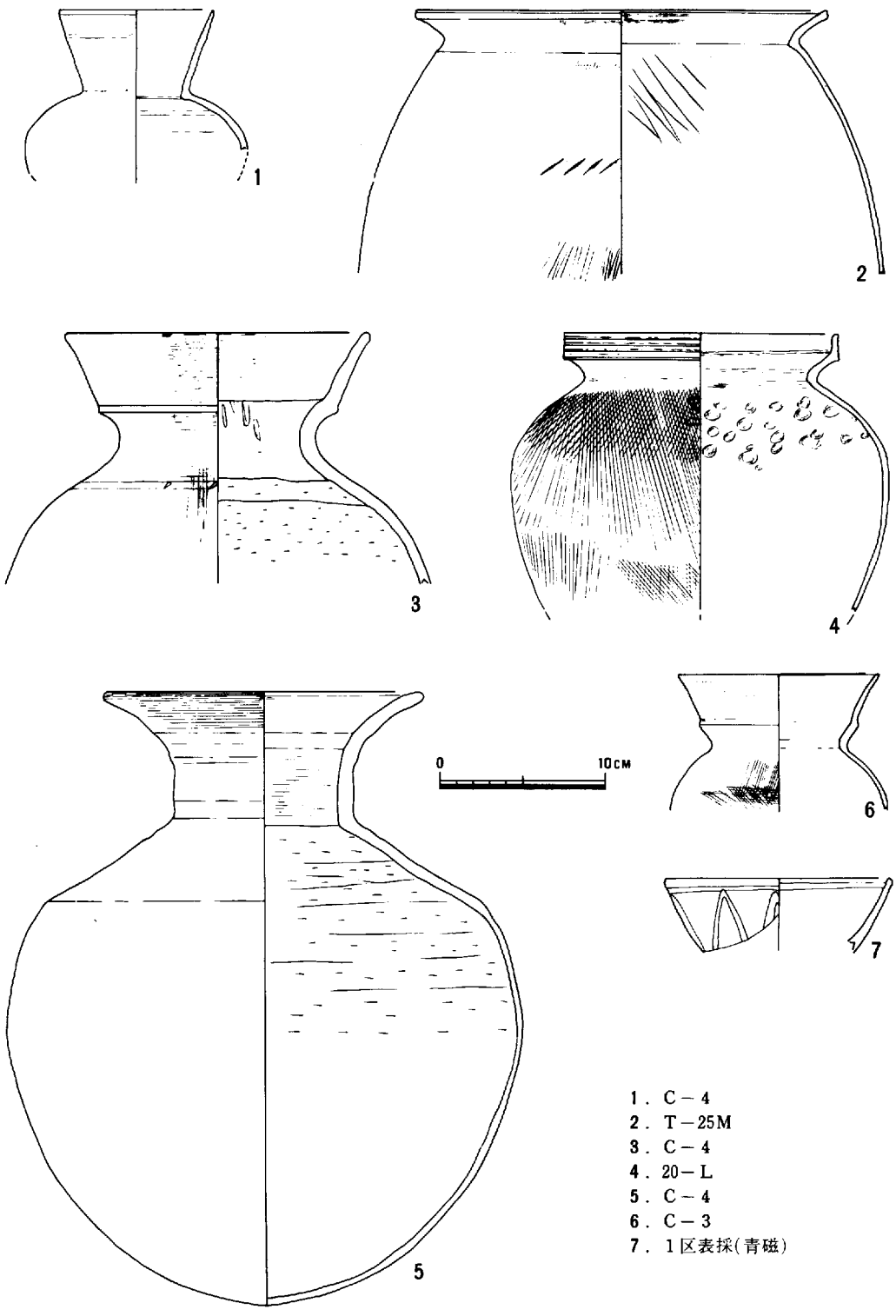
第36図　1区出土遺物



第37図　C－8実測図

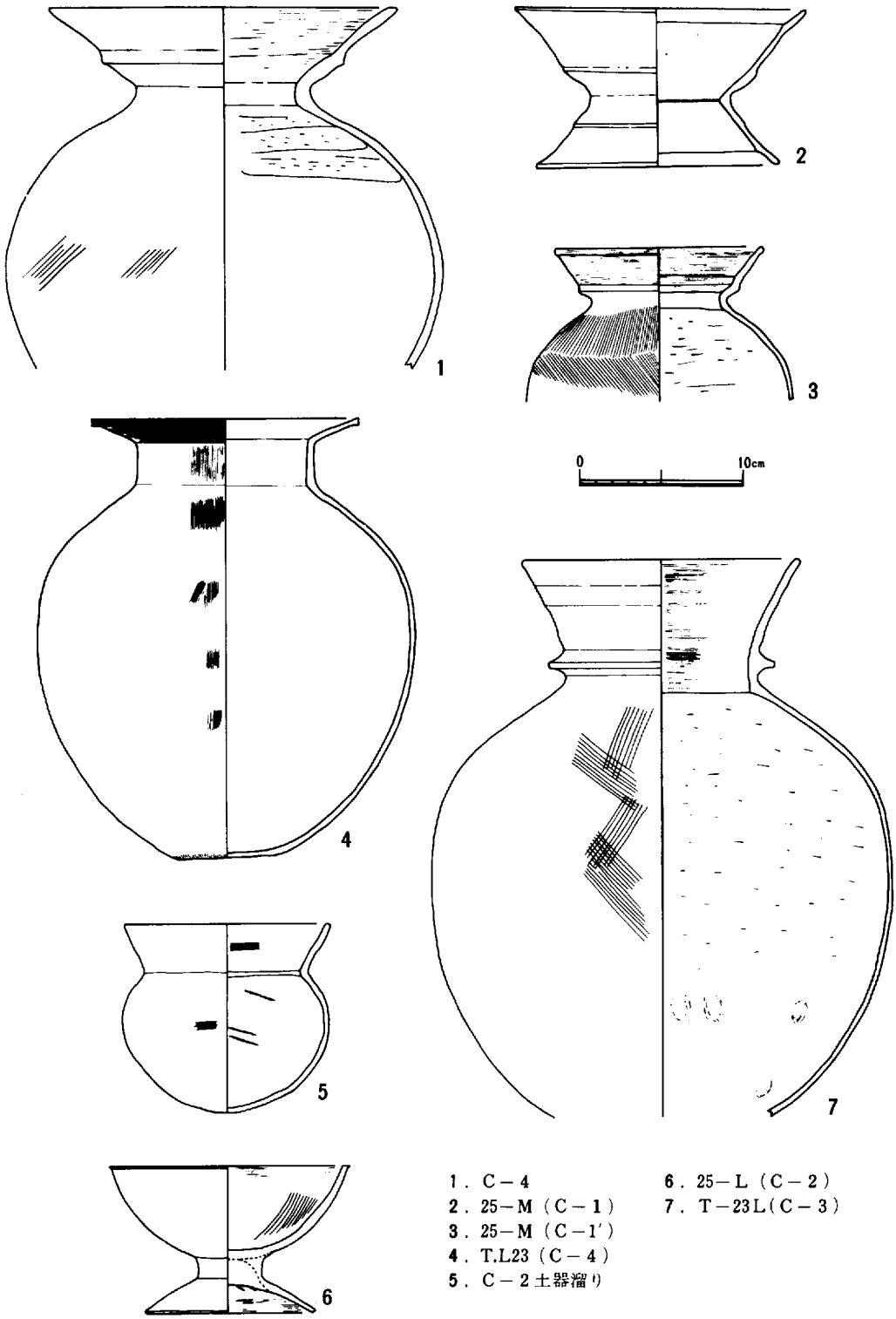


第38図　C－8，南土器溜り



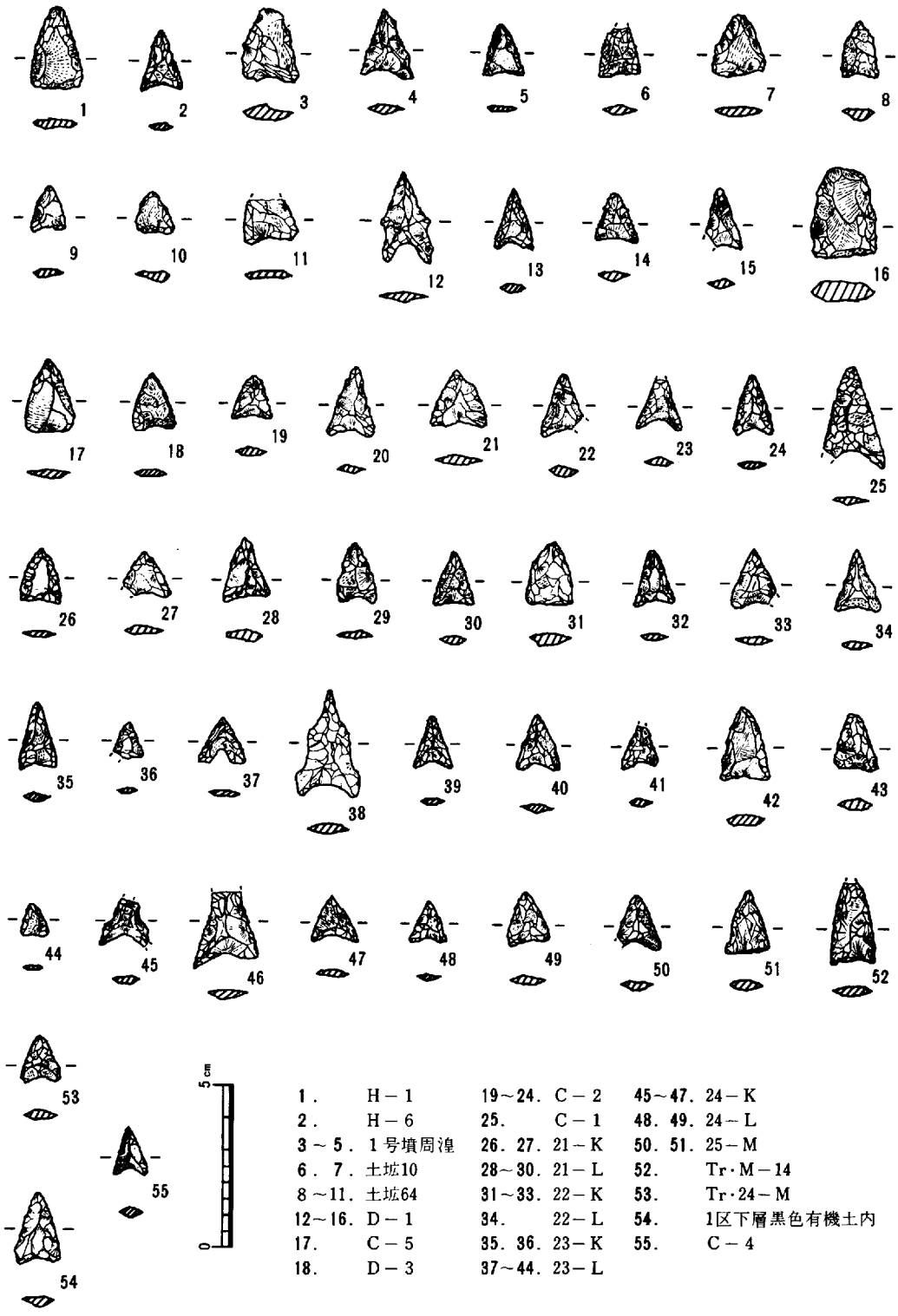
1．C－4
2．T－25M
3．C－4
4．20－L
5．C－4
6．C－3
7．1区表採(青磁)

第39図　1区出土遺物



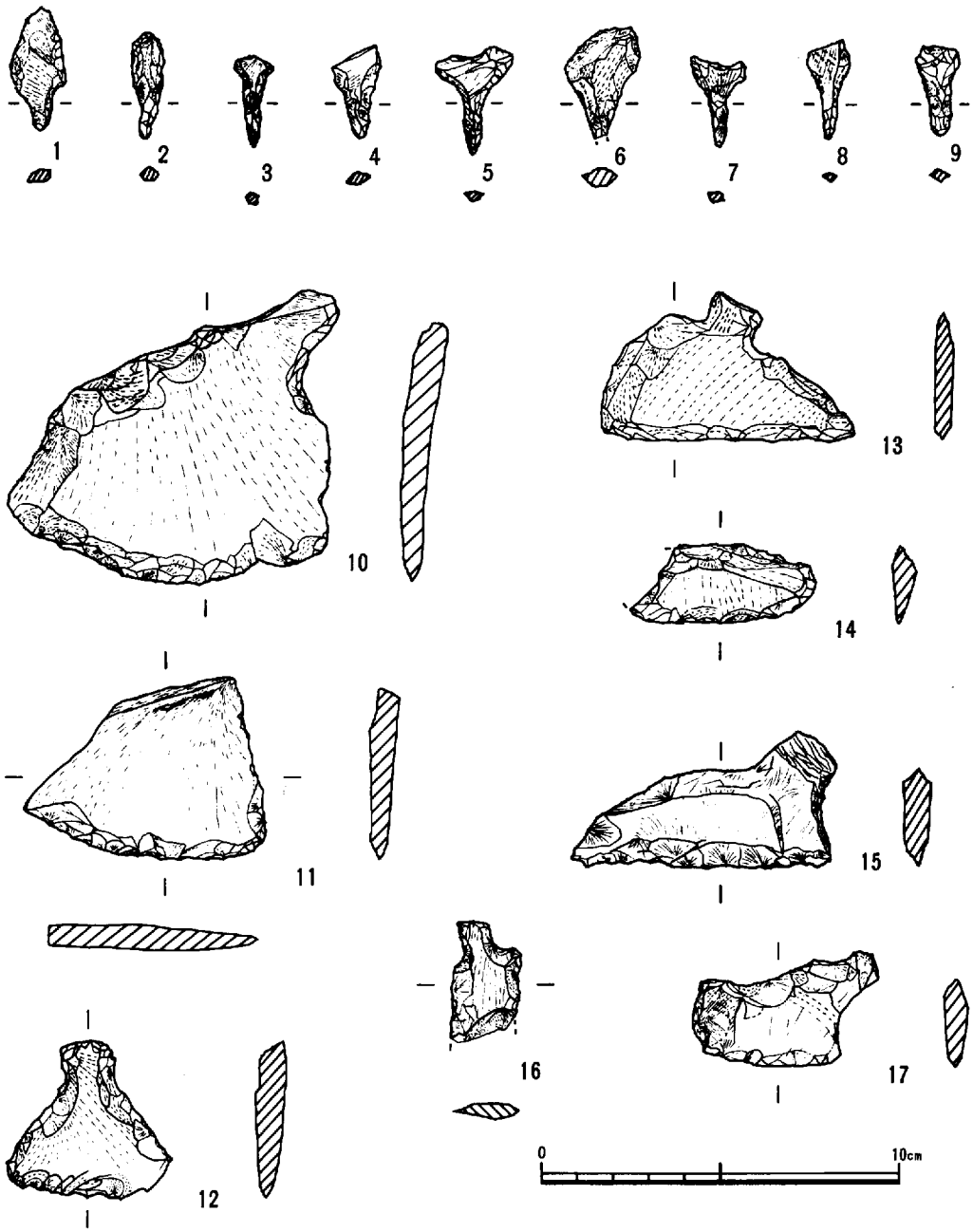
1．C－4
2．25－M（C－1）
3．25－M（C－1′）
4．T.L23（C－4）
5．C－2土器溜り
6．25－L（C－2）
7．T－23L（C－3）

第40図　1区出土遺物



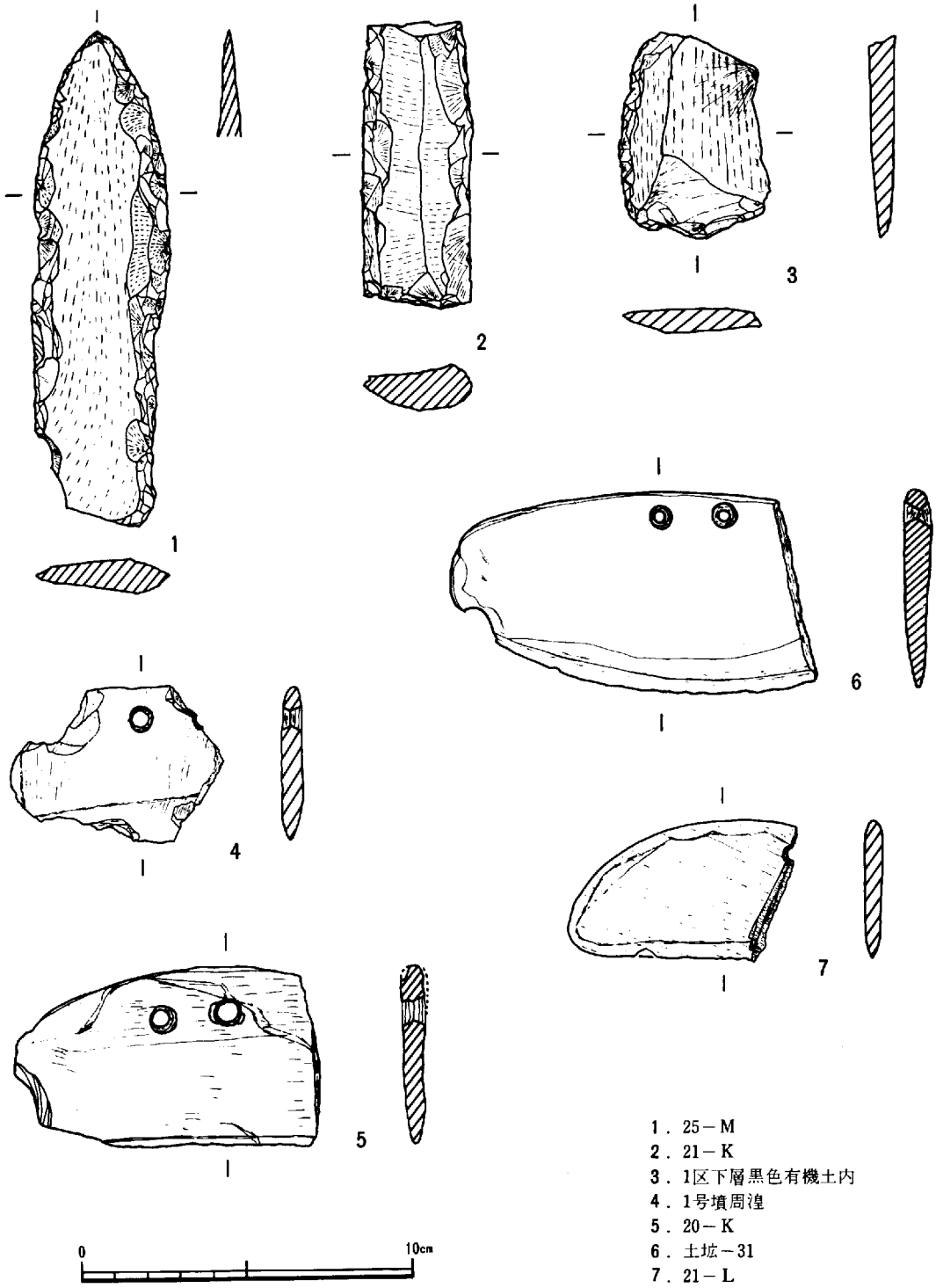
1．　H－1
2．　H－6
3～5．1号墳周溝
6．7．土坑10
8～11．土坑64
12～16．D－1
17．　C－5
18．　D－3
19～24．C－2
25．　C－1
26．27．21－K
28～30．21－L
31～33．22－K
34．　22－L
35．36．23－K
37～44．23－L
45～47．24－K
48．49．24－L
50．51．25－M
52．　Tr・M－14
53．　Tr・24－M
54．　1区下層黒色有機土内
55．　C－4

第41図　1区出土遺物



1．土坑19
2．C－2
3．21－J
4．21－L
5．6．24－K
7～9．14．24－M
10．Tr・L－23
11．23－L（D－1）
12．22－K
13．15．24－K表採
16．C－4
17．22－K

第42図　1区出土遺物



1．25－M
2．21－K
3．1区下層黒色有機土内
4．1号墳周溝
5．20－K
6．土坑－31
7．21－L

第43図　1区出土遺物

6） 石蓋土壙墓・シスト （第16図）

1区で検出された遺構であって，方向はすべて異なっている。なかでも石蓋土壙墓－3，3′はほゞ平行で同一方向で頭位も同じく南東枕になっているように思える。石蓋土壙墓－1も南東枕，同－2は南々西枕，これらの土壙はいずれも円，方形周溝内に切り合い，または入り込む，あるいは周溝下において検出されている。シストについては，周溝内，あるいはそれより外に作られているもの等がある。

このように周溝の内外に作ってはあるが，これらの石蓋土壙墓とシストは時代的に相前後するであろうが，石蓋土壙墓と周溝とは同時であるか否かは明確でない。シスト－3と周溝とでは明らかに周溝埋没後である。しかし，これらの遺構内からは1片の遺物も確認されていないことから明確な時代は不明である。

石蓋土壙墓－1（図版8－1・2）

不整隅丸方形周溝墓（C－7）の南西コーナーで周溝を切って築いている石蓋土壙墓である。方位は北西—南東方向で長径約2.5m，短径0.9mを示す隅丸長方形のプランを示している。さらに蓋石を取り除くと長辺約1.8m，幅約0.3mの土壙が検出された。この土壙は浅く床面はほゞ一定でほゞ水平に近いものであった。南東小口の東コーナーに河原石(図版8－2)が1つ置かれていた。位置はずれているが枕石の可能性であるか否かは明確でない。また1片の出土遺物も確認されなかった。従って時代決定の決めてとなるものはただ周溝との切り合い関係にたよるものであって，切って築かれていることから見て，周溝築造後ということになる。

石蓋土壙墓－2（第47図・図版9－1，2）

円形周溝墓（C－8）の東側で周溝内に位置する。周溝の埋土から石が露呈していた。そのため掘り方，および周溝との前後関係を確認するため拡張した掘り方の肩部は周溝底面において確認された。しかし土壙の南側で周溝の一部切っている部分がある。

土壙の平面形は長径2.75m，幅0.68mの不整長方形のプランを示し，2段の掘り方がなされていた。埋葬部土壙は長さ1.9m，幅は北側17cm，南側32cm，深さも南が浅く9cm，中央部は12cm，最深部で15cmで，中央部より北側の最深部にかけて約80cmの間には大小の礫の敷設がみられ，また両側には角礫がおかれていた。しかし南側では埋葬部の中は2コの石が整然と並べられている。この石は明らかに枕石と思われる。さらに1片の遺物も出土していない。

石蓋土壙墓－3・3′（第48図，図版15—2，図版16—1，2）

方形周溝墓（C－3）の北東辺周溝内の北東壁下と同辺周溝底下において検出された石蓋土壙墓である。方向は双方共に北西—南東で石蓋土壙墓3の土壙については長径1.55m，中央部

幅38㎝，深さは平均25㎝で南東側がふくらんだ不整長方形のプランを示し底は逆に北西が南東にくらべてやゝふくらみ，底はほゞ一定している。また両側の部分が２段の掘り方になっていた。従って蓋石も１部で二重になっていた。それに上部蓋石は，土壙掘り方とは逆に北西が大きな石を用い南東になるにつれて小さくなっている。さらに３′は３の拡張時点において発見されたものである。３′の土壙は中央部がすぼんで南東部が丸味をおびてふくらんだ不整長方形をなしている。さらに３′は２段の掘り方で南東小口は１段となっていた。底面プランは，わずかに南東が広く，底もほゞ一定して平である。

掘り方は長径1.75m，中央部の幅45㎝，深さ24㎝を計ることができた。蓋石についても３とは異なり，蓋石は南東が広く重ねられていた。下段においてはほゞ平均的にそろった石を用いて整然と蓋がなされていた。

この２つの石蓋土壙墓は多少の高低差はあるにしても同時期か相前後して作られたものであろう。また周湟掘り下げ中において何ら変化は認められず，石蓋土壙と周湟との関係について，周湟（Ｃ－３）より古いか否かは明確ではなく，今後検討を要するところである。

シスト－１（図版10－１・２）

方形周湟墓（Ｃ－３）と溝（Ｄ－１）との間において検出された箱式石棺である。土壙掘り方は東がふくらんだ長方形プランを示し東北東－西南西の向きで，長辺約２m，幅0.9mで蓋石は大小９枚の石が用いられている。両小口にはなく側石の一部も用いられていなかった。南側には蓋石より大きな板石２枚よりなっている。埋葬部の長辺約1.8m，幅約0.5mを計った。石材はいずれも角礫である。シスト－１内においては１片の遺物も出土していない。

シスト－２（図版11－１・２）

シスト－２の西側で，Ｃ－３の東コーナーに位置している。Ｃ－３周湟掘り下げ中確認されたものであって，不整隅丸方形のプランを示している。蓋石は１枚で，側石は２枚が立てられ，南西側では３コの石が積み重ねられていた。またその対辺には用いられていない。底部は一定で平らになっていた。

シスト－２はＣ－３の埋没後に作られたのであろうが，Ｃ－３検出時にこのシストのプランは確認されていない。いずれにしてもＣ－３を切っていることからいってシスト－２はＣ－３より新しいものであるといえよう。

シスト－３（第49図，図版12－１・２・13－１）

Ｃ－３の南辺で検出された箱式石棺である。掘り方は長方形プランを示し，長辺2.8m，短辺1.1m，深さ35㎝を計る。石棺は胴張りの長方形を示し長さ2.1m，幅30～45㎝，深さ推定20㎝を計る。長軸の方向は磁北から55度東に振っている。蓋石は数個の径80㎝程度の大石と小児頭大の小石を使用し，側石は，長さ40～90㎝の石で，床には径10㎝程度の平石を使用してい

る。石材はいずれも角礫である。遺物は全く出土していなかったが，掘り方がC－3を切っていることから，C－3よりも新しいと言える。

シスト－4（第50図，図版13－2・14－1・2・15－1）

シスト－3の東で検出された箱式石棺である。掘り方は隅丸長方形プランを示し長辺1.2m，短辺0.8m，深さ35cmを計り，長軸の方向はほゞ東西である。石棺の大きさは長さ60cm，幅15cm，深さ20cmを計る。蓋石には大きな2枚の平石と小児頭大の石を使用し，側壁には平石を2段に積み上げている。遺物は全く出土していないので時代を決定することはできない。大きさからみて小児用墓と考えられる。

シスト－5（第51図，図版18－1）

C－1の南辺で検出された箱式石棺である。掘り方は不定形な隅丸長方形プラン，逆台形セクションを示し，長さ1.9m，幅65～90cm，深さ30～35cmを計る。長軸の方向はほゞ東西である。石棺の大きさは損壊が激しく，いずれも推定で長さ1.3m，幅40cm，深さ25cmを計る。蓋石と考えられるものは3枚の大きな平石と大人頭大の角礫で，側石と考えられるものは南側壁が見られるだけである。遺物は皆無で，C－1を切っていることからC－1より時期は新しい。

シスト－6（第52図，図版18－1）

シスト－5の南で検出された石蓋土壙である。掘り方は隅丸長方形プラン，逆台形セクションを示し，長さ1.9m，幅90cm，深さ50cmを計る。長軸の方向は磁北から60度東に振っている。蓋石は数個の角礫を使用している。遺物は皆無であるが，C－1よりも新しいと考えられる。なおC－1は古墳時代初頭に比定できる。

7） 墳　墓

1号墳（第44図，第45図－1～20，図版4－2）

1区西端の中央よりやゝ北側に位置する直径18.5mの円形で，周溝は狭い位置では幅約1.5m，深さ約0.45m，広い位置においては幅約2.35m，深さ約0.65mを計る。さらに中央部の主体は1基の箱式石棺を検出することができた。本古墳は水田耕作のための削平を受けてまったく盛土は取りさられていた。また東より4分の3の位置を現水路によって切られている。従って一部分が消えさっている，がしかし，主体部の蓋石，側石の数枚が抜き取られた状態で存在していた。

主体部は南西方向で，東側が狭く，西側がやゝ広くなっていた。長さ2.66m，東側の幅65cm，中央部は99cm，西側80cmという胴張りのプランを示している。石棺はほぼ掘り方一杯に組み込まれている。蓋石は数枚が使用されていたのであろうが，存在するものは1枚だけであっ

た。側石幅は東35㎝，西57㎝の石で，床面には東小口石に使用されている程度の平石をもちいている。さらに，板石のすきまにはこぶし大の河原石がつめ込まれていた。石棺内よりは第46図の鉄製品が出土しただけにすぎなかった。

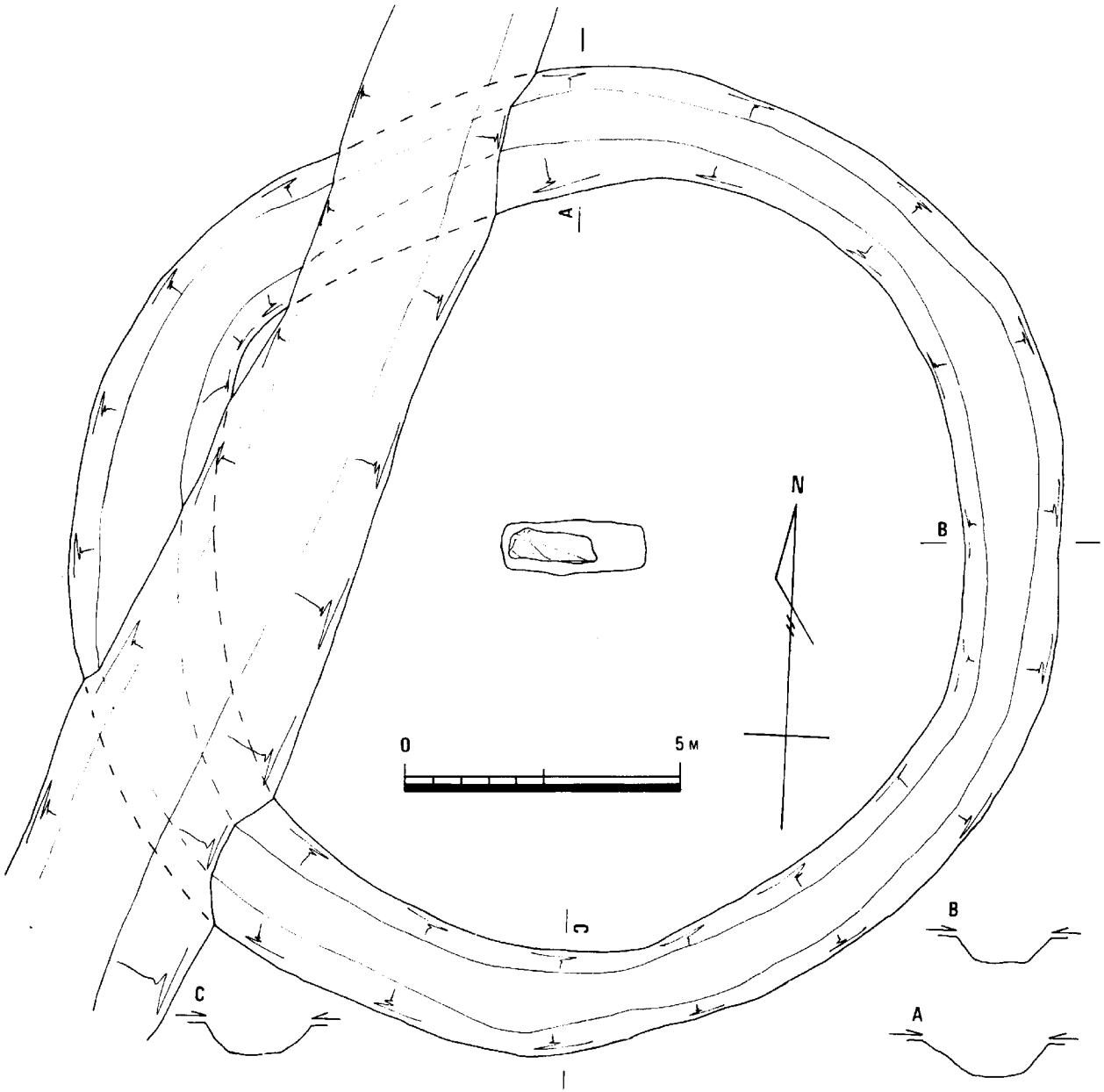
鉄鏃は以下のように分けることができる。

1類	1
2類	2，3，6，12，15，16，
3類	4，13，
4類	5，
5類	7，
6類	14，
不明	17 ～ 20

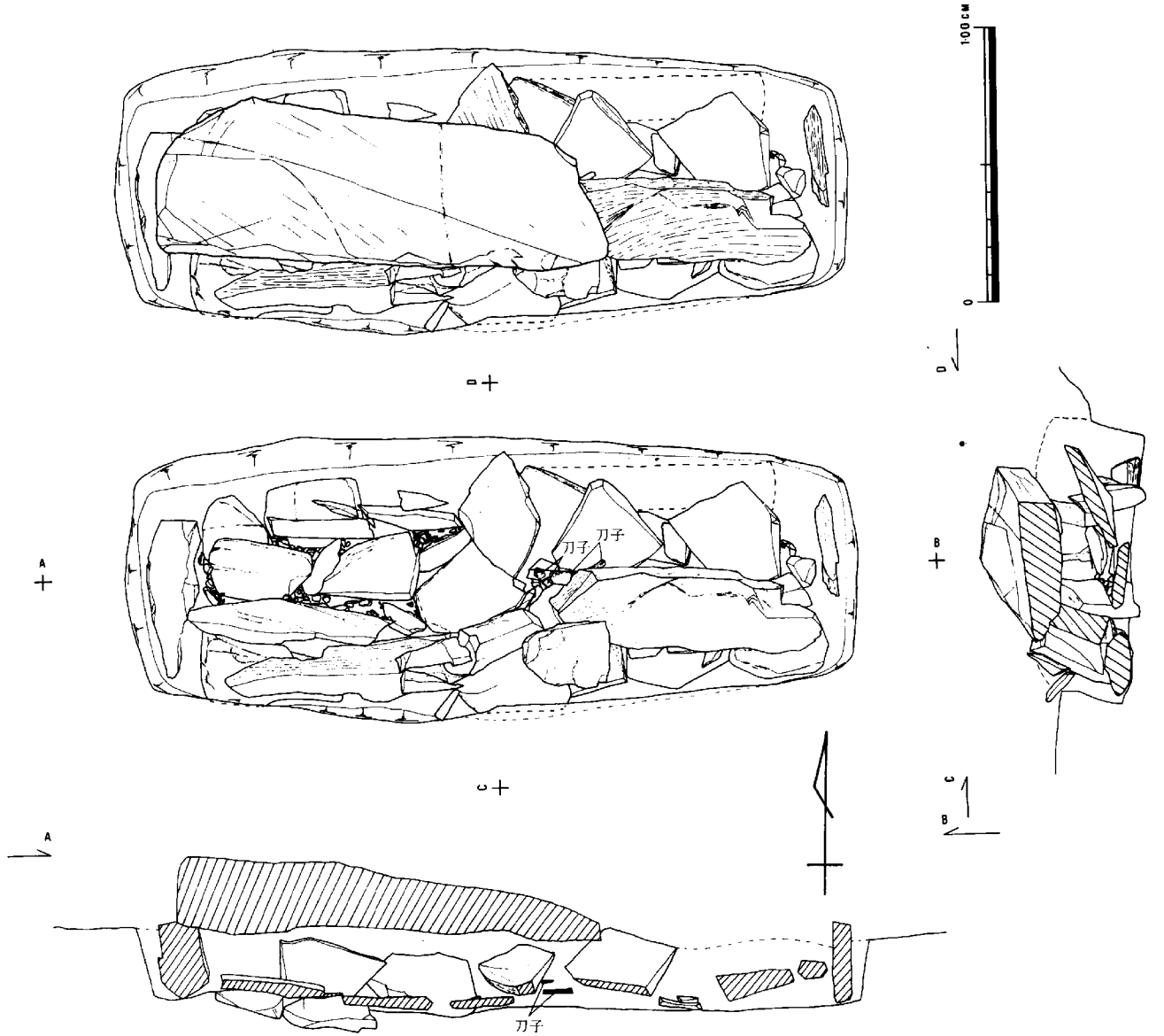
以上のように分類した鉄鏃はすべて有茎式のものである。1類～4類は平根式で，3～6，12，13，15，16には茎が見られ，1～4，6，12，13，15，16には逆刺を有し，5，7もわずかに逆刺がみられる。5類は尖根式，6類は先端が切り出しナイフ形を呈している。断面形の上では，1，5，7，12，13，16は平造り，2，15は片丸造り，6は両丸造りの形態を示し，3，4は三角形を示している。なお1は中央部に縦0.3㎝，横0.2㎝の透し穴が開けられている。さらに4，5，6，12，13，16，18には茎の部分に桜皮の存在が認められる。特に13には矢柄の竹が残っていた。そのほか前記番号にもそれらしきものの付着がみられた。14の茎より上約5.5㎝の間は鉄板を丸く貼り合わせて作っている。この14においても，中間より下全体に桜皮が螺旋状に巻かれていたのであろう。しかし，現在では一部分に螺旋状に痕跡が残っているのみである。刀子（8，6，10）はいずれもわずかな破損で，8においてハバキが残存している。なお現在長47㎝，刃巾は最大4㎝を計り，わずかに反りがでている。9の存長は39.8㎝，刃巾は最大4.3㎝を計り，反り方は逆になっている。10の存長23.5㎝，刃巾最大2.3㎝を計り，これも9と同じくわずかな逆反りになっている。鉇（11）は現存長5.8㎝の破損しているものが存在するのみである。

中世墳墓（第53図，図版17）

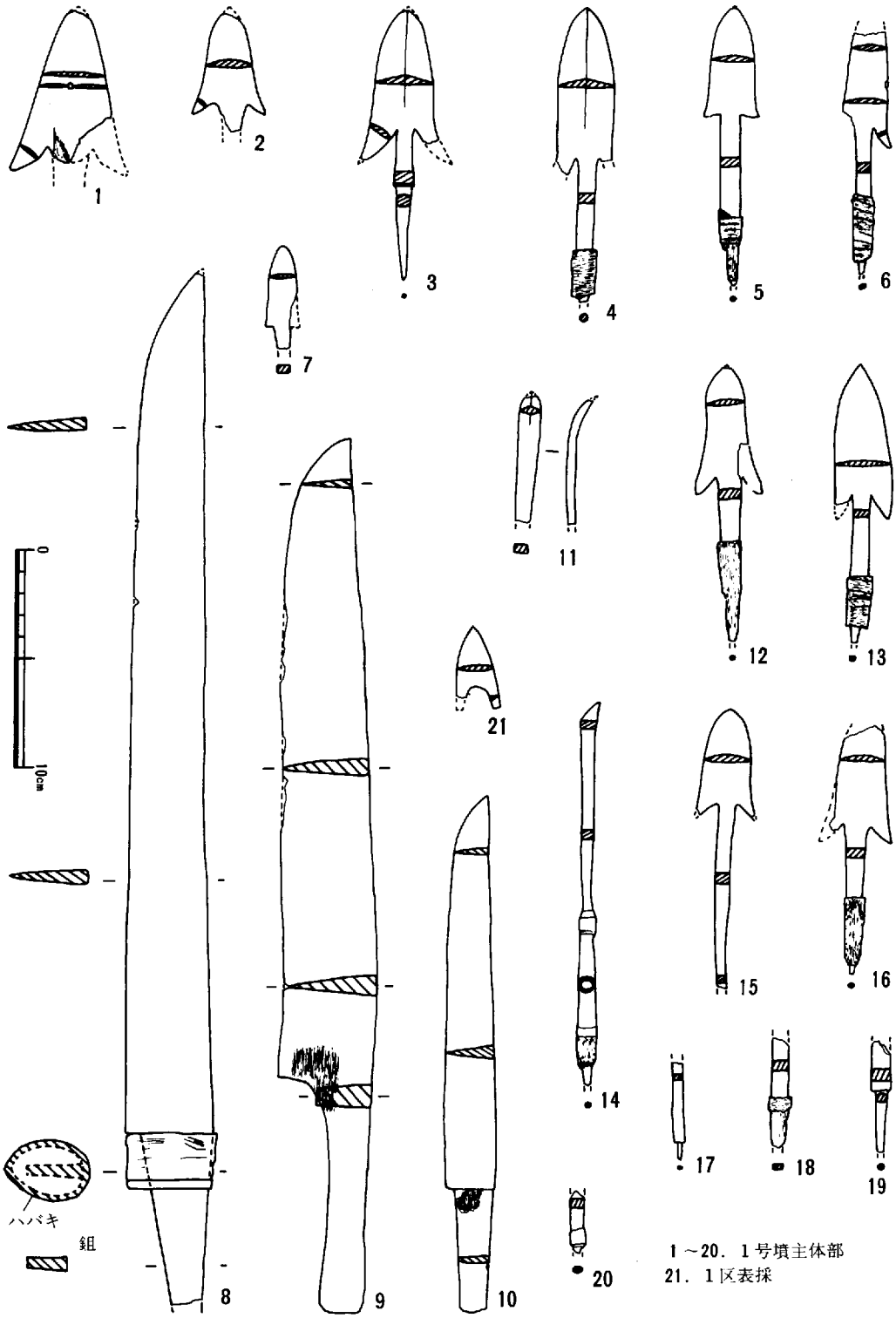
トレンチ21に接して検出された石蓋土壙である。掘り方は楕円形プラン，逆台形セクションを示し長径1.5ｍ短径推定1.1ｍ，深さ35㎝を計る。蓋石は3枚の平石と数個の長い石とを使用している。長軸の方向は南北である。床面の北西端には4個の土師質小皿が副葬され，さらに小皿の周辺から漆器片及び鉄片が出土している。小皿（第54図）はいずれも糸切り底である。遺物からみてこの墓の時期は平安時代末期に比定したい。



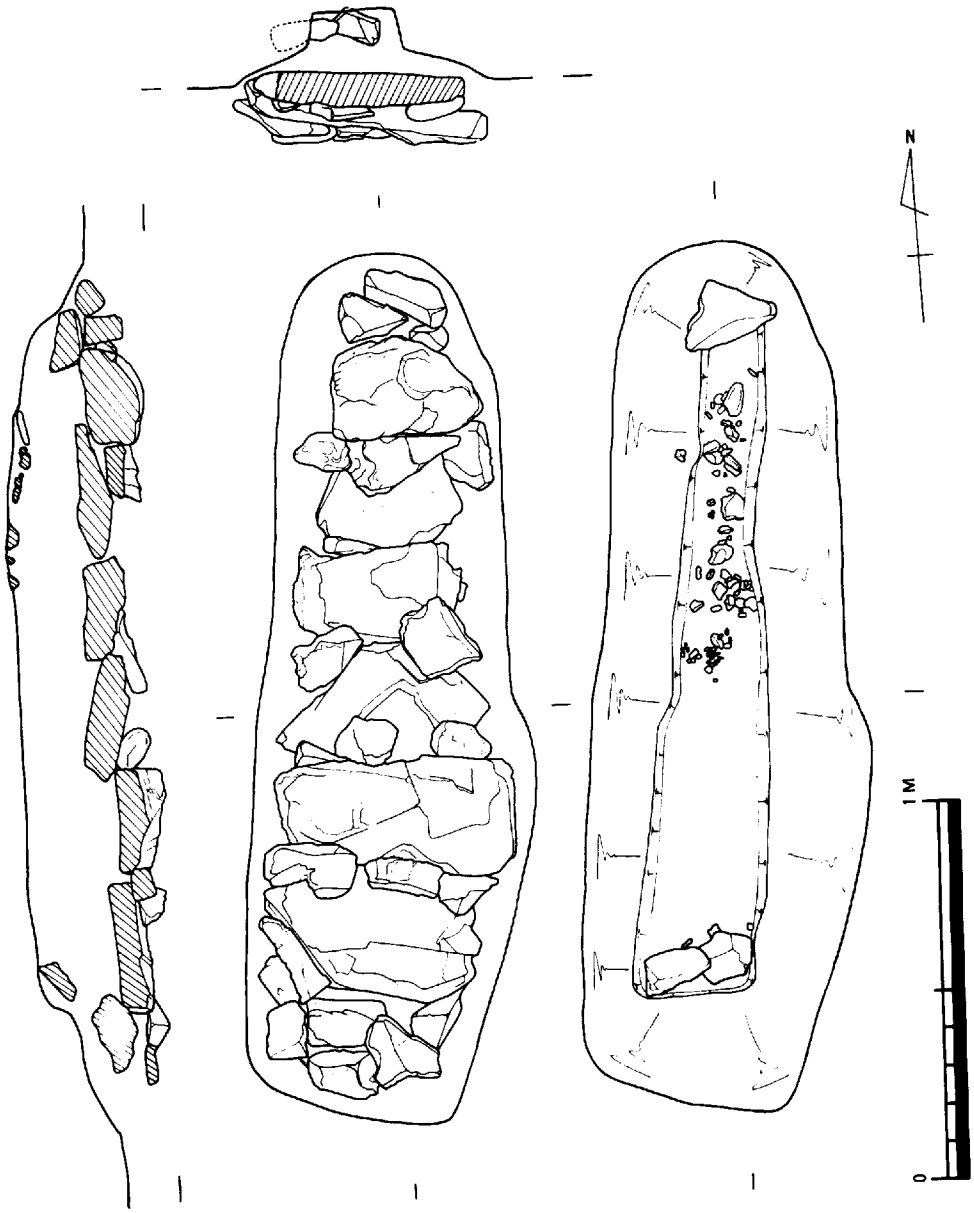
第44図　1号墳実測図



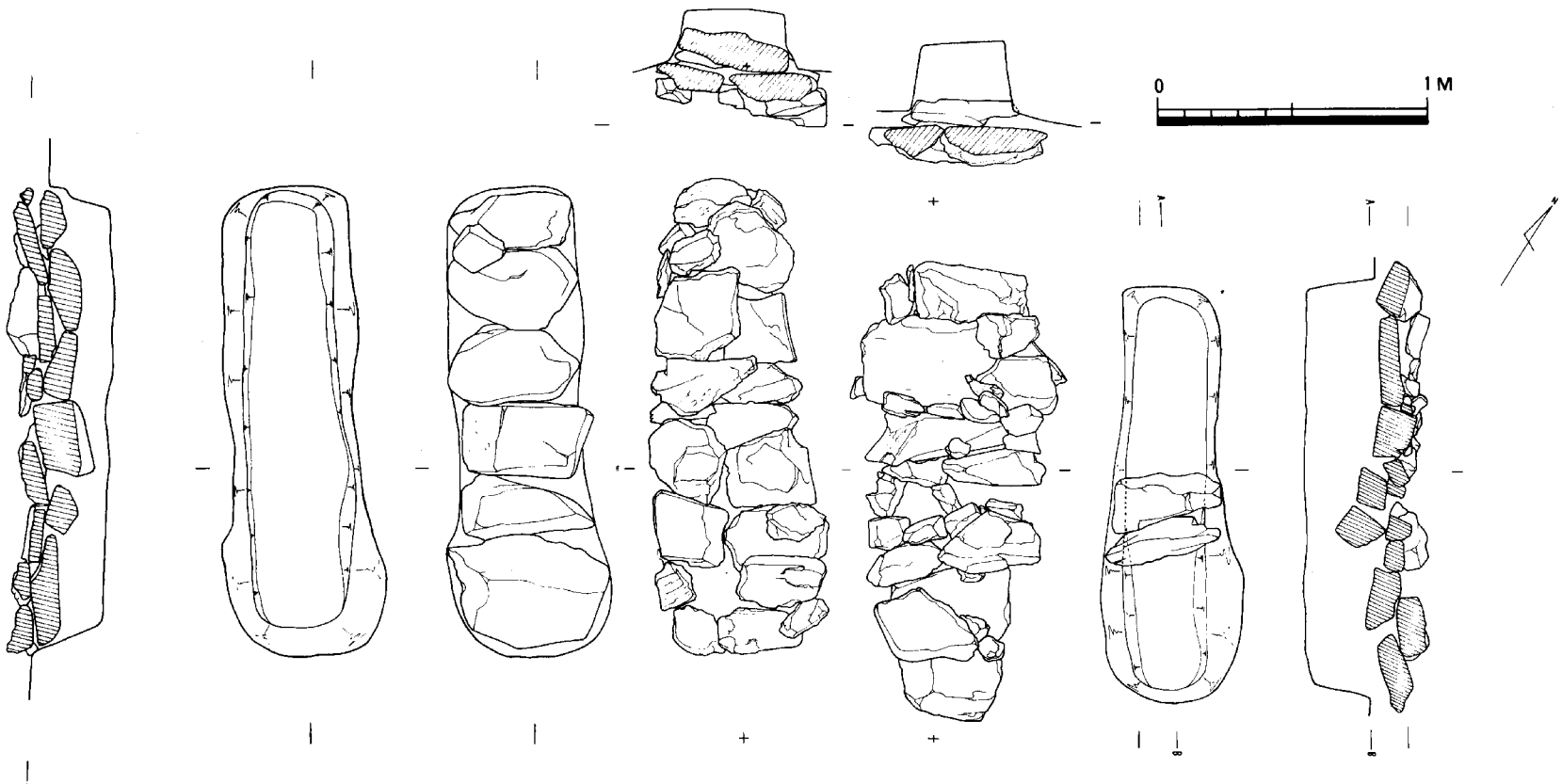
第45図　1号墳 主体部実測図



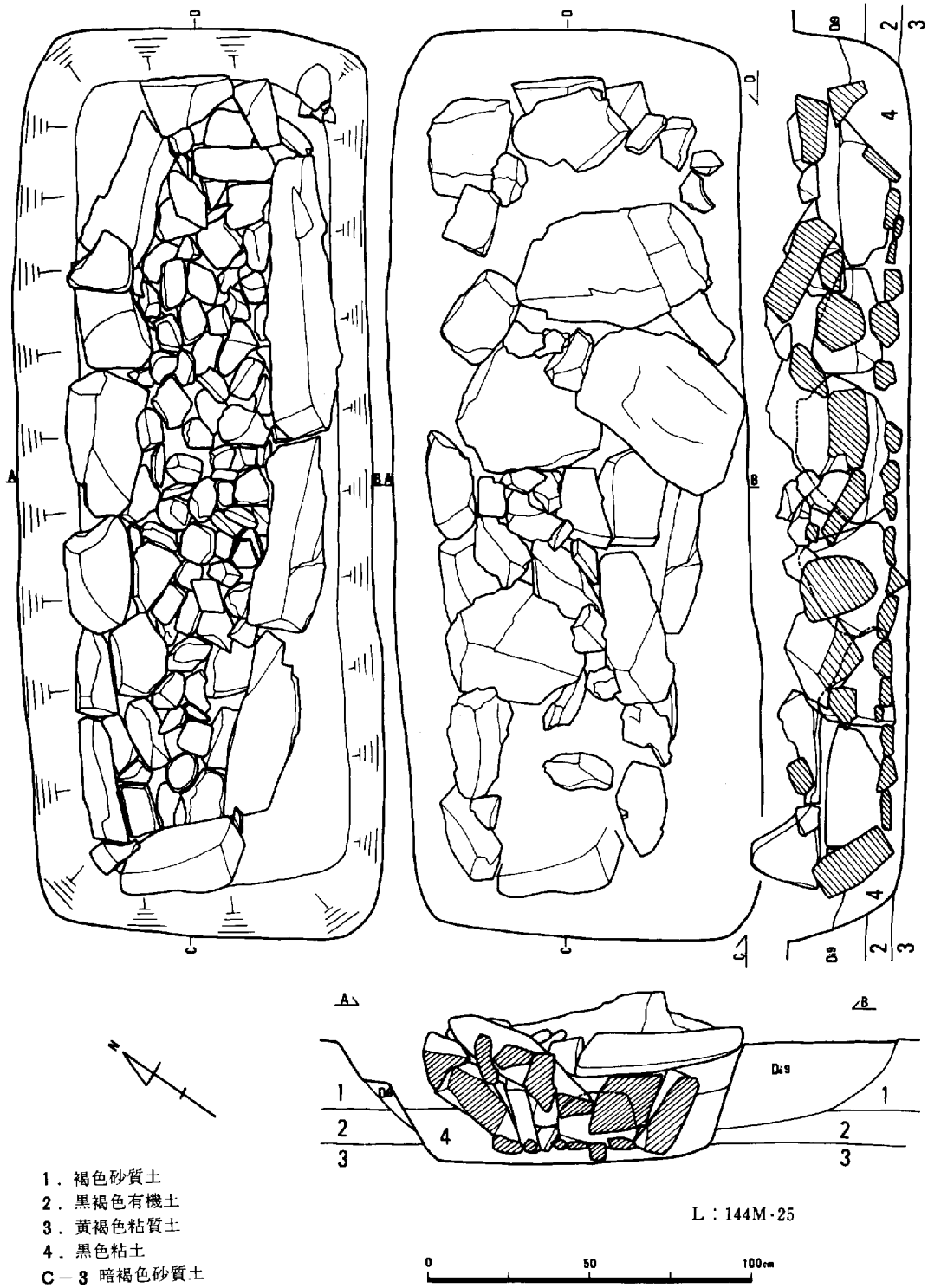
第46図　1号墳主体部出土遺物 etc.



第47図　石蓋土坑墓－２ 実測図

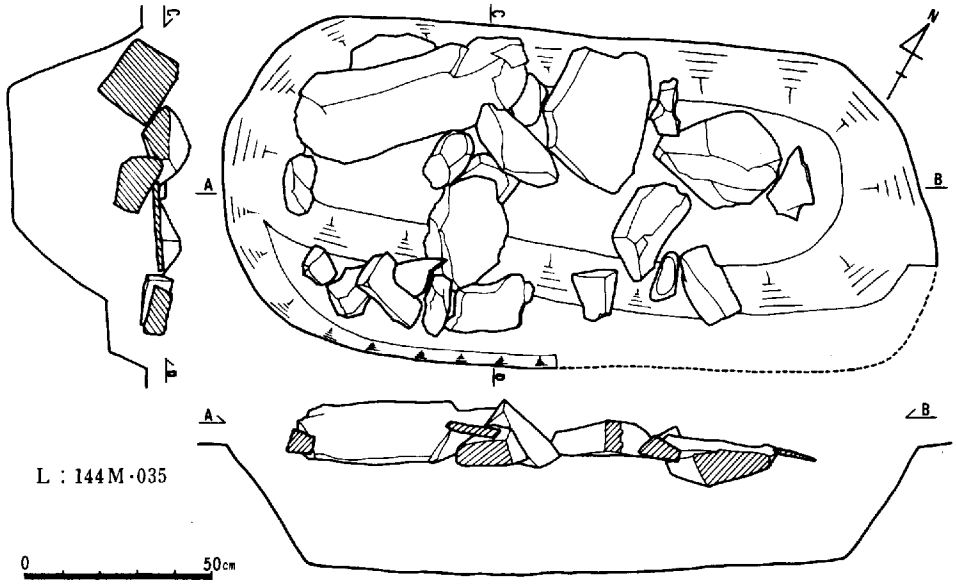


第48図　石蓋土壙墓－３・３′（左－３′・右－３）実測図

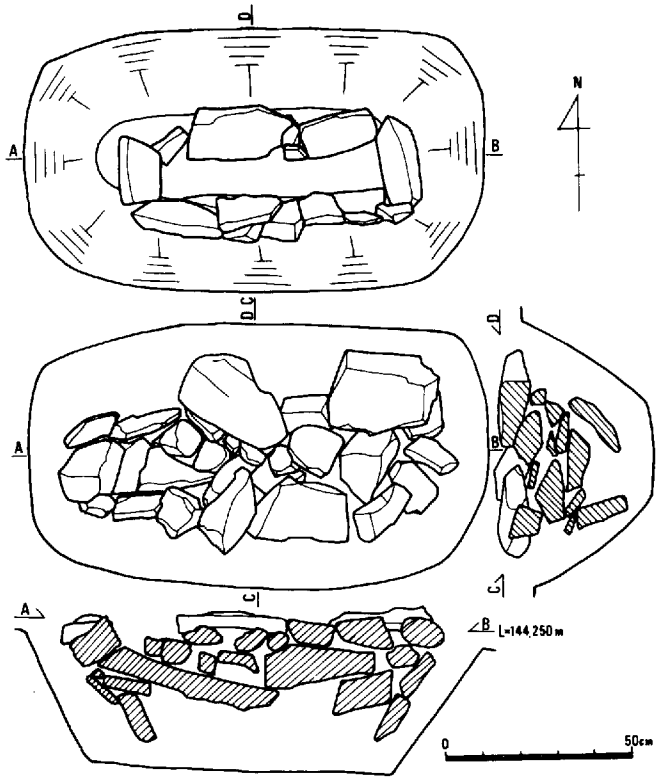


1．褐色砂質土
2．黒褐色有機土
3．黄褐色粘質土
4．黒色粘土
C－3 暗褐色砂質土

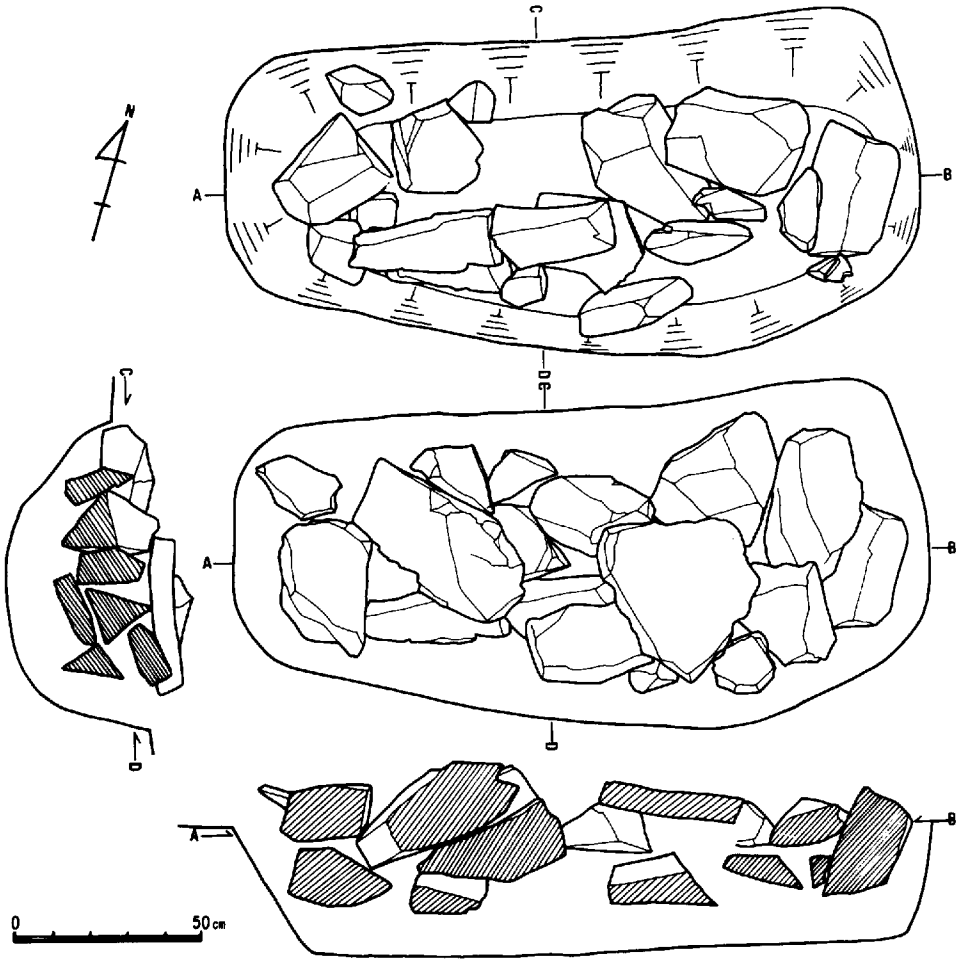
第49図　シスト－3 実測図



第52図　シスト－6 実測図



第50図　シスト－4 実測図



第51図　シスト－５実測図　レベルは，143,835m

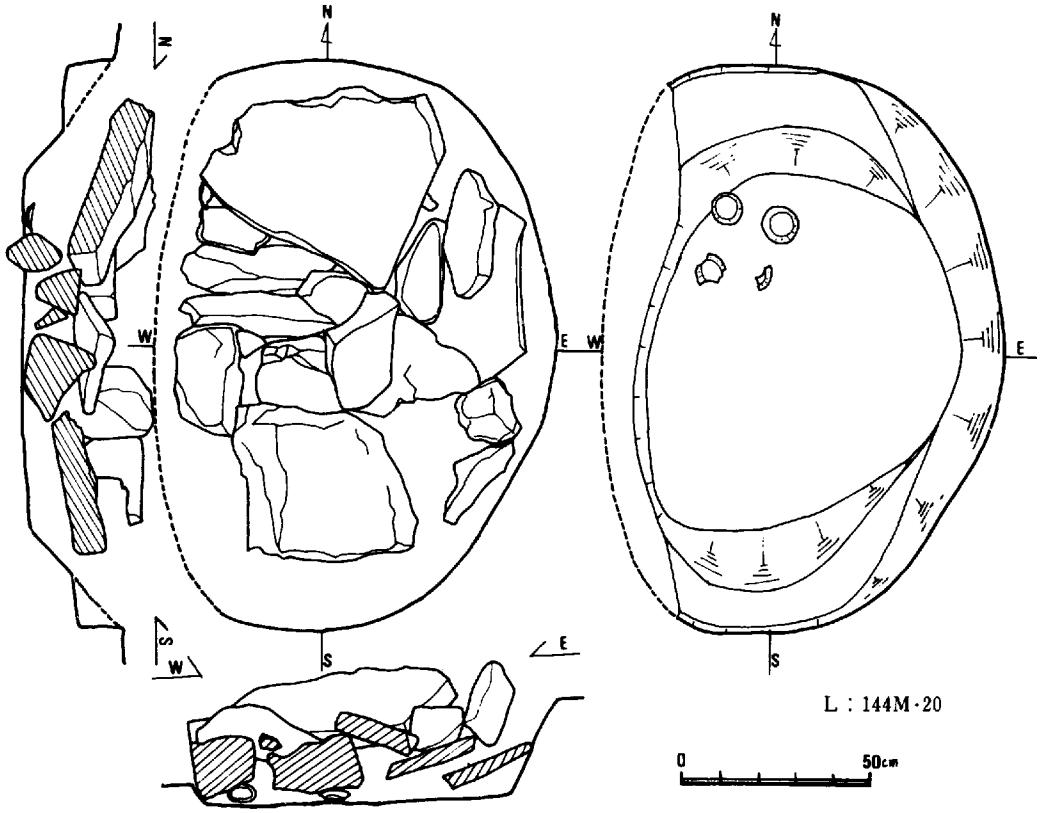
6）　その他の遺構

D－１（第８図），**D－１内流入石**（第15図）（図版６）

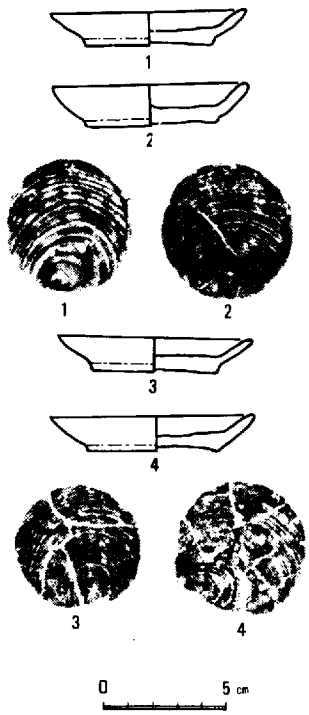
１区を「く」の字型に曲って北東より南西に流れているものである。従って溝は用地北東端がやゝ高く，順次南西に行くにつれて下がって行く。底面は幅が30㎝～80㎝前後の広さであることが確認され，ほゞ平坦で一部北東端では丸底形に近い形になっていて，凹凸はあまり認められなかった。

断面形態は，逆台形のプランを示している。現状での深さは50～120㎝前後で切り込みの肩部は，調査区域全面が水田で削平されているために不明である。よって検出面においては，最狭約110㎝，最大約200㎝を示している。なお溝は，円型，方型周溝Ｃ－２，Ｃ－８とを切って蛇行して流れている。

また溝の機能については，いずれにしても人為的な条件によって生活に関連した用・排水路



第53図　中世墳墓実測図

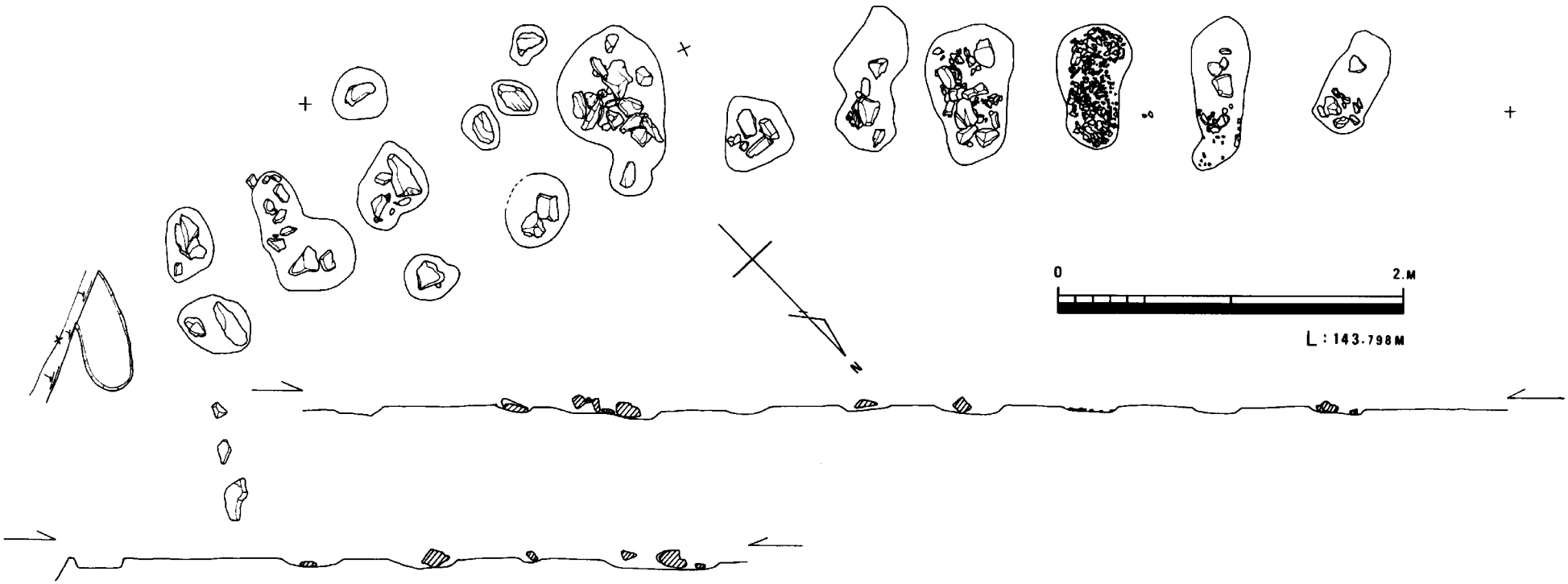


第54図　中世墳墓出土遺物

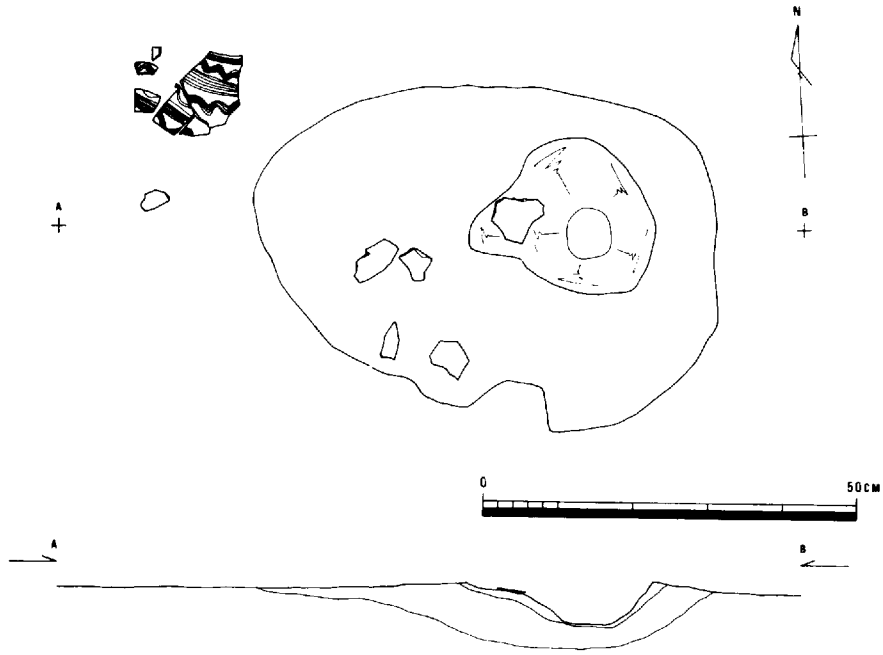
と考えるべきである。さらに溝内よりは弥生時代～古墳時代の遺物が出土しているがいずれも溝の埋没にともなって流入したものである。

D－1内流入石については落ち込んだ石は，削平と関係があるのかもしれない。検出された延長約40.5mにおいて，シスト，石蓋土壙墓に使用されている石材と同一のものである。従って削平時点においては付近から出る石を埋没してはいるものの溝状に窪んだ箇所に無造作に落し込んだものである。しかしこの石材がシスト，石蓋土壙墓に使われていたか否かは不明確である。

不明石溜り（第55図，図版５－１）１区の東南の位置に存在する，やゝ「く」の字型に北西～南東に縦列に並んだ不定形プランを示した掘り方で，掘り込みは極めて浅く，水田のために削平を受けているため耕作土直下にお



第55図　G–24K　不明石溜り実測図



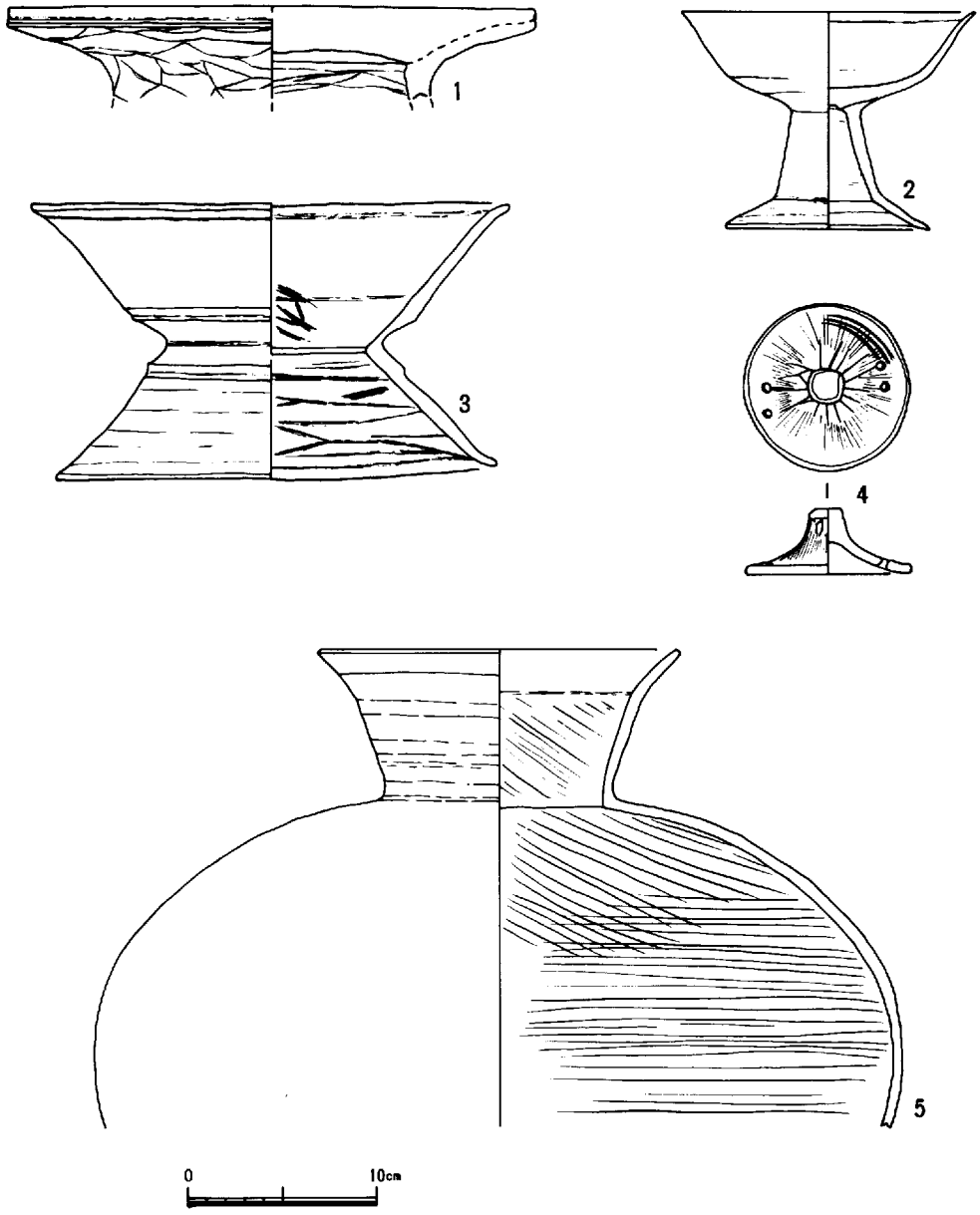
第56図　炉

いて石溜りが検出された。敷石施設を持つ土壙墓であるか否かは検討が必要である。

2．2 調査区

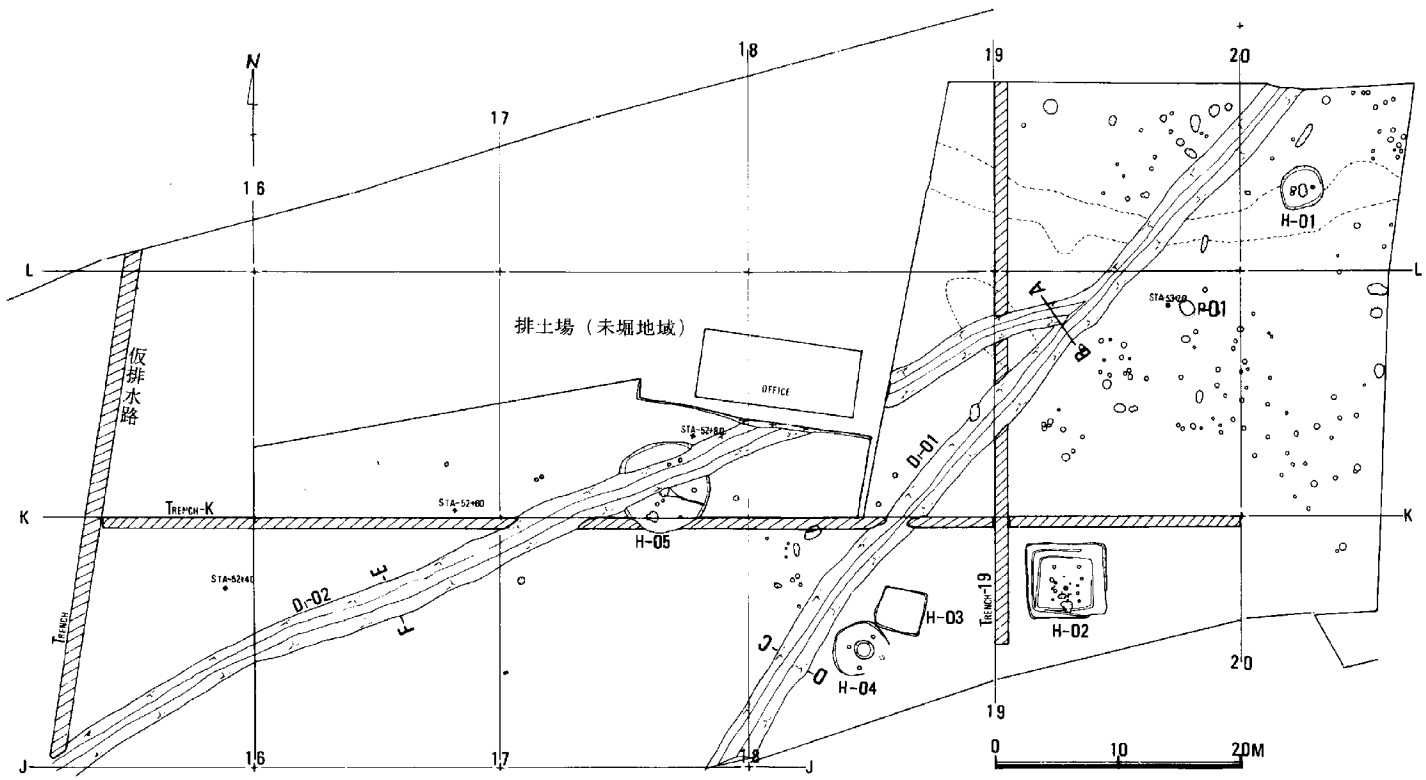
第２調査区は，一色八幡神社の真南にあたり，本遺跡の中央に位置する。15ラインの仮排水路から21ラインの仮排水路までの約 120 m間である。調査対象となる面積は，53m × 120 m = 6360㎡あった。しかし発掘調査前にすでに北側の約５m巾は道路が作られていた。この道路は，中国縦貫道工事に無関係の農業構造改善事業のためのものであるが，後に縦貫道の工事用道路に転用されたため調査は不能になった。さらに調査事務所と作業小屋敷地および発掘時の排土場確保のために２区北西部が調査不能になった。したがって発掘調査を行ない得た面積は，約3,200 ㎡である。発掘開始前は，すべて水田であり，遺物の表面採集は比較的困難であったが，仮排水路・仮側道等の現状が著しく変っている所で丹塗り土器片若干とサヌカイト製石鏃・石匙を拾っている。トレンチ調査は，５月７日から約１週間で２本設定して掘り上げた。トレンチ19は，南北方向のもので，長さ50m巾 1.5 m深さ約70cmを測り，基本的な層序は第１層水田耕作土・第２層赤褐色床土・第３層灰色客土・第４層淡褐色粘質土・第５層黒色有機土・第６層黄褐色粘質土である。遺構は，溝状遺構が２本，第４層を切り込んで認められた。

トレンチKは，東西方向のもので，長さ 100 m巾 1.5 m深さ約40cmを測り，層序は溝状遺構が１本と竪穴住居址が１軒検出された。遺物は，両トレンチとも弥生式土器片多数とサヌカイ



1．22－K　下層黒色有機土
2．23－L　　〃
3．23－L　　〃
4．23－L　　〃
5．24－K　　〃

第57図　1区出土遺物



第58図　2区 遺構配置図

ト片若干が出土している。このトレンチ調査の結果7月23日から全面調査に入った。表土はぎは，重機を使用して約1カ月間で終了した。同時に遺構の検出も終った。この区で検出された遺構は，住居址6軒，溝状遺構2本，ピット及び柱穴が多数検出された。遺構の掘り下げは，1974年1月から行なった。その結果，当初予測した住居址1軒分は，そうではないことがわかり，合計5軒分を確認した。時期は弥生後期のもの1軒，土師器を共伴するもの4軒である。また，溝状遺構は2本で，南北方向の溝が新らしいことが分かり，共伴遺物から古墳時代に比定できる。ピットのなかには2個の袋状のものが確認され，時期は弥生中期に比定できる。柱穴は，建物にまとまらなかった。この区の調査は，3月初旬に終了した。

Ⅰ．竪穴住居址及び出土遺物

竪穴住居址は，5軒確認できた。東からH－01，H－02，H－03，H－04，H－05と呼称したので，順次若干の説明を加えていきたい。

H－01（第60図）

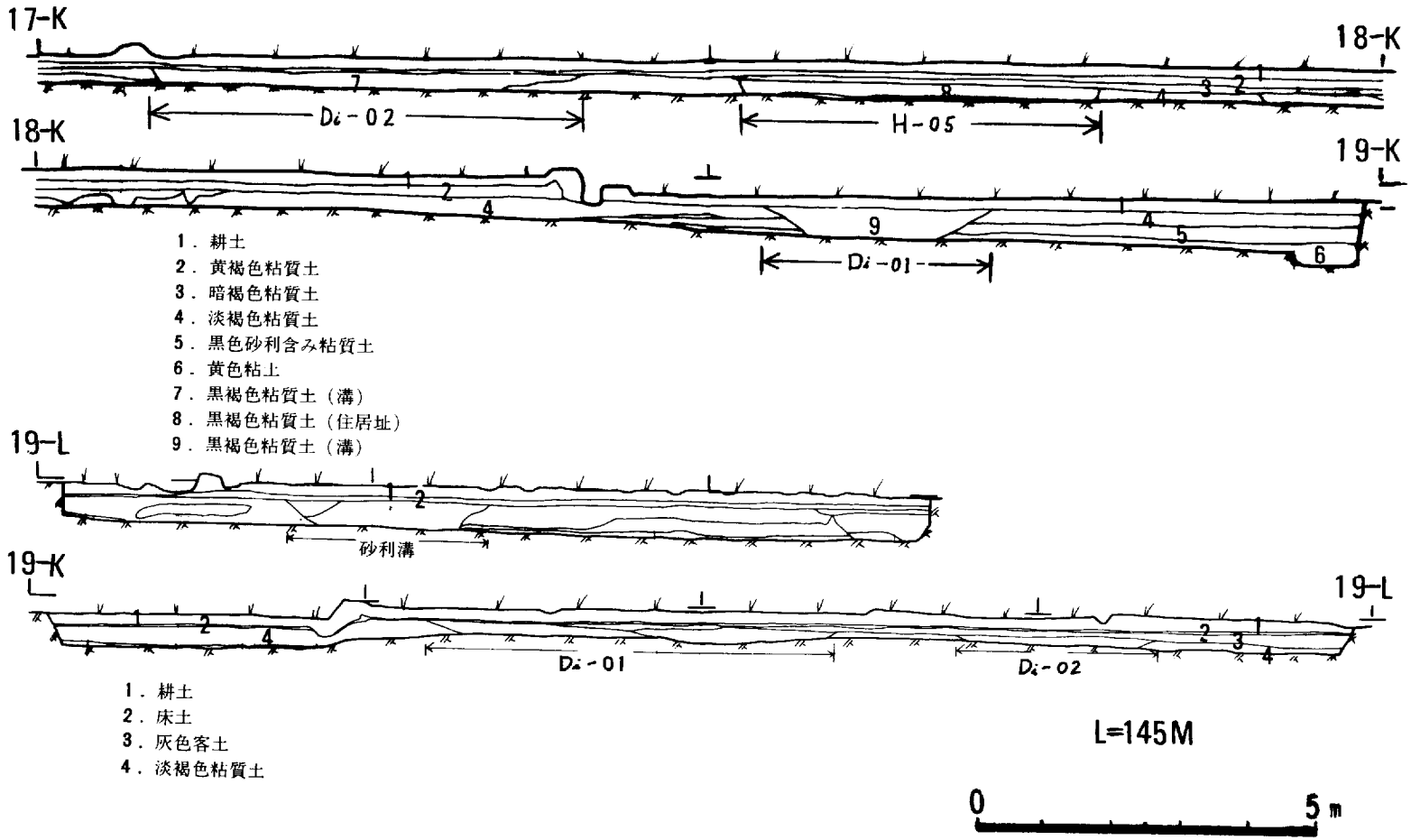
グリッド20－Lで検出された東西3.5m，南北3.2mの隅丸方形の竪穴住居址である。深さは20～25cmで，壁帯溝は確認できなかった。柱穴は，2本あり東のものが直径30cmの円形で深さ40cmを測り，西のものは長径45cm短径30cmの楕円形で深さ25cmを測る。炉址は確認できなかった。この住居址の時期は，流入土内出土の土器から古墳時代前半に比定できる。

H－01出土遺物（第61図）

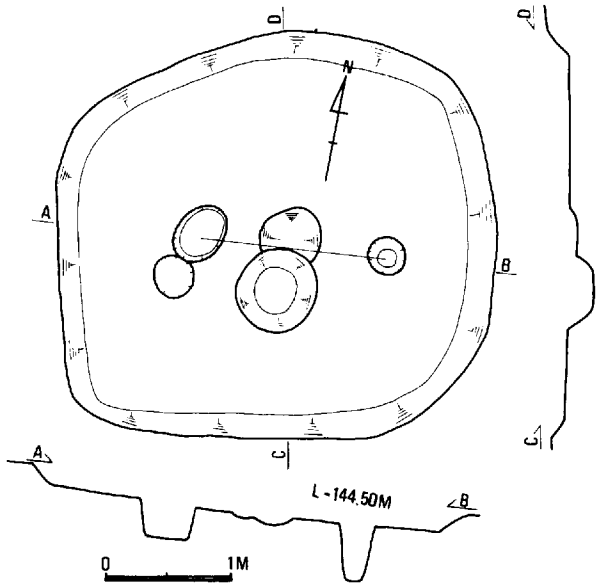
H－01出土遺物は少量であり，図化できたのはわずか4点である。**1**は，口縁部に櫛書き沈線文のある甕形土器である。**2**は，坩形土器と思われ「く」の字状の頸部をもち，二重口縁になると考えられる。体部外面は丹塗りで内面は頸部陵線までヘラ削り調整されている。**3**は，二重口縁をもち口縁部が外湾して上外方へ伸びる甕形土器片である。**4**は，台付壷の台と思われる。

H－02（第62図）

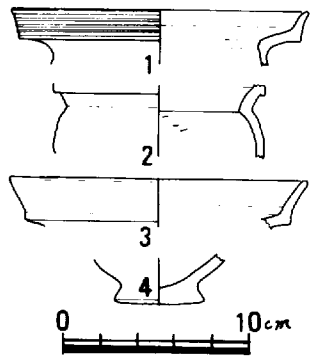
グリッド19－Jで検出された東西6.6m南北5.9mの方形住居址である。深さは30～35cmを測り，2～3軒が重複している。壁帯溝は，2本みられ，柱穴は，8本確認している。炉は1個検出され，それ以外に，機能がはっきりしないピットを4個確認している。この住居址が重複していることは明らかであるが，その前後関係については，柱穴の数，壁帯溝・ピットおよび埋土の色調等から推定するほかない。1つには，3軒の可能性がある。すなわち最も古いものは，壁帯溝をもち，その溝が北東隅と西側の1部においてすでに消失しているものの東西4.6m南北4.5mをはかる方形住居址である。この住居址は，4本の柱を有し，その柱穴は，直径25～30cmの円形で深さ30～50cmを測り，柱間寸法は北東隅から時計回りに2.7m・2.1m・2.7m・2.1mを測る。また直径20cmの円形を呈する炉を持っている。壁帯溝南端の長径50cm・短径40cmの楕円形ピットも層位的にいってこの住居址に伴うものであろう。つづいて少し拡張して推定東西5.5m南北5.2mの溝を持つ方形住居址が作られたと考えられる。この住居址



第59図　2区 K－トレンチ(上)，19－トレンチ(下)断面図



第60図　H－01実測図



第61図　H－01出土遺物

は，中央の２本柱のほか何本の柱で支えられたのか不明である。最後に最も大きくなって溝を持たない方形プランの住居址が作られたと想定するが，柱の有無については不明である。

いま１つの推定は，２軒の重複関係についてである。すなわち，最も古い住居址は，壁帯溝を持ち，炉及び南端のピットを伴うが，柱穴は６本であり，新しい住居址は，周溝を壁直下でなく若干内側にもつという考え方である。

この住居址の時期は，共伴遺物が弥生中期末から古墳時代前半のものまで含んでいて，床面付着の遺物・柱穴内出土の遺物は皆無であるため，確実なところは分からないが，古墳時代前半に比定したい。

H－02出土遺物（第63図）

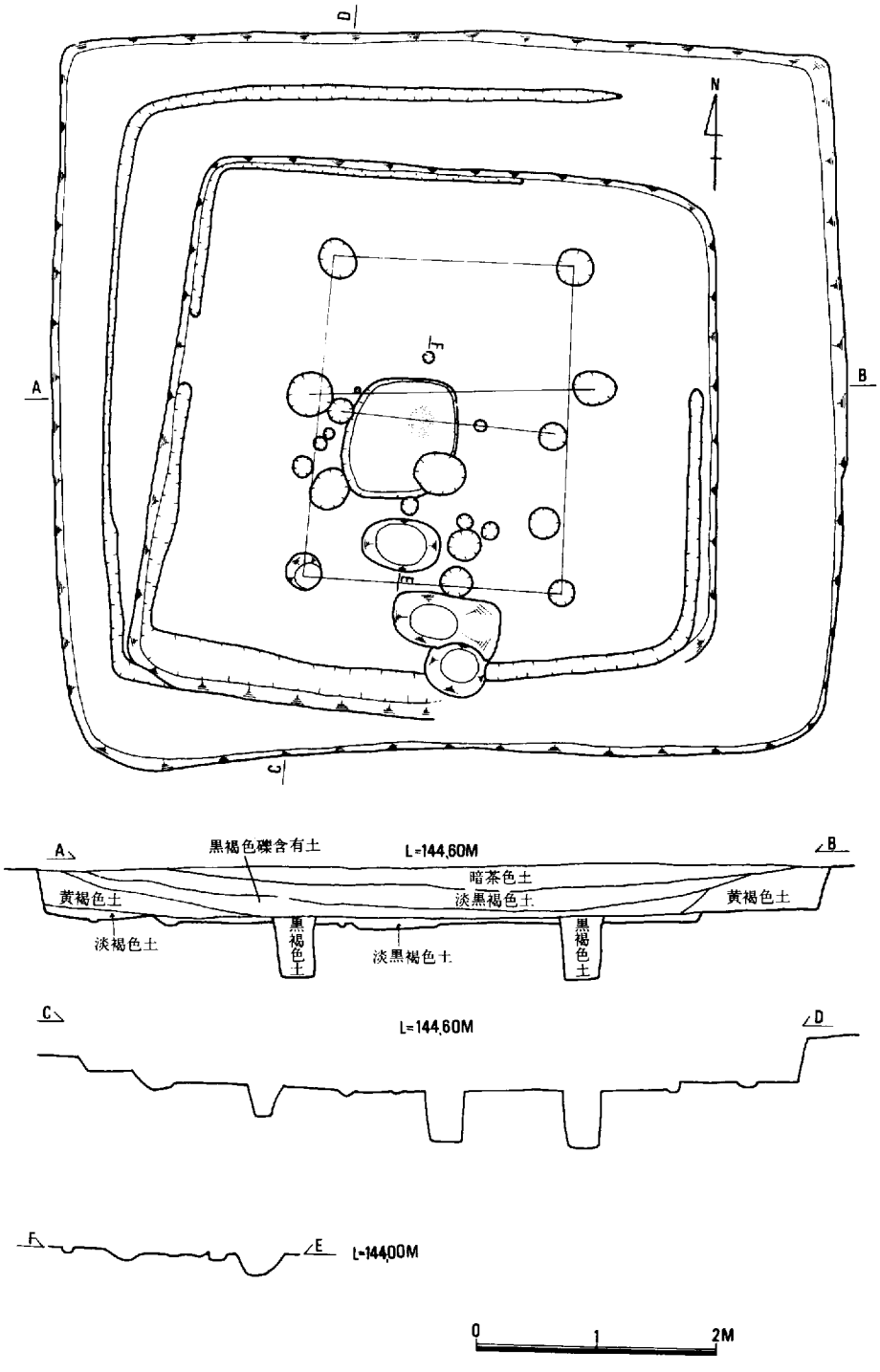
遺物の量は少なく，図化できるものも少なかったが，丹塗りの土器が多かった。**1**は細砂粒を少し含む弥生中期末の甕形土器で，くの字状の口縁端部は上下に肥厚しやや内傾している。**2～4**は，弥生後期の二重口縁をもつ甕形土器である。**5～7**は土師器甕形土器である。**8～9**は土師器高杯，**10**は手捏(つく)ねの小形坩形土器，**11**は高坏の脚と思われる。

H－03（第64図）

H－02の西８ｍの所で検出された東西3.7ｍ南北3.6ｍの方形住居址で深さ20cmを測る。炉だけ確認でき，壁帯溝，柱穴は検出できなかった。共伴遺物からこの住居址の時期は古墳時代前期に比定したい。

H－03出土遺物（第65図）

若干量の弥生式土器とサヌカイト製石鏃が出土している。**1**は口縁端部を上方につまみ上げ


D
N
A
B
C
黒褐色礫含有土
L=144.60M
暗茶色土
黄褐色土
淡黒褐色土
黄褐色土
淡褐色土
黒褐色土
淡黒褐色土
黒褐色土
C
D
L=144.60M
F
E
L=144.00M
0
1
2M

第62図　H－02実測図

ている。2は口縁部が外に伸び，条線が見られる。3はやや外反しながら上方に伸びる口縁をもつ。4は短脚の高坏である。5はサヌカイト製石鏃で二等辺2角形を呈している。

H—04（第66図）

H—03の南西隅に接して検出された東西47m南北推定44mの不正形の円形住居址で肩の張りが弱い六角形に近似している。深さは10～15cmを測る。南側は一部破壊されていたが，壁帯構は本来なかったようである。ふつう炉がある辺は，染付け土器片の混入していた現代の土壙によって，破壊されていると思われる。柱穴は4本あり直径30cm深さ30cmを測る。時期は共伴遺物から古墳時代前半に比定したい。

H—04出土遺物（第67図）

遺物の出土量は極めて少ないが土師器片と変成岩（緑泥変岩？）の磨製石包丁1点とサヌカイト製石鏃1点が出土した。

H—05（第68図）

グリッド17—Kで検出された直径7.1mの円形住居址である。深さ20cmを測る。壁帯溝はなく，炉もない。D—02に中央部を東西に切断されている。柱穴は4本持ち直径30cmの円形で深さ30～50cmを測る。中央ピットは長径80cm短径50cmの楕円形で25cmを測る。このピットに向かって長さ3m深さ5cm巾10cmの溝が住居址南西隅の壁から伸びている。床面付着の土器からこの住居址の時期は弥生後期に比定できる。

H—05出土遺物（第69図）

1は住居址北端の床面に付着して出土した壷形土器で復元して完形になった。2は南西隅の床面に付着していた完形の椀形土器である。3は埋土中のもので小型の甕と思われる。4は埋土中のサヌカイト製石鏃である。

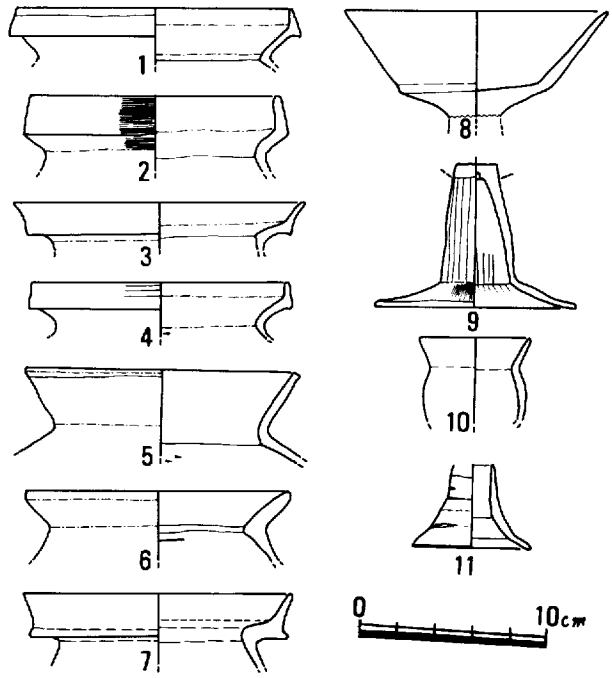
Ⅱ．溝状遺構及び出土遺物

D—01（第58図，第70図）

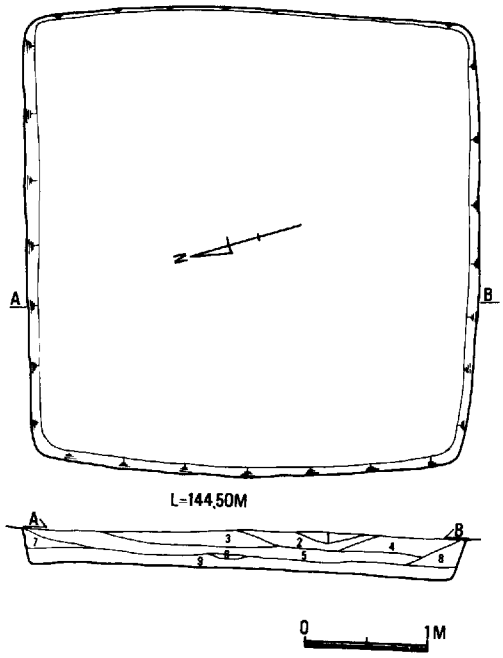
H—01の北6mの所から始まり，H—01の西4mの所を通り，H—04の西1mをかすめるようにして検出された長さ70m，巾2.5～3.0m，深さ0.9～1mの断面逆台形を呈する溝状遺構である。底面のレベルから北東から南西に水は流れていたようである。共伴遺物から古墳時代のものと考えられる。

D—01出土遺物（第71図）

1～3は甕形土器で外反する二重口縁をもち内面ヘラ削りの土器である。4～5はやや外反しながら上方へ拡張した口縁をもち内面ヘラ削りの甕形土器である。6はやや外反する口縁をもつ丸底の坩形土器である。7は長脚の高坏形土器で外面ヘラ磨き内面ヘラ削りが見られる。筒部は円筒状で下にいくほど，しだいに広がり，くの字状に明陵な陵線をもって急に外へ開く裾部へ移行する。8は断面三角形の凸帯と口縁端部外側に刻み図を入れた弥生中期の壷形土器片である。

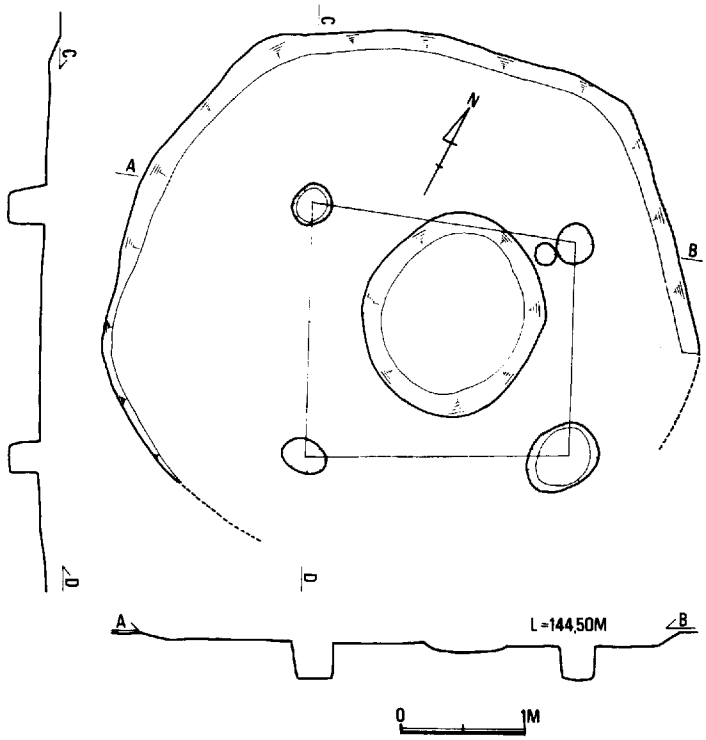


第63図　H－02出土遺物

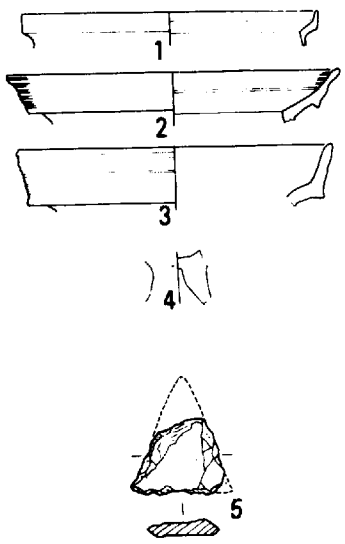


1 砂利層
2 淡黒褐色土
3 灰黄褐色土
4 黄褐色土
5 黒褐色土
6 赤褐色焼土（火所）
7 暗褐色土
8 茶褐色土
9 暗褐色土（掘りすぎ）

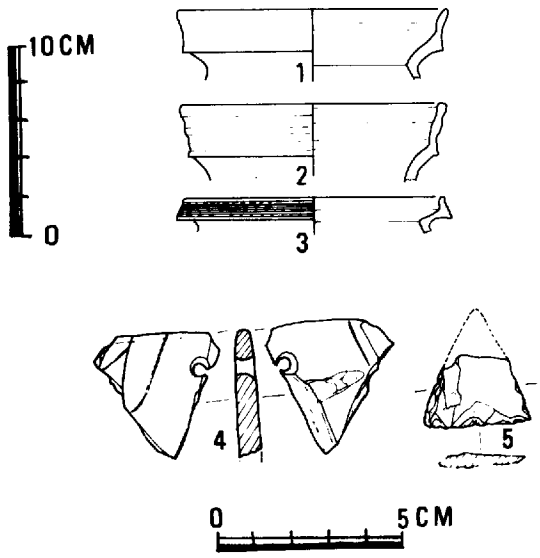
第64図　H－03実測図



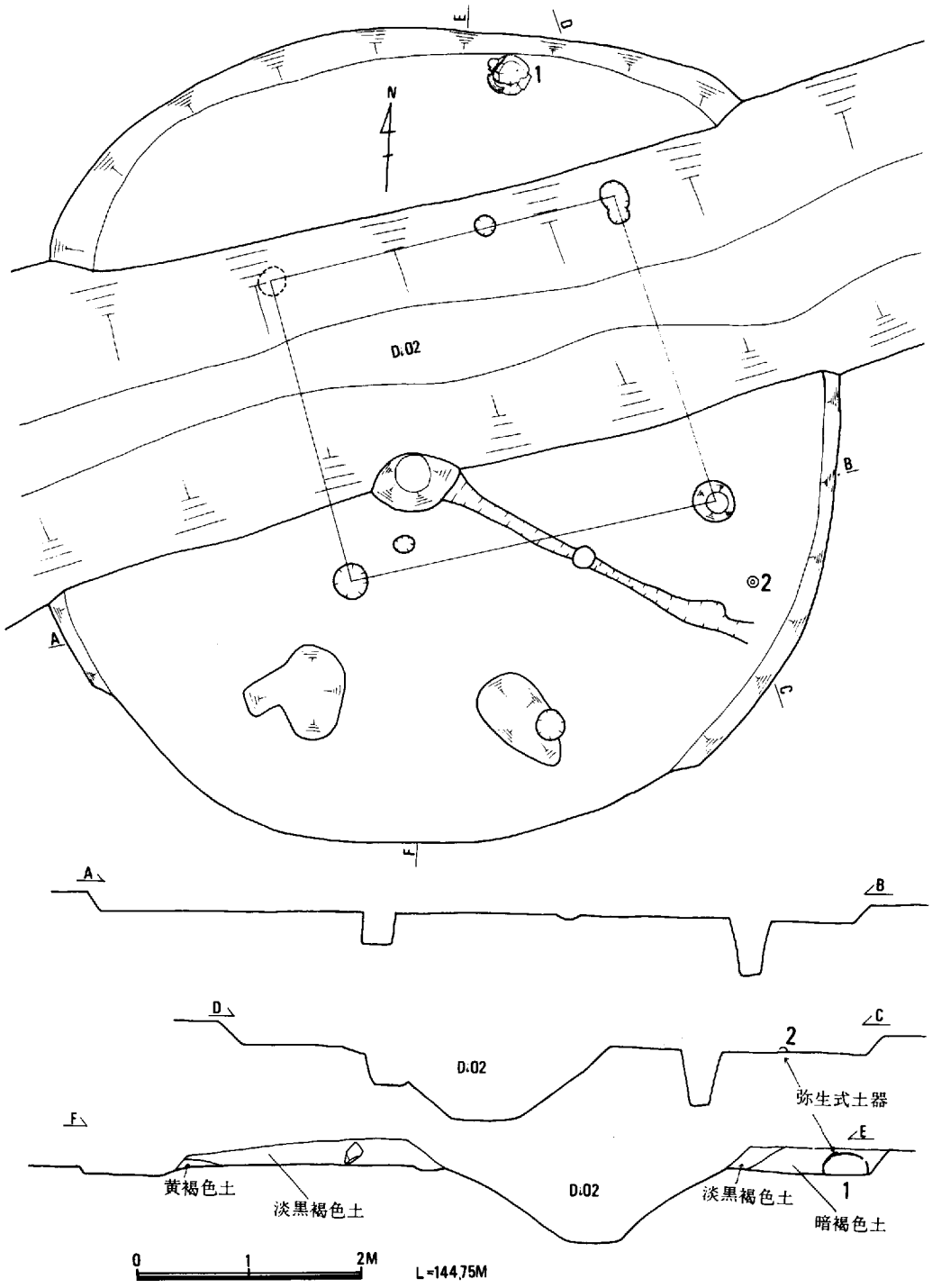
第66図　H－04実測図



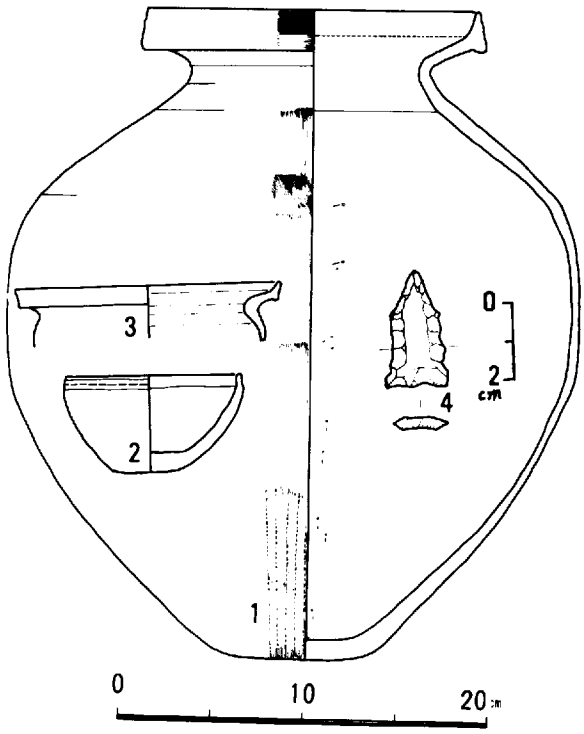
第65図　H－03出土遺物



第67図　H－04出土遺物


E
D
1
N
D.02
B
◎2
A
C
F
A
B
D
C
2
D.02
弥生式土器
F
E
黄褐色土
淡黒褐色土
D.02
淡黒褐色土
1
暗褐色土
0
1
2M
L=144.75M

第68図　H－05実測図



第69図　H－05出土遺物

D－02（第58図，第70図）

2区及び4区の中央部を南北に境するように伸びる溝である。巾2.5 m深さ70～90cm長さ約190 mを測る。この溝の時期は，H－05を切っていることから弥生後期以降であり，D－01に切られていることから古墳時代前期以前と考えられる。溝の埋土出土の遺物は，最も新しいもので6世紀後半の須恵器が多量に見られる。D－01は，このD－02の流れを人為的に変えたものと考えられる。

D－02出土遺物（第72図）

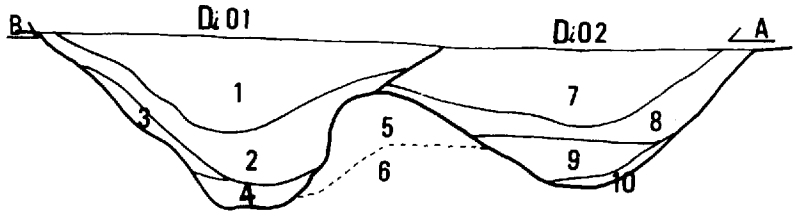
縄文晩期，弥生前期，弥生中期，土師器，須恵器等の土器片と，鉄鏃，石包丁が出土している。特に4区附近においては須恵器の量が圧倒的に多く，出土している。

縄文式土器（1）は，1点出土している。半截竹管文が二列施こされ，器壁は薄く4 mmを測る。胎土に雲母など砂粒を多く含み，茶褐色を呈した焼きのよい土器である。

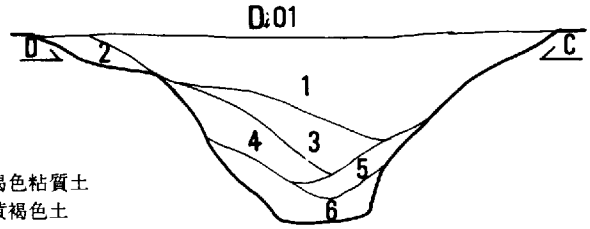
弥生時代前期土器（2～6）は，5点見られた。いずれも甕形土器片である。2は，口縁部がくの字状を呈し，端部に刻み目を施こす。体部には細い櫛描きの沈線が数条みられる。3は，逆L字状の口縁をもち体部には細い櫛描きの沈線が数条施こされている。4も逆L字状の口縁をもつが，体部の櫛描き沈線文は太く明瞭である。5は，くの字状の口縁をもつと思われ，体部に太い明瞭な沈線を数条有す。6も体部に太い明瞭な沈線を有する。

弥生時代中期土器（7～11）は，甕形土器，高坏形土器が見られる。7は甕形土器で，体部に数条の櫛描き文の下に刺突文が施こされている。8は，高坏形土器脚部で，円錘形に広がる脚の端部は上下に肥厚する。器表面はハケなでされ，その後に数条の沈線を施している。9も8と同じ形状をもった高坏脚部で，文様は見られない。10は，甕形土器底部で，外面にヘラ磨きのある土器で，上げ底を呈する。11は，くの字状口縁をもつ甕形土器で，口縁端部は上下に肥厚し，端面に数条の凹線が施こされ，頸部と体部の境に稜が認められる。体部外面はハケなで調整され内面はヘラ削りが頸部直下まで施こされている。

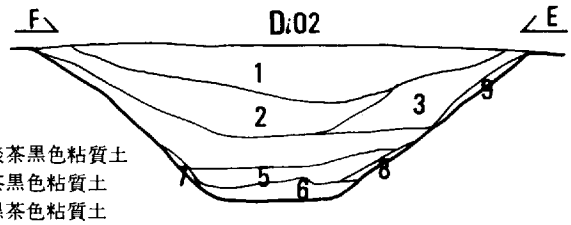
弥生時代後期土器は，若干出土しているが，図化できるものはほとんどない。12は，手捏ね



1．茶褐色粘質土（砂利多く含む）
2．茶褐色粘質土
3．茶褐色砂質土
4．灰茶褐色粘質土
5．砂礫層
6．黄褐色地山
7．茶黒色砂利多量混入土
8．黒茶色砂利多量混入土
9．灰茶褐色砂質土
10．灰茶褐色粘質土

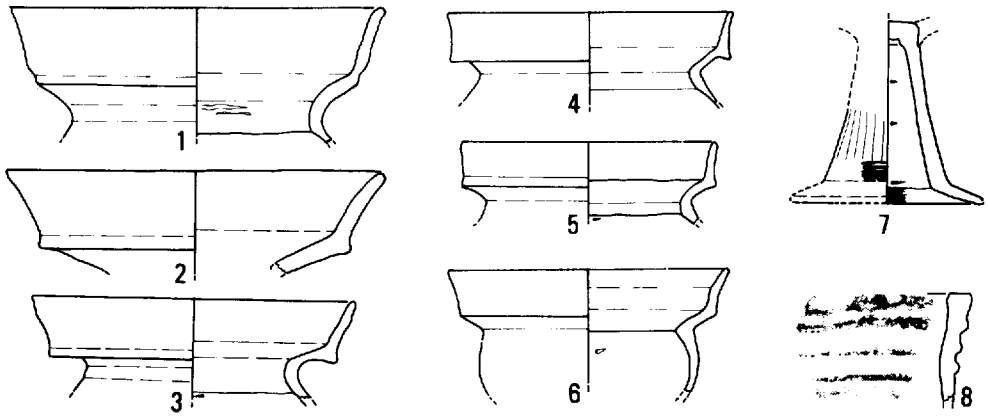


1．黒褐色粘質土
2．暗黄褐色土
3．暗褐色礫含有粘質土
4．茶褐色土
5．黒褐色粘質土
6．茶褐色礫含有砂質土

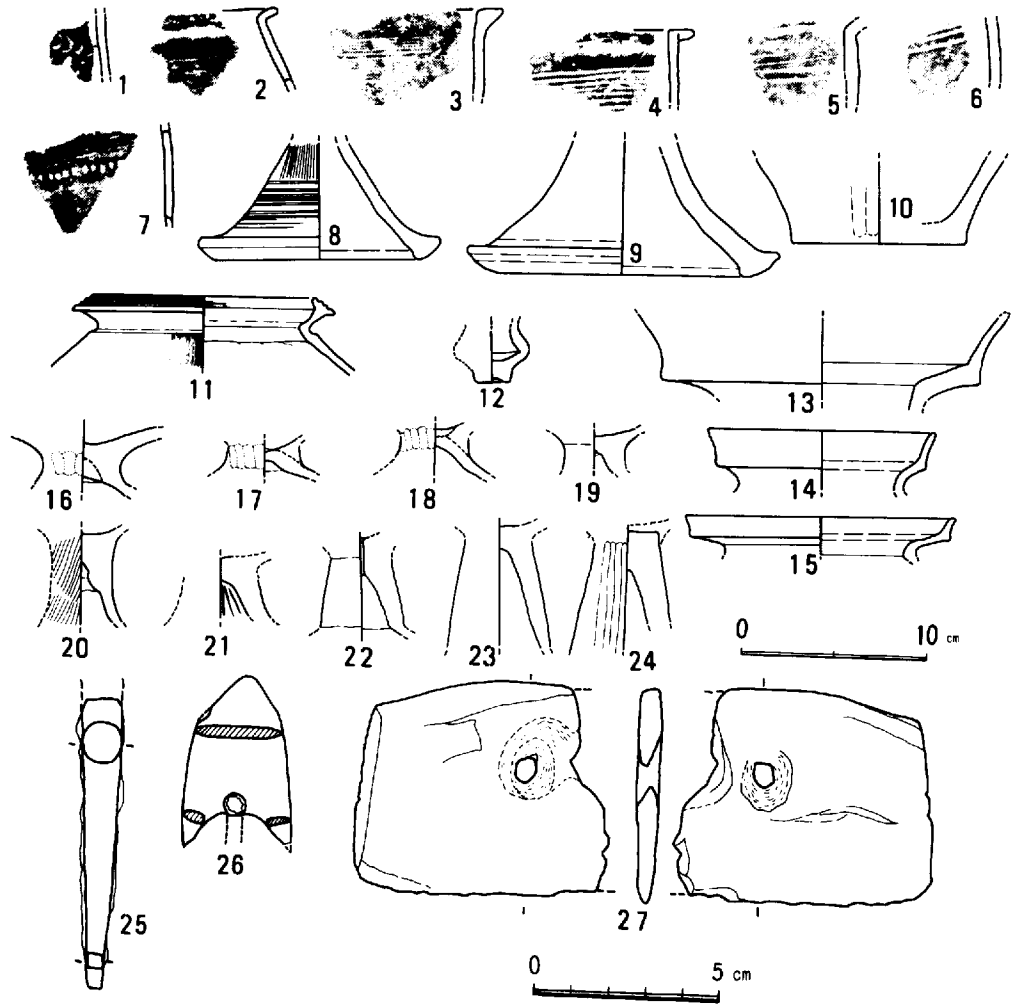


1．淡茶黒色粘質土
2．茶黒色粘質土
3．黒茶色粘質土
4．黒褐色土
5．暗青褐色砂質土
6．灰褐色砂質土
7．茶黄色土（地山）
8．茶黄色土混入
9．茶黄色土（地山）

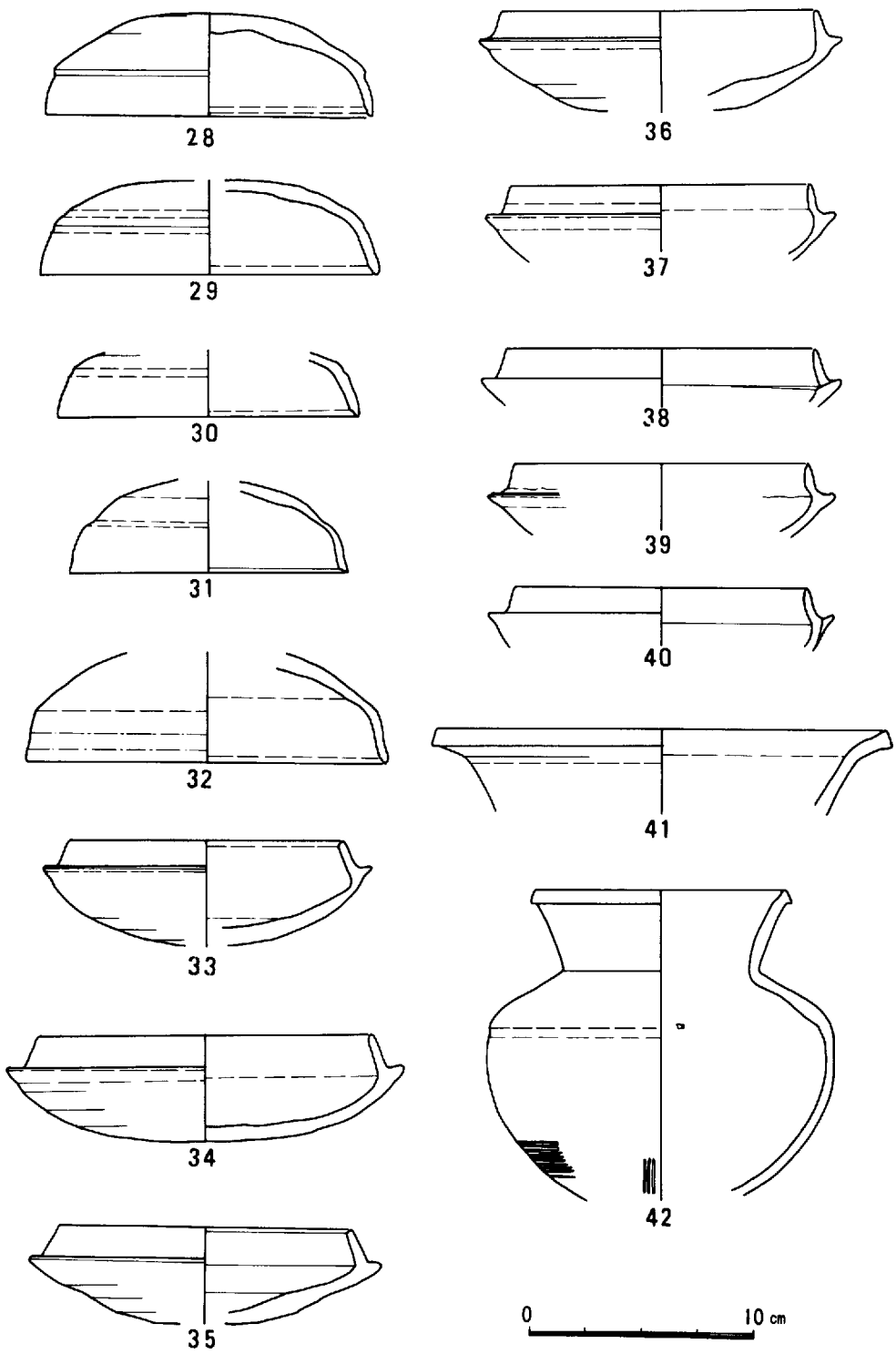
第70図　D－01・02土層断面図（レベルは144.60ｍ）



第71図　Di－01出土遺物



第72図　D－02出土遺物



第73図　D－02出土須恵器

の小形壷形土器で，体部はソロバン玉状を呈し底部は上げ底で，黄褐色の焼きの良くないやわらかい土器である。

土師器（13～24）は，甕形土器，高坏形土器，壷形土器等が出土している。13は，二重口縁をもつ壷形土器で，口縁部は上外方に長く大きく外反している。14も二重口縁の壷形土器で，口縁部はやや外反している。15の甕形土器もやや外反する短かい二重口縁をもつ。16～18は短脚の高坏形土器で筒部外面に指頭圧痕が見られる。19も短脚の高坏であるが，指頭圧痕は見られない。20～24は，筒部が長く，くの字状に広く裾をもつ高坏形土器である。

須恵器（第73図）は，坏，蓋坏，壷等が見られる。28は，天井部と体部との境に浅い凹線があり，口縁端内面に浅い凹線が認められる蓋坏である。29，30も28とほぼ同じ形態である。31は，口縁部に面取りが認められる。32は，口縁端部がやや外へ広げられている。34は，立ちあがりは内傾し端部に浅い凹線が認められ，受部は上外方へ伸び体部と底部の境は明瞭でなく，ヘラ削りは底部の全体を占める坏である。37はたちあがりの特徴は，３区の溝001出土の坏にも見られた。41は，壷形土器で，口縁部はラッパ状に広がり端部付近ではさらに開けられ，端部はやや上下に肥厚している。42の壷形土器は，ラッパ状の口縁で，その端部は上下に肥厚し，体部最大径の位置に浅い凹線が認められ，器表は底部付近外面に櫛目，体部内面はヘラ削りが見られる。

Ⅲ．ピット及び出土遺物

２区では２～３のピットが検出された。そのうち袋状のものが２個ある。ここでは遺物の出土したＰ－01のみ述べよう。

Ｐ－01（第74図）

Ｄ－01の東，Ｈ－01の南に検出された袋状のピットである。平面形は，長径100㎝，短径90㎝の円形に近い楕円形を呈する。最も袋の太くなる所は，底部から10㎝ほど上方で，短径120㎝長径140㎝を測る。床面はほぼ平坦に作られ，２本の柱穴が見られる。柱穴は直径10㎝深さ２～３㎝を測る。このことからこの袋状ピットには屋根が作られていたと考えられる。時期は，共伴遺物から弥生中期に比定したい。

Ｐ－01出土遺物（第75図）

Ｐ－01の埋土は，三層に分けられ，第１層は，黒色粘質土で遺物は**１・２・５**が出土している。第２層は，黒褐色粘質土で遺物は全く見られなかった。第３層は，黒色粘質土で遺物は**３・４**が出土している。**１**は，長頸の壷形土器で，口縁部は二重縁で外上方に大きく伸び端部は丸くなっている。頸部はやや上方が広がり外面には縦方向のハケ目の上に数条の凹線が施こされている。体部外面には縦方向と横方向のハケ目調整，内面は頸部直下までヘラ削りが見られる。**２**は，二重口縁をもつ壷形土器で，口縁はほぼ垂直にたちあがり端部は丸くおさめている。頸部はくの字状に曲っている。**３**は，蓋形土器と思われる。天井部は中央が凹み，脚部は大きく裾広がりになっている。くびれた部には指頭圧痕が見られ胎土は良質の粘土で，黄褐色

を呈した焼きの良い土器である。4は，甕形土器の底部と思われる。高台と言えるほどの上げ底で，1対の円孔が斜めに貫通している。外面は指頭によるナデ痕が見られ，胎土に砂粒を含み，茶褐色を呈した焼きの非常によい土器である。5は，サヌカイト製の石鏃で，長さ1.3㎝巾1.3㎝を測る正三角形で底部にわずかえぐりが認められる。

Ⅳ．その他の遺構及び遺物（第76図）

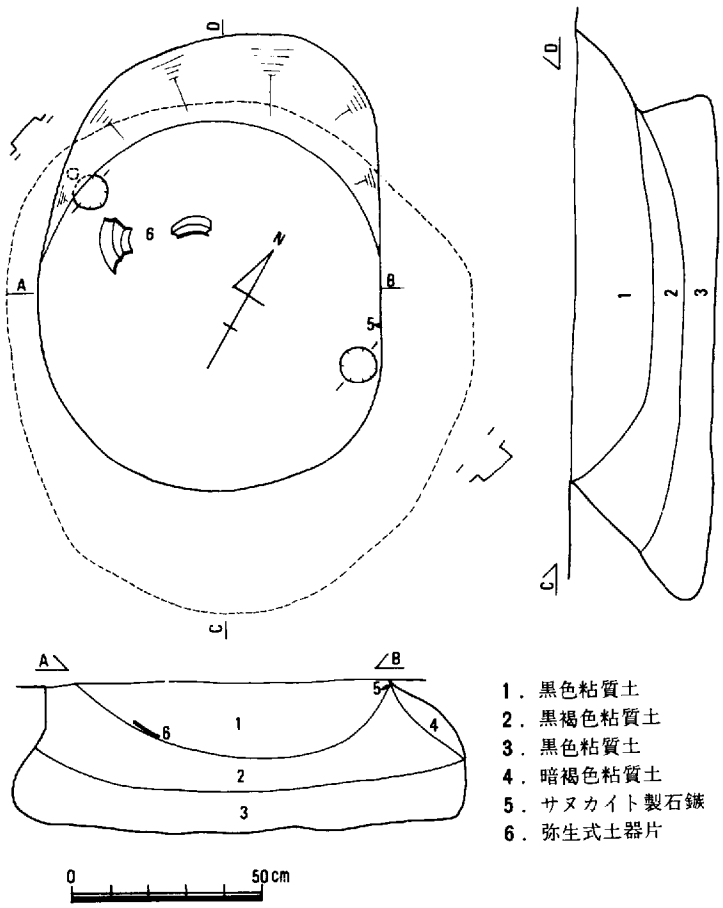
その他2区では，柱穴が数多く検出されているが，掘立柱建物になるのか，竪穴住居址の柱穴になるのが不明である。これらの柱穴の大多数はグリッド19以東に偏在している。柱内出土の遺物も若干あるが，いずれも弥生中期のものであることから，これらの柱穴は竪穴住居の柱穴である可能性が強い。2区にはまたほとんど砂利のみを含んだ溝が東西に伸びている。この溝の上層で，多量のサヌカイト片，サヌカイト製石鏃を発見している。また遺構検出面において多量の弥生中期土器片と，石器を見つけている。石器は，スリ石3，くぼみ石1が見られる。

Ⅴ．2区小結

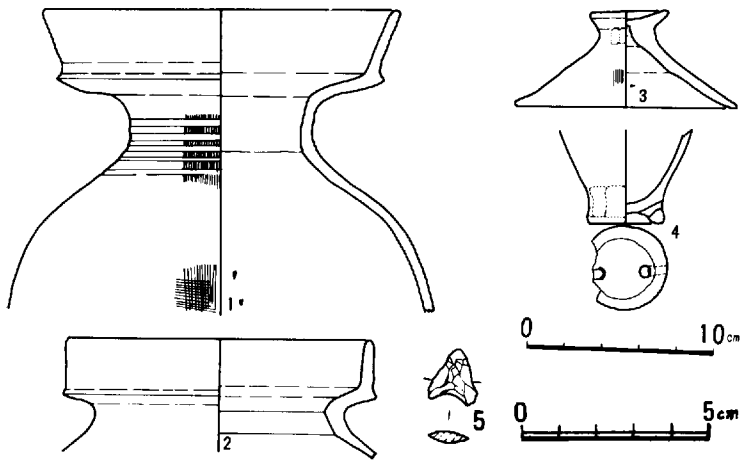
2区は土層のレベルから見て，宮の前の他の区に比べてわずかに高い位置にある。おそらく八幡神社古墳のある尾根がもって南に伸びていたものと考えられる。遺物は，弥生前期，弥生中期，弥生後期，古墳時代のものが出土し，遺構は，住居址，溝，袋状ピット，柱穴等が検出されている。遺構の中心となる時期は，古墳時代であり，住居址である。1区と大きく異なるのは，墓がないことである。そして特に注目できるのは，古墳時代の住居址（H－02，03，04）が南に偏在している事実である。このことは用地の南にまだ集落址が存在することを示しているのであろう。また1区の周溝墓とシスト群が古墳時代に比定できることから，同時期の集落址と墓地との位置が想定できる。

3．3 調 査 区

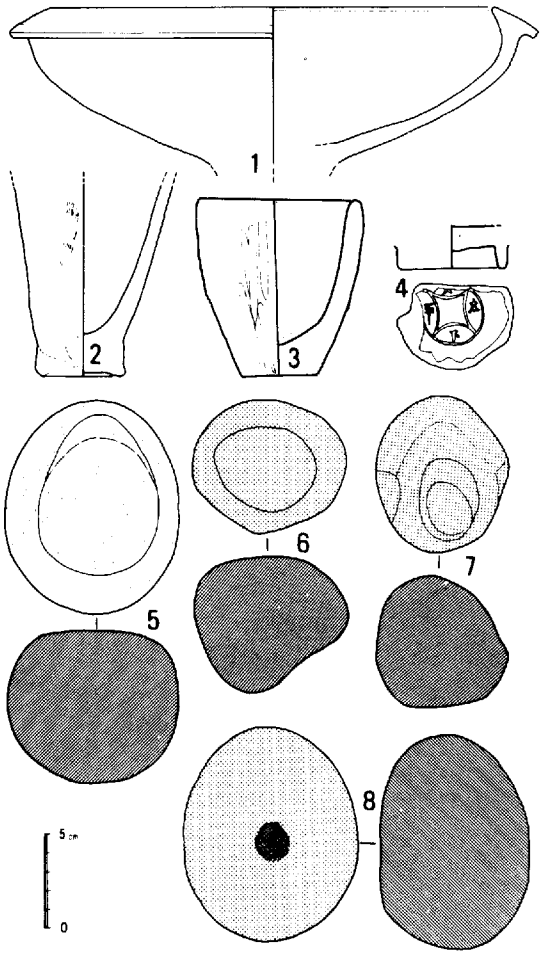
3区は，本遺跡の最も西方に位置する。県道月田線を東の端とし，関川を西の端とする。調査対象面積はＳＴＡ49からＳＴＡ51の約200ｍ，巾平均55ｍの11,000㎡である。発掘前は，ほとんど水田で，1部畑地の所も見られた。表面採集では陶磁器，土師器，須恵器のほかサヌカイト片等を見つけている。ほぼ全域で採集できるためトレンチによる遺構の密度を調べる必要があった。既にグリッド杭を打っているので，この区では3本の東西トレンチと1本の南北トレンチ及び3ケ所の坪掘りを行なった。Ｈトレンチは，東西トレンチで長さ30ｍ巾1ｍ深さ70㎝であり，2～3本の柱穴が検出され，遺物は土錘，陶磁器，土師器が出土した。Ｆトレンチは，東西トレンチで長さ80ｍ巾1ｍ深さ70㎝であり，東方では遺構は見つからず遺物は多量の陶磁器と若干量の土師器が出土している。西方では溝状遺構（これは後でＤ－001と呼称する）が見つかり，遺物は土師器，須恵器が若干量出土している。4Ｄトレンチは，東西トレンチで長さ20ｍ中2ｍ深さ30㎝であり，住居址，柱穴，土壙などが検出され，遺物は土師器，



第74図　P－01実測図（レベルは144.55ｍ）



第75図　P－01出土遺物



第76図　2区遺構に伴わない遺物

サヌカイト製石鏃等が出土している。4トレンチは，南北トレンチで長さ50m巾2m深さ30cmであり，溝状遺構（D－001）と炉址（住居址に伴うもの）等が若干量出土している。またこのトレンチの南方では，鉄滓とフイゴの口が出土している。後の3ケ所の坪掘りでは，旧河道と思われる川砂利層が表土直下から出ている。

以上のトレンチ調査から発掘範囲を次のように決定した。即ちグリッドの2からグリッド6までの東西80m，グリッドFからグリッドCまでの南北60mの範囲の4,800㎡である。結果的には土捨て場と工事用道路部分が掘ることができなかったため発掘実面積は2,400㎡であった。結果は，遺構として竪穴住居址3，ピット数個，溝状遺構3が検出された。遺構の数は予想外に少なかった。遺物は縄文式土器数点，弥生式土器若干で，土師器，須恵器はきわめて多量に出土している。その他石鏃，石庖丁，砥石等の石器も若干出土している。

以下各構遺と遺物について説明を加える。

Ⅰ．住居址及び出土遺物

3区では3軒の竪穴住居址が検出された。いずれも上部の削平が著しく残りが悪い。

H－001（第78図）

3軒中最も残りのよい竪穴住居址である。4Dトレンチで検出されたもので，建て替えか拡張がなされている。小さなものは東西3.5m南北2.9mの長方形を呈していて，深さ15cmを測る。壁帯溝は南側と西側にL字状に残りその中10cm深さ5cmを測る。中央ピットに思われる窪みも見られる。南側の壁付近に土師質の甕形土器片が一括出土した。また北東隅には柱穴が壁を切って検出されている以外に柱穴は確認できなかった。一方大きなものは東西5.5m南北4.7mの長方形を呈するが壁溝のみが残っているだけである。その溝は巾10cm深さ5cmを測り断面形はU字形を呈する。

この住居址の時期は共伴遺物から古墳時代後期に比定したい。

H—001出土遺物（第79図）

1は土師器甑で把手を持つと思われるが把手の部分は欠損している。口径26.5cm，推定器高26cm，底部口径6cmを測る。外面へらによる縦方形の整形，内面横方向のへら削りが見られる。2は土師器塊で器壁は厚く作られ内面へらによる粗い削りが見られる。3は土師器高坏の坏部で口縁端部は丸く作られ口縁外面には櫛状工具による浅い数状の沈線が施こされ，胎土は良質の粘土で赤褐色を呈した土器である。4は土師器の甕形土器で二重口縁の形式を残していて，口縁端部は平らに作られている。外面ハケ目，内面はヘラ削りが見られる。5は土師器甕形土器で口縁端部はやや丸く作られ口縁部と体部の境がやっと認められる。6はこの住居址埋土中唯一の須恵器坏である。口径は12cm，立ち上がりは1.8cmを測り垂直に立ち上がり，口縁端部には凹線が認められる。この区では大量の須恵器が出土しているがこの坏は最も古いタイプに属する。

その他の住居（第77図）

H—001以外に2軒の竪穴住居址が検出されている。1つはH—001の西に近接して検出された壁帯溝と炉址のみが残っているもので，大きさは不明であり，形状は隅丸方形を呈するようである。溝は南東隅が残っているのみで巾10cm深さ5cmを測る。炉址は径約30cmの円形を呈し位置は溝の北約2.5mの所である。遺物は皆物であって時期は不明である。もう1つはH—001の東で検出された壁帯溝のみ残存した住居址である。溝は巾10cm深さ3cm長さ2mを測り直線で南北に伸びている。形状はしたがって方形に近いものと思われる。遺物は皆無で時期は不明である。その他にも住居址のあった可能性が考えられるが，この地区は最近土を削り取ったと言われており，比較的遺構の残りが悪くなったのであろう。

Ⅱ．ピット及び出土遺物

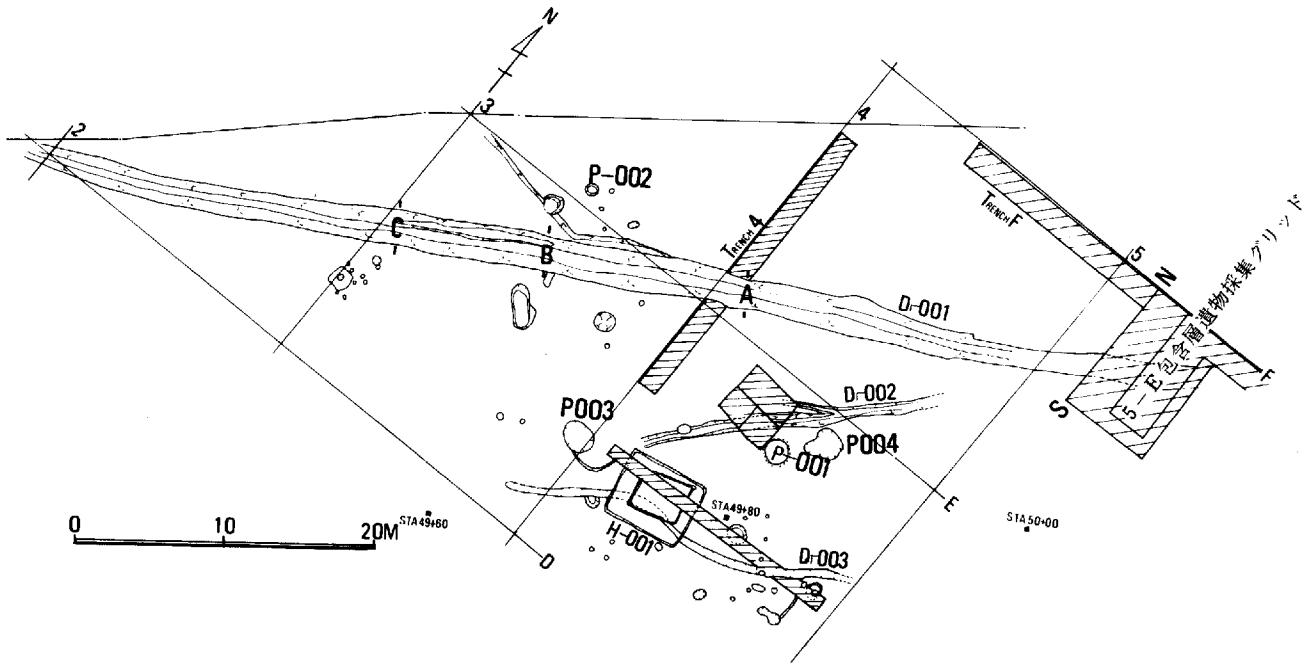
ピットは数個検出されているが遺物の出土するものとそうでないもの，浅いもの深いものなど様々である。ここでは4個のピットについて説明したい。

P—001（第80図）

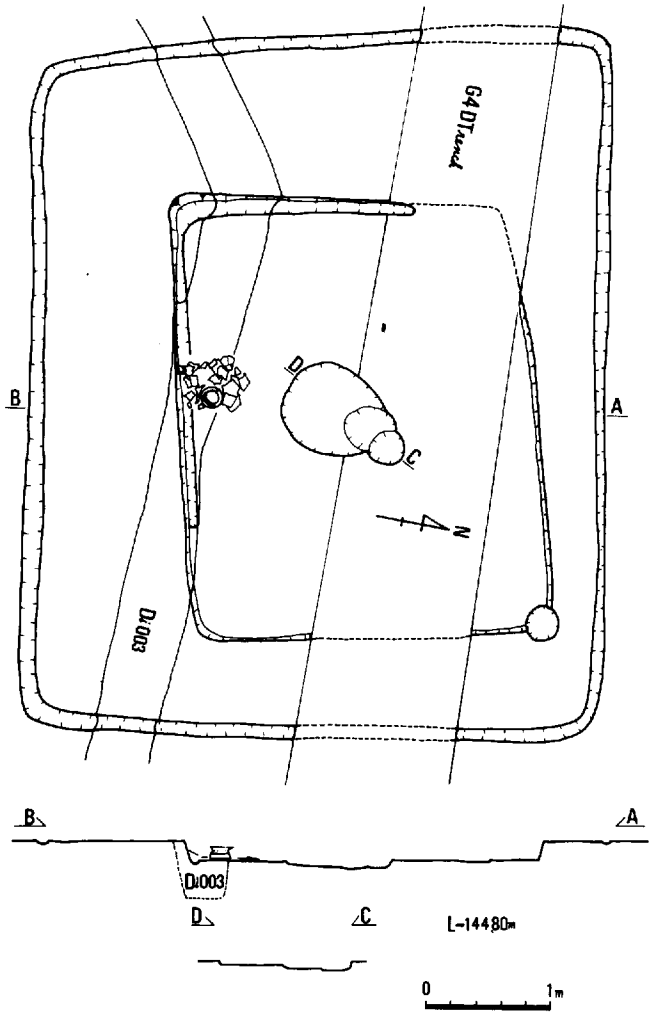
H—001の北東5mで検出された南北1.8m東西14.5mの楕円形を呈する袋状ピットで，断面での最大巾は南北2.0m東西15.5mを測る。底部は二重底になっており直径60cmの窪みが見られる。深さは全体で62cmを測る。さらに底部には二重の杭列が並んでいる。内側の杭列は4本で窪みの下場の位置に，外側のそれは13本で窪みの上場から20～30cm離れた位置に認められた。これら杭の打ち込みの方向を見るとねじれてはいるが中央に向って放射線状に傾斜している。したがってこのピットは円錐形の屋根を有していたと考えられる。時期は埋土の第3層，第4層に多量に弥生中期の土器を包含していたことから，弥生時代中期に比定したい。

P—001出土遺物（第81図）

甕形土器（1～3，6）は，口縁部が「く」の字形に外反し，口縁部が平に作られ，体部の最大径の位置に櫛状工具にする連状文が施され，底部はやや上げ底に作られている。内外面と



第77図　3区遺構配置図



第78図　H－001実測図

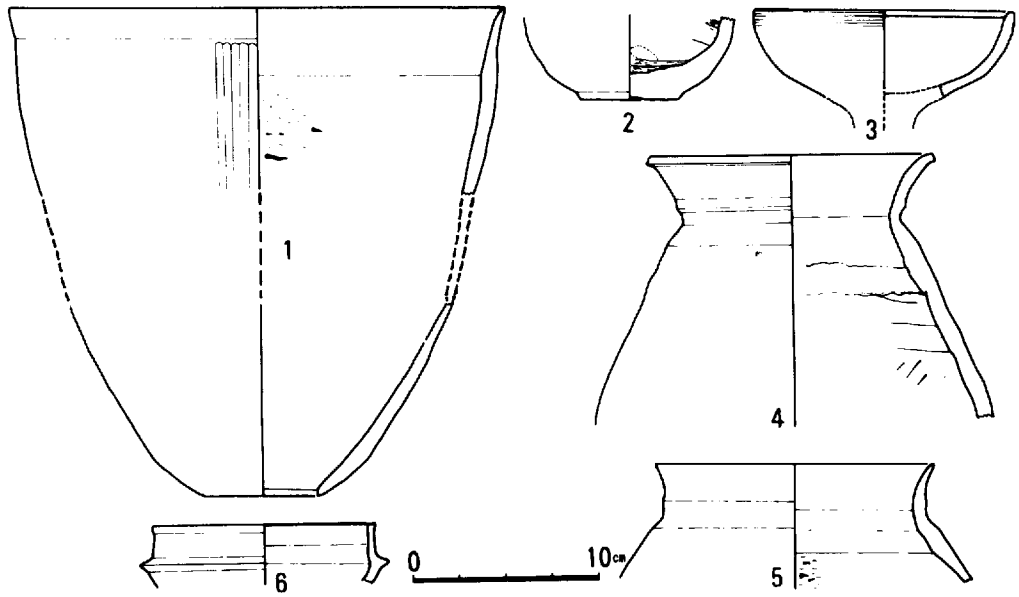
もへら磨き整形され，器壁は薄く，胎土に微砂粒を含み茶褐色を呈する。

高坏形土器（**4**・**5**）の**4**は，無頸壷に台脚が付き，蓋をもつと思われる。脚部は欠損している。坏部の口径10㎝高さ13㎝を測る。内彎する口縁部に円孔が2対あけられ，その下には櫛描きの沈線による平行線と斜行線を組合わせた文様を施し，その下に3段の刺突文を施している。文様は，坏部では上半分に見られる。内外面ヘラ磨きで良質の粘土を胎土にもち茶褐色を呈する。**5**は，**4**とは別個体の高坏脚部で坏部を欠損している。文様は裾に見られ，上から刺突文，次いで櫛描き沈線文，波状文が交互に組合わされる。脚端部には刻み目が施される。外面は，ヘラ磨き，内面はヘラ削り調整し，胎土は良質粘土で茶褐色を呈する土器である。

石器（**7**・**8**）の**7**は，サヌカイト製の石包丁，**8**は砂岩製の石皿と思われる。

P－002出土遺物（第82図）

P－002は，D－001の北で検出された直径60㎝深さ20㎝の深鉢状で円形プランを持つピットである。このピットから縄文式土器が4点出土した。いずれも深鉢形土器で，雲母を多く含み，黒褐色を呈する焼きの良い土器である。体部と口縁部との境に陵線をもち，体部外面には条痕が見られる。**1**は，推定口径35㎝を測り，ゆるやかに外彎する口縁をもち，口縁端に刻み目をもち，口縁部外面に縦方向の3列1組の爪形文，口縁部と体部の境に横方向の爪形文を施す。**2**は，口縁部の縦方向の3列1組の爪形文の間に2列の刺突文をもつほか1と同じであ



第79図　H－001出土遺物

る。3は，口縁部外面に条痕文を施した後に斜行のヘラ描き沈線文をもち，体部との境に爪形文をもつ。4は，縦方向の半截竹管文，横方向の半截竹管文が1と同じ位置に施こされている。これらの土器は，縄文時代晩期に比定できる。

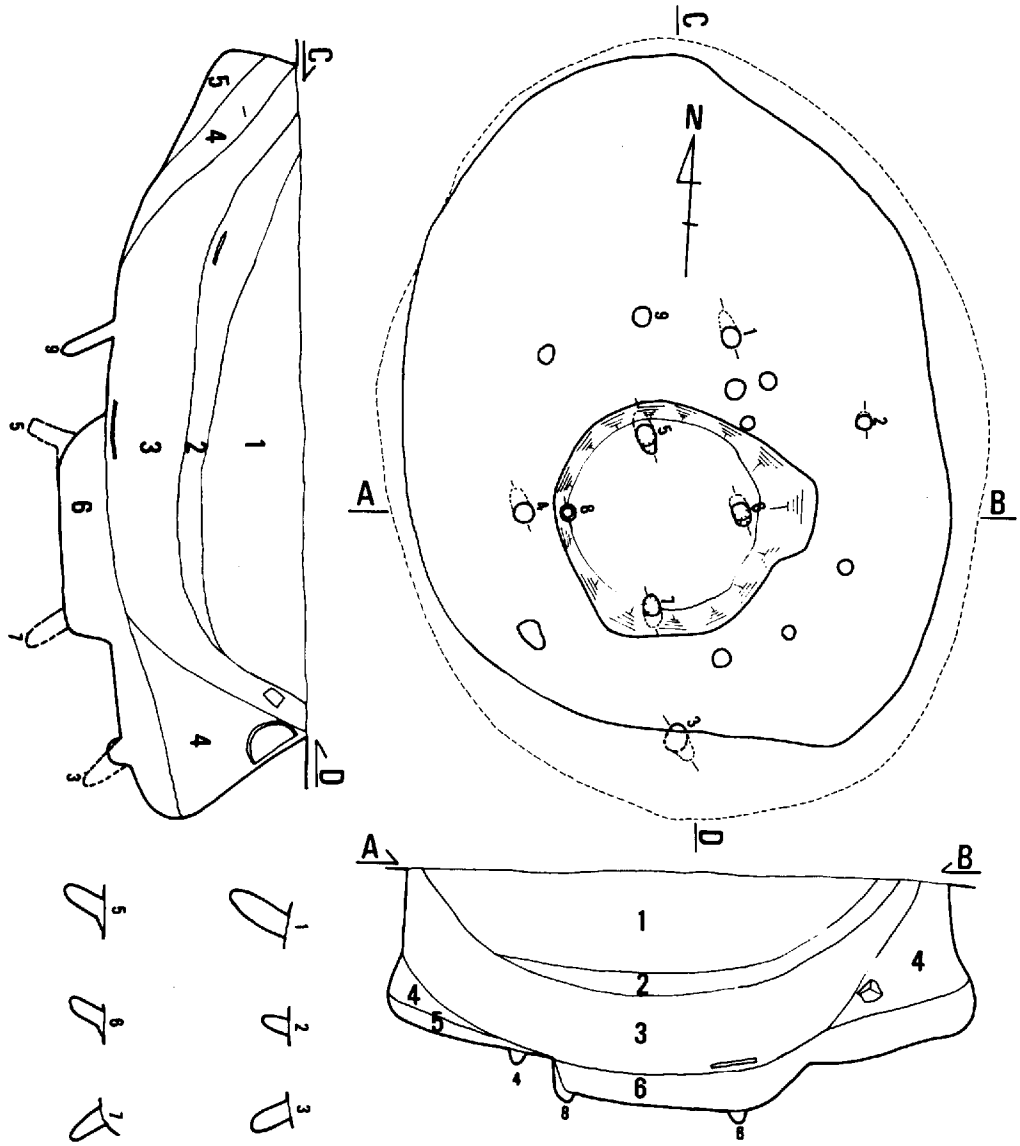
その他のピット及び出土遺物（第83図）

その他遺物の出土を見たピットが2個ある。

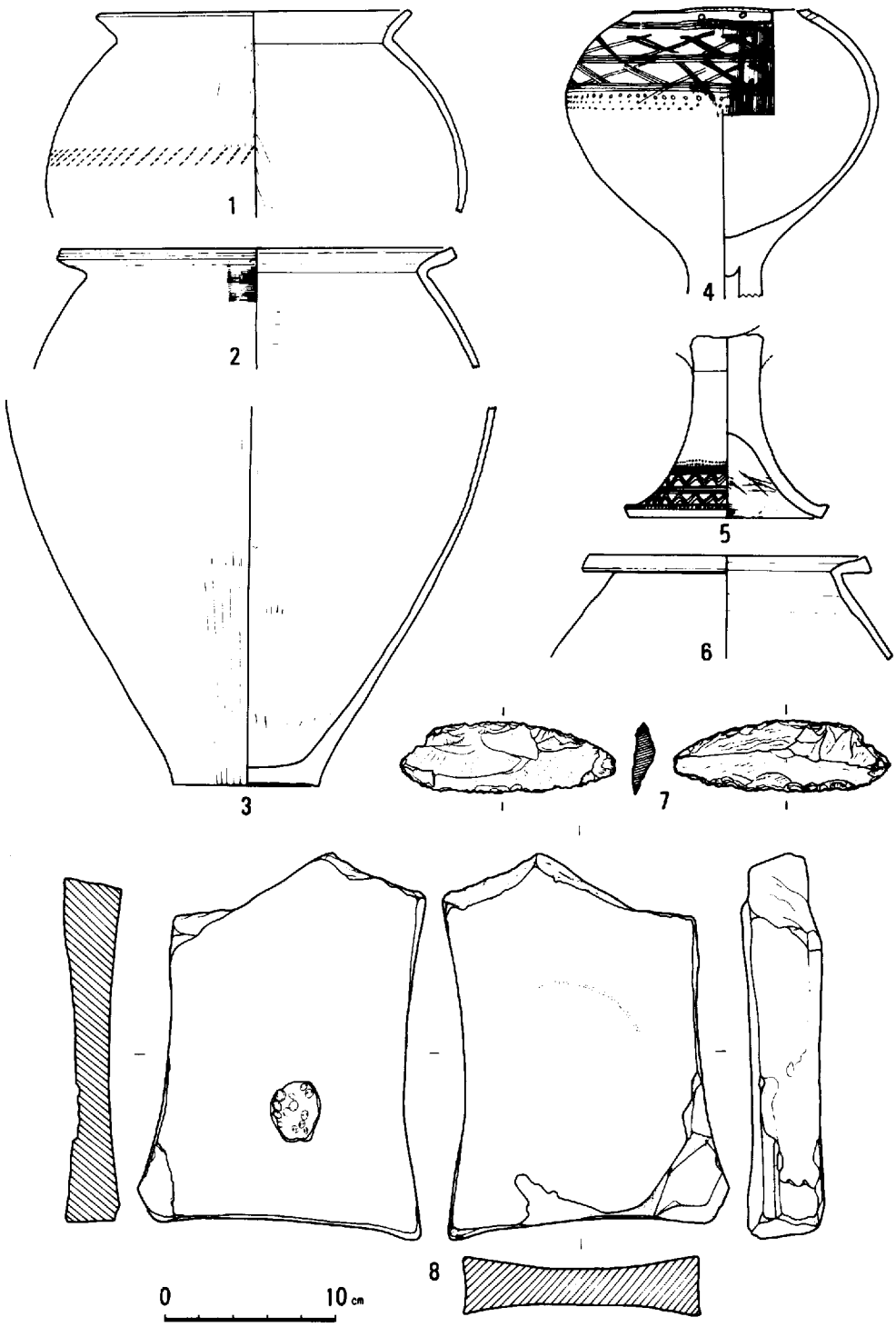
P－003は，H－001の東で検出された長径2m短径1.7m深さ1mの楕円形プランを呈する袋状ピットである。共伴遺物からみて弥生中期に比定できる。1～4は，このピットから出土した甕形土器片で，口縁部は「く」の字状に外反し，端部を少しつまみ上げたものもある。体部外面は，ヘラ磨き上げのもの（2・4）と櫛目のもの（1）がある。底部は，やや上げ底である。壷形土器（6・7）は，口縁端外面に断面三角形の貼り付け凸帯に刻みをもち，縦方向の棒状浮文の見られるものもある。石器（8～11）は，サヌカイト製石鏃と緑泥変岩の磨製石包丁，その他である。

P－004は，D－002の南に検出された2～3個のピットが切り合ったものである。共伴遺物からみて弥生中期に比定したい。12は，壷形土器の体部で櫛描きの波状文・沈線文が交互に施されている。13は，壷形土器の底部と思われる。14は，台付壷の台部で，円孔を8個もつ。

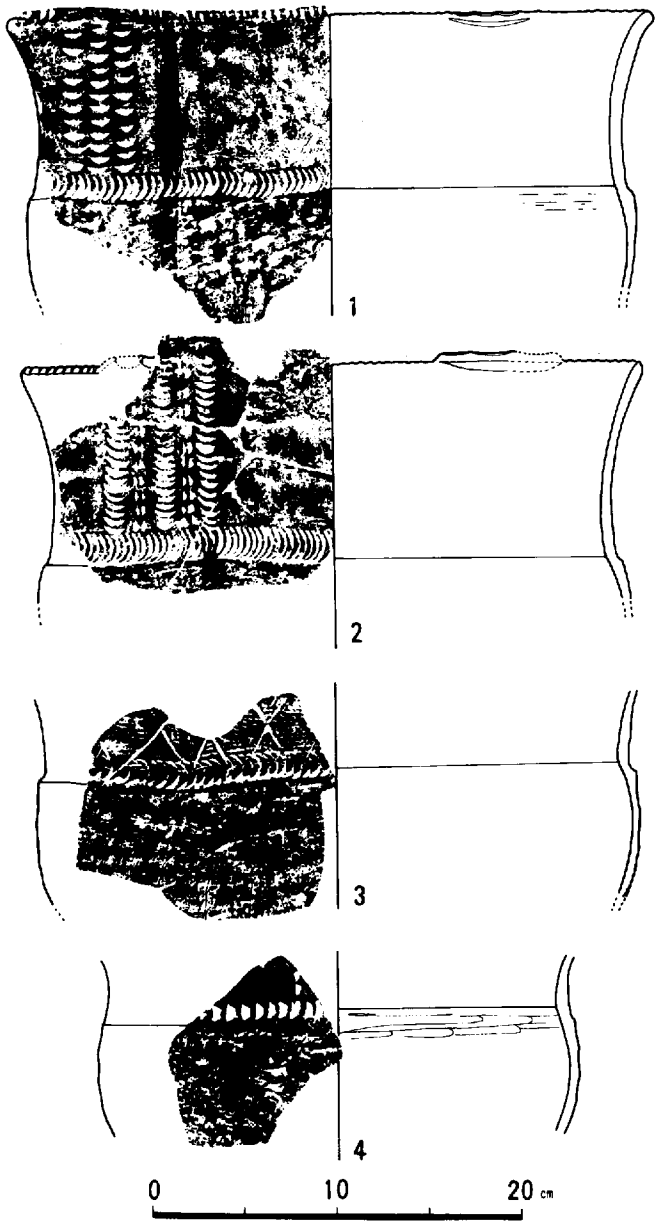
その他2～3個のピットから土師器が出土している。15は，D－001でも出土した手捏ねの土師器で，口径3cm器高3cmを測る小さな土器で，細砂粒を多く含み，赤褐色を呈し，焼きは良い。16は，口径15cm器高5.5cmの埦形土器で，器壁のきわめて薄い良質粘土を胎土にもつ赤褐色を呈する土師器である。17は，口径14cm器高6cmの埦形土器で，内外面とも横ナデ調整され，砂粒を多く含む赤褐色を呈する焼きの良い土師器である。



第80図　P－001実測図（レベルは144.810m）



第81図　P－001出土遺物



第82図　P－002出土縄文式土器

Ⅲ．溝状遺構

溝状遺構は，３本検出された。北からD－001，D－002，D－003と呼称した。共伴遺物からみてD－001は古墳時代後期，D－002とD－003は，弥生中期に比定したい。

D－001（第77・84図）

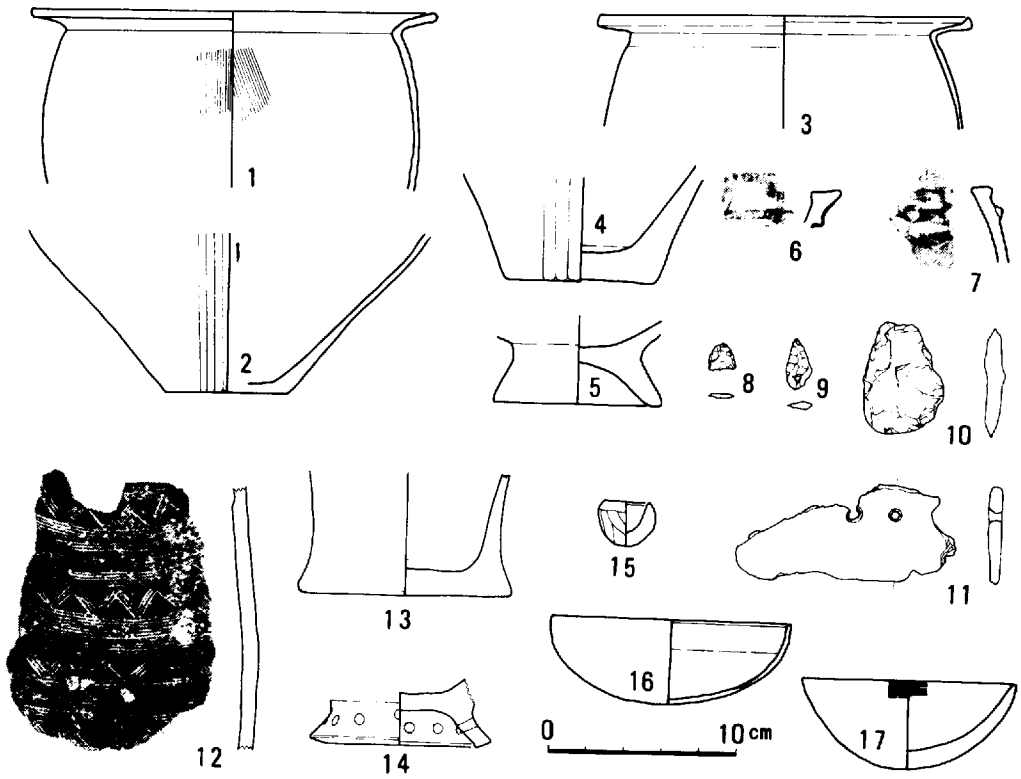
長さ約70m巾約１m深さ約１mを測る溝である。溝底のレベルからみて東から西へ水が流れていたものと考えられる。溝の断面は，東方ではU字形中央でV字形，西方ではU字形を呈する。流入土は，大きく上，下の２層に分けられる。遺物は，おもに上層から出土している。

D－001上層出土遺物

（第85図～第88図）

溝埋土上層出土の遺物は非常に多量である。その種類は，土師器・須恵器を中心にその他弥生式土器，石器も若干見られる。

弥生式土器（24～27）は，いずれも弥生中期に比定できる。24は，口縁部内面に２本，頸部に１本の凸帯が貼り付けられている壷形土器である。25は口縁端部に櫛描きの斜格子文が施され，口縁内面には同じ斜格子文と波状文が見られる壷形土器である。26は，口縁端部に凹線文があり，その凸部に刻み目を入れ，口縁内面には斜格子文と円形浮文が見られる壷形土器である。27は，甕形土器底部で内外面ヘラによる整形が見られ，やや上げ底の底部ほぼ中央に外から穿った穴が見られる。



第83図　P－003(1～11)・P－004(12～14) 及びその他のピット出土遺物

土師器（1～22）は甕形土器，甑，鉢形土器・手捏ね小形土器，その他が見られる。甕形土器は，頸部が「く」の字状に外反するもので，口縁端部は，丸く作られているもの（1・2）と面を有するもの（3・4），とがある。体部・底部は丸く作られている。内面は，いずれも粗いヘラ削りで，外面は，櫛目が見られる。鉢形土器（6）は口径23cm器高12cmを測る大きなものである。甑は，1対の牛角のような把手が胴部最大径の位置につき，底部が空洞となっている。底部近くに4つの小円孔を持つもの（8）と円孔のないもの（10）とがある。手捏ね小形土器（11～22）は，口径2～4cm器高2～3cmの極めて小さな土師器で祭祀用のものと考えられる。その他7は，口径13cm器高13.5cmを測る坩形土器である。5は，「く」の字形に外反する口縁をもち，口縁端部に面をもち，口縁部と体部の境に円盤状のひさしを有する土師器で，羽釜と考えられる。9は，「く」の字状に外反する口縁の端部に面をもち，頸部に1対の円孔を有し，体部は砲弾形を呈し，底部は空洞で橋状の把手が付いているきわめて特殊な形状をもった土器で，甑に使用されたものと考えたい。23は，土師器の紡錘車で直径4cm厚さ2cmを測り，ソロバン玉形を呈している。

石器（28・29）は，砥石が出土している。石材は，砂岩である。

須恵器（30～67）は坏身・坏蓋・壷・瓶・高坏・甕等が多量に出土している。坏蓋は，天井部が扁平で，口径12～14cmを測り，天井部と口縁部をわける稜線が鈍く，口縁端内面に傾斜を

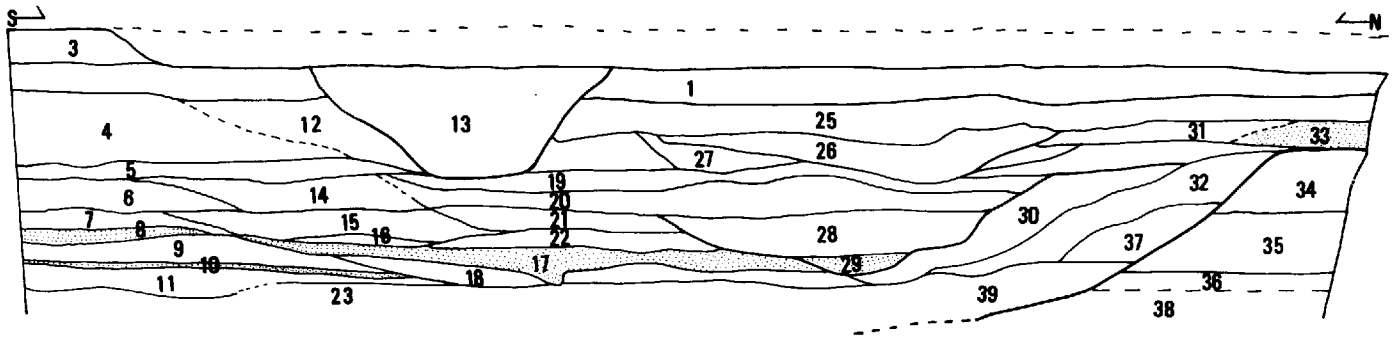
もつもの（33）が最も多い形態である。口縁端部を丸くおさめているものは，ほとんど見られない。坏身は，最も多いのが口径14cmと大型で，たちあがりは内傾度が高く，端面は内傾し，受部は外上方に伸び，端部の稜はあまく，底部は扁平な感じで，ヘラ削りは底部全体の3分の1弱であるもの（49）である。たちあがり端部を丸くおさめているもの（60）も多い。61の坏は，口径13cmで口縁部がやや外反し端部を丸くおさめていて，底部平は底でヘラおこし痕が見られる。62の壷形土器は，口縁部を欠いているが，体部外面指ナデ，内面ヘラ削り仕上げされている。63は，頸で口径9.6cmを測り，口縁部はやや内彎し，端部はやや内傾した面をもつ。口縁部と頸部の境は，鋭い稜線をもち，口縁部および頸部には波状文が認められる。64は，短脚の高坏脚部で，円形の透しを4個もつ。65は，壷の口縁と思われ，内面に斜格子文が見られる。66は，口径10cmの直口壷で，胴部下方三分の一から底部にかけて外面格子目，内面同心円の叩きが認められる。67は大形の甕形土器で，口径20cm器高46cm胴部最大径42cmを測り，頸部から「く」の字状に外反する口縁をもち，端部は上下に肥厚している。最大径は，胴部の上方$\frac{1}{3}$の所にあり，底部は丸く作られている。外面には格子目の叩きの後部分的に横方向の刷毛目，内面上方$\frac{2}{3}$まで同心円の叩き目，$\frac{1}{3}$下方はそれが消されている。

D－001下層出土遺物（第89図）

下層でも多量の須恵器・土師器と，若干量の弥生式土器と石器が出土している。

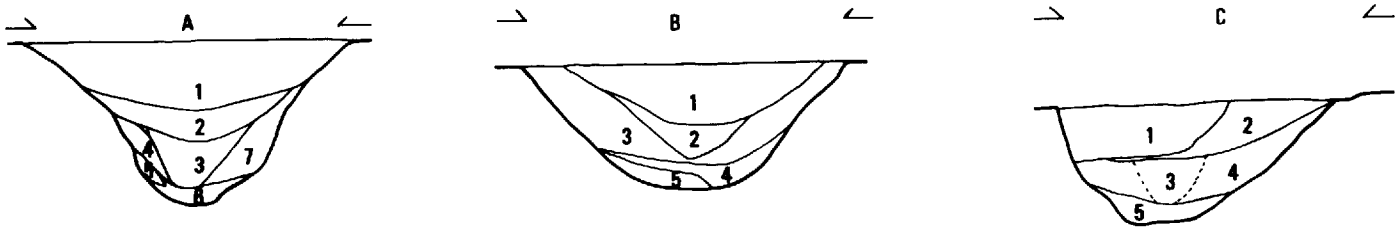
須恵器は，蓋坏・坏身・高坏等が見られる。1は，坏蓋で，天井部はやや扁平でツマミが付く。口径は12.2cmを測り，天井部と口縁部との境の稜線は鈍い。口縁部は，ほぼ垂直にたち，端部は内傾し，浅い凹線をもつ。天井部のヘラ削りは$\frac{2}{3}$強を占める。2は，坏蓋で全体に丸味をおびていて，口径は10.2cmを測り，口縁部はやや外に開く。端部は内傾した面をもつ。3は，坏蓋で，扁平な天井部の$\frac{1}{2}$がヘラ削りで，口径は13.5cmを測る。口縁部との境の稜線は鈍く，口縁部はほぼ垂直であり，端部は内傾した面をもつ。4は，焼けひずみの大きい坏蓋で，口径は14cmを測る。天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁部はやや外に広がり端部内面には，浅い凹線をもつ。5は，坏蓋で口径15cmを測り，天井部と口縁部との境に鈍い凹線をもち，口縁端部は内傾する面をもつ。6は，坏身で口径10cmたちあがり1.8cm器高5mを測る。たちあがりは，やや内傾し，口縁端部も内傾する。受部は外に水平に出て端部の稜線はやや鈍い。体部と底部が分けられる。7は赤褐色を呈する坏身で，口径11cm器高5cmたちあがり2cmを測り，たちあがりはやや内傾し，端部に浅い凹線をもつ。受部は外に水平に出て端部の稜線は明瞭である。土師器というよりも須恵器の焼成が悪いものと考えたい。8・9も坏身で，口径12cm器高5cmを測る。7よりもやや大型である以外同形態である。10の坏身は，口径11.8cm器高4.2cmを測り，たちあがりはやや低く，端部がやや丸く感じられ，受部は外上方に伸びる。11の坏身は，口径12.2cm器高4.2cmを測り，たちあがりは低く，受部よりやや長い程度である。12は短脚の高坏で，脚部に細長い長方形の透しを1段3カ所にあけている。脚端部は丸く誇張している。

土師器は，高坏が多く，他に台付埦・坩形土器・直口壷，手捏ね小形土器などが見られる。



1．黒褐色粘質土（須恵器，土師器包含層）
13．D－001
17．灰褐色砂（弥生中期土器包含層）
18．灰青褐色粘土（弥生中期土器包含層）
26．灰茶褐色粘質土（土師器～弥生中期土器包含層）
28．暗灰褐色礫層

0　1　2m

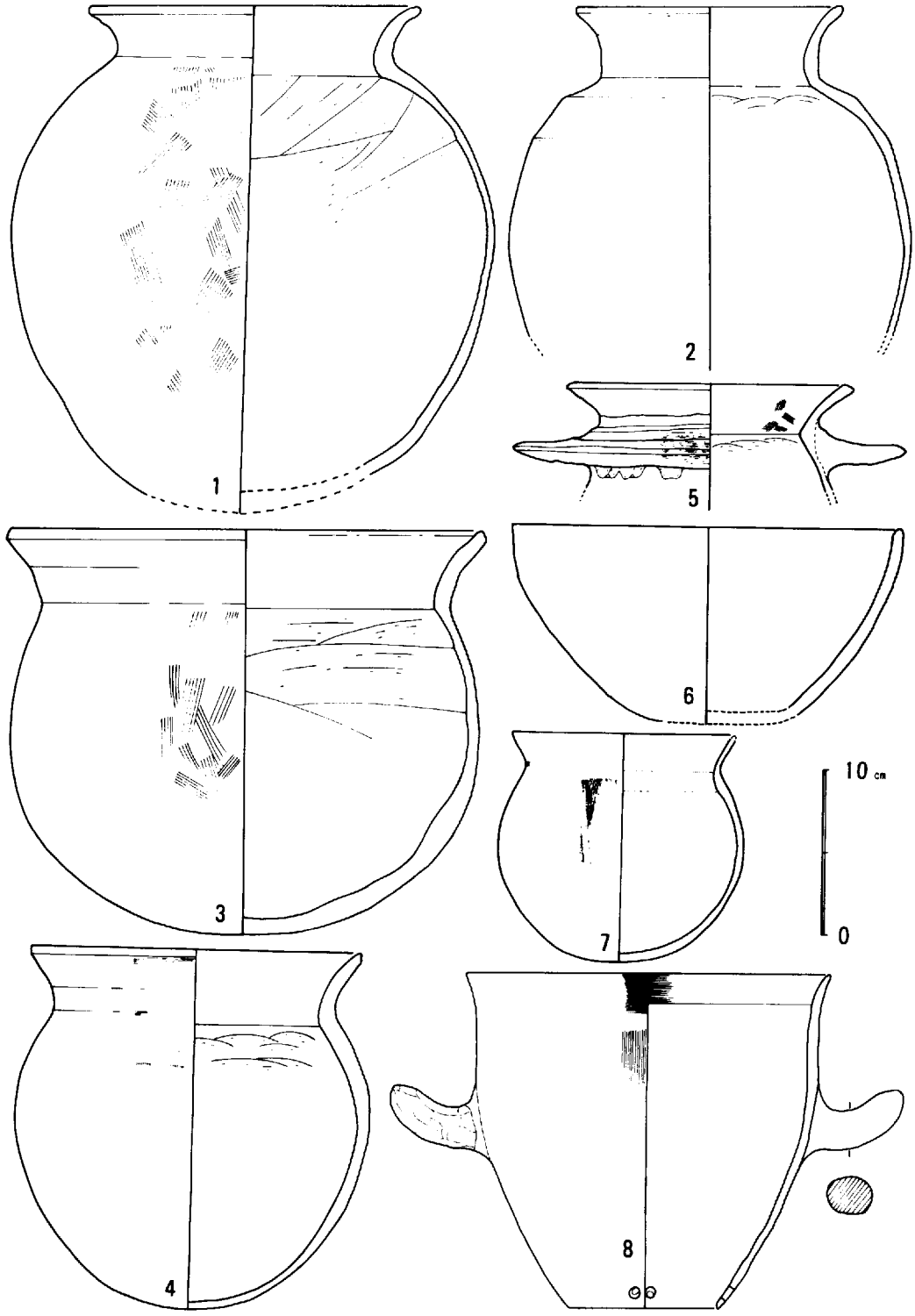


上層｛1．茶褐色粘質土
　　2．茶褐色粘質土(礫多し)

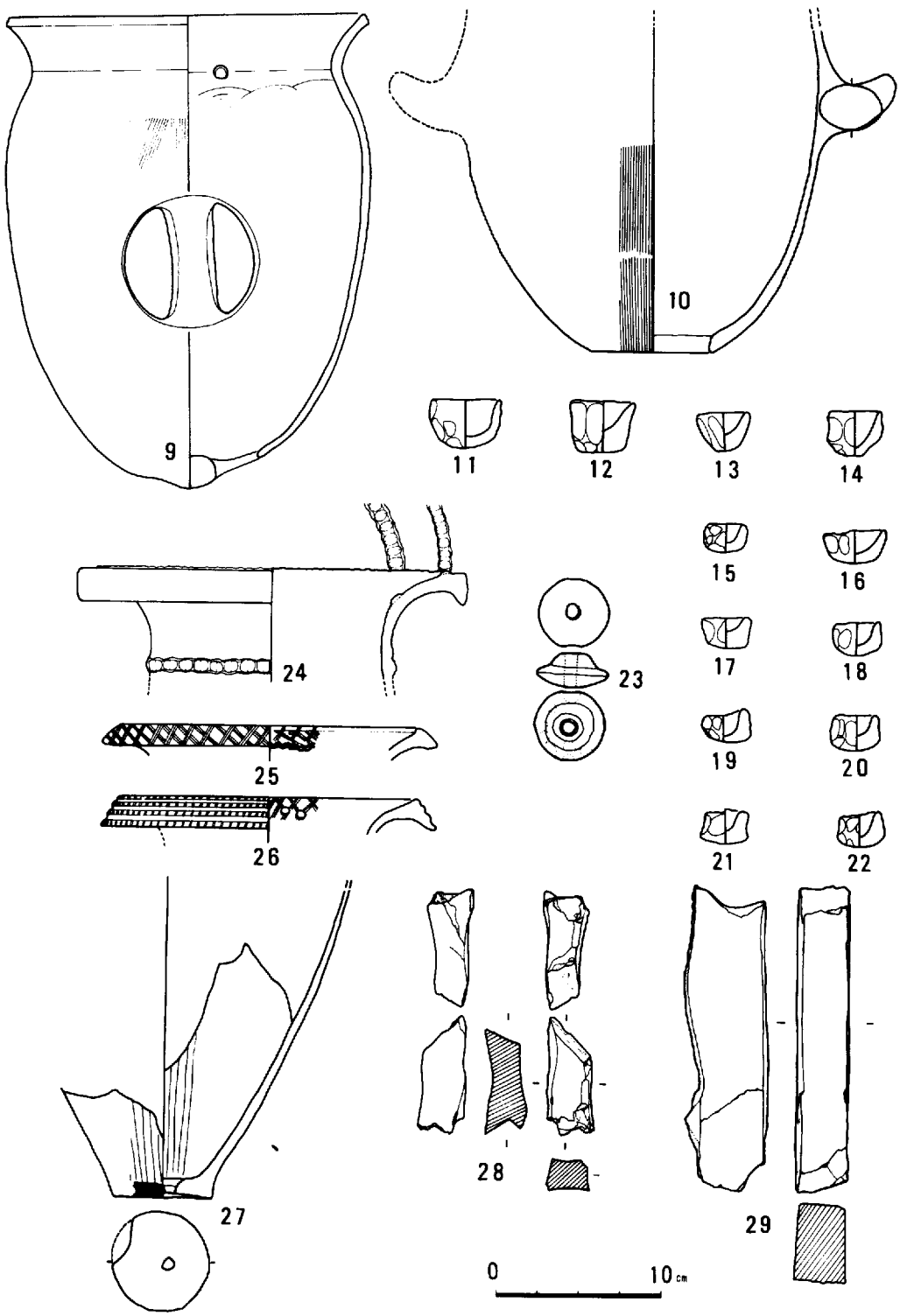
下層｛3．暗褐色粘質土
　　4．灰茶褐色粘質土

5．灰茶褐色砂質土
6．灰褐色砂質土

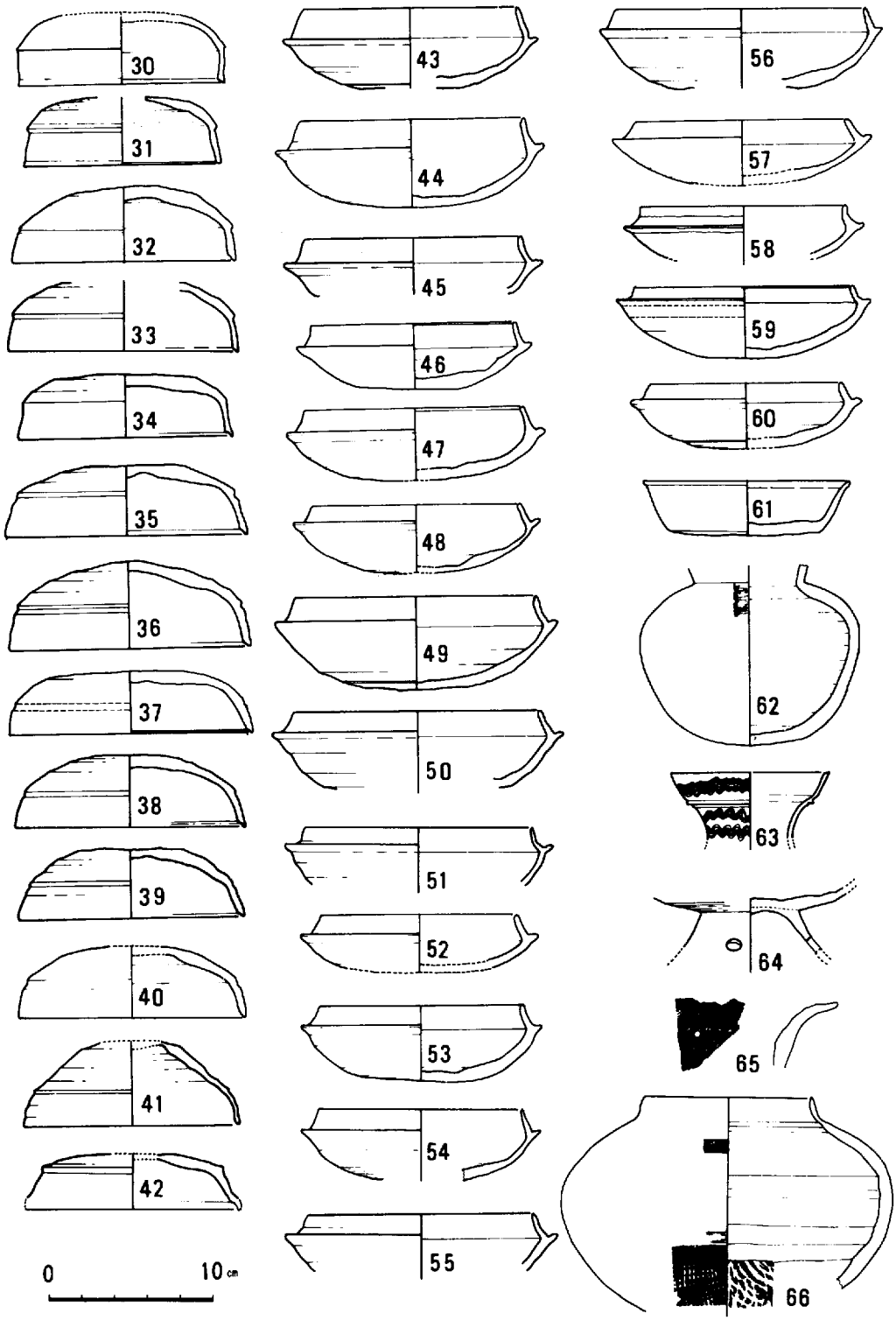
第84図　D－001土層断面図(レベルは144.7m)



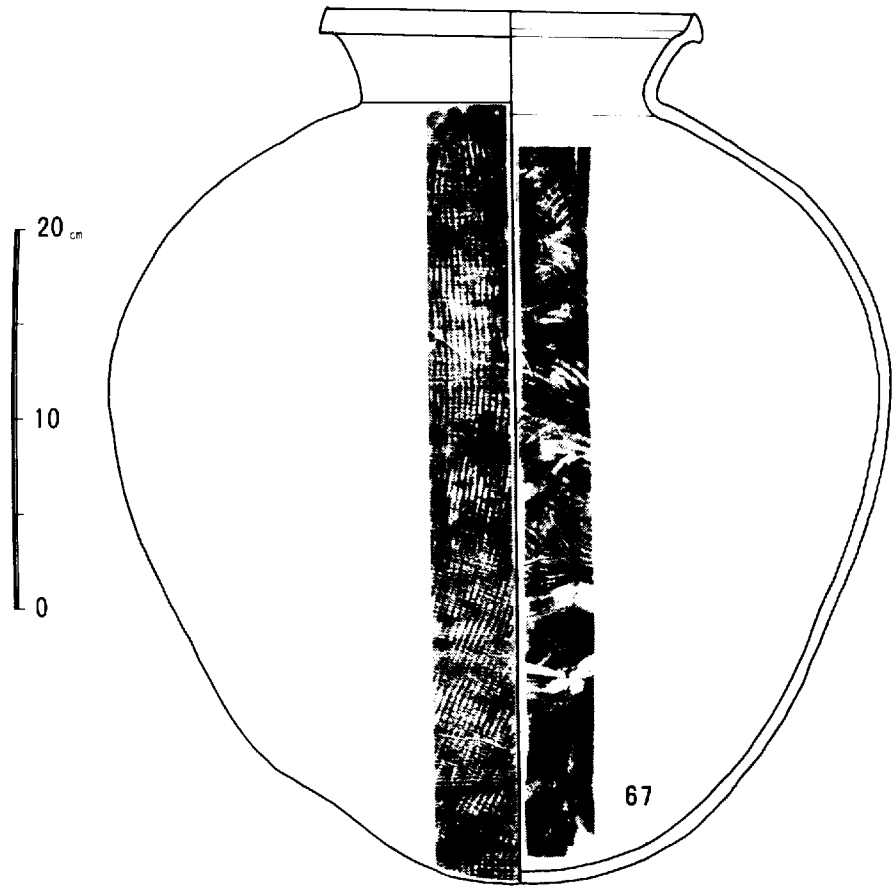
第85図　D－001上層出土遺物



第86図　D－001上層出土遺物



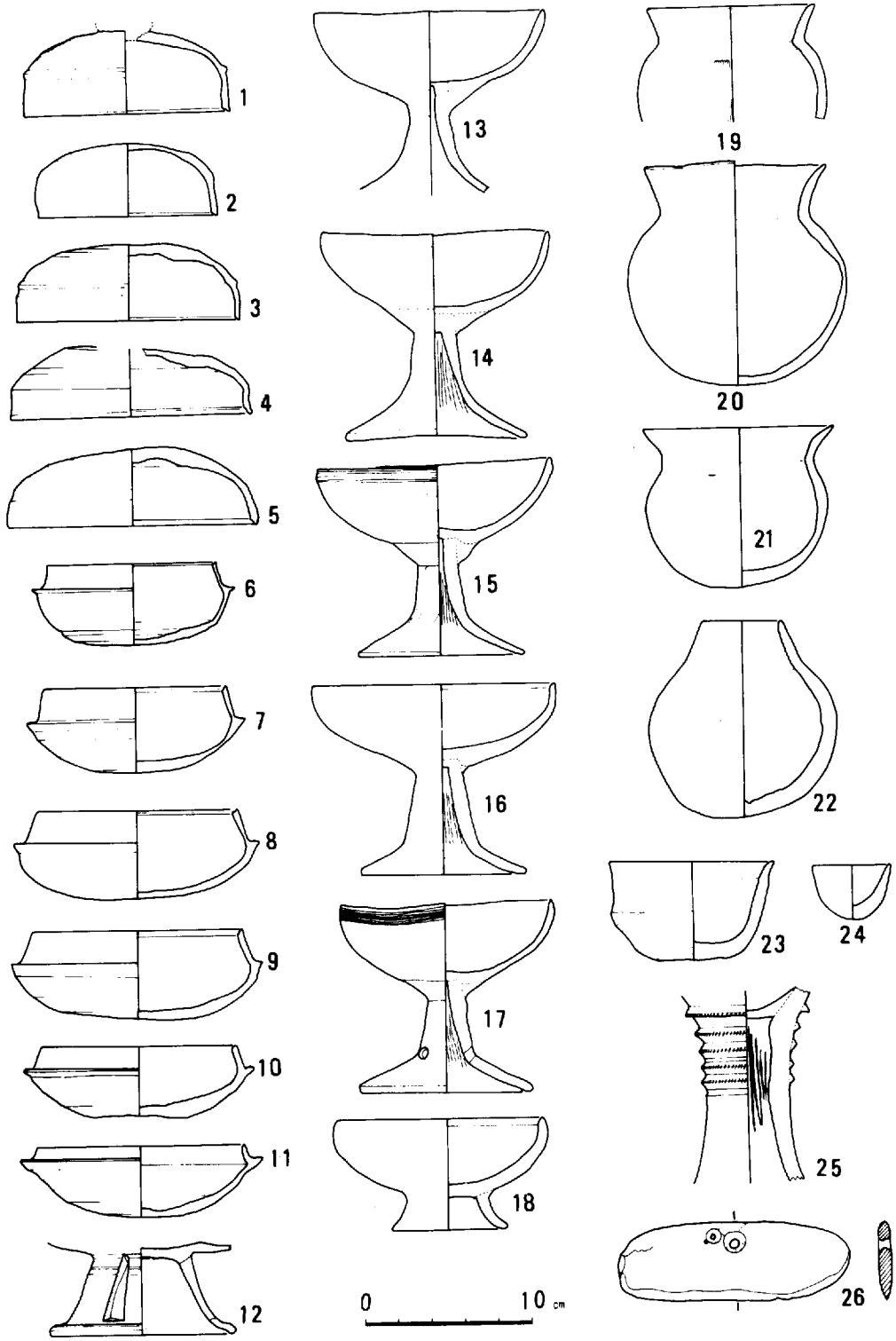
第87図　D－001上層出土遺物



第88図　D－001上層出土須恵器

高坏形土器（**13～17**）は，口径13～14㎝器高11～12㎝でほぼ同じ大きさである。坏部は椀形をなし，口縁部外面には櫛描きの沈線文のあるものとないものがある。口縁端部は，やや鋭くなっている。脚部は，円筒形の脚と「く」の字状に開く裾をもち，端部は丸くおさめている。脚と裾の境に３個の円孔をもつものもある。18は，台付椀形土器で，口縁端は，内傾する面をもち，台は外彎し端部を丸くおさめている。坩形土器（**19～21**）は，いずれも頸部から「く」の字状に外反する口縁をもち，体部・底部は球形に近い。口縁端部は，やや鋭く作られている。**22**は，直口壷で口径５㎝器高12㎝を測る赤黄褐色の焼きの悪い土器である。**23**は，口径10㎝高６㎝を測り，外面ヘラ削りの粗い仕上げの椀形土器である。**24**は，上層で多く出土したものと同じ手捏ねの小形土器である。

弥生中期の土器は，高坏形土器脚部（**25**）が出土している。５本の刻み目凸帯を貼り付け，脚内面には，しぼり目が見られる。石器は磨製の石庖丁が出土した（**26**）。円孔は，中央に１個見られ，他に２回の穴をあけた痕跡が認められる。石材は，黒色の頁岩と思われる。



第89図　D－001下層出土遺物

D－002及び出土遺物（第77図・第90図）

P－004およびP－001の北で検出された長さ20m巾60cm深さ40cmの断面U字形を呈す溝状遺構である。P－004の北で2本に分枝する。北側の溝は，長さ3m巾30cm深さ20cmと小さく短かい。底部のレベルからみて北東から南西に水が流れると考えられる。

遺物は，壷形土器・甕形土器・石庖丁・石鏃等が出土している。1は，壷形土器で，口径11cm器高24cm最大径13cmを測り，口縁部はやや外彎し，端部を丸く作る。最大径は，体部のほぼ中央にあり，底部は平底である。内面縦方向のヘラ削りは，底部と体部の$\frac{1}{3}$まで施され，外面は，部分的にクシ目が残っている。胎土は，砂粒を少量含み，黄褐色を呈する焼きの良い土器である。弥生中期と思われる。2は，甕形土器で逆L字状の口頸部をもち，端面には刻み目を，頸部下には櫛描き文が見られる。その下には波状文も見られ，弥生中期と思われる。3はやや外反する口頸部をもつ甕形土器で，口縁端部に刻み目，体部に数条のヘラ描沈線文が施されている。弥生前期と思われる。4はサヌカイト製の石鏃で長さ2.2m最大巾2cm厚さ1.5mmを測り，二等辺三角形でわずかかえりをもつ。5は，変成岩の磨製石包丁片で，円孔は上下のほぼ中央にあけられている

以上遺物から見ると，D－002の時期は，弥生中期に比定できる。

D－003及び出土遺物（第77図・第90図）

H－001に切られて検出された長さ24m巾10cm深さ約40cmの断面U字形を呈する溝状遺構である。グリッド4－Dの東端からゆるくS字状に蛇行しながら西へ伸びグリッド3－Dの南東部で消失する。底面のレベルから東より西へ水が流れるものと考えられる。出土遺物からみて弥生中期に比定したい。6は，長頸壷形土器の口頸部片で，口径4.8cmを測り，端部を平に作り，外面には描書き文・波状文を施し，端部から1cmの位置に小さな円孔を4つあけている。7は，壷形土器で口径13.5cmを測り，口縁端部は水平に作られ，頸部には2本の刻み目凸帯を貼り付け，体部外面は櫛目調整されている。8は甕形土器で，体部最大径は体部のほぼ中央にあり，そこに刺突文が施され，外面ヘラ磨き調整され，底部はやや上げ底になっている。9は，口径21cm器高29cm最大径は体部の上$\frac{1}{3}$の位置にあり，20cmを測る甕形土器である。「く」の字状の口頸部をもち端部を平にし，体部最大径に刻み目を施し，体部上方の内外面櫛目調整・下方内外面ヘラ磨き調整されている。底部は，上げ底が顕著である。10は，「く」の字状の口頸部をもち，口縁部がやや肥厚し端部に面を作る。最大径は，体部のほぼ中央に位置する。底部は，やや上げ底である。中央に内側から打ちかいた円孔をあけている。甑として使用されたものと思われる。調整は，体部上方から$\frac{1}{3}$までハケ目で，以下底部までヘラ磨きである。

Ⅳ．遺構に伴わない遺物（第77図・第91～94図）

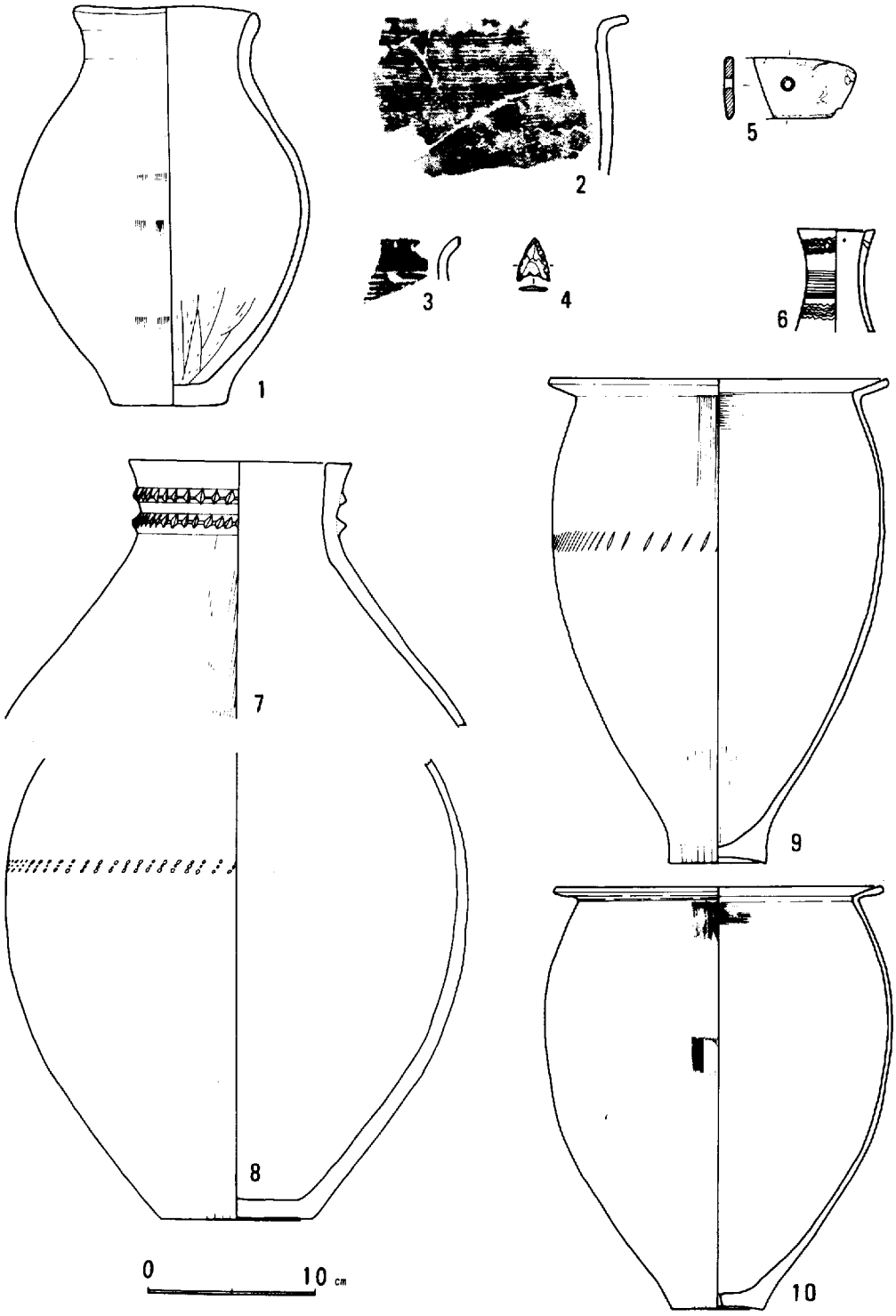
グリッド5－EにD－001が，さらに伸びるかどうかを断面で確認することと，3区の基本的土層を観察する目的で縦10m横6.5m深さ約2mの坪掘りを行なったところ，D－001の断面は確認され，さらに数層の遺物包含層が認められた。それを大きく三つに分けると，上層では，D－001の遺物を含むと思われるが，須恵器・土師器が多量に，しかも完形品を含み，中

層では，土師器から弥生中期の土器まで含み，下層では，弥生中期の土器が主として出土している。遺物は総量として整理箱に3杯分も採集された。

縄文式土器（第91図－1）は，1点出土している。口頸部には条痕が見られ，体部との境に爪形文を施している。内面は，ヘラ磨きで整形され，胎土に雲母粒を多く含み，茶褐色を呈する焼きのよい土器である。P－002出土の縄文式土器と同じ形態で，縄文晩期と思われる。

弥生式土器（第91図－2～11）は，前期の土器は見当らず，中期の土器が多く（2～7），後期の土期は比較的少ない（10～11）。2は，ヘラ描き沈線文のある甕形土器体部である。3は，蓋形土器で，つまみ上端部は平坦で，蓋部はやや上方にあがり，端部は平らである。蓋端部から1㎝内側に2対，4個の小円孔が垂直にあけられている。胎土は，微砂粒を含み，黄褐色を呈した焼きの軟かい土器である。4は，無頸壷形土器で，口縁端面と口縁端外部に刻み目を施し，削り出しの断面三角形凸帯を4本もち，それぞれ刻みをつけている。砂粒を含み，赤褐色で，焼成良好である。5は，長頸壷形土器で，口縁部は，やや垂れ下がって，端部は上下に肥厚し，端面には波状文が見られる。口縁部内面には櫛状工具による刺突文と，ヘラ描きの細い波状文を施している。頸部外面は，櫛目調整し，胎土に砂粒を多く含み，赤褐色を呈した焼きの良い土器である。6は，刻み目凸帯を貼り付けた壷形土器である。7は壷形土器の頸部で，ハケ目調整の上にヘラ描きの沈線文・波状文を交互に施している。8は甕形土器体部の廃物を利用した紡錘車である。9も，甕形土器体部の刺突文のある部分を利用した紡錘車である。10は，「く」の字状の頸部をもつ甕形土器で，口縁部は，上方に立ち上がる二重口縁で外面に数条の櫛描きの沈線を施す。11は，10と同様で体部内面ヘラ削り整形している。

土師器（第91図—12～26，第92図—27・28）は，壷・甕・甑・埦・高坏等が見られる。12は埦形土器で，口径12㎝器高5㎝を測り，扁平な器形で丸底から内彎しながら上方へ口縁端部を垂直につまみあげている。器表面に4本の沈線がみられる。13は，台付埦形土器の台と思われる。14は，手捏ねの土器である。15も手捏ね土器である。16は，甕形土器の二重口縁のたちあがりは弱々しく，端部はとがっている。17は，二重口縁をもつ壷形土器で，たちあがりはやや外傾し，端部は面取りしている。18は，甑で，二個の牛角状の把手をもち，口縁端部はやや外反し，底は空洞と思われる。19は，「く」の字状の口縁部をもち，端部をやや外に開いている甕形土器である20は，高坏形土器脚部で，筒部は長くしだいに広がり，裾部は外彎して大きく広がり，端部は少し上方につまみあげている。21の高坏は，筒部中央がややふくらみ，「く」の字状に広く裾端部内側には浅い凹線が見られる。筒外面はヘラ磨き，内面にはしぼりの痕が認められる。22の高坏は，長い筒部はゆるやかに広がり端部内面が接地する。外面はヘラ磨き調整されている。23は，甕形土器で，鈍い「く」の字状口縁をもち，端部はやや外開きである。頸部内面に稜線があり，ヘラ描沈線が認められる。24は，口縁が外彎し，端部を少しとがらせている甕形土器で，胴部内面ヘラ削り外面櫛目調整がみられる。25の甕形土器は，途中屈折して外反する口縁の端部を丸くおさめている。26の甕形土器は，「く」の字状の口縁はやや内彎し，端部を丸くおさめている。27の甕形土器は，「く」の字状の口縁がやや外反し，内面



第90図　D－002(1～5)及びD－003(6～10)出土遺物

に沈線が見られ，口縁端部を面取りしている。体部外面横目，内面ヘラ削り調整されている。28の塊形土器は，器壁が薄く，口縁部を少しつまみ上げている。29の塊形土器も口縁部を少しつまみあげるくせをもっている。

須恵器(第93図)は，坏・蓋・高坏・瑞等が見られる。坏（12～21）はたちあがりが2㎝のもの（12）もあるが，最も多いのは，14のような形態である。すなわち，たちあがりは1.4㎝で内傾し，途中で垂直に立ち，端部は鋭く作る。口径は13㎝器高4.5㎝を測り，受部は外上方へ伸びる。17は，数少ない内外面に叩き目が残っている土器である。20・21のように高台の付くものは非常に少量である。蓋（1～11）は，つまみのつくものも少量出土している。つまみは中央が凹んだもので，宝珠形のものは見られない。高坏（23・24・27）には，短脚1段透しのものと，長脚2段透しのものが見られる。いずれも細長い長方形透しは，3カ所に開けられている。瑞（25）は，1点みられた。26は，無蓋高坏の口縁部であろう。

以上の5－Eグリッド坪掘りの際出土した土器以外に3区では，遺構検出面までの表土・客土，そして遺構検出時に出土した遺物も多い。トレンチ出土遺物・表面採集遺物も含めて説明したい。

（94図）1は，サヌカイト製の石包丁で，2・3は，蛇紋岩と思われる緑色の磨製石庖丁である。4は，土師器塊形土器で，器壁は非常に薄い。5は，土師器小皿で，トレンチ－Hから出土した。6もトレンチ－Hから出土した土師質の土錘である。7は弥生中期の壷形土器片である。

V．3 区 小 結

遺物は，縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・鉄器等が出土し，遺構は，溝状遺構・竪穴住居址・ピット等が検出された。遺構の時期は，縄文晩期・弥生中期・古墳時代の3時期に分かれる。すなわち3時期が複合した遺跡と考えられる。縄文時代の遺構は，ピット1個であり，弥生時代の遺構は，袋状ピット2個とピット数個，溝状遺構2本あり，古墳時代のそれは，竪穴住居址3軒と溝状遺構1本である。縄文時代の遺構を除けば，2区の遺構の在り方を極めて類似している。2区の西には4区があり，この4区に縄文晩期の貯蔵穴群があることから3区は，2区と4区を小さくしたような感さえある。

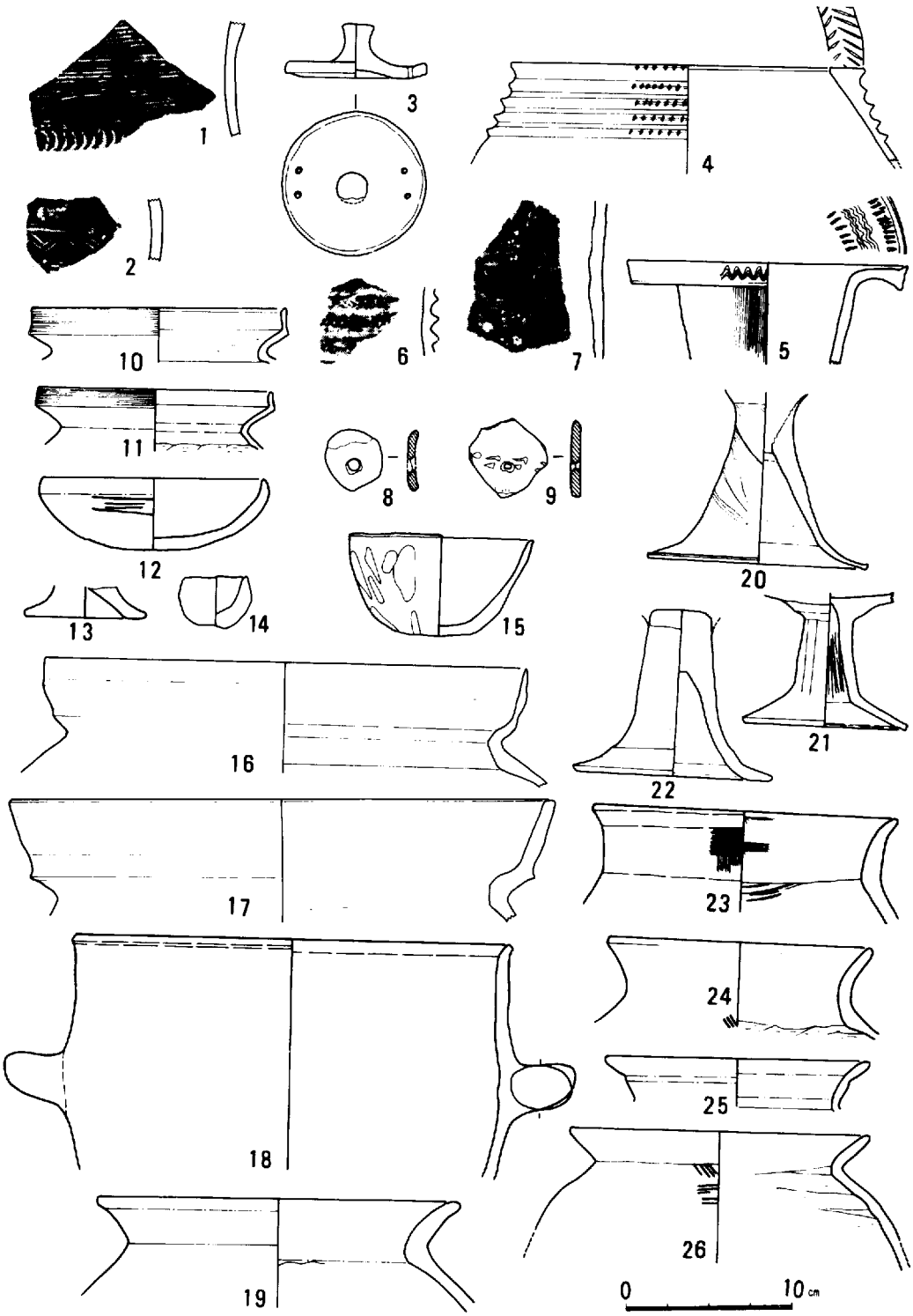
3区の性格をあえて言えば，2区同様古墳時代の集落址と考えられる。住居址は，わずか3軒しか検出できなかったが，D－001に落ち込んでいる土師器・須恵器の量から考えて削平された住居址がかなり多数あったものと想像される。またD－001は，水田耕作のための潅漑用水路と考えられる。

また3区の遺構はFトレンチ調査の結果微高地上あることが判明している。したがって一色宮の前遺跡の3区と考えるよりも，別の大井出遺跡として考える方が妥当と思われる。

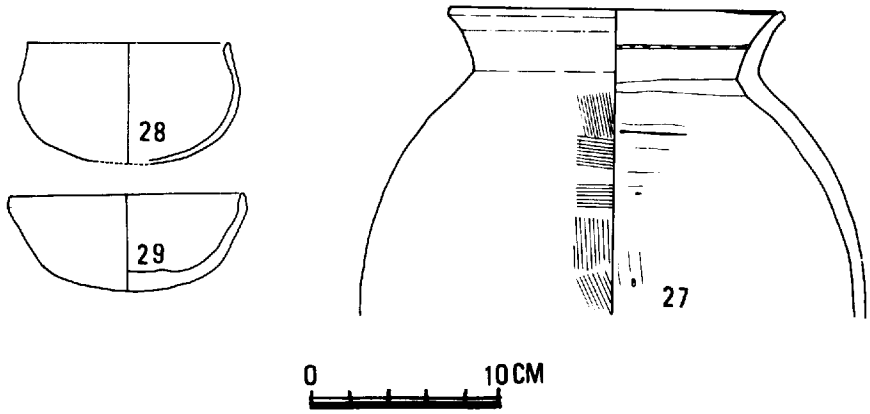
4．4 調 査 区

貯蔵穴群（第95図）

4調査区範囲内にあってほゞ中央を路線にそったように溝が走っている。ピット群はこの溝より南側に一群となって検出された。貯蔵穴群は溝をはさんで総数41穴が確認された。その中



第91図　5－Ｅ包含層出土遺物



第92図　5－E包含層出土遺物

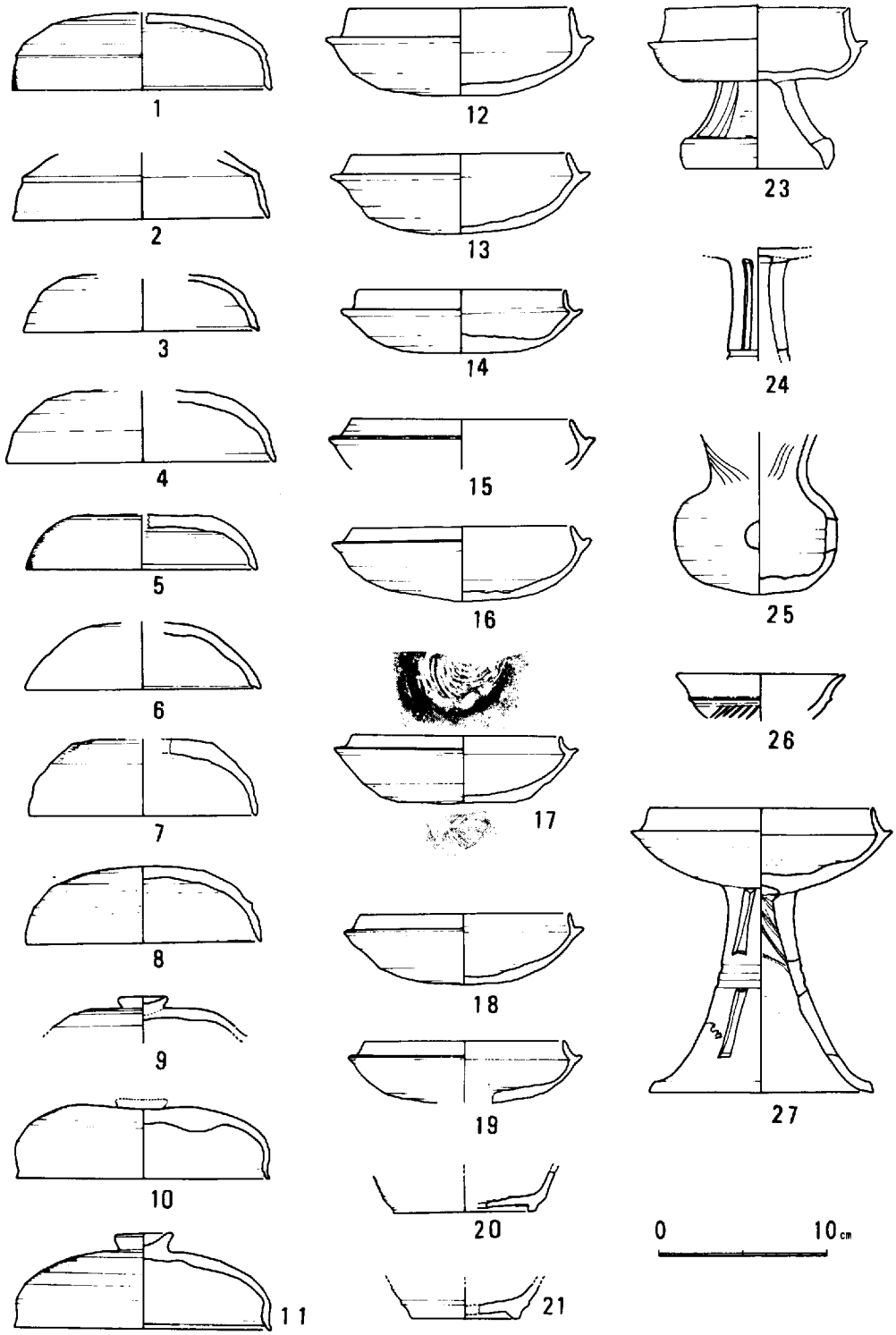
には重複したもの，新しく掘られて一部が存在するだけのものも含んでいる。また貯蔵穴埋没後，住居址（弥生後期），が作られている。溝は古墳時代以後のものである。

貯蔵穴群の規模は大別すると3種類に分けることができる。さらにこれらの貯蔵穴のなかには埋土中より縄文晩期の土器片が出土している。遺物はほかにサヌカイト製の石鏃も数点含まれていた。大部分の土器は，住居址の検出されている地点を中心にして出土している。従って縄文晩期の時代にこの地域で生活を営んでいた同時代人の生活の一端がうかがえる貴重な遺構である。しかし，生活の本拠地となる住居址，その他柱穴は確認されなかった。この地点は生活が中心になっているのではなく，貯蔵穴内より出土するドングリ，或いは地形等から推測してみると，貯蔵穴に隣接して旧河川と考えられる水系が南北に流れている。よって水は豊富であったのであろう。調査時において貯蔵穴を掘り下げると，自然と水が湧き出してくる。さらに貯蔵穴の最下床には細砂が敷かれている（すべての貯蔵穴に行なわれているのではない）。従ってこのような状況から推測して，食糧の貯えに用いたのではなく，出土したドングリなどは，〝アク，渋〟がきついため直接口にはこぶことはむずかしい，従って水の中に浸して，〝アク，渋〟抜きを行なう目的で掘られたものであろう。第98図～第100図，貯蔵穴土層断面図においてP－3において土層番号11では木の葉，小枝，草（アシ，カヤ，etc，の類）が堆積している。これはドングリの上に直接土を被うのではなくて前述の草木でもって蓋をし，その後で掘り上げた土でもって埋めもどしてある。

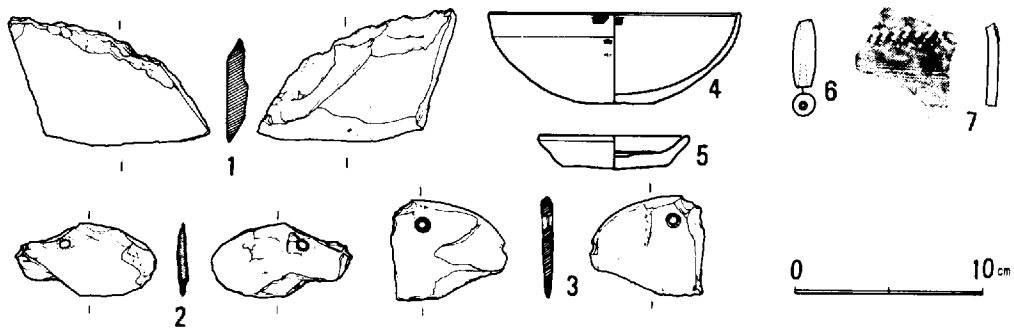
P－26（第102図）の土層では攪乱が著しく乱れていた。これは埋められていたドングリを取り上げたように思われる。以上2ツの貯蔵穴について概略を記してみた。

さらに規模の上から3通りに大別した。それは径2m前後，1.5m前後，1m前後である。従ってこれらは同時に掘られたものとは考えられない。よって縄文時代晩期の相前後の時代が重複しているのであろうと予測される。

なお宮の前遺跡の貯蔵穴群が報道されると“美作の自然と文化財を守る会”等の保存が強く



第93図　5－Ｅ包含層出土須恵器



第94図　3区 表採遺物

要望された。そして，協議の結果溝より南側の約800㎡が土盛りによって保存されることになった。土盛り保存に先だってすべての貯蔵穴は45㎥の川砂でもって埋めもどした。

保存方法についてはいろいろ検討されたが最終的には土盛り方式と決定され，3者立ち会いのもとで昭和49年12月24日，25日の2日間で埋めもどしが行なわれた。厚さは1m強で，使用された土量は約1,000㎥である。

4区住居址（第96図，図版52—2，56—2）

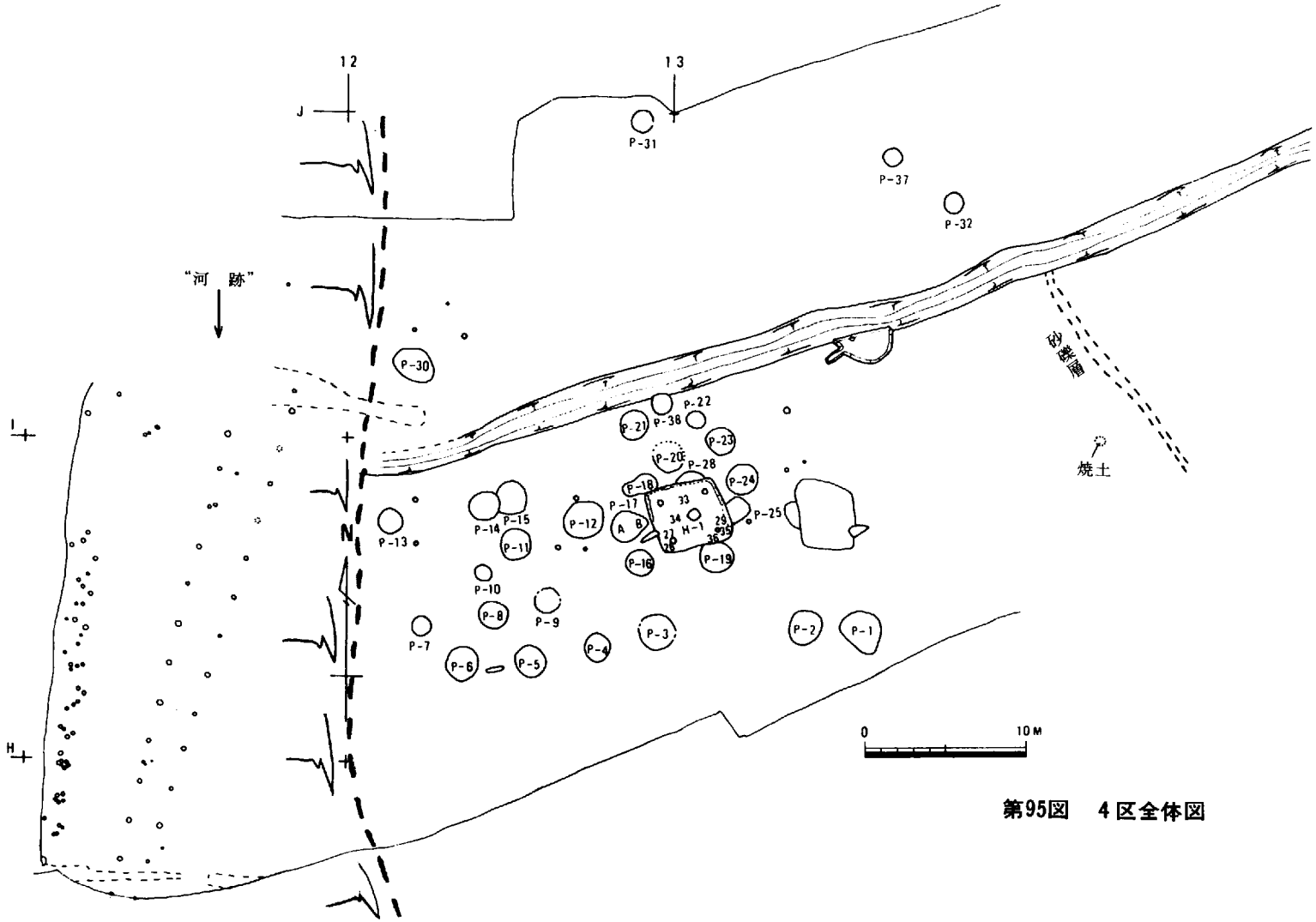
4調査区中央よりやゝ西よりに位置し，柱穴4，中央ピット1が検出された。北辺4.2m，東辺3.8mとわずか東西に長い不整方形の住居址である。中央ピットは中央よりわずかに東によった位置に造られている。また壁帯溝は南壁においては認められず，その他では部分的にのみ確認されたにすぎなかった。壁は水田のため削平を受けてほとんど残っていない。出土遺物は中央ピット内よりのみ出土しているにすぎない。遺物からみて住居址は弥生後期と思われる。

柱穴列—Ⓐ（第101図—Ⓐ，図版57）

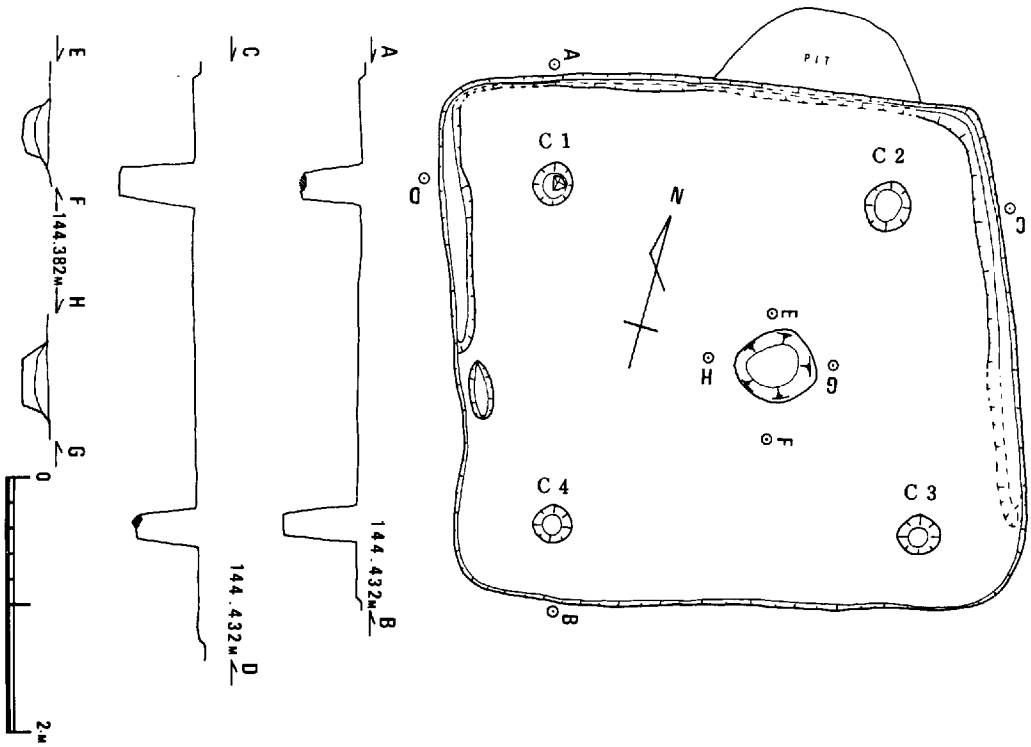
4調査区西端に磁北に対して東に振って，径35～40cmで円形の柱穴で北側柱間が3.3m，南側柱間は1.6mと北に広く，南になるにつれて狭くなったもので，柱間はほぼ一定しているものの，やはり北が長く，南が短くなっていることが確認され，方向は直線的で二列である。また南側については用地外になるため続行して調査，確認はされなかった。さらにいくつかの確認された柱痕跡からみて15～20cm大のものであったろうと推定する。柱穴群の残存度は深さ30～50cm前後である。これらの柱穴群からの出土遺物は皆無に近いが，土錘1点，須恵器の細片がみられた。その中に高台坏の破片があり，7世紀代に比定できそうである。柱穴の埋土はいずれも淡黄灰色砂混じりである。層位的な観点からも条里遺構の盤をなしていた面とほぼ同一（奈良時代ないしはそれ以後）の層位に作られた可能性がある。さらにこの遺構は，畦畔とも考えられる。

杭列—Ⓑ（第101図—Ⓑ，図版57）

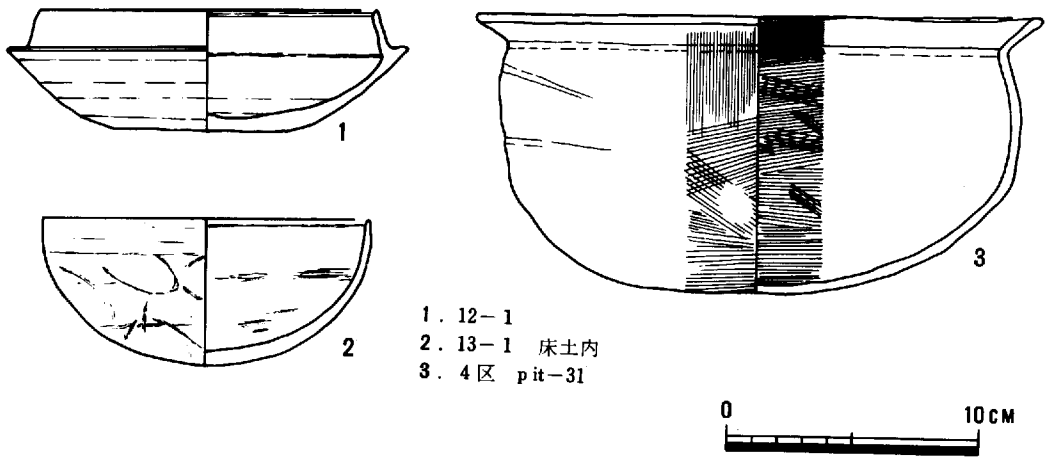
発掘地点内での関連遺構の存在は，柱穴列—Ⓐの西に隣接したもので，Ⓐとは異って単独的なものであり，この遺構は杭列であると判断するより他に機能を見出しがたいものである。


12
13
J
I
H
N
"河 跡"
P-31
P-37
P-32
P-30
P-22
P-38
P-21
P-23
P-20
P-28
P-24
P-18
P-17
P-25
P-14
P-15
P-12
P-13
P-11
P-16
P-19
P-10
P-8
P-9
P-7
P-6
P-5
P-4
P-3
P-2
P-1
A
B
H-1
33
34
29
27
36
砂礫層
焼土
0
10M

第95図　4区全体図

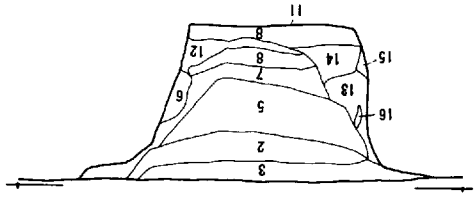


第96図　住居址実測図

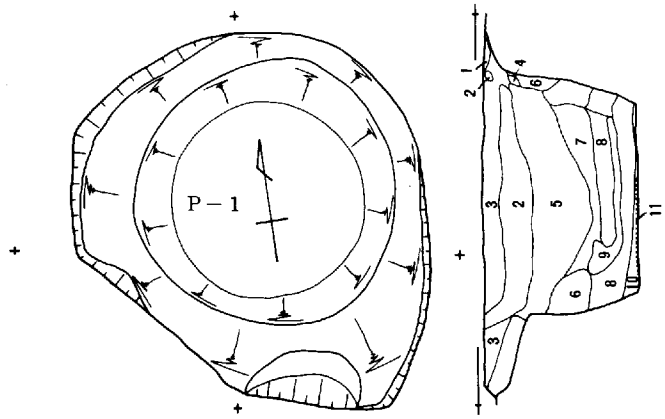


1．12－1
2．13－1　床土内
3．4区　pit－31

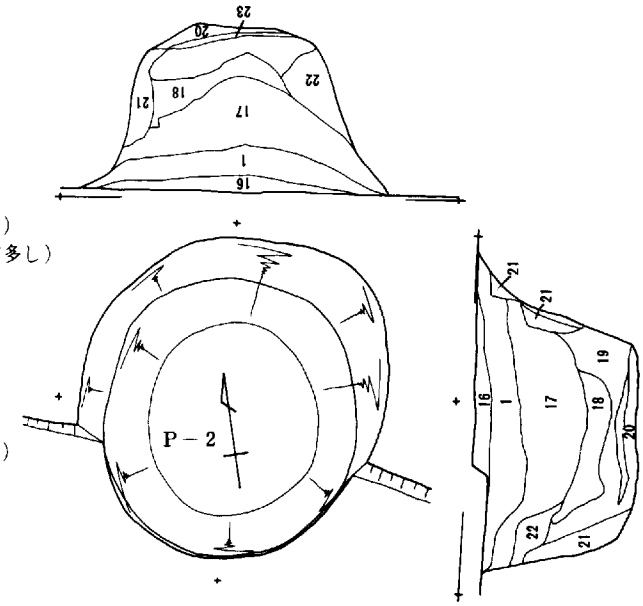
第97図　出土遺物



L：144M・423

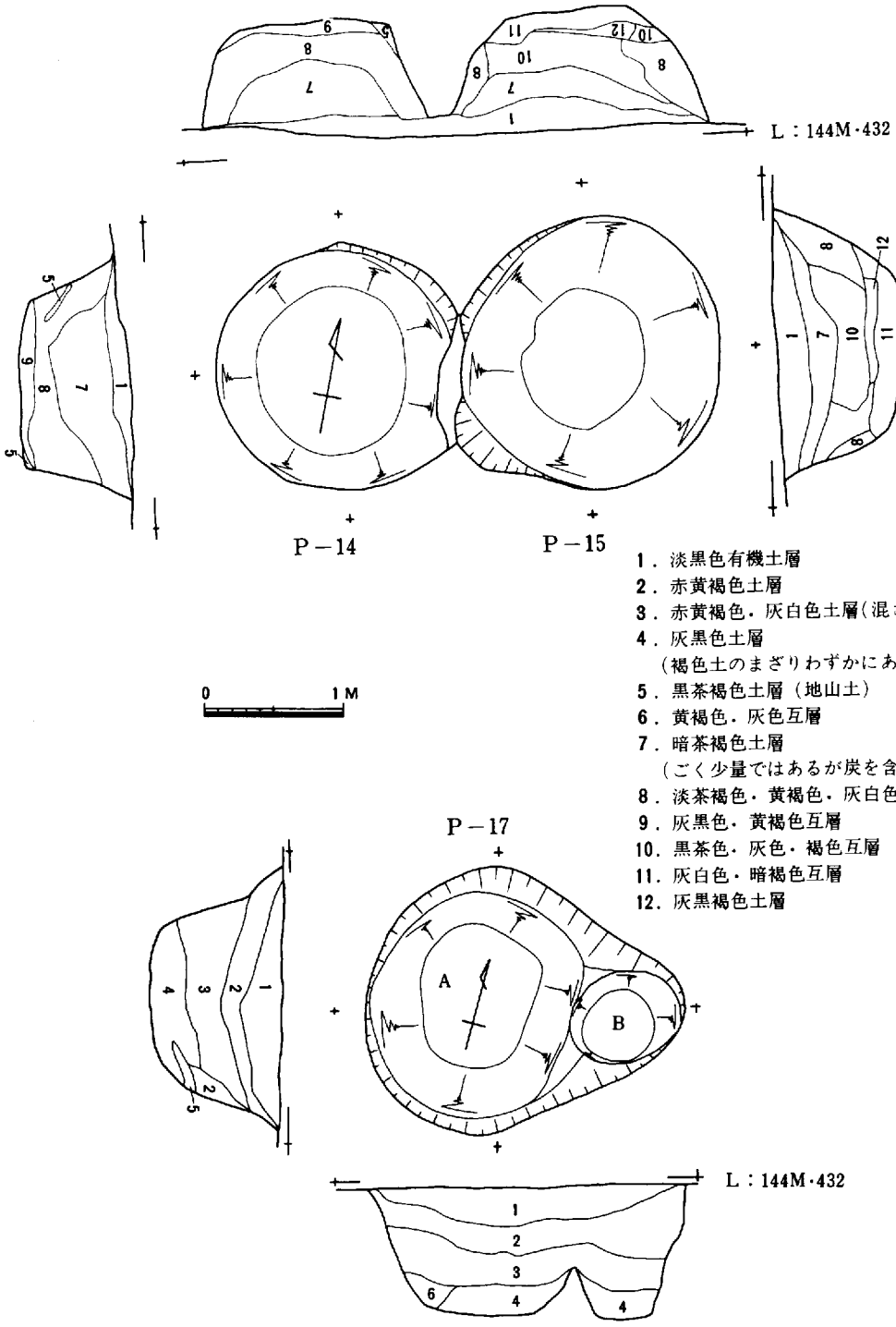


1．ややうすい黒色有機土層
2．黒色有機土層
3．黄褐色土・淡灰黒褐色土層
4．5よりややうすい土層
5．淡黒灰褐色土層
6．赤黄褐色（粘質）土層
7．赤黄灰褐色土層
8．赤灰褐色（炭を含む）土層
9．灰青白色土層（ドングリ含有する）
10．灰白色，褐色互層（ドングリ含有多し）
11．青黒灰色（細砂層）土層
12．灰白色，黄色互層
13．灰白色，赤黄褐色互層
14．13よりやゝ灰白色多し
15．黒茶褐色（地山土）土層
16．淡黒色有機，褐色互層
17．淡黒褐色，黄茶褐色土層（まざり）
18．灰白色土層（炭を含む）
19．灰白色，黄褐色土層（まざり）
20．淡青灰白色土層（ドングリ）
21．黄褐色土層（地山粘土）
22．地山粘土
23．青灰白色土層



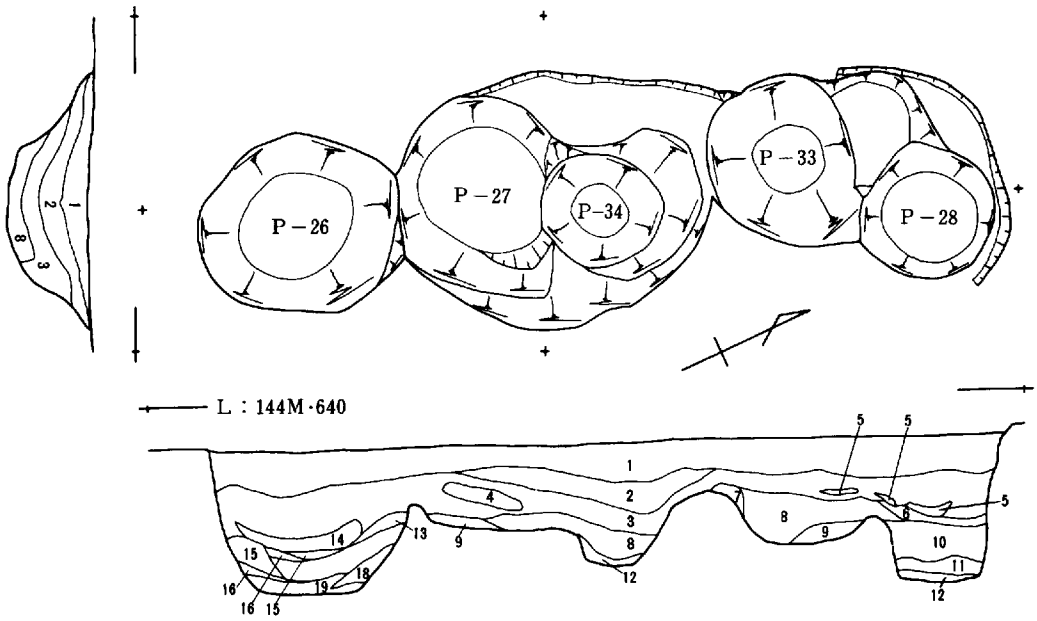
L：144M・262

第98図　貯蔵穴平面・断面図



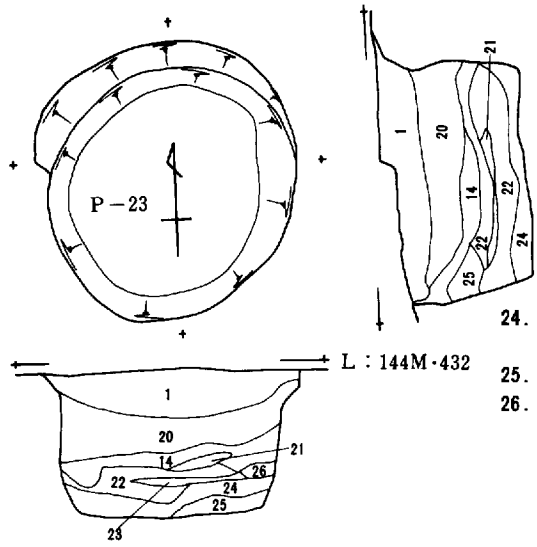
1．淡黒色有機土層
2．赤黄褐色土層
3．赤黄褐色・灰白色土層（混ざり）
4．灰黒色土層
（褐色土のまざりわずかにあり）
5．黒茶褐色土層（地山土）
6．黄褐色・灰色互層
7．暗茶褐色土層
（ごく少量ではあるが炭を含）
8．淡茶褐色・黄褐色・灰白色互層
9．灰黒色・黄褐色互層
10．黒茶色・灰色・褐色互層
11．灰白色・暗褐色互層
12．灰黒褐色土層

第99図　貯蔵穴平面・断面図



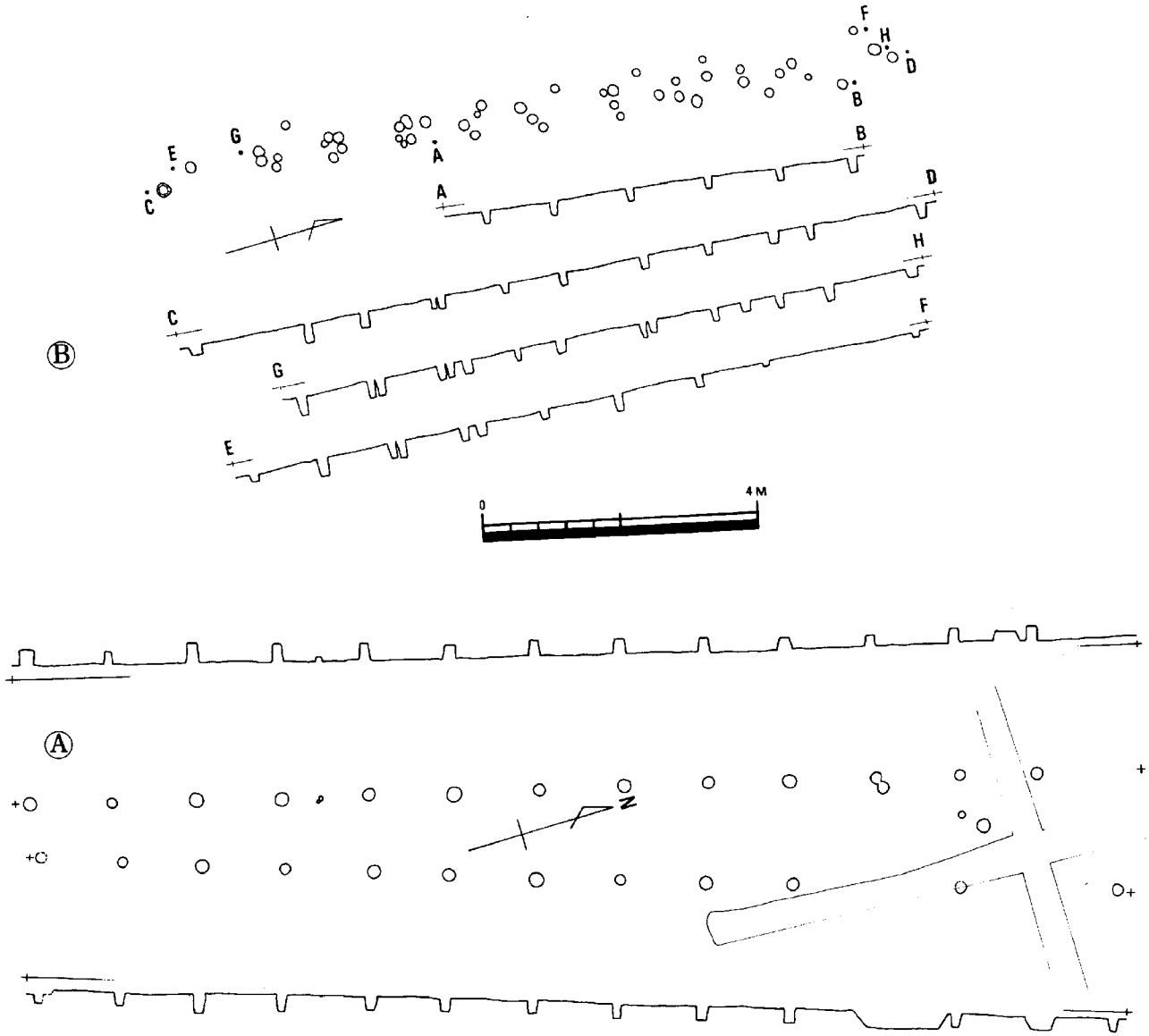
0　1M

1．黒色有機土層
2．茶褐色．赤黄灰褐色土層
3．黄白灰．褐色土層
4．灰黄褐色土層（炭を含有）
5．黒褐色土層（焼土．灰炭を含有）
6．赤褐色．白灰色のまざりあい
7．赤茶褐色土層
8．黒褐色．灰白色．褐色互層
9．8より灰白色が多い
10．黒灰色．褐色互層
（炭を少々含む）
11．灰白色（粘質）．黄褐色互層
12．黒灰色（粘質）土層
13．灰白色．淡黄褐色互層
14．赤褐色．黄灰白色．黒褐色互層
15．黄灰白色土層
16．黄灰白色．黒灰色土層
17．灰黒色土層（炭を含む）
（黄褐色のまざりあり）



18．黒灰黄色土層（粘質）
19．黒灰色土層（粘質）
20．黄茶褐色土層
21．黒褐色．赤褐色．黄褐色．灰白色互層
22．黄褐色．灰白色互層
23．21．灰黒色褐色のまざりあり
24．灰黒褐色
わずかに粘土のまざりあり
25．黒褐色　灰黒色互層
26．赤褐色．灰白色互層

第100図　貯蔵穴平面・断面図



第101図　柱穴列・柵列

第5章　種　子　分　析

宮の前遺跡の発掘植物種子分析について

笠　原　安　夫
（岡山大学農業生物研究所教授・農学博士）

1．はじめに

中国縦貫道の建設予定地にあたる標高144 mの山間盆地の岡山県真庭郡落合町一色で，1974年3月にドングリ貯蔵穴群が発見され，その後全部で41穴も発掘された。大は直径2 m，深さ1.3 m，小は直径1 m，深さ0.3 mのすりばち型で，うち21ケ所からドングリ，クルミの実などが見つかった。

この遺跡は津山市西方約25kmのところにあり，岡山県教育委員会文化課二宮治夫主事らによって1973年4月から調査が開始された。現場は備中川と関川の合流点に近い低位段丘に位置し，穴の中ほどまで地下水がしみ込んで自然とドングリの苦味が抜けるよう工夫されていた。その方法は穴の底に砂を敷き，その上にドングリを入れて木の葉や枝でふたをして，さらに土をかぶせていたところから貯蔵と同時にアク抜きをするなど古代人の生活の知恵がうかがわれるとした。その貯蔵穴の掘削時期は同時に出土した鉢型土器片から約2,500年前の縄文晩期と推定されている。全国的に見てもこれほど群集して貯蔵穴が出た例は始めてであり，明らかに集団的所有をますものであり，僅かでも生産の余剰が生まれてきた証拠となり，それは不時の備えとしたのではないかと推定されている。

この遺跡のある落合町から少し東に隔てて苫田郡鏡野町の竹田遺跡から1974年5月に縄文時代早期と見られる住居跡が発掘されている。この他別稿の谷尻遺跡の縄文晩期の遺跡とそれら三つの遺跡から見て，美作地方には縄文早期から晩期にかけて縄文人が定住していたことが裏付けられた。そしてこれらの遺跡によって縄文時代の共同生活を研究する上できわめて貴重な遺跡として，それらの保存が岡山県遺跡保護調査団などによって当局に強く要望されていたのである。

本課題の資料は，同年6月13日に筆者が当所の藤沢浅技官などと本遺跡を訪ねて，二宮主事の指示で貯蔵穴の底のドングリの混ったピットと，混らないピットの底土を採土しビニール袋に入れ研究室に持ち帰り，7月から9月までに泥土から種実を検出分析し，種類の同定を行ったので，ここに概要を報告したい。

なおこの宮の前遺跡の発掘を担当し，本試料を提供された岡山県教育委員会津山教育事務所の二宮治夫主事と土層の種子分析された当研究室の武田満子，木村美智子両氏および土層採集と撮影に協力された藤沢浅技官などに厚く感謝の意を表します。

調査の資料と方法

本遺跡の42の貯蔵穴のうち表1に示されているように，ピット№2，4，11～13，17，19，23，26，27と28の間，28，29，34の合計13穴の底土を採土の分量によって200，300，400，450，または800 gをビーカーに取り，先づドングリ種子をとり出し，残土を水道水を混ぜ砕き，ガーゼを敷いた杓子状の金網にのせ水洗で土砂を去り，実体顕微鏡下で種類別に種実を取り出し，種類同定と粒数をしらべた。

調査の結果と考察

表1に見られるように，湿った土200～800 g中，種実の検出がなかったのは，№13ピットのみである。その他のピットにはドングリ（シラカシ，アラカシ，シリブカガシ，シイノキ）が3～15粒含まれていた。とくに№4のピットには全部70粒の種子が見られ，うちコジキイチゴ4種とキビノナワシロイチゴ，フユイチゴ，ニガイチゴ，ヒメバライチゴ各1粒で5種も出土し，またヤマグワ，マタタビ1粒づつあり，これらは他ピットに出たエビヅル，カジノキと共に生食された残りであろうか。このピットには湿生のアゼスゲが44種も出たのはピットのほとりに生えていたものであろう。カラムシSPは繊維にしたか，またピット№12，17，2，11，23，26などには25～27粒が見られた。その中には沼生のイバラモSPがある。その他，ザクロソウ，クツクサ，タデSPなど住居地付近の人里，畑生の雑草が1～2粒だが出土した。

この遺跡では所属不明のものが10数種も出土している。うちイネ科のイヌビエまたヒエらしいものが合計3粒見られたが，包頴のみでえい果がないため種類の同定ができなかった。判明したものは14科28種で，他不明のもの1科1種とすると全部で21科35種となり，500 gに換算して平均20粒が出土している。（図1と表1参照）

これらこの遺跡の植物遺体は，貯蔵目的物の主体がドングリであって，それが貯蔵のままか貯蔵跡か，いづれにしてもドングリ類のそれが出土するのは当然であると同時に少数ながら，当時生食されたと考える利用植物遺体が10種近くも出たのは，それが集められ，使用ずみのものが貯蔵穴をつくるときにたまたま穴底に落ちこんだものと思われまた同時に付近に生えていた少数の各種の植物種子が落ちたのであろう。

別稿の谷尻遺跡の縄文晩期と推定される24線トレンチでは26科37種，同トレンチの拡張区では18科30種が見られた。そこでは500 g当りの種子粒数は前者が433粒，後者が1,228粒もあったのに比べて，この遺跡での13ピットの500 g土の平均が20粒で，谷尻遺跡の土層で粒数がきわめて多いのは利用植物の一部が集められた他に，焼畑植生の現地か，または備中川によって付近の焼畑雑草種子が多数流れ込んだと考えたのと，きわめて対照的と見られた。

以上，いずれにしても縄文晩期の人達の食料としてのドングリの加工技術と生食用の各種漿果植物，葉を食するシソSP，若芽を食べるニワトコ，繊維用のカラムシなどを利用していたものであろう。そしてそれら利用種類を含めて多くが現在の焼畑農耕地に見られる雑草類であるので当時貯蔵穴付近にも，また谷尻遺跡で推定したように焼畑農耕があったとも考えられた。

さて，この日本島に人が住みついたのは何時ごろだろうか。一般には最後の氷河から再び温暖な後氷期に入った約1万年前の西日本の低地のブナ林が後退し，暖温帯常緑林が茂り，同時にこの原生林の切れ目や周縁で狩獲，採集を主として生活する縄文時代人が住みついたとされていた。しかし戦後になって相沢氏（1949）によって群馬県岩宿の関東ローム層から旧石器の発見が端緒となり，今日では全国各地で旧石器が見つかっている。とくに昨年の帝釈遺跡の報告では，その洞窟内に約25万年前の旧石器時代の人骨が発見された。そのため日本でも縄文期以前に洞窟生活があったことが明らかになった。

前記の縄文期は，早，前，中，後，晩期に区別され，関東以東では落葉広葉樹林地帯のクルミ，トチノキ，関東以西南の照葉樹林帯ではカシ，シイの実が大切な食料であった。

岡山県では本遺跡のドングリの貯蔵穴の発見前において，潮見，近藤教授（1956）らが岡山県赤磐郡山陽町南方前池遺跡で10ケ所ばかりドングリの貯蔵穴群の発掘の報告がある。

縄文農耕については大山，藤森，国分，酒詰の各考古学者の他に中尾教授らの報告があるが，佐々木博士（1971）によれば，西南日本の照葉樹林帯ではつい近年まで，ソバ，アワ，ヒエや大豆，小豆またサトイモなどを主作物とする焼畑農耕が重要な生業であった。ことに戦前には焼畑は全国で7万*ha*も存在していた。

その栽培方式は，伝統的に固定したものであって，東南アジアの焼畑と特色が共通であるが，それは西日本の稲作以前の西日本一帯の凸帯文土器によって象徴される文化は「狩猟，採集栽培民文化」と呼ぶにふさわしい焼畑農耕文化が縄文晩期に始められ，やがて弥生期の水稲栽培をスムーズに受け入れる基盤となったのではないかという。

また，それとは別に東北および中部日本の落葉広葉樹林帯には，亀ケ岡土器文化で象徴されるサケ，マスの漁撈文化と，その背後にトチ，クルミ，クリなどの堅果と漿果類の採集経済が盛んであって，一時的に弥生のイナ作文化の受け入れに抵抗したような形勢が見られる。一方中部から東北地方ではカブラ，タカナ，ダイコン，ゴボウ，アサなどの焼畑農耕があったとし，それらの起源は西南日本の在来種とちがっていて，シベリア＝満洲系で縄文時代に東北アジアから日本海を通って到着したと考えている。すなわち東南アジア系の焼畑農耕が西南日本にあり，東北アジア系の焼畑が東北日本にあったとも解せられる。

最近，渡辺氏（1975）の書によれば，縄文農耕論には，照葉樹林文化論と考古学者の農耕論とに大別されると述べ，同氏は縄文前期から中期にかけての北から南への8つの文化圏図の存在と吉良教授（1652）による暖かさの指数によって区別された植生図と非常によく一致することは，食料としての植物利用がきわめて高度に発達していたことを示しているとした。同氏はまた「縄文時代における漁業の研究において」，狩猟は普遍性が強く，漁業は特殊性が強すぎるのにくらべて，植物採集は各文化圏の比較検討に等質の資料を提供してくれる。そして同氏は，縄文時代の植物食として全国208遺跡から確認された遺体は，次の39種を記述している。すなわちカヤ，イヌガヤ，ヤマモモ，オニグルミ，ヒメクルミ，ハシバミ，ブナ，クリ，コナラ，ミズナラ，クヌギ，カシワ，アカガシワ，マテバジイ，カジノキ，アラカシ，イチイガ

シ，ツブラジイ，スダジイ，ヤマゴボウ，ハマ，シャリンバイ，サンショウ，イヌザンショウ，アカメガシワ，チャチンモドキ，トチノキ，ノブドウ，マタタビ，ツバキ，ヒシ，アズマビシ，ウリの一種，マコモ，イネ，クログワイ，ノビルなどがある。そのうち208遺跡から出土例はクルミ，ドングリ，クリ，トチ36～29例で最も多く，ついでカヤ，ヤマモモ，ツバキ，ヒシ，イヌガヤ，サンショウ，イヌザンショウなどが3例以上で他は1，2例の出土にすぎない。

それらのアク抜きの加工技術は縄文前期後半から飛躍的に発達したという。このアク抜きの利用が半栽培の段階ではないか，それらの東日本の技術が西へ伝幡し，その基盤の上に西日本でコメその他圧痕などの縄文晩期農耕論について考えて見る必要がなかろうか。日本の焼畑がオカボを主要作物としていない点などと地理学，生態学，民俗学の研究成果が焼畑農耕の存在の可能性を指摘していることを虚心に受け止めるべきであるとしている。

ま と め

このドングリの縄文晩期貯蔵穴群は，41ケ所も集っているきわめて貴重な遺跡であり，当時の集団定着の実態の一端が伺われる。

本遺跡の発掘担当の二宮氏は，この縄文晩期のドングリ貯蔵穴は同時にアク抜技術の工夫があり，自然に地下水が流入していたと見られるという。本稿の出土植物種子は貯蔵目的物のドングリの他に，その貯蔵穴づくりに従事した古代人の生食果実の種子が落込んだと推定できる。すなわち，漿果類の5種の野生イチゴ（ナワシロイチゴ，フユイチゴ，ヒメバライチゴ，ニガイチゴ），マククビ，エビヅル，カジノキ，ヤマグワなどが出土しているが，これは集められ，喰べられた残りであろう。その他少数ながら水生イバラモSPとかなり多数の湿生のアゼスゲが見られるのは，そのピットの周辺で生えていたものか，また乾生，畑生のザクロソウ，クワクサ，タデSPなどは住居付近のものが落ち，貯蔵穴の底土の遺体となって残ったものと考えられた。

なお別稿の谷尻遺跡では，その周辺に焼畑農耕の存在があったのではないかと述べたが，この遺跡の周辺でも焼畑農耕があったとも考えられる。ただこのドングリの貯蔵の目的で作られた穴の底土には，ほとんどが利用植物であり，その他少数の水生，湿生，人里植物が見られたが，谷尻遺跡のように多くの焼畑雑草の植物種実は入ってこなかったものと推定した。不明種子の中に2，3粒のヒエらしいものが検出されたが，それはエイ果でなく，外部の包頴のみなので実態をつかむことはできなかった。しかし，相当の集団生活していた縄文晩期の人達の知恵が推定できるところから，当時この美作地方でも半栽培段階か，また原始の焼畑農耕があり，同時に山野からドングリを採集して常時の食用または不時に備えてかなり多量が保存され，アク抜きするためにこの貯蔵穴を設けたものであろう。それはこの貯蔵穴とそれから出土した植物種子の種類から照葉樹林地帯文化に属すると考えられた。

付 記

本稿では不明種子が10余種あるがお気付の方は当方へ御教示を願えれば幸です。

参 考 文 献

1 笠原 安夫：『日本雑草種子図説』養賢堂，1968

2 笠原 安夫：川入・上東遺跡より出土した作物および雑草種子の同定について，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２』岡山県教育委員会，1974

3 笠原 安夫：黒田耕作：宮尾遺跡（１区）より出土した植物種子の同定について 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４』岡山県教育委員会，1974

4 笠原 安夫：谷尻遺跡の発掘植物種子分析について，『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会，1976

5 江坂 輝弥：『シンポジウム，縄文時代の考古学』学生社，1972

6 中尾 佐助：『栽培植物と農業の起源』岩波新書，1966

7 藤森 栄一：『縄文農耕』光学社，1970

8 直木孝次郎：『日本の歴史，倭国の誕生』小学館，1973

9 里見 信夫：鳴植直弘：日本産キイチゴ属の種子Ｉ形態『金沢大学理学部付属植物園』1971

10 佐々木高明：『稲作以前』ＮＨＫブックス，1971

11 潮見 浩・近藤義郎：岡山県山陽町南方前池遺跡『私たちの考古学』７号考古学研究会，1956

12 渡辺 誠：縄文時代の植物食，『雄山閣考古学選書13』雄山閣，1975

13 西田 正規：植物種子の同定，炭化材の樹種同定，『京都府舞鶴市桑飼下遺跡調査報告書』平安博物館，1975

14 吉良 竜夫： 1953

表1 宮の前遺跡のドングリ貯蔵庫の泥土中の種子分析表

		利用植物													その他の種類						不明種類												その他断片	計
		ドングリ	マタタビ	シソSP	ナワシロイチゴ	フユイチゴ	コジキイチゴ	ヒメバライチゴ	ニガイチゴ	ニワトコ	ヤマグワ	カラムシSP	エビヅル	カジノキ	イバラモSP	ザクロソウ	クワクサ	アゼスゲ	ヤクツリグサSP	タデSP	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K		
pit	— 2	500g	13	1	2	2	1																			1	1					11	32
〃	— 4	800	5	1	1	1	1	4	1	1		1	1					1	44			1				1							6	70
〃	— 11	500	14										10	9	1				3		1			1	1								30
〃	— 12	300	15						1	1			12				2		3														3	37
〃	— 13	800	0																															0
〃	— 17	450	14				3	1				1			1																		14	33
〃	— 19	300	1				2			1					1																			4
〃	— 23	800	3	2			1			1											2													9
〃	— 26	200	7	1																													19	27
〃	— 27 28の間	800	—	1				2			2									2	2							1	1				14	25
〃	— 28	800	—																	1	3	1								1	1	3	10
〃	— 29	400	3			1					2				2			2			1											3	14
〃	— 34	800	1							4*											1											1	7

1) ＊印……内3粒は小粒，ドングリはシラカシ，アラカシ，ツリブリカシとシイノキと同定された。

2) 他13はり出土しなかった。上記試料200～800gをとった残の土からpit 4ではドングリ12粒。pit 12が8粒，pit 27と28の間がドングリ2粉，pit 28がドングリ2粒が見られた。

3) 18科30種土500g平均20粒。

利 用 植 物

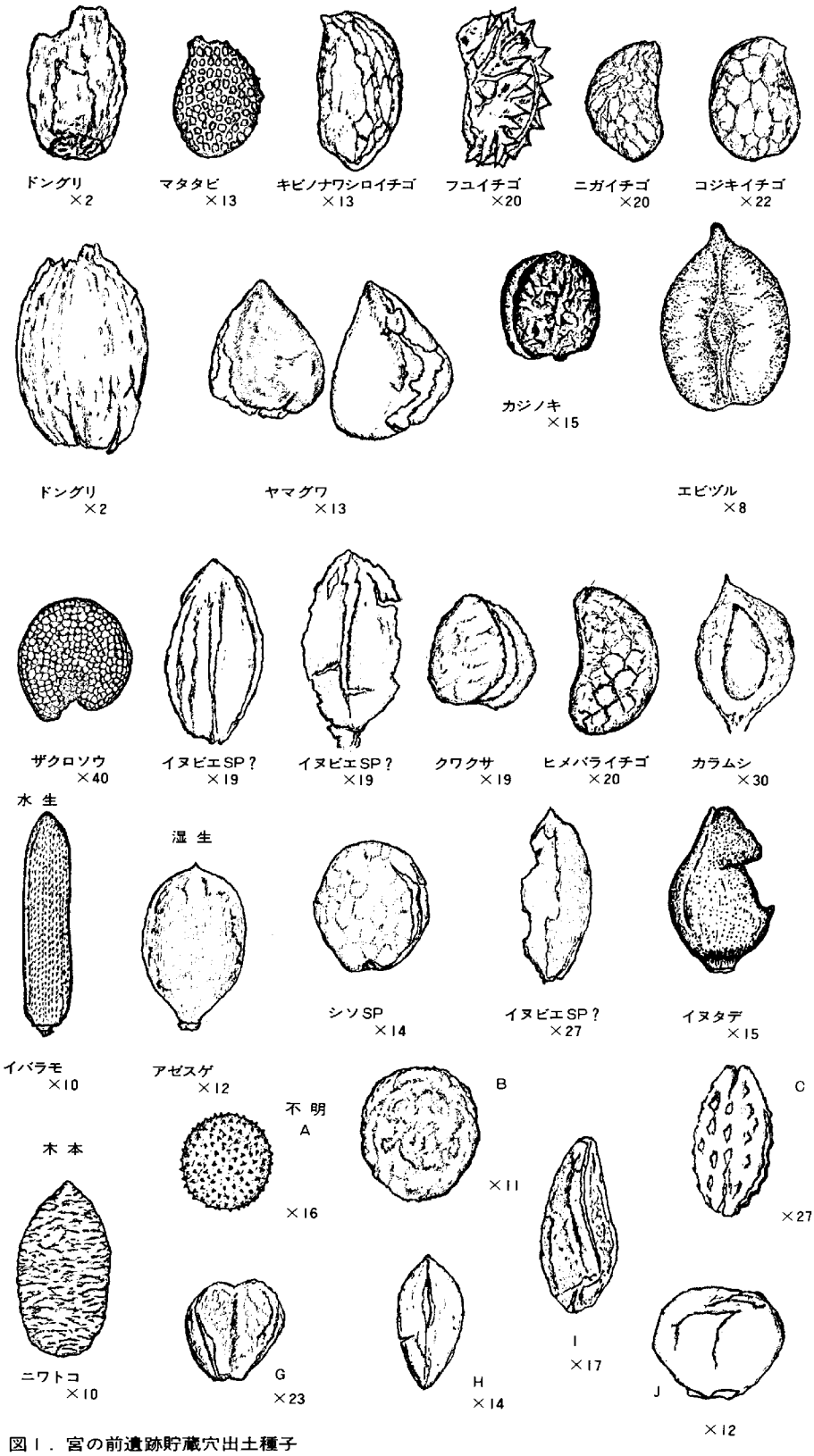


図１．宮の前遺跡貯蔵穴出土種子

第6章　結　　語

宮の前遺跡を構成する遺構については各章各項目で述べた。そのことから，本遺跡の遺構の占める平面はかなりの時期的な巾をもつ生活面であったことが確認された。

縄文時代の遺構，遺物については中期の土器片が数片出土し，晩期のピットからは岡山県南部の編年でいう原下層式の鉢型土器が出土した。さらに本遺跡で最も注目しなければならないのは晩期と考えられる41穴の貯蔵穴群である。この時期の検出列は岡山県山陽町南方前池に知られるが，その数において比すべきもない。また，貯蔵穴内より検出したドングリ，クルミなどの植物遺体については前章で述べた。縄文晩期における貯蔵形態などを知る貴重な資料を得た。

弥生時代では縄文時代につづく前期の土器が出土している。備中川流域では上流の谷尻遺跡からも出土しており，この時期の資料が増加している。中期の遺構には袋状ピット7，灰穴多数があり，住居址は検出できなかったが，安定した生活面であったことが考えられる。後期後半に比定できる竪穴住居址数軒を検出した。ほとんど方形もしくは隅丸方形を呈する。

古墳時代初頭に比定できる8基の円形，方形周溝墓は岡山県ではじめての発掘例である。本遺跡の周辺において，前期にさかのぼる古墳は発見されていないのでこれらの系譜をたどることはできない。ただ備中川上流域では竪穴式石室を有する前方後円墳が知られている。

また，これらの周溝墓を切ってシスト5・石蓋土壙墓4が検出されている。石蓋土壙墓は九州に発見例が多く，中国地方東部では初めての例である。

本遺跡の各調査区に検出したV字形の溝は弥生時代後期の遺構を切って掘削され，古墳時代後期にはほぼ埋積されている。その機能については明らかではないが，常時流水があったとは考えられない。また条里制，地割に関する遺構は検出できなかった。

以上のような各時代の遺構遺物からみて，本遺跡が立地する冲積段丘上は，縄文時代中期～古墳時代初めまでの人類の居住地と埋葬地であり，それ以後は生産の場であったと考えられる。

今回の発掘調査によって以上のことが明らかになった。発掘調査は縦貫道敷地内のみの限られた範囲内の調査であり，本遺跡の全体的規模，構造を明確にすることはできなかった。しかし，この調査によって各時代の文化様相の一端を明らかにする資料を得た。

。本遺跡の発掘調査にあたっては地元の方々をはじめ，落合町教育委員会には多くの協力を願い，また直接作業に従事された方々の苦労に対し記して感謝いたします。

宮の前遺跡全景（南東上空より）

１．１　区　全　景（東より）

２．１　区　全　景（西より）

1．1　区　全　景（南東より）

2．1　区　全　景（北西より）

1．C－3、C－4、石蓋土坑墓－3·3′、シスト－1～4、土坑（北より）

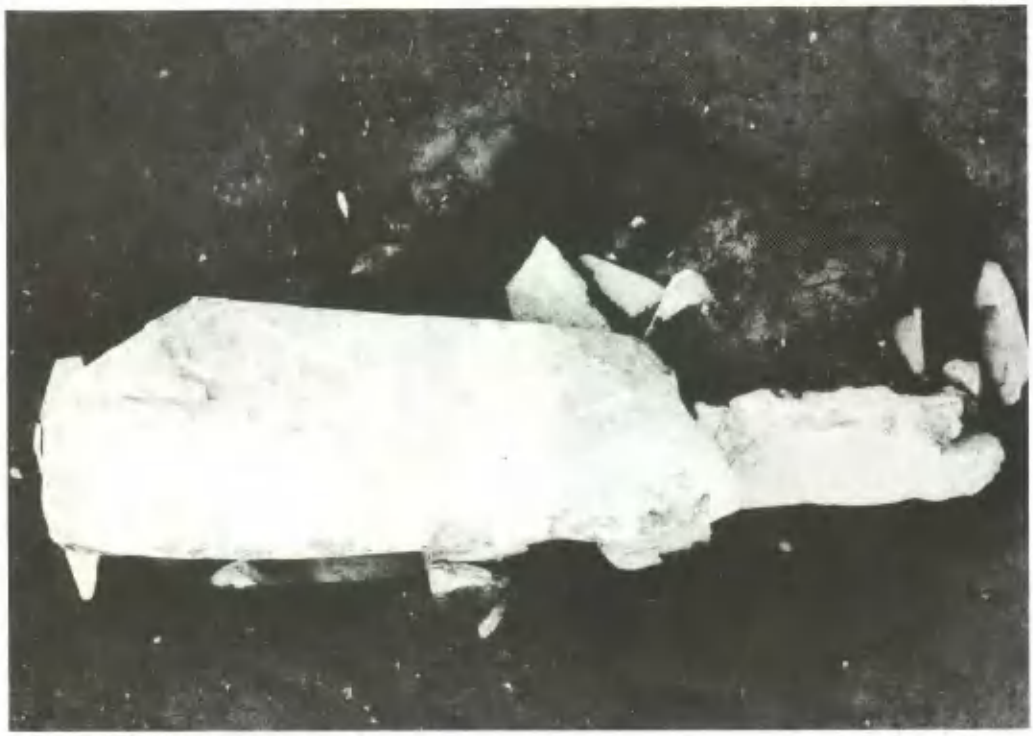
2．1 号 墳 全 景（北より）

1．G·24－K不明石溜り（東より）

2．C－7、石蓋土坑墓－1、D－1（西より）

1．1区周溝、溝、住居址、左…C－1、右…C－2、C－2内、H－1号、手前…D－1（北より）

1．1区周溝、溝、住居址、C－3、C－4、C－5、C－6、C－7、C－8、H－2号（北より）



1．1号墳主体部（真上より）

2．1号墳主体部遺物出土状態（真上より）

1．石蓋土坑墓－1（南西より）

2．石蓋除去後（北西より）

1．石蓋土坑墓－2 （東より）

2．石蓋除去後（左側→北より）

1．シスト－1（南より）

2．蓋石除去（西南西より）

1．シスト－2（南東より）

2．蓋石除去（東北東より）

1．シスト－3（南西より）

2．蓋石除去（南東より）

1．シスト－3断面（南西より）

2．シスト－4（南より）

1．シスト－4 蓋石を1回取り除く（南より）

2．シスト－4 蓋石を2回取り除く（南より）

1．シスト－4 蓋石すべて除去（南より）

2．石蓋土坑墓－3,3'（上…3・下…3'）（西より）

1．石蓋土坑墓－3,3'（南東より）

2．蓋石除去（西より）

1．中世墳墓（西より）

2．中世墳墓内遺物出土状態

1．シスト－5･6（左…5･右…6）（南西より）

2．C－3　土層断面、遺物出土状態（南東より）（第33図－1）

1．1号住居址（南より）

2．1号住居址内遺物出土状態

1．2号住居址（南より）

2．2号住居址中央ピット内遺物出土状態

1．3号住居址（南東より）

2．4号住居址（西より）

1．4号住居址断面（西より）

2．5号住居址（南より）

1．G·24－L　炉、及び遺物出土状態（南より）

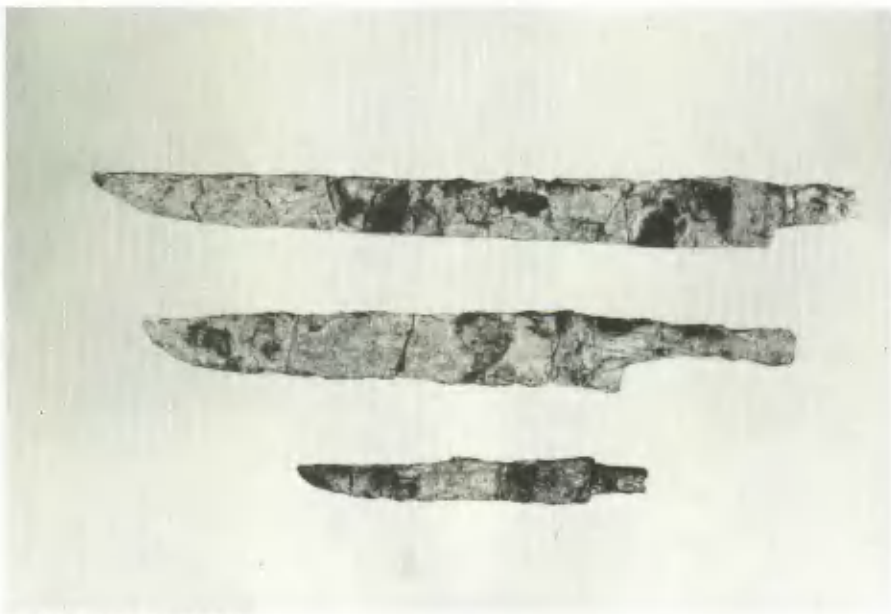
2．土坑－55（南東より）

1．C－2　土器溜り

2．C－2　土器溜り

1．C－8　南土器溜り（南より）

2．C－4　周溝内土器溜り



1号墳主体部出土鉄器

C－2

1号墳周溝

C－3

P－4

1区　出土遺物（周溝・1号墳周溝・ピット）　C－4

C－4

土－43

3区

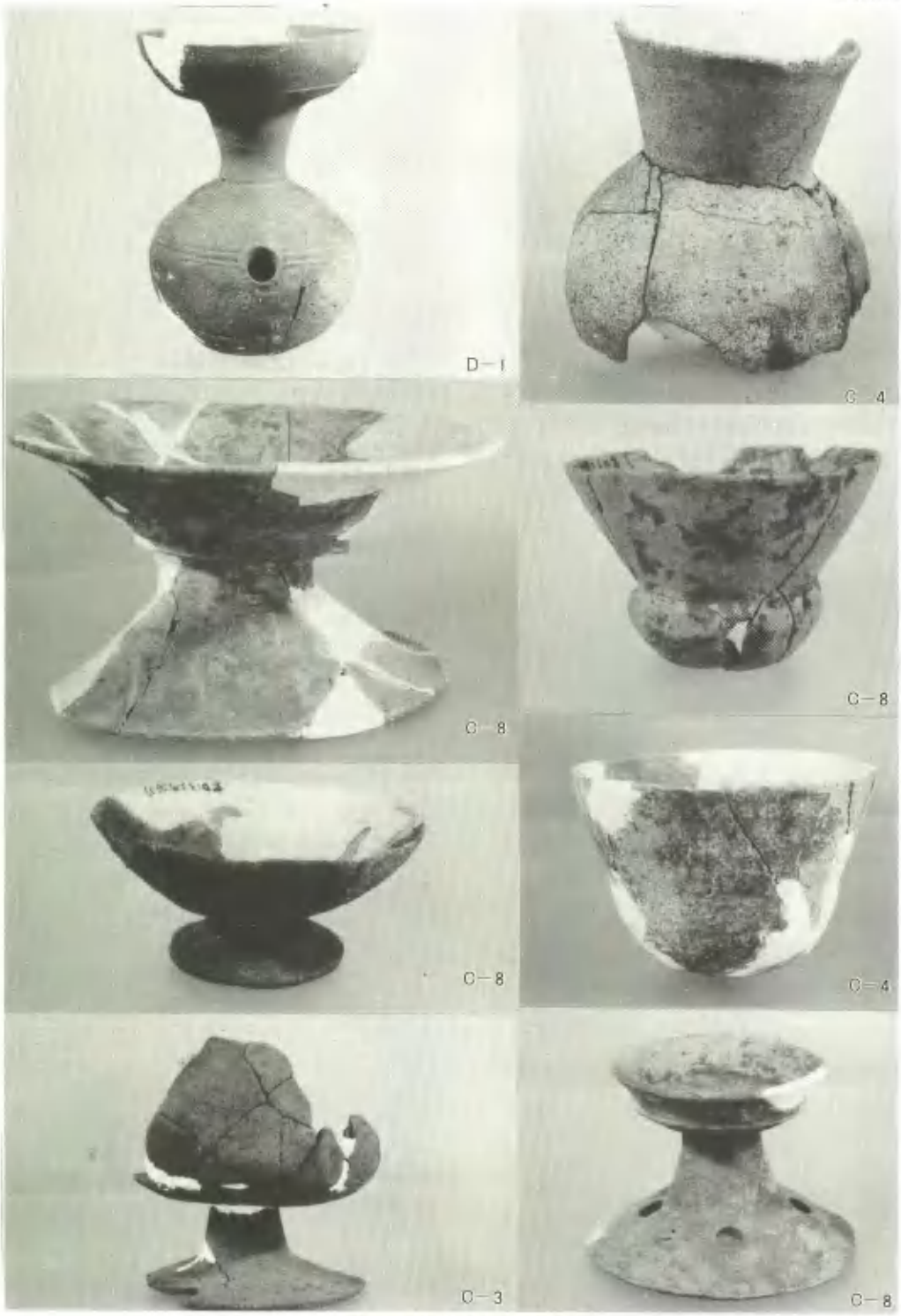
土－4

土－34

土－56

I区　出土遺物（周溝・土坑・etc）

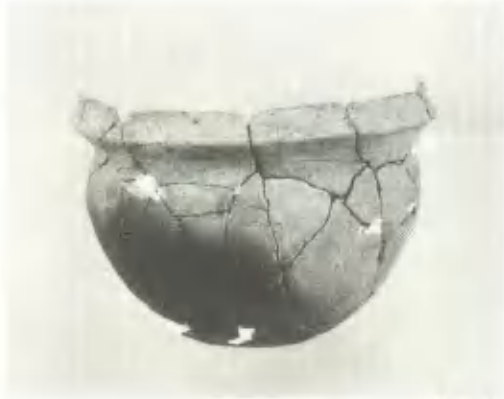
1区　出土遺物（周溝、3･4区、etc）



I区　出土遺物（周溝内）

I区　出土遺物（周溝、etc）

H－1号



H－2号

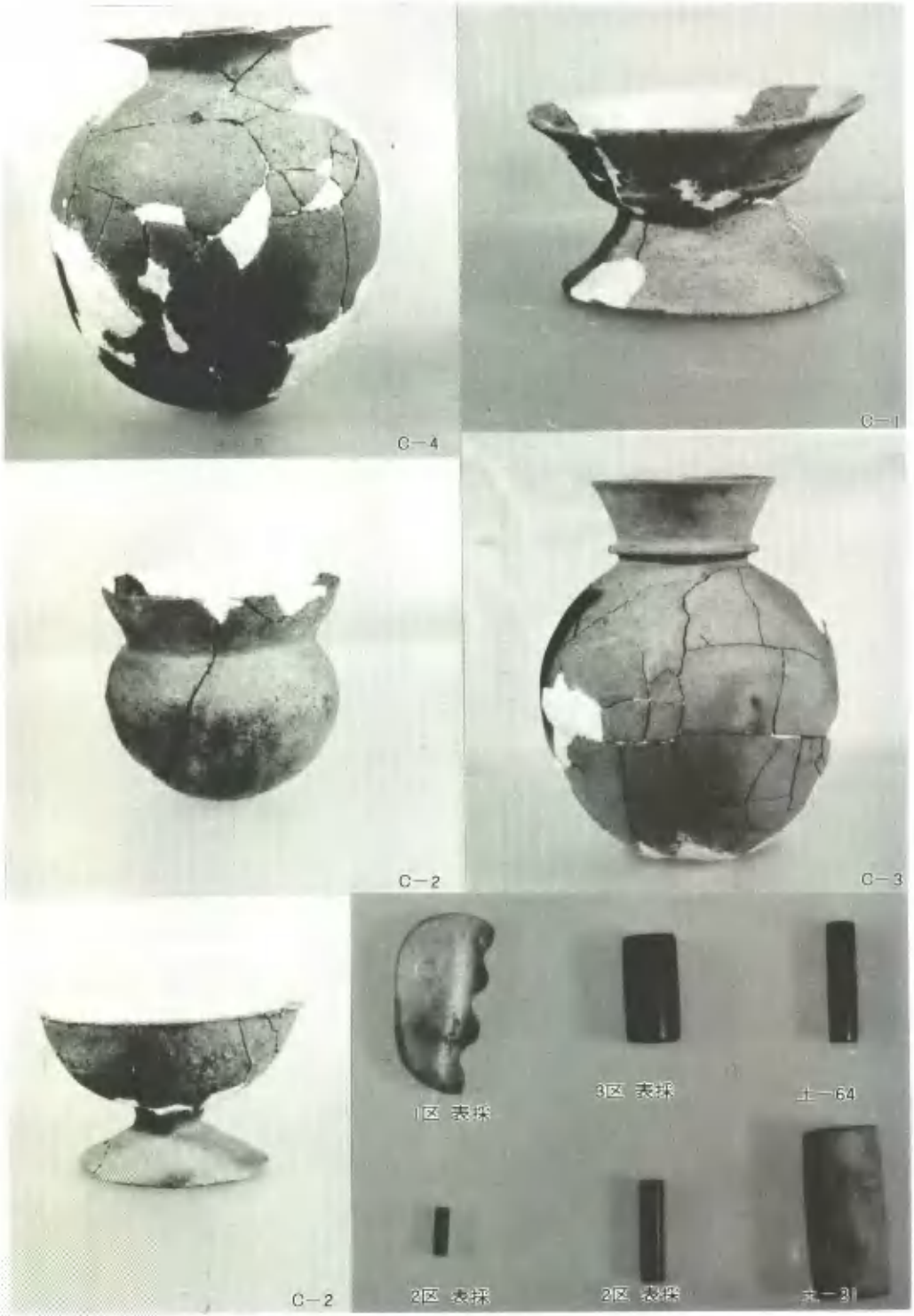
H－1号

H－2号
（中央 Pit）

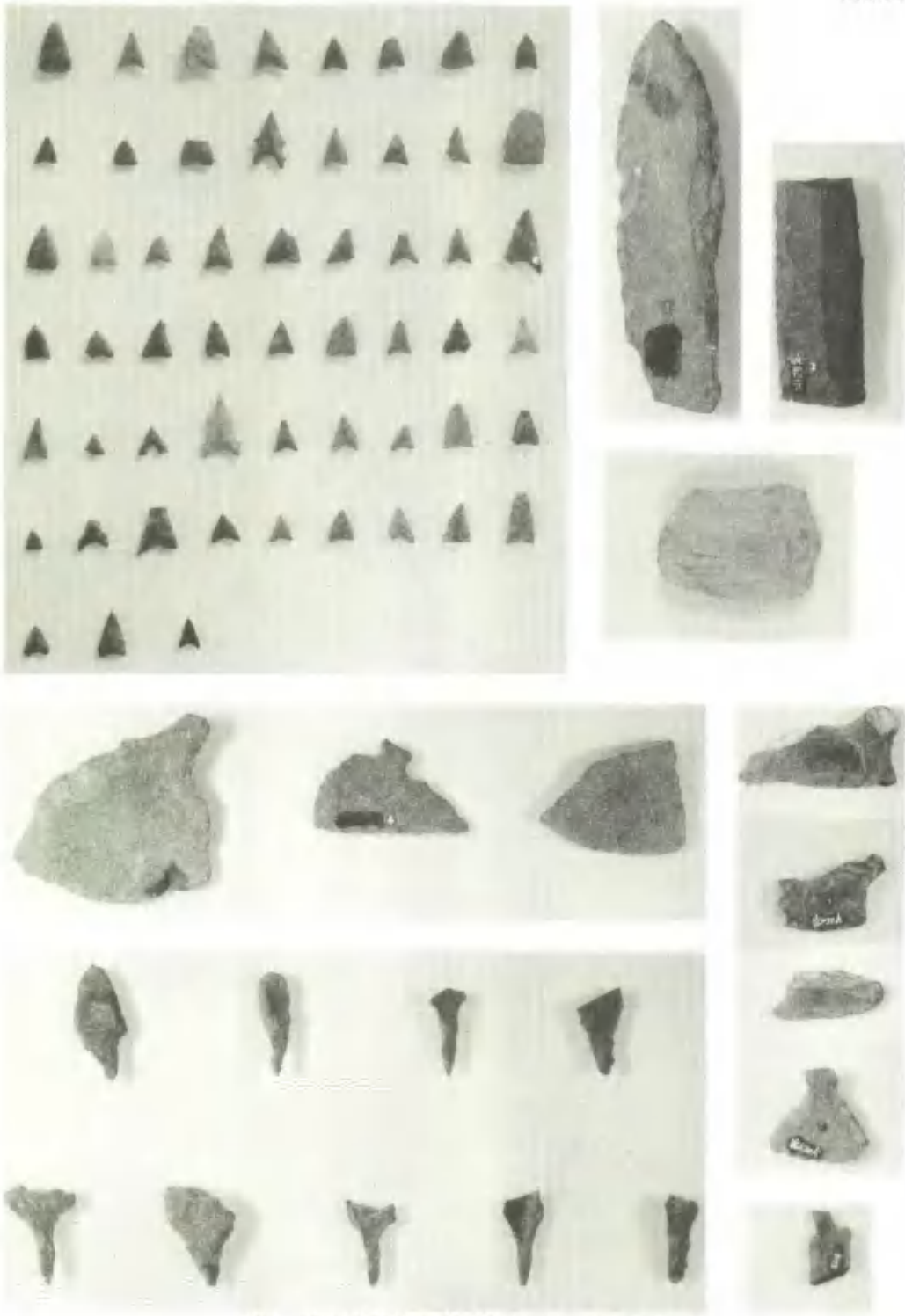
H－5号 上

H－1号

I区　出土遺物（住居址）



1区　出土遺物（土器…周溝、玉類…1・2・3区）



I区　出土遺物(石器)（第41・42・43図と同一）

1

2

1－4・第43図と同一

3

4

4区 溝

土－48

23－L

4区 P－31

4区

1·4区　出土遺物（石器、鉄鏃、土器）

I区　出土遺物（縄文晩期、弥生前期、中期）

22－K

23－L

23－L

23－L

24－K

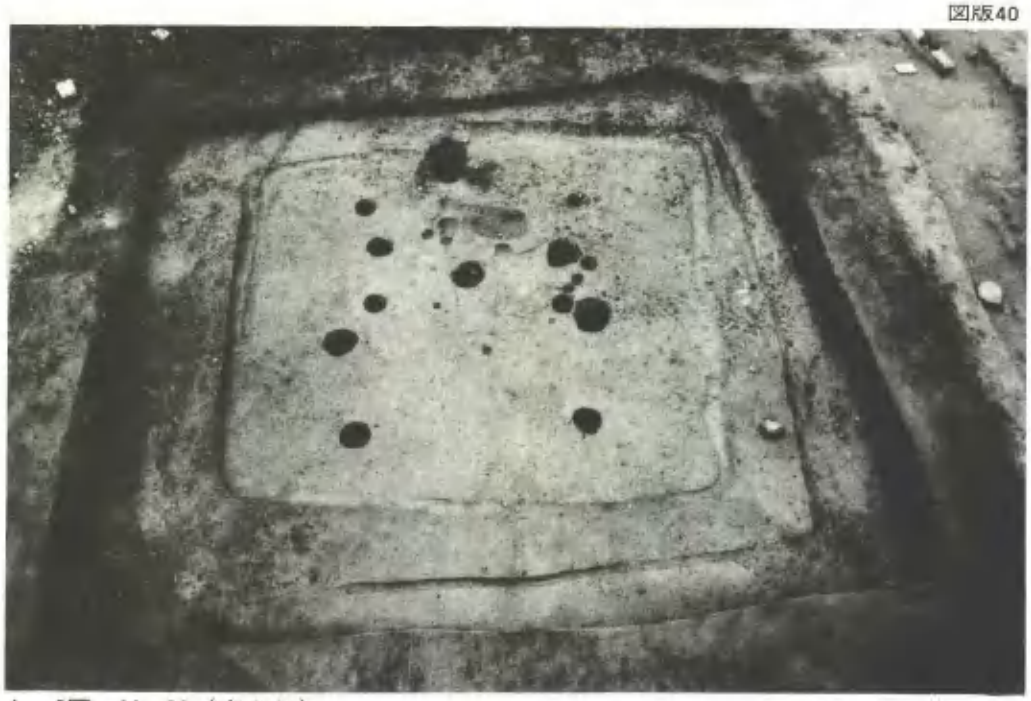
I区　出土遺物（I区 下層黒色有機土層内）

1．2区全景（東より）

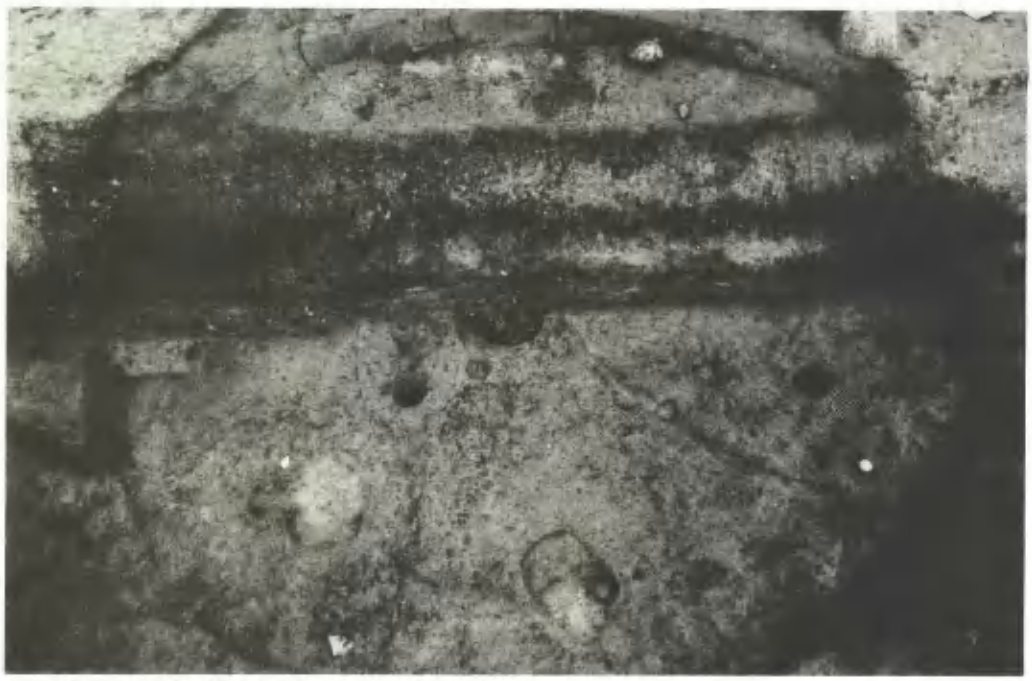
2．2区溝　分枝点断面（東より）左…D－01、右…D－02

1．2区　H－01（南より）

2．2区　P－01（南より）

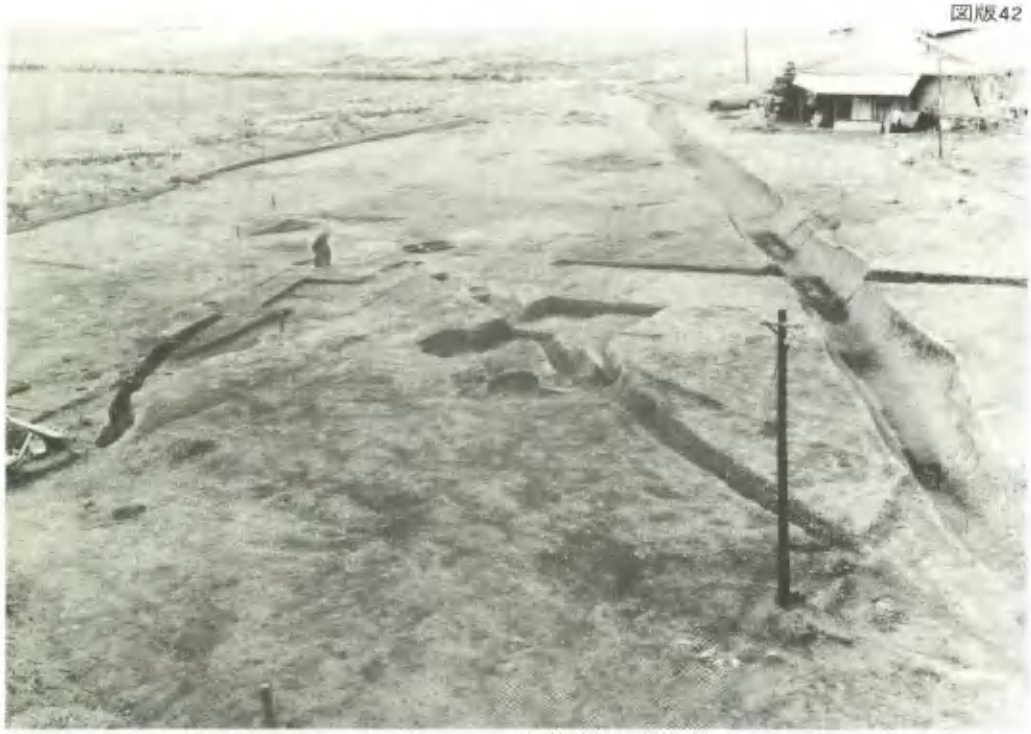


1．2区　H－02（南より）



2．2区　H－05（南より）

2区　出土遺物

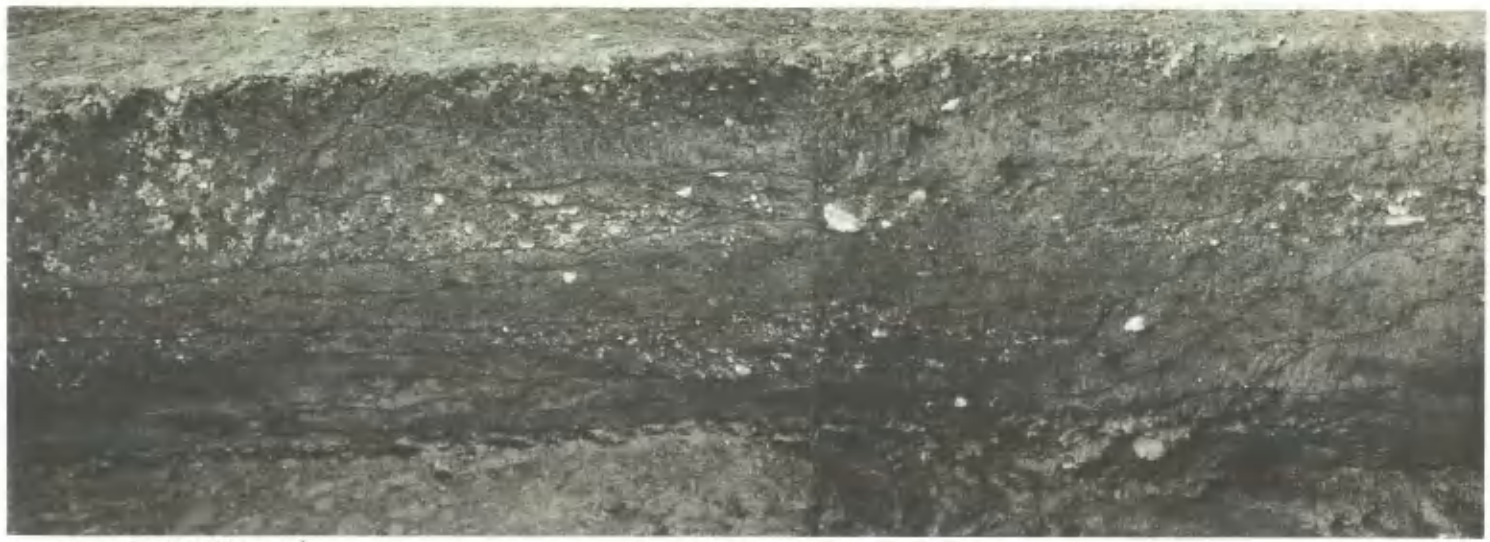


1．3区　全　景（東より）

2．3区　H－001（南より）

1．3区　P－001断面（西より）

2．3区　P－001平面（南より）



1．G･5－E断面（東より）

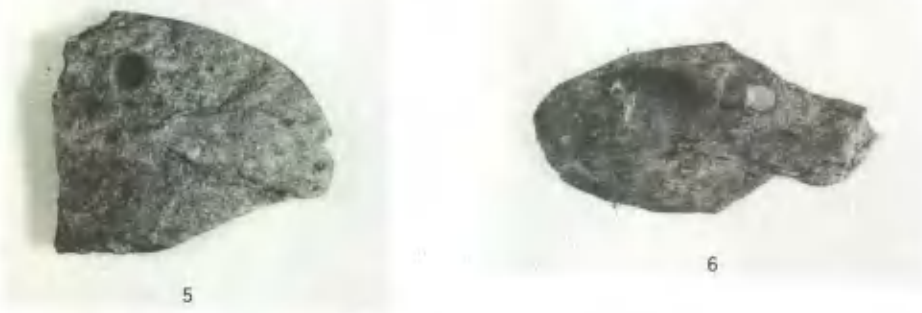
2．D－001遺物出土状態

3．同左

4．H－001遺物出土状態

1 ～ 3 ……2区

4 ～ 6 ……3区



2．3区　出土石器

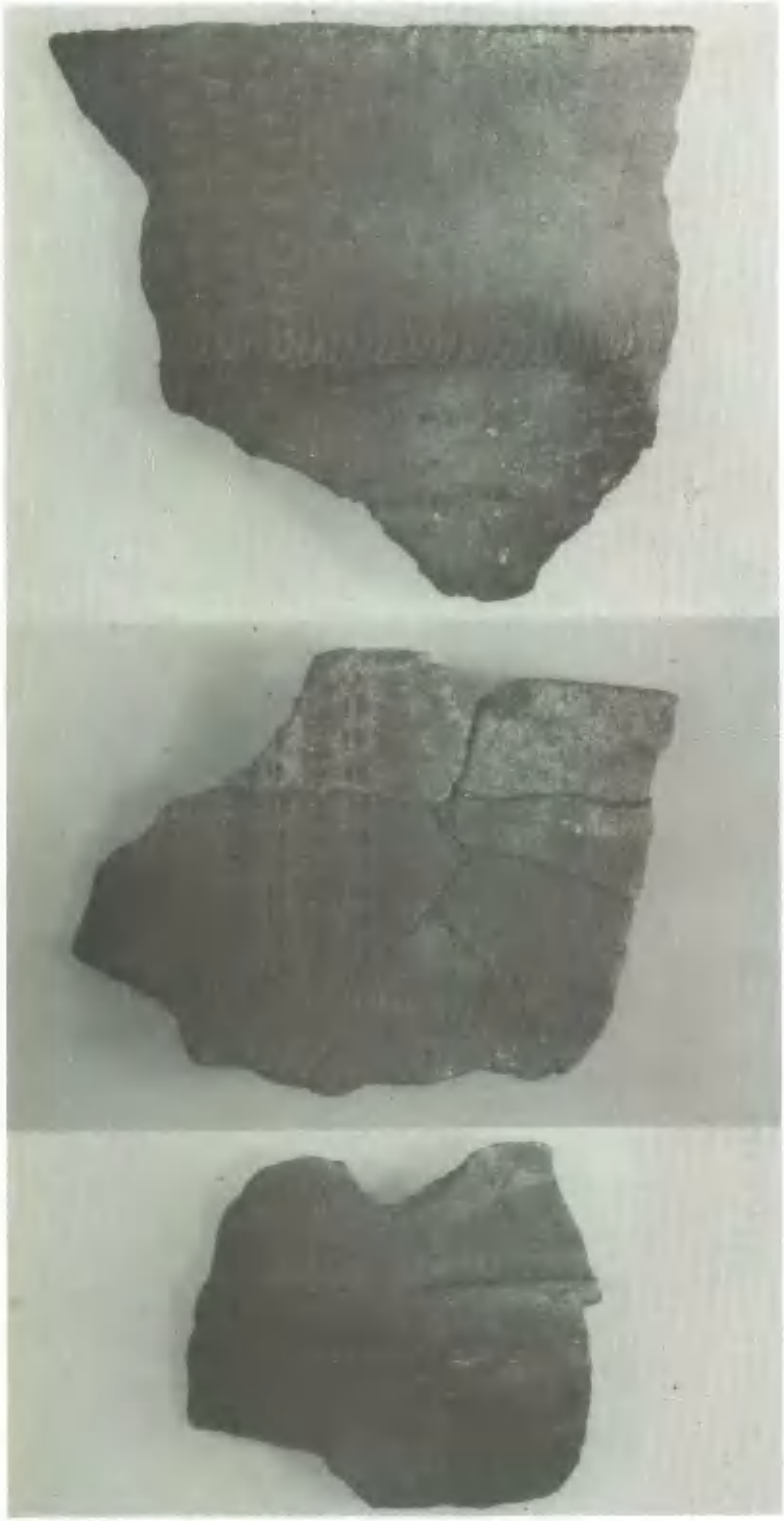
P－001

P－001

P－004

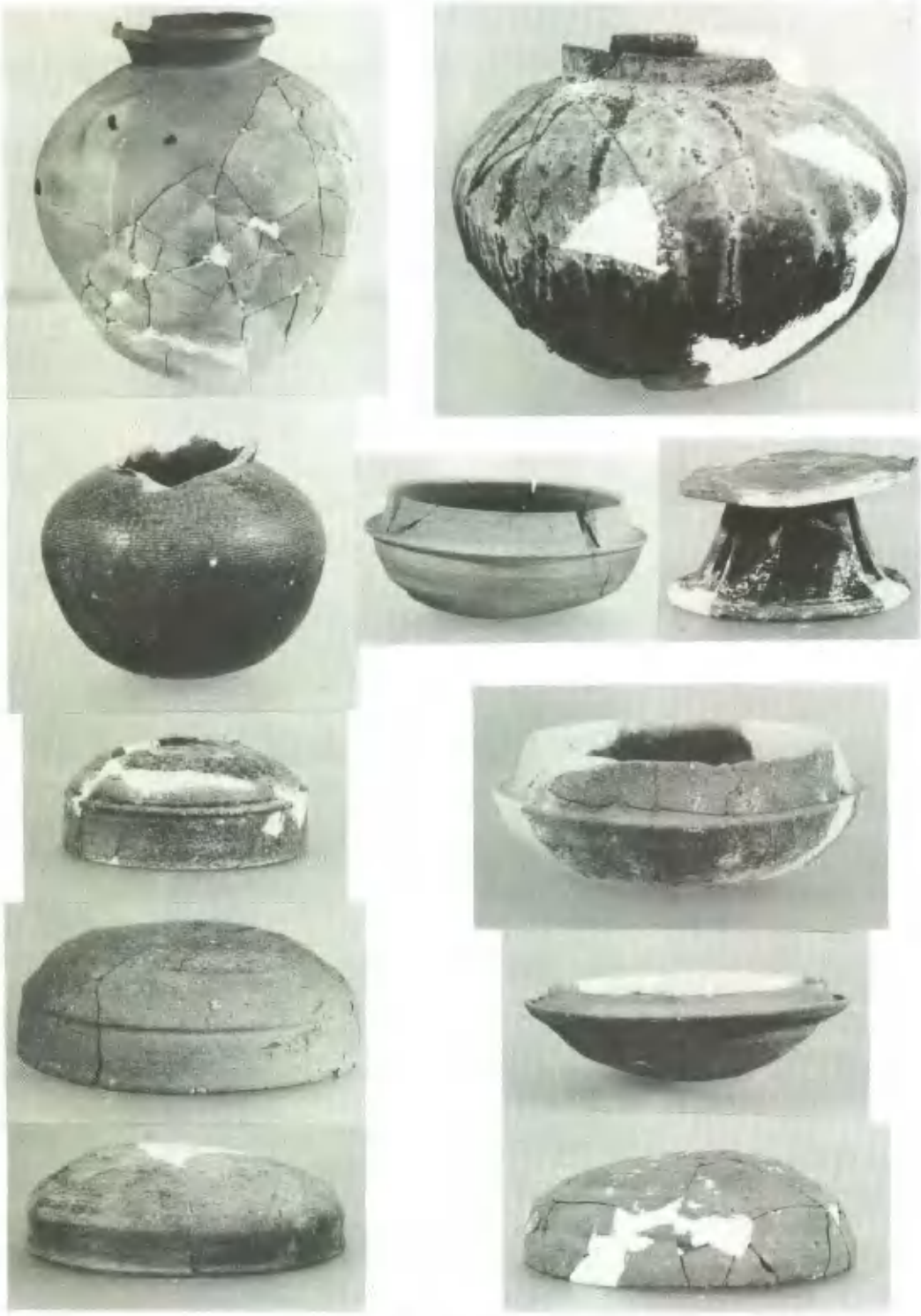
D－002

3区　出土遺物



3区　出土遺物（P－002）

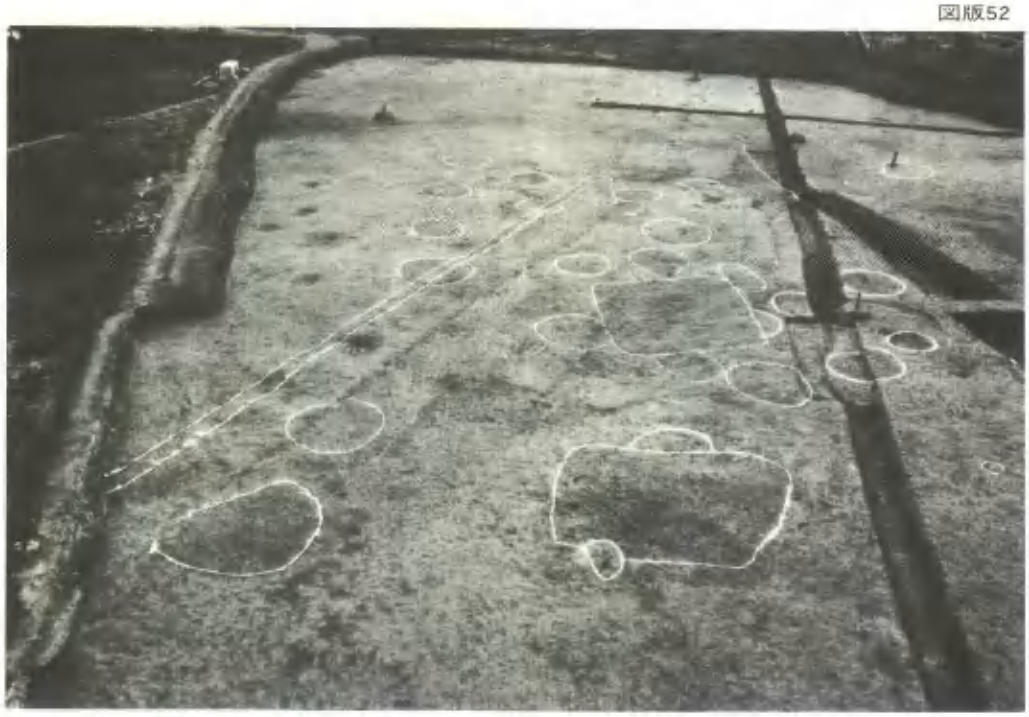
3区　出土遺物（D－001上層）



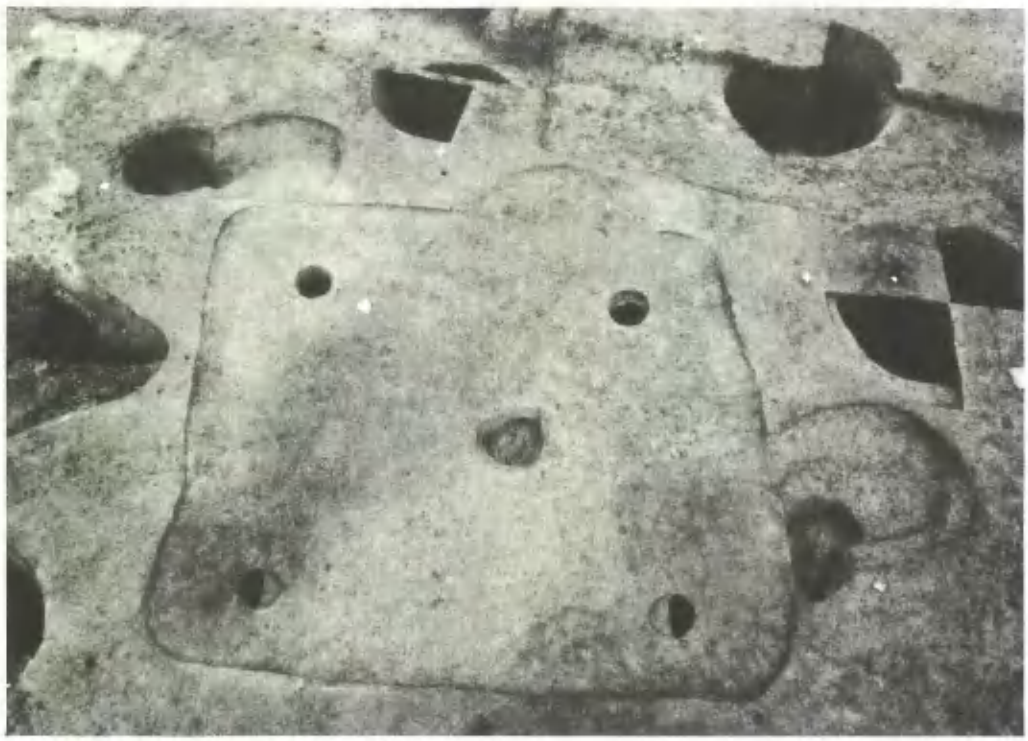
3区　出土遺物（D－001下層）

3区　出土遺物（1～7…5－E包含層・8～13…D－001下層）

3区　出土遺物



1．4区　ピット群全景（東より）



2．4区　住居址およびピット群（南より）

1．P－1　土層断面（東より）

2．P－1　同　　上近　　影

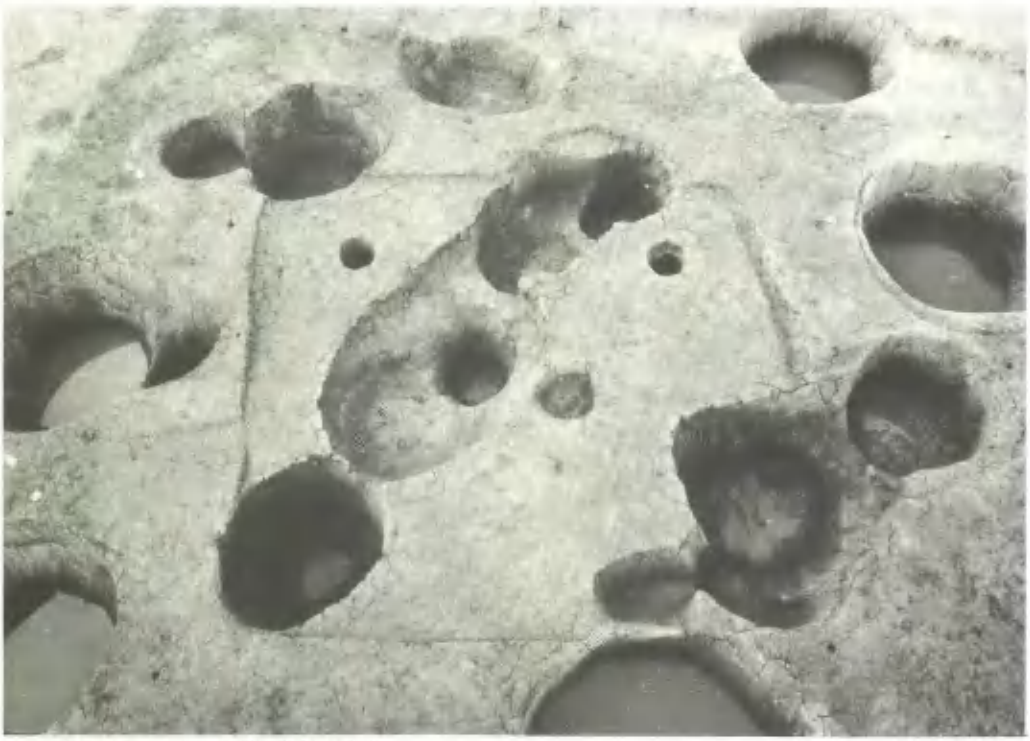
1．P－19　土層断面（南東より）

2．P－23　土層断面（南より）

1．4区　全　　景（溝・ピット）（東より）

2．4区　全　　景（西より）

1．ピット群・住居址（溝より南）（東より）



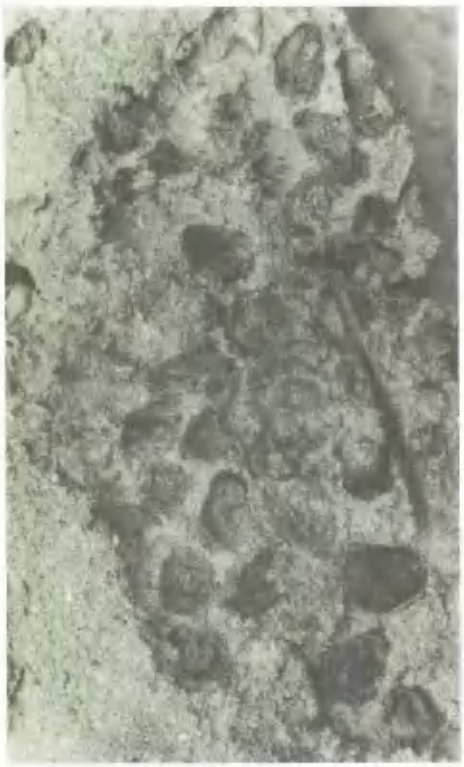
2．住居址・ピット群（南より）

1．4区　全　　景（柱穴列・柵列・ピット・溝）（南西より）

2．柱穴列・柵列（北より）

1．ピット下層ドングリ出土状態

3．ドングリ接写



2．ドングリ近影

4．ドングリを被っていた草木近影

ピット内ドングリ・草木類

1　2

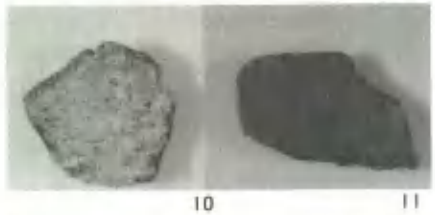
3　4　5

6　9

7

8

4区　出土遺物（貯蔵穴埋土中）



10　11

12　17

13　14　15

16

18

1 ～ 3……P－11
4 － 8……P－12
9……P－24
10……P－25
11・12……P－27
13－16……P－16
17・18……P－29

備中平遺跡(29)

目　　次

第１　調査経過…… 222
第１節　調査にいたる経過…… 222
第２節　トレンチ調査…… 225
第３節　調査日誌抄…… 225
第２章　歴史的・地理的景観…… 228
第３章　遺構・遺物…… 233
第１節　遺構・遺物の概要…… 233
第２節　１区…… 234
１・遺構…… 234
２・出土遺物…… 244
第３節　２区…… 247
１・遺構…… 247
２・遺物…… 251
第４節　３・４区…… 252
１・遺構…… 252
(1)建物…… 252
(2)住居址…… 258
(3)井戸…… 261
(4)土壙…… 261
A　円形土壙（№46）…… 261
B　方形土壙（№47）…… 261
C　土壙（№48）…… 261
(5)中世墓…… 262
２・遺物…… 262
a　須恵器…… 262
b　その他の須恵器…… 262
c　土師器・その他の須恵器…… 265
d　瓦質土器…… 265
e　瓦…… 265
f　備前焼…… 265
第４章　総　括…… 273
１・遺物…… 273

(1)石器…… 273
(2)鉄器…… 276
(3)墨書土器…… 276
(4)緑釉陶器…… 277
(5)青磁・白磁…… 277
(6)銭貨…… 278
(7)土錘…… 278
2 ・遺構…… 278

図　目　次

第１図　地形図，グリッド図及びトレンチ設定図（1/1000）…… 223
第２図　遺跡分布図（1/50,000）…… 228
第３図　１区平面図（1/200）…… 235
第４図　１区６線南北トレンチ西壁断面図（1/60）…… 237
第５図　窯跡実測図…… 239
第６図　窯跡横断面図①（1/60）…… 241
第７図　窯跡横断面図②（1/60）…… 241
第８図　Ｂ－Ｂ′土層断面図（1/30）…… 243
第９図　西溝断面図（1/30）…… 243
第10図　煙道部分実測図（1/30）…… 245
第11図　煙道Ｃ断面図（1/20）…… 245
第12図　１区出土土器実測図（1／3）…… 246
第13図　１区出土鉄器実測図（1／2）…… 246
第14図　２区平面図（1／150）…… 248
第15図　２区壁面実測図（1/50）…… 249
第16図　２区出土遺物実測図（1／3）…… 250
第17図　建物３・４・５・６・10・11・12平面図（1/60）…… 253
第18図　建物７・８・９平面図・断面図（1/60）…… 256
第19図　建物13・15平面図・断面図（1/60）…… 257
第20図　建物15柱穴出土遺物実測図（1／3）…… 258
第21図　建物14・16・17平面図・断面図（1/60）…… 259
第22図　住居址平面図・断面図（1/60）…… 260
第23図　住居址出土遺物実測図（1／3）…… 260

第24図　井戸（1/60）・土壙（M.47）（1/20）平面図・断面図
及び井戸出土遺物実測図（1/3）…… 263
第25図　円形土壙（M.46）断面図（1/20）…… 264
第26図　土壙（M.48）断面図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）…… 264
第27図　中世墓平面図（1/20）・及び出土遺物実測図（1/3）…… 264
第28図　3・4区出土遺物実測図　須恵器1（1/3）…… 266
第29図　3・4区出土遺物実測図　須恵器2（1/3）…… 267
第30図　3・4区出土遺物実測図　須恵器3（1/3）
土師器（1/3）・備前焼（1/3）…… 268
第31図　3・4区出土遺物実測図　須恵器4（1/3）
土師器・瓦（1/3）…… 269
第32図　3・4区遺構全体図（1/400）…… 271
第33図　石器実測図（1/2）…… 274
第34図　墨書土器・鉄製品・銭貨・青磁・白磁実測図（1/2）…… 275
第35図　3・4区建物配置図（1/600）…… 279
第36図　円形土壙（M.46）出土縄文式土器・サヌカイト製石鏃…… 281

表　目　次

表1　遺構番号表…… 270
表2　建物遺構一覧表…… 270
表3　柱穴遺構一覧表…… 270

図　版　目　次

図版1　1　備中平遺跡航空写真（東方より）
2　遺跡の近景（西方より）
図版2　1　1区全景（東から）
2　1区東側平坦部発掘区（西南から）
図版3　1　1区古墳石材点在状況
2　1区3線トレンチ発掘状況（南から）
図版4　1　第2遺構（窯跡）全景（北から）
2　第2遺構（窯跡）全景（北から）
3　第2遺構（窯跡）全景（西から）
図版5　1　第2遺構東壁溝北から2断面（東から）

2　第２遺構東壁溝北から３断面（東から）
3　第２遺構西溝断面（北から）
図版６　1　第２遺構煙道（南から）
2　第２遺構煙道石組部分（東から）
図版７　1　第２遺構煙道石組（北から）
2　第２遺構煙道石組（東から）
3　第２遺構煙道石組（西から）
図版８　1　第２遺構採集木炭（窯体内南半分）
2　第２遺構採集木炭（煙突状石組の埋土中）
3　第２遺構採集木炭（東側平坦部）
図版９　1　第３遺構出土遺物
2　１区出土備前焼
図版10　1　２区発掘風景
2　２区大溝
図版11　1　２区溝
2　２区ピット
図版12　1　２区遺構検出風景
2　２区炉床状土壙検出状況
図版13　1　３区溝状遺構発掘風景
2　３区溝状遺構発掘風景
図版14　1　３区溝状遺構須恵器出土状態
2　３区溝状遺構杯出土状態
図版15　1　３区溝状遺構
2　３区溝状遺構
図版16　1　建物３（西より）
2　建物３（北より）
図版17　1　建物４（南より）
2　建物４（北より）
図版18　1　建物７付近（南より）
2　建物15付近（南より）
図版19　1　建物８・９・15付近（南より）
2　建物９（南より）
図版20　1　建物14付近（北より）
2　建物14（北より）
図版21　1　井戸状遺構（南西より）

2　井戸状遺構（西より）

図版22　1　住居址，炭化材，高杯の出土状態（南より）

2　住居址（南より）

図版23　1　建物12，中世墓付近（北より）

2　19・20 / G・H区全景（東より）

図版24　1　建物3・4付近発掘風景

2　住居址発掘風景

図版25　1　方形土壙（№47）（東より）

2　中世墓（東より）

図版26　1　円形土壙（№46）（東より）

2　円形土壙（№46）（南より）

図版27　1　土壙（№48）

2　土壙（№48）出土遺物

3　土壙（№48）遺物出土状態

図版28　土師器（½）

図版29　須恵器，鉄製品，墨書土器（½）銭貨（⅓）

図版30　1　サヌカイト製石鏃・石錐（⅓）

2　サヌカイ剥片・黒曜石剥片（⅓）

図版31　1　サヌカイト剥片（½）

2　乳棒状石斧（½）

3　乳棒状石斧（½）

4　砥石（½）

図版32　青磁・白磁（½）

第1章　調　査　経　過

はじめに

所在地　岡山県上房郡北房町大字五名（ごみよう）字平（ひら）

遺跡名　　調査対象地域の小字名である「平」を遺跡名と命名するが，昭和47年に発掘調査実施した勝田郡勝央町の「平（たいら）遺跡」と区別するために「備中平遺跡」とした。

調査期間1973年７月17日～1974年３月31日

調査対象面積ＳＴＡ20＋40～ＳＴＡ25付近まで，延長約460ｍ，幅約31ｍ～60ｍ，総面積約20,000㎡，契約面積4,000㎡，発掘面積約5,000㎡

調査員行程表

年月＼氏名	栗野克己	井上　弘	岡田　博
昭和48年７月	○		
8月	○		
9月	○		
10月	△		○
11月		○	○
12月		○	○
昭和49年１月		○	
2月		○	
3月		○	
報告書作成			
昭和51年１月		△	
2月		○	

これは調査員一人体制の基本的スケジュールである。

遺跡カード

所在地	上房郡北房町山田，八幡山
土地所有者	坊正男
遺跡の状況	削平今なし，低丘陵に立地，横穴式石室円墳
時期	６世紀後半
出土遺物	須恵器提平，杯
所蔵	北房町教育委員会
調査年月日	昭和45年２月24日
調査員	山根隆志・神谷嘉樹

第1節　調査に至る経過

岡山県内における中国縦貫自動車道路線内の埋蔵文化財分布調査について，第二次整備区間である落合インターチェンジ以西は，各市町村教育委員会へ委嘱して，昭和44年度に実施した。本遺跡については上記の遺跡カードのとおり，八幡神社の北側の削平された丘陵上に内部主体を横穴式石室とする古墳が，かって存在したとの報告を得た。計画当初，古墳の残骸があればそれを調査する予定であった。

昭和47年４月頃，次年度（48年度）の調査対象遺跡の現地視察の要を認め，文化課職員数名

第1図　地形図，グリッド及びトレンチ設定図(1/1000)

で本遺跡を踏査したところ，古墳の所在したという八幡山丘陵の東に広がる水田地帯は，備中川等の河川氾濫源より一段高い台地を形成しており，遺跡の立地すると思われる良好な地形を呈しているのが確認された。この台地上で，須恵器・土師器の破片の散布がみられた。

第2節　トレンチ調査

トレンチ調査は，遺跡全面に20m方眼に設定したグリッド線を利用し，地形を考慮しながら巾2mのトレンチを基本として発掘した。しかし，3区においては，遺跡の性格上柱穴を主体とした遺構であるため3m方眼の平面グリッドで発掘した部分もある。

各調査区の概要は第3章各説に評細があるのでここでは省略するが，遺跡の範囲は1区～4区まで広がっており，東端部はI線トレンチ東端部で台地末端を確認し，西端部は1区B線および，3線トレンチで遺構は，すでに削平され残存しないことを確認した。

（栗野）

第3節　調査日誌抄

昭和48年7月12日（木）　津山，田邑の文化財収蔵庫にて調査担当者（栗野・岡田・井上）の打合せをする。草刈り，トレンチ設定，作業員，器材置場，水利関係，プレハブ現場事務所は7月初めにリース会社により建築済。

7月17日（火）　本日より作業開始，前日津山田邑の文化財収蔵庫で積んだ発掘資材，および宮の前遺跡からパネル等の資材搬入。北房町教育長・社会教育課長・文化財保護委員・新聞記者・放送記者各氏来跡。器材置場の草刈りと整地作業。

7月18日（水）～21日（土）　区長へ挨拶，水道使用と農業用水路関係打合せ。作業員が少ないので町教委へ再募集依頼，1区草刈り開始およびトレンチ設定。

7月23日（月）～28日（土）　1区草刈りと雑木伐採終了。B線側トレンチ発掘開始。2区草刈りほぼ終了。トレンチ設定。

7月30日（月）～8月5日（日）　1区3線東側・C線北側トレンチ発掘開始，2区D線南側トレンチ発掘開始，粘性が強く掘りにくい。

8月6日（月）　係会議のため休み。

8月7日（火）～11日（土）　1区3線東トレンチ・須恵器・石材等が造成土中より出土。2区D線トレンチ掘り下げ中須恵器等遺物若干出土する。

8月16日（木）～19日（日）　1区C線トレンチ内柱穴の検出，焼土と灰層部分を清掃。時期決定できないが遺構が存在することを確認した。2区D線トレンチ掘り下げ。

8月20日（月）　休み（連絡会議，矢掛町毎戸遺跡見学）

8月21日（火）～25日（土）　1区トレンチ断面図一部作成。谷の部分へ南北トレンチ2本

発掘，青磁片出土，底までは深い。２区Ｄ線トレンチ発掘，鉄滓や須恵器が出土し，炭や焼土が多い。

８月27日（月）～９月１日（土）　１区谷のトレンチ冠水，一部崩壊，４区遺跡の西端部確認のため，４区最東端トレンチから発掘開始。

９月３日（月）　係会議のため休み。以上９月１日までのトレンチ調査の結果を検討し全面発掘調査が必要であるとの結論を得る。しかし３区・４区トレンチは作付の関係もあり遅れているのでトレンチ作業も続行する。

９月４日（火）～８日（土）　４区Ｇ線，Ｉ線トレンチ発掘（一部包含層所在する），３区Ｅ線とＦ線の間にトレンチ設定。

９月９日（日）～14日（金）　１区遺構の検出された東斜面の表土はぎ開始，２区鉄滓の出土する層までは深いのでユンボとブルトーザーの使用を試みる。しかし粘性が強く機械が降雨も加わって作動せず中止，３区Ｅ・Ｆ間トレンチ発掘中，ベルコン搬入。

９月17日（月）～22日（土）　１区地山面を削り出し遺構検出，全面発掘調査が決ったためパネル等で５間×２間の小屋建て，作業員休憩所と器材置場とする。

９月25日（火）～28日（金）　１区表土はぎ，遺構検出，柱穴掘り下げ続行。

９月29日（土）　係会議のため休み。

10月１日（月）～９日（火）　１区窯跡状遺構掘り下げ，トレンチ断面図実測，写真撮影，２区包含層の上までベルコン利用し掘り下げる。

10月11日（木）～13日（土）　雨のため土器洗い等。

10月16日（火）～20日（土）　稲刈りのためほとんどの作業員休み，土器洗い等遺物整理。

10月22日（月）～27日（土）　１区断面実測の済んだ所土手はずし，平面実測のためポイント設定，２区排水作業終了ののち発掘再開。

10月29日（月）～11月２日（金）　１区遺構実測，窯跡状のもの解体しながら実測，２区包含層の上まで荒掘中。

11月５日（月）　窯跡状遺構煙道部縦横断のため解体実測開始。

11月６日（火）　係会議のため休み。

11月７日（水）～10日（土）　１区煙道石組部分実測解体除去，１区の調査ほぼ終了。２区包含層の上まで発掘中。

11月12日（月）～17日（土）　２区包含層下層まで掘り下げ作業を行なう。１区第２遺構平板修正・追加実測など補足作業を行なう。

11月19日（月）～24日（土）　２区掘り下げ続行。土層観察のための壁面清掃を平行して行う。３区・４区トレンチ・グリッド設定，３区にて柱穴検出。

11月26日（月）～12月１日（土）　２区遺構面に近い部分で清掃を始める。３区グリッド発掘続行，随時拡張を行なう。

12月２日（日）～８日（土）　２区にトレンチを新設，溝状遺構など確認。３区はグリッド

掘り下げ続行。

12月10日（月）～14日（金）　2区大溝・ピットなど写真撮影，3区グリッド新設，全面発掘を目指す。

12月16日（日）～22日（土）　3区発掘作業続行。柱穴検出作業を行なう。

12月23日（日）～27日（木）　3区発掘作業続行。器材整備・資材点検など行なう。

昭和49年1月6日（土）～12日（土）　3区14・15・16・17～E・F・G・Hライン周辺発掘作業続行。奈良～平安朝の遺物が出土。3区から4区にかけてのトレンチからサヌカイト片出土。

1月14日（月）～19日（土）　工事用道路部分の発掘を急ぐ。柱穴などの遺構を確認している部分については迂回。3区発掘続行，中世墓検出。

1月20日（日）～26日（土）　3区発掘続行，柱穴の断面観察ならびに写真撮影を平行して行なう。

1月28日（月）～2月2日（土）　18・19～G・Hライン地区発掘作業。15・16～EF地区は遺構の掘り下げ作業。掘立柱建物の実測を行なう。天候不順，雪多く作業難航。

2月3日（日）～9日（土）　3区・4区の発掘作業・遺構検出・平板実測を行なう。雨・雪の日が多く作業はかどらず。

2月12日（火～17日（日）　4区発掘作業続行，遺構検出作業を平行して行なう。

2月19日（火）～23日（土）　4区発掘作業・遺構検出作業。サヌカイト製石鏃や剥片多し。3区遺構の写真撮影。

2月24日（日）～3月2日（土）　4区発掘作業・遺構検出作業続行。実測・割付け作業を平行して行なう。好天に恵まれ作業は進行。

3月4日（月）～9日（土）　4区発掘作業・遺構検出作業続行。実測続行。

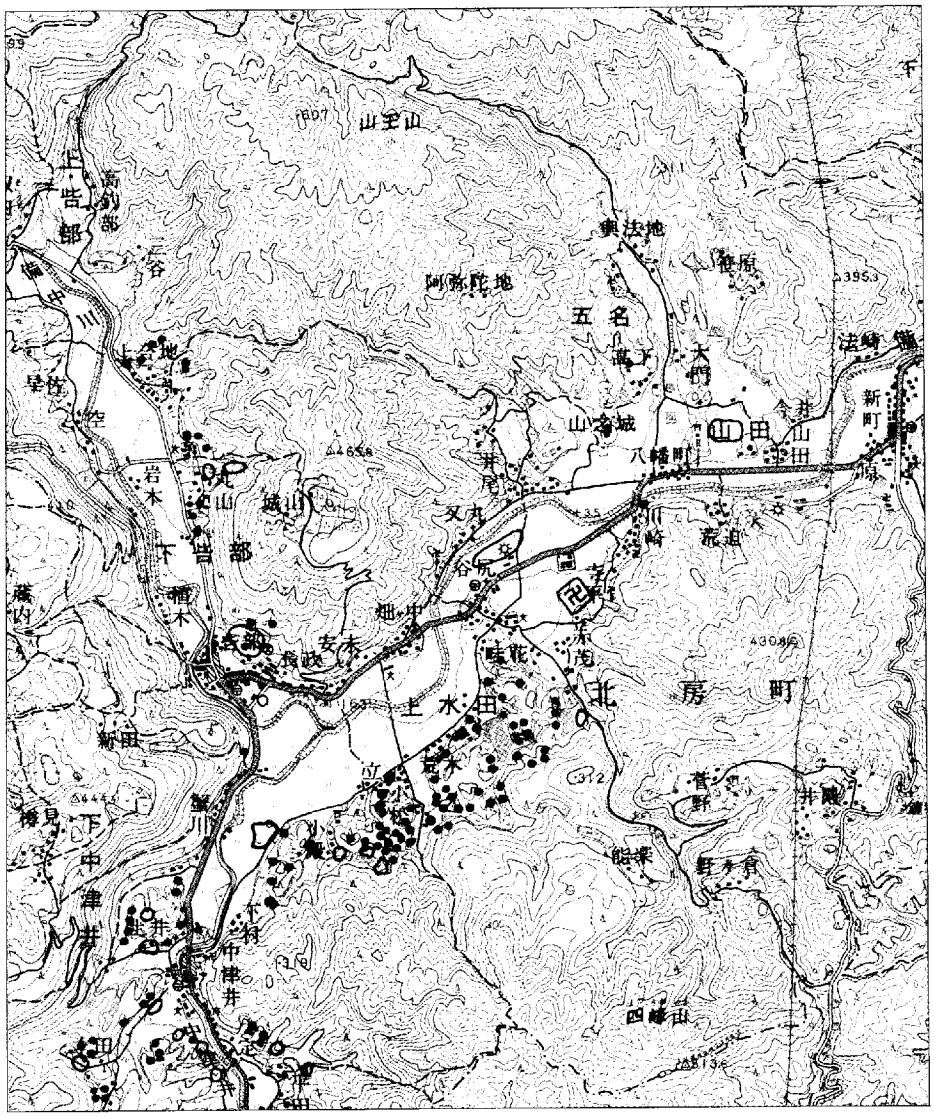
3月11日（月）～16日（土）　4区発掘作業・遺構検出作業続行。20・21～H・I地区で住居址検出，周辺拡張作業。

3月18日（月）～23日（土）　4区発掘作業続行，写真撮影・検出遺構の清掃など平行して行なう。3区平面実測はすべて完了。

3月25日（月）～31日（日）　4区遺構の写真撮影・実測完了。2区追加測量を終え，器材の整理・撤去を行なう。器材・遺物は津山市田邑収蔵庫に搬入する。

本報告書の作成に当っては，関西学院大学大学院，岡本寛久，国学院大学，秀島貞康，仏教大学，内藤善史の協力を得た。

第２章　歴史的 地理的景観



第２図　遺跡分布図　（1/50000）

備中平遺跡は，岡山県中北部にある上房郡北房町上水田に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で，北房町，新見市にかけて，石灰岩の採掘場が多く見られる。また，北房町の西，新見市の南部には，石灰岩地形が見られる。阿哲台と呼ばれているのがそれである。この阿哲台地の豊永付近にはカルスト台地としての地形が見られる。この石灰岩地帯は，さらに西に広がっており，広島県東城町の帝釈峡へと続く。

この石灰岩地帯の間を流れる川がある。旭川の支流の一つである備中川である。この備中川により開析された平野は，一定の広さと，まとまりを見せている。それは，現在の北房町の中心をなす地域であることからも解るように，この地方にあって注目すべき平野である。備中川により形成された平野は，上呰部，下呰部を中心とする地域，上水田を中心とする地域である。さらに，備中川の支流になる中津井川により開析された地域とを合せた地域が，この一帯の中心地を形成する。そして北房町内で現在までに知られている遺跡も，その大多数が，この周辺に存在している。そしてそれ等の遺跡は，この平野を生活の場とした人々によって残されたものである。

付近一帯は，石灰岩地帯であるため，井倉洞，満奇洞をはじめとして数多くの洞穴が知られている。帝釈峡においては10数年来岩陰，洞穴遺跡の調査がなされており，その成果も上りつつある。そのような状況のもとで，同じ石灰岩地帯であるこの阿哲地方も最近では注目され始めている。先にも述べたが，この地方は石灰岩地帯であるための洞穴，岩陰を見かけることが多い。このような岩陰遺跡の一つとして地蔵が渕遺跡がある。谷尻遺跡の東方約1kmの位置にある。この遺跡は備中川が大きく流れを変える曲折部にあり，そして同遺跡からは縄文式土器が採集されている。この例は，一つの特殊な例でなく，岩陰，洞穴の精密な調査を実施すれば，さらに同種の遺跡の増える可能性は大きいと考えられる。北房町内の，中国縦貫自動車道関係の遺跡である，谷尻遺跡，桃山遺跡からも，縄文式土器の出土をみている。また，北房町との町境にある，落合町宮の前遺跡でも縄文式土器片と縄文時代晩期と考えられる約40個の貯蔵穴とが発見されている。以上の例は，谷尻遺跡の縄文時代の遺物の出土状況と考え合せてみれば，当地方における，縄文時代の停滞性を示すものではなく，むしろその逆が考えられるであろうし，平地を生産，および生活の中心の場とするきざしが見え始めているものとすることができるであろう。

弥生時代の遺跡は，縄文時代の遺跡よりも，数多く知られている。それ等の立地する位置としては，低丘陵，緩斜面，及び平地にあり，他地域のそれらと変るところはない。ただ，個々の遺跡の様相が判明していない現在ではそれ等の遺跡相互の連関を具体的に述べることはできない。また，その地域的発展についても不明とせざるをえない。しかし現在までに知られる遺跡からみて，備中川により開析された平地を中心に展開することは否定できないであろう。つまり遺跡分布図を見ると，それらの多くは，備中川の周辺に見られるのである。それは先に述べた様にこの地域にあっては，縄文時代においても，平地が，その生活の中心となりつつあった状況を考慮に入れる必要がある。その様な状況を背景としてこの地域における弥生時代の

生産的基盤が完成し，弥生時代が展開してゆくものであろう。

これ等，低地に進出した弥生時代の遺跡の発見が少ないのは，発見の機会がないことと同時に，時代的重層が考が考えられるであろう。つまり，現在この地域に見られる集落の立地する位置は，自然的災害に対して，非常に安定していることからしても，その条件の良さはうかがえるであろうし，その位置に遺跡が立地する可能性は大きい。

古墳時代に入ると，さらに多くの遺跡が知られてくる。そのほとんどは古墳である。それ等のほとんどは備中川，中津井川により形成された平地の縁辺の丘陵上に位置する。知られている多くは，横穴式石室墳である。散在する横穴式石室墳の間に，数基ごとのまとまりを見せる前方後円墳，前方後方墳がある。前方後円（方）墳は，それ等が存在する地域の一つの象徴であり，その地域の初期権力者の象徴として，誇示されるものであった。そのことは，それ等古墳の存在する地形からも推測できる。それを，この備中川上流の平地にみると，この地域にあって，もっともまとまりのある平地を一望できる位置に，前方後円墳，前方後方墳がある。荒木城御崎１号墳，同２号墳がそれである。荒木城御崎２号墳は，低く，巾のせまい前方部をもつ全長約40mの前方後方墳である。墳丘は二段築成である。これに西接して，同一号墳がある。全長約60mの前方後円墳である。前方部は，後円部に比べて約３m低いが，前方部の先端がやや開いている。この二つの古墳は，この地域にあっては，最も古い時期の古墳と考えられる。この古墳は，地域共同体の象徴として，その共同体の首長を葬るために築造されたものであろうことは古墳の立地する場所から見わたせる平地の広さにても解るであろう。それだけにその位置は水田の平地のどの地点からも見ることができる。そして近くにある同じく前方後円墳である。立古墳，御陵古墳と同一地域において順次造られたものであろう。

備中川の上流である呰部の地域にも数基の前方後円墳，前方後方墳がある。それらの規模は，荒木城御崎古墳の半分位の大きさであるが，呰部の小平野を囲む位置に点在しており，その平地を基盤とする共同体の象徴として存在したものであろう。これらが築造されたのは，荒木城御崎古墳が造られたと同時期のものはないが，それに続く一連の前方後円墳が築造されたのと同時期頃に造られたものであろう。つまり，両地域において独自性を保ちつつ，共同体が発展してゆくなかで，順次築造されたと考えられる。

--方，中津井の地域には古い時期の前方後円墳はみられず，先の地域に比べれば最も後発的である。しかし，時期的には遅れるとしても，中津井の小平地を基盤とした，首長墓としての，前方後円墳が出現している。つまり，上定古墳，下定古墳がそうである。それから古墳の出現により，この地域も，独自性をもった共同体の出現を考えることも可能であろう。以上に述べた前方後円（方）墳の存在する地域には，他に多数の古墳がある。それらの古墳群は，前方後円（方）墳を生み出したその基盤を支えるものであり，地域共同体の基盤でもある。そしてそれらが，その地域の特異性を生み出してゆくものであろう。

備中川の中流，上流及び中津井川流域において，縄文時代，弥生時代においては顕著な個性的なものは見られなかった。しかし，古墳時代が展開する間に，地域差が見られるようになっ

た。それは，その地域の生産基盤の差を反映したものと考えることができよう。いずれにしても，最も早く，古墳文化を成立しえた上水田地区と，それにやや遅れた呰部地区，そして，前方後円墳の築造が最も遅い中津井地区である。その差違は，大きくはないとしても，それ以後，独自の発展をし，律令時代へと続くものと考えられる。

歴史時代の遺跡として赤茂（英賀）廃寺がある。赤茂廃寺は，備中平遺跡の南西約1.5kmの，備中川の東岸の台地上にある。この台地上に，かって心礎の存在したことが知られており，散布する古瓦は白鳳期のものである。この出土する古瓦の時期が同廃寺の創建された時期と考えられる。また寺域内と推定される地点に瓦窯址の存在が確認されている。

備中平遺跡の所在する郡名は，当時の英賀郡である。和名抄によれば，英賀郡には「中井」「水田」「呰部」「刑部」「丹部」「林郷」の六郡が所属していた。これ等の各郷の明確の境堺を引くことは困難であるが，郷名の訓みと現在に見られる地名との異同から，その概略は，示し得るであろう。つまり和名抄を見ると，「中井」は「奈加津井」と訓み，中津井川沿いに開けた平地に「中津井」の地名があり，そこを中心にした地域とすることができるであろう。「水田」は「美都多」と訓み備中平遺跡，谷尻遺跡の付近を水田としており，この平地を中心とする地域であろう。「呰部」は「安作倍」もしくは「阿多」と訓み，現在の上呰部，下呰部を中心とした地域とすることができるであろう。以上の三地域は先に述べたように，古墳時代を通じて，地域的な共同体の発展を見た地域である。それ等は，備中川，及び，中津井川により形成された小平地を中心に発達した地域共同体が，律令時代の行政村落へと組込まれたものであろう。

「刑部」であるが，これは，小坂川の中，上流域に開ける平地を中心とした地域に，「小坂部」「上刑部」の地名があり，この一帯を中心とした地域とすることができるであろう。「丹部」であるが，これは，熊谷川の流域にみられる平地に，「田治部」の地名が見られる。この「田治部」から「上熊谷」「下熊谷」を含む範囲を中心とした地域とすることができるであろう。以上の「中井」「水田」「呰部」「刑部」「丹部」の地域は，和名抄にも，その訓がみられるが「林郷」については，その訓が見えない，そのため，当時どのように呼称されていたのかは不明である。しかし，英賀郡六郷の中で五郷までは，現在まで，その地名を残していることは「林郷」についても，文字は違っていても，音としては残る可能性は大きいと考えれるであろう。ところで「林郷」の訓みであるが，『新見市史』では「牟良古曽」としている。そのように訓む理由は述べられていないが「林」は「村」の写し誤りとするものであろうか。そうでなければ「林」に「牟良」の訓考えられない。ところで，林を漢和辞典で引くと，衆，盛，聚と同語義であることが解る。つまり，「林」が，衆，盛，等と同じ意味で用いられているのである。また，人名に「シゲ」の訓のあることも記してあることからすれば，「林」に「シゲ」「シユ」「セイ」の訓を推測することもあるいは可能であろう。もし，それが可能であるとすれば，現在の菅生に訓みが似てくる。ここでは可能性の問題としてではあるが，「林郷」は，菅生を中心として，千屋実，同井原を含めた範囲をそれに当ててみたい。

古代の英賀郡の範囲を推定すると，上記のようになる。それを現在の行政区画にすれば，上房郡北房町，阿哲郡大佐町，新見市千屋，熊谷，菅生等，高梁川より東側の地域を含めた範囲とすべきでろう。この英賀郡の郡家であるが，現在推定されている所は，北房町小殿に郡神社が所在していることから，その付近に想定されている。しかし，地方における寺院と郡家とのセット関係が指摘されていることも考えると，赤茂廃寺の所在する台地上に想定することも不可能ではない。それは，セット関係からのみではなく，立地する地形と，その広さからしても，その可能性はあるものと考えられる。いずれにしても備中平遺跡，谷尻遺跡等の所在する水田の平地は，この地域にあっては，歴史上重要な位置を占めつつ発展したものと考えられる。

（井上）

参照文献

松尾惣太郎　新見市史

西川宏　吉備の国　学生社

正宗敦夫校訂　倭名類聚鈔　風間書房

池辺弥　倭名類聚抄郷名考鐙　吉川弘文館

諸橋轍次　大漢和辞典　大修館書店

記

本遺跡は，谷尻遺跡と約２㎞の距離をおくのみで，隣接した遺跡であること，谷尻遺跡発掘調査報告の同章の文責者が同一者であることから，古墳時代までの記述は，ほぼそのまま再録した。遺跡の性格が，備中平遺跡は，歴史時代が主であることから，歴史時代の記述を加えて，第２章としたものである。そのため，遺跡分布図，地名表等は，谷尻遺跡発掘調査報告書（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11）を参照されたい。

発掘調査にあたっては，下記の方々の御協力を得た。記してその謝意を表するものである。

（敬称略）

北房町教育委員会

北房町文化財保護委員会

備中平遺跡作業員名

小林　荘一　山本　好次　中島　一男　西川勝太郎　鈴木　忠一　蜂谷　鉄夫

南　　潤　坊　　正男　小林　義造　奥山　三男　田中　　潤　大恵　澄代

平田　幸子　岡本美智江　山根　節子　水野　正枝　丸山　絹子　小林芙二子

梶谷　清枝　池田　菊代　永田　秀子　坊　喜美子　永田勢津子

発掘調査中は，調査事務所の隣家である山本豊氏より，種々の協力を得た。記してその謝意を表したい。

第3章　遺　構.　遺　物

第1節　遺構.遺物の概要

備中川の北側にある平地に，北から南へ伸びる尾根がある。細長く低い舌状の屋根の南端には，八幡社が鎮座している。その東側には，非常に緩やかな斜面が広がっている。備中平遺跡は，この斜面を中心に展開しているものと考えられる。調査は，この遺跡を，西側の丘陵を1区とし，以下2・3・4の4区に分けて実施した。

1区は，調査の契機となった古墳の調査と，関連遺構の有無の確認を行うことから着手した。結果としては，古墳は完全に破壊されており，その痕跡もみられなかった。そして，東側斜面には時期不明の窯跡を1基発掘した。付近には，数個の柱穴もあり，建物が数棟想定される。

2区は，約1mにおよぶ粘土の堆積があり，広範囲の発掘には，時間的にも，労力的にも非常な困難をきたした。そのため，発掘区画は，必要最少限にとどめた。検出した遺構は，炉状遺構3個，ピット2個，それに溝である。出土遺物としては，多量の鉄滓，備前焼，土師器，炭等である。遺跡の時代としては，鎌倉～室町時代と推定される。

調査の過程では，3区，4区を区分して実施したが，検出遺構，及び出土遺物からすれば，その両区は，一括して報告すべきであると考えた。つまり，本遺跡の中心的な遺構である建物遺構の広がり，及び，出土遺物の同時性を考えれば，3・4区は連結している。そこで，同様の記載の重複をさけることもあって，両区を合せて報告することにした。

3・4区からは，15棟の建物遺構を検出した。個々の遺構の時期を決定することは難かしいが，奈良～平安時代の建物が，その中心をなすものと思える。次に，古墳時代前期の住居址1軒，縄文時代の土壙1個，弥生時代と推定される土壙1個，須恵器の蓋杯を伴出した土壙1個，井戸状遺構1個，中世墓1個を検出した。出土遺物としては，須恵器が最も多く出土している。他に，土師器，縄文式土器片，緑釉陶器片，青磁片，石鏃，石斧，サヌカイト片，黒曜石片，鉄器等の出土があった。中でも，1点ではあるが，墨書土器の出土があった。しかし，出土遺物を丹念に観察したのではあるが，硯もしくは，その代用品と考えられるものは発見されていない。以上のように，遺構，遺物ともに古くは縄文時代のものもある。新しい時代の遺物としては，青磁片，備前焼，灯明皿等の中世の遺物も存在しており，長期間にわたる遺跡である。

（井上）

第2節　1　区

1　遺　　構

トレンチ調査の結果，古墳は残存しておらず平面調査は実施しなかった。しかし東斜面から検出された柱穴・窯状遺構等については精査が心要と考えられ約600㎡を平面調査した。その結果建物2棟と窯跡，その他，柱穴，ピット等を検出した。（第1・3図）

＜古墳跡＞

本遺跡が調査対象となる契機を生みだした遺構である。丘陵の頂部にかって古墳が存在したが，牧草地造成の折ブルトーザーにより削平したという分布調査の知見に基ずいて，残骸でもあれば調査する方針であった。

丘陵の頂部付近にB線～東西トレンチ，3線に南北トレンチを設定した。各トレンチとも，丘陵の頂上部は削平され表土下にすぐ地山が検出され，何ら遺構は，認められなかった。しかし3線トレンチの南半部においてブルトーザーによって埋められた土の中に，須恵器の破片と古墳の石材が散乱していた。この石材の材質は三種類程あり，そのうちの一種は，ここから約2㎞北の山中から出土する笠峰石といわれている変成岩である。これらの石材の大きさや量から，やはり横穴式石室の存在したことが予想される。

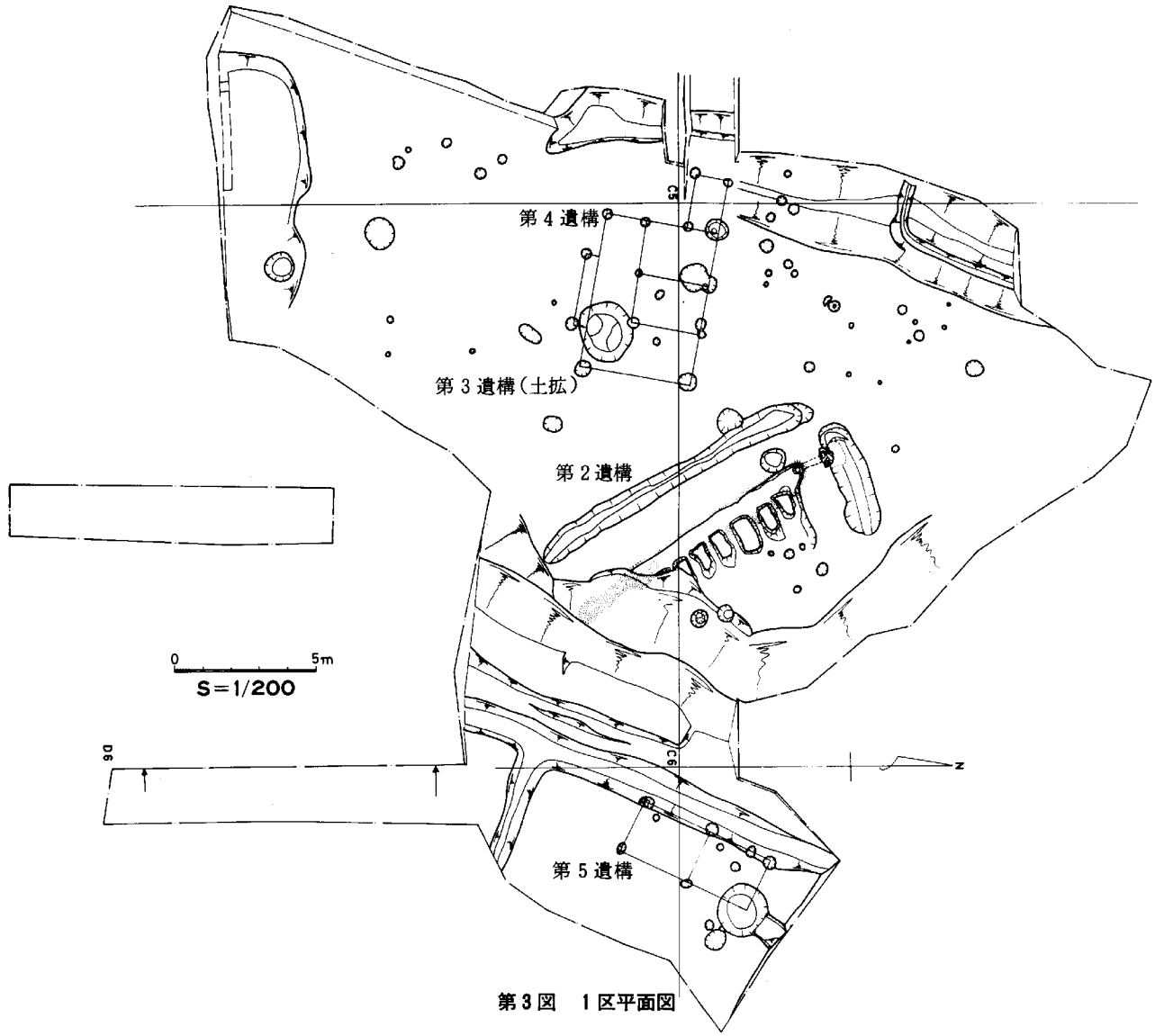
須恵器の破片は杯身・杯蓋・高杯・瓶・甕の五種類がみられる。杯身の口縁部破片は7世紀初頭前後のものと考えられる。町教委保管の遺物は6世紀後半のものがあるとのことであるが実見の機会を得られず詳らかでない。

＜窯跡＞（第5～10図）

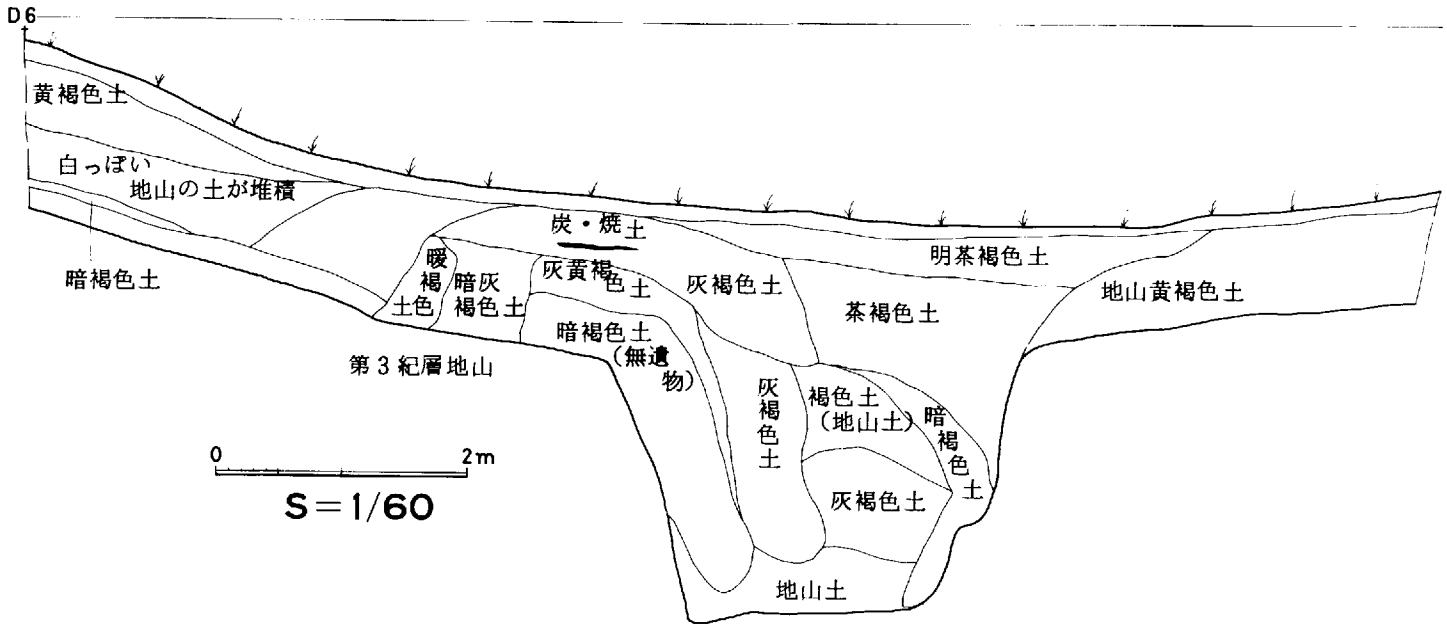
南北にのびる丘陵の東斜面中段に南北約35m，東西約17mほどの三角形状平坦面が存在し，この東側から発見された窯跡である。

窯体の上半部は削平を受け，東側は崖により破壊を受けており半壊の状態であった。窯体は主軸をN－32°－Wの方向におき，南北に細長くゆるい傾斜をもったもので，燃焼室と焼成室の区別が無く，北端部に煙道，東壁に7ケ所の溝があり，さらに東壁溝の東側には平坦面が存在する。また窯体に対して地形の上から，傾斜面の高い方，すなわち西側と北側に溝を有する特異な形態の窯跡である。周辺の柱穴・ピットは，埋土・配置・出土遺物等の状態から本遺構との関連はないものと推定される。

窯体の構造　床面が残存するのは約7mであるが，南東部の削平を受けた部分が赤色に焼けており，これをたどって窯体が連続していたものとすると，全長9.4mまで計測できる。しかし焚口部分は不明である。また窯体の床面は，煙道から焚口方向へゆるい傾斜をもって下っている。1mで9～10㎝下るので，約$\frac{1}{9}$勾配（約5°）である。幅は約60～70㎝である。側壁の現存高は，約40㎝であるが以下元形を推定してみる。典型的なD－D′の断面形を観察すると，床面は平坦であり，側壁面は垂直に立上らずに内湾している。奥壁から天井に至る部分の湾曲



第3図　1区平面図



第4図　1区6線南北トレンチ西壁断面図

と，側壁の湾曲の状況より，天井はアーチ形で高さ約１ｍ前後と推定される。

窯体はすべて地山掘込みであるが，窯体内部に充満している焼土塊の中に僅かにスサ入り粘土がみられるところから，天井の一部は粘土で構築されていた可能性がある。

窯体の東壁溝　すなわち窯の占地の上で低い側に主軸に直交した７本の溝が存在する。溝底は窯の床面よりわずか１～３㎝高いか，ほぼ同一レベルから外へ向ってゆるやかに傾斜する。溝の巾は25㎝～45㎝，長さ80㎝～100㎝であるが本来は溝ではなく，穴であったと考えられる。溝の心心距離は75㎝～100㎝で平均85㎝である。

煙道　奥壁のやや西よりから水平にあけられており，直径17㎝，長さ74㎝を測る。さらにその先に，石組の垂直の煙道が設けられている。石組部分はやや広く，約25㎝の穴となっている。窯最奥部煙道の穴の手前の床面には，直径約25㎝深さ約５㎝の凹みが認められた。水平煙道部分の縦断面は中央部がわずかに低く，両端がやや高い。これは両側から掘り抜いたためと考えられる。石組は基部に平石を立て，三方囲いとし，その上に小口積，又は横口積に石を積み，いずれも赤色に焼け，ひび割れているものもある。この石囲部分は，北溝の法面に造られており，石囲の周囲はさらに土で履われていた。

窯の焼け方　床面は南端部が赤味を帯びている他は，やや硬く黒色に焼けている。さらに黒色の外側は赤色に焼けている。側壁も大半は黒色に焼けているが，赤色部分もある。天井部は窯体内部に落下し充満した焼土塊により赤色に焼けていると考えられる。奥壁付近から煙道部分は赤色でやや堅く焼きしまっている。煙道の石組部分は，石自身赤色に焼けているほか周囲の土まで赤色に焼けている。

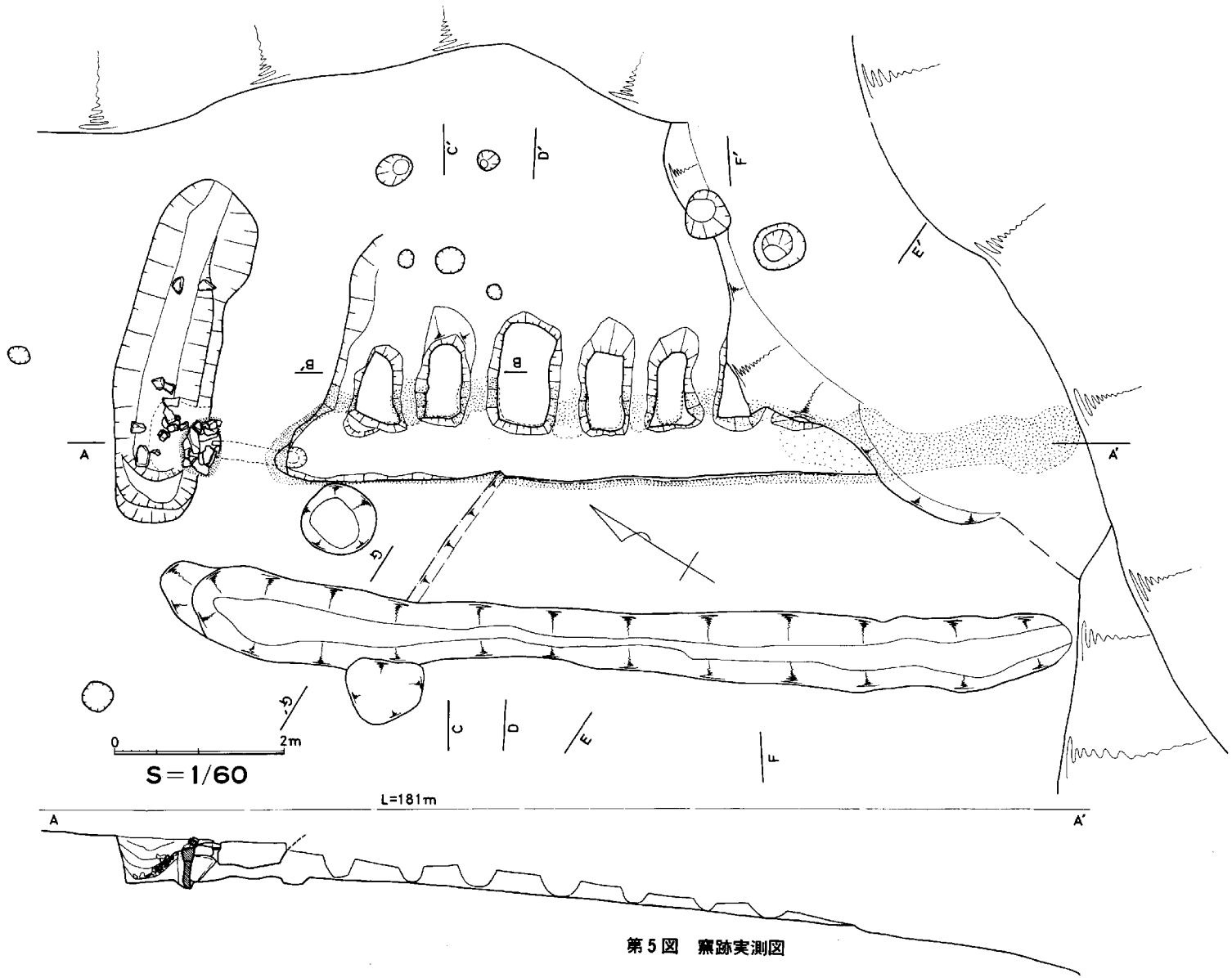
埋没状態　窯体内部は前述のように，焼土塊が充満し，そのすき間に若干の土が混入している状態であった。床面からは炭の細片が若干採集できた他は，灰・炭の層は認められない。東壁の７本の溝部分では，下層に焼土混りの炭がみられさらに東の平坦面まで広がりをみせて灰原となっている。これらの状況から窯体内部の清掃をして東壁の穴から外へ排出したと考えられる。

西溝　窯体主軸にほぼ平行，窯から1.2～1.5ｍの間隔をとり巾0.6～1ｍ，深さ25～30㎝の溝がある。南端は削平されているが現存長は10.7ｍである。

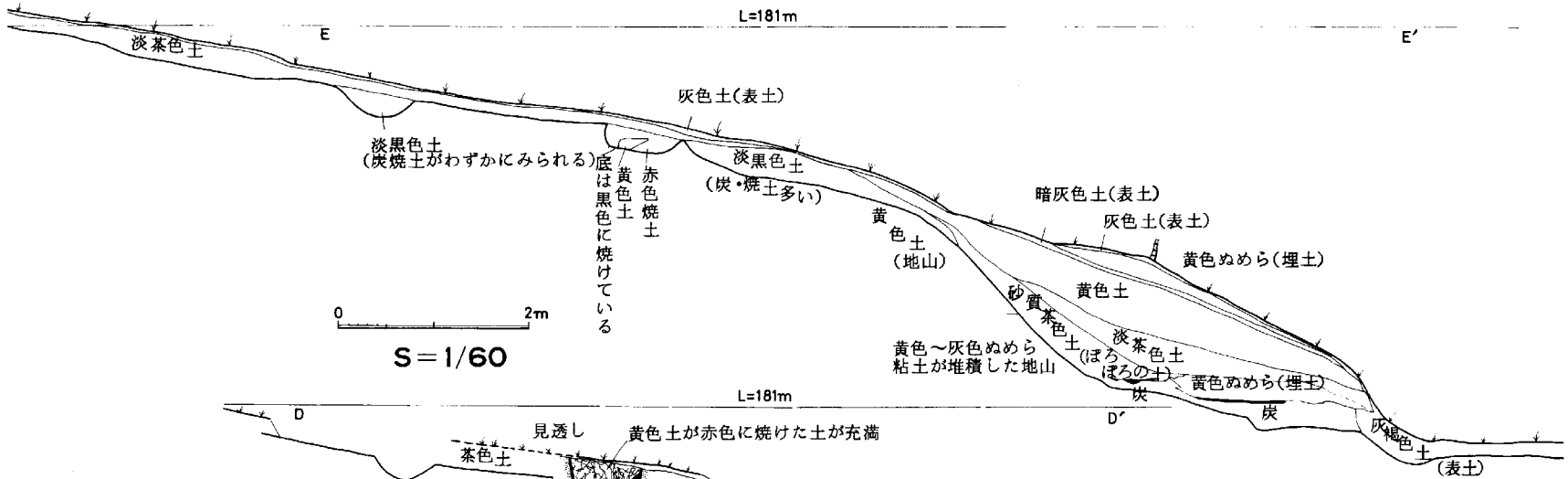
北溝　窯体主軸および西溝と直交する溝がある。西溝とは約50㎝離れている。巾約1.2ｍで深さ約50㎝，西端部に段が残っている。また法面に石囲煙道が設けられ，溝の埋土には焼けた石と焼土や炭が認められた。

東側平坦面　東壁の穴の外側に広がる灰原部分で，東西約1.5ｍ，南端部は削平されているが現在長約４ｍの平坦面である。

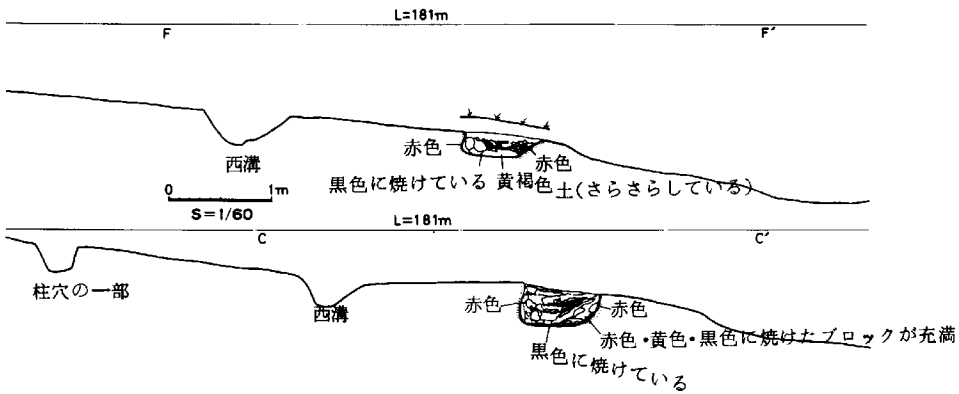
＜ピット＞　直径2.7ｍ深さ約28㎝のゴミ穴と考えられるピットで，近世瓦・備前焼・陶器等が出土した（図版９），瓦は桟瓦で本丘陵上にある八幡神社の瓦と同一であるが用途は明らかでない。備前焼は擂鉢，陶器は，椀と徳利がみられる。また混入品であるが酒津期に特有な小形台付鉢の台部がみられる。（第12図４）



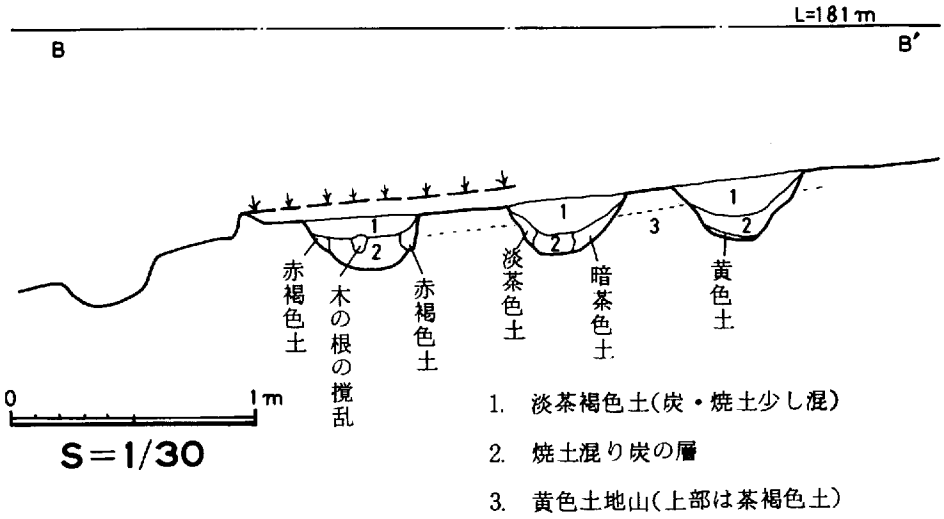
第5図　竈跡実測図



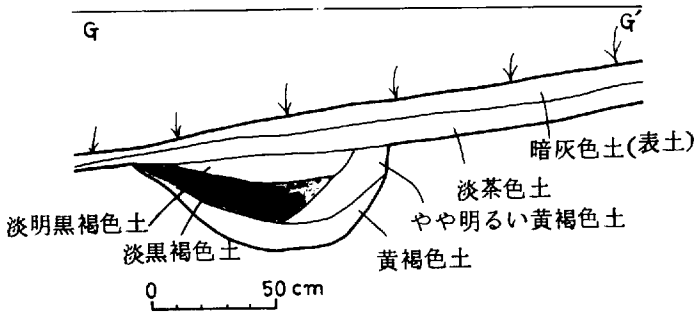
第6図　竪跡横断面図①



第7図　竪跡横断面図②



第8図　B—B′土層断面図



第9図　西溝断面図

＜**建物1**＞　丘陵東斜面平坦部の西に検出された掘立柱建物で約4 m×5.5 mの建物である。柱穴は直径15cm～50～60cmで深さ25～60cmと不定である。柱痕の検出されたものをみると直約15cm～18cmである。出土遺物がないので時期不明だが埋土が灰色を主体としているので近世以降のものと推察される。

＜**建物2**＞　窯跡等の存在する平坦面より一段低い位置に1間×2間の掘立柱建物が検出された。4.95m×1.98mの規模で，柱穴は約40cm深さ約25cmで剥離性に富む地山を掘りこんだものである。

その他の遺構　第4遺構の西端から北へ向けて溝が検出されているが巾約3 mの広い溝は，現在まで使用された道の痕跡で北側のL字形の溝はさらに西方へ広がる畑の溝である。

拡張区西南端で検出した落込みは約1 ㎡をはかるものであるが土師器細片が1片出土しただけの性格不明のもので特に床面の検出はできなかった。

東端部Ｃ６付近の溝も畑の溝で遺構として特に取上げるものではない。

２　出土遺物

１区からは遺物が非常に少ないが，そのうち参考となる若干の遺物をとりあげてみる。

須恵器　第12図Ｉに示した須恵器杯身は，古墳が破壊された際の排土中より採集したもので，直径については図上復元しているが正確ではない。第12図２は須恵器蓋でＢ線トレンチの２線より西６ｍの所から出土したもので，２区～４区で多く出土している須恵器との関連があり，かってはこの丘陵上にも何らかの遺構が存在した可能性がある。

土師器　第12図３は土師質皿で，口縁部は不明，底部はヘラ削りで立上り部分から出土した。

鉄器　第13図は前記土師器と同様の出土である。釘が４点（１～４）と鉄片が２点（５・６）で，釘は１～３が直径約３㎜の方形の釘で復元長は１が６㎝，２が5.5㎝で，この，三点はほぼ同一規格品と考えられる。頭をたたいてわずかに折曲げており。１と２は途中ほぼ同じ所から曲っており，同一の使用方法が考えられる。４はやや太く断面で６㎜を測るのでやや長い釘と考えられるが，全長は不明，５・６は巾約5.5ｍ厚1.㎜の断面を持つ，一個体の可能性もある。

炭　第２遺構から出土したの細片を若干採集した。窯本体，北溝，東壁溝から東灰原の３ケ所である。記述順に量が多くなる。（図版９）樹種は年輪部分の観察によれば広葉樹であり，直径１㎝～５㎝で表皮が残っているものもみられる。直径１～２㎝の小枝状のものが多い。これらの炭は燃えさしというよりむしろ，堅炭の感じがするものである。

＜**１区小結**＞　窯跡とその性格について

岡山県内における類似遺構については，かって製鉄遺跡発掘調査の折に検出されたことがあるという。（注）希少例でもあり，その性格については究明されていない。本遺跡での発掘調査以降も各地で発見された。

１　新見市高尾下・岩倉遺跡，４基（浅倉秀昭・岡田博氏の御教示による。）

２　阿哲郡哲西町・野田畝遺跡，１基，（福田正継氏の御教示による。）

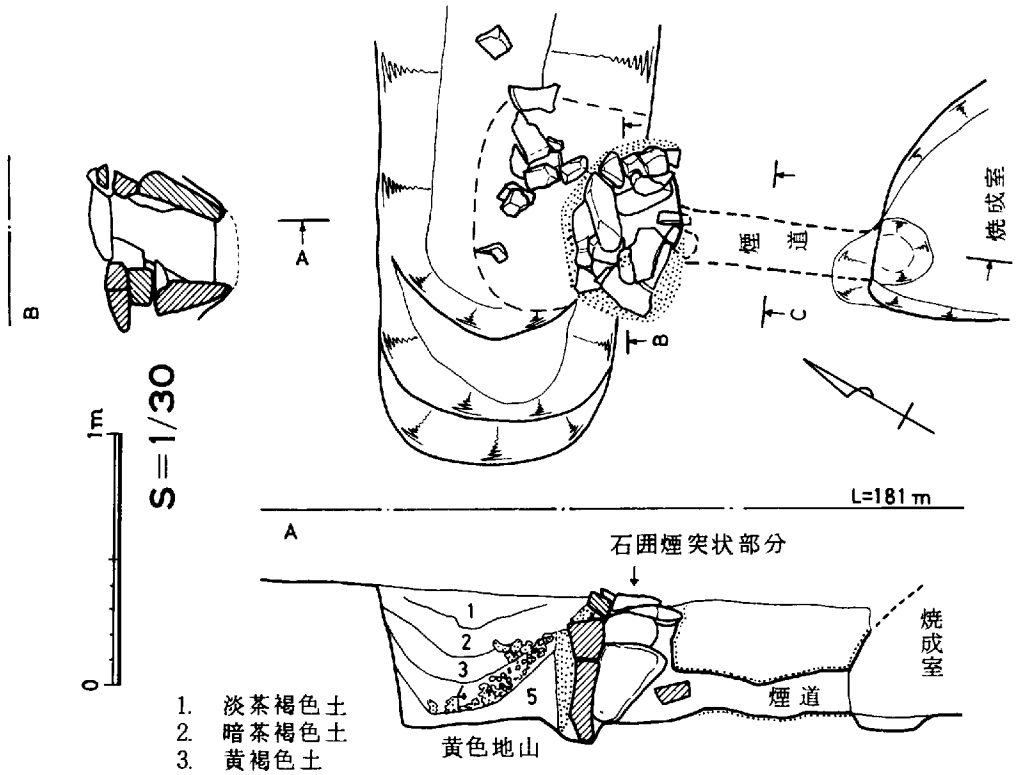
３，勝田郡勝央町，勝央工場公園用地内，１基（山磨康平氏の御教示による）

４，津山市金井，中国電力変電所建設用地内　１基（河本清氏の御教示による。）

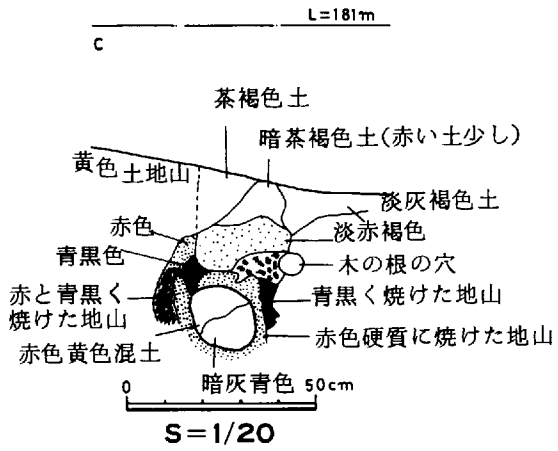
以上のように６遺跡９例が確認されるに至った。これらの遺構に共通な特徴をみると，

１，立地は山の斜面を利用し，窯体の主軸は等高線にほぼ平行するが，煙道部は山側へ，焚口部は谷側へ少しふれている。これは窯底が煙道部にむかってゆるい傾斜をもつことと関連している。

２，窯体の構造として，半地下式，またはくり抜き式で，底面が緩い傾斜をもち，窯体の谷側に連続した小穴を窺っている。さらに連続小穴の谷側に，作業場とも考えられる平坦面が存在する。煙道は窯体の最奥部から小穴によって導びかれ，石組の煙突状部分に達する。



第10図　煙道部分実測図



第11図　煙道C断面図

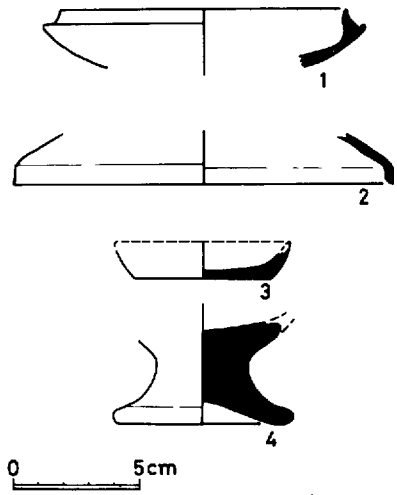
3，発掘される状況としては，ほとんど遺物を伴わない。しかし炭や灰の散布がみられる。

4，焼成温度の関係から，窯底は灰色に焼けており，側壁・天井部分は黄色～赤色に焼けている。

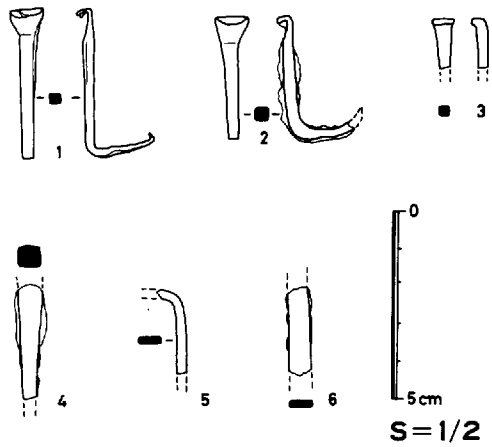
以上の特徴を有する本遺構の性格については，A炭焼窯，B土器を焼いた窯，C製鉄遺構等の意見が出された。しかしAの可能性が濃いものと考える。

（注）近藤義郎氏の御教示による。

（栗野）



第12図　1区出土土器実測図



第13図　1区出土鉄器実測図

第3節　2　区

2区は1区との間に巾数mの私道・旧宅地を隔てて，東方約40mの水田面の一画を指し，1区丘陵部より約16m下った発掘地点である。発掘調査区域は，強粘質土の厚い堆積に制約され排土場所がないこと，重機による表土除去不能などのために約200㎡にとどまった。以下検出遺構・出土遺物について述べる。

1　遺　構

発掘区のほぼ全面から多量の鉄滓・炉壁片などが出土しており，付近で製鉄操業が行われたことが推察される。直接製鉄に関わる遺構と断言できるものはみられないが，間接的にはいずれの遺構も製鉄あるいは鍛冶に関わる生産・生活の場であったことを示している。順次，検出遺構について略述してみたい。

a 大溝（第14図・第15図）検出全長約10m，最大巾約4m，深さ30cm～40cmを測る自然流路とみられる遺構である。この大溝より派生する溝が北西部から南東方向に向かうが，おそらく人為的に造成されたものとみられるもので，第14図のA溝がそれである。検出全長約8m，巾約2m，深さ約30cmを測る。大溝内には若干の木片がみられる他，鉄滓片・土師器・須恵器片などが出土している。この大溝付近で製鉄操業が行われたとすれば，部分的には人工的な造作が施されたものとみられる。大溝の西肩付近には，人頭大もしくはそれよりやや大きめの石が集積してある部分がみられ，増水などに備える護岸的な機能があったものと思われる。後述の遺物の観察によって大溝およびA溝いずれも鎌倉時代に比定することができよう。

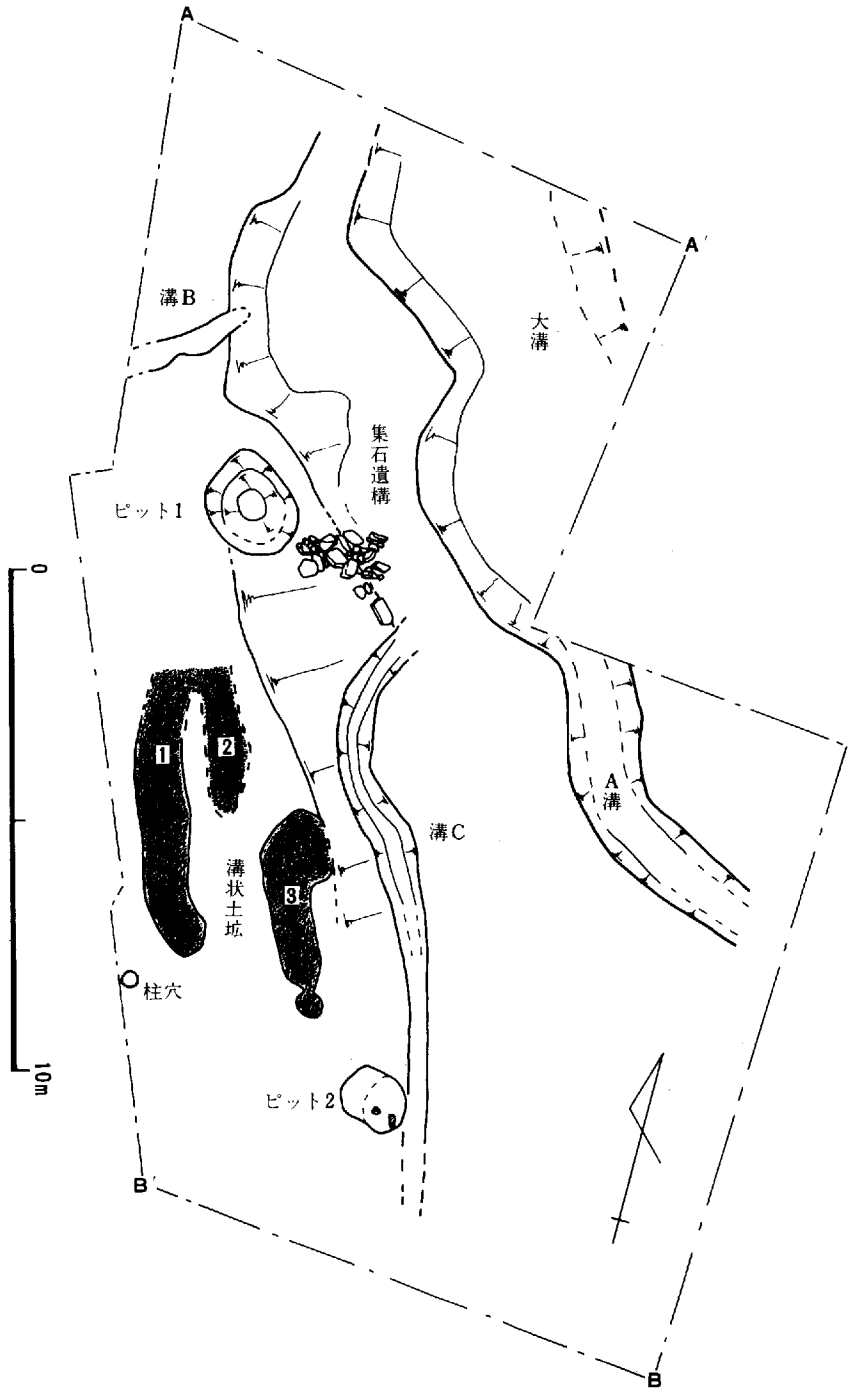
b ピット1　径約1.6～2.2m，深さ約40cmを測り大溝の南西約2.5mに位置する。擂鉢状の形態を示す。出土遺物には鉄滓・土師器小片がみられ，正確な時期は詳らかではないが，大溝と時期の隔たるものではない。

c. ピット2　径約1～1.3m，深さ20～39cmを測る。灰青色の粘質土が埋積しており，土師質土器（第16図～1・2）・木炭片（径2cm・長約9cm）などが鉄滓小片と共に出土している。このピット2が位置する平坦面では掘削を加えると湧水が認められ，水利的な用途が考えられるが詳らかではない。

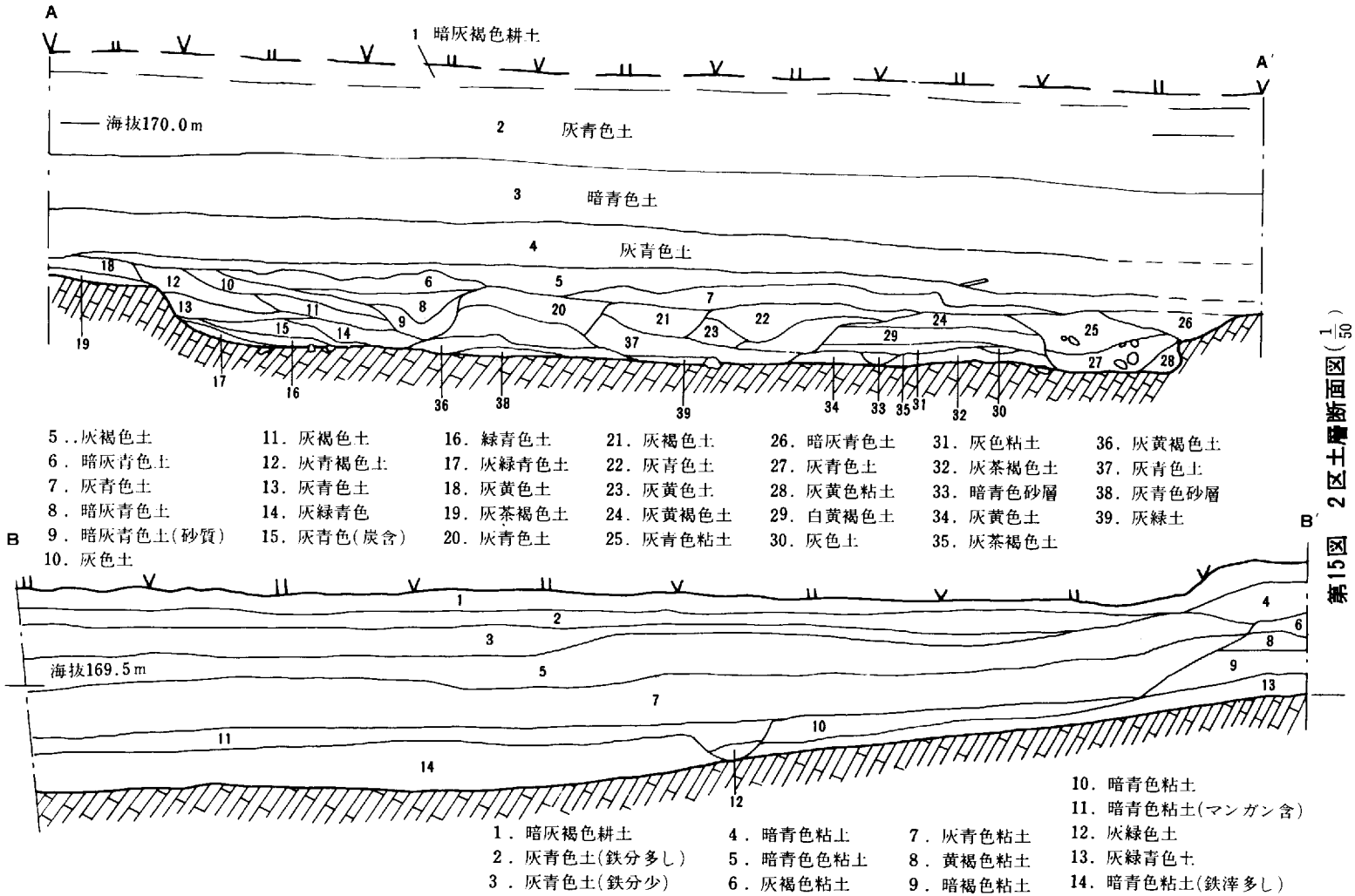
d. 溝状土壙1～3　いずれも赤く焼けた炉壁片や鉄滓のみが灰色粘質土と共に埋積している。この溝状土壙は付近には，地山が赤く焼けたところもみられ，「火」を用いた製鉄もしくは鍛冶が行なわれ，それに伴う廃棄物が遺棄された可能性もある。(註1)　この遺構そのものが炉床などの製鉄遺構となる可能性は，その形状からしても考えられない。

溝状土壙1は全長約4m・巾約1～1.4m・深さ約20cmを測るが，溝状土壙2・3はいずれも巾約1mで，残存長前者が約3m，後者は約4mである。

e. 溝B　大溝に注ぎこむように，南西から北東に向けレベルが徐々下降する。遺物は鉄滓小



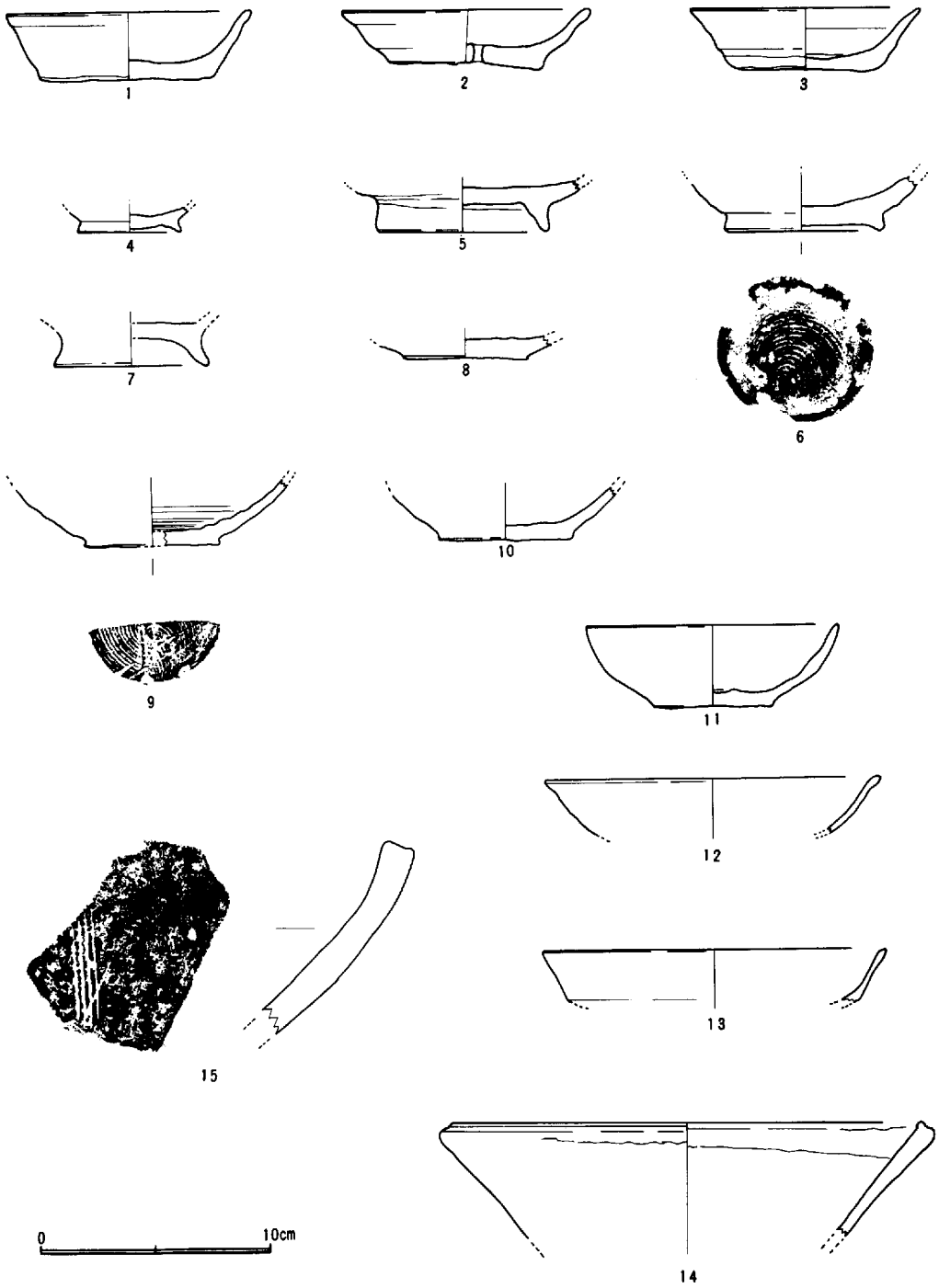
第14図　2区平面図($\frac{1}{150}$)



5．灰褐色土　11．灰褐色土　16．緑青色土　21．灰褐色土　26．暗灰青色土　31．灰色粘土　36．灰黄褐色土
6．暗灰青色土　12．灰青褐色土　17．灰緑青色土　22．灰青色土　27．灰青色土　32．灰茶褐色土　37．灰青色土
7．灰青色土　13．灰青色土　18．灰黄色土　23．灰黄色土　28．灰黄色粘土　33．暗青色砂層　38．灰青色砂層
8．暗灰青色土　14．灰緑青色　19．灰茶褐色土　24．灰黄褐色土　29．白黄褐色土　34．灰黄色土　39．灰緑土
9．暗灰青色土(砂質)　15．灰青色(炭含)　20．灰青色土　25．灰青色粘土　30．灰色土　35．灰茶褐色土
10．灰色土

1．暗灰褐色耕土　4．暗青色粘土　7．灰青色粘土　10．暗青色粘土
2．灰青色土(鉄分多し)　5．暗青色色粘土　8．黄褐色粘土　11．暗青色粘土(マンガン含)
3．灰青色土(鉄分少)　6．灰褐色粘土　9．暗褐色粘土　12．灰緑色土
13．灰緑青色土
14．暗青色粘土(鉄滓多し)

第15図　2区土層断面図($\frac{1}{50}$)



第16図　2区出土遺物実測図（土師質土器ほか）

片以外認められないが，砂質土が埋積していることが排水・流水施設であったことを示していよう。

f **溝C**　ほぼ南北方向にわずかに蛇行しながら，北から南に向けてレベルが下降する。この溝を境に東方にゆるやかな斜面となり，西に溝状土壙などが位置する平坦面がある。残存長約12m・巾約1～0.4m・深さ約10～20cmを測る。土師器・鉄滓などの遺物が若干出土している。

g. **柱穴**　直径45cmを測る円形の柱穴である。溝状土壙3の西方約1mに位置するが，西方未掘地区を残したため，掘立柱建物としての柱穴のまとまりは確認し得なかった。

以上の遺構のほとんどすべては同時期の共存遺構と考えられ，後述の遺物と共存するものと推定される。

2．遺　　物（第16図）

1・2は，前述のピットから出土した土師質皿である。胎土は共に良好で1は白っぽい膚色を呈し，2は明るい膚色を呈する。いずれも底部はヘラオコシのままで器体はていねいなヨコナデ仕上げで整形されている。2は底部に径約4mmの小孔が穿たれておりその機能は明らかでないが，灯明皿として用いられた場合灯芯に油を導くことが可能と思われる。灯芯油痕についてはいずれも器壁が剥離しているため観察ができない。3は1・ほど底面が扁平ではなく，若干丸味を帯びている。底部はヘラオコシの後，ナデ仕上げなされたものである。胎土は粗砂含まず精良，明るい膚色を呈する。4は小型の椀形土師器であるが，丸味を帯びた底部に細く平らな高台をつけたものである。白っぽい褐色を呈するが，他の土師器に比べやや固い焼き上りである。5は7と同様の土師質椀形土器で，ヘラオコシ後の底部にやや高い高台をつけたものである。いずれも胎土は精良で，明るい膚色を呈する。6は底部糸切底の須恵質椀形土器で，いったん9の椀形土器様に仕上げられた椀形土器の底部にやや安定感のある高台をつけたものである。8・10は土師質椀形土器の底部片で，これらも糸切底である。(注2) いずれも赤味を帯びた膚色を呈し，胎土は比較的精良である。11は8・10と同様の土師質椀形土器の完形片である。底部は糸切底で，器壁は内外面ともにヨコナデ仕上げが施されたものである。胎土は長石・石英の粗砂を含むも精良で，赤味を帯びた明るい膚色を呈する。12・13は溝C出土の土師質土器で前者は椀形土器，後者は稜椀形土器あるいは皿形土器である。12は石英微砂を含む比較的良好な胎土で白っぽい膚色を呈する。13は長石・金雲母を含む胎土で12同様白っぽい膚色を呈する。器体外面はヨコナデ仕上げである。14は須恵質鉢形土器で灰色もしくは灰黒色を呈する。比較的胎土は精良であるが焼成は悪く器体外面はもろく，口縁部内側部分の一部のみ器壁をよく残している。口縁部はわずかに肥厚するが器体内面は口縁部に近い部分を残して使用による摩耗がみられ，擂鉢あるいはこね鉢として用いられたことが推察される。15は土師質擂鉢形土器である。内面には4条からなるかき目が認められ，擂鉢あるいはこね鉢として使用されたことを示している。胎土は精良で内外面共に白っぽい膚色を呈している。外面は斜方向に

あらく削られナデ仕上げが施されている。口縁部はやや肥厚するが特徴的なものではない。器形は丸味を帯びたカーブを描いている。(註3) 以上2区出土遺物について述べた。時期的には鎌倉時代に比定することができるものが大半を占めている。そのほとんどは皿・椀形土器などの日常什器であるが，5～10は鎌倉時代の遺跡によくみかけるものである。4はむしろ室町時代に比定すべきものであろう。図化できない備前焼片が若干出土しているがいずれも鎌倉～室町時代に比定されるものである。(註4) 2区で多量に出土している鉄滓・炉壁片については化学的分析を待たねばならないが，中世における鉄生産地として新たに付け加えるべきものである。近世に備中青江系の刀工が移り住んだといわれ，(註5) 中世における生産基盤の延長線上にとらえることができる。

（岡田）

＜註＞

（註1）英田郡作東町所在の高本遺跡においても同様の遺構がみられる。（井上弘・山磨康平・岡田博「高本遺跡」～岡山県埋蔵文化財調査報告（8）1974年 岡山県教育委員会刊）

（註2）津山市総社所在の美作国府跡からも一括で出土している。皿・椀などの日常什器が多く須恵質・土師質共に同形のものが混在する。（井上弘・岡田博「美作国府」～岡山県埋蔵文化財調査報告（6）1973年 岡山県教育委員会刊。）

（註3）真庭郡落合町所在の赤野遺跡でも同様な土師質擂鉢が出土しているが，カキ目の形状が若干異なる。（橋本惣司・山磨康平・岡田博「赤野遺跡」～岡山県埋蔵文化財調査報告（3）1973年 岡山県教育委員会刊）

（註4）間壁忠彦・間壁葭子「備前焼ノート3」～倉敷考古学研究集報第5号所収 1968年

（註5）社団法人私立上房郡教育会「上房郡誌」に刀工国重について記されている。大正2年刊。

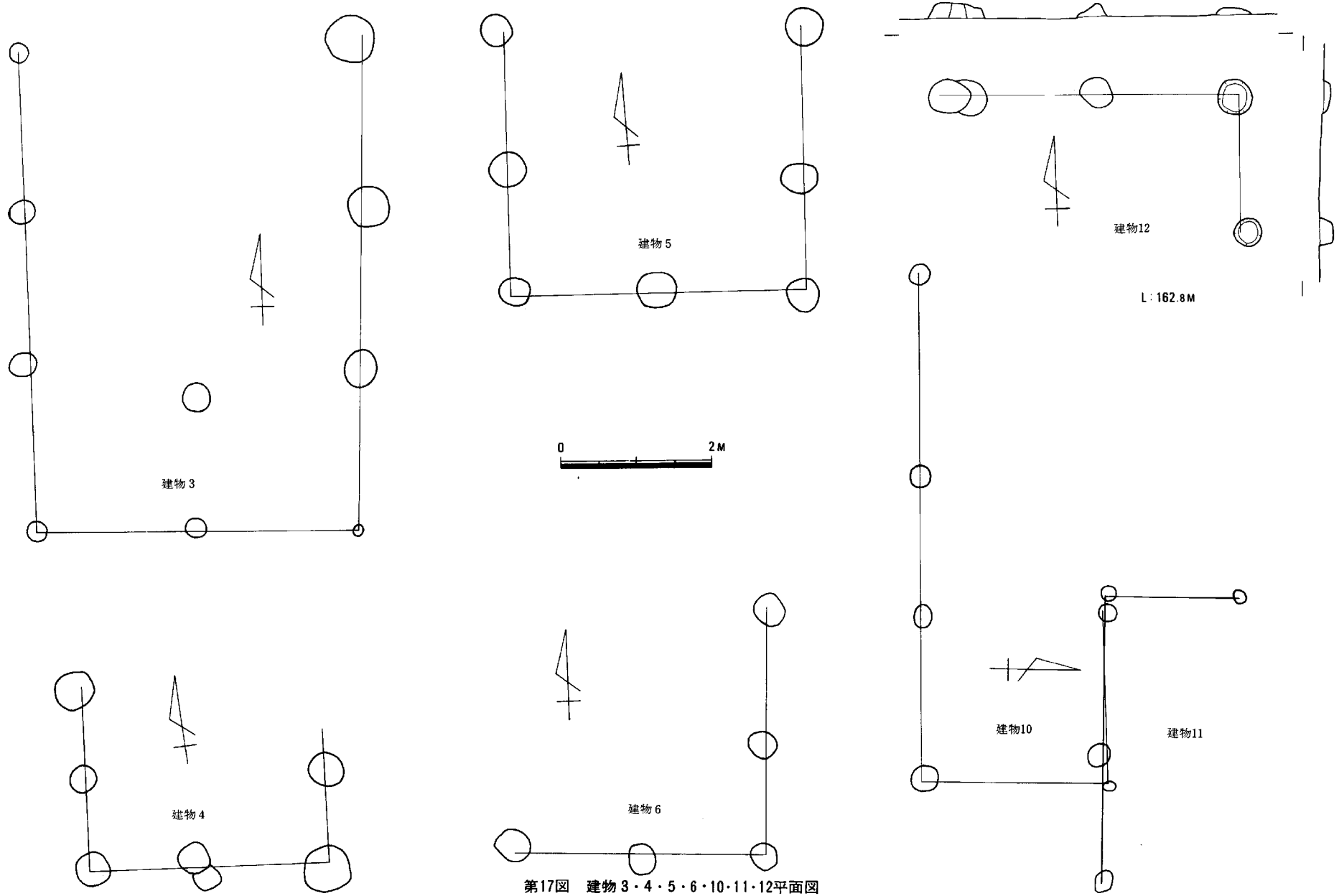
第4節 3 ・ 4 区

1．遺　構

（1）建　物

3・4区は，本遺跡において，最も多くの遺構を検出した地区である。検出した遺構の数では，建物遺構（以下，建物と称す）が最も多く15棟を確認した。しかし，まだ建物としてまとまらぬ柱穴が多数あるため，調査中にさらに綿密に観察しておれば，あるいは建物の数も増す可能性もある。ここでは，調査中に確認した建物について，建物として確認した順に従って記述してゆきたい。

建物3（第17図） 南面に庇を持ち，建物の長軸が，ほぼ南北を向く建物である。東西の柱間は2間であるが，母屋については，西側の2間までは検出したが，付近は削平が著しいためさらに北へ伸びるものかは不明である。検出した柱穴の大きさが不統一なのも，それによるものであり，柱痕跡のみ残るものもあった。梁間，桁行とも柱間は230 cmを測る。



第17図　建物3・4・5・6・10・11・12平面図

建物4（第17図）　建物3の東側に，建物3とほぼ平行する形で検出した。遺構は，道路用地巾に接して存在するために，西側柱穴列で2間までを検出した。南側の柱間は，東から186㎝，144㎝であり，西側は，北から126㎝，120㎝である。柱穴は，円形を呈する。

建物5（第17図）　建物4の南側にあり，建物の長軸はほぼ平行する。この建物も，完全な形態では検出しえなかった。建物の規模は，南側で北から204㎝，193㎝である。東側は，北から210㎝，150㎝であり，南側は同じく180㎝，180㎝である。柱穴の大きさは，ほぼ一定しており，直径40～50㎝を測り，円形を呈している。

建物6（第17図）　建物5の南に建物4とその中軸線をほぼ同じくする位置にある。建物は東側，南側の柱穴列をのみ検出したもので，他の部分については削平されていた。柱穴間の距離は，南側で，北から180㎝，162㎝であり，東側は，北から180㎝，150㎝を測る。柱穴は，ほぼ円形を呈しており，直径は，35～59㎝を測る。

建物7（第18図）　建物4の東約10㎝の位置にある。この遺構も道路用地の巾に接して検出したため，全体の規模は確認していない。確認しえた建物の規模は，梁間1間で，柱間は170㎝を測る。桁行の柱間は，西側は，北から160㎝，180㎝を測る。長軸の方向は，ほぼ南北を示し，柱穴の形状は，ほぼ円形を呈し，径は25～35㎝を測る。

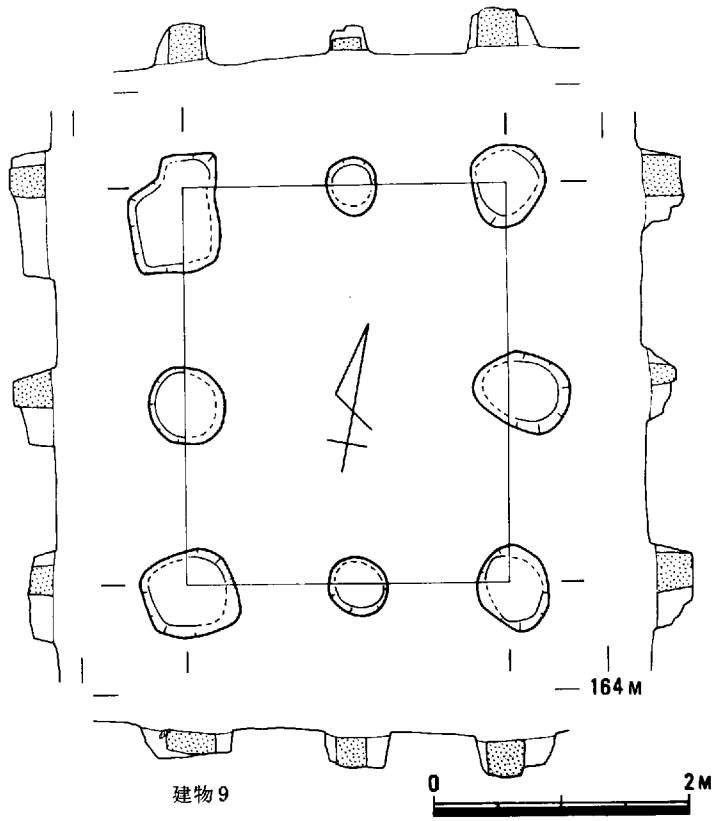
建物8（第18図）　建物7の東南約7ｍにある。検出した遺構は，南側柱穴列と東側柱穴列のみで，他の部分は検出しえなかった。建物の長軸の方向は，ほぼ南北を示している。柱間の距離は，南側が，180㎝，180㎝で，東側が，220㎝，220㎝である。柱穴の形状は，ほぼ円形を呈し，径は30～50㎝を測る。

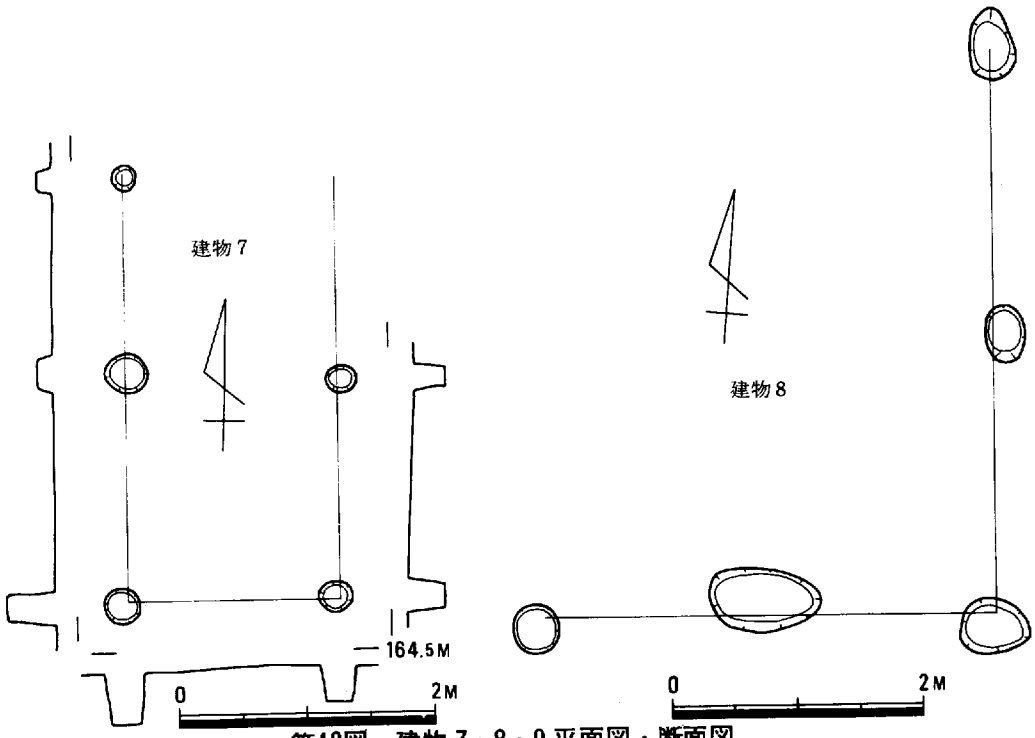
建物9（第18図）　建物8の南4ｍにある。遺構は，本遺跡の建物群の中にあって，最も遺存状態の良好なものである。規模は，2×2間で，主軸の方向はN－10°－Wである。柱間の距離は，梁間が東から124㎝，130㎝であり，桁行は，北から164㎝，152㎝を測る。柱穴の掘方の形態は，円形に近い形を呈しているが，掘方の基底部の観察によると方形に掘られたものと考えられる。

建物10（第17図）　建物9の南南西約20ｍにある。この遺構も全体の規模は確認できなかった。確認した規模は，梁間1間と桁行3間までである。建物の長軸の方向は，ほぼ東西を示している。柱間の距離は，梁間が250㎝で，桁行は，東から220㎝，200㎝，270㎝を測る。柱穴の形態は，ほぼ円形を呈しており，径は30～35㎝を測る。

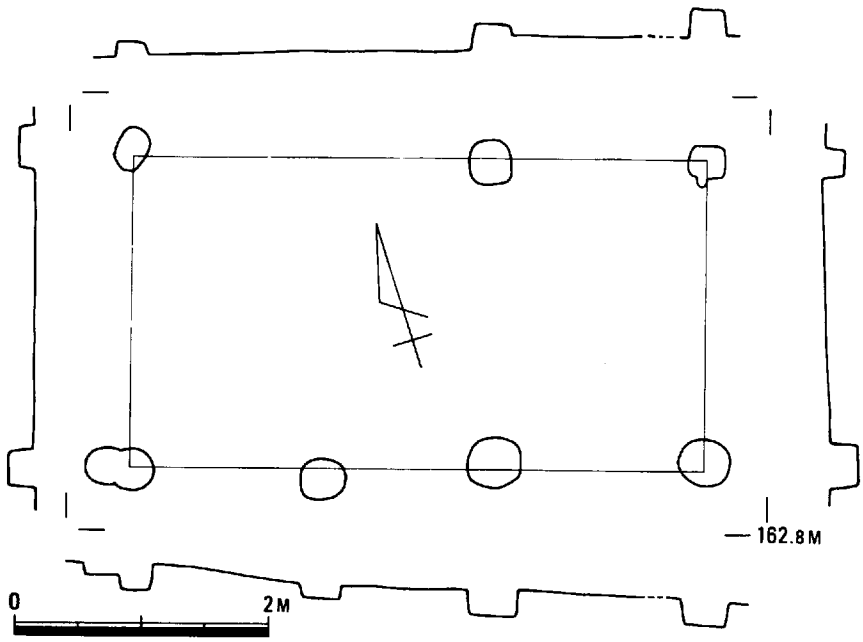
建物11（第17図）　建物10と一部重複して横出した。検出した遺構は，南側柱穴列と西側柱穴列である。柱間の距離は，南側が，東から170㎝，220㎝，西側は180㎝を測る。建物の長軸の方位，柱穴の形態，及びその規模は，建物10とほぼ同等である。

建物12（第17図）　建物10の南20ｍの位置にある遺構である。この建物も，道路用地の巾杭に接しているため，その一部しか確認しえなかった。横出した遺構のみでは，主軸の方向は，不明であるが，基軸線は，南北方向を示している。建物の柱間の距離は，北側列が，東から180㎝，210㎝，東側は，186㎝を測る。掘方の形態は，ほぼ円形を呈し，径は50～60㎝を測る。

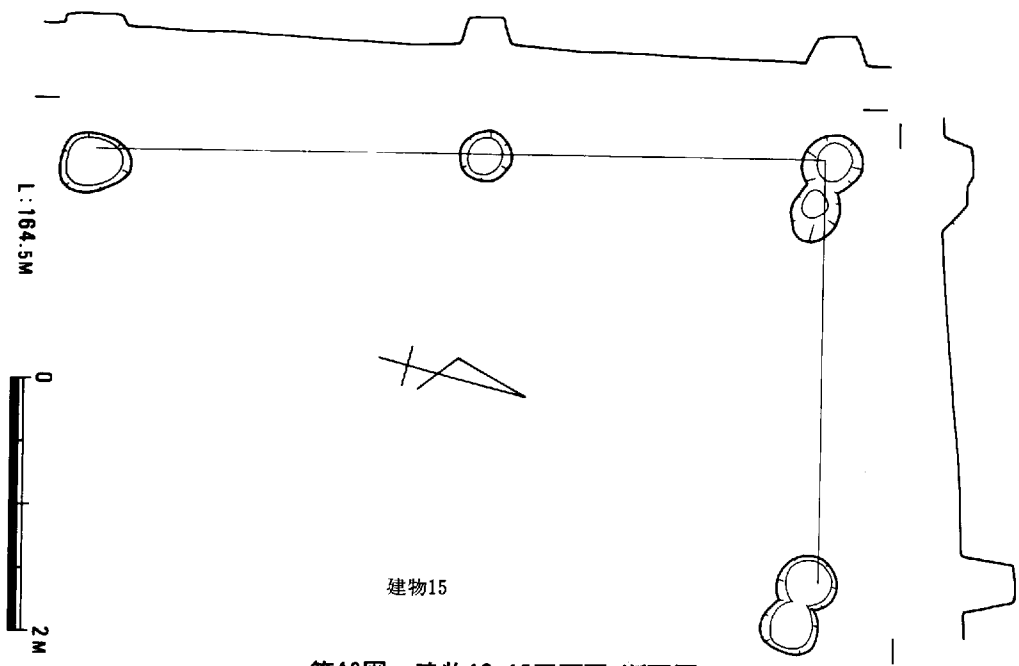




第18図　建物7・8・9平面図・断面図



建物13



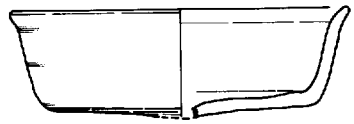
建物15

第19図　建物13・15平面図・断面図

建物13（第19図）　建物９の東約23mの位置にある。規模は，１×３間である。建物の基軸は，N－18°－Eである。柱間の距離は，梁間は，240 cm，桁行は，東から164 cm，140 cm，150 cmを測る。柱穴の形態は，円形を呈しており，その径は30～50cmを測る。ただし，北側柱穴列内の西側の１個については，入念な検出作業を行ったが，柱穴の確認はできなかった。この地区は，遺構の地山への切り込みが明確であり，また削平を受けた痕跡もないことから，本来その部分には柱穴がなかったものと考えられる。

建物14（第21図）　建物13の南東約14mの位置にある。建物の規模は，２×３間である。主軸の方向は，N－18°－Wである。柱穴間の距離は，梁間が東から166 cm，186cm，桁行は，北から190cm，226cm，190 cmを測る。柱穴の形態は，ほぼ円形を呈しており，径25～45cmを測る。

建物15（第19図）　建物７の南５mにある。残存していた遺構は，西側柱穴列と北側列のみである。柱穴間の距離は，西側が，北から270 cm，310 cm，北側は330 cmを測る。柱穴の形態は，円形を呈し，径30～50cmを測る。建物の柱穴から，須恵器の杯が出土している（第20図）。杯は，ゆるやかに外反しながら立ち上り，口縁部近くでやや開くものである。底面には，ヘラ起こしの痕跡がみられる。体部内外面はヨコナデによる調整がみられる。焼成は，やや軟調で淡灰青色を呈している。



第20図　建物15柱穴出土遺物実測図（$\frac{1}{3}$）

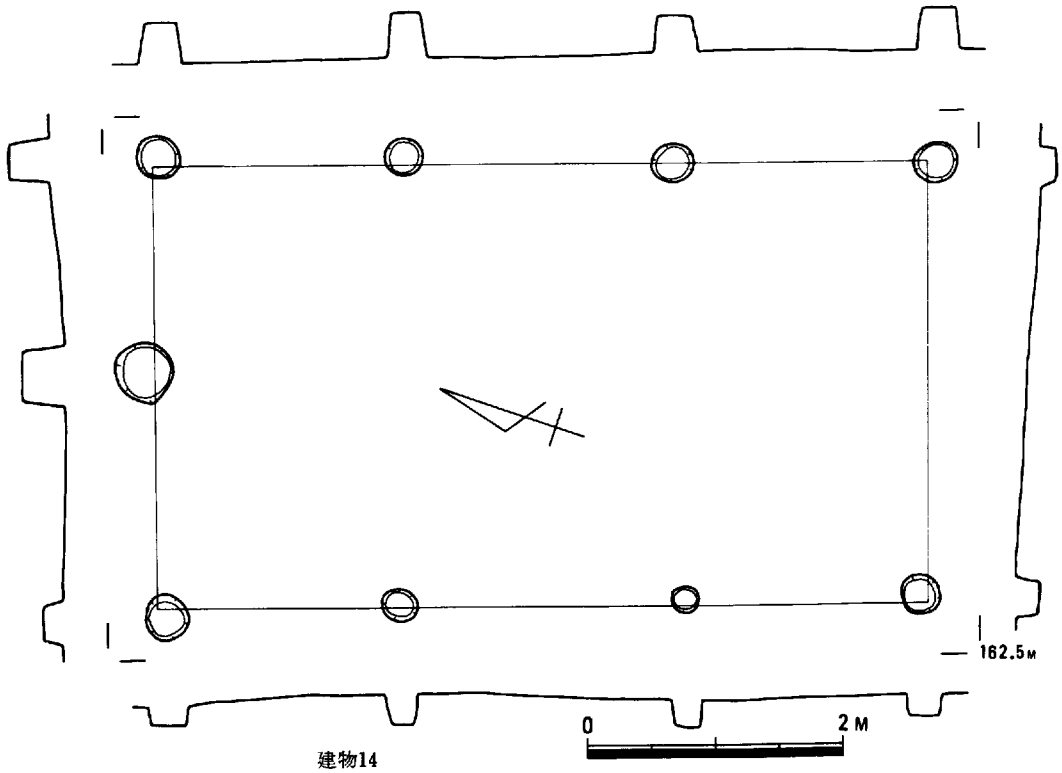
建物16（第21図）　３区の西端に近い場所で検出した。検出した建物の規模は，梁間２間，桁行２間までである。桁行は，さらに１間までは可能性がある。柱間の距離は，北側が，東から220cm，190cm，西・東列が，北から160cm，210cmを測る。柱穴の掘り方の形態は，方形を呈しており，一辺50～70cmを測る。建物の主軸は，N－12°－Eである。

建物17（第21図）　建物16の東側に接して検出した。この建物も，東側，南側の柱穴列が遺存するのみであった。柱間の距離は，東側列が，北から198 cm，198 cmで，南側の柱穴間は，150cmを測る。柱穴の形態は，円形を呈しており，径は25～30cmを測る。建物の基軸の方向は，N－20°－Eである。

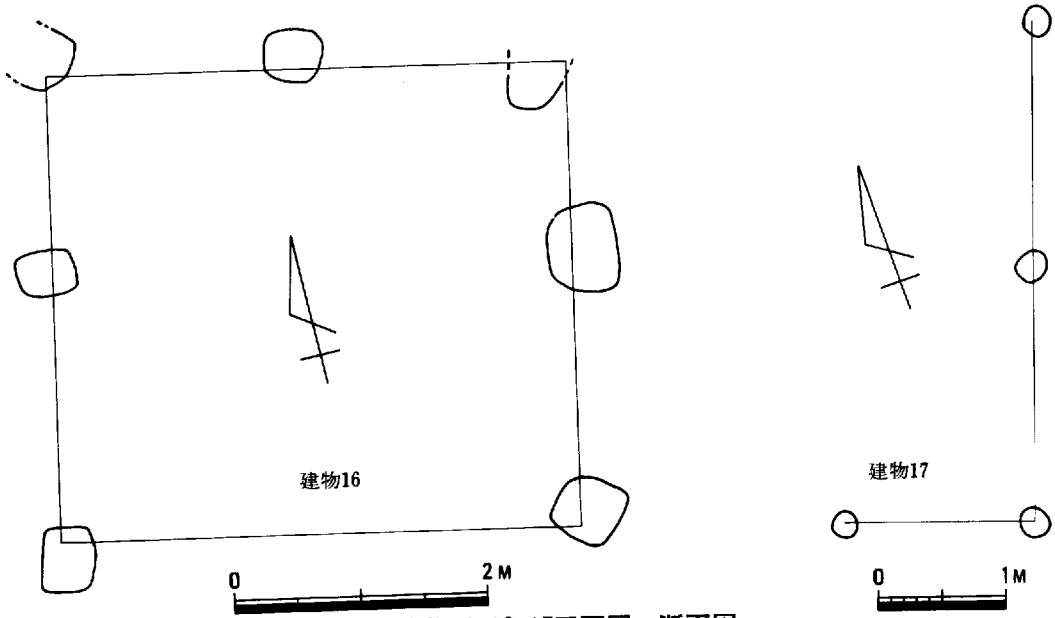
（２）住居址（第22図）

４区の東端に近い位置で検出した住居址である。本遺跡においては，唯一の住居址である。立地は，非常に緩やかな斜面の東端に近い場所である。住居址の東側の約４分の１は，水田造成のため削平されていたが，他の部分の遺存状態は良好であった。住居址の南北の一辺は5.1 mを測る。柱穴は４個あり，北側の柱穴間が，160 cm，南側が170 cmあり，東側は240 cm，西側は210 cmと台形状に配置されている。南側壁の中央寄りには，長軸120 cm，短軸75cmのほぼ長方形を呈する貯蔵穴が１個存在した。壁溝は，北側及び西側の一部分まで続くのみで，完周する状態はみられなかった。床面には，土師器の高杯を検出した。住居址のほぼ中央には，２ケ所の焼土面がみられた。

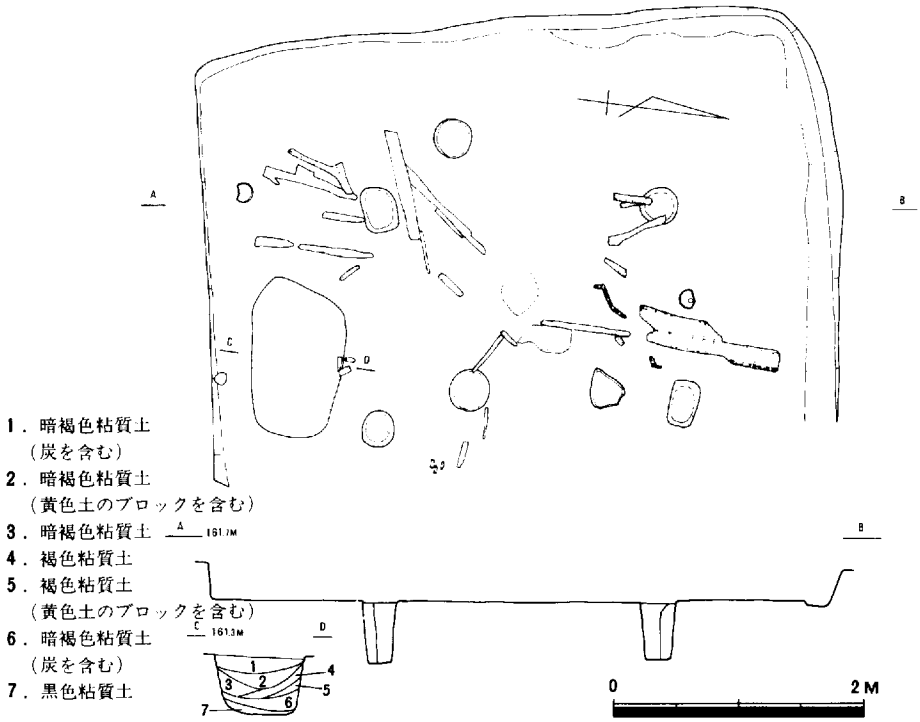
本住居址は，火災住居であり，多くの炭化材を検出した。木質等は不明であるが，炭化材が中央部から放射状に遺存する状況が見られた。



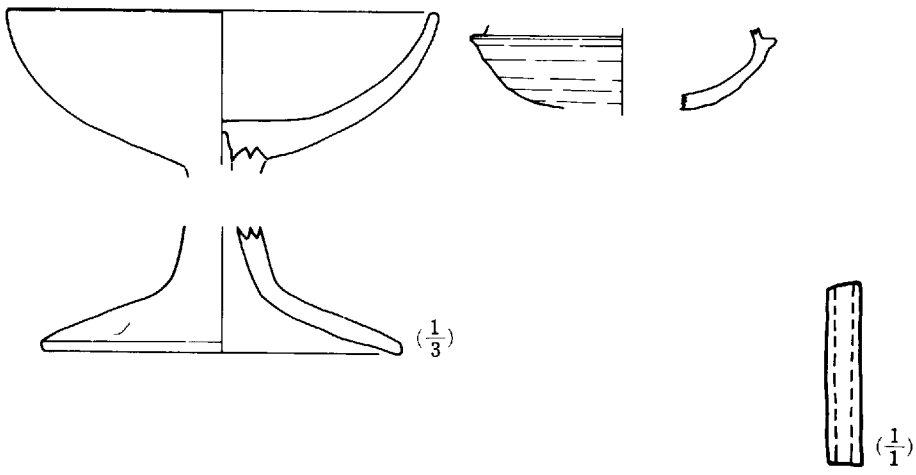
建物14



第21図　建物14・16・17平面図・断面図



第22図　住居址平面図・断面図



第23図　住居址出土遺物実測図

出土遺物（第23図）　住居址の床面に接して土師器の高杯が出土した。杯部は弧を描きながら立ち上るもので，端部に近づくにしたがい器壁は薄くなり，端部は丸い。口径は，16.3cmを測る。色調は，淡褐色を呈しており，胎土には砂粒を含んでいる。器壁の内外面は，表面の剥離のため調整方法は不明である。脚部は，その途中から裾に向けて大きく開くもので，その端部は丸い。脚端部の径は，14.4cmを測る。胎土には，微砂を含んでおり，焼成は良好であり，色調は赤褐色を呈している。器壁は，内外面ともに表面剥離のため，調整法等は不明である。須恵器の杯は，住居址の埋土中からの出土である。破片であるため，口縁部の形状は不明である。内面は，入念なヨコナデがみられる。外面は，受け部の直下よりヘラ削りが見られ，底面に近い部分からは，ヘラ削り後にさらにナデによる調整がみられる。同じく埋土中から，滑石製の小型管玉が出土した。全長24mmで，直径は，両端で4.3～4.5mm，中央部で5mmあり，孔の径は，2mmを測る。色調は，濃緑色である。

（3）井　戸（第24図）

建物13・14のほぼ中間にある。井戸となる部分は，上端の径280cm，検出した深さ50cmを測る。井戸は，ほぼすり鉢状に凹むものである。この本体の部分から東に向けて溝が付設してあり，余剰水を絶えず外部へ導く設備がある。その溝が，井戸に接続する部分には浅い凹みがある。発掘当時は，多量の湧水はなかったが，底部には絶えず清水の溜りはあった。井戸の壁に接して，1個の椀が出土している。底部の形態は不明であるが，体部はゆるやかに弧を描きながら立ち上がり，口縁端部は丸くおさめられており，内外面ともにヨコナデがみられる。胎土には微砂を多く含み，焼成は，やや軟調の須恵質の椀である。色調は，内面は黒色で，外面は灰褐色を呈しており，奈良時代の遺物と考えられる。

（井上）

（4）土　壙

a. 円形土壙（№46）（第25図）　長径約2.6m，短径約2.3m，深さ納50径を測る円形土壙である。平面観察では，円周に黒色土が巾25～60cmにわたってドーナツ状に検出されその内側に地山と同じ白っぽい黄褐色土や暗褐色土がみられた。時期・性格について詳細は不明であるが，第2層黒色土下層より沈線文をもつ縄文式土器1片が出土しており（第36図―1），縄文時代の遺構とみることができる。（岡田）

b. 方形土壙（№47）（第24図）　住居址の北8mにある。形態は，長方形で，長辺110cm，短辺78cmを測る。検出した深さは18cmである。土壙の長軸の方向は，東西を示している。土壙からは，形態の判る土器は出土していないが，弥生時代と考えられる。さらに，埋土中から，小片ではあるが，サヌカイト片が出土している。

c. 土壙（№48）（第26図）　4区の東端で検出した。しかし，調査工程，工事工程の関係で工事用道路下となったために，平面の一部のみを検出したにとどまった。検出した遺構の全長は170cmを測る。土壙からは，須恵器の杯（蓋・身）一組が出土した。杯蓋は，全体的に弧を描くもので，口縁端部は丸い。天井部には，ヘラ削りがみられ，体部内外面は，ヨコナデの調

整がみられる。杯身は，口縁部は内傾しながら立ち上るもので端部は丸い。受け部は，ほぼ水平である。底部外面には，ヘラ削りがみられ，体部内外面はヨコナデ調整がみられる。両方とも，胎土には砂粒を含み，焼成は軟調であり，灰色を呈している。

（5）中世墓（第27図）

建物10の南10mにある。墓は長辺106cm，短辺70cmの方形の掘り方の底に，一枚板の棺材が遺存していた。その板の上には，少量の骨片がみられた。さらに，北東の隅には，4枚の灯明皿が副葬されており，それは4枚とも土師質で，底面はヘラ起しがみられるものである。

（井上）

2．遺　物

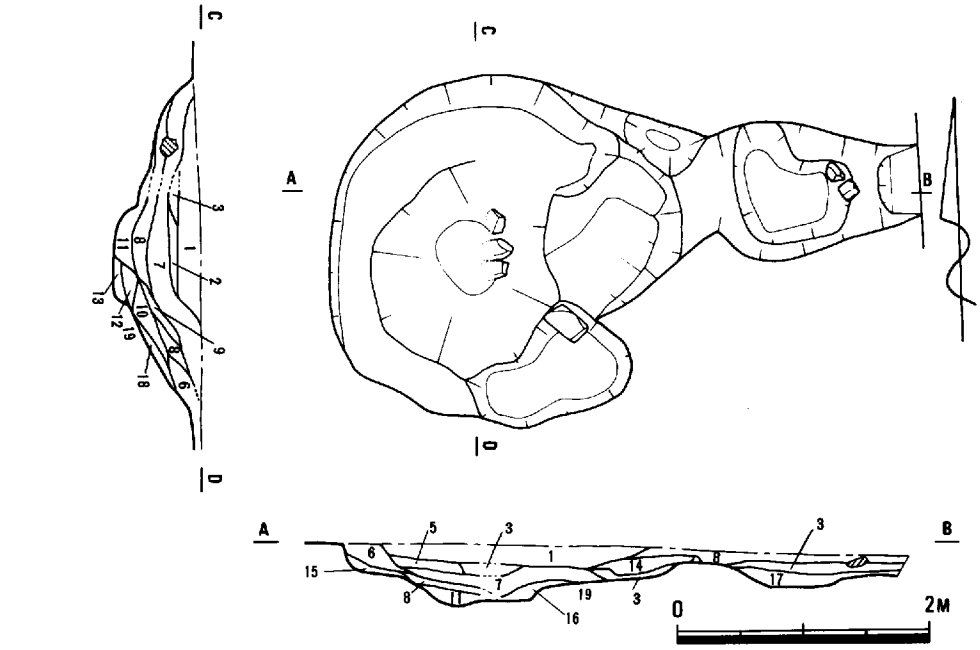
主として遺構に伴わない包含層より出土した須恵器・瓦・瓦質土器・備前焼について述べる。須恵器の大半は奈良～平安時代に比定できるものであるが，同時期の土師器は復元観察できるものが少なく，わずかながら出土している小形品についても図化できなかった。また，甕など大形品についても同様である。以下，個々の器種について略述したい。

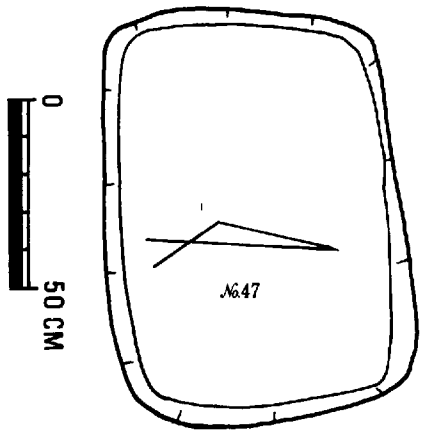
a. 須恵器（第28図・第29図）

杯蓋は最大径18.5cm，最小径14cmを測り，出土品の大半はこの計測値の中にあてはまる。第28図—1のように比較的高いツマミが付けられたものもあるが，大半は扁平なものあるいは中心がややくぼむものが多い。カエリ部分についても第28図—4・10などのようにシャープなものもみられる。口径については大きな差異は認められないが，胎土・焼成・形状についてはばらつきが顕著である。第28図—16は蓋のツマミと思われるが，三層をなす特異な形態を示している。第28図—17のような薬壺などの特殊器物に用いられる蓋につけられたものではないかと推察される。

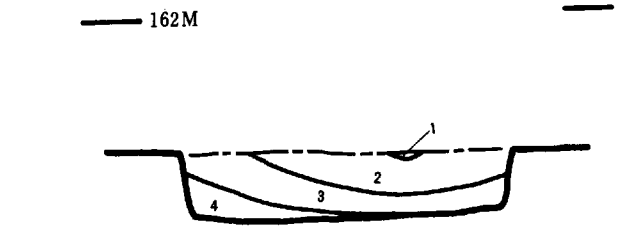
杯（杯身）は高台の有無によって二大別できる。第29図—1～4は高台のないものであるが，体部の立ちあがりは高台の有無にかかわらず口径をほぼ同じくする高台を有するものと形状差はない。高台を有する杯のほとんどは付高台で，削り出し高台のものは皆無である。大半の杯は最大口径17cm，最小口径13cmの計測値の範囲にあてはまる。杯の中には，第29図—11のように高台部からほとんど腰を形成せずに体部より口縁部を形づくるものや，第29図—15のように高台がふんばるようにやや外反するものもみられるが時期差を明示する型式差と思われない。杯蓋と同様，杯も出土品の中では大きな時期差は認められず，大半は奈良時代後期から平安時代初期にかけての生産・使用がなされたものと推定される。本遺跡出土杯蓋・杯に限ってみれば，杯蓋の最小径は杯身の最小径を越えず，最大径についても同様で両者の共存使用を認識することができる。

b. その他の須恵器（第30図・第31図）　第30図—1は稜椀と呼称されるもので平安時代初期に比定することができる。胎土は精良であるが焼成はやや悪い。(註1)　第30図—2・5～18は壺形土器で，11～16など比較的大型のものや，高台を付けられたものがみられるが前者は貯蔵





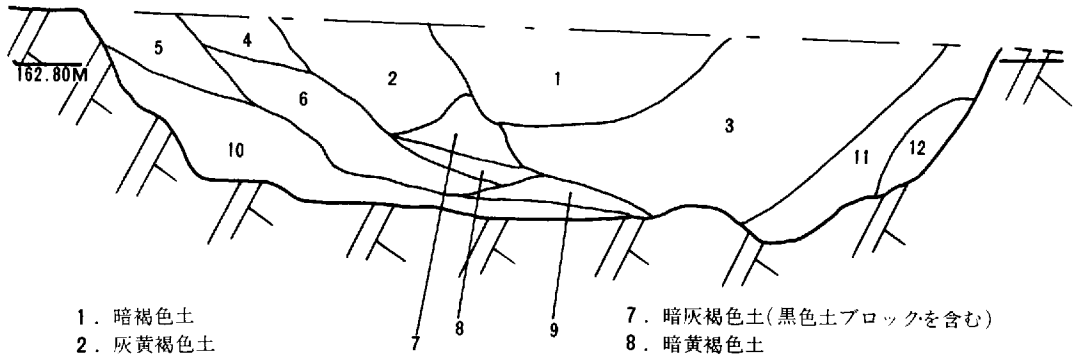
1．暗褐土
2．暗灰茶褐土
3．黒褐土
4．暗黒褐土
5．青灰黒色土
6．暗青褐土
7．暗青灰褐土
8．灰褐土
9．青灰褐土
10．暗青褐土
11．黒色粘土
12．灰色土
13．灰黄褐土
14．暗灰茶褐土
15．灰黒褐土
16．暗灰黒褐土
17．黒色土
18．黄褐土のブロックを多量に含む
19．黄褐土



井戸出土遺物実測図($\frac{1}{3}$)

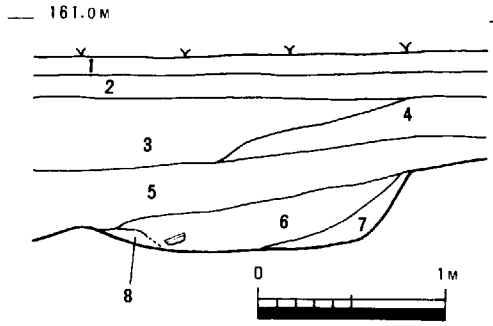
1．黒褐土
2．黄褐土(地山の黄色土を含む)
3．黒褐土(黄色土のブロックを含む)
4．暗灰黒褐色土

第24図　井戸，方形土坑(№47) 平面図・断面図，井戸出土遺物実測図



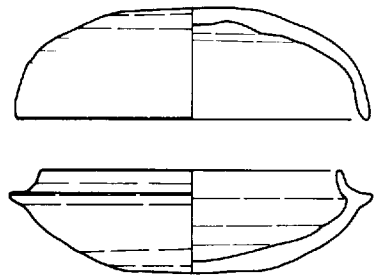
1．暗褐色土
2．灰黄褐色土
3．黒色土
4．灰褐色土(黒色土ブロックを含む)
5．黒褐土(黄色土ブロックを含む)
6．黄褐色土
7．暗灰褐色土(黒色土ブロックを含む)
8．暗黄褐色土
9．茶褐色土
10．黄褐色土，黒色土混合層
11．灰黄褐色土(黒色土ブロックを含む)
12．黄褐色土

第25図　土坑(№46) 断面図

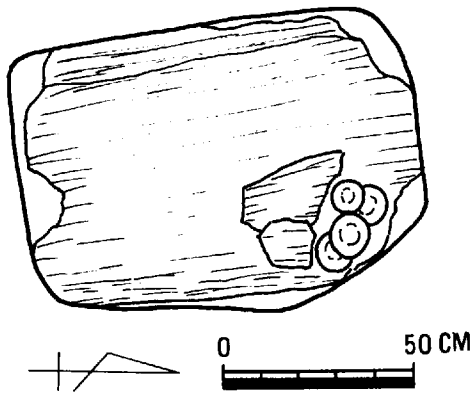


1．耕土
2．灰黄色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗灰褐色土
5．暗褐色土
6．黒褐土
7．黒褐土
(黄色土のブロックを含む)
8．暗灰褐色土・

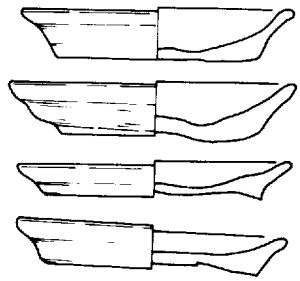
第26図　土坑(№48) 断面図



出土遺物実測図(1/3)



第27図　中世墓平面図



中世墓出土遺物実測図(1/2)

用に用いられるものであろう。また第31図－1のように胴部最大径が口径に極めて近い鉢のような壷形土器もみられる。第31図－**3**は大型甕である。口縁部外面のやや下方に断面三角形を示す貼り付け凸帯がみられるが，頸部には文様加飾はみられない。胴部片の観察によれば外面は平行叩き目文，内面は青海波叩き目文がみられるが時期は不詳である。

須恵器については他に，皿・台付盤・壷・甕の破片が出土しているが図化できぬものが多く記述を割愛する。ただ，甕については内外面格子目叩き文が施されている破片がみられ，美作地方古代遺跡出土品との関連性・類似性が認められる。

c. **土師器**　第31図－**9**・**10**は土師質土器の椀で2区出土品と類似する。**9**は第16図－**4**と同様に，極めて簡略化された高台を貼り付けたものである。**10**は第16図－**5**・**7**と同様手法による形状を示している。

d. **瓦質土器**　第31図－**4**は釜形土器である。口縁部より約1.㎝下った位置に巾約1㎝，厚さ約7㎜の鍔を貼り付けている。

e. **瓦**（第31図5・6）　**5**は丸瓦で裏面には布目が残るが表面は無文である。**6**は平瓦で上面は布目，下面には縦位の縄叩目がみられる。(註2)

f. **備前焼**（第31図－7・8）　**7**は擂鉢の底部の一部で9本を単位とするカキ目が内面下方にみられる。内面は使用によって磨滅し滑らかである。**8**は建水形備前焼で器高7㎝，口径12.3㎝，底径13㎝を測る。(註3)

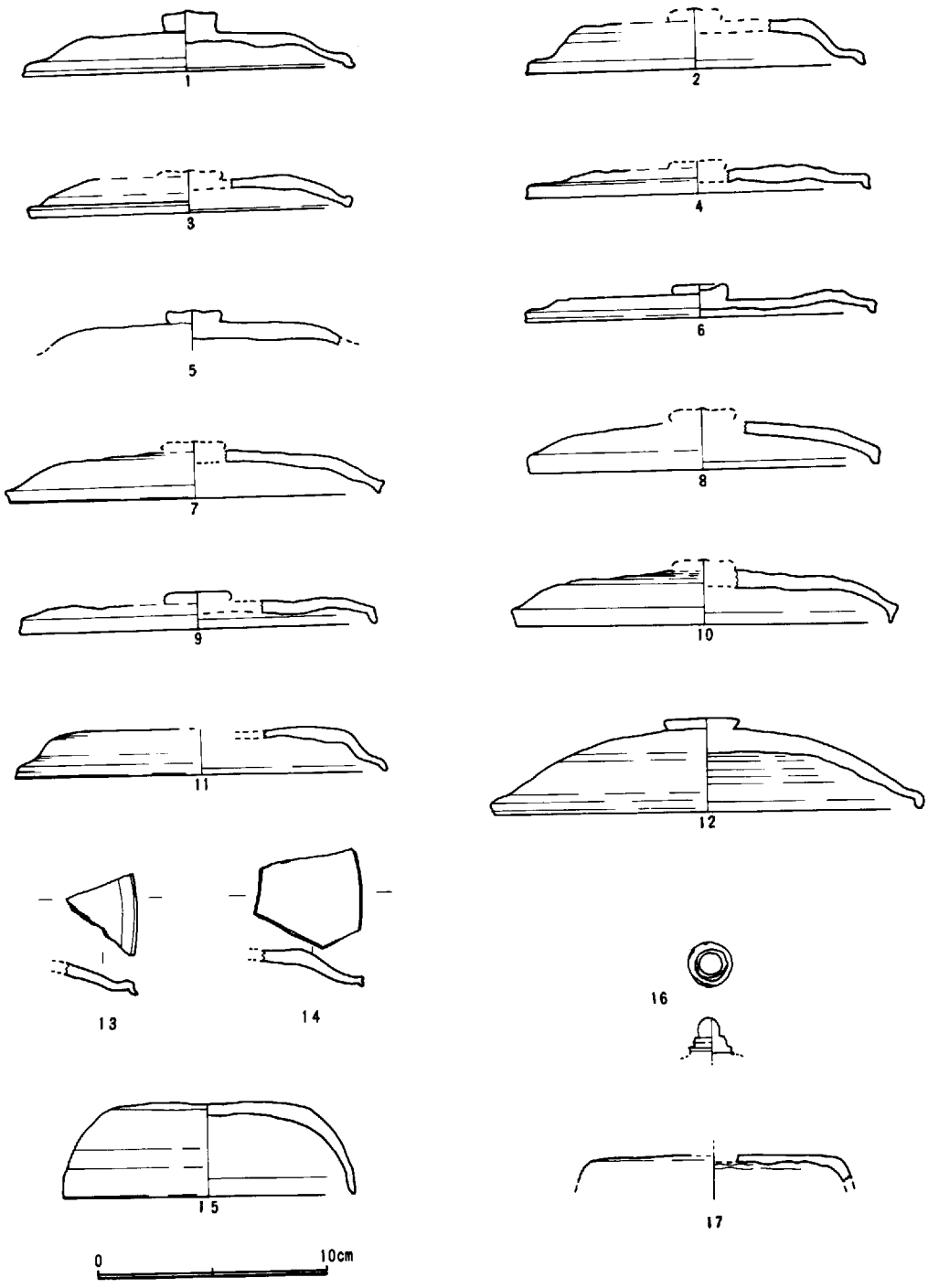
（岡田）

（註）

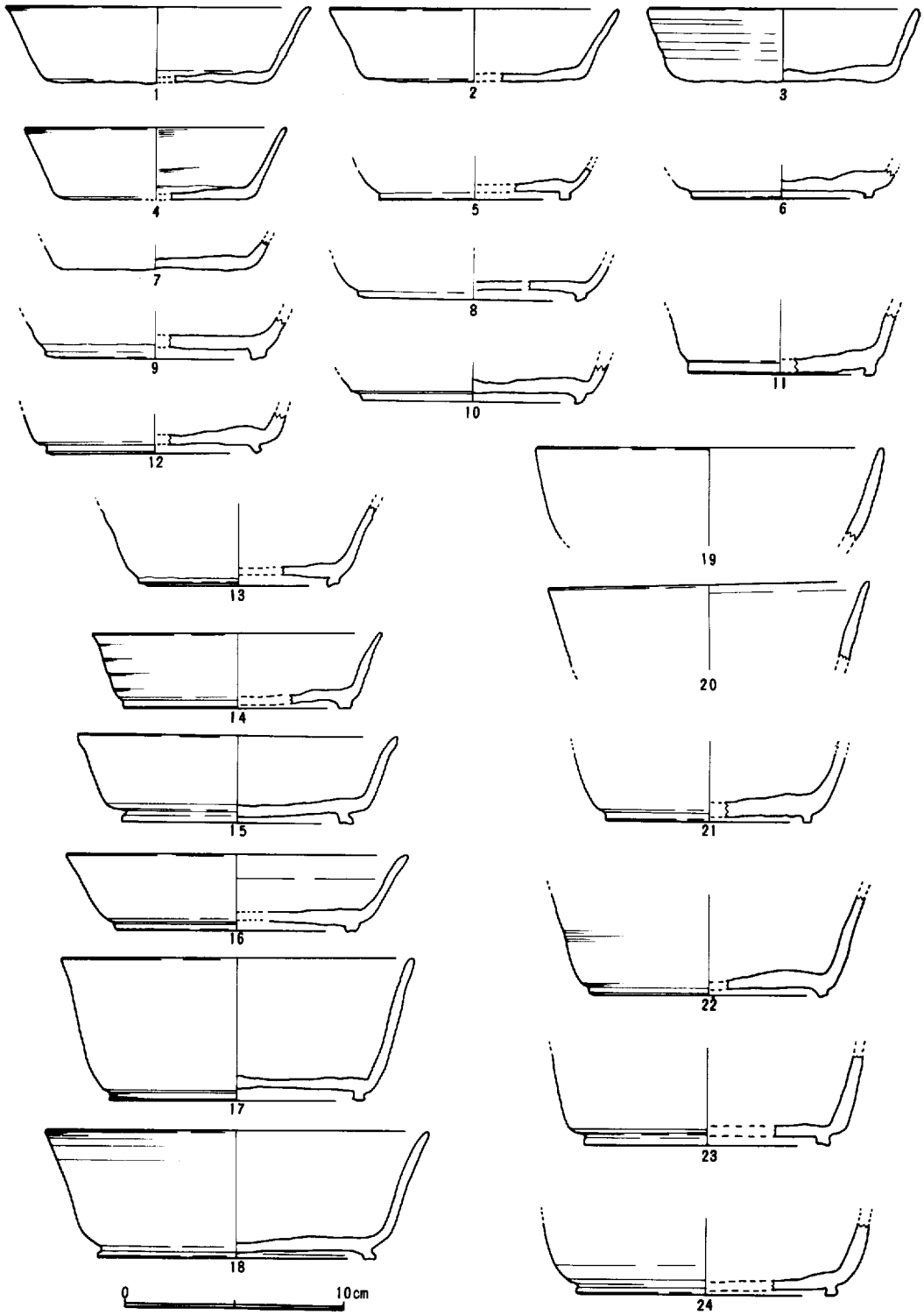
（註1）真庭郡落合町所在の下市瀬遺跡で4点出土している。この遺跡では他に，緑釉陶器・蓮弁付高杯をはじめとする平安初期の遺物がまとまって出土している。（新東晃一・田仲満雄「下市瀬遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（3）岡山県教育委員会　1973年刊）

（註2）本遺跡の南西約1.5㎞に所在する赤茂廃寺（英賀廃寺）との関連性を求めねばなるまい。出土瓦の整理・報告がなく未検討。

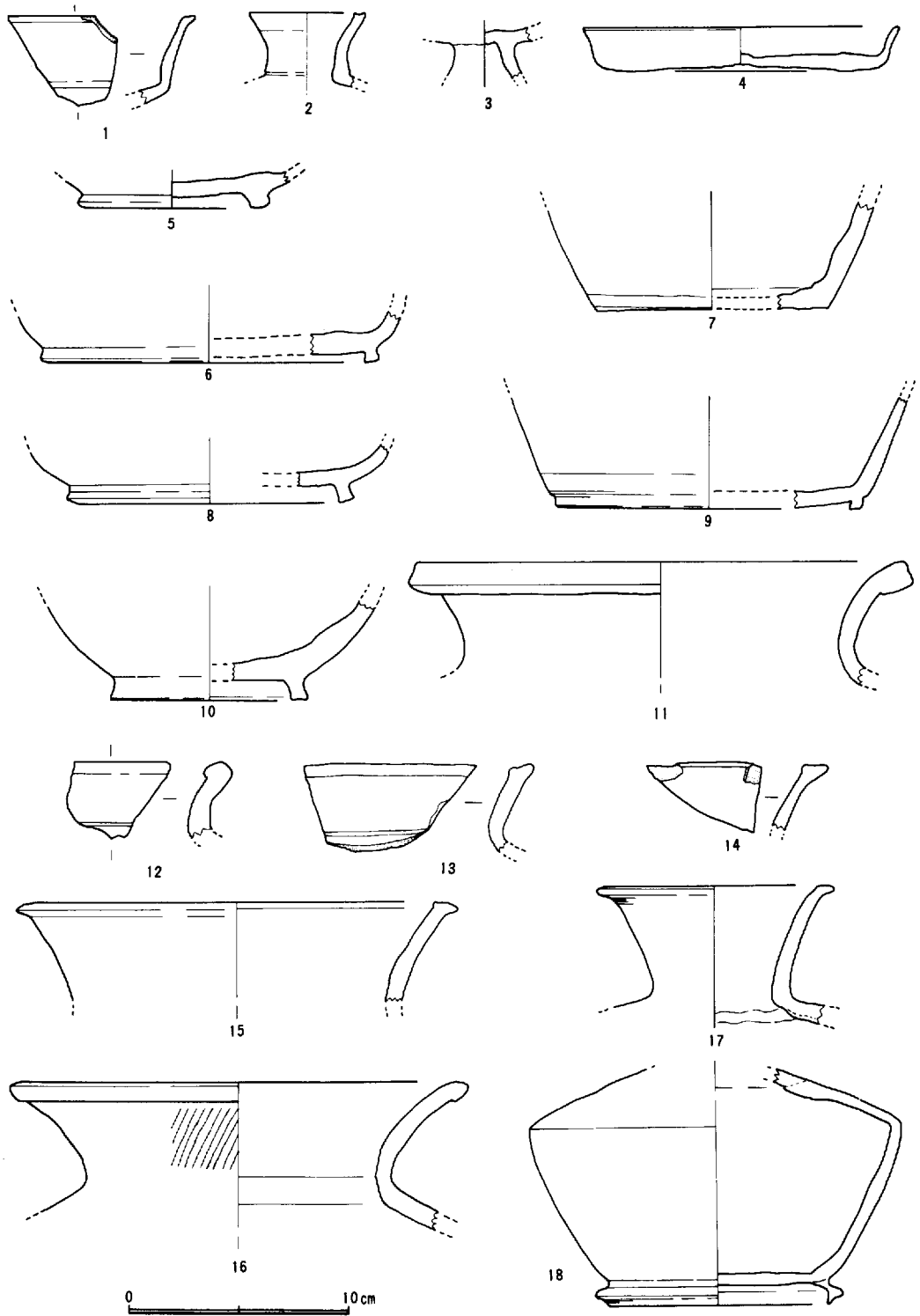
（註3）草戸千軒町遺跡に極めて類似するものがあるが，備前焼としてとりあげられていない。口径10.8㎝，器高6.0㎝を測る。（小都隆ほか「草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報広島県文化財保護協会刊1973年）



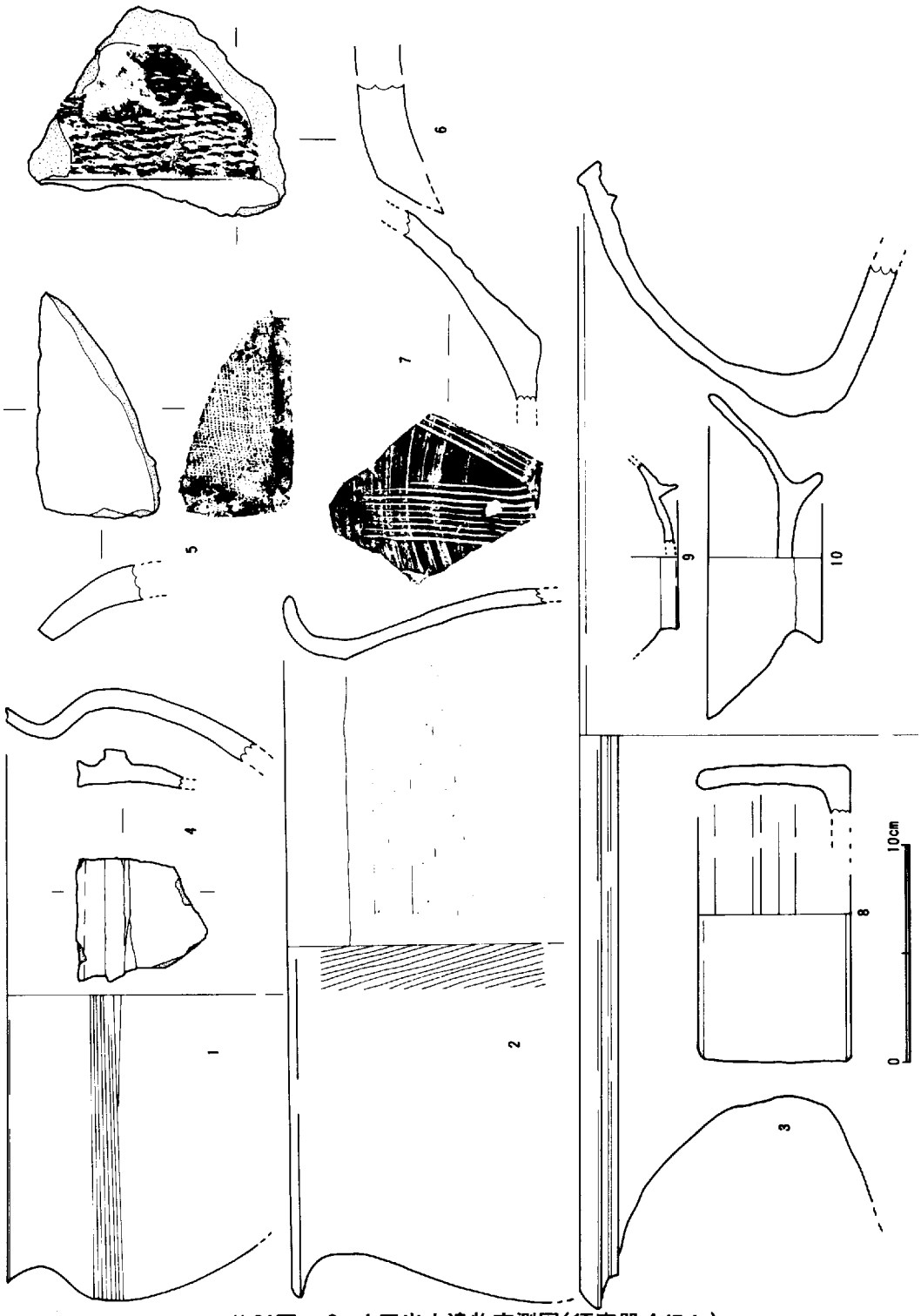
第28図　3・4区出土遺物実測図(須恵器1)



第29図　3・4区出土遺物実測図(須恵器２)



第30図　3・4区出土遺物実測図(須恵器3)



第31図　3・4区出土遺物実測図(須恵器4ほか)

第32図　3・4区遺構全体図

表1　遺構番号表

遺構番号	名称	地区	備考	遺構番号	名称	地区	備考
1	古墳			27	柱穴列 6	16·17FG	
2	窯跡			28	建物9	16·17FG	柱穴より須恵器
3	ピット			29	溝状遺構6	17·18GH	
4	建物 1			30	〃 7	17·18GH	
5	〃 2			31	〃 8	17·18GH	
6	鍛冶炉			32	建物10	17·18GH	
7	〃			33	〃 11	17·18FG	
8	〃			34	〃 12	17·18HI	
9	ピット			35	近世墓	17·18GH	灯明皿、4、底部に棺材
10	〃			36	建物13	18·19FG	
11	溝状遺構1			37	溝状遺構9	18·19FG	
12	〃 2			38	〃 10	18·19FG	
13	建物3	15·16EF	南面庇	39	井戸	18·19FG	
14	〃 4	15·16EF		40	井戸状遺構	17·18FG	
15	溝状遺構3	15·16EF	須恵器、土師器多量、鉄器、炭(松)	41	〃	17·18FG	
16	柱穴列1	15·16EF		42	建物14	18·19GH	
17	〃 2	15·16EF		43	溝 11	17·18GH	
18	建物5	15·16FG		44	溝 12	17·18GHI	
19	溝 4	15·16FG	ほゞ東西	45	住居址	20·21HI	高杯(土師器)、炭化材、サヌカイト片、管玉
20	建物6	15·16FG		46	円形土拡	20·21HI	縄文式土器1片のみ
21	溝 5	15·16FG		47	方形土拡	20·21HI	土器片、サヌカイト片
22	建物7	16·17EF		48	(方形)土拡	21·22HI	須恵器杯(蓋、身)、サヌカイト片
23	建物8	16·17EF	柱穴より須恵器	49	建物15	16·17EFG	須恵器杯　第18図
24	柱穴列3 3	16·17FG	〃	50	〃 16	13·14DE	
25	〃 4	16·17FG	〃	51	〃 17	13·14DE	
26	〃 5	16·17FG					

表2　建物遺構一覧表

	規模	法量	地区番号	遺構番号	備考
建物1					
2					
3	2×2	230 × 230 cm	15·16EF	13	南面庇
4	2×2以上	324{144/186} × 246{126/120}	15·16EF	14	
5	2×2	402(198+204)×360 {150+210/180+180}	15·16FG	18	
6	2×2	340 (162+180) ×330 (150+180)	15·16FG	20	
7	1×2	170 × (180+160)	16·17EF	22	
8	2×2	(180+180) × (220+220)	16·17EF	23	柱穴より須恵器
9	2×2	254{124/130} × 316{164/152}	16·17FG	28	柱穴より須恵器
10	1×3	250 × (220+200+270)	17·18GH	32	
11	2×1	(170+220) × 180	17·18FG	33	
12	2(?)×1(?)	398{188/210} × 186	17·18HI	34	
13	1×3	240 × 454(150+140+164)	18·19FG	36	
14	2×3	{186+166/348}×610 {196+212+202/190+226+190}	18·19GH	42	
15	1×2	330 ×580(270+310)	16·17EFG	49	
16	2×2	410(220+190) × 370(160+210)	13·14DE	50	
17	1×2	150 × 396(198+198)	13·14DE	51	
18					

表3　柱穴列遺構一覧表

	規模	法量	地区番号	遺構番号	備考
柱穴列1	3本	360 (192+168)	15·16EF	16	
〃 2	〃	378 (186+192)	15·16EF	17	
〃 3	〃	243 × 243　486	16·17FG	24	柱穴より須恵器
〃 4	〃	220 × 220　440	16·17FG	25	〃
〃 5	〃	180 × 180　360	16·17FG	26	
〃 6	〃	225 × 225　450	16·17FG	27	

第4章　総　　括

1．遺　物

（1）**石器**（第33図，図版第30・31）　本遺跡では直接遺構に伴う石器はみられず，2区出土の砥石（第32図—23）をのぞくその大半は縄文時代の遺物と考えられるものである。遺跡内において弥生時代の遺構や弥生式土器の出土が僅少であることや石器の形状を考慮すれば，縄文時代に比定して大過あるまいと思われる。

a. **石斧**（第33図—16・17）　2点出土しているがいずれも乳棒状石斧と呼称されているものである。（註1）**17**は砂岩質の石材を用い長12.15㎝を測り重量約230ｇを量る。背面は扁平でわずかに丸味を帯びつつ刃部に至る。刃部は明らかに研磨されており，数か所に使用による欠損がみられる。全体的に稜線は不明瞭で丸味を帯びている。**16**は玄武岩系の黒っぽい石材を用いており長12.4㎝を測り重量約230ｇを量る。形態的には，ほとんど差異は認められないが，石質によるものかあるいは風化によるものか側面はかなり剥落している。使用による刃部の欠損はわずかに認められるが17に比べるとさほど鋭利ではない。

b. **石鏃**（第33図1～12）　すべてサヌカイト製で風化の度合や，わずかな質的相違から白っぽいもの，あるいは，灰黒色・黒色を呈するものがある。出土地点は3区東端から4区に集中している。形式的にはすべて無茎式で凹基のものがもっとも多く，ついで平基式に近いものがみられる。第33図—**12**は先端部の磨耗が激しく丸味を帯びているところから石錐の可能性もある。以下重量を記述しておく。第33図—**1**～0.1ｇ，**2**～0.5ｇ，**3**～0.4ｇ，**4**～0.5ｇ，**5**～0.4ｇ，**6**～0.4ｇ，**7**～0.6ｇ，**8**～0.4ｇ，**9**～0.4ｇ，**10**～0.5ｇ，**11**～0.7ｇ，**12**～0.7ｇ。

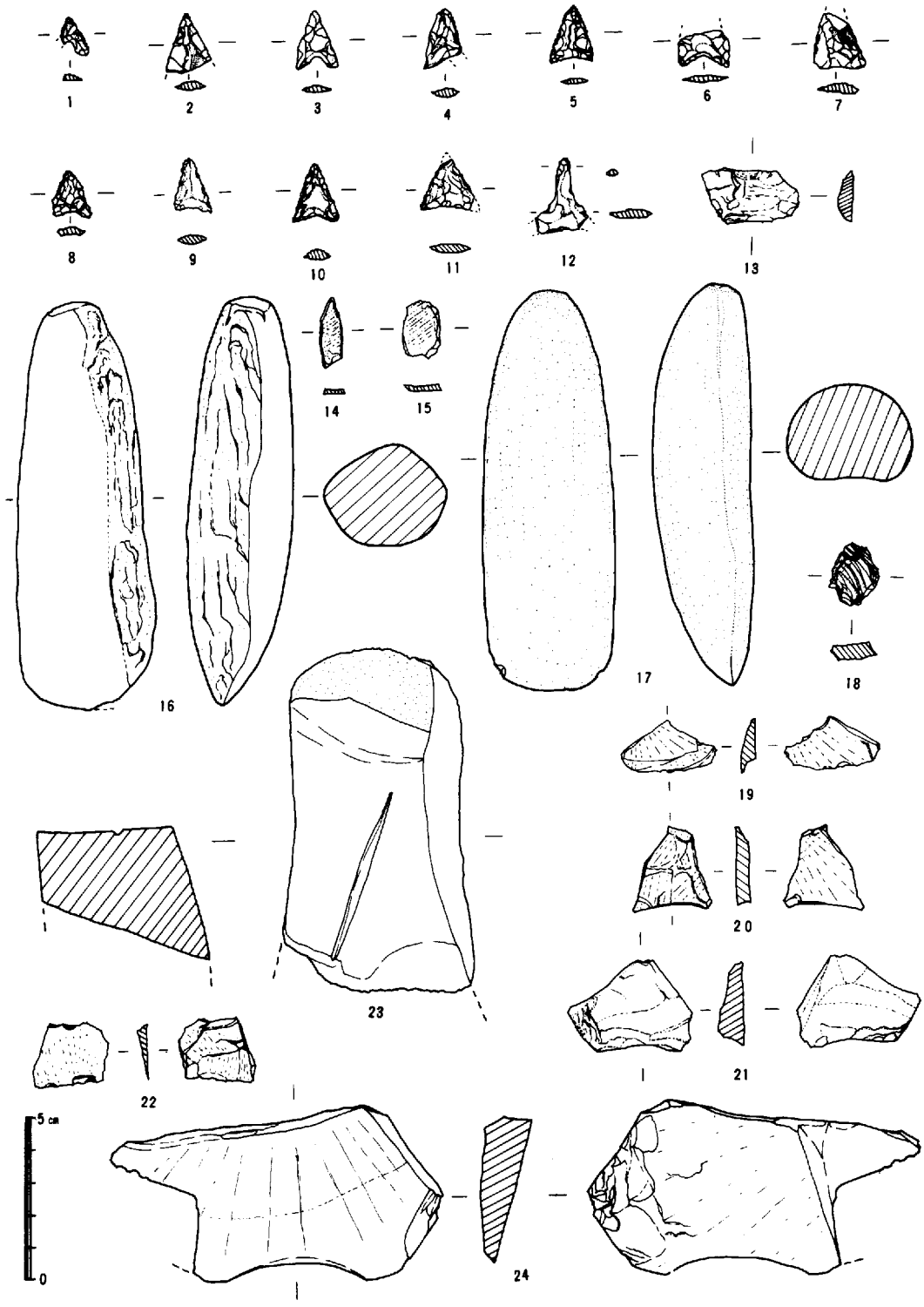
c. **剝片**（フレーク）　（第33図13～15・18～22・24）総数約40点のサヌカイト剥片が3区・4区において出土している。小さいものは0.1～4.7ｇの範囲の重量を示すもので数的にはもっとも多い。中には**24**のような76.5ｇを量る大きなものもみられる。**18**は黒曜石で本遺跡では唯一の出土品で，島根県隠岐島産出のものとみられる。

d. **砥石**（第33図23）　2面の研磨面をもち表面は極めて滑らかであるが荒い擦痕はみられない。表面中央部に巾3㎜深さ約1.7㎜ほどのU字状の溝が5.4㎝走行している。おそらく鋭利な特殊鉄器の先端刃部を研磨する際，使用されて生じたものであろう。石質は硬質砂岩とみられる。

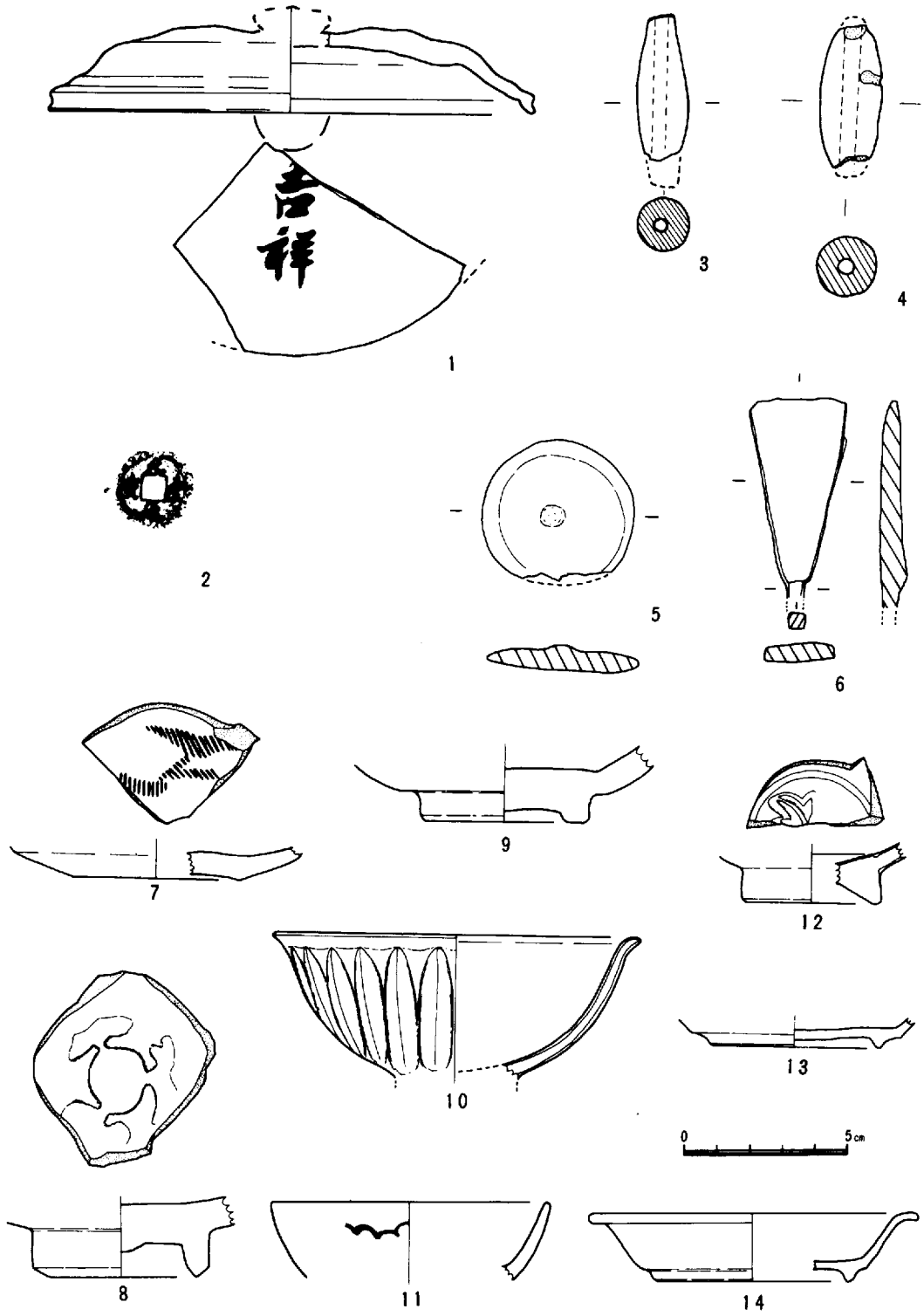
（岡田）

（註）

（註1）水野清一・小林行雄「図解考古学辞典」昭和34年東京創元新社刊。岡山県内では川上郡川上町上大竹神谷（ほや）北の平出土のもの（長14.3㎝，巾6㎝，厚さ3.6㎝）のほか苫田郡富村出土のものが知られている。（栗野克己氏の御教示による。）



第33図　石器実測図



第34図　墨書土器・銭貨・土錘・鉄製品・青磁・白磁

（2）**鉄製品**（第34図－5・6）　**円盤状鉄製品**　最大径47㎜，最大厚7㎜を測る鉄製品である。この鉄器は，一面はほぼ平坦であり，他の面は，ゆるやかな弧を描き，さらに中心部に直径8㎜の大きさで，盛り上る部分があるが，軸となって一方の側に貫通する様子は見られない。そのことからして，紡綞車としての可能性はないものと考えられる。

鉄鏃　平根式の鉄鏃で，厚さは，平均6㎜，遺物の全長は，62㎜を測る。現在では，表面にサビが付着しているが，部分的にサビを除去した面には，鍍金が見られた。その鍍金は，鉄鏃の全体におよぶものと考えられる。

（井上）

（3）**墨書土器**（第34図1）　奈良時代末～平安時代初頭と考えられる杯蓋の外面に「吉祥」と墨書するものである。墨書土器の岡山県内での出土例は，美作国府跡「少目」「秀」「大」「厨」，勝央町平遺跡「関手」「大」「厨」，作東町高本遺跡「郡」，久米町久米廃寺「嶋」，下市瀬遺跡等「千人」の出土がある。さらに久米町宮尾遺跡にも，判読不明ではあるが，墨書土器が一点出土している。以上のように，岡山県内においても，墨書土器の出土例が増加している。しかし，そこに見られる墨書銘は，官職名，付属の施設名等が多く，吉凶を表わす語は本遺跡が最初である。出土遺物に見られる。墨書土器で吉凶を表象する文字は少なく，「吉」「善」「福多」「福善」「加福」「徳」「福」「賀」等が知られるものである。(註1)

本遺跡で見られる文字は，吉事を表わす語である。その点は，官衙遺跡等から出土する所属所有官職名を表わす墨書土器とは区別して考える必要があろう。

神護景雲元年（767年）(註2)には諸国国分寺において吉祥会を開催する旨の勅が出されている。その吉祥会も，宝亀2年(註3)には停止した。しかし，宝亀3年11月(註4)にはまた，毎年正月に吉祥会を行うことを恒例とする旨の詔が出されており，当時の政情不安の様子を示している。それらの詔勅により，諸国において毎年正月には，吉祥会が行なわれたものと考えられる。その法会は，吉祥天の功徳により，「天下太平，風雨順時，五穀成熟，兆民快楽，十方有情」(註5)を祈願するものであり，為政者の政情安定を企図するものである。仏教が鎮護国家の政策(註6)の一端を担うものとして，国家体制策に組み込まれたように，(註7)地方にあっても多くの場合は，(註8)為政者の政治的地位保全のために仏教をいちはやく受容したであろう。したがって国家の仏教的政策は，容易に地方に受け容れる基盤が形成されたと考えられる。備中平遺跡には，南西約1.5㎞に白鳳期に創建された赤茂廃寺があり，安定した仏教的基盤が考えられる。そのような状況であるから，吉祥悔過の法会も，当地方における為政者層には，容易に受容されていったものと推測されるであろう。そのような基盤を背景とすることにより「吉祥」も，その語意とともに受容されたものと考えられる。

以上のように，「吉祥」銘墨書土器は，地方における仏教受容のあり方，遺物出土の遺跡の性格を考察する上からも重要な資料である。

（井上）

註

註１　森浩一，辰己和弘「古代の土器に書かれた文字集成」『文字』社会思想社

註２　続日本記　神護県雲元年正月８日の条

註３　続日本記　宝亀２年正月13日の条

註４　続日本記　宝亀３年11月10日の条

註５　註２に同じ

註６　続日本記天平13年３月24日の条，国分二寺，東大寺の建立がその例であろう

註７　二葉憲香，『古代仏教思想史の研究』永田文昌堂　同書で仏教受容のあり方を「律令仏教」と「反律令仏教」に分けられ，国家体制に組込まれた仏教を「律令仏教」と定義されている。

註８　鶴岡静夫『古代寺院の成立と展開』古川弘文館，同著には，関東における仏教受容の多様化を述べておられる。その中で，日本古来の信仰に基ずくもののあることも述べられている。その点は，為政者の政策の手段に簡単に変わりうることに注目する必要があろう。

（４）緑釉陶器　３区14ラインＦ地区の灰褐色粘土層より小片が１点のみ出土している。胎土は土師質で軟陶緑釉に分類されるものである。釉は内外面ともにかなり剥落しているが明快な淡黄緑色の釉を観察することができる。岡山県内においてはおよそ20ケ所近い緑釉陶器出土遺跡が知られ特に椀，皿が多いが本遺跡出土品もその形状から椀と推定される。　（岡田）

（５）青磁・白磁（第34図，図版32）　出土した磁器の類は，そのほとんどが小破片であるため，図化できる資料は少ない。**７**は，珠光青磁皿の底部である。底面は，ヘラ削りによる上げ底である。見込み部分には，櫛描による不定形な施文がみられる。胎土は，緻密であり，淡青灰色を呈している。釉薬は，淡緑色呈している。**８**は，碗の底部である。高台は，削り出しによるもので，見込みには型押による鳥形の施文が見られる。胎土には，石英粒の砂粒を多く含むものであり，灰色を呈している。釉薬は，淡緑色を呈しており，その厚さは薄い，全体的な色調は緑色を呈している。**９**も碗の底部である。高台は，削り出しによるもので，**８**に比べて，その高さは低い。胎土は，比較的緻密で，青灰色を呈している。釉薬は，淡緑色を呈しており，その厚さは薄い。全体的な色調は，緑色を呈する。**10**は，推定口径12.2㎝を測る龍泉窯系の青磁碗である。体部は，弧を描きながら立ち上り，口縁部で外反するもので，端部は丸い。内面も同じく曲線を描くものであり，口縁部で外反するも平坦面はない。外面には，蓮弁文がみられる。胎土は良質で緻密であり，淡青灰色を呈している。釉薬は，青緑色を呈しており，その厚さは，0.8～1.0㎜を測る。**11**は染付けのみられる碗である。ゆるやかに弧を描く体部をもち，口縁部は丸。体部外面に染付けがかすかに見られる。文様は，弧状のものが，連続して横に連なるもので，色調は，紺（紺青）色を呈している。胎土は緻密であり，色調は乳褐色を呈している。釉薬は，非常に薄く，無色である。色調は，全体的には乳褐色である。**12**は，削り出し高台である。高台は，内部を斜めに削り取るものである。胎土は，良質で緻密であり，白色を呈している。見込みには，型押による葉文状の施文がみられる。釉薬は，0.4～

0.6㎜の厚さであり，色調は無色に近い。全体的な色調は，淡青緑色を呈している。**13・14**は小皿である。形態は，両者とも同一と考えられ，**13**は，その底部である。体部は，外反しながら直線的に立ち上り，口縁部付近で弧を描きながら大きく外反するもので，口縁部は丸い。両者とも，その作りは入念であり，整美である。胎土は，良質であり，緻密である。胎土の色調は，白色を呈しており。釉薬は，薄く均一に施こされている。釉薬の色調は，無色であるが，全体的な色調は，淡青色を呈している。見込みには，破片であるため判読は不可能であるが，文様化した文字がみられる。**13**，**14**は大きさが若干異なるのみで，胎土，釉薬，色調等に類似する点が多く，同一時期の，同一窯で製作されたものと考えられる。

出土した磁器類の中に，天目釉の破片がある。小破片であるために図化することはできない。釉薬は，内面は光沢があるが，外面には，光沢は少ない。胎土は良質で，緻密であり，色調は灰色を呈している。出土した青磁・白磁の製作年代であるが，その多くは南宋～元代に比定しうるものと考える。（井上）

参照文献

日本出土の中国陶磁　東京国立博物館1975

村上正名他　昭和40年　草戸千軒町遺跡　遺物編　福山市教育委員会

亀井明徳　九州出土の宋・元　陶磁器の分析　考古学雑誌58―4

村上正名　遺跡出土の中国陶磁にみる日宋交易　古代文化28

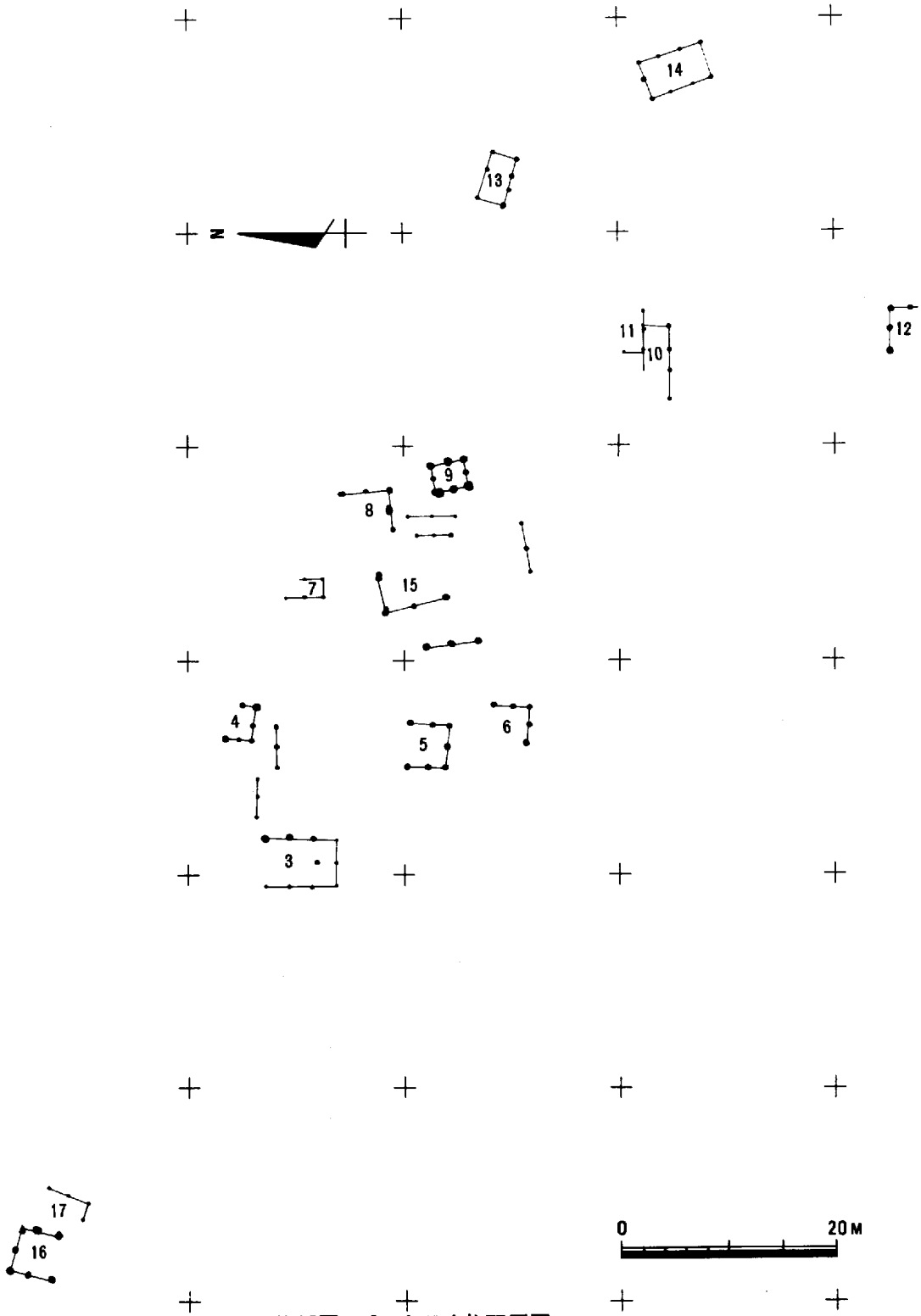
（6）**銭貨**（第34図―2）　元豊通宝1点が3区より出土している。表裏共に銹化しており，縁部は全周にわたって欠落している。文字部分は「元」のほかは，わずかに銹化しているが，判読を妨げるものではない。中国における初鋳年は，宋代―元豊元年（1078年）で，わが国の鎌倉時代に宋銭として伝えられたものと考えられる。中世商業都市遺跡として知られる，広島県福山市の草戸千軒町遺跡においては，「皇宋元宝」（初鋳年―1039年）・「熙寧元宝」（初鋳年―1068年）など共に比較的多量に出土している宋銭である。（岡田）

（7）**土錘**（第33図2・3）　**2**は土師質で管状小型単孔式のものである。最大胴径1.5㎝，復元長約5.5㎝を測り直径4㎜の円孔が貫通する。重量は約9gを量る。**3**はやはり管状小型単孔式のものであるが須恵質で2より丸味を帯びて胴部がふくらむ。最大胴径1.9㎝，復元長約5㎝を測り直径約5㎜の円孔が貫通する。重量は約12gを量る。（岡田）

2．遺　構

本遺跡の今回の調査で，17棟の建物遺構を検出した。その内の15棟は，3・4区で検出したものである。その規模等については，第3章第4節で述べたので，ここでは繰り返さない。

ところで，建物遺構の築造された時期であるが，建物15の柱穴から時代の判明する須恵器が出土している他は，明確な遺物の出土はない。また，3区は遺構が削平されているため，層位的発掘も不可能であった。ここでは，本遺跡から出土している遺物の時期から，それを判断す



第35図　3・4区建物配置図

る他はないであろう。

出土遺物については，前章及び前節に述べた通りである。それによれば，縄文時代の遺物もあるが，今回の場合は，歴史時代の遺物がその対照となる。歴史時代の遺物を見ると，奈良時代末期から鎌倉時代までに集中する感がある。建物の時期も，概ねは，その間に相当するものと考える。しかし，全ての建物について個々の時代を想定することは不可能であるが，数棟については，それも可能である。つまり，建物９・12・13・14・15は，奈良時代末～平安時代に想定することができるであろう。建物13・14については，層位的にも，その時代とすることができる。そして，建物13・14の間に在る井戸も同時期と考えられるものである。他の建物についての時代判定は不可能であるが，平安時代～鎌倉時代に想定することは可能であろう。いずれにしても，本遺跡は，鎌倉時代の終焉を境いに，住居地としては衰退してゆき，現在の集落の見られる位置へ移ったものであろう。

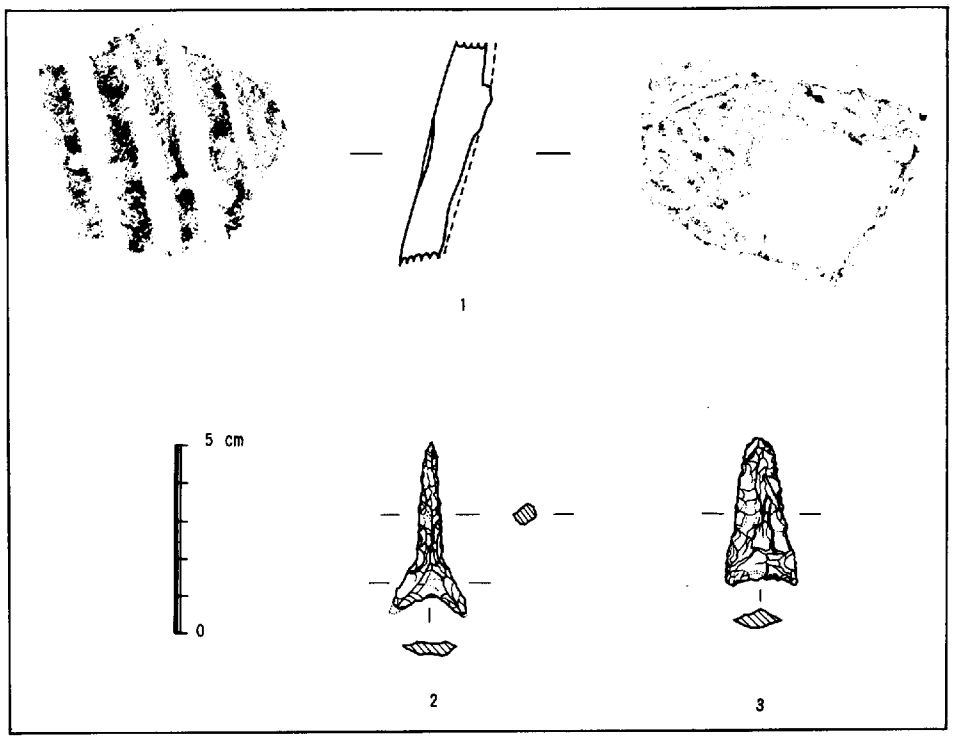
本遺跡の歴史時代の遺物の中に「吉祥」銘墨書土器，緑釉陶器片各１点が出土している。緑釉陶器については，官衙遺跡，寺院跡からの出土例は多い。しかし，本遺跡については，寺院跡の可能性はないものと考えられる。また，出土遺物を丹念に観察したのであるが，陶硯片，転用硯片等，硯に類する出土遺物はなかった。この点は，本遺跡を，官衙遺跡とする可能性を否定するものと考える。そのことは，本遺跡は，同時代の集落址としての様相を示しているものと言えるであろう。

備中平遺跡が，集落址であるとすれば，緑釉陶器，墨書土器の出土の意味が官衙址等と比べて，やや異ってくるであろう。しかし，一方では，それは，当時の集落の様相を示す資料でもある。奈良時代末～平安時代の頃に，緑釉陶器が，どの階層にまで普及していたかが問題である。その時代の中心的地域と，その他の地方では，同一の意識では考えられないであろうが，緑釉陶器を持ちえた階層は，当地方にあっては，むしろ上位の階層に属するとすべきであろう。

墨書土器であるが，その文字が，本遺跡が，集落としての機能を果していた当時に，同地内で書かれたものか，墨書された土器を他所から持ち込んだものかは不明である。いずれにしても，墨書銘は，名前等の記号ではなく，吉凶語であることを考えれば，その字義が解せねば意味がない。その文字の意味することを知ることによって文字としての機能をなすものである。その点を考慮すれば，本遺跡内には文字を読める人物の存在したことを想定することができるであろう。また，備中平遺跡の南西約1.5㎞には，白鳳時代に創建されたと考えられる赤茂廃寺があり，先の出土遺物を考慮に入れれば，赤茂廃寺の檀越，郡衙の官人層を形成する階層を想定することもできるであろう。

本遺跡から，中国製陶磁器の出土がみられる。備前焼等と共に中世の集落における遺物のあり方を示す資料である。検出した建物群は，武士団の居館であるのか，その他の集落であるのかは確定的ではない。いずれにしても，草戸千軒町遺跡で見られるごとく，中世の商業都市遺跡から出土する中国製陶磁器の出土量の多さは，中世における交易圏の大きさと購買層の厚さを示すものであろう。その点は，当然，本遺跡においても考慮する必要があるものと考える。

（井上）



第36図　1　円形土坑出土縄文式土器(草期押型文)
2・3　4区出土サヌカイト製石鏃

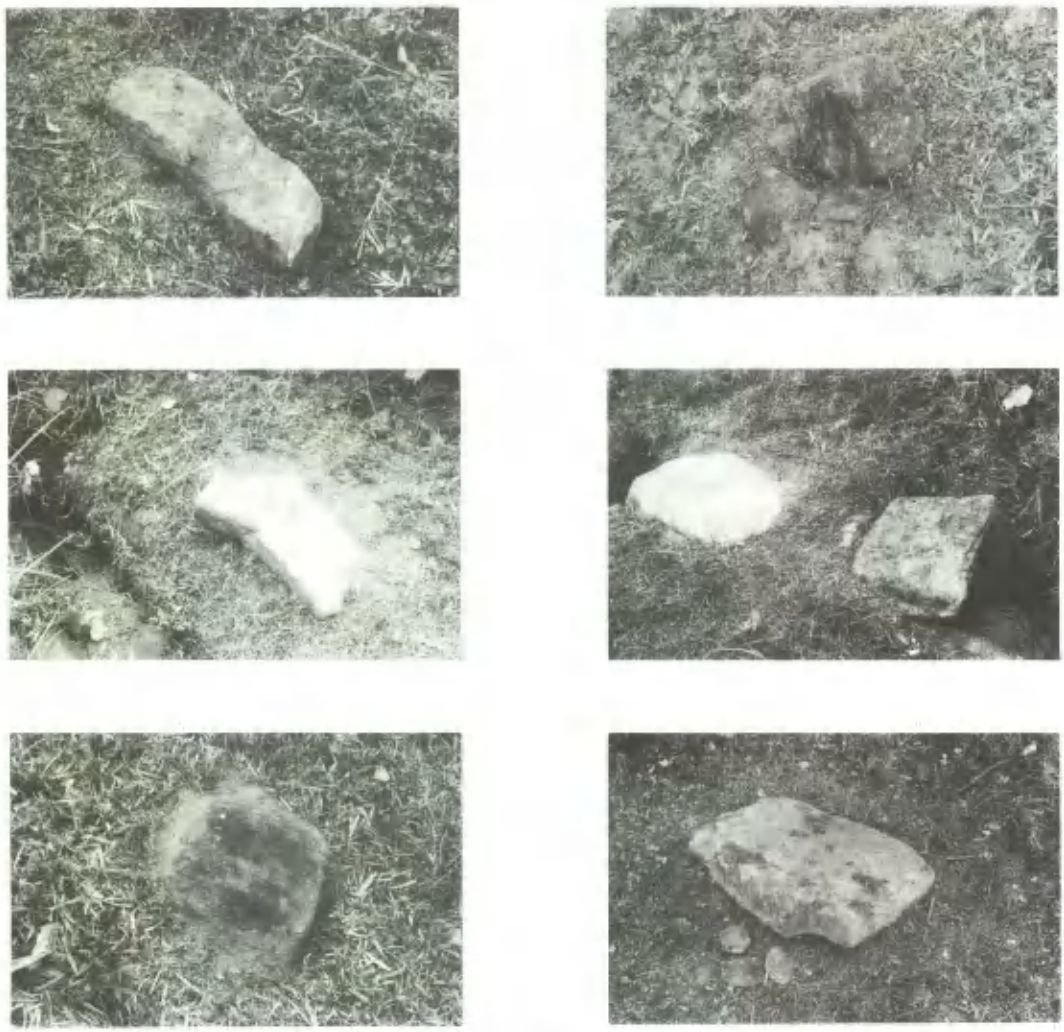
1　備中平遺跡航空写真（東方より）

2　遺跡の近景（西方より）

図版２

１　Ⅰ区全　景（東から）

２　Ⅰ区東側平坦部発掘区（西南から）



１　Ⅰ区古墳石材点在状況

２　Ⅰ区３線トレチン発掘状況（南から）

図版 4

第2遺構（窯跡）

1　全景（北から）

2　全景（北から）

3　全景（西から）

第2遺構 1 東壁溝北から2断面（東から）

2 東壁溝北から3断面（東から）

3 西溝断面

図版 6

1　第２遺構煙道（南から）

2　第２遺構煙道石組部分（東から）

第2遺構煙道石組 1（北から）

2（東から）

3（西から）

図版 8

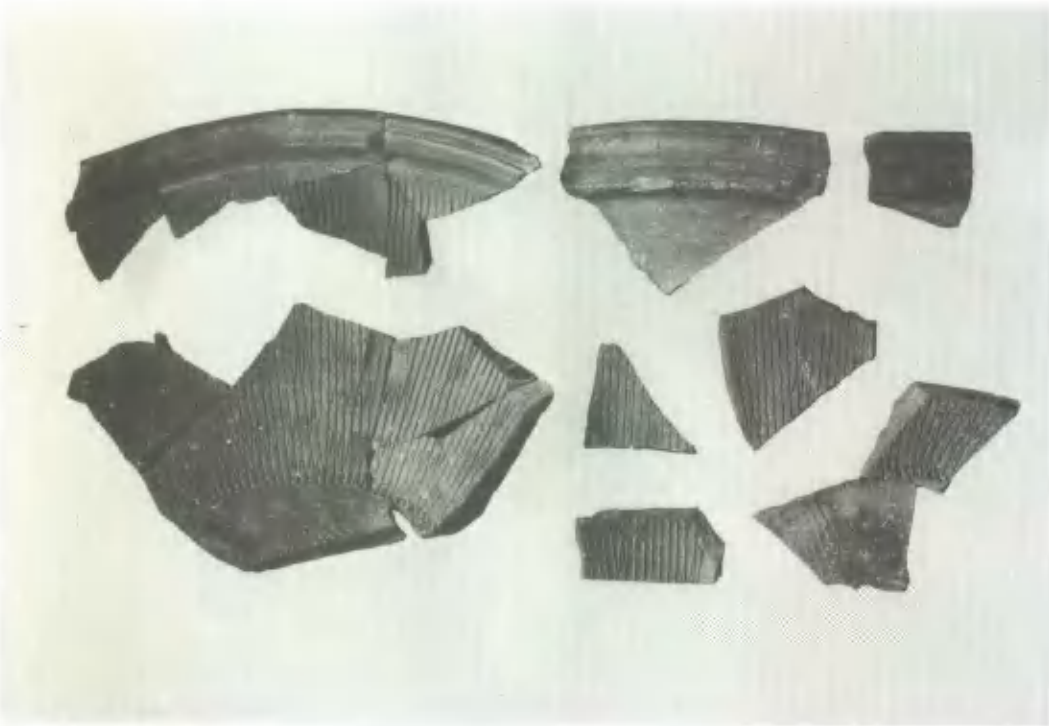
第 2 遺構出土木炭

1　窯体内南半部

2　煙突状石組の埋土中

3　東側平坦部

1　第３遺構出土遺物



2　Ⅰ区出土備前焼

図版10

1　2区発掘風景

2　2区大　溝

1　2区　溝

2　2区　ピット

図版12

1　2区遺構検出風景

2　2区炉床状土坑検出状況

1　3区溝状遺構発掘風景

2　3区溝状遺構発掘風景

図版14

1　3区溝状遺構須恵器出土状態

2　同　土（杯）

1　3区溝状遺構

2　3区　同　上

図版16

1　建物３（西より）

2　建物３（北より）

1　建物4（南より）

2　建物4（北より）

図版18

1　建物７付近（南より）

2　建物15付近（南より）

1　建 8・9・15付近（南より）

2　建　物9（南より）

1　建　物14付近（北より）

2　建　物14（北より）

1　井戸状遺構（南西より）

2　井戸状遺構（西より）

1　住居址，炭化材，高杯の出土状態（南より）

2　住居址（南より）

1　建物12・中世墓付近（北より）

2　19・20 G・H区　全景　（東より）

図版24

1　建物３・４付近発掘風景

2　住居址発掘風景

1　方形土坑　（No.47）（東より）

2　中世墓（東より）

図版26

1　円形土坑（No.46）（東より）

2　円形土坑（No.46）（南より）

1　土坑（No.48）

2　土坑（No.48）出土遺物

3　土坑（No.48）遺物出土状態

図版28

2区　出土遺物

4区　出土遺物

住居址出土　高杯

中世墓出土灯明皿

鉄　鏃

円盤状鉄製品

銭　貨（1／1）

墨書土器

須恵器，鉄製品，墨書土器（1/2）　銭貨（1/1）

図版30

1　サヌカイト製石鏃・石錐（1/1）

2　サヌカイト剥片・黒曜石剥片（1/1）

1　サヌカイト剥片（$\frac{1}{2}$）

2　乳棒状石斧（$\frac{1}{2}$）

3　乳棒状石斧（$\frac{1}{2}$）

4　砥　石（$\frac{1}{2}$）

図版32

1

2

3

4

5 (1/1)

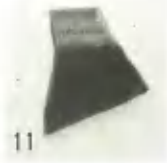
6

7

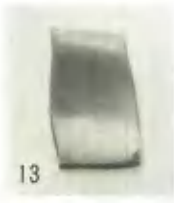
8

9

10


11

12


13

14

青磁・白磁 (1/2)

桃　山　遺　跡 (31)

目　　次

第一章　桃山遺跡の立地……（田仲）…… 325
第二章　調査の経過……（田仲）…… 328
　第一節　調査に至るまでの経過…… 328
　第二節　調査の経過…… 328
　　日誌抄…… 330
第三章　一次調査の概要……（田仲）…… 335
　第一節　トレンチ設定…… 335
　第二節　層　位…… 336
　第三節　遺跡および遺物の範囲…… 336
第四章　二次調査の概要…… 338
　第一節　1区……（田仲）…… 338
　第二節　2区……（二宮）…… 345
　第三節　3区……（田仲）…… 359
　第四節　4区……（福田）…… 387
　第五節　5区……（田仲）…… 451
　第六節　6区……（田仲）…… 453
　第七節　7区……（田仲）…… 465
　第八節　8区……（竹田）…… 479
　第九節　9区……（竹田）…… 507
第五章　まとめにかえて…… 509

図　目　次

第1図　桃山遺跡付近地形図（北房町教育委員会提供）…… 327
第2図　トレンチ・グリッド図…… 335
第3図　桃山遺跡地形図（日本道路公団作成図より）…… 337
第4図　T2・T14・1区表土層出土土器実測図…… 338
第5図　P 101 出土土器実測図1 …… 339
第6図　P 101 出土土器実測図2 …… 340
第7図　P 104 出土土器実測図…… 341
第8図　P 110 出土土器実測図…… 342
第9図　P103・P106・P109・P111・P112・P102 出土土器実測図 …… 343

第10図　2区全体図…… 347
第11図　2区南北トレンチ土層断面図…… 349
第12図　住居址平面・断面図（上・H－202，下・H－201）…… 351
第13図　住居址平面・断面図（H－203）…… 352
第14図　2区出土遺物…… 353
第15図　2区出土遺物…… 354
第16図　ピット平面・断面図…… 355
第17図　ピット etc 出土遺物…… 356
第18図　P－203出土遺物…… 357
第19図　建物201平面・断面図…… 354
第20図　3区3層出土土器実測図…… 360
第21図　3区出土鉄器・土器実測図…… 365
第22図　3区遺構配置図…… 361
第23図　H301・H302平面図・断面図…… 363
第24図　H 302 出土土器・鉄器実測図…… 366
第25図　H 303 平面図・断面図…… 367
第26図　H303・H307出土土器実測図…… 368
第27図　H 307 平面図・断面図…… 369
第28図　H 304 平面図・断面図…… 370
第29図　H301・H304出土土器実測図…… 371
第30図　H305・H306平面図・断面図…… 372
第31図　ピット平面図・断面図およびピット出土土器実測図…… 373
第32図　鍛冶炉平面図・断面図および鍛冶炉出土土器実測図…… 374
第33図　建物301平面図・断面図…… 375
第34図　火301平面図・断面図…… 379
第35図　火301出土土器・古銭実測図・拓影…… 381
第36図　火301出土鉄器・玉類実測図…… 382
第37図　土301・土302・土303平面図・断面図
および土302出土土器実測図…… 383
第38図　土301出土鉄器実測図…… 384
第39図　土309平面図・断面図および土303・土309出土土器実測図…… 385
第40図　4区全体図…… 389
第41図　桃山1号古墳平面図…… 391
第42図　桃山1号古墳断面図…… 393
第43図　桃山1号古墳出土遺物…… 395

第44図　桃山1号古墳出土遺物…… 396
第45図　C－451 古墳主体部…… 398
第46図　C－451 古墳出土遺物…… 398
第47図　C－452 古墳主体部…… 400
第48図　C－452 古墳出土遺物…… 401
第49図　C－453 墳墓主体部…… 402
第50図　C－453 墳墓集辺の遺物…… 402
第51図　401 号住居址…… 404
第52図　401 号住居址出土遺物…… 405
第53図　401 号住居址出土遺物…… 406
第54図　402 号住居址…… 407
第55図　402 号住居址下層出土遺物…… 408
第56図　402 号住居址上層出土遺物…… 408
第57図　403 号住居址…… 409
第58図　403 号住居址出土遺物…… 410
第59図　404 号住居址…… 411
第60図　404 号住居址出土遺物…… 412
第61図　405 号住居址…… 413
第62図　405 号住居址出土遺物…… 414
第63図　406 号住居址…… 415
第64図　406 号住居址出土遺物…… 416
第65図　407 号住居址…… 418
第66図　407 号住居址出土遺物…… 419
第67図　408 号住居址…… 420
第68図　408 号住居址の第1期と思われる出土遺物…… 421
第69図　408 号住居址の第2期と思われる出土遺物…… 422
第70図　408 号住居址の第3期と思われる出土遺物…… 424
第71図　P－473 …… 426
第72図　P－473 出土遺物…… 427
第73図　P－451 出土遺物…… 428
第74図　P－487 …… 429
第75図　P－487 出土遺物…… 429
第76図　P－479 …… 429
第77図　P－479 出土遺物…… 429
第78図　P－475 …… 430

第79図　P－475 出土遺物…… 431
第80図　P－476 …… 432
第81図　P－476 出土遺物…… 432
第82図　P－453 出土遺物…… 433
第83図　P－454 出土遺物…… 433
第84図　P－484 …… 434
第85図　P－484 出土遺物…… 434
第86図　P－482 出土遺物…… 435
第87図　P－482 …… 436
第88図　P－481 …… 437
第89図　P－481 出土遺物…… 438
第90図　P－485 出土遺物…… 439
第91図　P－490 出土遺物…… 439
第92図　P－486 出土遺物…… 439
第93図　P－431 出土遺物…… 439
第94図　P－440 出土遺物…… 440
第95図　P－411 出土遺物…… 441
第96図　P－409 出土遺物…… 442
第97図　P－410 出土遺物…… 442
第98図　P－480 …… 443
第99図　P－480 出土遺物…… 443
第100図 第1次調査出土遺物…… 445
第101図 第1次調査出土遺物…… 446
第102図 第2・3地点黒褐色土出土遺物…… 447
第103図 5区出土土器実測図…… 452
第104図 6区出土遺物実測図…… 459
第105図 6区南半分遺構配置図…… 455
第106図 6区北半分遺構配置図…… 457
第107図 建物601平面図・断面図…… 460
第108図 建物602・建物603平面図・断面図…… 461
第109図 土601平面図および土601・土602出土古銭拓影…… 462
第110図 土604平面図・断面図および遺物実測図…… 463
第111図 7区表土層出土土器実測図…… 465
第112図 7区遺構配置図…… 466
第113図 H701・H702平面図・断面図…… 467

第114図 H 703 平面図・断面図…… 469
第115図 H701・H703・H705・H706出土土器実測図…… 470
第116図 H704・H705・H 706 平面図・断面図…… 471
第117図 H702・H704出土土器実測図…… 474
第118図 7区ピット平面図・断面図…… 475
第119図 7区土壙墓平面図・断面図
および土702・P709出土土器実測図…… 476
第120図 8・9区トレンチ位置図…… 479
第121図 トレンチ土層断面図…… 480
第122図 トレンチ出土の遺物…… 482
第123図 トレンチ出土の遺物…… 483
第124図 8区遺構図…… 485
第125図 801 …… 486
第126図 801 出土の遺物…… 487
第127図 802 …… 488
第128図 802 出土の遺物…… 489
第129図 803 ・805・807…… 490
第130図 808 …… 491
第131図 808 出土の遺物…… 492
第132図 809 と出土遺物…… 493
第133図 815 出土の遺物…… 494
第134図 焼土と遺物出土状態…… 495
第135図 Aの遺物…… 496
第136図 Bの遺物…… 497
第137図 D・Eの遺物…… 498
第138図 縄文時代の遺物…… 499
第139図 縄文時代の遺物…… 500
第140図 縄文時代の遺物…… 501
第141図 弥生式土器…… 502
第142図 土師器…… 503
第143図 須恵器…… 504
第144図 石器・鉄器・その他の遺物…… 505
第145図 9区遺構図…… 507
第146図 9区トレンチ土層断面と9区の遺物…… 508

図　版　目　次

1－1　桃山遺跡遠望（南上空から）（撮影　仁木英輔氏）…… 511
1－2　遺跡遠望（東上空から）（撮影　仁木氏）…… 511
2－1　T 1 発掘風景（北東から）…… 512
2－2　P 110 土器出土状態（北から）…… 512
3　1区ピット出土土器…… 513
4－1　2区遺構検出状況全景（西より）…… 514
4－2　2区遺構掘り上げ全景（西より）…… 514
5－1　H 201・建物・ピット・不明溝状遺構・柱穴検出状況(南より)…… 515
5－2　H 201・建物・ピット・柱穴掘り上げ状況（南より）…… 515
6－1　住居址（H 202）・柱穴（南より）…… 516
6－2　住居址（H 203）全景（東より）…… 516
7－1　住居址（H 203）掘り上げ（東より）…… 517
7－2　H 203 内遺物出土状態…… 517
8－1　P 203（南より）…… 518
8－2　P 203 内出土遺物近影…… 518
9－1　P 205 内遺物出土状態（南より）…… 519
9－2　南北トレンチ北端土層断面（南より）…… 519
10　H 203・H 201（P－1）・南北トレンチ（2層）・黒色有機土層（3層）出土遺物…… 520
11　P 203 出土遺物…… 521
12　P 205 出土遺物…… 522
13　2区出土遺物…… 523
14－1　H 301・H 302 掘り上げ状態（東から）…… 524
14－2　H 302 鉄斧出土状態（西から）…… 524
15－1　H 305・H306・H307掘り上げ状態（北西から）…… 525
15－2　P 311 炭化米検出状態（東から）…… 525
16－1　火 301 石積み状態（西から）…… 526
16－2　火 301 積み石を取り除いた状態（西から）…… 526
17－1　火 301 蔵骨器の蓋（緑釉皿）を開いた状態（西から）…… 527
17－2　火 301 蔵骨器埋納状態断面（西から）…… 527
18－1　土 303 掘り上げ状態（東から）…… 528
18－2　土 301 人骨および鉄器出土状態（南から）…… 528

19—1　土302人骨および土器出土状態（南から）…… 529
19—2　土309人骨および土器出土状態（部分）（南から）…… 529
20—1　建物301掘り上げ状態（東から）…… 530
20—2　土304石蓋の状態（南から）…… 530
21　3区各遺構出土土器・鉄器…… 531
22　火301蔵骨器および副葬品…… 532
23　桃山1号古墳（調査前）…… 533
24　桃山1号古墳（調査後）…… 534
25—1　C—451古墳主体部…… 535
25—2　C—451古墳遺物出土状況…… 535
26—1　C—452古墳主体部（手前はH—404出土遺物）…… 536
26—2　C—452古墳遺物出土状況…… 536
27　C—452古墳出土遺物…… 537
28—1　C—451古墳出土遺物…… 538
28—2　C—453墳墓主体部…… 538
29—1　401号住居址…… 539
29—2　401号住居址出土遺物…… 539
30—1　403号住居址…… 540
30—2　P—487出土遺物…… 540
30—3　P—481出土遺物…… 540
31—1　404号住居址…… 541
31—2　406号住居址…… 541
32—1　H—403・H—405・H—407・P—475・P—476…… 542
32—2　第2・3地点全景…… 542
33—1　P—481遠景…… 543
33—2　P—481近景…… 543
34—1　P—484…… 544
34—2　P—479…… 544
35—1　土601人骨出土状態（南から）…… 545
35—2　土601掘り上げ状態（北から）…… 545
36—1　建物602掘り上げ状態（北から）…… 546
36—2　土604人骨および土器出土状態（南から）…… 546
37—1　7区全景（西から）…… 547
37—2　H701掘り上げ状態（南東から）…… 547

38　5～7区出土遺物 …… 548
39　8区縄文時代の遺物 …… 549
40　8・9区出土遺物 …… 550

第一章　遺跡の立地

桃山遺跡は，現在の行政区に従えば岡山県上房郡北房町大字呰部（アザイ）字桃山に属する。古くは備中国阿賀郡呰部村に属していた。

石灰岩台地である豊永台地の麓を南に流れる備中川は，北流してきた中津井川と呰部・上水田（カミミズタ）の境で合流して東折し，東へ流れて真庭郡落合町で旭川本流に合流する。

呰部・上水田の水田に挟まれたところに城山があり，この城山の山麓面に桃山遺跡は存在している。城山の南山麓面は崖錐堆積物によって構成されていて排水性に富み，古くから桃畑として名高く，桃山の地名もこれに因んだものと思われる。現在はその多くが桑畑となっている。

この呰部は備中川を通じて旭川流域とつながり，南の多和山峠を越えて南下すると高梁に通じ，阿口越えで国鉄姫新線沿いに，豊永台地越えで新見に通ずる交通の要の一つの地となっている。

呰部から上水田にかけての備中川河畔にはかなり広い水田地帯が開け，この水田を生活の基盤とした多くの遺跡が群集している。

縄文時代以前の遺跡は，現在までのところ確認されていないが，北房町の西半分は石灰岩地帯であり，今後，洞窟遺跡等が発見される可能性もある。

縄文時代の遺跡としては，縦貫道建設に伴って発掘調査した谷尻遺跡・空古墳（註１），備中平（ビッチュクヒラ）遺跡（本報告書別項参照）および桃山遺跡の４カ所が確認されているのみであるが，その数は今後増すものと思われる。

谷尻遺跡では，縄文早期から晩期までの遺物が出土し，また晩期の遺構を調査された。

空古墳では，縄文早期の土器片が数片ではあるが，古墳の封土の盛土中から出土している。

備中平遺跡では，縄文前期の遺物を出した遺構が調査された。

桃山遺跡については，縄文前・後期の遺物が出土している。これについては後述の「調査の概要」の項を参照されたい。

獲物を追って移動しながら北房の地に足を踏み入れていた縄文人は，晩期になるとやがて農耕への道を進んでいくが，農耕を行なったと考える手掛りは谷尻遺跡で確認されている。

弥生時代の前期の遺跡はほとんど知られていないが，中期になると備中川・中津川流域の微高地上あるいは山麓低丘陵上で知られている。三本松遺跡や旧上水田中学校跡など。後期になるとその数も増大してくる。昭和50年３月現在で確認されている遺跡は15カ所を数える。

古墳時代になると，上水田・呰部・中津井には，かなりの数の人々が生活したと考えられる。前期古墳として，荒木城御崎１号墳（全長60m）・立１号墳（全長59m）・小田鼻古墳（全長50m）（以上前方後円墳），荒木城御崎２号墳（全長40m，前方後方墳）などが知られている。後期になると，上水田・呰部・中津井のそれぞれの地に群集墳としては存在し，中で

も上定1号墳や桃山1号墳は石室の長さが10mにおよぶ横穴式石室を持ち，この地方では大型の部類に属するものである。

白鳳期になると，赤茂に英賀(アガ)寺が建立された。この寺の存続期間は不明であるが，現在のところ白鳳期の瓦のみ畦畔から出土しているので比較的短期間のうちに廃絶したものであろう。塔心礎は抜き取られ現在は大阪にある由である。備中北半部において，奈良・平安時代の寺院址はこの英賀廃寺のみであり，県内全域を見ても寺域と考えられる範囲内に現在の建築物の存在しない寺院址も英賀廃寺のみになっている。現在，寺域と考えられる範囲(一町×一町半？)内はすべて水田であるが，現状のまま保存されることを強く望むものである。

奈良時代～平安時代の火葬墓については桃山遺跡で調査した。奈良時代の蔵骨器は，桃山1号墳の横穴式石室の一部に埋納されたのであり，平安時代のもの（10世紀）は，蔵骨器の蓋に緑釉陶器が利用され，鉄釘を副葬し，石積みの上部施設をもつものである。特に後者は，被葬者の性格をかなり限定して考えることができる。

平安～室町時代にかけての建物等は，備中平遺跡・谷尻遺跡・桃山遺跡・植木(エキ)遺跡などで確認された。

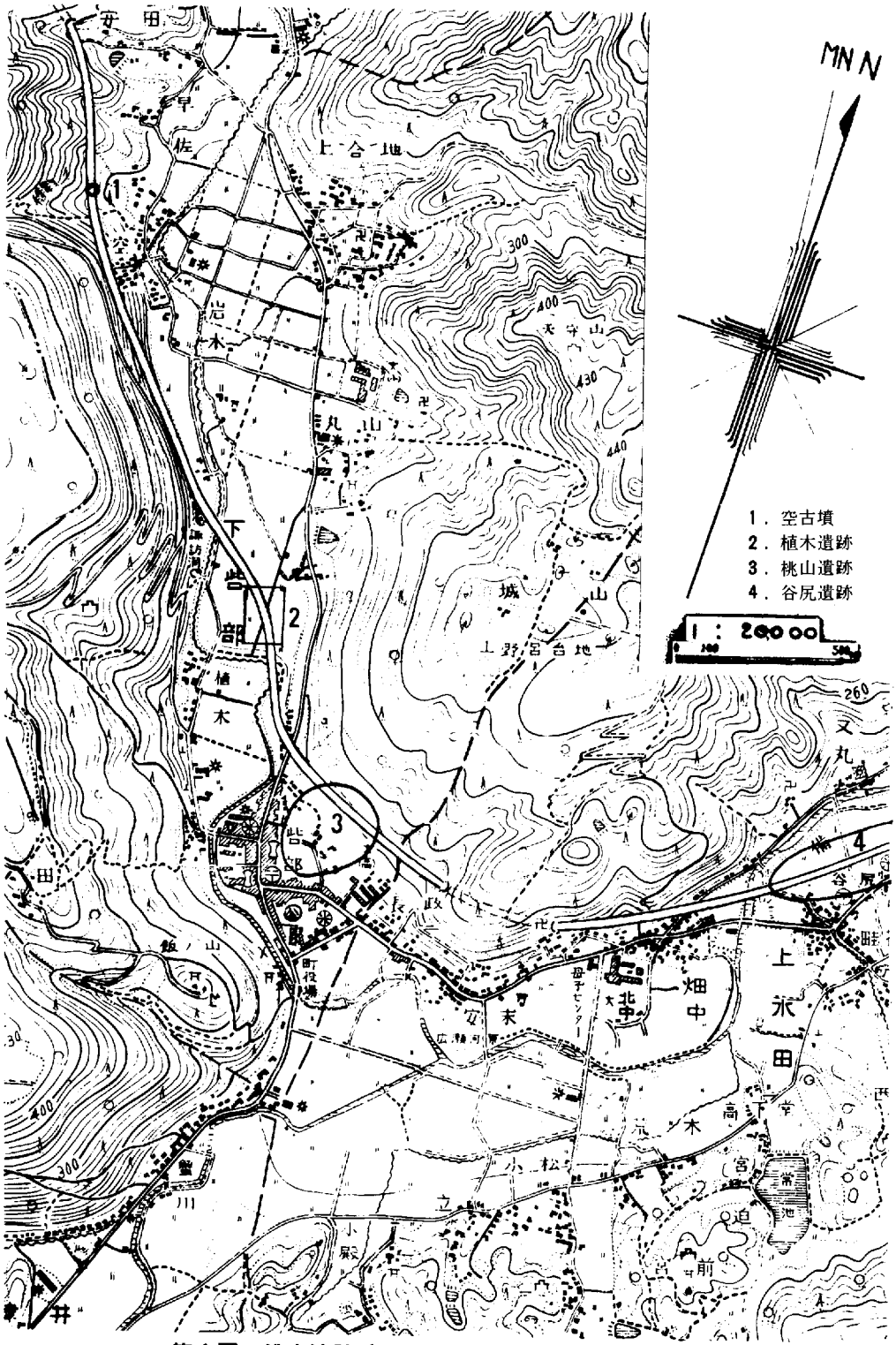
戦国の世になると北房の地もその荒波をうけていくつかの武将の興亡も見られ，その足跡は城址という形で現存している。才田城址・丸山城址・畦花城址・植木城址など，城址・陣址・砦址は10ケ所以上も残存している。また，植木遺跡では武将の居館址と考えられる建物群が確認された（註2）。

このように北房の地は，古くから開けた場所の一つとして知られ，多くの先人達がその足跡を残した場所である（註3）。

註1　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』　岡山県教育委員会　1976年。

註2　註1に同じ。

註3　『岡山県遺跡地図（第二分冊）』　岡山県教育委員会　1974年。



第1図　桃山遺跡付近地形図(北房町教育委員会提供)

第二章　調　査　の　経　過

第一節　調査に至るまでの経過

中国縦貫自動車道（以下縦貫道という）が岡山県北部を通過することとなり，日本道路公団（以下公団という）は岡山県教育委員会（以下県教委という）に対して，巾１kmの縦貫道予定路線図を示した。これを受けて，県教委は，上房郡北房町教育委員会を中心に，予定路線内の埋蔵文化財の分布調査を昭和46年度に実施した。この分布調査で，北房町内の遺跡として，谷尻遺跡・植木遺跡・空古墳（共に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』に既報）と共に大字呰部字桃山の地に４基の古墳が存在すると報告された。

その後，昭和47年５月に，48年度以降の調査契約の資料を明確にするため，公団作成の路線図（一部未買収地を除いて用地巾の記入されたもの）をもとに，県教委文化課職員の手によって用地内の埋蔵文化財の確認を行なった。この時，桃山には２基の封土の流失した横穴式石室（１基は用地外，他の１基の半分が用地内に存在する）と，丹塗り土器を含む弥生式土器片および土師器片の散布が見られ，かなり広い遺跡の存在が予想された。桃山遺跡は，遺物の散布状態・地形などから見て，東は東にある谷川，北は横穴式石室，西は古墳の西の小さな尾根まで，南は水田まで，東西250ｍ（水田近くでは１km），南北400ｍのひろがりをもつ一大遺跡であると予想され，縦貫道はその内の北端をかすめて通ることになっている。

昭和48年度の発掘調査契約が公団と県教委との間で取りかわされ，桃山遺跡は48年７月から48年12月まで調査を行なう計画がつくられた。縦貫道建設用地に含まれる遺跡の範囲は，巾120ｍ・延長250ｍである。

発掘調査開始にさきだって，48年５月に縦貫道関係の調査員全員で，48年度調査対象になっている各遺跡を確認に行った。この時すでに桃山の発掘調査予定範囲内にあった墓地を移転するために，ブルドーザーで一部削平されていて自動車の通れる道がつくられていた。この削平部分にかなりの弥生式土器・土師器が散布していた。密度の高い遺跡であることが予想された。

第二節　調　査　の　経　過

昭和48年７月17日に一次調査（トレンチ調査）を開始した。調査員１名・作業員４名であった。調査対象範囲の現在の地形（畑として利用されており段状となっている）に合わせてトレンチを設定していくこととした。しかし，７月18日から21日まで広沢測量Ｋ．Ｋ．の手によって，道路中心杭（ＳＴＡ479＋00）を中心にして磁北方向を基線とし，東西南北それぞれの方向に20ｍ間隔のグリッドが設定された。以後，東西方向のトレンチは東西基線の北側へ，南北

方向のトレンチは南北基線の東側へ設定していった。巾２ｍ延長約700ｍ，28本のトレンチを設定した。

トレンチ調査の結果，遺跡の範囲は，南北では用地巾（120ｍ）いっぱいに，東西は東の谷から西へ220ｍの地点まで存在することが判明した。遺物の範囲は，縄文時代後期・弥生時代中～後期・古墳時代・平安時代・近世と多岐にわたっている。

一次調査（トレンチ調査）は，県教委文化課田仲満雄が担当して９月26日に終了させた。

二次調査は，昭和49年４月９日に田仲が担当して開始した。トレンチ調査の結果，遺跡の範囲は東西延長220ｍ・南北は用地巾いっぱいに存在することが判明しており，トレンチの所見，地形から判断して発掘対象地を１～８区（後に８区の一部を９区とした）に分けて調査することとした。

１区から調査に着手した。１区では12のピットを検出し，そのうちの２つ（P104・P110）には完形の土器が入っていた。

引き続いて２区の表土剥ぎを開始したが，公団から工事の急ぐ７・８区の調査を先にやってほしいという申入れがあった。これを受けて２区の調査を５月８日に中断した。

５月９日から７区の表土剥ぎを始めた。表土層除去後，古墳時代後期（６世紀後半）の遺構群（住居址６・土壙墓６・ピット９）を検出した。これらの遺構の間には若干切りあっているものもあるが，出土遺物から判断して非常に短期間の切り合い関係を示している。

５月24日から８区の調査を始め，表土剥ぎが８月３日までかかる。表土層を除去後８基の鍛冶炉（平安時代？）と住居址２を検出した。８月１日より竹田勝（昭和50年３月１日文化課職員に採用）が調査に加わり，８区調査を分担した。以後昭和50年４月７日までに，住居址３（弥生時代後期）・建物１（弥生時代後期），縄文時代後期の包含層を確認した。

８月19日から５区の調査を始めた。表土除去後に弥生時代終末期のピット５個を検出した。

９月17日からは，５区の調査と平行して６区の調査を開始した。６区の遺構残存状態は悪く，中世土壙墓３，弥生時代後期の建物１等を検出した。

10月１日文化課職員二宮治夫が調査に加わる。

以後，２区を二宮が，８・９区を竹田が，３～６区を田仲が担当することとした。

６区は，表土層が厚く，ユンボを利用して除去した。６区全体では，弥生時代後期の建物１，古墳時代後期の建物１，平安時代初めの土壙墓１，室町時代の土壙墓３を調査した。

２区の調査は昭和49年10月30日から再開し，弥生時代終末期の住居址３，ピット６，建物１を調査した。なお，昭和50年１月から二宮は津山収蔵庫で報告書作成にあたることになったが，毎土～月曜日には桃山遺跡に来て２区の調査を続けた。

３区の調査を12月７日に開始した。１・２層を除去したのち，方形の石積み遺構１・平安時代後期～室町時代の土壙墓９・鍛冶炉６を検出した。方形の石積み遺構はその後の調査で平安時代（10世紀）の火葬墓の上部施設と判明した（以後，火葬墓301と呼ぶ）。この火葬墓の構築を順に記すと次のようである。径30㎝深さ60㎝のピットを掘る。このピットに延喜通寶を入

れ，提瓶（土師器）を置き，その上に蔵骨器（須恵器）を置き，この蔵骨器の外側に釘約30本・刀子２本を副葬し，蔵骨器は２枚の緑釉皿を裏返して蓋とし，ピットとこれら埋納物との空間には木炭をつめている。炭をつめたのちに，緑釉鉢を割ってばらまいている。このピットに蓋をするように板石をおき，この板石を取り囲むように二重の石囲いを行ない，その上に小礫を積んでいた。平安時代（10世紀）の埋葬形態をはっきり示すものであり，３枚の緑釉陶器・３枚の延喜通寶・約30本の釘などから被葬者の性格をかなり明確に出来る資料である。

平安時代後期～室町時代の９基の土壙墓のうち４基には人骨が残っており，それぞれ須恵器（壷），土師器（鉢），刀子，土師器（皿）をもっており，性格のちがいを示す材料といえよう。

３区では，さらに３層除去後，弥生時代終末期の住居址７，ピット12を調査した。H 301は５回の建て増しを行ない，H302は１回建て替えている。P310はH 302より古いもので，中には炭化米が残っていた。

９区は昭和50年１月27日から３月27日まで調査した。ここの大部分は表土層下は岩盤であるが，その下端部に版築遺構の一部（巾20m・奥行0.5m）が残存していた。版築の大部分は後世に削り取られていて，全様は不明である。版築をおおう土層から鎌倉時代の遺物が検出された。

昭和50年４日１日から，二宮・竹田は新見以西の調査に行き，かわって文化課職員福田正継が加わり，福田は４区を担当した。

４区には，封土の流出した横穴式石室が用地内に半分存在し，残り半分は用地外にある。この用地内に含まれる部分については，当初は削り取って消失する計画であったが，縦貫道埋蔵文化財保護対策委員会からの保存方の申し入れを受けて，県教委と公団と協議した結果，道路に関する計画を一部設計変更して現状のまま保存されることになった。このため，横穴式石室については現状の測量にとどめ，石室の発掘は行なわずに保存することとした。用地内の天井石周辺を清掃中に，天井石直下から奈良時代の火葬骨を入れた蔵骨器（須恵器）と副葬と考えられる坏（須恵器）が出土した。４区の１～３層を除去後，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居址10軒・貯蔵穴と考えられるピット７個を確認した。

４区の東半分・６区の一部・７区の古墳時代後期の遺構面よりも下位の層・８区の一部を未調査のまま昭和50年５月30日に道路工事側に明け渡した。

日　誌　抄

（一次調査）

昭和48年７月17日　調査を開始する。トレンチ設定予定地の草刈を行なう。

７月18～21日　広沢測量K.K.の手によって，公団の打った道路中心杭ＳＴＡ479を基点に一辺20mのグリッドを設定する。

７月18～28日　トレンチ１を掘り下げる。第２層下面において箱式石棺状の遺構を検出（本遺

構は，二次調査で精査した結果，平安時代中ごろの火葬墓の上部施設の一部であった）。

7月28～31日　T２掘り下げ。表土層下に弥生時代後期の土器を包含する層があり，この包含層の下の層から縄文時代後期の土器片７片(同一個体)が出土した。

7月28日～８月２日　T３掘り下げ。弥生時代後期の土器を含むピットを検出した。

7月23日　T４掘り下げ。地表下10～15cmで地山（岩盤）となり，遺物はみられなかった。

8月２～４日　T５掘り下げ。表土層下に弥生時代後期の包含層がある。

8月２～３日　T６掘り下げ。トレンチの北半分の表土層下は岩盤である。表土層の中には近世陶磁器片が含まれていた。

8月３日　T７掘り下げ。表土の下は岩盤であり，遺物は見られなかった。

8月３～４日　T８掘り下げ。若干の柱穴を検出。

8月８～９日　T９・10掘り下げ。T２出土の縄文式土器のひろがりを調べるために，T２をはさんでT２に直交するトレンチを入れたが，両トレンチでは縄文式土器は出土しなかった。

8月８～17日　T11・12を掘り下げる。径0.7～1.0mのピット数個を検出する。

8月17～21日　T14・15掘り下げ。ピット状遺構を検出する。

8月21～22日・９月14～20日　T16掘り下げ。表土層直下に古墳時代後期（６世紀後半)の遺物を多量に含む包含層がある。

8月22～28日　T17掘り下げ。遺物は出土しなかった。

8月25日～９月11日　T18・19掘り下げ。T18・19の交わる部分で弥生時代後期の住居址を検出した。T19の北半分には近世墓地が存在する。

8月31日～９月５日　T20掘り下げ。このトレンチでは数個の近世墓を検出した。

９月５～７日　T21～25の掘り下げを行なうが，遺構・遺物は見られなかった。

９月８日～14日　T26掘り下げ。平安時代の土師器が数片出土したのみである。

９月15～21日　T27掘り下げ。古墳時代後期から平安時代にかけての土器片に混ざって鉄鏃が出土した。

９月21～25日　T13・28掘り下げ。遺物はほとんど見られなかった。

９月26日　器材を撤収して一次調査を終る。

（二次調査）

昭和49年４月９日に二次調査を始める。以下，発掘区毎にまとめた。

１区

昭和49年18～20日　表土剥ぎを行なう。

４月23～30日　遺構の検出を行なう。弥生時代終末期のピット12個，時期不明の柱穴多数を検出した。

５月１～２日　遺構の実測・遺物の取り上げを行なう。

２区

昭和49年４月10～18日・５月１～８日　表土剥ぎを行なう。その後，この区の調査を一時中断する。

10月31日～11月30日　表土層の下の層（３層に相当）の掘り下げを行なう。

11月８～27日　一部遺構を検出する。

11月29～30日　一部の遺構の掘り下げを行なう。
12月１～６日　３層相当層の掘り下げを行なう。
12月６～28日　遺構の掘り下げを行なう。
昭和50年１月12～24日　遺構の掘り下げを行なう。
２月６～10日　３層掘り下げを行なう。
２月11～15日　住居址（Ｈ２０３）の掘り下げを行なう。
２月16日・３月３～13・18～22日　Ｈ２０３床面削り出しを行なう。
２月17日　Ｐ２０６の掘り下げを行なう。炭化米を検出する。
２月23～24日・３月15～17日　Ｈ２０３の柱穴・溝掘り下げ。
３月23～25日　Ｈ２０３実測。
４月９～12日　Ｈ２０３の柱穴掘り下げ，補足実測を行なう。

３区

昭和49年12月７・24日　草刈りを行なう。
12月25～28日　南北トレンチ掘り下げを行なう。
昭和50年１月５～７日　南北トレンチ掘り下げを行なう。
１月10日～２月５日　１・２層掘り下げ。
１月26日　方形の石積み遺構を検出する。
１月27～28日　石積み遺構実測。
２月６～11日　２層掘り下げ。遺構検出（平安時代）。
２月12日　２層除去後の遺構実測。
２月13～15日　３層掘り下げ。
２月18日～３月28日　３層除去後の遺構検出・遺構掘り下げおよび実測を行なう（弥生時代終末期）。
３月６日　方形石積み遺構の下に，緑釉皿を蓋とする蔵骨器（須恵器）が埋納してあることが確認された（火３０１）。方形石積み遺構はこの火葬墓に伴う上部施設であったと判明。
３月９日　火３０１の蔵骨器を入れたピット内より３枚の延喜通寶が出土。
４月１～７日　３区東半分の１・２層掘り下げを行なう。
４月９～19日　遺構検出・遺構掘り下げ・実測を行なう。
４月26～30日　３層を掘り下げる。
５月６～８日　遺構検出・掘り下げ・実測（弥生後期）を行なう。
５月30日　補足調査を行なう。

４区

昭和49年12月24日　草刈り。
12月26～28日　南北トレンチ掘り下げ。
昭和50年１月５～７・19～25日　南北トレンチ掘り下げ。
３月８～12日　第２・３トレンチ掘り下げ。
３月13～24日　１・２層掘り下げ。
４月３～９日　横穴式石室付近地形測量。
４月９～19日　３層掘り下げ。
４月18～28日　遺構検出・掘り下げ。
４月30日～５月１日　４区の一部の１・２層をユンボにて除去する。
５月２～８日　３層掘り下げ。
５月９～14日　遺構検出・遺構掘り下げ。
５月15～30日　実測。

５区

昭和49年８月19日　草刈り。
８月20日～９月４日　東半分の１・２層除去（３層は存在しない）。

9月5日　東半分の遺構検出(遺構なし)。
9月5～14日　西半分表土剥ぎ（2・3層なし）。
9月14～17日　遺構検出（弥生終末期）。
10月10～11日　遺構掘り下げ。
10月11～15日　トレンチ掘り下げ。
12月16日　遺構掘り下げ・実測を行なう。
昭和50年1月15～17日　遺構の掘り下げ・実測を行なう。

6区

昭和49年9月17日～10月7・16～29日　表土剥ぎを行なう。
10月24～25日　一部遺構掘り下げ・実測。
10月30日～11月2日　遺構検出。
11月2～8日　表土剥ぎを行なう。
11月8～13日　一部遺構検出。
11月15日～12月28日　南北トレンチの掘り下げを行なう。
昭和50年1月5～11日　南北トレンチの掘り下げを行なう。
1月21・27・31日～2月3日・11～15日　ユンボにて1・2層除去。
2月6～8日　3層掘り下げ。
2月9～10日　遺構検出。
4月30日・5月1日　3層掘り下げ。
5月10～29日　トレンチ掘り下げ。
5月30日　補足調査。

7区

昭和49年5月9～10日　草刈。
5月10～13日　表土剥ぎ（2層なし）。
5月13～14日　遺構検出（古墳時代後期）
5月14～24日　遺構掘り下げ。
5月23～24日　平面図・断面図作成。
5月12～20日　補足調査。

8区

昭和49年5月24～25日　草刈。
5月27日～8月3日　表土剥ぎ。
8月3～12日　遺構検出。
8月22～24日　一部遺構掘り下げ。
9月2～13日　遺構（H802）掘り下げ。
9月12～13日　K804～K807実測。
9月14・24～27日　H801掘り下げ。
9月13～27日　H802東トレンチ掘り下げ。
9月20～21日　H802実測。
9月27～28日　H801実測。
9月28日～11月18日　東西トレンチ・南北トレンチ・南北トレンチ東拡張区掘り下げ。
10月16～18日　東西・南北トレンチ・拡張区実測。
11月19日～12月1日　a～cトレンチ掘り下げ。
11月28～30日　遺構掘り下げ。
12月3～7日　南北トレンチ東拡張区掘り下げ・実測。
12月8～28日　d～fトレンチ掘り下げ。
昭和50年1月5～7日　d～fトレンチ掘り下げ。
1月10～21・26～27日～2月19日・3月6～19日　南北トレンチ東拡張区の東・陸橋橋脚部分掘り下げ。北橋脚部には縄文後期の包含層がある。
3月24日　遺構実測。
4月3・7日　H803実測。

9区

昭和50年1月27～28日　地形測量。
2月15日～3月5日　表土剥ぎ。版築遺構の一部が残存していることを確認した。

3月25～27日　実測。

昭和50年5月30日　補足調査を行なって発掘調査を終了する。

報告書作成について

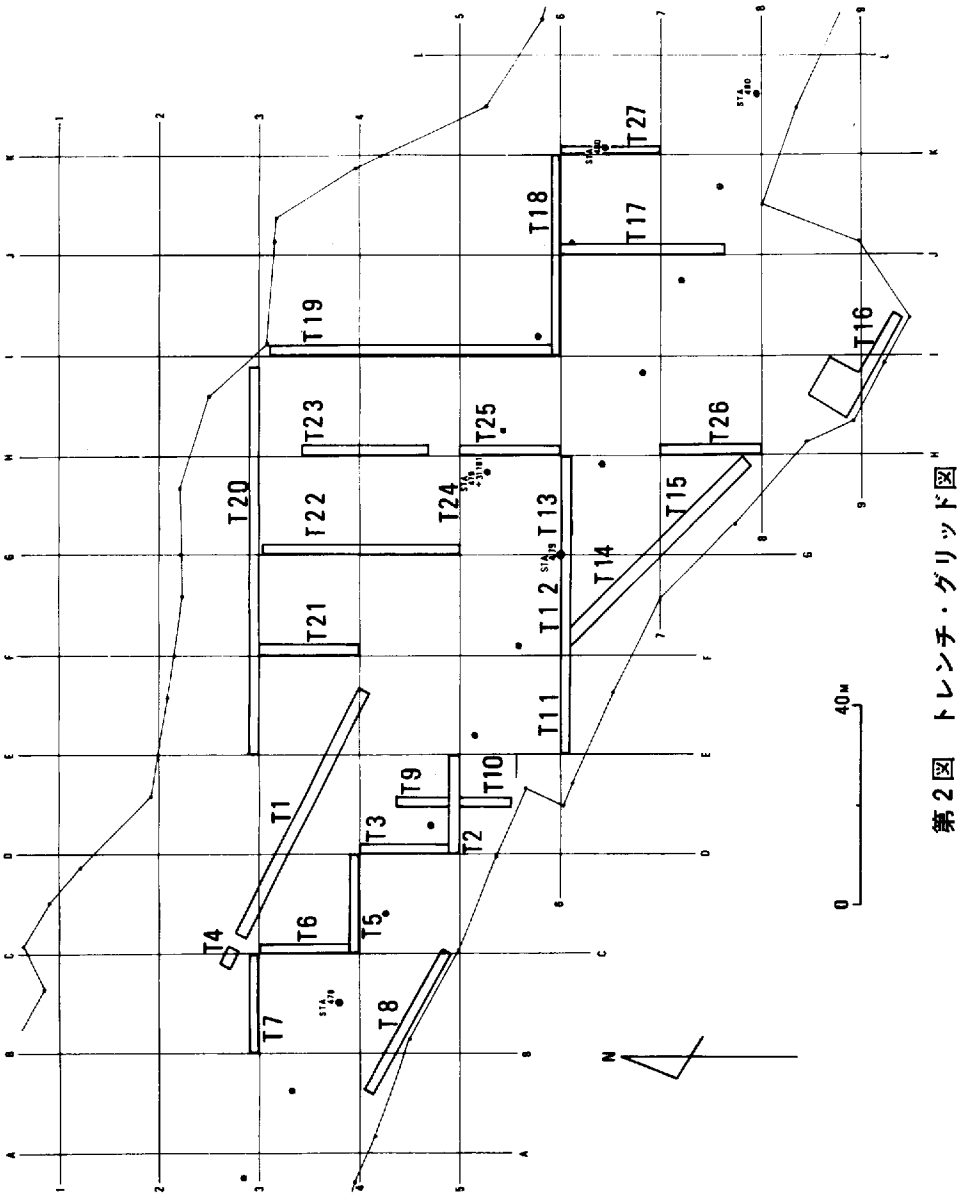
発掘調査を担当した4名の調査員がそれぞれ分担した区（二宮－2区，竹田－8・9区，福田－4区，田仲－1・3・5～7区）について，整理・執筆することにした。遺物の整理・執筆は，全調査員が同時に取りかかるべきであるが，新見以西の縦貫道建設工事との絡みもあり，全調査員が同時に整理に入ることができなかった。二宮・竹田は昭和50年4月1日から新見以西の遺跡の調査を行ない，福田は桃山遺跡終了後引き続いて谷尻遺跡の調査に加わり昭和50年7月からは新見以西の発掘に加わった。田仲は昭和50年6月から9月まで津山収蔵庫で整理を行ない（この内の1カ月間は北房町空古墳の発掘調査に従事し，1カ月間は空古墳の整理に費した），10月以後新見以西の発掘調査に加わった。その後，竹田（昭49・12・1～昭50・1・15）・二宮（昭50・1・1～3・31宮の前遺跡の整理と併行して）は，津山収蔵庫で桃山遺跡の整理を行なった。整理期間がゼロ（福田）～2カ月という短期間では遺物の実測さえ充分に行なえないものであり，雨の日や夜間に報告書作成にあたらざるを得なかった。

このため，実測もれあるいは写真撮影もれの遺物が多くあり，それらはいずれも津山収蔵庫の棚で寝むったままになっている（昭51年3月31日現在）。また，本報文も発掘調査と平行して執筆したために充分検討を行なうことができないままに報告書に載せられることになってしまった。残りの遺物等について今後検討の加えられる機会を期待したい。

第三章　トレンチ調査の概要

第一節　トレンチ設定

トレンチ調査開始時点には，まだグリッドは設定されていなかった。そこで，用地内の現地形（畑のために4段の段状地形となっていた）に合わせてトレンチを設定していくことにし，下から3段目の畑にトレンチ1を設定し掘り下げを開始した。T1の掘り下げと平行して，広



第2図　トレンチ・グリッド図

沢測量K.K.の手によって20m角のグリッドが設定された。このグリッドは公団の打った道路中心杭ＳＴＡ479を基点とし，この基点を中心に磁北方向を南北の基線，90°ふった方向を東西の基線として，以後それぞれの方向に20m毎にポイントを決め20m角のグリッドを設定した。グリッド設定後（グリッドの名称は，それぞれのグリッドの北西隅のポイントの名称をあてて呼ぶこととした），原則として東西方向のトレンチはグリッドの南端に，南北方向のトレンチはグリッドの西端に設定していくこととした（図２）。

粗密は若干あるが，トレンチは28条設定し，その延長は約700 mに達した。

第二節　層　　位

トレンチ掘り下げにあたり遺構が出た場合には，そのトレンチ掘り下げを中止することにした。さらにトレンチを掘り下げることは遺構・遺構面を破壊すると考えたからであるが，この考えは判断を誤まったものであり，以後の調査に大きな支障をもたらした。すなわち，複数からなる遺構面の確認ができず，本調査の調査方法・期間を決定する材料を欠くこととなった。

Ｔ４・７およびＴ19の北半分は，表土（厚さ10～15㎝）下は地山（岩盤）である。

ＴＩでは，表土（第１層・厚さ20㎝）下に暗褐色土層（第２層・厚さ40㎝）があり，その下は暗黒褐色土層（第３層・厚さ20～40㎝）がある。第２層と第３層の間に石積み遺構（後に平安時代の火葬墓と判明）が存在する。なお，Ｔ２では第３層の下に無遺物層である黒色土層（第４層）が存在する。この層位関係はほぼ全体のトレンチで確認された。中には２・３層がすでに削平されたもの（Ｔ11・12など）もある。

第三節　遺跡および遺物の範囲

トレンチ調査の結果から，次の点が予想された。

遺跡の範囲

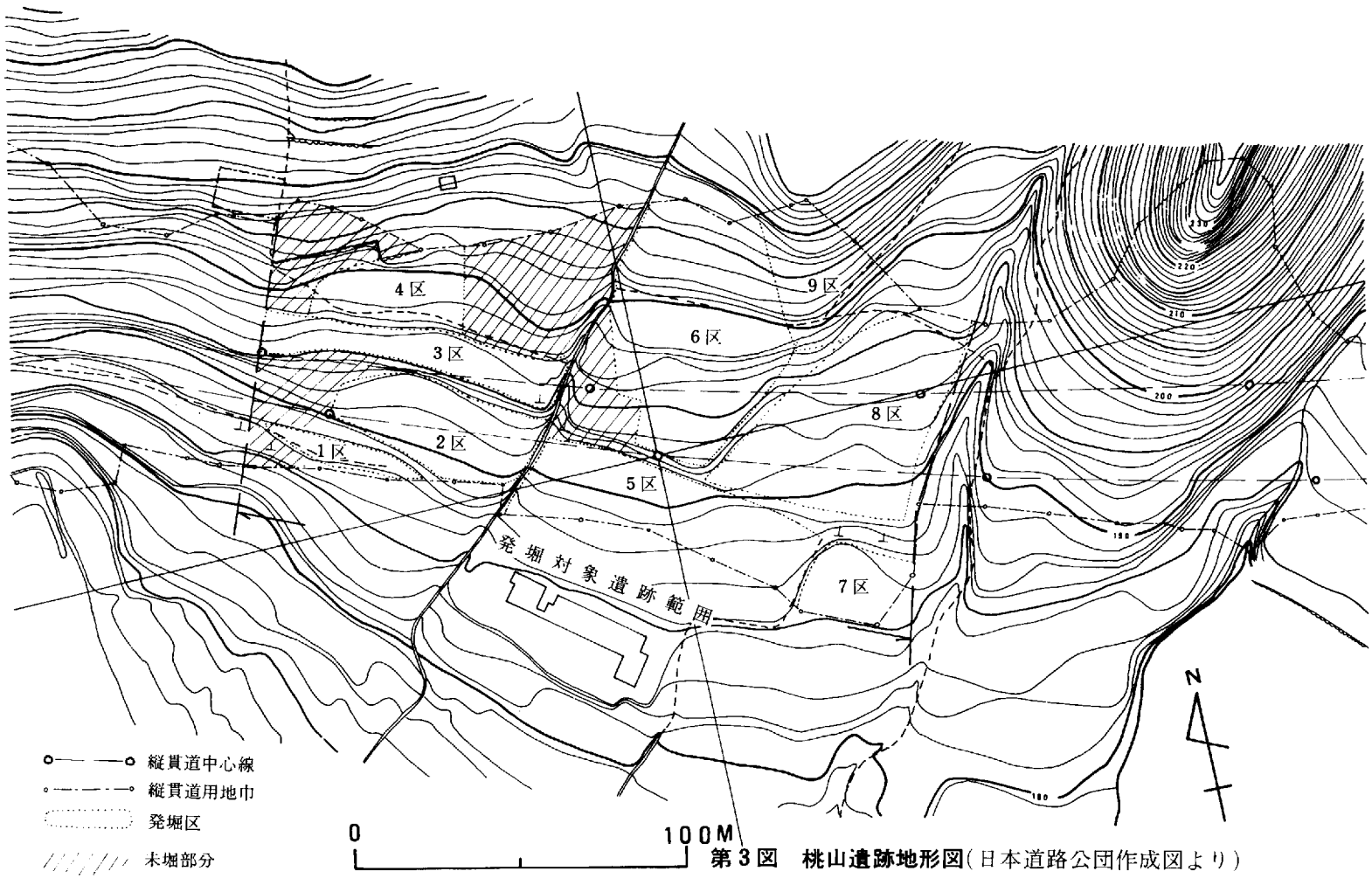
南北限は縦貫道の用地いっぱいであり，東限はＳＴＡ480の所を流れる谷川まで，西限はＳＴＡ478までと判断した。東は谷で区切られ，西は小さな尾根（岩盤が一部露出している）で境となっている。遺跡はさらに南の水田まで拡がっている。

遺物の範囲

少量の縄文時代後期および弥生時代中期の土器片，かなり多量の弥生時代後期・古墳時代初期および古墳時代後期の土器，平安時代の土器，若干の青磁片・近世陶磁器片がみられる。

予想される遺構

遺構として弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址群・古墳時代後期の墳墓および住居址群・平安時代の建物群・近世墓の存在が予想された。

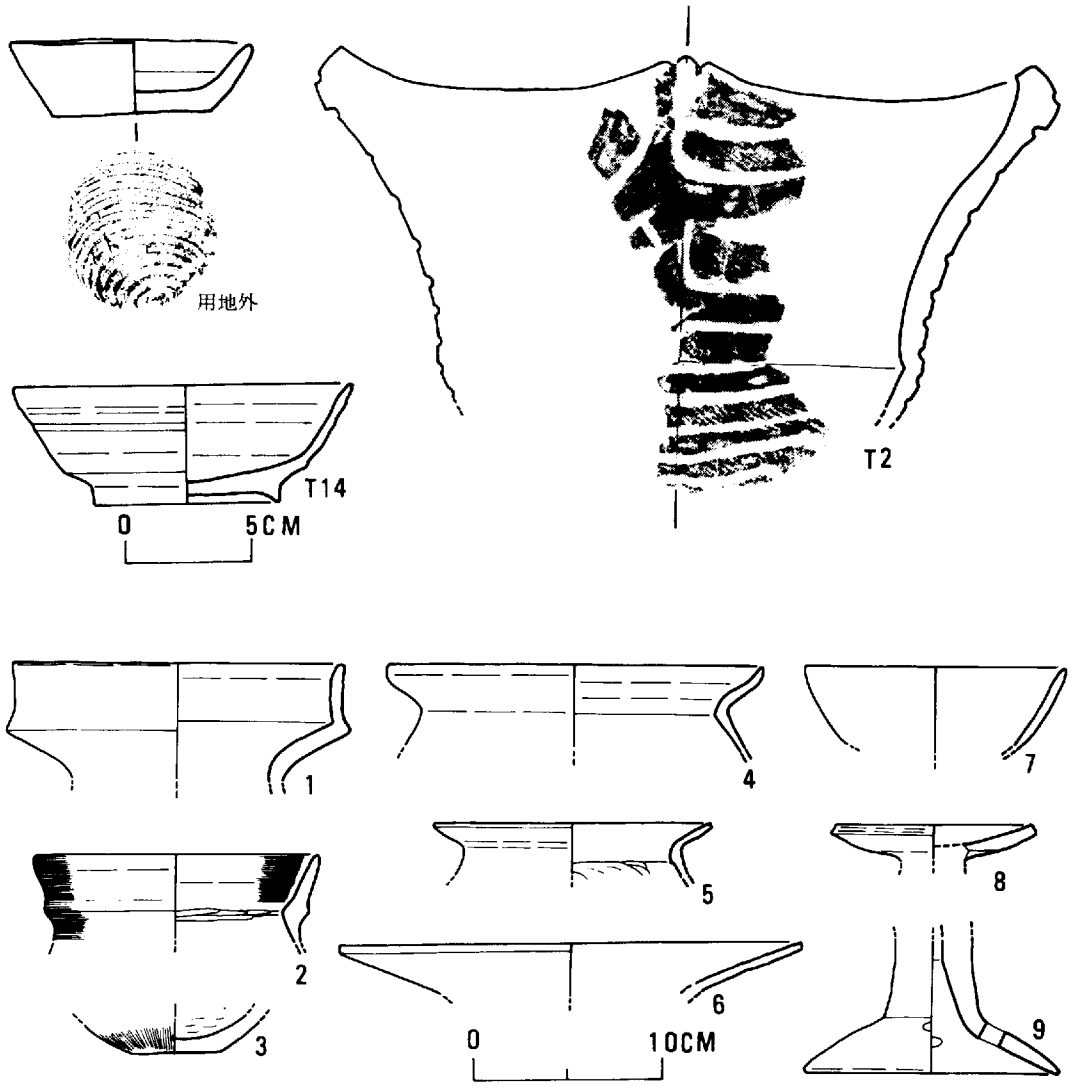


第3図　桃山遺跡地形図(日本道路公団作成図より)

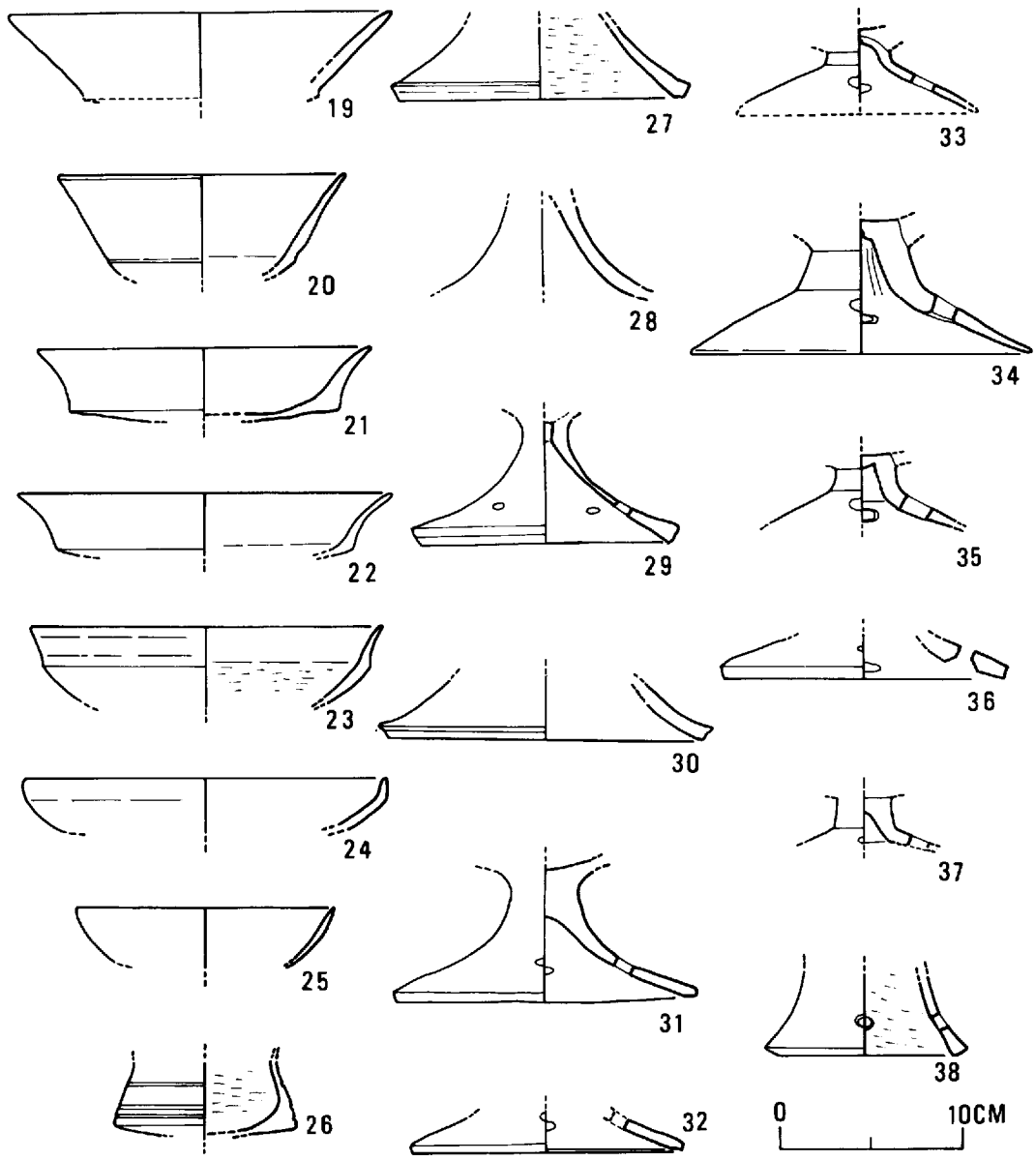
第四章　調　査　の　概　要

第一節　1　区

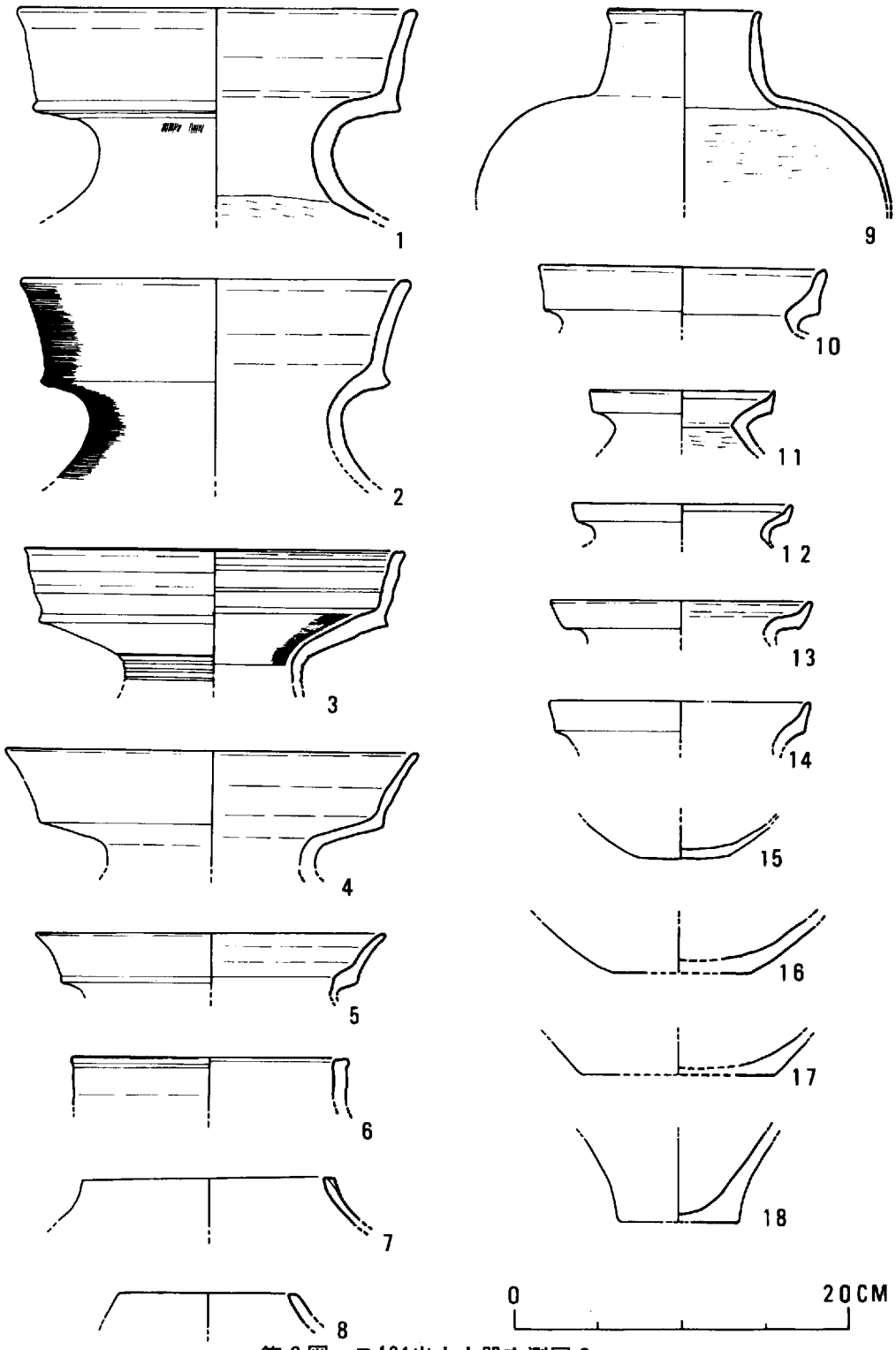
1区は，桃山遺跡の中でもっとも低位の段である。ここでは，厚さ10㎝の表土（耕作土）を除去して12の円形のピットを検出した。12のピットには，いずれも暗黒褐色土が充満しており，9個のピットには土器が入っていた。特にP101・P103・P104・P110は土器溜りと見ら



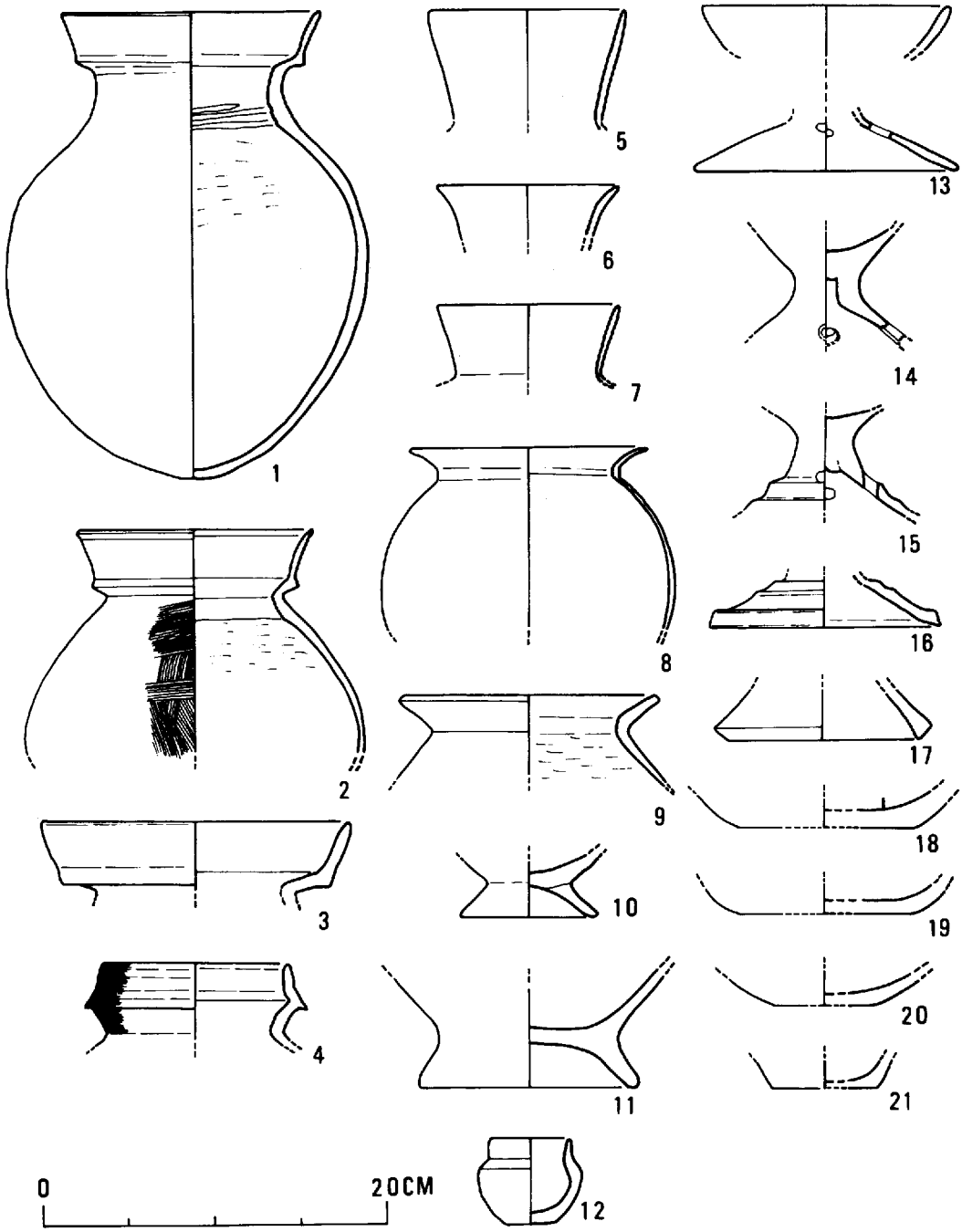
第4図　T2・T14・1区表土層出土土器実測図



第5図　P101出土土器実測図1



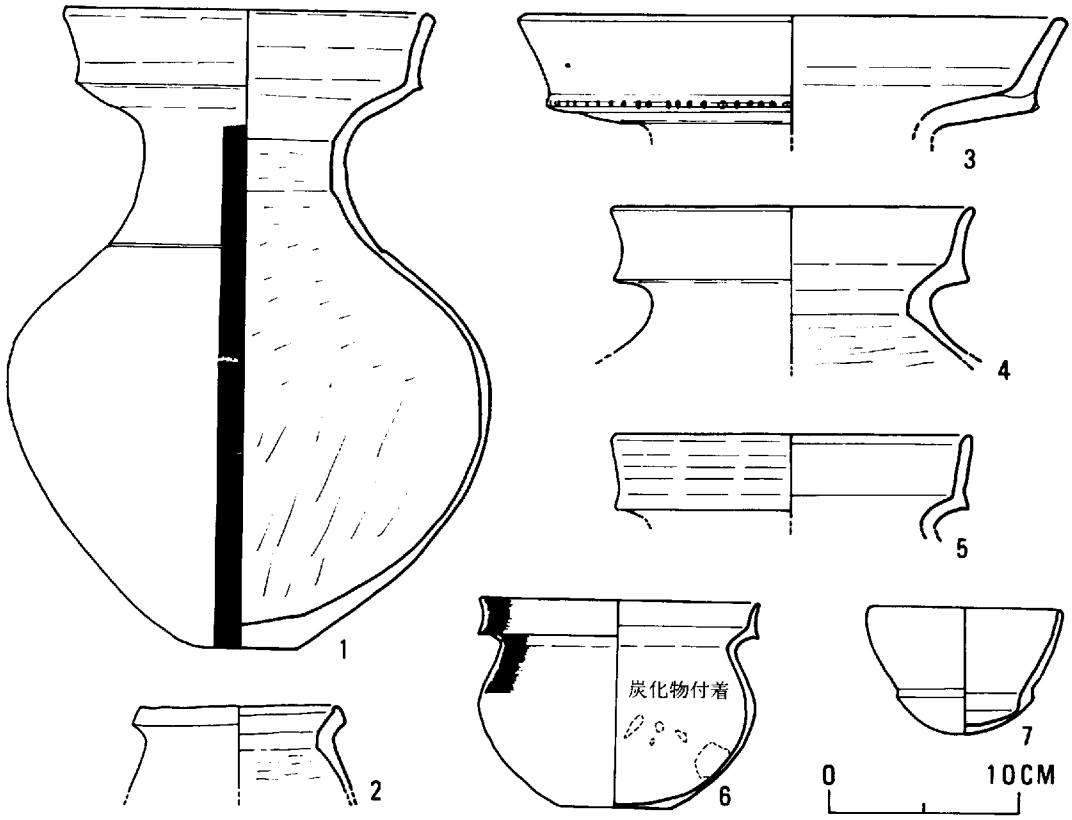
第6図　P101出土土器実測図2



第7図　P104出土土器実測図

れ，P103・P104・P110には完形品が含まれていた。

P101 径0.8 m深さ0.7 mを測る円形プランで底は平坦である。遺物は第5・6図に示すとおりであるが，1～6・9・19～30は丹塗りである。壷形土器・甕形土器はおおむね内面ヘラ削



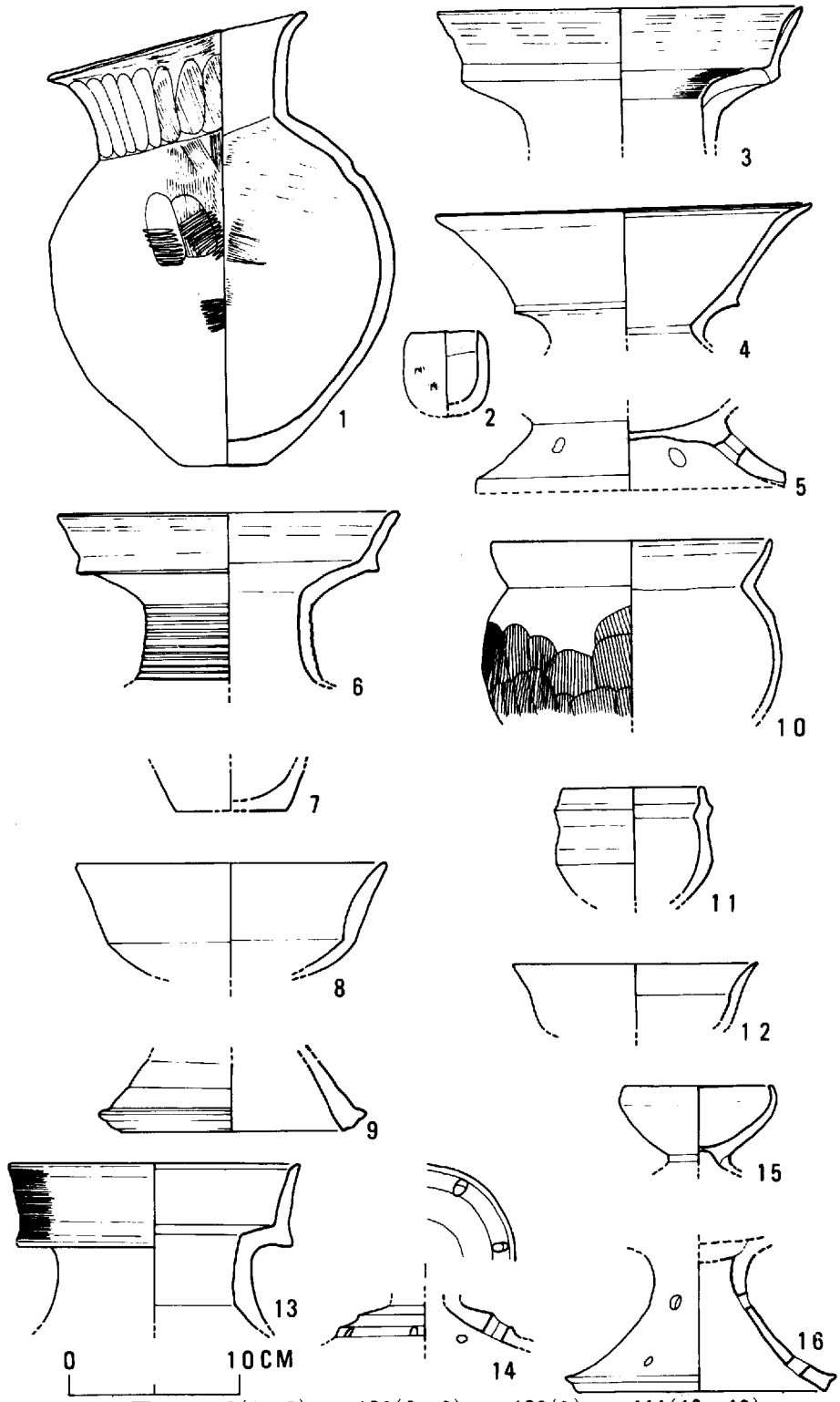
第8図　P110出土土器実測図

りで，それは底部から頸部までほどこされている。1～5は壷形土器の二重口縁であり，4・5は1～3に比し口縁端部が外に拡がっている。7～8は無頸壷，9は直口壷で外面はこまかくヘラで磨かれている。15～16は壷の底部，18は甕の底部で共に平底である。19～25は高坏の坏部で，二重口縁になるもの（19～23）と，椀状になるもの（24・25）とがある。27～37は高坏の脚であり，27～31は長脚で，32～37は短脚である。

P104 径0.6m深さ0.2mの円形のピットである。P101に比しやや後出的な土器が出土した。18～21は平底で，1は丸底となり，10・11には高台がつく。2は胴最大径がかなり下方に位置している。12は手捏ね土器であるが整形は良好である。

P110 径1.1m深さ1.4mの円形のピットである。1は二重口縁の長頸壷形土器で平底を有する。外面は縦方向のハケなで仕上げである。2は小形甕形土器である。3～5は二重口縁で，端部に刻み目がある。6は非常に丁寧に仕上げられた鉢形土器で，内面には炭化物が付着しており，外面にはススが付着している。7は坩形土器で，胴部に比し口縁部の径が大きい。この坩形土器はP110埋没時に混入したものである。

P103 径0.7m深さ0.2mの円形のピットである。壷形土器（1・完形）は，整形がやや粗で口縁部はかなり傾斜している。外面は荒くヘラで削り，櫛で全面をなでたのちに平行文のタタ



第9図　P103(1～5)・P106(6～8)・P109(9)・P111(10～12)・
P112(13・14)・P102(15・16) 出土土器実測図

キを胴下半に施している。2は手捏ね土器である。3～5は丹塗りである。

P106 径0.9ｍ深さ0.3ｍの皿状のピットである。6は口縁立ち上がりがやや外に拡がる二重口縁であり，頸部には11条の凹線をめぐらしている。7は甕の底部（平底）で，8はやや深めの高坏の坏部で内外とも丹塗りである。

P111 径0.5ｍ深さ0.4ｍの円形のピットである。10は甕形土器であり，外面は巾3㎝の櫛で表面を削りとっている。

P112 径1.0ｍ深さ0.3ｍの円形のピットである。13は，口縁立上がり部のみを刷毛で横なで仕上げを行なっている二重口縁長頸壷形土器である。

P102 径0.6ｍ深さ0.7ｍの円形ピットである。15は台付椀形土器で，口縁端部は内彎していて，内外面とも丹塗りである。16は上下2個の円孔を3組穿っている高坏脚部である。

P 104出土土器は，他のピット出土の土器よりも後出的である。

第二節　2 区

1．住 居 址

H201（第12図，図版５－１・２）

２区の北東端近くに位置し，表土層から15～20㎝の深さで検出された。住居址は淡黄褐色土を掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址で，４本柱であっただろう。しかし，現存柱穴は２本である。平面プランは北東辺の一辺 3.5 ｍを測るのみである。また，北東隅に 1.1 ｍ×0.9 ｍの楕円形のピットが付属している。壁帯溝は，このピットの西側で南にまがっている。また，床面には焼土が３カ所確認されている。さらにピット内において，石斧片（図版10－４）が出土している。また，壁帯溝内からは弥生時代後期の壷片が出土している。

H202（第12図・図版６－１）

２区西北端に位置し，住居址は地山（ナメラ）に掘り込まれている。平面形から推定してH 202は竪穴住居址で，胴張りの不整隅丸方形であろう。残存するものは北東辺の壁帯溝のみであり，この壁帯溝は中央より東側で２条の溝が南に延びている。これらの溝から推測して，建て替えがなされたものであろう。出土遺物は認められなかった。

H203（第13・14図，図版６－２，７－１・２）

２区のほぼ中央部の南西端の畑の畦ぎわに位置し，表土下約30㎝の所より検出された竪穴住居址である。この住居址は数回の建て替えがなされている。壁帯溝あるいは壁帯溝と思われるものからみて４回の建替えが行なわれたと考えられる。また，いずれの場合も中央部に付属している中央ピットが数回共用されている。

最後に建てられた住居址は径約 8.6 ｍの円形竪穴住居址である。壁帯溝も北の一部と南西の$\frac{1}{4}$を除いて現存している。９本柱で，柱間は 2.1 ｍ～2.4 ｍとほぼ一定している。また，第13図に示しているピット内からは図版10－１・２・３に示すものが，さらに床面においては図版10－５に示すものが出土している。埋土中には多量の土器片も出土している。その一部は第14図・図版10－１・３～５に示した。遺物からみて住居址は弥生時代後期のものである。

2．袋状ピット（第16図）

P202

全体図（第10図）でH 201 に隣接した位置にある。直径は検出プランが 87 ㎝，底面径 132 ㎝，現存する深さ93㎝でほとんど凹凸はみられない。ピット掘り込み方は第16図に示した通りである。他のピットにくらべてP 202 は第２層に精製された粘土が堆積しており，この精製粘土は土器に使用されているものによく類似している。出土遺物は第17図の１・２である。

P203（図版８－１・２）

トレンチ（第10図）に接した位置にあり，平面プランは不整円形で東西径94㎝・底面径 136

cm・現存する深さ78cmを測る。底面はわずかに凹凸がみられる。さらにP 203からは第18図の遺物が一括出土している。このピットの上層に焼土のブロックがあり，さらにピットが埋まった後にこのピットの上に径20cm・深さ42cmの柱穴が掘り込まれている。この柱穴はピットよりも新しいが，遺物がないため時代は不明である。

P205

H 202とH 203の間に存在するピットであり，径1.13mと1.1 mで底面はわずかに凹凸がみられる。図版9－1にみられるように下層で遺物がみられた（第17図3～10）。P 205はわずかに上部が狭くなっていくのであろうが削られていて不明である。

P206

H 203の近くに存在し，短径0.9 m長径1.1 mの楕円形を呈しているピットである。このピット内出土の遺物は少量であるが，最下層（第16図の土層10）において炭化米が確認された。出土した炭化米から推定して明らかに食糧の貯蔵のため造られたものである。さらに同様のピットが3区においても確認されている。出土遺物は9層内からである。しかし，この9層の土質は遺構検出面の土質と類似している。

ピットには多少のちがいはあるがいずれも袋状を呈していて，貯蔵を目的としたものと思われる。時代は共に弥生時代後期に属するものであろう。

3．建　物　址

建物201（第19図，図版5－1・2）

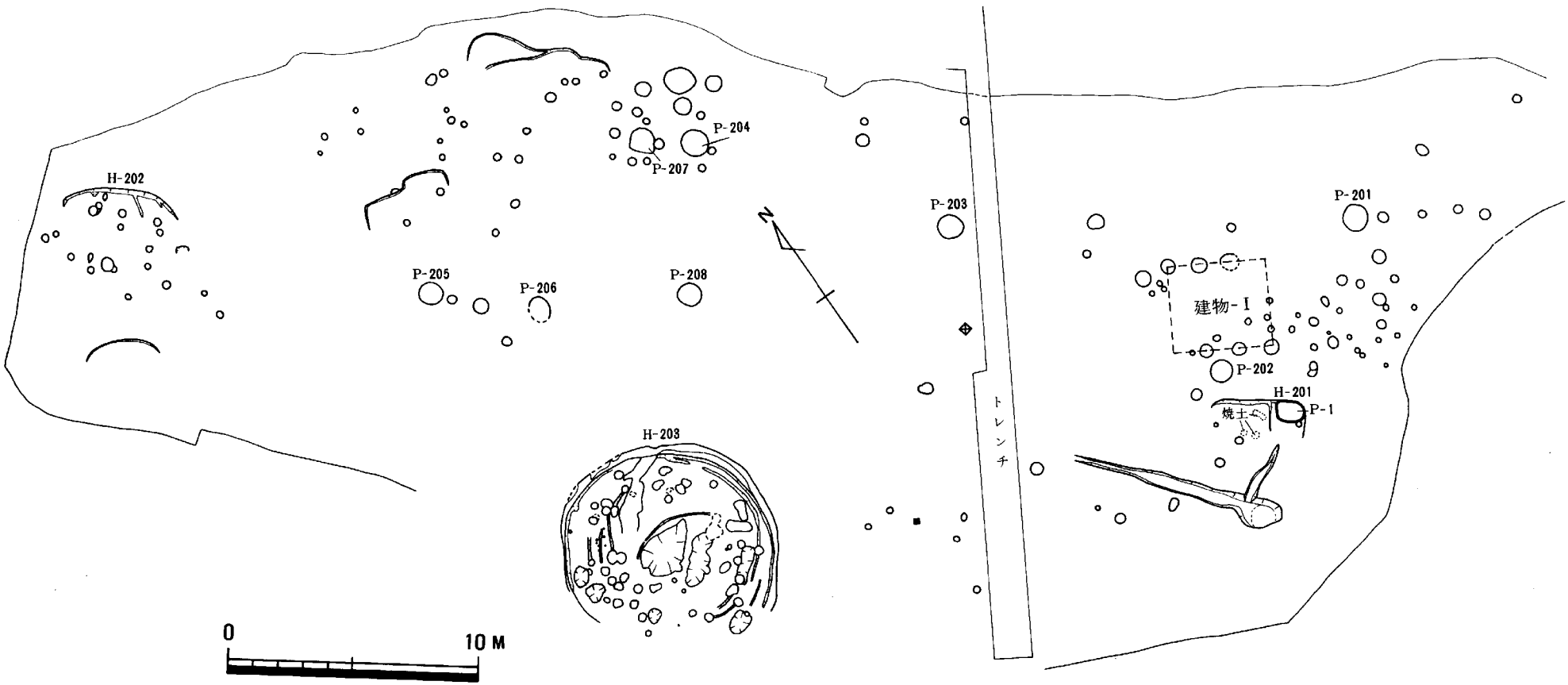
一次調査において確認されたものであり，H 201の北に位置する。規模は東西3間，南北2間（？）の建物である。柱穴は径50cm・深さ30～50cmを測り，柱間は1.1～1.3mとほぼ一定している。南側は傾斜面になっているため残存がわずかである。また，柱穴から遺物が出土しなかったので時代は不明である。

4．遺構に伴わない遺物（第15図，図版13）

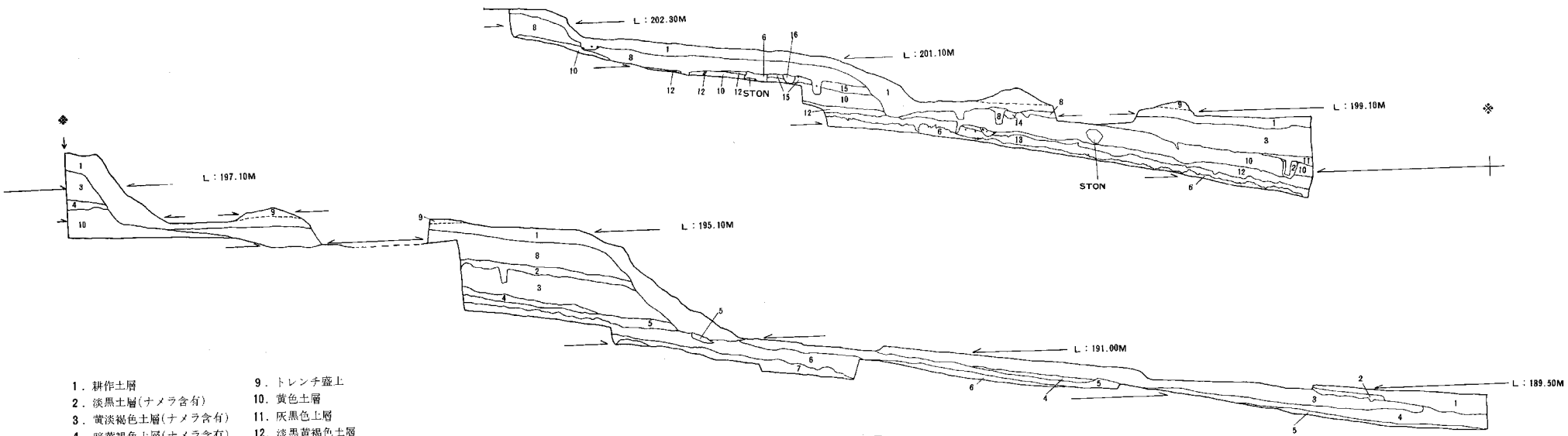
15図に示した遺物は，いずれも2層（攪乱層）から出土しているものである。鏡片1・鉄鏃3・鉄斧2を図示した。

鏡片（1）は，径約9 cmの平縁鏡の平縁部分の破片である。この鏡片には，平縁と文様帯との境に2個の円孔が穿たれている。文様部分は残存しないため鏡の形式は不明であり，また，鏡の破損品の修理孔かあるいは鏡片を装飾品として利用していたかは不明である。

有孔鏡片の県内での出土例は，赤磐郡赤坂町の森古墳・同郡山陽町県営山陽団地内のさくら山2号墓・苫田郡鏡野町の竹田妙見山古墳からの3例が知られている。さくら山2号墓は方形台状墓の土壙墓で，有孔鏡片が銅鏃・鉄剣・鉄鏃などと共に副葬されていた（註1）。竹田妙見山古墳は前方後円墳で，盗掘をうけてはっきりしないが箱式石棺から出土した由である（註

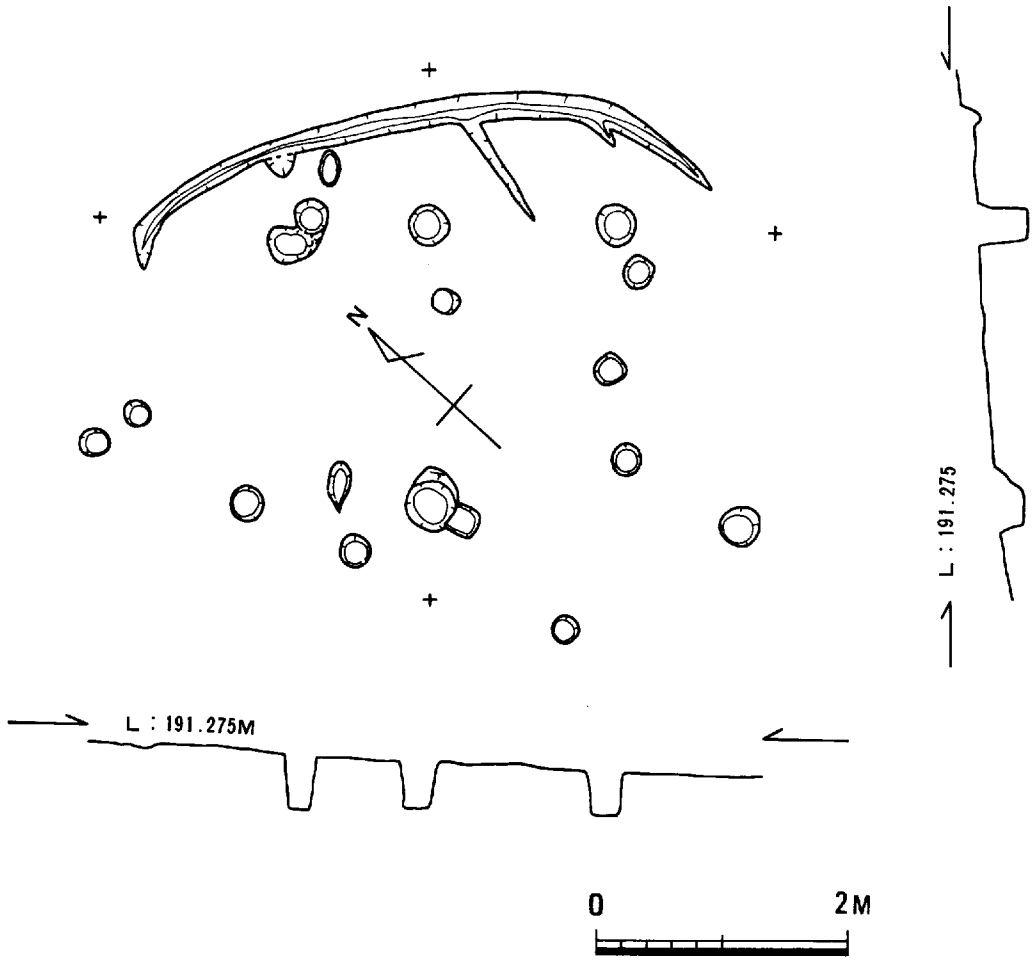

H-202
P-204
P-207
P-205
P-206
P-208
P-203
P-201
建物-Ⅰ
P-202
H-201
P-1
焼土
トレンチ
H-203
N
0
10 M

第10図　2区全体図

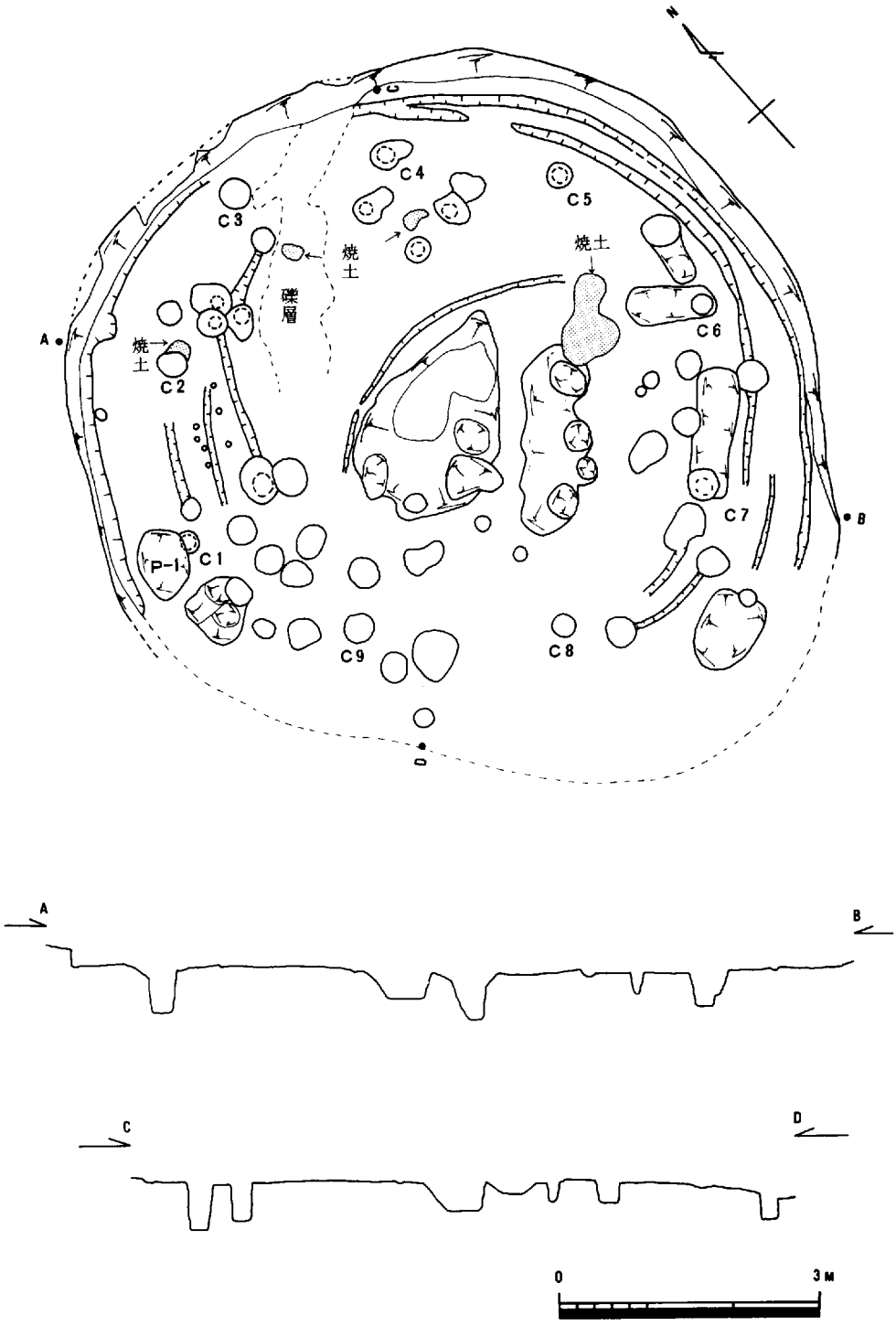


1．耕作土層
2．淡黒土層(ナメラ含有)
3．黄淡褐色土層(ナメラ含有)
4．暗黄褐色土層(ナメラ含有)
5．黒色土(ナメラ含有)
6．暗茶褐色(粘質)
7．明茶褐色(粘質)
8．茶褐色土層(ナメラ含有)
9．トレンチ盛土
10．黄色土層
11．灰黒色土層
12．淡黒黄褐色土層
13．黒茶褐色土層(黄色ナメラ含有・粘質)
14．黒茶褐色土層
15．淡黒黄色土層
16．黒黄色土層

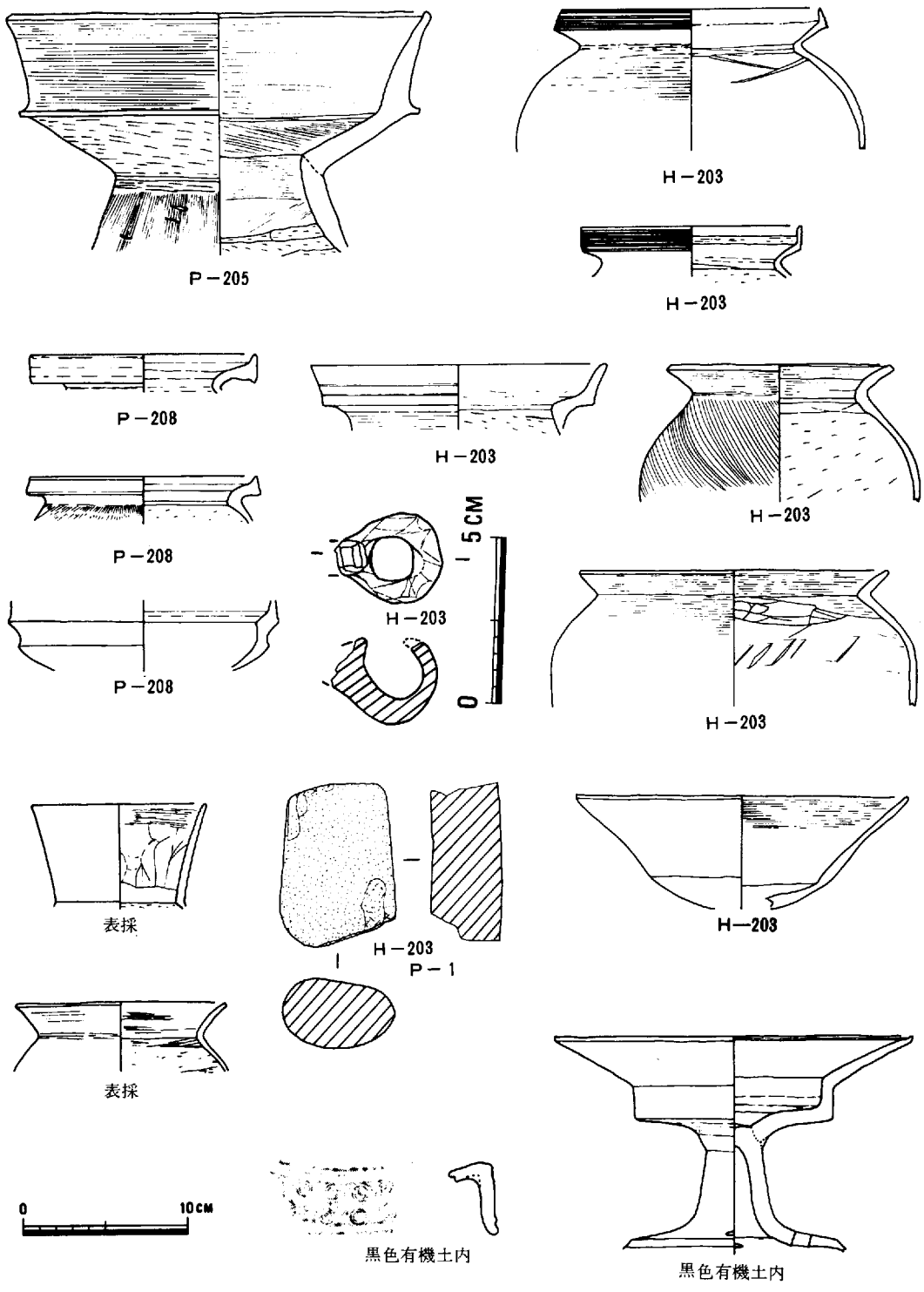
第11図　2区南北トレンチ土層断面図



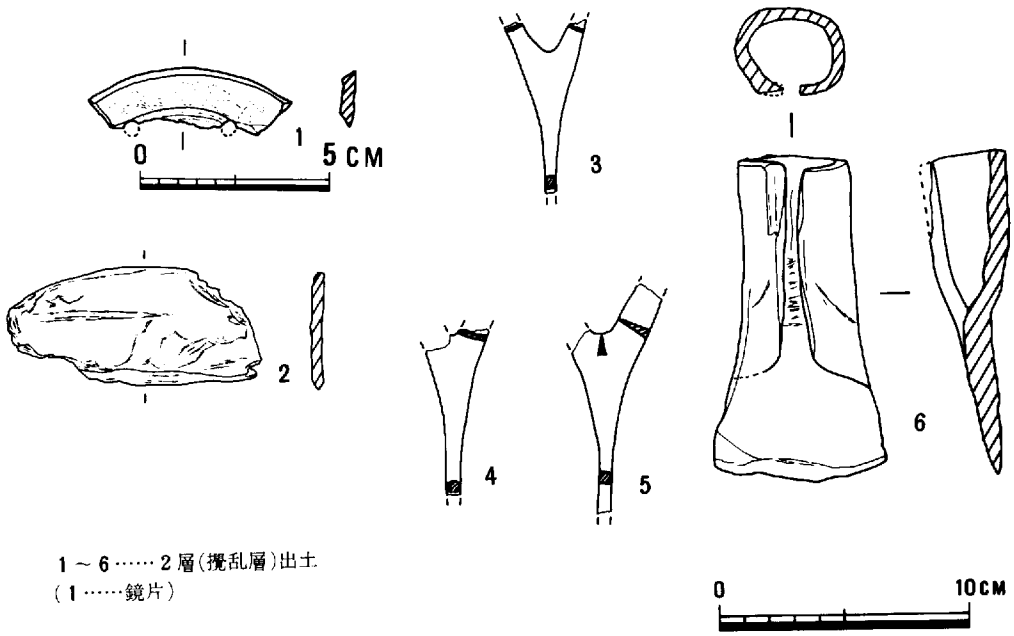
第12図　住居址平面・断面図（上・H-202，下・H-201）



第13図　住居址平面・断面図(H-203)

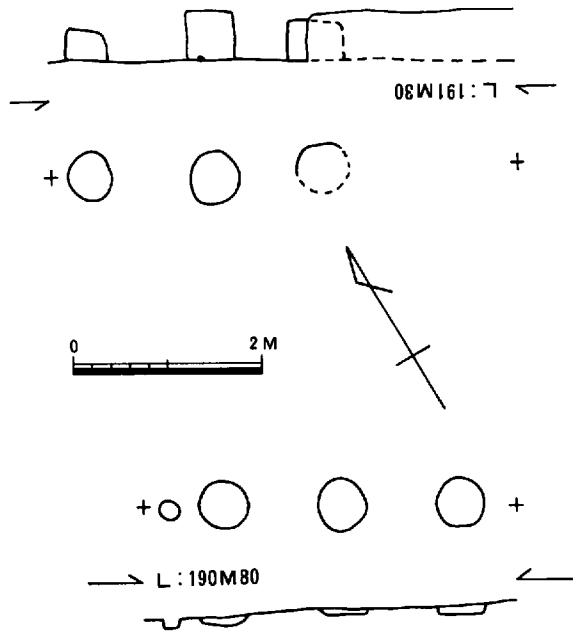

P－205
H－203
H－203
P－208
H－203
H－203
P－208
H－203
P－208
5CM
0
H－203
表採
H－203
P－1
H—203
表採
0
10CM
黒色有機土内
黒色有機土内

第14図　2区出土遺物

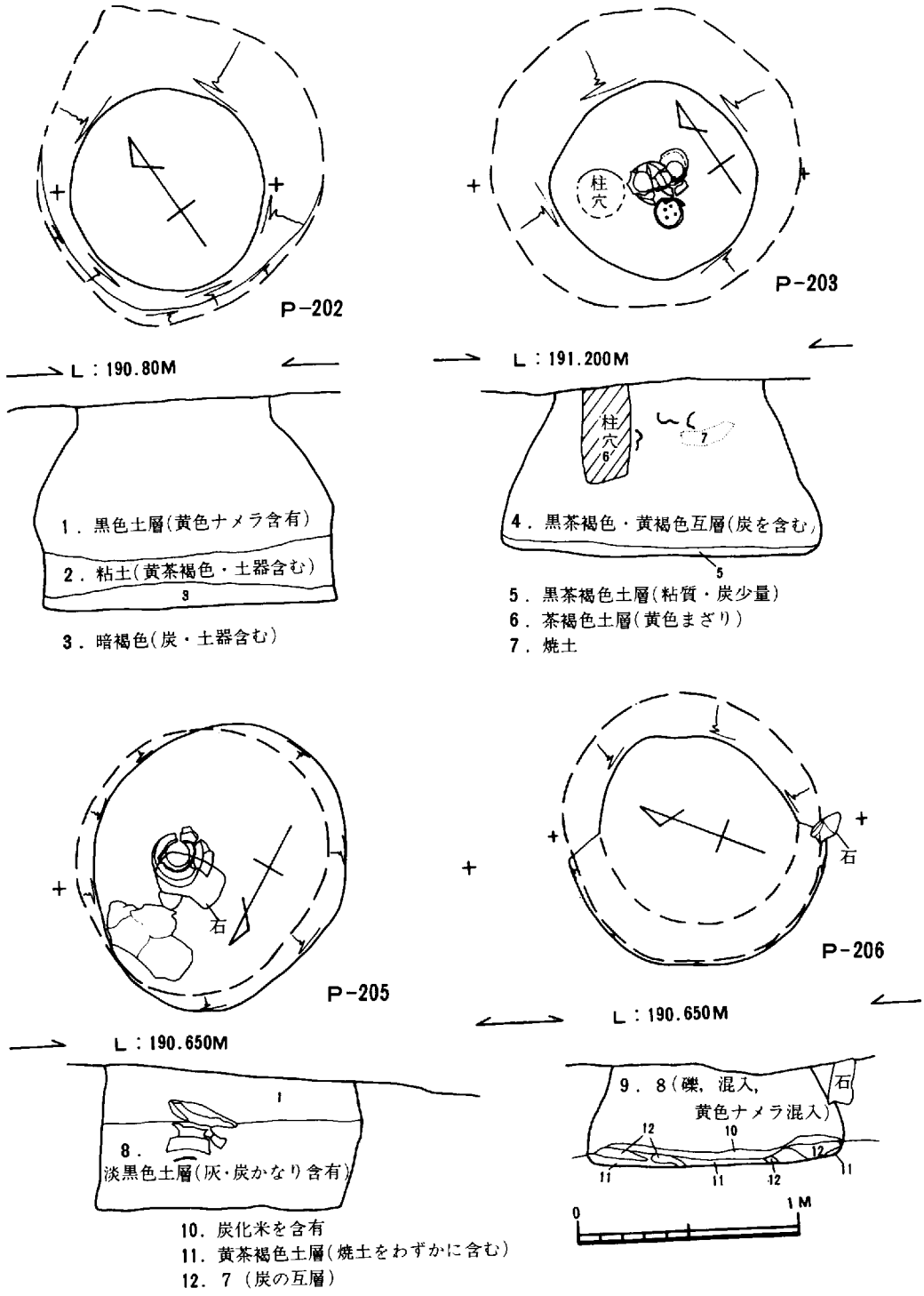


1～6……2層(攪乱層)出土
(1……鏡片)

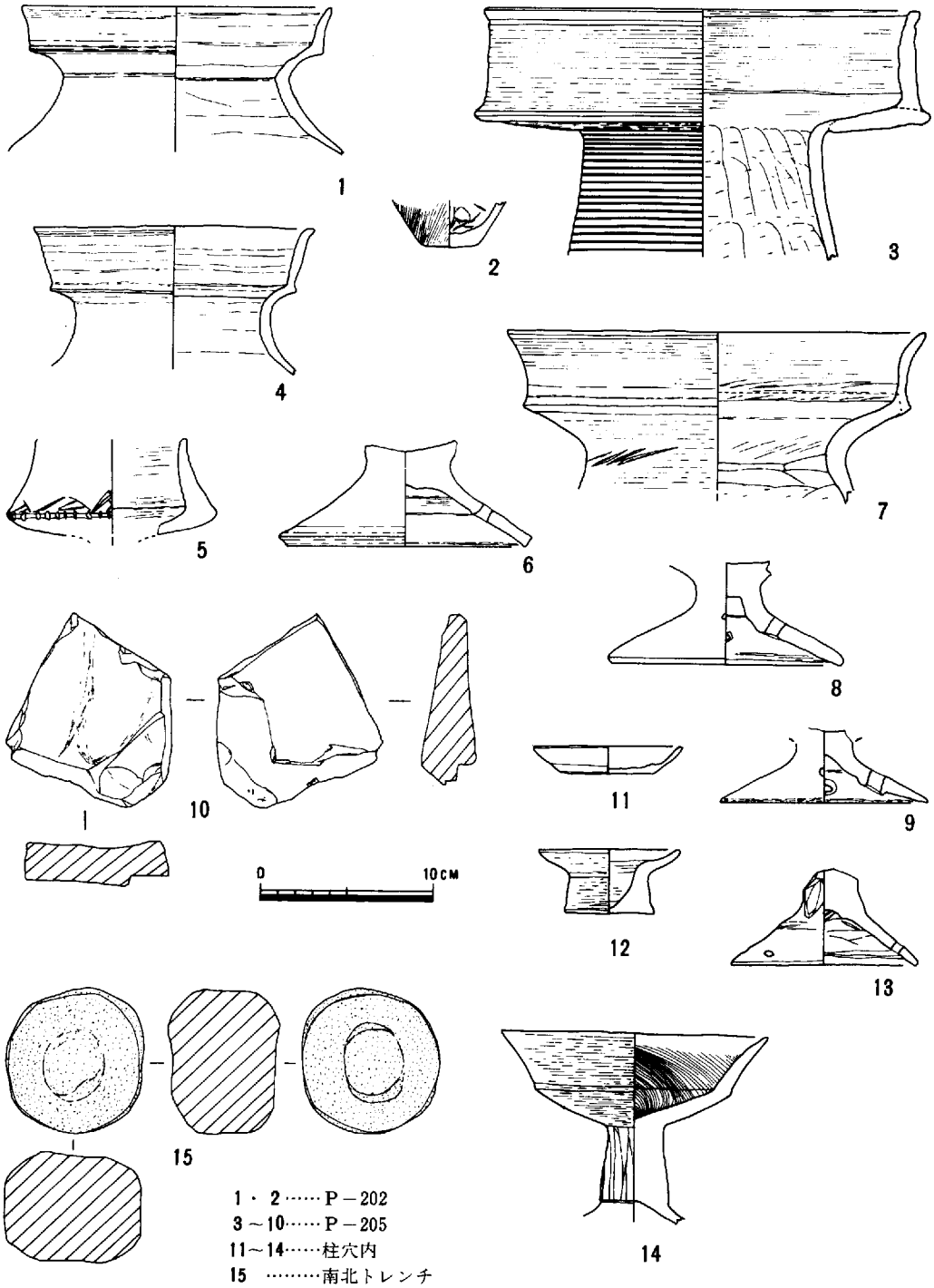
第15図　2区出土遺物



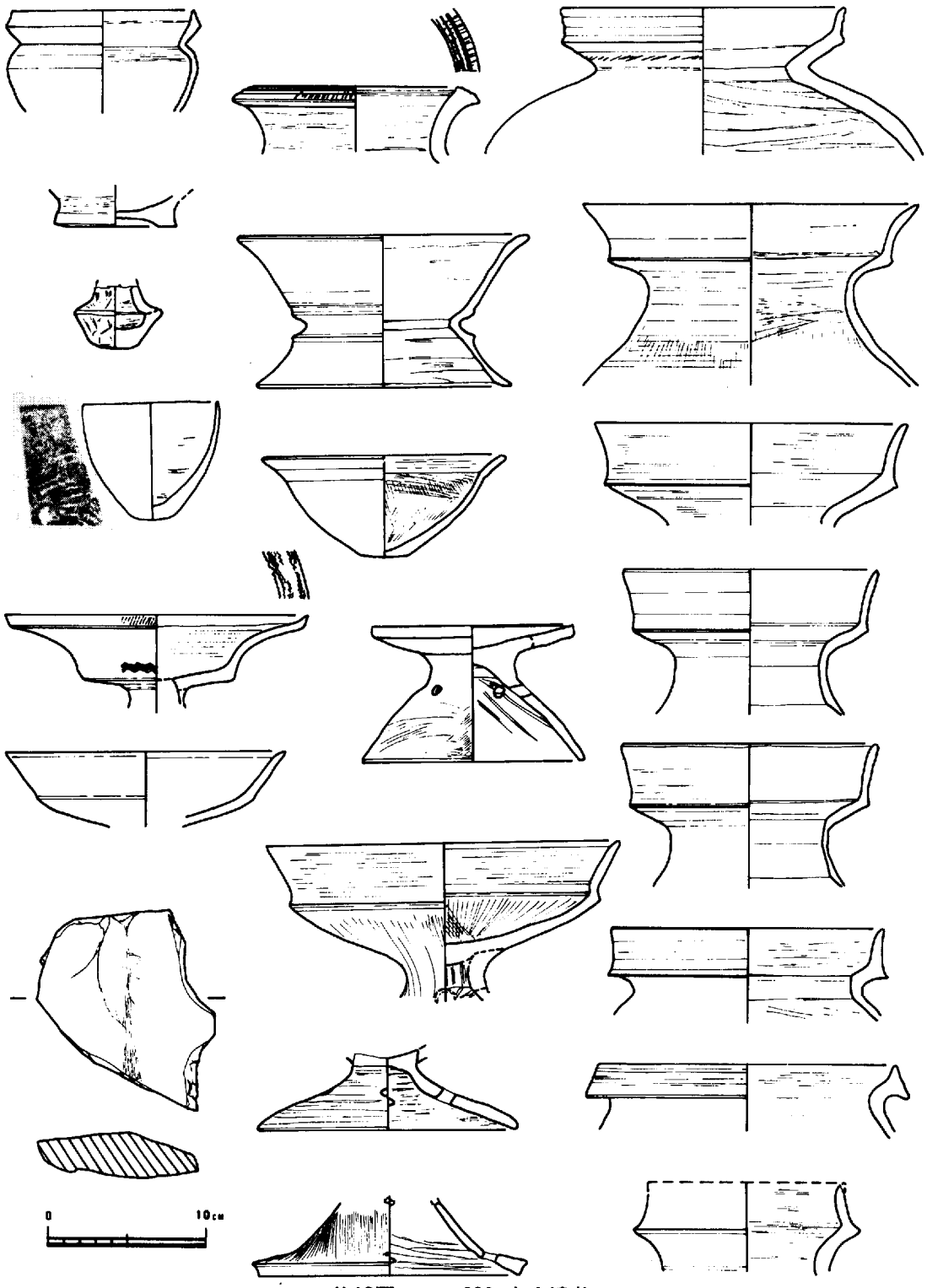
第19図　建物201平面・断面図



第16図　ピット平面・断面図



第17図　ピット etc 出土遺物



第18図　P－203 出土遺物

2）。3例はいずれも古墳（あるいは土壙墓）の副葬品であって，鏡片に孔をあけて装身具として利用したものである。

桃山遺跡2区出土の鏡片は，攪乱層からの出土で，遺構に伴うものではない。しかし，遺構は消滅しているが，箱式石棺あるいは土壙墓に伴うものであると予想される。

鉄鏃（3～5）は，いずれも先端部および茎基部を欠いているが，雁股の鏃である。

鉄斧（6）は，着柄のために鉄板を曲げて袋をつくっており，着柄の方向と刃の向きから手斧ともみえるものである。図示しなかったが，小型の鉄斧（図版13の3）も出土している。

鉄鏃・鉄斧は2層（攪乱層）の中のかなり狭い範囲から出土しているので，同一遺構（古墳時代前期の古墳）から伴出した副葬品であろう。

註1．神原英朗氏の御教示による。
『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（5）』　岡山県赤磐郡山陽町教育委員会　近刊予定。

註2．土居　徹氏の御教示による。

第三節　3 区

3区は，発掘対象範囲の西半分の下から3段目に位置しており，トレンチ調査の際に石積み遺構の一部を検出していた地点である。

第1層（表土層・耕作土）は厚さ0.2 m，第2層（暗褐色土）は厚さ0 ～0.6 m，第 3 層（暗黒褐色土）は厚さ0～0.3 mを測る。また，3区西端部の表土層下は岩盤であり，第4層以下は崖錐堆積物から成っている。遺構検出面は2層と3層の境および3層と4層の境と西端の岩盤上である。4層以下は，無遺物層，3層は弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物包含層（若干の弥生時代中期の土器片あり）．2層は弥生時代終末期から平安時代にかけての遺物の包含層，1層には弥生時代終末期から現代までの遺物が若干含まれていた。

3層に包含されていた遺物の一部は第20図に示す通りである。1は二重口縁の壷形土器で頸部には刷毛で縦なで後20条の凹線を施している。4は器台の基部であろう。基部はハの字に開き，3条のやや巾の広い凹線をめぐらしている。5は高杯脚部で，外面にヘラによる沈線を7条めぐらし（3度途中で止まって1回転している）その中央部に格子目をつけ，杯部の底は円板張りつけである。

第21図は，1～3層出土の鉄器および2層出土の土器の一部である。1は刀子で，刃の長さ10.5cm茎の長さ13.0cmを測り，刃巾は1,5 cmの細身で，目釘穴はない。2・3は火打鎌，4～8は釘である。9は上部は中空で下部は方形をなし，現存長4.8 cmを測る。1は1層出土で時期は不明である。2～8は平安時代の遺物包含層からの出土で，この時代に属するものと考えられる。9は弥生時代終末期の包含層出土であるが，2層からの混入であろう。10は，高杯で脚はハの字に開き3個の円孔が不等間隔に穿がたれている。器壁はやや厚く口縁端部は傾斜していて整形はやや粗である。

2つの遺構面において，住居址7，ピット12，火葬墓1，土壙墓17，建物1，鍛冶炉6を検出し，調査した。時代別にわけると，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址7・ピット11，平安時代の火葬墓1・建物1・鍛冶炉6，平安時代から室町時代にかけての土壙墓12，江戸時代の土壙墓5・ピット1となる（第22図）。

H301（第23図）

住居の床の一部は，岩盤（ナメラ）を削平してつくっているが，岩盤以外の部分にあった床面は土砂の流失のため現存していない。この住居は建替えあるいは建増しを4回行なっていて，いずれの場合も同一レベルに床面をつくっている。その1回目は建替えで同規模のものをつくっている。2回目は，当初のものに1回目の建替え部分を加え，それより一まわり大きなものにしている。3回目は一段と大きくしており，4回目は一部分を増築している。現存する壁の最大高は0.5 m，床東西巾8.6 m，南北2.5 mを測り，最初の住居は径推定5.8 mの円形，1回目の建替え後は径推定5.0 mの円形，次のものは径推定6.6 mの円形，後の2回はいずれも隅丸方形の住居をつくっていたと考えられる。

H 301 出土の土器片は少なく，第29図の１・２に示す通りである。１は長頸壷形土器の口縁部で，端部は下方に張り出し，３本の凹線をめぐらしている。２は甕形土器の底部で，やや上げ底となっていて，外面は刷毛なで仕上げである。

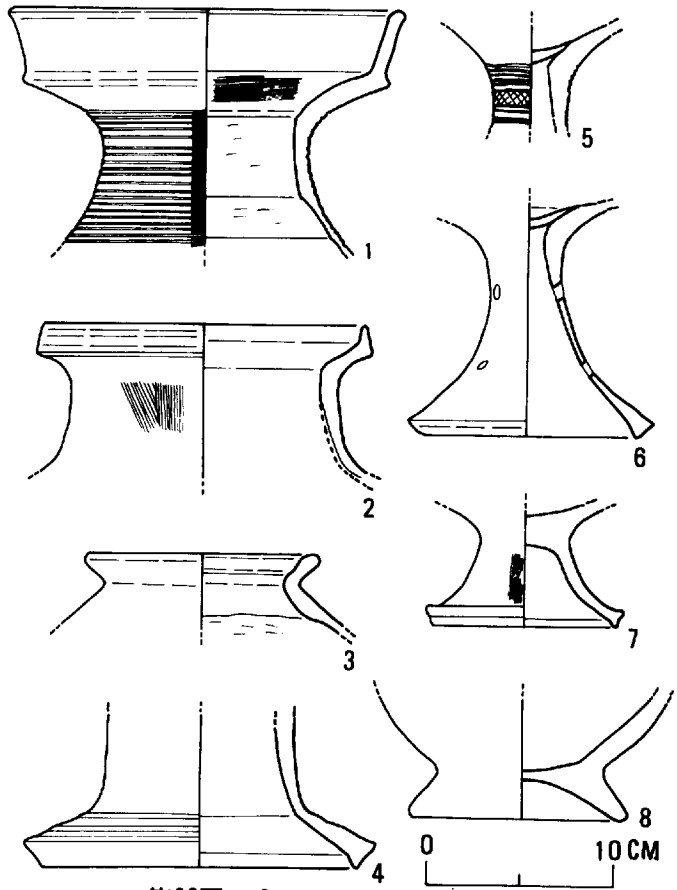
H302 （第23図）

H302は，H301の一部を切り取ってつくられており，一度建て替えを行なっている。H 302－２の方が古く，床の一部と壁帯溝の一部が残存するのみである。この住居に伴う中央ピットは１で，柱穴は２～７であり，６本柱の円形住居（径６～７ｍ）であったとみられる。柱穴８からは，甕形土器（第24図12）が出土した。H 302 が建替え後のもので，床も南西の一部を欠くのみでよく残存していた。径 6.6 ｍの円形住居で，中央ピットは11，柱穴は12～17の６本である。H 301 と同様に一部岩盤を削平している。

この住居からの出土遺物は第24図に示する通りである。第24図の１は縄文時代後期，２は弥生時代後期の土器片で，この２点は住居埋没時の混入である。20～21は鉄器(鎌・板状斧・鉇)でこれらはH 302 に伴うものである。20・21は壁に接して出土し，22は床面より出土した。23は滑石製の勾玉で埋没時の混入である。４～21の土器は，器形・整形技法などから見て，酒津式そのものは存在しないが，酒津式併行期に属するものである。

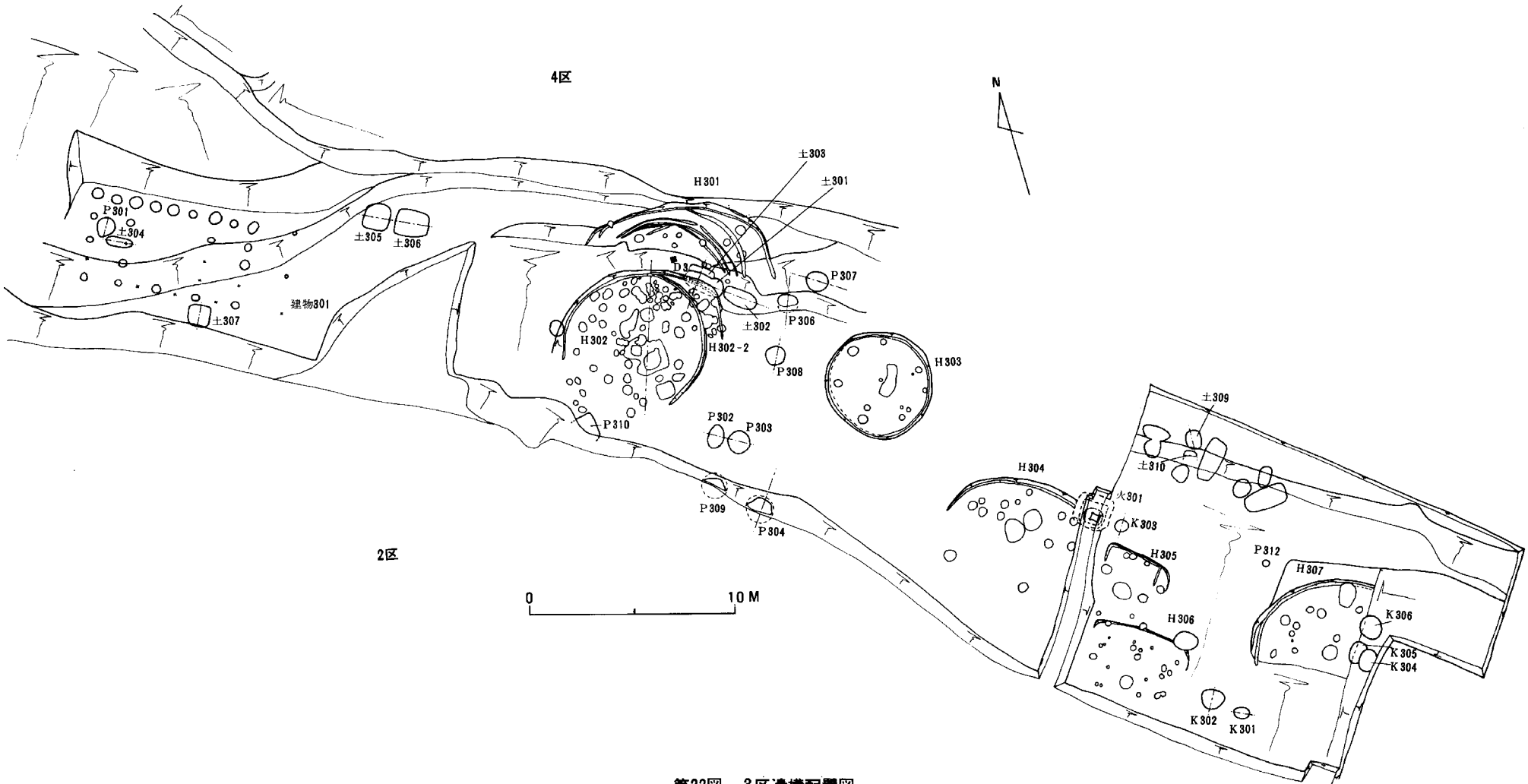
H303 （第25図）

この住居址は，H 302 の東にあり，径 5.2 ｍの円形のもので，現存壁の高さは 0.2 ｍを測る。柱は６本であるが，住居内の空間を大きくとるために壁帯溝近くに穿たれている。柱から壁までは0.3～0.6 ｍの間隔があるのみである。中央ピットは，やや東により二つのピットが連結した形をなし，中央ピットの側に柱穴が１つある。この住居からの出土遺物は少なく，第26図の１～４に示すとおりで，１・２は鉢形土器，３は鼓形器



第20図　３区３層出土土器実測図

第23図　H301・H302平面図・断面図　　L＝195m200



第22図　3区遺構配置図

台，4は杯部の深い高杯形土器で，H 302と同時期のものであろう。

H307 （第27図）

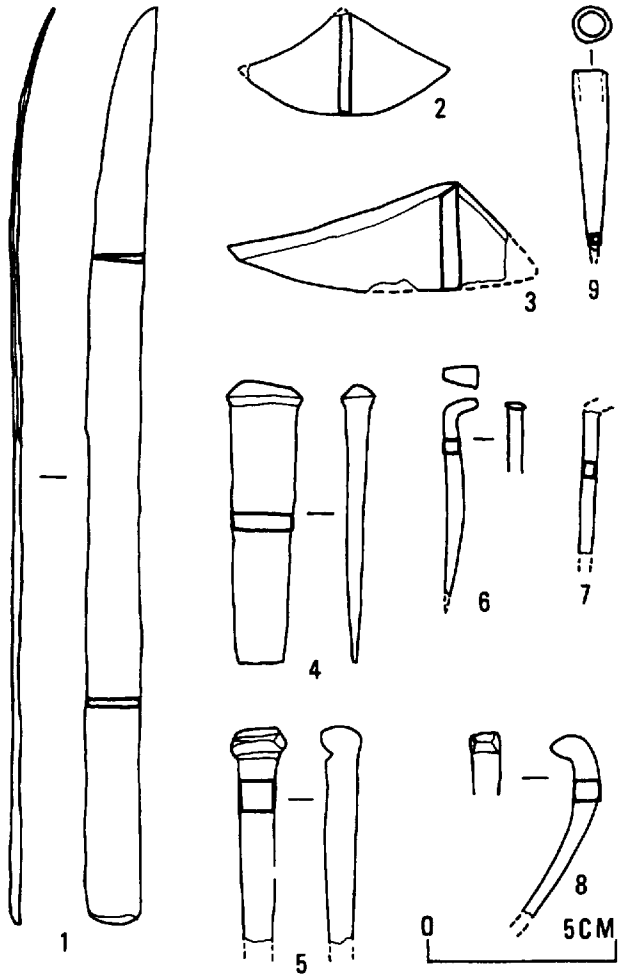
この住居址は，土砂の流失によって住居址の四分の一が残存するのみである。この住居址は，径7mの円形のものであったと思われる。中央ピットは，径0.7m深さ0.1mの浅い皿状で，床面の北寄り壁近くに，長径1.1m短径0.8m深さ0.6mの袋状ピットが存在する。この住居址が埋没し，一部が流失したのち，土砂の再堆積があり，鍛冶炉K304～K306がつくられている。

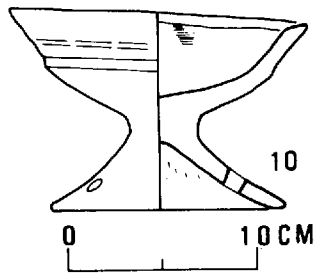
この住居址からの出土遺物は，第26図の5～13に示すとおりである。5・6は袋状ピットから，13は中央ピット出土である。H 302とほぼ同時期のものであろう。7・12は住居址埋没時の混入である。

H304 （第28図）

南半分を消失した住居址で，径約8.5mの円形住居で，6本柱のものであったと考えられる。床面には，やや南寄りに一つのピット（短径0.9m長径1.2mの楕円形）が存在する。

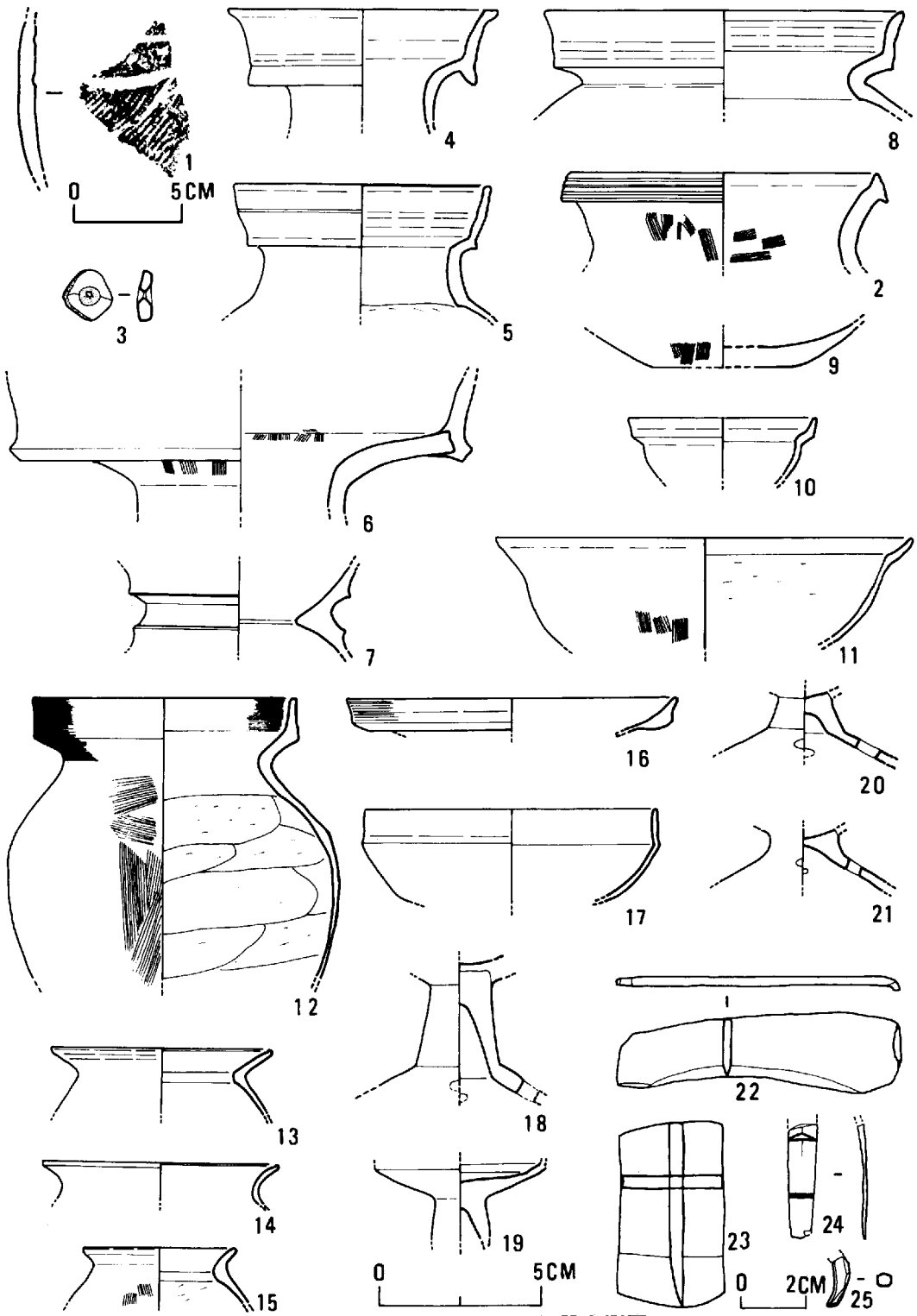
第29図の3～15はH 304出土の土器で，3は，胴以下を欠損しているが床面に置いた状態で検出され，器台に転用されていたものであろう。すべてH 302とと同時期のものと考えられる。



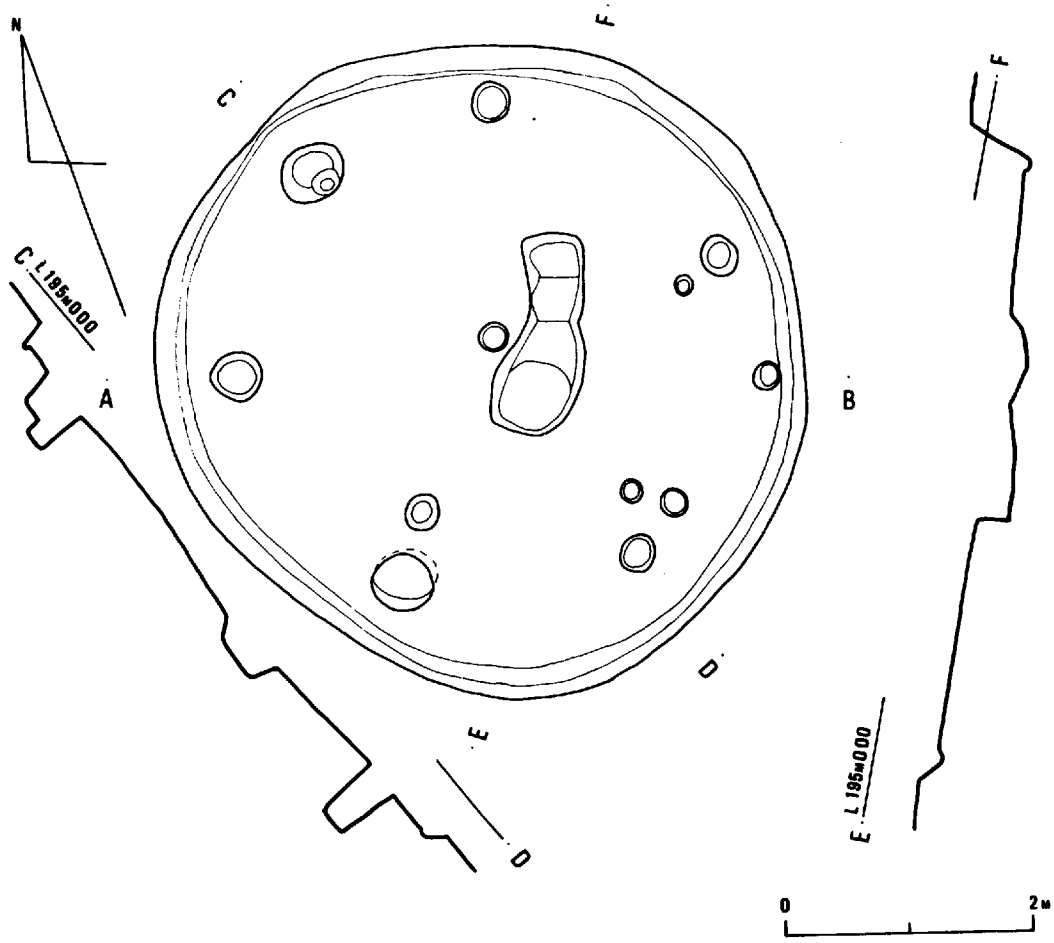


1～3　表土層
4～8・10　2層
9　3層
出土

第21図　3区出土鉄器・土器実測図



第24図　H302出土土器・鉄器実測図



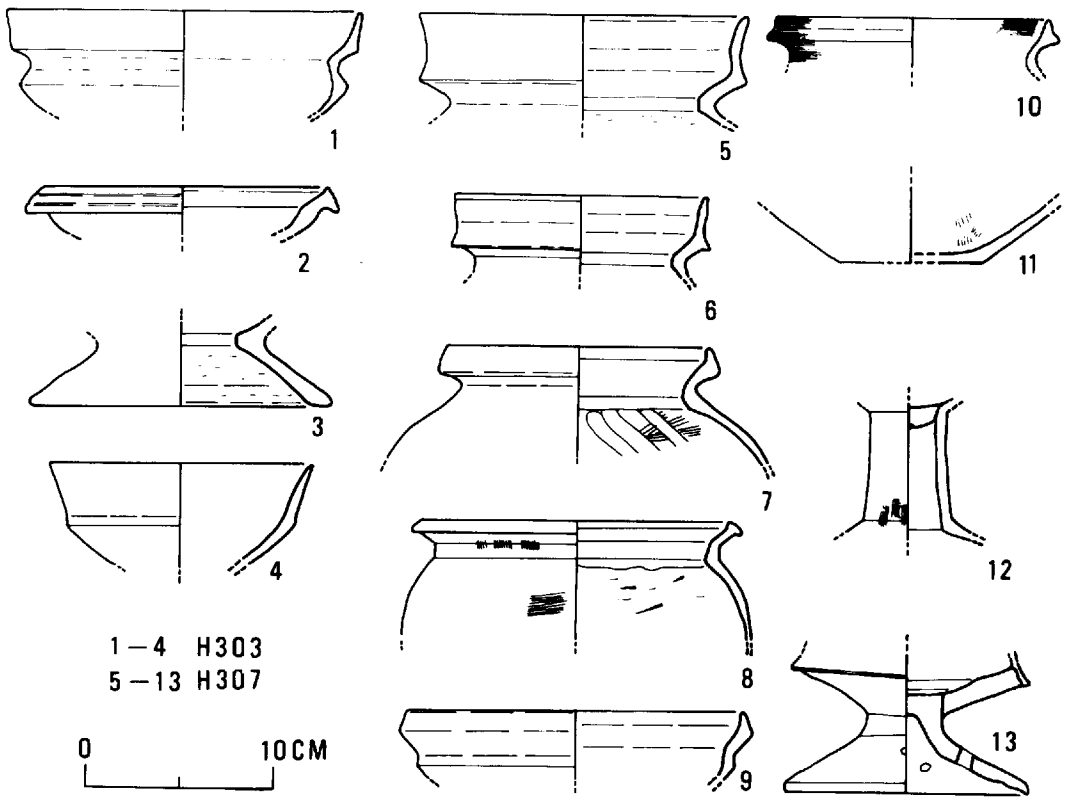
第25図　H303平面図・断面図

H305　（第30図）

H 305は，H 304の東にあり，南半分が流失しているためはっきりしないが，東西3.4 mの方形住居址で2本柱であったと思われる。住居内には，短径0.9 m深さ0.2 mの浅い皿状のピットがあり，また，2カ所に焼土がある。床の上に直接火を置いて焼けたものである。住居内からは遺物は出土しなかったため，時期は不明である。

H306　（第30図）

H 306は，H 305のすぐ南にあり，H 305と同様に南半分を流失している。東西5 mの方形



第26図　H303・H307出土土器実測図

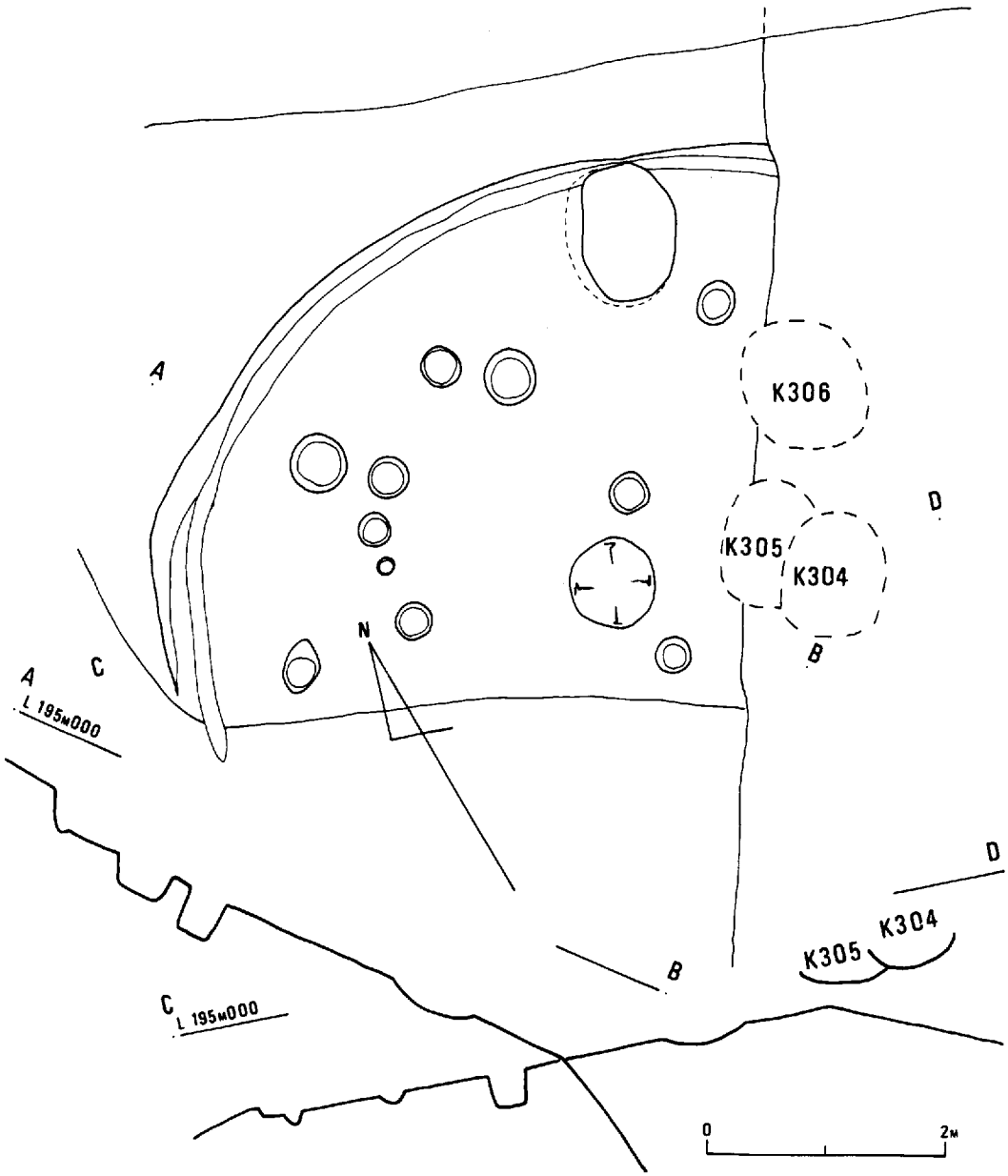
の住居址であったろう。中央ピットは円形で，径0.65m深さ現存0.80mを測る。この住居址も，出土遺物は皆無であり，時期は不明である。

H301・H302・H303・H304・H307が円形であるのに対して，H305・H306は方形である。

ピット（第31図）

3区においては12個のピットを検出した。その内の二つは江戸時代の備前焼すり鉢が出土し，残りは住居址群に伴うものである。図示したのは，住居址群に伴うピットの内，3個である。P301は方形で，P304・P309は一部のみ残存しており，三角フラスコ形を呈する。残りはほぼ円形を呈する。P303とP311（P311はH302の床面よりも下位に検出された）には炭化米が入っていた。P303には約2リットルの炭化米が，P311には約30リットルの炭化米が入っていた。P311の床近くの土（炭化米を含む）1,000㎤を取り出し水洗いした炭化米約100粒の平均は長さ4.5㎜・巾2.9㎜・厚み1.95㎜であった。P311は，H301に伴うものであろう。

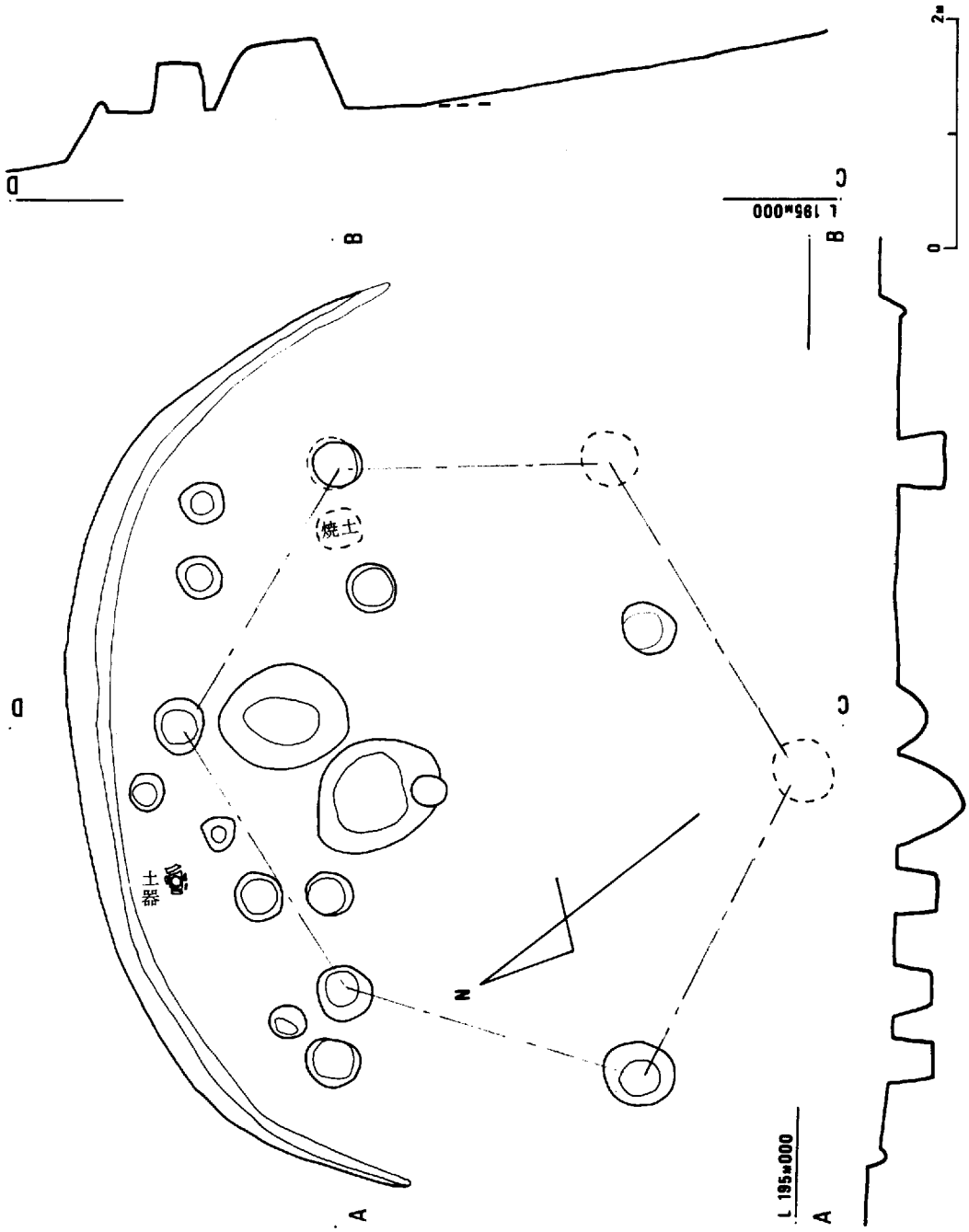
P305・P306・P307・P309・P310には，第31図に示すようにそれぞれ土器や砥石が入っていた。1は砥石で，かなり緻密な石材を利用しており，擦痕がみられる。土器はH302と同時期であろう。



第27図　H307平面図・断面図

鍛冶炉（第32図）

鍛冶炉は，３区東端部の住居址（H305～H307）が埋没し，その一部が流失したのちに土砂が再堆積し，この堆積層の上につくられていた。鍛冶炉あるいはその周辺から，鉄器・鉄鉾等は出土していないが，かなり高温で焼かれており，その火は還元炎であり，また炉内の表面は堅くなっており青灰色を呈している。こうした点から鍛冶炉であると判断した。第32図に示したのは，６基のうち３基である。K 301は，長径0.96m短径0.60m深さ６cmを測る楕円形のもので，炉の内面は青灰色～黒色，その外側の厚さ２～６cmは暗赤褐色を呈する。K 302は，長



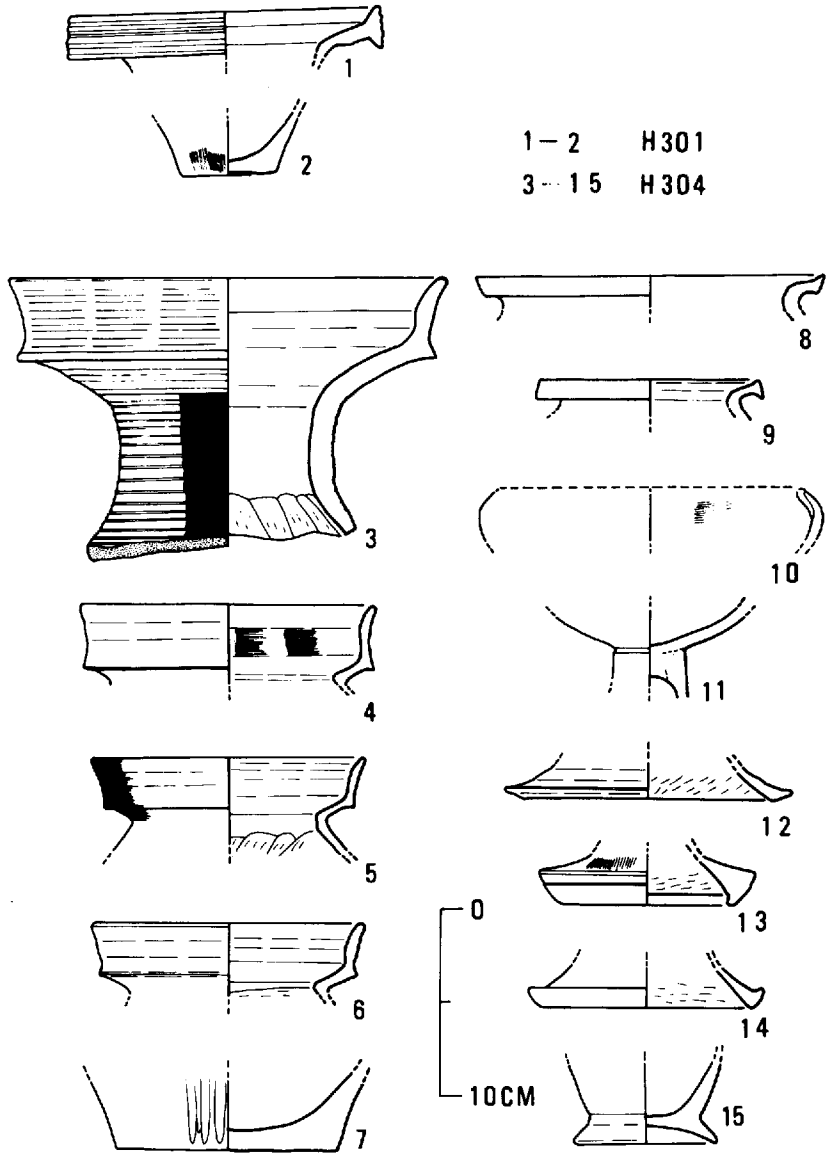
第28図　H304平面図・断面図

径1.0ｍ短径0.9ｍ深さ8～20㎝を測る楕円形のもので，図中の底面の円形の点線部分がもっとも熱による硬化がすすんでおり，U字形の点線部分は矢印方向にむけて熱による硬化がにぶっている。これは吹子による風の方向を示すものであろう。K 303は，ほぼ円形で，径0.6ｍ

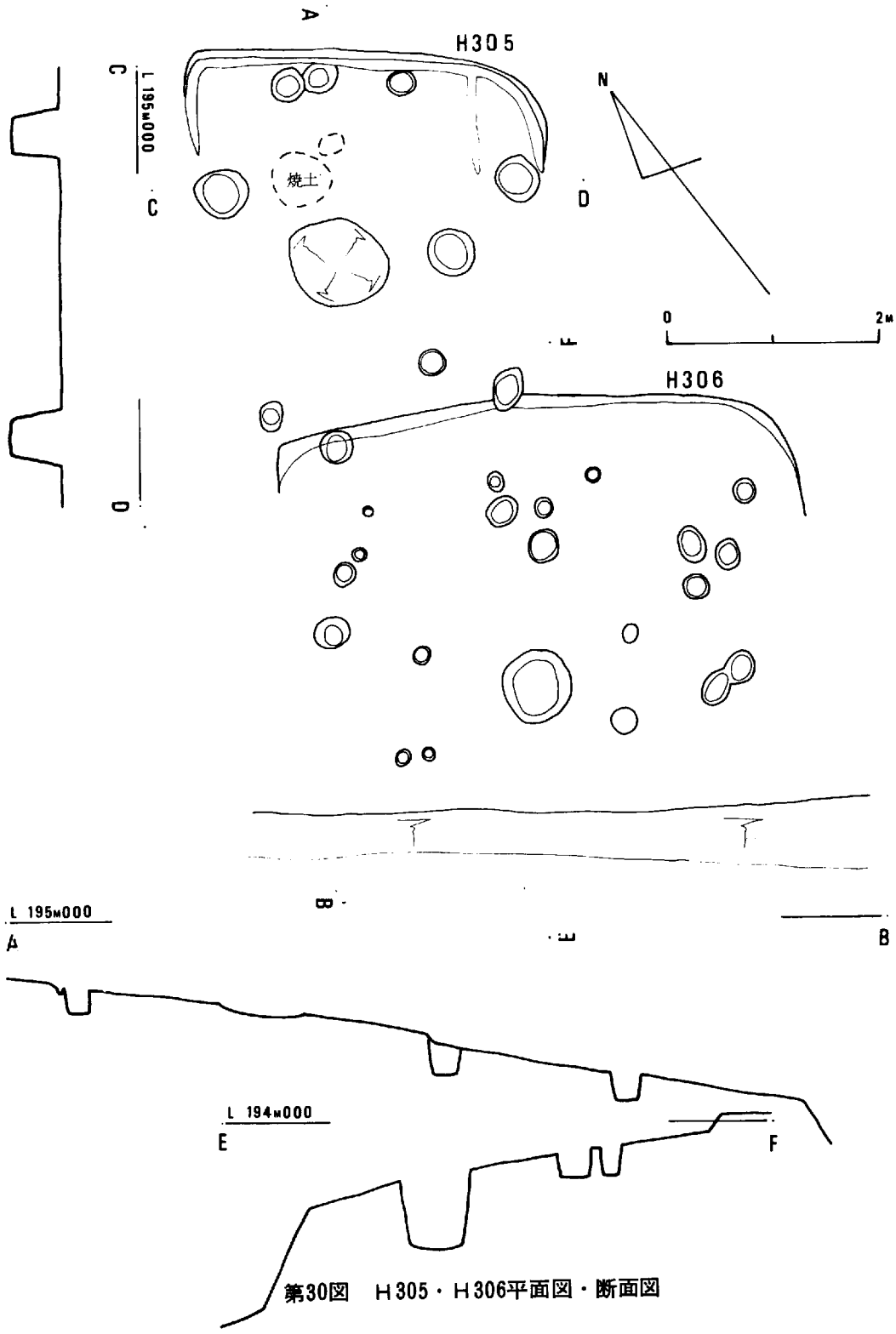
深さ15㎝を測り，前2例ほどは熱を受けていない。K304～K306は，K 303と同様の規模であり，内面が赤変するのみである。K 306の中からは，第32図に示すような土師器が出土した。粗い櫛で斜めになでているもので，径38㎝の大型の土器である。

建物301（第33図）

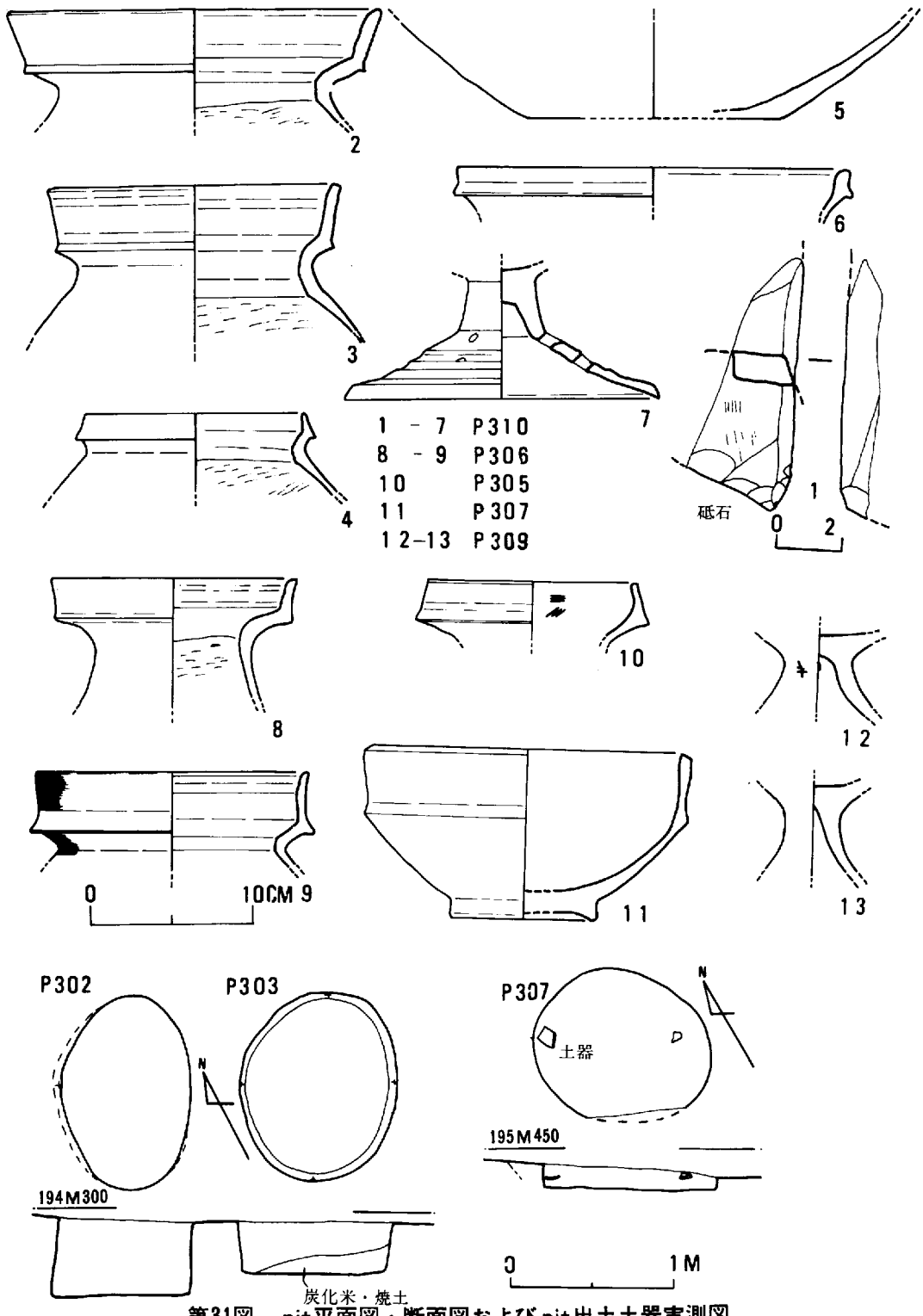
3区西端の岩盤部分に1棟の建物址を検出した。この建物は，東西4間・南北2間で，東面には巾1間の庇のつくものである。南北の心心間距離2.0ｍ・東西の両端の1間は1.8ｍ・中央2間は共に2.0ｍ・東西の庇の1間は1.8ｍを測る。棟行4間（7.8ｍ）・梁行2間（4ｍ）である。柱間には束柱が入れてあり，束柱は他の柱に比し浅い柱穴を穿って柱を立てたものである。この建物は，北半分は岩盤を削平し，南半分は盛り土の上に建てられており，盛り土部分は流失しており，さだかではないが，2間4間2面庇の建物であったろう。北面中央の柱穴底には河原石3個を入れていた。これは柱の長さを調節したものとも思われる。



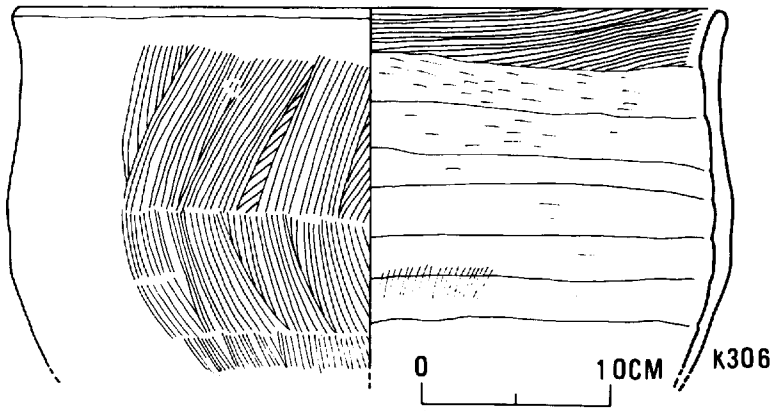
第29図　H301・H304出土土器実測図

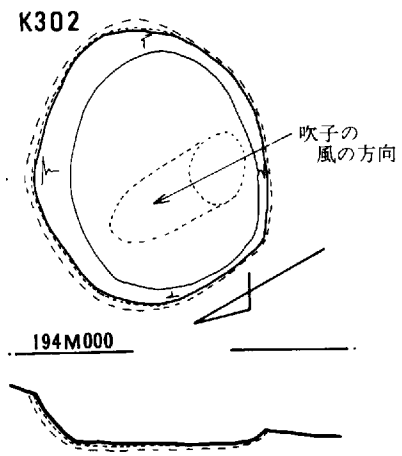


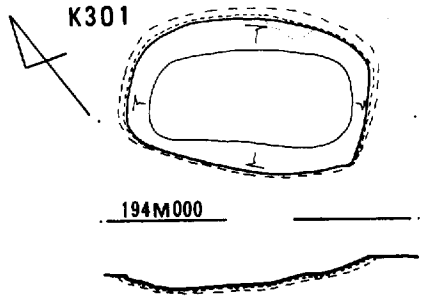
第30図　H305・H306平面図・断面図

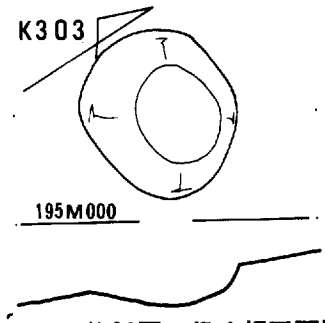


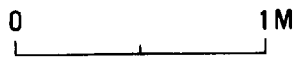
第31図　pit平面図・断面図およびpit出土土器実測図









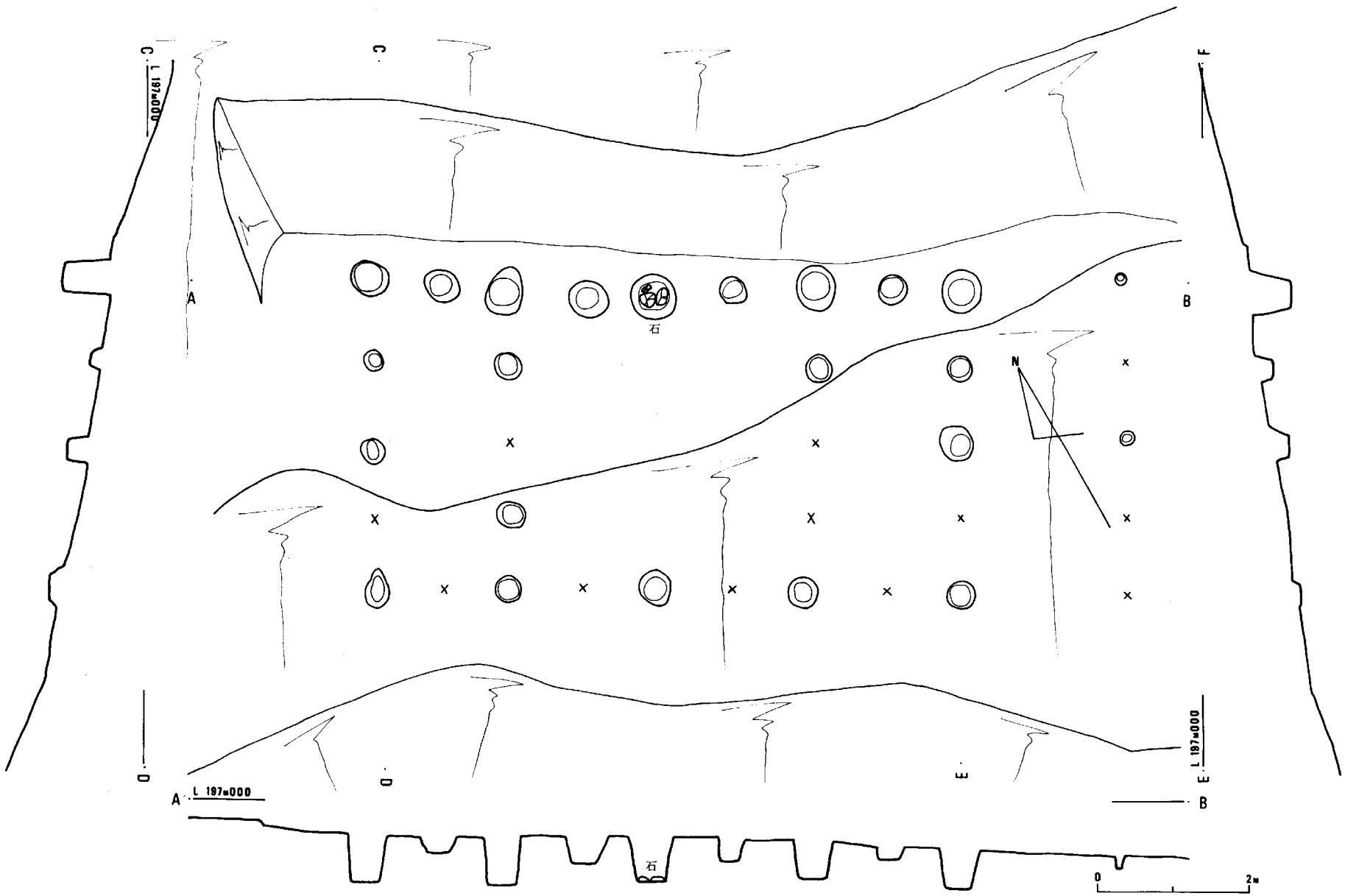


第32図　鍛冶炉平面図・断面図および鍛冶炉出土土器実測図

この建物に伴う遺物は皆無であるが，構造から考えて平安時代に属するものであろう。

火301　（第34図）

火葬墓は，３区では火301一基だけ検出した。トレンチ調査のとき，Ｔ１において石積み遺



第33図
建物301平面図・断面図

構としていたものである。この火葬墓は，単に蔵骨器を埋納するだけでなく各種の副葬品（延喜通寶・鉄釘・刀子・土師器の提瓶・水晶球・水牛の角製笄）を持ち，緑釉皿を蔵骨器の蓋とし，その上部に二重の石囲いと石積みを行なっており，かなり特異な例である。

径30㎝深さ50㎝の円形のピットを掘り，このピットの底に延喜通寶３枚を入れ，その上に，提瓶（土師器）を入れ，隙間には木炭片を入れながら蔵骨器（須恵器）を安置し，この蔵骨器の外側底部近くに約30本の鉄釘をまとめていれ，肩の部分に刀子を置いている。蔵骨器には，緑釉皿を蓋としさらに緑釉輪花皿を外蓋としている。ピット上端まで木炭片を詰めたのち，緑釉小鉢を割ってばらまいている。

ピットに木炭片を詰めて埋めたのちに板状の石を置き，この石が底になるように内規40㎝×45㎝×20㎝の箱状に石をならべ，その外側に１辺２ｍの方形の石囲いをしている。内側の箱状部分からは，何も出土しなかったが，図中の※印の石の蓋をして，箱状部分および外側の石囲いに石を積んで，積み石塚状にしている。

火301 出土の遺物（第35・36図）

・蔵骨器（須恵器壷）（第35図の１）　口縁径11.8㎝・胴の最大径23.8㎝・高さ22.6㎝・高台径11.4㎝・頸の高さ１㎝を測る薬壷形の壷である。やや外面の整形は粗で，底部の一部にヘラ削りがみられる。外面底部近くには副葬品の鉄釘の錆が付着しており，肩には同じく副葬品の刀子の錆が付着している。この壷の中には，成人の火葬骨が底から18㎝の高さまで詰まっており，最上部に「喉仏」が置いてあった。火葬骨の間には，火を受けて割れている水晶球（２個体）と火を受けていない水牛の角製笄の柄の割れが入れてあった。

・緑釉陶器（第35図の２～４）　蔵骨器の内蓋（３）・外蓋（４）および割ってばらまいたもの（２）の３枚の緑釉陶器が出土した。

２は，口縁径11.6㎝・高さ3.9㎝を測る小鉢で，底に粘土板を張りつけたのち高台の内側を削り取ったいわゆる削り出し高台をもち，淡黄緑色の釉がかかっている。これは窯出し直後の製品で，蔵骨器埋納時に意識的に割ってばらまいたものである。

３は，径11㎝・高さ2.5㎝の小皿（段皿）で，緑色の釉がかかっている。釉をかける前に窯で一度焼成し，その後釉をかけて二度目の焼成を行なっている（欠けた部分二カ所にも釉がかかっている）。この小皿は若干の期間使用されていたものとみえ，少し磨滅している。

４は，径15㎝・高さ3.4㎝を測る輪花皿で淡緑色の釉がかかっている。皿の下面は，ヘラ削りで整形はやや雑で，高台は高さ４～８㎜と不整形である。輪花はかなり退化しており，花弁の境をあらわす線はなくなり，花心も円形の沈線を施しているのみである。皿上面の一部には施釉してなく，施釉後重ね焼きしている。この皿はかなり使用され全面が磨滅しており，釉の剥脱が目立つ。

・土師器（提瓶）（第35図の５）　須恵器の提瓶は多く見られるが，土師器の提瓶の出土はまれである。ソロバン玉形の胴に∩形の取手がついている。胴の最大径14.8㎝・胴の高さ8.8㎝・底の径9.8㎝で，口縁径7.3㎝・高さ４㎝の朝顔型の口が胴の端につけられ，四隅を面取り

した方形の取手がつけられている。胎土は良質水ひ土を使っている。

・延喜通寶（第35図の６～８）　延喜通寶はピットの最下部から３枚出土した。６は，黒褐色を呈し，径1.8㎝を測り，鋳出し後周囲を削っているが正円にはなっていない。鋳型は左右にずれている。７は，白灰色を呈し，径2.0㎝を測り，細かいヒビが無数に入っている。鋳型は上下にずれている。８は，黒褐色を呈し，錆のため鋳出された文字はやや読みにくくなっている。径は1.85㎝を測り，鋳型は左上から右下にずれている。延喜通寶は，延喜七年（A．D．907年）に鋳造されたもので火葬墓の埋葬時期を限定する材料である。

・水晶球（第36図の２・３）　水晶球は，火葬骨と共に蔵骨器の中に入れられていたものである。２は径2.0㎝，３は径1.1㎝を測り，穴は穿がたれていない。共に火を受けており，２の方はその熱で数片に割れている。遺体を荼毗にふすときに遺体の上にでも置かれたものであろう。荼毗後，骨を蔵骨器に入れる際に，骨と共に拾い集めたものである。

・笄（第36図の１）　笄は，柄の一部のみが蔵骨器の中に骨と共に入れられていた。水晶球とは異なり，火を受けていない。水牛の角製で，断面は小判型を呈し，厚みは2.5～3.0㎜・巾は7.0～9.0㎜・現存長4.8㎝を測る。形見分けとも見られるものである。

・刀子（第36図の４・５）　刀子２本は，６と共に蔵骨器の肩の部分に副葬されていたものである。４は，刃の長さ12㎝・茎の長さ現存7.6㎝を測り，全体はかなり曲りくねっている。５は，刃の長さ推定7.7㎝・茎の長さ6.5㎝を測る。共に目釘穴は存在しない。

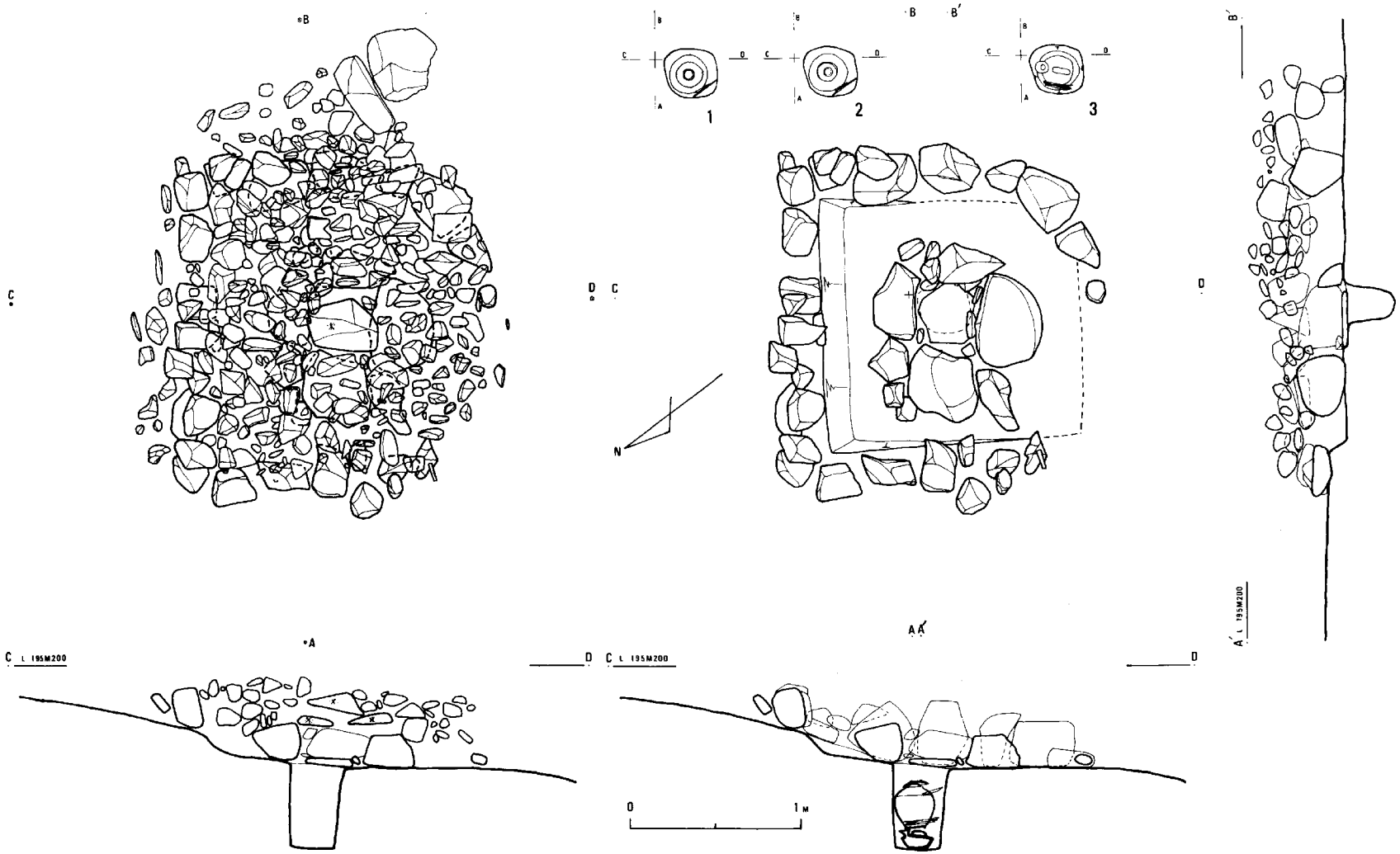
・不明鉄器（第36図の６）　これも蔵骨器の肩に刀子と共に置かれていたもので，巾0.5㎝長さ推定9.8㎝・厚さ0.4～0.2㎝の鉄板の厚い方を直角に曲げ，薄い方を片刃状にしている。用途は不明である。

・鉄釘（第36図の７～16）　鉄釘は約30本が束ねた状態で蔵骨器の外底部近くにおかれていた。図示したのはその内の一部である。方形の断面を呈し，頭を直角に曲げているが，火を受けた状態や使用された状態は認められない。太さは５㎜長さ７～10㎝までさまざまである。

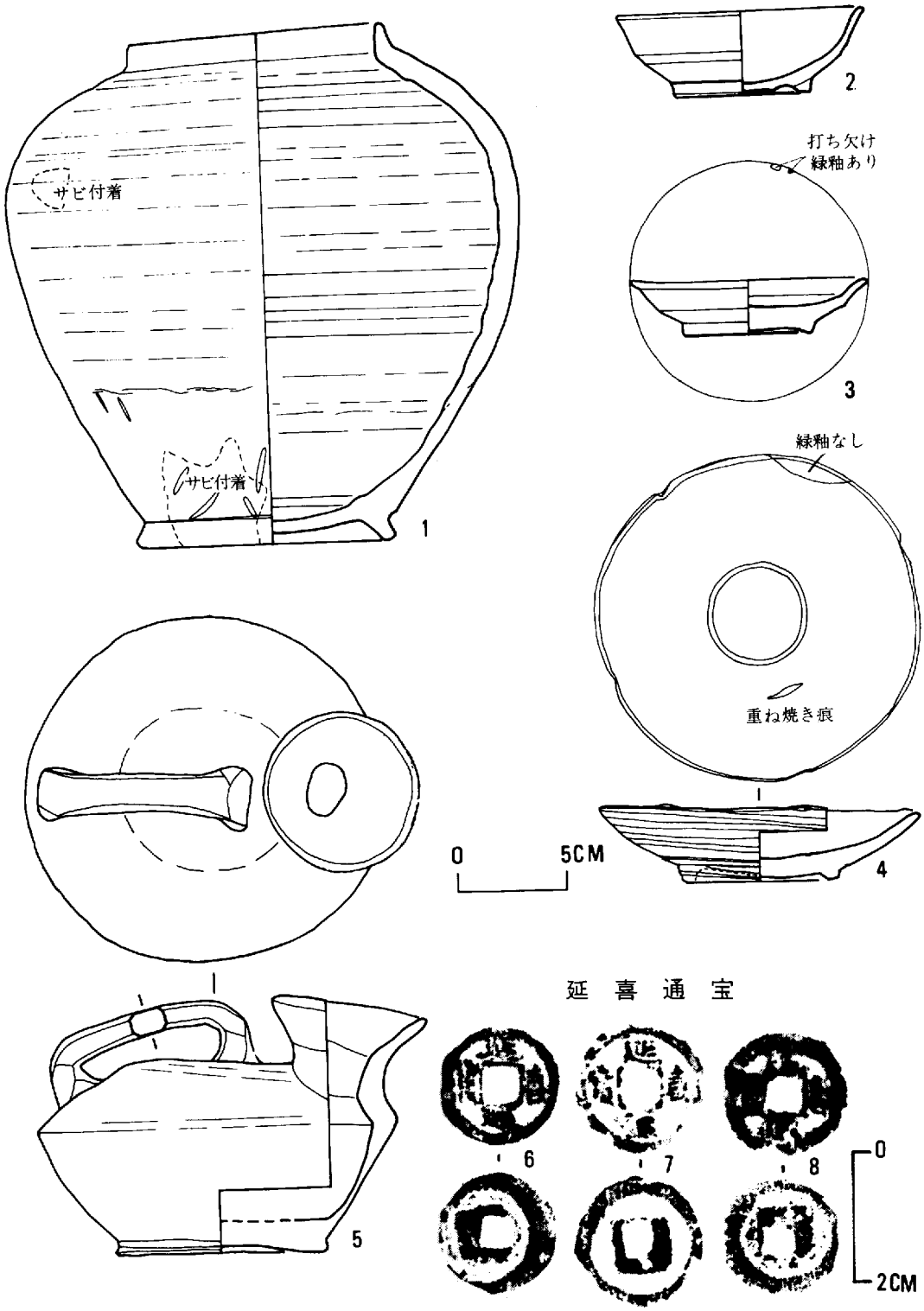
貨幣経済の進展を見ない時期に貨幣（銭）を持ち，緑釉陶器を生活の中で使用し，埋葬にあたり窯出し直後の緑釉陶器を割っており（緑釉３枚とも山科製），水牛製の笄を使用し，釘を副葬させた人物がどのような階層に属していかについてかなり限定して考えることができよう。埋葬の時期は，須恵器や緑釉陶器などからみて10世紀中頃と考えるのが妥当であろう。

土301（第37図）

土301は，土302と共にH301とH302の間の所につくられている。2.0ｍ×推定0.8ｍの土壙を掘り，その中央に若干凹み（第37図の土301その３）をつくり，その凹み部分に遺体をおいている。膝から下の骨は残存していなくて，両大腿骨は交差している。この交差は石が転落した時に骨が動いたためであろう。人骨の保存状態は良好であり，虫歯はみられない。副葬品として左脇腹部に短刀１，骨盤の下に鑓先１，頭蓋骨の横に釘４本が検出された。



第34図　火301平面図・断面図



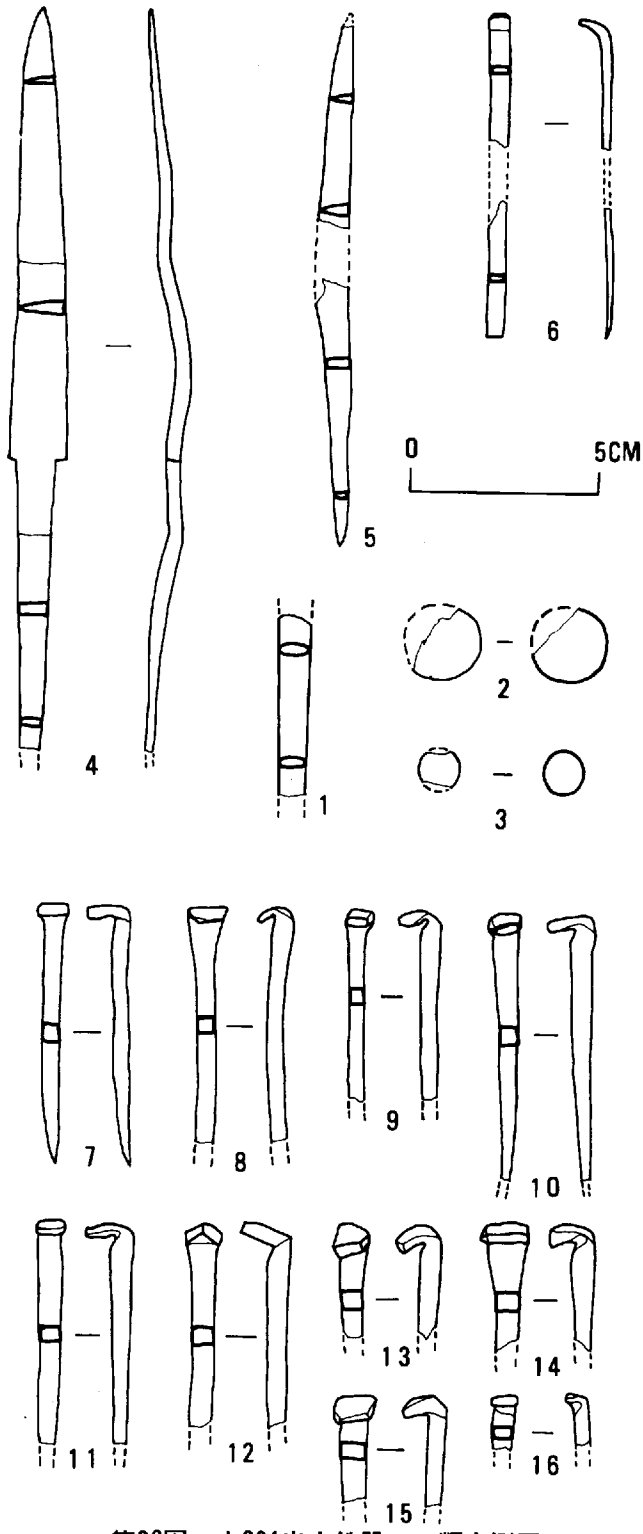
第35図　火301出土土器・古銭実測図・拓影

短刀（第38図の１）は，刃の長さ22㎝・刃巾 2.7 ㎝・茎の長さ 7.8 ㎝を測り，径４㎜の目釘穴が１つある。柄・鞘は木装でその一部が残存している。

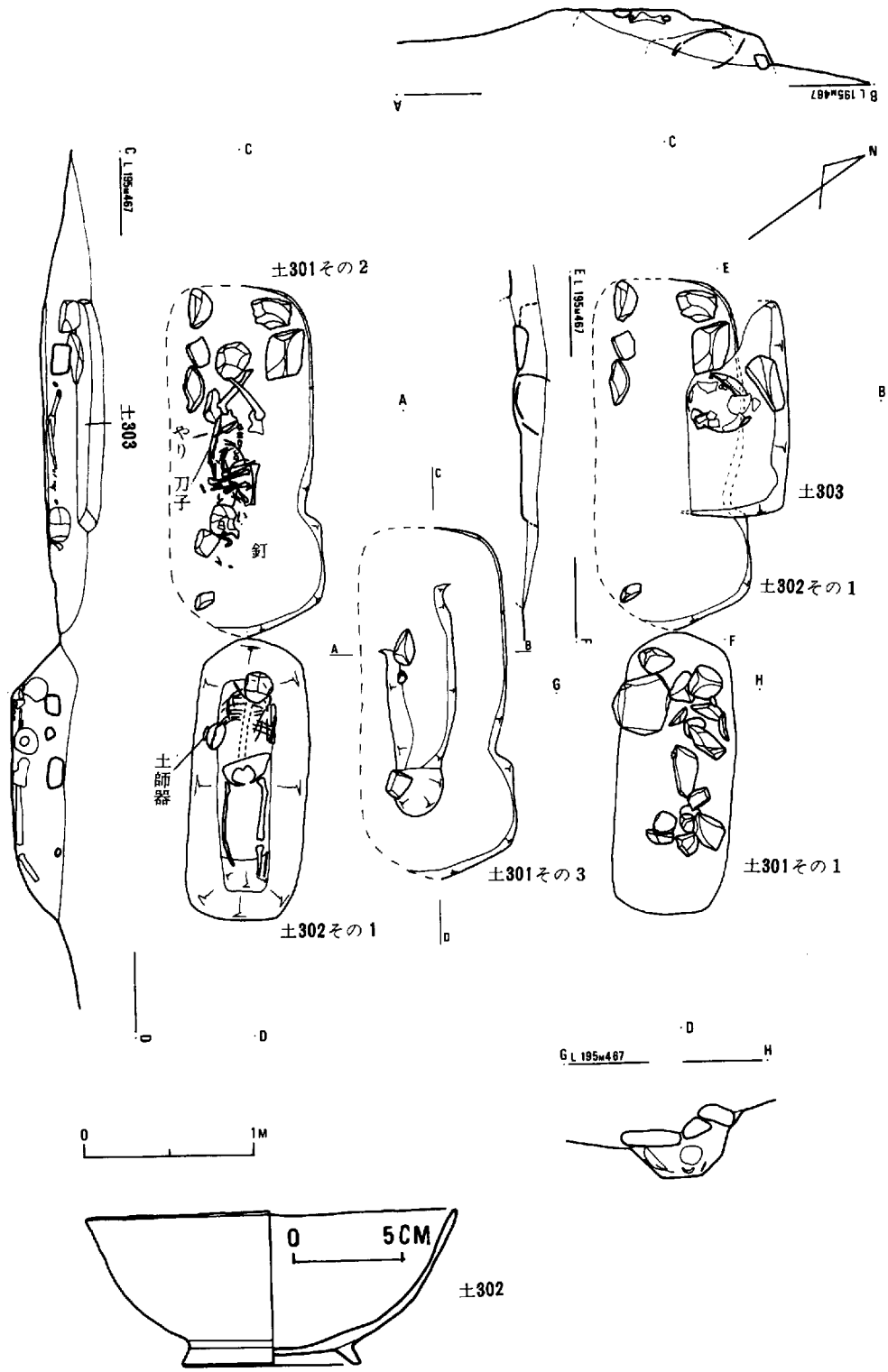
鏃先（第38図の２）は鍛造りで，穂の長さ９㎝・巾（茎近くで）３㎝・厚み 0.8 ㎝・茎の長さ６㎝を測る。穂と茎とは一直線にならないで，約10度ずれている。

土302（第37図）

土302は土301のすぐ東に接して小口をつき合わせる形で掘られた土壙墓で，長軸方向は土 301 のそれとほぼ同じである。1.66ｍ×0.7ｍ×深さ 0.32ｍの土壙を掘り，土 301 とは逆に頭を西にして遺体を入れている。人骨の残存状態は土 301 のそれに比しかなり悪く，また，右足は左足よりも細い。これは保存状態だけでなく，生前の病気によるものではないだろうか。虫歯も14本あり，そのうちの数本は現在では抜歯を要する程度に進行していた。遺物は第37図に示した土師器の椀を一つ持っていた。かなり良質の土師器で，径16.5㎝・高さ 6.9 ㎝・張り付け高台の高さ 0.8 ㎝を測る。土 302 は，土 301 と共に平安時代後半の時期で，



第36図　火301出土鉄器・玉類実測図



第37図　土301・土302・土303平面図・断面図および土302出土土器実測図

その埋葬は非常に近い時期のものであろう。

土303 （第37図）

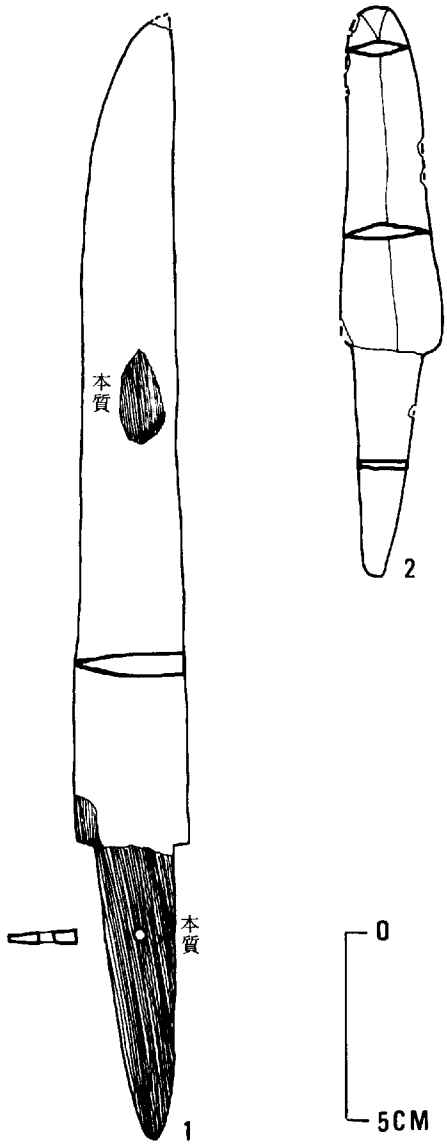
土303は，土301を埋めた後にその直上に掘られたもので，一部は土砂の流失に伴って消滅している。土壙の大きさは，長さ1.25m・巾推定0.7m・深さ現存0.18mを測る。この土壙のほぼ中央を若干凹めて須恵器壷を置いていた。人骨は残存せず，また須恵器の中には何ら入れられていなかった。

土303からの出土遺物は，第39図の1に示す須恵器1点のみである。口縁径22.5cm・胴最大径31.2cm・高さ34.5cmを測り，胴継ぎ技法がみられる。外面は右上り平行文のタタキを行ない，胴下半部はさらにその上に縦方向になるようにタタキを行なっている。内面にはタタキは見られない。

土309 （第39図）

土309は，H305のすぐ北に掘られていた。土壙の大きさは0.93m×0.75m・深さ現存0.15mを測り，隅丸方形を呈する。土309には，土301・土302が伸展葬であるのに対して，屈葬された人骨があり，その保存状態は良好ではなかった。頭蓋骨と二本の大腿骨はよく残っていたが，他の骨はほとんば識別できないまでに腐蝕が進んでいた。遺体は，頭を北に右腹を下にして屈葬されており，頭と足との間に4枚の小皿（土師器）が入れてあった。遺物は第39図の2～5に示すとおりで，一般に灯明皿と呼ばれているものであるが，灯心の燃えた跡は見られない。底部はヘラ切り・ヘラ起しで，整形は粗雑である。内面底部中央は丸く盛りあがっていて，北房町内の植木遺跡出土の土師器小皿に類似するものである。

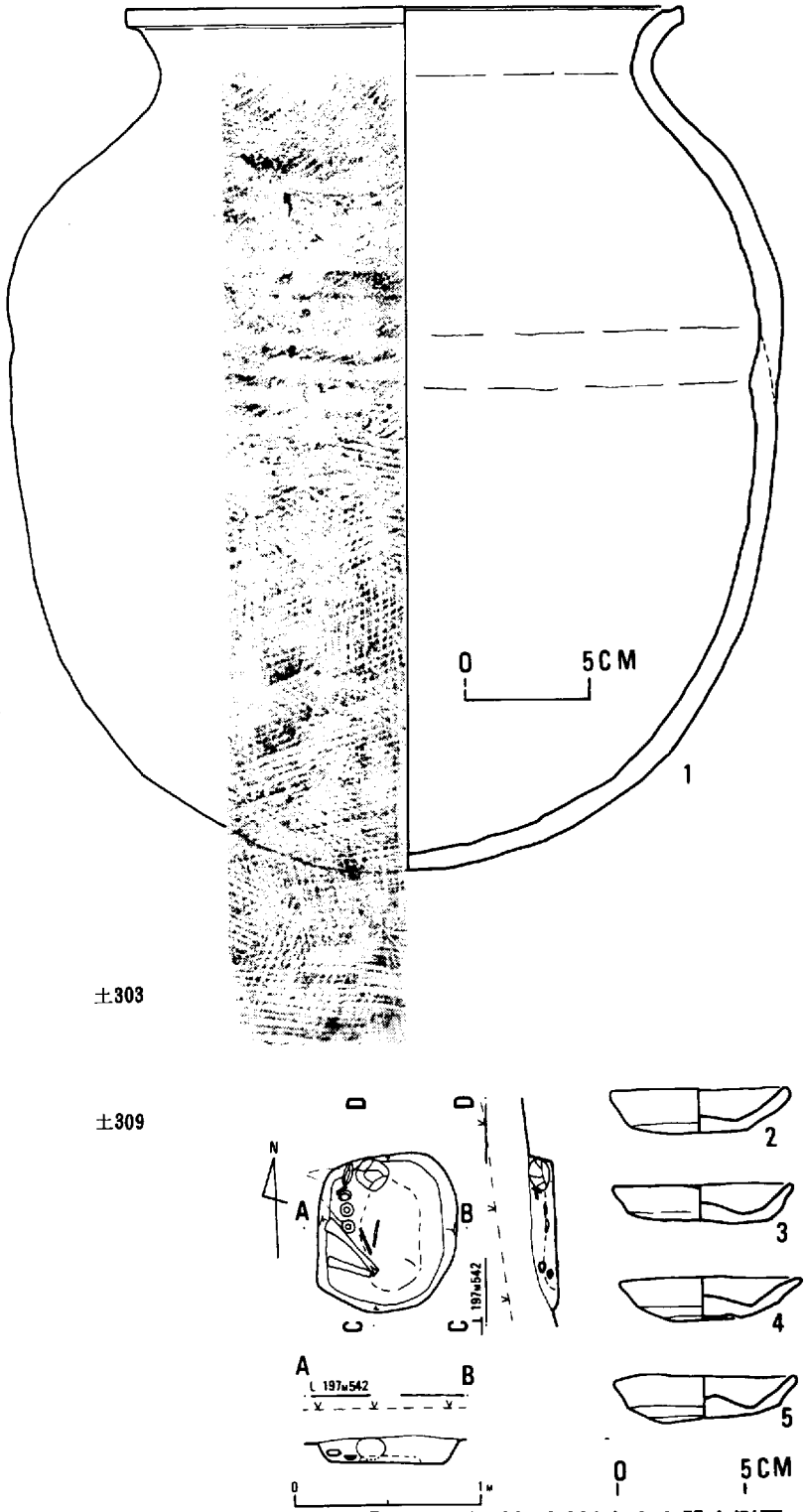
土301～土303は，平安時代後半のものであり，土309は室町時代のものであろう。土304～土308は，遺物・人骨は見られなかったが，検出面から見て平安時代後期か



第38図　土301出土鉄器実測図

ら室町時代にかけての土壙墓と考えられる。

3区東端部分に現代墓地が存在した。この墓地は，縦貫道建設に伴って移転された所であるが，いずれも墓標のみの移転がなされただけで下部の埋葬部分（土葬）の掘り上げは行なわれていなかった。そのために，現代墓地部分は未掘のまま調査しなかった（墓地隣接の調査部分においても表土層掘り下げ中に，昭和14年埋葬の人骨が出土し，縁故者をさがし出して再埋葬してもらったこともある）。



第39図　土309平面図・断面図および土303・土309出土土器実測図

参考文献

1. 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１』　岡山県教育委員会　1972年
2. 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２』　岡山県教育委員会　1974年
3. 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』　岡山県教育委員会　1976年
4. 緑釉陶器については山田英輔氏の御教示による。

第四節　4 区

1 はじめに

4区は遺跡の北西部分に位置する。ここには村の共同墓地へ通じる道路があるため，調査は道路を現状のままにして進められた。したがって4区では，道路部分が未調査のままで残ることになったのである。

4区は北が高くて南が低いなだらかな斜面に位置する。現在は畑地になっているが，現表土から遺構面までの堆積土が厚く，調査は難行した。本調査の初期に，4区のほぼ中央部分に南北トレンチを掘って土層を確認した。それで，道路によって区分された北側を4区の第1地点，南側のトレンチより西側を第2地点，トレンチより東側を第3地点とした。4区では墳墓4，住居址10，各種類のピットが多数確認された。したがって，遺構遺物の概要の項で，墳墓，住居址，ピット，遺構に伴わない遺物に大きく分類して説明することにした。また必要に応じて，各項の終りに若干の考察を行なった。

2 遺構遺物の概要

1）墳　墓

4区には，桃山1号古墳，C－451古墳，C－452古墳，C－453墳墓が存在する。これらの遺構を墳墓で一括して扱うことにした。なお，桃山1号古墳以外の遺構については，今後新しい類似の遺構が周辺で確認される可能性があるので，便宜的につけた名称である。

桃山1号古墳（第41・42図，図版23・24）

中国縦貫自動車道の計画では，古墳の南側が用地内になるため，工事によって一部が破壊されるようになっていた。中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の席上で，対策委員，岡山県教育委員会文化課，津山教育事務所の3者で協議が行なわれた結果，古墳の全面保存が強く打ち出され，その旨を日本道路公団に申し入れた。古墳の存在する位置は，自動車道に付属する側道部分にあたっていたが，日本道路公団は設計を変更して，古墳を現在の土盛りで保存し，側道を，古墳の上に通すことになった。

したがって，調査は，古墳の全面保存を前提に，古墳の範囲をトレンチ調査で確認することと，用地内にある石室内の一部を調査することで，古墳の現状を把握することを目的に行なわれた。

古墳の位置

この古墳は，中国縦貫自動車道の用地外に存在する2号古墳とともに，古墳群を形成すると考えられる。

1号古墳は4区の北東のなだらかな斜面に存在し，南は備中川が西から東に流れる上水田（かみみずた）盆地を眼下に展望できる。

石室周辺の東，西，北の三方は開墾が進み，畑地になっている。南側は，村の共同墓地に通じる道路が造成されている。また石室の西脇には，山に通じる幅１ｍ弱の道がつけられている。この１号古墳は大きな天井石が露出しているため，近所の人々が信仰の対象にしており，調査中にも，草花を手にした古老の姿がみられた。

古墳の構造

墳丘および墳端部は，一部に採土の痕跡が認められるほどに変形し，天井石と側壁が露出している。したがって本来の墳形が，円墳であるのか方墳であるのか，断定しがたい状態である。だが石室は天井石の配列や側壁の状態から考えると，横穴式石室である。

用地幅杭から約１ｍ70㎝用地内に寄った位置で，幅１ｍのトレンチを，石室の主軸に直角方向に設定した。また石室の主軸に沿って，用地内にトレンチを設定した。前者を東西トレンチ，後者を南北トレンチとよぶことにした。東西トレンチの東側では，地山風化土砂礫層が厚く堆積し，墳端を検出できずに試行錯誤していたところ，中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の現地指導のときに，対策委員から，トレンチをさらに５ｍ延長すること，調査員が地山面と考えている面は，堆積土の途中であるから，さらに岩盤に到達するまで掘り下げるようにと指示があり，後日，溝を確認して，端部を把握することができたのである。

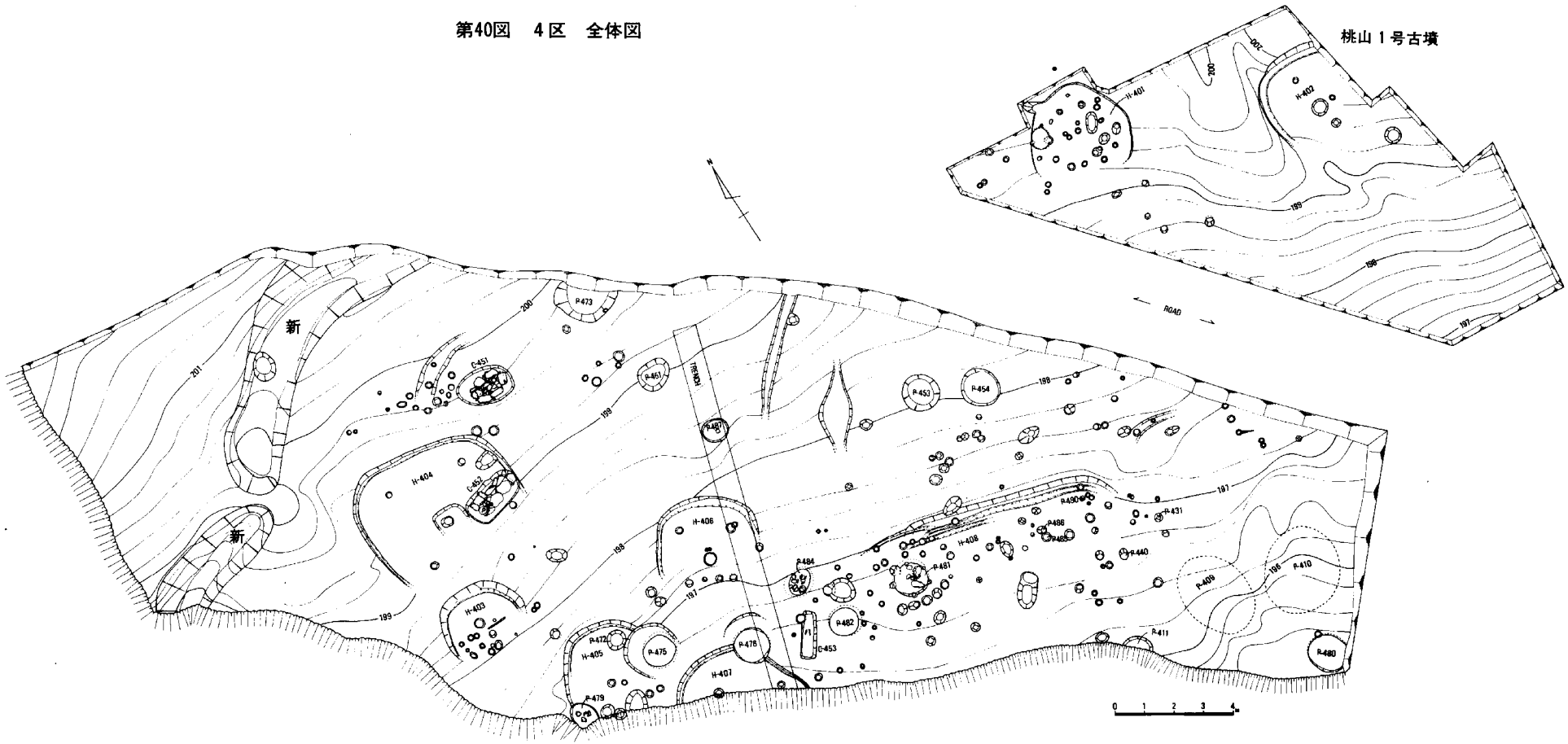
東西トレンチの東側は，現在の畑地の岸の部分であるため，土留に使用している河原石が，表土下に確認された。層位は表土，褐色土層，砂礫層，黒褐色土層，地山となる。石室の主軸から約13ｍの位置で，周溝と思われる溝が確認された。溝の下端部は現地表面から約２ｍの深さに位置する。西側は石室脇に，山へ通じる幅１ｍ弱の道がつけられているため，道の土留用の石垣が築かれている。さらに西では一部に表土を残すが，村の共同墓地に通じる道路を造成しているため，褐色土層の下が地山になっていた。トレンチは道路があるため，これ以上延長できなかった。したがって，西側では溝は確認できなかった。東側で確認された溝の下端部のレベルが，西側では現在の道路面より上の位置になるため，道路を造成するときに削平された可能性がある。なお地山面からは，後述する401号住居址が確認された。

南北トレンチの北側は用地外になるため，現地表面のレベルを計測したのみである。南側の用地内部分は，石室の崩壊が著しく，天井石や側壁の石が散乱していた。層位は，表土，褐色土層，砂礫層，黒褐色土層，地山となり，東西トレンチ東側での層位と一致する。この南側はトレンチを拡張して調査を進めたが，石室の閉塞施設，前庭部，墓道は検出できなかった。

石室について

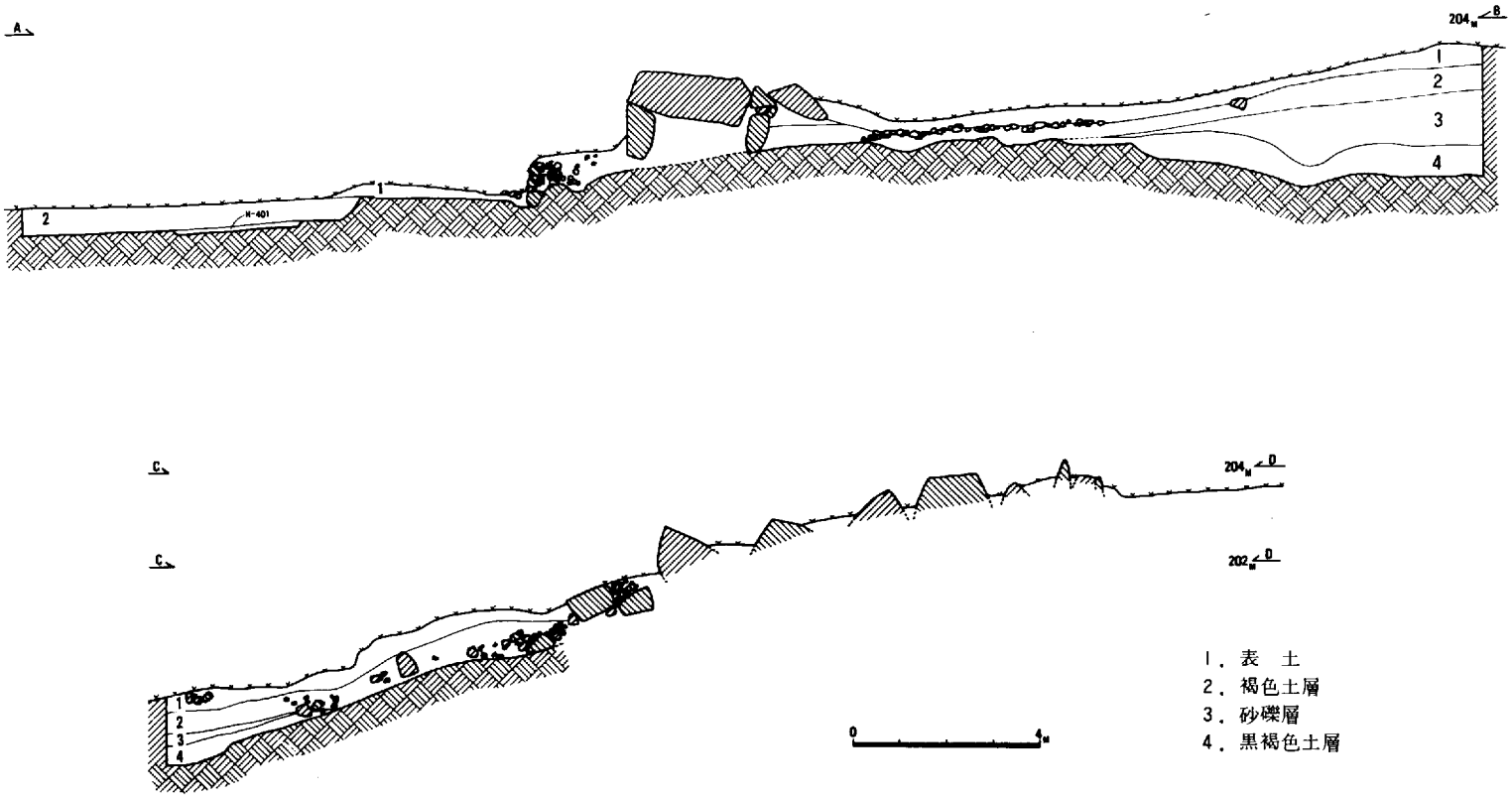
横穴式石室である。石室の天井石は露出し，元の位置を保っていない。また，調査が全面保存を目的に行なわれ，用地内の一部に限られたため，詳細については不明である。石室内の調査は，主軸方向に幅60㎝の壁を残して，東西トレンチを設定した天井石の現位置の直下60㎝までに限られた。天井石は転落しているものも含めて，現地に８枚確認されている。石室の崩壊が著しいため，持ち去られたものがあると仮定するならば，それ以上になるが，石室の規模と天井石の大きさから推定するならば，８～10枚と考えられる。全長は約12ｍである。調査した

第40図　4区　全体図



桃山１号古墳

第41図　桃山１号古墳平面図



第42図　桃山１号古墳断面図

石室内の幅は約2mである。側壁の東側は地山面に到達しているが，西側は黒褐色土を掘り凹めて構築している。両側壁とも，小口積みと横口積みが混在し，1段だけのものと2段3段に構築しているものとがある。このことは石室の崩壊が著しいための結果によるものかも知れない。調査した範囲の床面から天井石までの高さを推定するならば約1mになる。この石室の玄室部分や袖があるのかないのかについては，用地外を調査していないために不明である。調査した範囲の石室内から須恵器8点，鉄刀1点が出土している。

出土遺物（第43・44図）

坏蓋（1）は，東西トレンチが切っている天井石（ア）の南に出土した。もう1枚の天井石（イ）の直下50cmの位置で，西側壁に寄ったところから，口縁を上にして出土した。口径13.0cm・器高4.0cmを測る。天井部が平で，体部との境に稜線を有する。口縁端部はやや内傾している。天井部はヘラ削りが行なわれ，体部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向は右廻りである。胎土中には砂粒が多く，焼成は良好で灰白色を呈する。この土器は，津山市二宮大成遺跡の古墳出土遺物で，6世紀末葉～7世紀初頭に比定されているA類に属する。

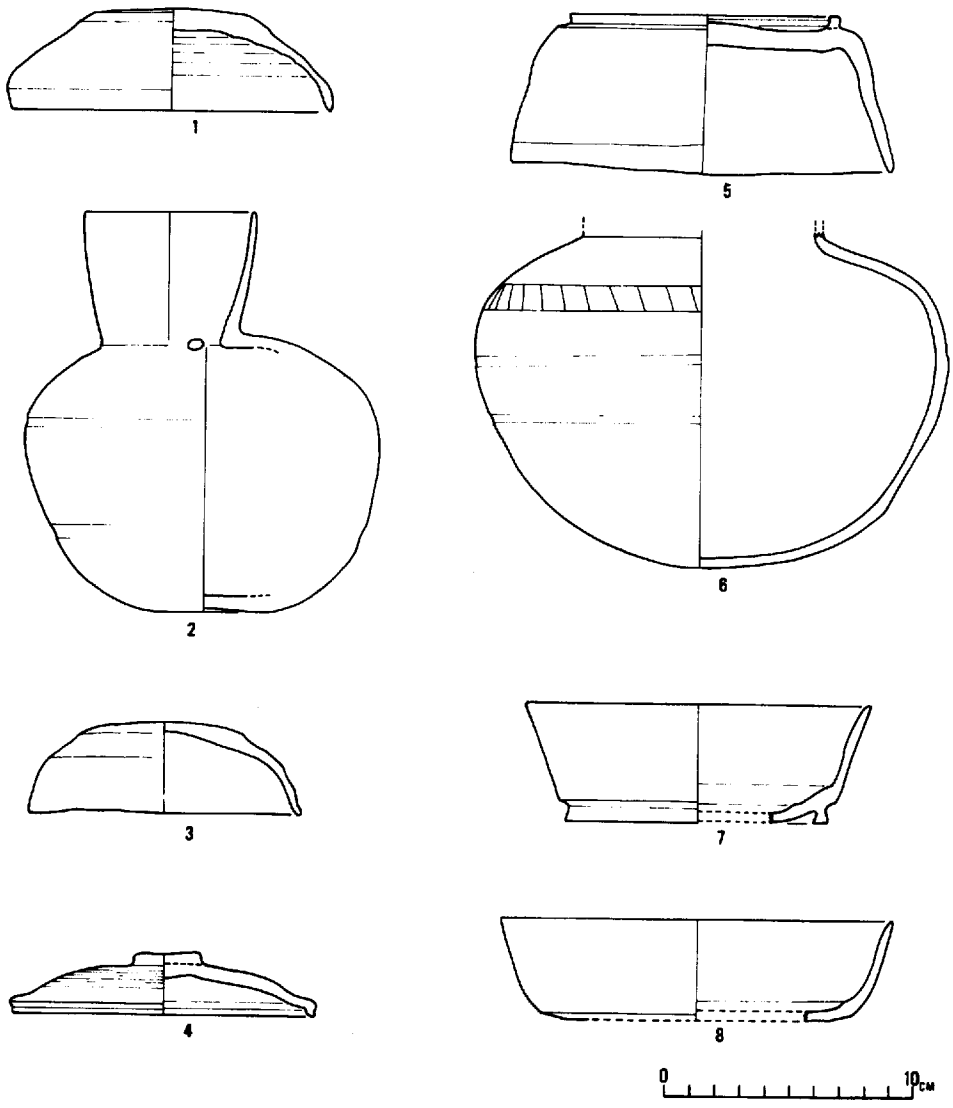
長頸壷に似た平瓶（2）は，天井石（ア）の直下20cmの位置で，西側壁に接して頸部が上の状態で出土した。胴部最大径14.3cm・器高15.7cmを測る。頸部がほぼ垂直に立ちあがり，端部はやや内傾している。頸部と胴部の境に楕円形の浮文を2個有する。胴部には2本の浅い凹線が施されている。頸部から胴部にかけては横ナデが行なわれ，底部はヘラ削りを施し，浅い凹みをもつ。頸部から胴部の上半まで自然釉がかかり，焼成は良好である。胎土中には砂粒が少なく，灰色を呈する。この土器は坏蓋（1）とほぼ同時期と考える。

坏蓋（3）は，天井石（イ）の直下40cmの位置で，東側壁に寄ったところから，口縁部を上にして出土した。口径は11.5cm～11.0cmと歪んでおり，器高3.6cmを測る。天井部がほぼ平で体部との境に稜線を有する。口縁端部は，わずかに外反している。天井部はヘラ削りが行なわれ，体部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には砂粒が多く，焼成は良好で灰色を呈する。この土器は，二宮大成遺跡の古墳出土遺物のA類と，7世紀前半に比定されているB類の中間に属する。

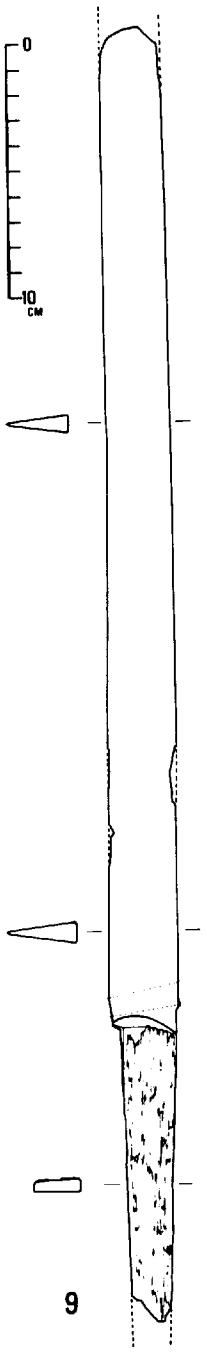
坏蓋（4）は，天井石（イ）の直下40cmの位置で坏蓋（3）と並んで，つまみを上にして出土した。口径12.4cm・器高2.5cmを測る。扁平で中凹みのつまみを中心よりややずれた位置にはりつけている。口縁端部は下方へ短かく屈曲し，先端はにぶい稜をなす。天井部はヘラ削りが行なわれ，口縁部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には砂粒を多く含み，焼成は良好で灰色を呈する。この土器は久米郡久米町宮尾遺跡A溝出土の8世紀中葉に比定されている遺物に類似する。

坏身（5）と，頸部を意識的に破砕した長頸壷と思われるもの（6）は，セットになって天井石（ア）と天井石（イ）の中間点で，天井石（ア）下面のレベルより30cm下の位置から，側壁に接して出土した。6の内部には炭化した人骨が，ぎっしり入れられていたので，坏身（5）は蓋の役目をしていたと考えられる。口径は15.3m～14.0cmと歪んでおり，器高6.3cmを測る。

貼り付け高台を有するもので，底部と体部の境界は丸味をもって屈曲している。全体に横ナデを施し，底部にはヘラ削り痕跡が残っている。胎土中には細かい砂粒を多く含み焼成は悪い。器壁には褐色部分を残す。灰色を呈し，一部が褐色になっている。この土器も宮尾遺跡A溝出



第43図　桃山1号古墳出土遺物



第44図 桃山1号古墳出土遺物

土遺物に類似する。長頸壺と思われるもの（6）は胴部最大径19.0㎝・胴部の高さ13.0㎝を測る。頸部は破損しているため不明である。胴部上位には線刻文を有している。胴部は横ナデを行ない，底部はヘラ削りを施している。ヘラ削りの方向は右廻りである。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は悪く，灰白色を呈する。

坏身（7）は，6の内部のほぼ中央部から，炭化した人骨と一緒に入っていた小破片である。人骨と一緒に入れていたのは，何か意図があるのかもしれない。貼り付け高台を有するもので，底部と体部の境界は明瞭で，屈曲している。全体に横ナデを施し，底部にはヘラ削り痕跡を残す。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で灰色を呈する。この土器も宮尾遺跡A溝出土遺物に類似する。

坏身（8）は，天井石（ア）と天井石（イ）の中間で坏身（5）に接し，底部を上にして出土した。小破片のため詳細については不明である。高台を有しないもので，底部と体部の境界は丸みをもって屈曲している。全体に横ナデを施し，底部にはヘラ削り痕跡が残っている。胎土中には砂粒を多く含み，焼成は悪い。器壁には褐色部分を残し，白灰色を呈する。この土器は，宮尾遺跡A溝とほぼ同時期と考える。

鉄刀（9）は，天井石（ア）の直下で主軸方向に残した幅60㎝の壁内より出土した。この出土状況は，旧地権者が古墳の周囲の草取りをしていたら，刀が出てきたので，石の間に埋めておいたという話と一致する。だが古墳の周囲ということだけではっきりした元の出土地点は知らされなかった。現存する刀身39.5㎝・茎（なかご）11.4㎝の直刀で目釘孔はない。関（まち）部分には，刀，背とも段を有する。刀身寄りの関部分には，斜め方向の錆が存在するから，本来は鍔（つば）があったと考えられる。茎には木質が横方向に存在し，刀身では部分的に確認できる。鞘（さや）にいれられていたかどうかは不明である。茎先は破損している。切先は破損していると考えるが，先端がやや扁平なので，両刃造りになっているのかも知れない。全体に硬質で良好のものである。

石室内の調査は，用地内の南半分で天井石直下60㎝までに限られたため，床面の遺物については不明である。だが遺物の出土状態を考えると，調査した範囲の石室内は攪乱されている可能性がある。したがって出土遺物のうちに床面のものが含まれていると

するならば，石室を使用したのは，坏蓋（1）に比定している時期と，坏蓋（3）に比定している時期の，少なくとも2期が考えられる。炭化した人骨は，火葬によるものと思われ，この古墳が使用されなくなった後に，埋葬場所をこの地にしたと考える。

この桃山1号古墳の調査終了後，ただちに図面作成を行ない，古墳の範囲と古墳の現状について，日本道路公団に説明し，工事には最大の注意をはらうように伝えた。

C—451 古墳（第40・45図，図版25）

4区第2地点北側に存在する。主体部北側には溝が確認された。溝と主体部の位置から，直径約4mの円墳であったと考える。溝の周辺に存在する，小規模の柱穴痕と考えられるピットの性格については不明である。古墳には関係がないかも知れない。

主体部の掘り方の平面形は，東西に長い楕円形を呈し，側壁築造のために2段掘りになっている。また主体部の位置が，掘り方の中央部からややずれている。天井石は存在しない。主体部が現表土下から浅い位置に存在するため，耕作のときに持ち去られたものと考える。主軸方向はほぼ東西で，北側壁に3石，南側壁に2石，東西各小口に1石を配し，箱形に組んでいる。東小口石は，上面がほかの石よりも高く安定している。主体部の内法は，長辺が1m41cm，短辺が45cm～28cmと西が狭くなっている。したがって，遺体の頭位は東になると考える。高さは不明である。床面は，土壙の下部から12cm～16cmまで埋土をした後に板石や角礫を敷いている。なお東隅から床面に密着して，須恵器4，鉄鏃1が出土した。

出土遺物（第46図，図版28—1）

床面に密着して出土した坏（1～4）は，蓋と身がセットで，身が上になって出土した。

1は口径14.4cm・器高4.8cmを測り，歪んでいる。外面の天井部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデを施している。天井部と体部の境には稜線をもたない。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には砂粒が多く，焼成は普通で，灰白色を呈する。

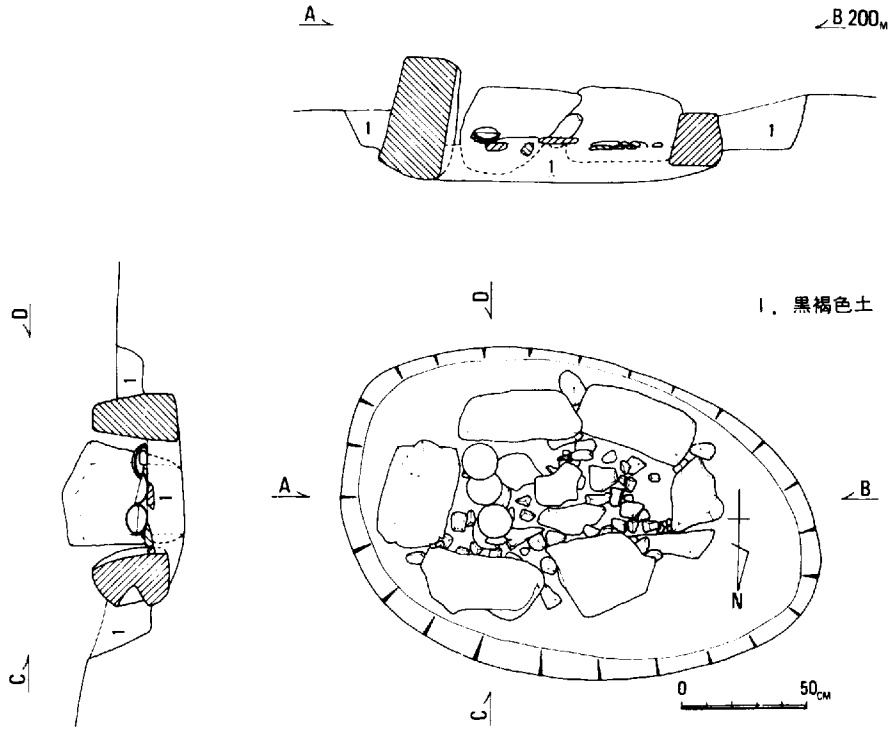
2は口径12.6cm・器高4.6cmで，たちあがりは肥厚している。底部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には砂粒が多く，焼成は普通で灰白色を呈する。この坏身は坏蓋（1）とセットになっていた。

3は口径14.4cm・器高4.5cmを測る。前述の坏蓋（1）と同様に，外面の天井部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデを施している。天井部と体部の境には稜線をもたない。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には砂粒が多く，焼成は普通で，灰白色を呈する。

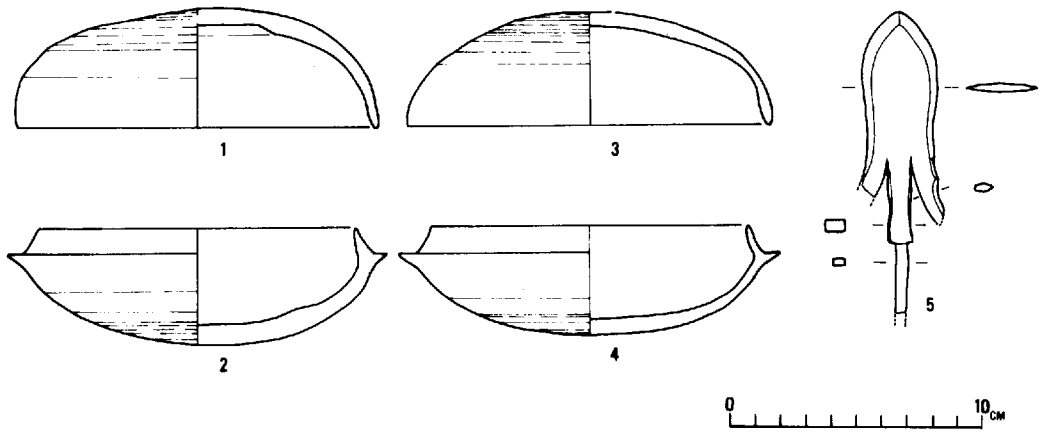
4は口径12.6cm・器高4.3cmを測る。前述の坏身（2）と同様に，底部はヘラ削りを行ない，体部の内面は，横ナデを施している。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には，砂粒が多く，焼成は普通で，灰白色を呈する。この坏身は坏蓋（3）とセットになっていた。

以上の土器は，6世紀後半に属すると考えられる。

鉄鏃（5）は，有茎平根式に属すると考える。逆刺を有し，先端は外に大きく開く。逆刺の片方の先端を欠損しているが，硬質で良好のものである。



第45図　C－451古墳主体部



第46図　C－451古墳出土遺物

C－452 古墳（第47図，図版26）

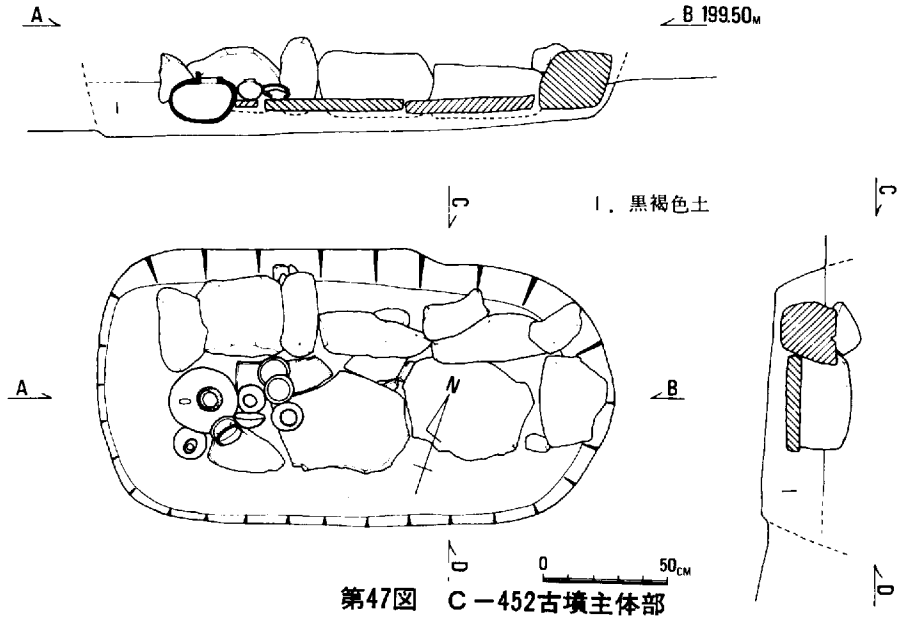
後述する404号住居址の床面上部に位置する。表土から浅いところに存在するため，耕作によって撹乱されている。主体部だけが残っているだけで墳丘や周溝については，不明である。

主体部の掘り方は，地山面をわずかに掘り凹め，平面形は長方形に近い形を呈する。天井石は存在しない。側壁は片方のみで，５石が残存している。石はフットボール大の大きさのもので，横口積みと小口積みを併用している。小口部分も片方のみが残っているだけで，１石を使用している。床面は板石を使用している。主体部より須恵器が９個体出土したが，このうちの平瓶２個体の埋葬部分には，床面の板石が存在しない。床面の板石は，土壙掘り方の底面に密着していない。主体部の内法は，破壊が著しいため不明である。この主体部は竪穴式石室であると考えるが，側壁と小口が現在残っているように１段だけのものか，２段以上になっていたのか不明である。

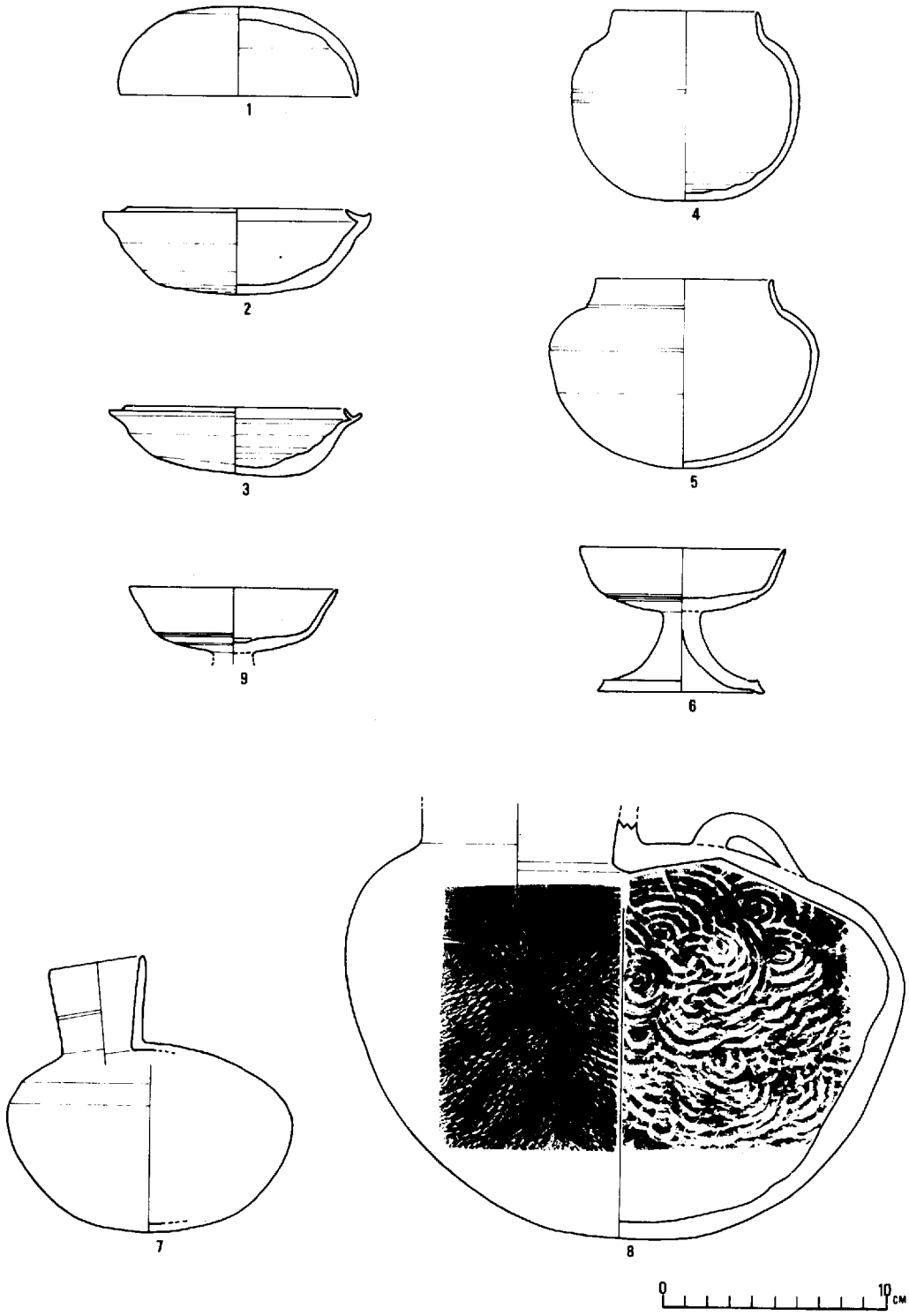
出土遺物（第48図，図版27）

この古墳の主体部より，坏蓋１，坏身２，短頸壺２，高坏２，平瓶２が出土している。

坏蓋（１）は，口径10.6cm，器高4.0cmを測る。天井部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデ仕上げを施している。天井部と体部の境には，はっきりとした稜線をもたない。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には３mm前後の砂粒を多量に含み，焼成は良好で，灰色を呈する。坏身（２）は，口径9.3cm・器高3.9cmを測る。底部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデを施している。底部にはヘラによる×印がある。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中に

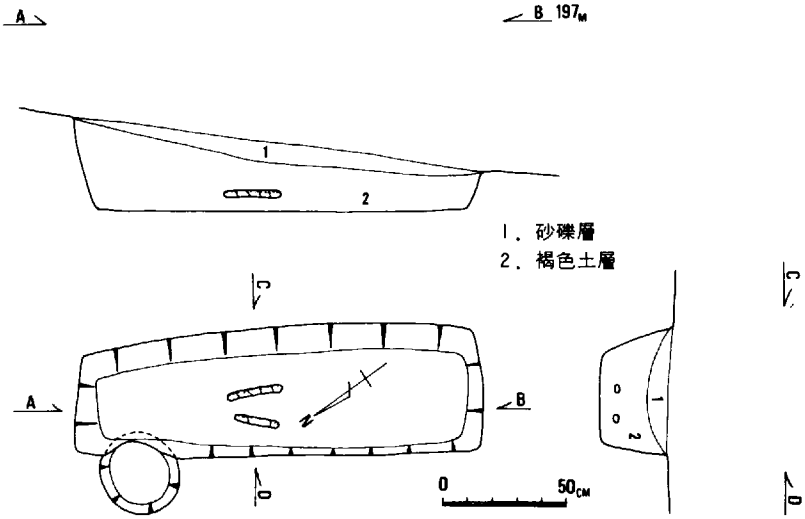


第47図　C－452古墳主体部

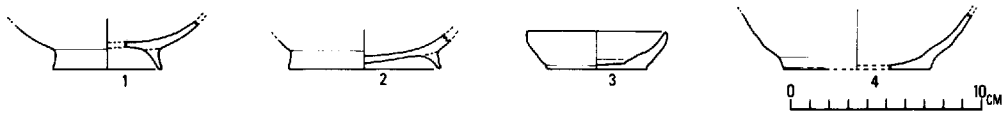


第48図C－452古墳出土遺物

は３㎜前後の砂粒を多量に含み，焼成は普通で，灰白色を呈する。坏身（３）は，9.8㎝・器高3.0㎝を測るが歪んでいる。坏身（２）と同様に，底部はヘラ削りを行ない，体部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向は左廻りである。胎土中には３㎜前後の砂粒を多量に含み，焼成は良好で，灰色を呈する。短頸壷（４）は，口径6.5㎝・器高8.6㎝を測る。胴部には浅い凹線状のものを２本有する。胎土中には大小多量の砂粒を含む。焼成は普通で，灰白色を呈する。短頸壷(５)は，口径8.0㎝・器高8.6㎝を測る。頸部と胴部に凹線を有し，底部は左廻りのヘラ削りを行ない，底部以外は横ナデを施している。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で，灰色を呈する。無蓋高坏(６)は，口径9.2㎝・器高6.5㎝を測る。坏部は浅く，口縁部は外上方へ開き，口縁部と底部との境には，数条の凹線状のものを有する。脚の裾部は広がり，端部は肥厚して段を有する。坏部の底部はヘラ削りを行ない，口縁部と内面は，横ナデを施している。ヘラ削りの方向ははっきりしない。脚部全体に横ナデを施している。胎土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は普通で，灰白色を呈する。破片である無蓋高坏（９）



第49図　Ｃ－453墳墓主体部



第50図　Ｃ－453墳墓周辺遺物

は，主体部からずれた位置で出土したが，本来はこの主体部内に，ほかの須恵器と共に副葬されていたと考える。推定であるが，口径は9.4㎝になると思う。無蓋高坏（6）と同様に，坏部は浅く，口縁部は外上方へ開き，口縁部と底部との境には2条の凹線を有する。坏部の底部はヘラ削りを行ない，口縁部と内面は横ナデを施している。ヘラ削り方向ははっきりしない。脚部は欠損しているため不明である。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は悪く，器壁内には赤褐色部分を残す。平瓶（7）の口縁部は，やや漏斗状になってたちあがる。ほぼ中央部に浅い凹線を有する。全体に横ナデを施しているが，底部にはヘラ削り痕跡が残る。ヘラ削りの方向は左廻りである。胎土中には，細かい砂粒を多量に含み，焼成は不良で，灰褐色を呈する。大形の平瓶（8）は，主体部が攪乱されたときに口縁部が破損をうけて，全体を知ることができない。把手を有するもので，外面には自然釉が付着している。胴部の内外面とも叩き文を有し，内面では青海波が鮮明である。

以上の土器は二宮大成遺跡の古墳出土遺物で，7世紀前半に比定されているB類に属し，器種が豊富であるから良好の資料と考える。

C—453 墳墓（第49図，図版28—2）

4区の南端で，407号住居址と482号ピットの中間で確認された土壙墓である。

平面形がほぼ長方形を呈し，内法は床面で長辺が1㎜49㎝，短辺が32㎝～22㎝と北東が狭くなっている。内部からは，床面から浮いた状態で人骨の一部が検出されたが，副葬品は全くなかった。遺体の頭位は南西になると考える。土壙は地山面よりも上位から確認され，2層の埋土がみられた。上層は4区全体に認められる砂礫層で，この層からは，平安時代以降の遺物が多いところから，この土壙墓もその時期に相当すると考える。

土壙墓周辺の遺物（第50図）

図示したのは4個体とも土師器である。埦（1）は，貼りつけ高台を有し，内面は黒色である。外面は横ナデを施し，明るい褐色を呈する。胎土中には細かい砂粒を含むが，量は少なく，良質の粘土を使用している。焼成は良好である。埦（2）も貼りつけ高台を有し，内外面とも横なでを施し，明るい褐色を呈する。胎土中には細かい砂粒を含むが，量は少なく，良質の粘土を使用している。焼成は良好である。小形の皿（3）は，器面に凹凸が多い。内外面と底部は横ナデを施し，褐色を呈する。口縁部は肥厚し，端部はやや内湾する。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。埦（4）は，内外面とも横ナデを施し，底部は糸切り仕上げをしている。小破片であるため口縁端部は不明である。胎土中にはほとんど砂粒を含まず，良質の粘土を使用している。焼成は良好で褐色を呈する。

以上の土器は，平安時代後半以降に属すると考える。

若干の考察

これまでに4区の墳墓について述べてきたが，C—453墳墓を除いて，出土遺物をよりどころに気がついたことを書いてみたい。桃山1号古墳については，調査範囲が一部分に限られていたために，少数の出土遺物と調査結果で，全体をとらえようとするには，大きな誤解が生じ

るかも知れない。

桃山1号古墳，C－451古墳，C－452古墳はほぼ同じ等高線上に存在している。また中国縦貫自動車道の用地外には，桃山2号古墳の存在が確認されているが，この古墳の位置も，前述した3基の古墳の存在している等高線の延長上になる。2号古墳の内容については，全く不明であるが，1号古墳とともに古墳群を形成しているところから，2号古墳は1号古墳とほぼ同時期のもので，横穴式石室を有すると考えられる。

これらの古墳は，古墳時代を大きく前期と後期に区分するならば，後期に属するもので，大形の横穴式石室を有するものと，小形の竪穴式石室を有するものが混在している。しかも，土器がつくられてから，古墳に副葬されるまでの時間的な経過を考えないならば，C－452古墳内の出土遺物は，桃山1号古墳の出土遺物（1～3）と併行するか，または後出のものであるところから，大形の横穴式石室に埋葬（追葬）されるものと，小形の竪穴式石室に埋葬されるものとが，ほぼ同時に併存している。この状況は何を意味するのか今後の検討にまちたいが，少なくとも後期古墳を考えるうえで，無視できない問題であることを指摘しておきたい。

2）住　居　址

4区において住居址と考えられるものは，3軒が重複しているものも含めて，10軒である。すべてが斜面に存在する住居址であるため，遺構の遺存が悪く，高い部分を残すだけである。住居址番号は確認した順序にしたがって，401号から便宜的につけたものである。

401号住居址（第51図，図版29－1）

この遺構は，前述した桃山1号古墳の調査で，東西トレンチを発掘したときに，確認されたものである。遺構の存在する位置は，4区でもっとも高い所で，その周辺は比較的なだらかな斜面になっていた。表土は，村の共同墓地に通じる道路を造成する際に削平されていたが，遺構は撹乱されていなかった。

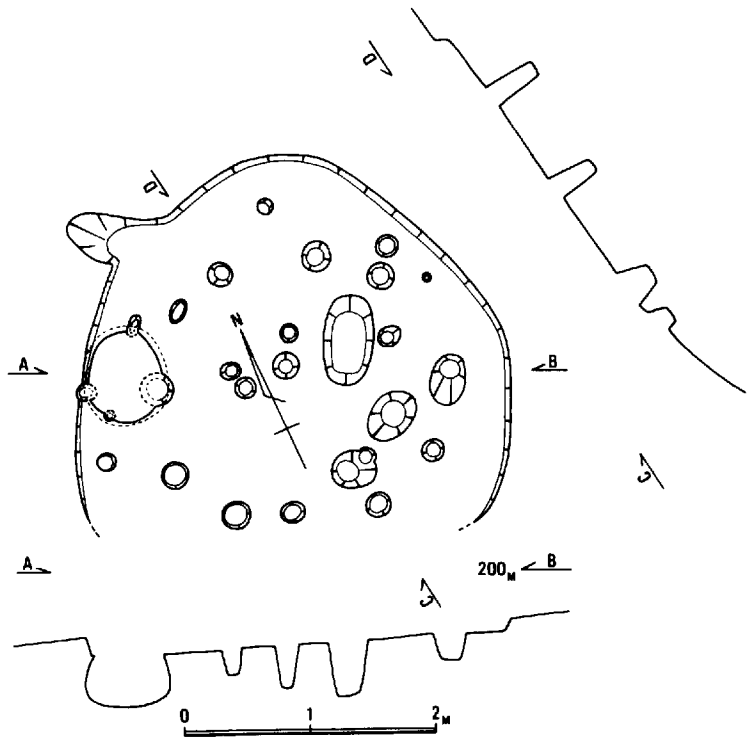
平面形は，変形した形を呈しており，円形とも方形とも決めがたい。この遺構は住居址と思われるが，はっきり断定できない。なぜなら，十数個の柱穴痕跡には規則性が認められず，小規模の住居址については例外があるものの，この遺構には壁体溝が存在しない。また，円形に近い袋状ピットと長円形のピットが存在し，中から土器片も確認されている（第53図49～51）。北方向では壁が外に張り出し，その位置からも土器片が多数確認された。床面は5㎝～10㎝の厚さの貼り床にしており，多数の柱穴痕と2個のピットは，貼り床に使用されていた粘質の土を除去した後に，確認することができたのである。したがって，遺構が重複している可能性は考えられない。

この遺構で注目すべきことは，出土した土器片が非常に多数であるということである。しかもほとんどが破片で，精査したにもかかわらず，完形に復元できるものは，1点だけであった（第52図23，図版29－2）。したがって，毎日の日常生活に，これらの多数の土器すべてが必要であったとは考えられないし，土器片の出土状態を考えると，この遺構が使用されなくな

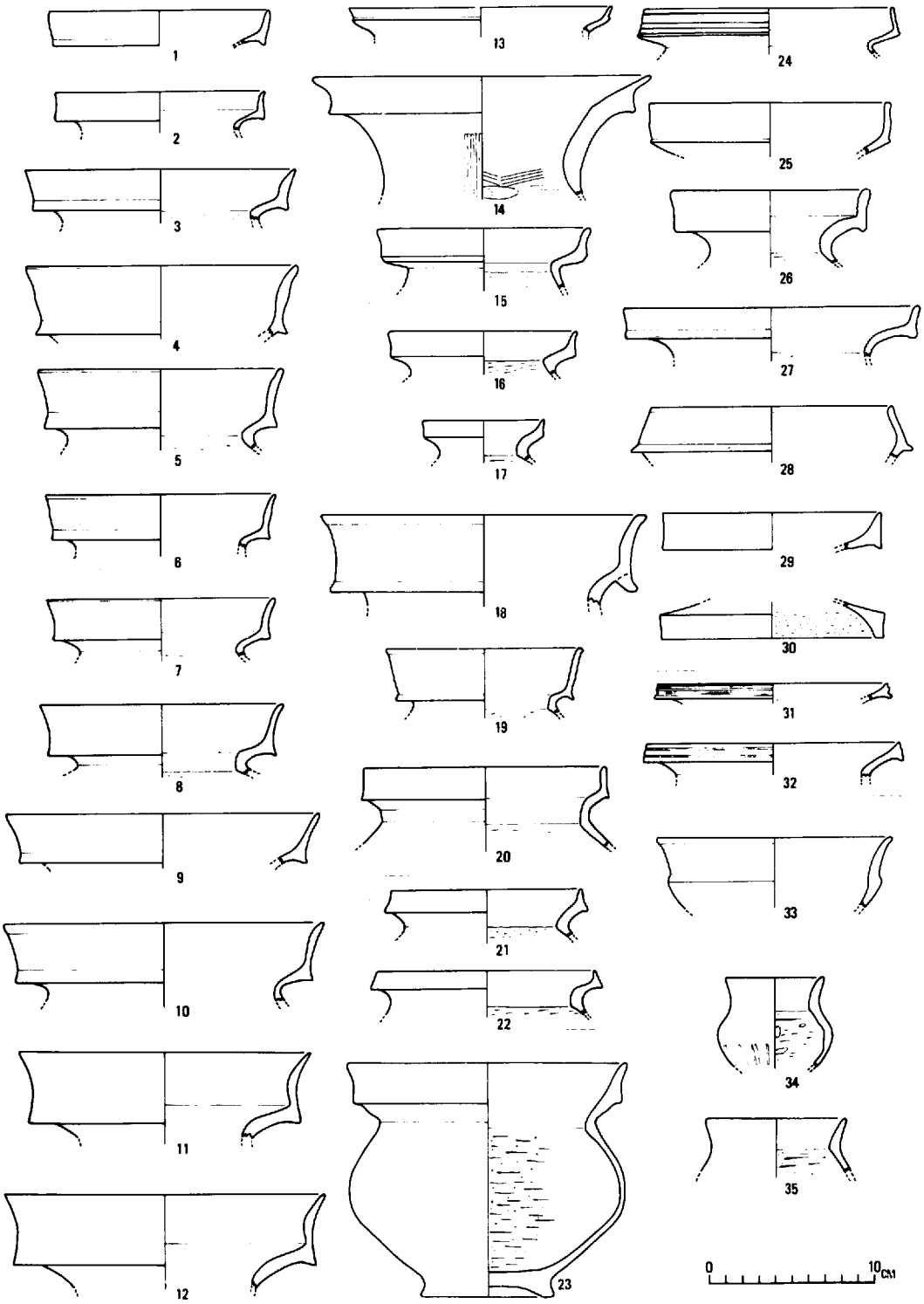
った後に，土器片を放棄したものと考えたい。

出土遺物（第52・53図，図版29—２）

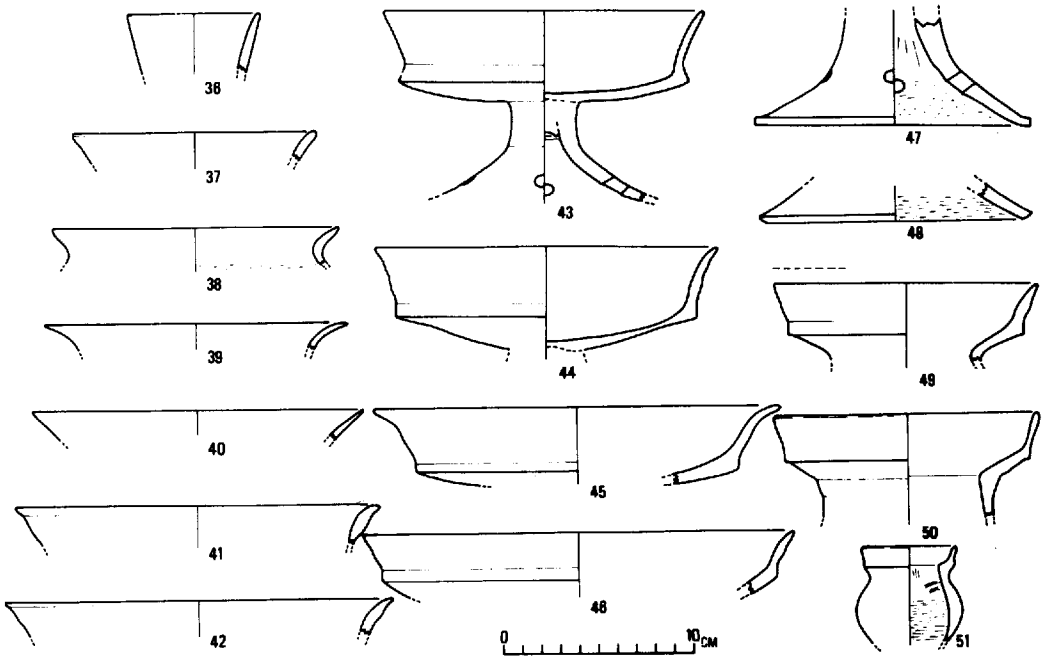
甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，さらに上方に湾曲しながら外反するものがある（１～12）。また，口縁端部は湾曲しながら上方に拡張するものがある（13，15～17）。以上のものは口縁端部はうすくなっている。口縁部が大きく拡張し，下方への張り出しがみられ，端部はうすくならないものがある（18，19）。口縁部はやや内傾し，外面に凹線文を施すもの（24）と，無文のもの（20）とがある。口縁端部は肥厚して上下に拡張し，外面には凹線文を施したもの（31，32）と，無文のもの（21，22）とがある。器台（29，30）の筒部は不明であるが，口縁部はやや肥大して上方に立ち上がり，脚部とほぼ同じ径を示す。脚の内面には横方向の浅いヘラ削りがみられる。壺の口縁部は，湾曲しながら外反し，端部はくびれてうすくなる（14）。また外に湾曲しながら外反し，端部が上方に拡張するものがある（27，28）。小形の甕の口縁部は，やや外反し，端部は丸くなっておわる（34，35）。内面には，頸部直下から横方向へのヘラ削りが施されている（３，５，７，８，14～17，19～22，26，27，34，35）。鉢は胴部が張って，口縁部は外反し，端部は上方へ拡張している。底部はつまみ出しで，上げ



第51図　401号住居址



第52図　401号住居址出土遺物



第53図　401号住居址出土遺物

底になっている（23）。内面は頸部直下から，横方向のヘラ削りが施されている。細頸壷の口頸部はやや外反し，端部は丸い（36）。二重口縁をもたない甕の口縁部は，「く」字状に外反し，端部はうすくなっている（37～42）。高坏の坏部は浅く，口縁部はやや湾曲しながら外反する。端部はいずれもうすくなる（43～46）。脚部は短かく，裾部は開いて，4個の円孔を配しているもの(43)と，やや長く裾部が開き，端部は角張っているもの（47，48）とがある。49～51は袋状ピット出土のものである。壷は筒状の頸部から斜めに広がり，さらに上方に折れ曲って拡張する（49，50）。小形の甕（51）は，丸い胴部から頸部がややすぼまり，口縁部はくせをもって拡張する。

全体に胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。外面に丹塗りを施しているもの（4，10，14，15，23，26，28，34，35，42，45，46，49～51）と，そうでないものとがある。丹塗りを施しているものは，赤色または赤褐色を呈するが，丹塗りを施していないものでも，明るい褐色を呈するものが多い。

これらの土器は，弥生時代後期後半でも終末に近い時期のものと考えられるが，21，22はやや古い様相を呈し，31，32はさらに古く，後期中葉のものと考える。

402号住居址（第54図）

この住居址は，桃山１号古墳の羨道部周辺を調査したときに，確認されたものである。古墳は，住居址の東側をかすめて，築造されていたにもかかわらず，手を加えた面が住居址の床面から約50㎝上であったため，住居址は撹乱されていなかった。

平面形は，角ばった円形を呈し，２本柱と考えられる。北から南方向に下る斜面に存在するため，南側は削平されていた。

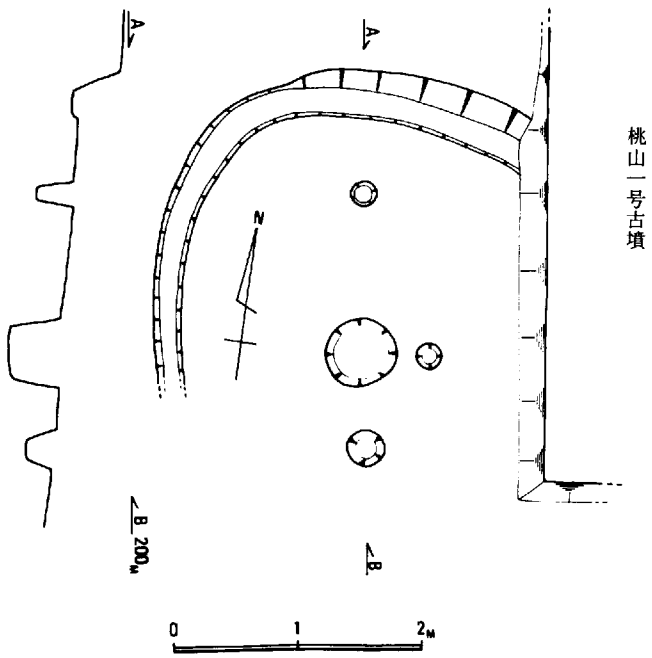
床面には円形の中央ピットが認められ，幅15～20㎝の壁体溝が存在する。

出土遺物

この住居址では，床面に密着して出土したものと，上層で流れ込んだ状態で出土したものとがあった。したがって，床面のものを下層の遺物とし，住居址に伴なうものと考えている。

下層の遺物（第55図）

甕（１～５）の口縁部は湾曲しながらやや外反し，いずれも端部を肥厚している。口縁端部は，肥厚して外面に何の施文もしないもの（１），上下へやや張り出してうすい凹線状のものが施されたもの（２），上下に張り出し，外面に凹線を施したもの（３，４）がある。頸部から胴部へ移る部分のわかるもの（１，２）では，頸部直下まで横方向のヘラ削りが施されている。底部（５）は外面に縦方向の刷毛目を施し，内面には縦方向のヘラ削りを施している。高



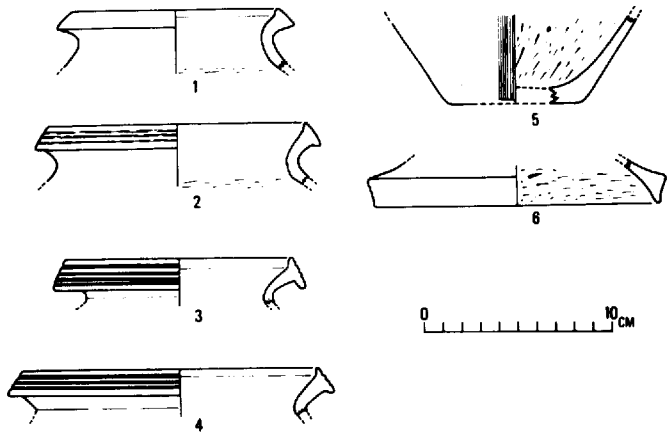
第54図　402号住居址

坏の脚部（６）は，下端部が肥厚して立ち上がり，内面には横方向のヘラ削りが施されている。いずれも胎土中には細かい砂粒を含み，焼成は良好で褐色を呈する。

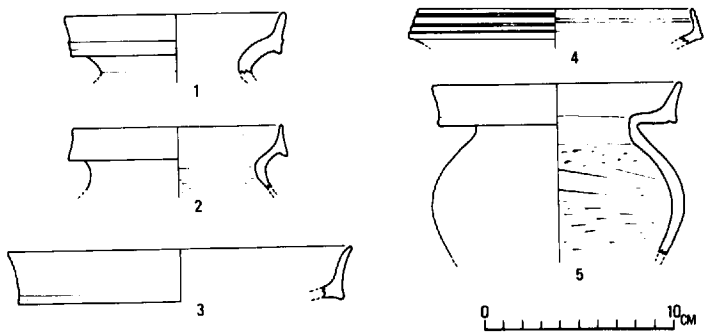
以上の土器は，弥生時代後期前半から中葉にかけての時期に属すると考えられる。

上層の遺物（第56図）

甕（１～５）は口縁部が拡張し，端部はいずれもうすくて丸い。口縁部外面に凹線文を施しているもの（４）もある。内面に，頸部直下から横方向のヘラ削りを施しているもの（２，５）もある。外面全体と口縁部内面に，丹塗りを施しているもの（１，３，５）と，そうでな



第55図　402号住居址下層出土遺物



第56図　402号住居址上層出土遺物

いものとがある。丹塗りを施しているものは赤色または，赤褐色を呈し，焼成は良好である。２は焼成が悪く，黒褐色を呈している。４の焼成は良好で褐色を呈する。いずれも胎土中には，細かい砂粒を多く含んでいる。

以上の土器は，弥生時代後期後半から終末にかけての時期に属すると考えられる。

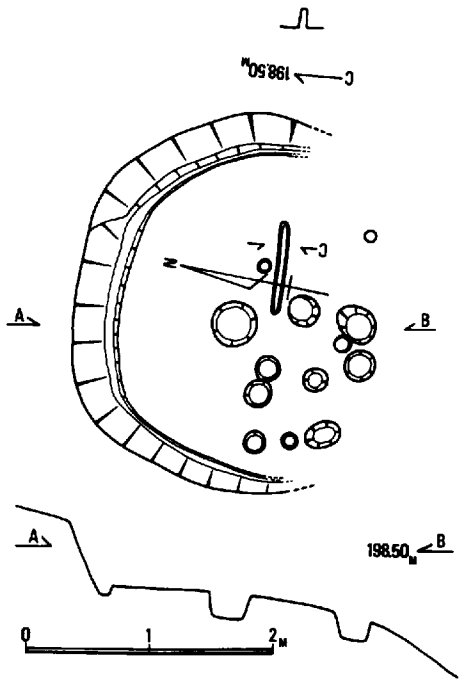
403号住居址（第57図，図版30—１）

４区でもっとも小規模の住居址である。平面形は角ばった円形を呈し，２本柱であると考える。北から西にかけての壁は，岩盤を切ってつくっていた。

床面には大小の柱穴らしき痕跡が見られるが，住居址の埋土が非常に識別困難な土質であったため，住居址に伴うものかどうか確認することができなかった。だが，中央部に位置する円形のものは，中央ピットの可能性がある。また床面東側には，東西方向に長さ約70cm，幅約５cm，深さ約15cmの溝が確認された。板のようなものが入れられていたものと考える。床面の周囲には壁体溝が見られるが，この住居址が北から南方向に下る，かなり急な斜面に存在するため，南側は確認できなかった。

出土遺物（第58図）

この住居址からは，床面に密着したものと，上面から出土したものとに識別される。床面から出土したものを下層の遺物とし，この住居址に伴なうものと考える。

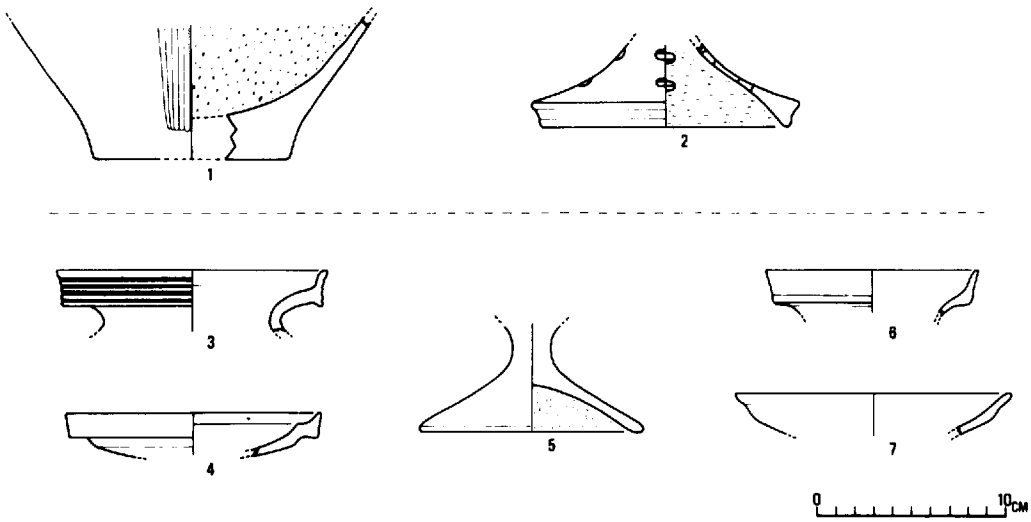


第57図　403号住居址

下層の遺物

底部はぶ厚く，外面には縦方向のヘラ磨きを施している（１）。内面にはヘラ削りが施され，胴部はうすくなっている。高坏の脚部（２）は，裾部が広がり，端部は肥厚し，円孔を縦に配している。胎土中には，非常に細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好である。外面は褐色を呈し，内面は黒褐色を呈する。

これらの土器は，弥生時代後期中葉に属すると考えられる。



第58図　403号住居址出土遺物

上層の遺物

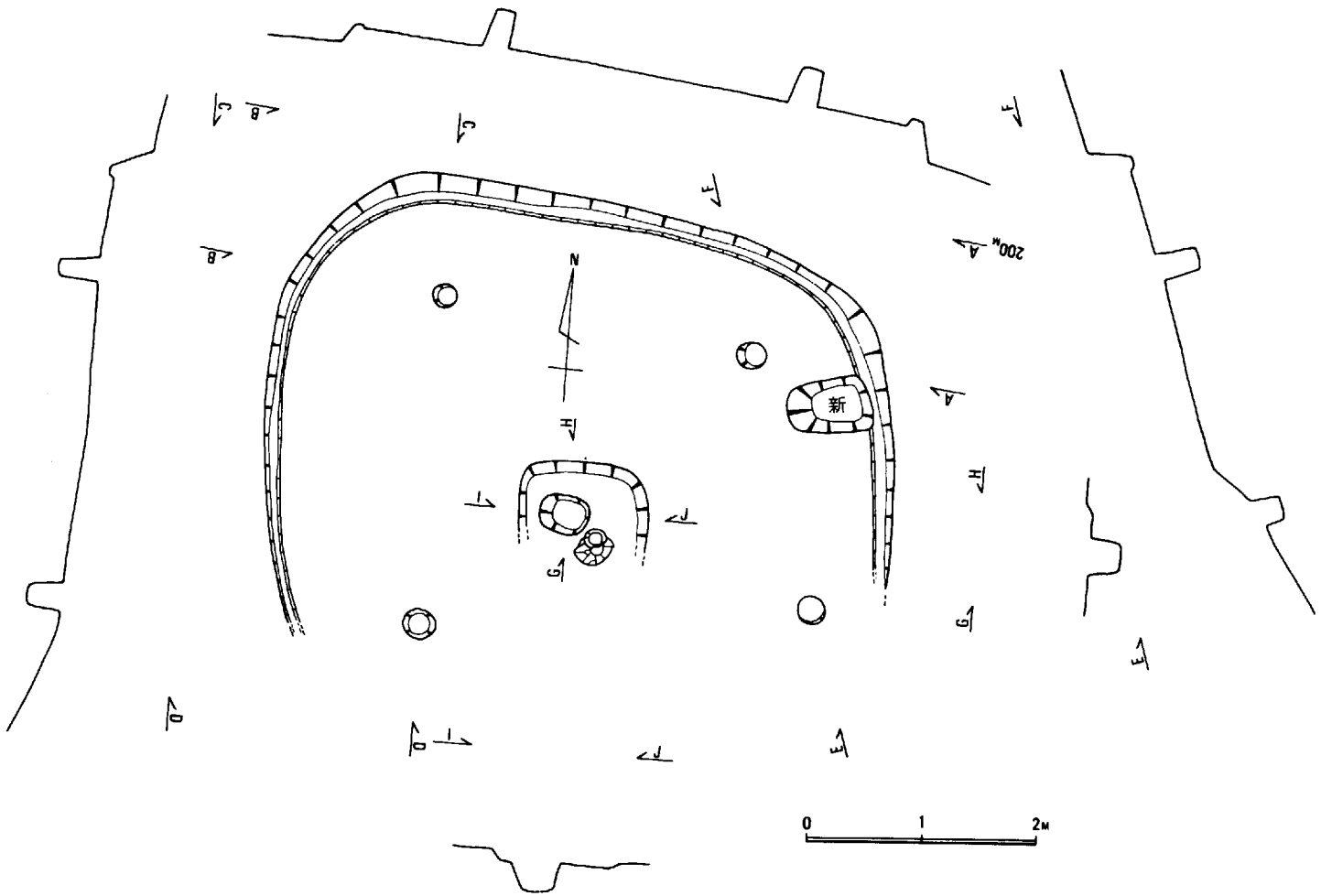
甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，端部は上方に拡張する。口縁外面には，凹線文を施しているもの（3）と，無文のもの（6）とがある。鉢は口縁端部の肥厚するもの（4）と，端部がうすくなっているもの（7）とがある。高坏の脚部と考えられるもの（5）は，棒状部から裾部は大きく開き，端部は丸くなっておわる。7は内外面とも丹塗りを施し，赤褐色を呈する。この胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好である。そのほかのものは，胎土中に細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で，褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期後半のものと，終末のものが混在していると考えられる。

404号住居址（第50図）

この住居址は，C－452号墳の主体部の掘り方を調査中に確認したものである。

平面形は隅丸方形を呈し，4本柱を有する。床面には，方形に周囲を浅く掘りくぼめた中央ピットが存在する。周辺には木質の炭化物が散在し，押しつぶされた土器が確認された（第60図1，図版26－1）。この床面の周囲には壁体溝が見られるが，南側は削平をうけているため，確認できなかった。東隅に存在するピットは，床面のかなり上面から検出されていたため，この住居址とは直接，関係のないものである。



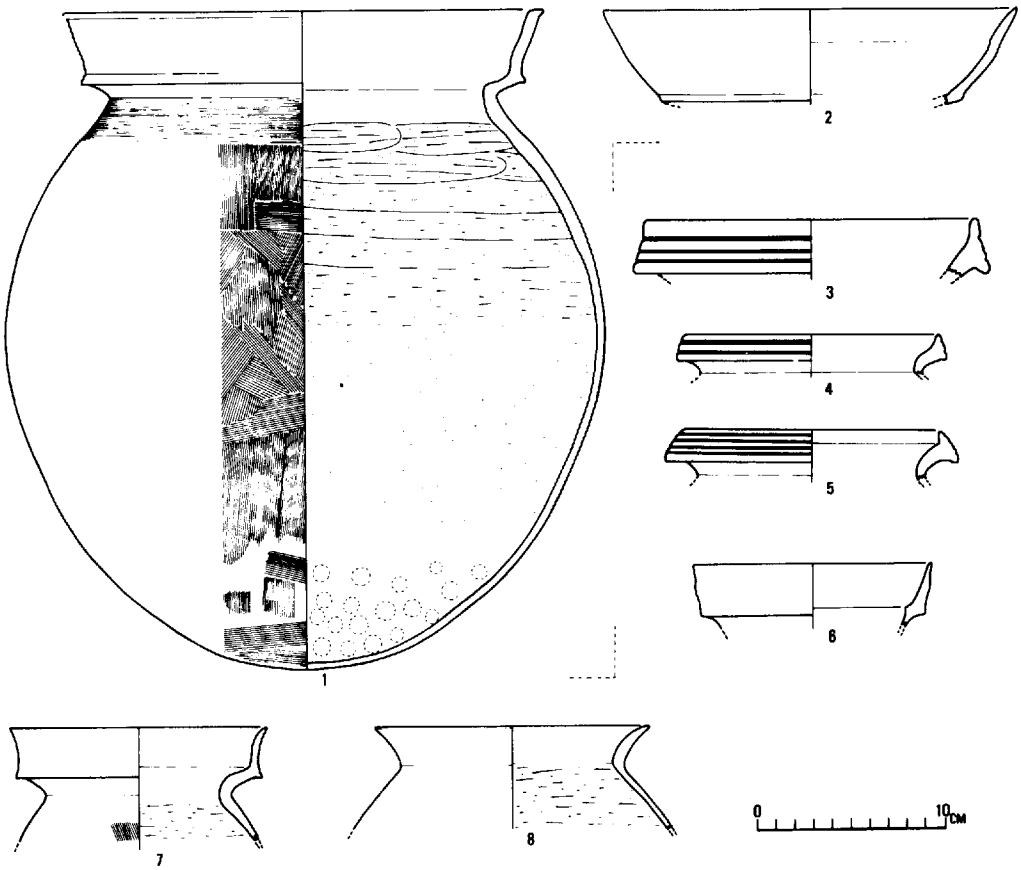
第59図　404号住居址

出土遺物（第60図，図版26－１）

床面から出土した遺物は少ないが，上層に流れ込んだ状態で出土した遺物が，若干存在する。床面から出土した土器は，中央ピットのそばから押しつぶされた状態で出土した甕と，高坏の坏部の２点しか図示できなかった。

下層の遺物

甕（１）の口縁部は，頸部から短かく湾曲しながら外反し，さらに上方へ湾曲しながら外反している。口縁端部は，うすくならずに肥大したまま，面をもっている。外面の口縁部は横ナデ仕上げをし，頸部は細い刷毛で横ナデを施している。胴部は縦，横，斜め方向の刷毛目がみられる。底部の刷毛目は部分的にしかみられない。内面の口縁部は，横ナデ仕上げをしている。頸部直下からは横方向のヘラ削りが施され，胴部では軽いナデを施している。底部には指頭圧痕が見られる。胎土中には細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。胴部の器壁はうす



第60図　404号住居址出土遺物

く，全体に明るい褐色を呈する。

高坏（2）は磨耗が著しく，ざらざらした感じがし，成形は不明である。口縁端部は中位でくせをもちながら外反する。胎土中にはやや大きい砂粒を多く含み，焼成は良好である。

以上の土器は，古式の土師器に属すると考えられる。

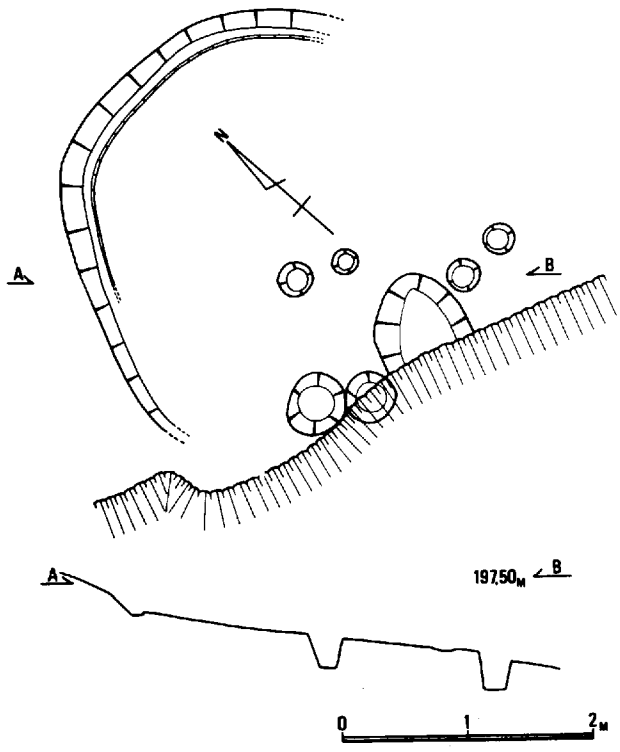
上層の遺物

甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，口縁端部が肥厚して，口縁部外面には，2～4条の凹線がみられるものがある（3～5）。また口縁部が大きく上方へ拡張しながら外反し，外面の胴部に刷毛目を施し，内面の頸部直下から横方向のヘラ削りを施しているもの(7)と，口縁部が「く」字状に外反してうすくなり，頸部直下から横方向のヘラ削りを施しているもの（8）とがある。壷（6）は，うすい頸部から肥大した口縁部が，上方へ外反している。

以上の土器のうち3～5は弥生時代後期前半から中葉に，6，7は後期後半から終末にかけて，8は終末に，それぞれ属すると考えられる。したがって上層の遺物は，各時期のものが混在している。

405号住居址（第61図，図版32－1）

403号 住居址の南に存在する。住居址内の埋土が，周辺にある地山の風化土であるため，検出作業が非常に困難であった。この住居址の上面には，472号ピットが存在していた。住居址の東側は475号ピットで，西側は479号ピットでそれぞれカットされていた。



第61図　405号住居址

平面形は変形した円形を呈する。床面を精査したにもかかわらず，この住居址の柱穴痕は2個しか確認できなかつた。したがって何本柱であるのか決めがたい。同様に中央ピットも確認されていない。床面の周囲には壁体溝が見られるが，ほかの住居址と同じように，南側では確認できなかった。

出土遺物（第62図）

この住居址内の埋土が周辺の地山の土と識別が困難であったため，床面から出土した土器片以外は作業の過程で順次取り上げてしまった。それで床面から出土したものを下層の遺物とし，埋土中のものを上層の遺物とした。

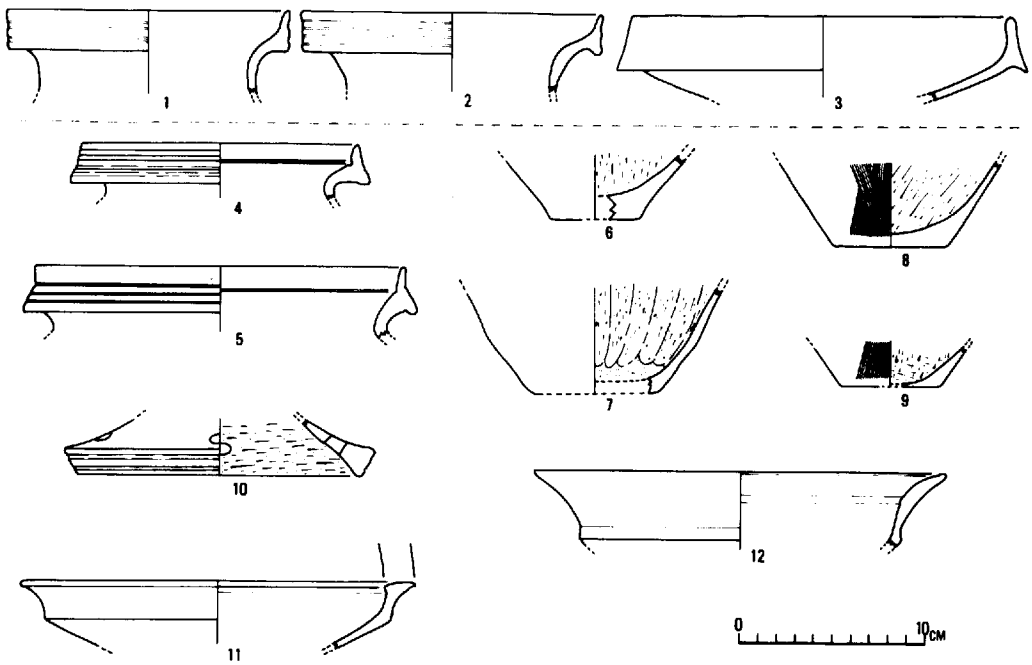
下層の遺物

壷の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，端部は肥厚して上下に拡張している。口縁部外面には，浅い凹線状のものが施されている（1，2）。器台の坏部（3）は胴部からやや内湾しながら広がり，端部は上下に拡張している。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含み，焼成は良好で，褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期中葉から後半の時期に属すると考えられる。

上層の遺物

甕の口縁部は外反し，さらに上下に拡張して外面には凹線が施されている（4，5）。底部



第62図　405号住居址出土遺物

は外面に刷毛目を施し（8，9），内面には縦方向のヘラ削りを施している（6～9）。高坏は坏部が広がり，口縁部が上方に拡張し，端部が肥厚するもの（11）と，さらに端部が湾曲しながら外反するもの（12）とがある。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含み，ほとんど焼成は良好で，褐色を呈する。11は内外面とも全体に丹塗りを施し，赤褐色を呈する。底部には，すすの付着したものや，黒斑のみられるものがある。

以上の土器は，弥生時代後期前半に属すると考えられる。

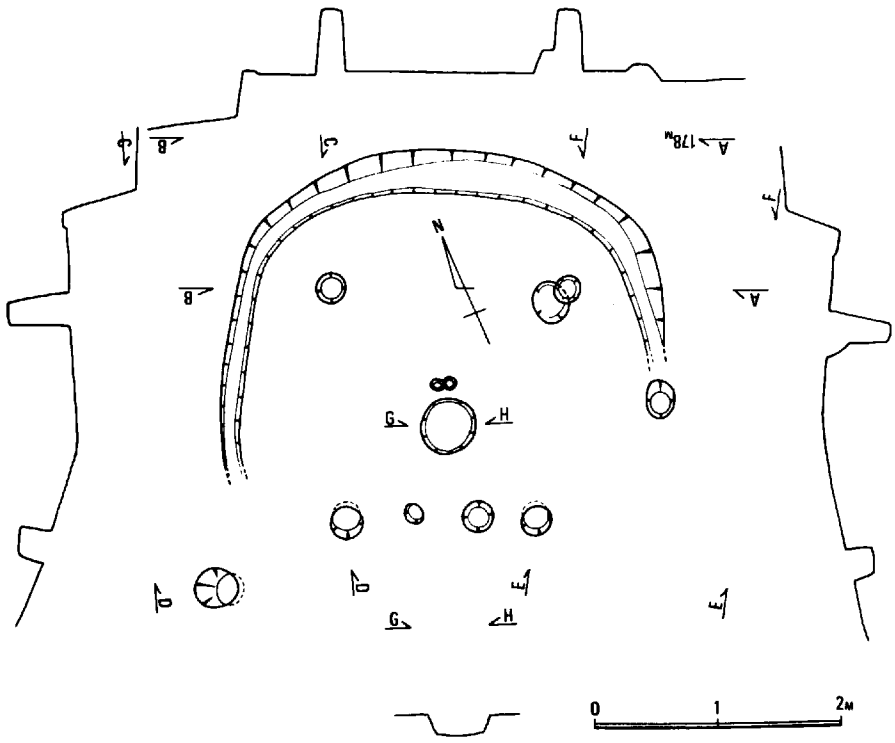
406号住居址（第63図，図版31－2）

本調査の初期の過程で，南北トレンチを発掘したときに，確認されたものである。

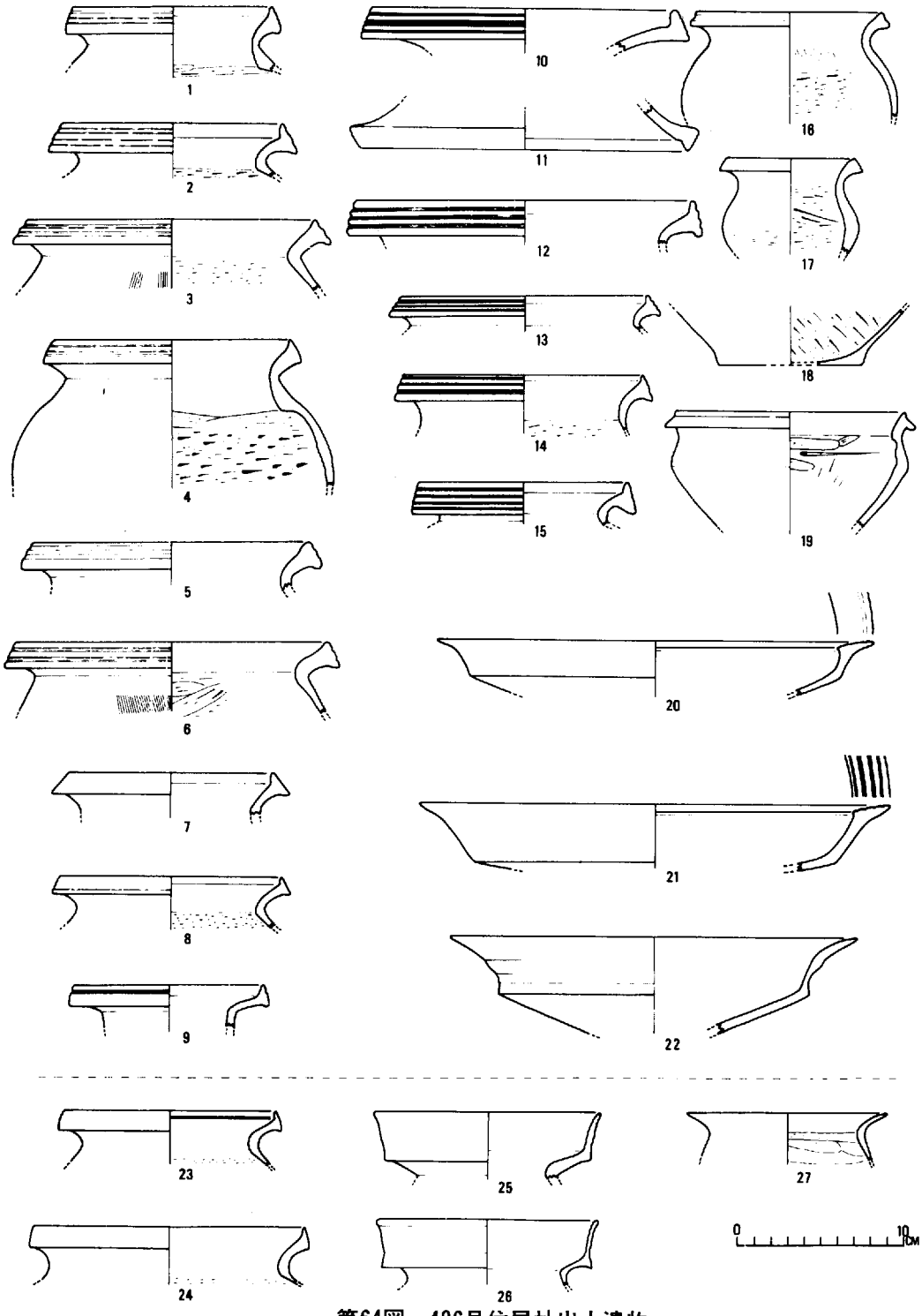
平面形は角ばった円形を呈し，4本柱である。床面の南半分は削平されているが，円形の中央ピットが確認された。床面の周囲には壁体溝が見られるが南側は不明である。

出土遺物（第64図）

この住居址では，床面から出土した遺物が多く，若干のものが，上位の流入土中から確認されている。図示した7～9は，床面から浮いた状態で出土したものである。床面の土器を下層



第63図　406号住居址



第64図　406号住居址出土遺物

の遺物とし，この住居址に伴うものと考え，上層の遺物と分類した。

下層の遺物

甕の口縁部は，頸部から湾曲しながら外反し，端部は肥厚する。口縁部外面には，凹線を施したもの（1～6，12～15)と，無文のもの(7，8，16，17）とがある。外面の胴部上半部には，縦方向の刷毛目がみられるもの（3，6）や，内面の頸部直下から，横方向のヘラ削りの施されているもの（1～4，6，14～17）がある。壷は小形で，筒状の頸部から外反し，端部が肥厚して，口縁部外面に1本の沈線を施している（9）。器台の筒部については不明であるが，口縁部が大きく湾曲しながら外反し，上方に拡張して，外面に凹線を施している(10)。脚部の径は口縁部より若干大きい（11）。鉢の胴部は，肩がはって角ばり，口縁部はやや外反し，端部は肥厚して下方に拡張する。内面には，頸部直下から横方向のヘラ削りを施している（19）。高坏は坏部が大きく，口縁部は斜め上方に拡張する（20～22）。口縁部は水平に拡張し，上面に凹線，または浅い凹線状のものを施したもの（20，21）と，湾曲しながら外反し，端部はうすくなっておわるもの（22）とがある。後者は前者より新しい様相を呈していると考える。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，そのうち若干のものには，径が3㎜から4㎜程度の砂粒をかなり多量に含む。焼成は一般に良好で，褐色または明るい褐色を呈する。21の高坏の胎土中には，ほとんど砂粒を含まず，良質粘土を使用し，内外面とも全体に丹塗りを施しているため，赤褐色を呈する。

以上の土器は，7～9を除いて，弥生時代後期前半に属すると考えられる。

上層の遺物

甕の口縁部は，頸部から湾曲しながら外反し，端部が肥厚したり（23，24），拡張するもの（25，26）と，端部がうすくなって「く」字状に外反するもの（27）とがある。内面は，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている（23，24，26，27）。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多量に含み，全般に焼成は良好で，褐色を呈する。ただ，25は内外面とも丹塗りが施され，赤褐色を呈する。

以上の土器のうち，23，24は弥生時代後期中葉から後半に，25～27は後期終末に属すると考えられる。

407号住居址（第65図，図版32－1）

4区の南側で，もっとも低い位置に存在する住居址である。北東隅は476号ピットに，南半分は現在の畑の岸によってそれぞれカットされている。

平面図は変形した形を呈しており，円形とも方形とも決めがたい。現存する柱穴痕跡は，2個でそのバランスから考え，4本柱であろうと考える。中央ピットが存在したかどうかについては不明である。床面の周囲には壁体溝が見られる。

出土遺物（第66図）

住居址内には周辺からの土砂の流入が多く，床面の遺物と上位のものとの違いは明瞭であったため，上層の遺物と下層の遺物に分類した。

下層の遺物

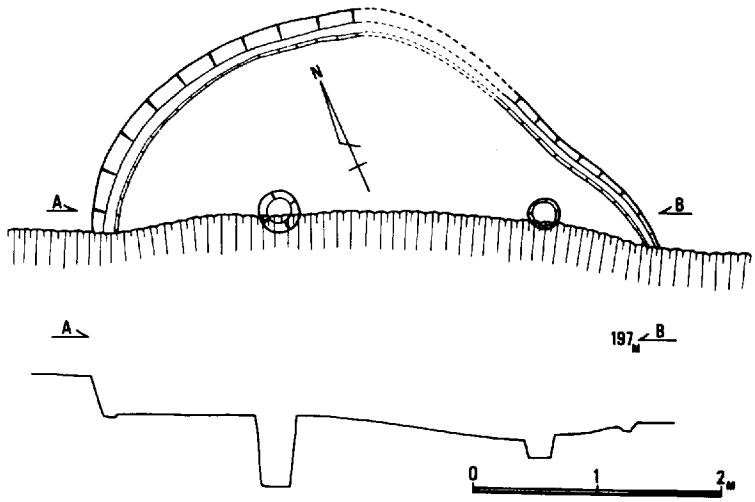
甕の口縁部は上方に湾曲しながら外反し，口縁端部は拡張している。口縁部の拡張は，上下に拡張するもの（1～3）と，上方に立ちあがるもの（4～6）とがある。内面は，頸部直下から横方向へのヘラ削りが施されている（2，3，5）。高坏の坏部は，浅く内湾しながら外反し，屈折して斜め上方に拡張し，端部はうすくなっている（7）。脚部（8，9）は柱状部から急に開き，やや内湾するようにのびながら，裾部でうすくなっておわる。4個の円孔は，外から内方向に刺突されている。外面に刷毛目が施されたり，内面に指頭圧痕がみられたりする。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。8の外面は丹塗りを施し，赤褐色を呈するが，そのほかの土器は褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期後半に属すると考えられる。

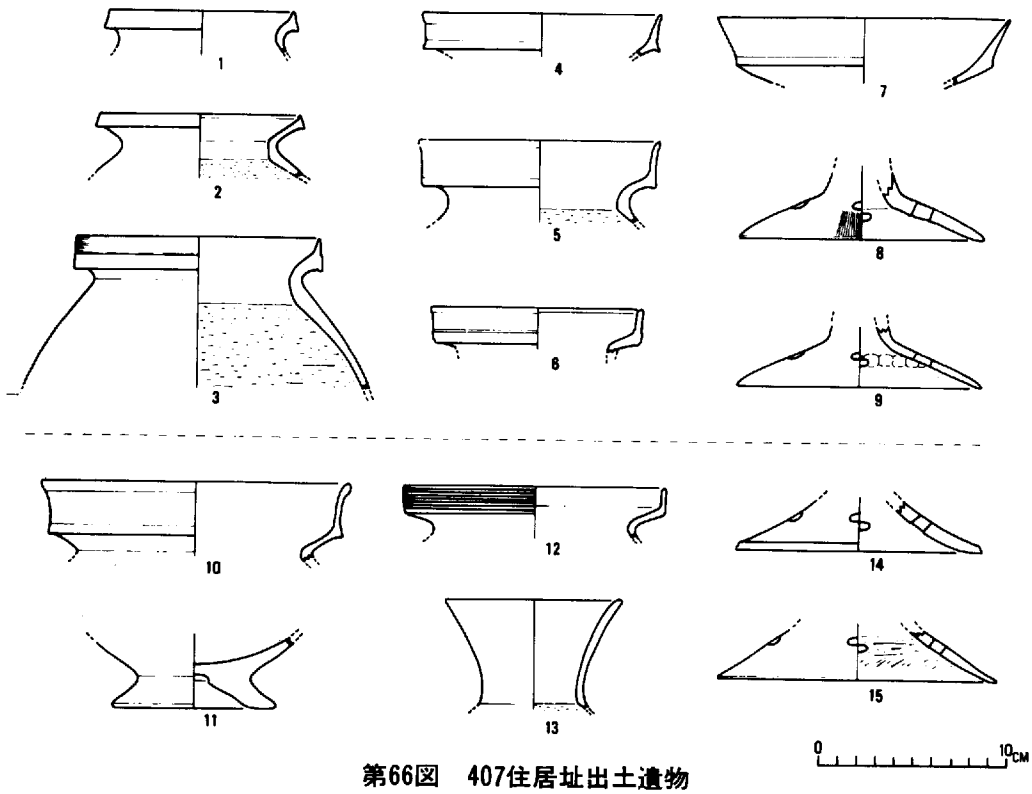
上層の遺物

甕の口縁部は，外反しながら上方に拡張するもの（10）と，上方に折れまがって大きく張り出しのみらるもの（11）とがある。直口壷の口頸部は，ゆるやかに外反する（13）。高坏の脚部では，裾部が大きく開き，端部はうすくなる。端部は角ばるもの（14），と丸くなるもの（15）とがあるが，いずれも4個の円孔を配している。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，12と13については，ざらざらした感じがする。外面に丹塗りを施したもの（11，15）は赤褐色を呈するが，そのほかのものは褐色を呈する。

以上のものは，下層の遺物より新しい時期のものと考えられる。



第65図　407号住居址

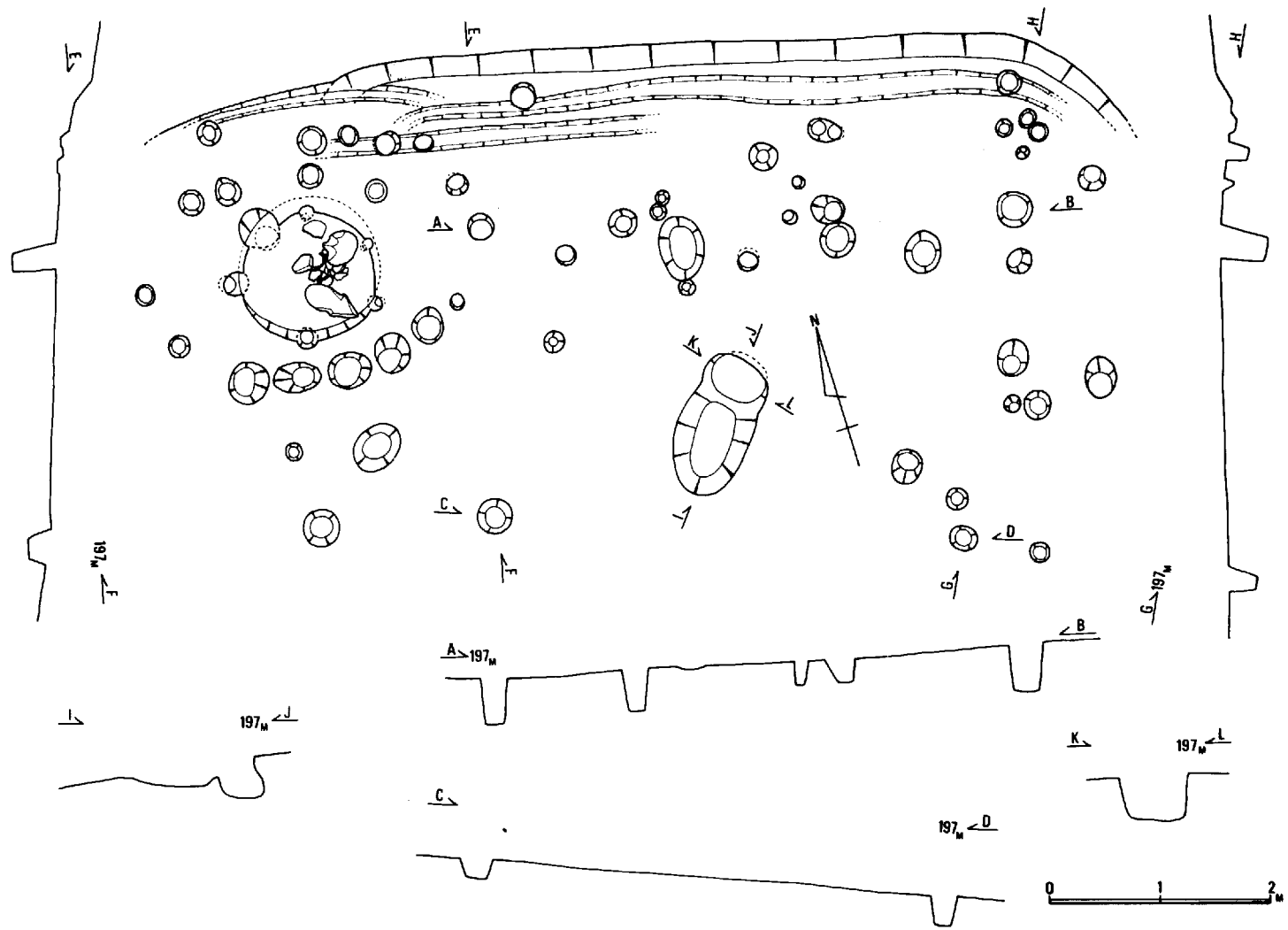


第66図　407住居址出土遺物

408号住居址（第67図，図版32－２）

この住居址の存在する位置は，４区でもっとも削平をうけている地点であったので，遺構そのものの残りは非常に悪い。調査においては，何度も削り出し作業をくりかえし，住居址であることが確認できた状態である。しかも，３軒が重複していたので，各々の住居址について説明すべきかもしれないが，つくられた時期の前後関係は確認できたものの，出土遺物がどの住居址に伴うものなのか，部分的にしか検討できなかったので，一括して扱うことにした。

第１期の住居址は，西端にその一部分が確認できるだけである。この位置には，種々のピット群が存在しているため，精査したにもかかわらず，不明な点が多い。平面形は，変形した不安定な円形になると考える。この住居址の床面になると考えられる位置に，481号ピットが存在するが，この遺構は，床面よりも低いレベルまで削り出して検出されたものであり，ピット内の埋土も，住居址のものとは異質のものであった。住居址の柱や中央ピットについては，は



第67図　408号住居址

っきりしたものが見つからなかったが，壁体溝は確認できた。

第２期は，直線的な壁体溝と，柱穴痕が存在するだけである。このことから，平面形は方形に近いものが考えられ，４本柱だったと考える。中央ピットは確認できなかったが，もともと存在しなかったのか，削平されて消滅したのか，不明である。

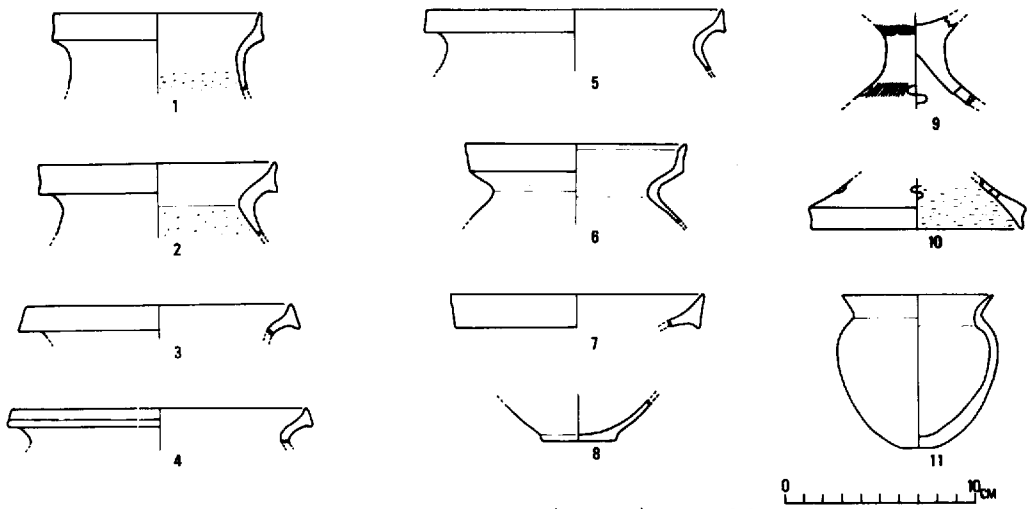
第３期の住居址は，第２期のものを拡張している。平面形は隅丸方形を呈し，４本柱である。中央ピットは長円形で，周囲に壁体溝を有する。ただ，壁体と壁体溝の間に若干の間隔があるのは，ほかの住居址と異なる点である。

出土遺物

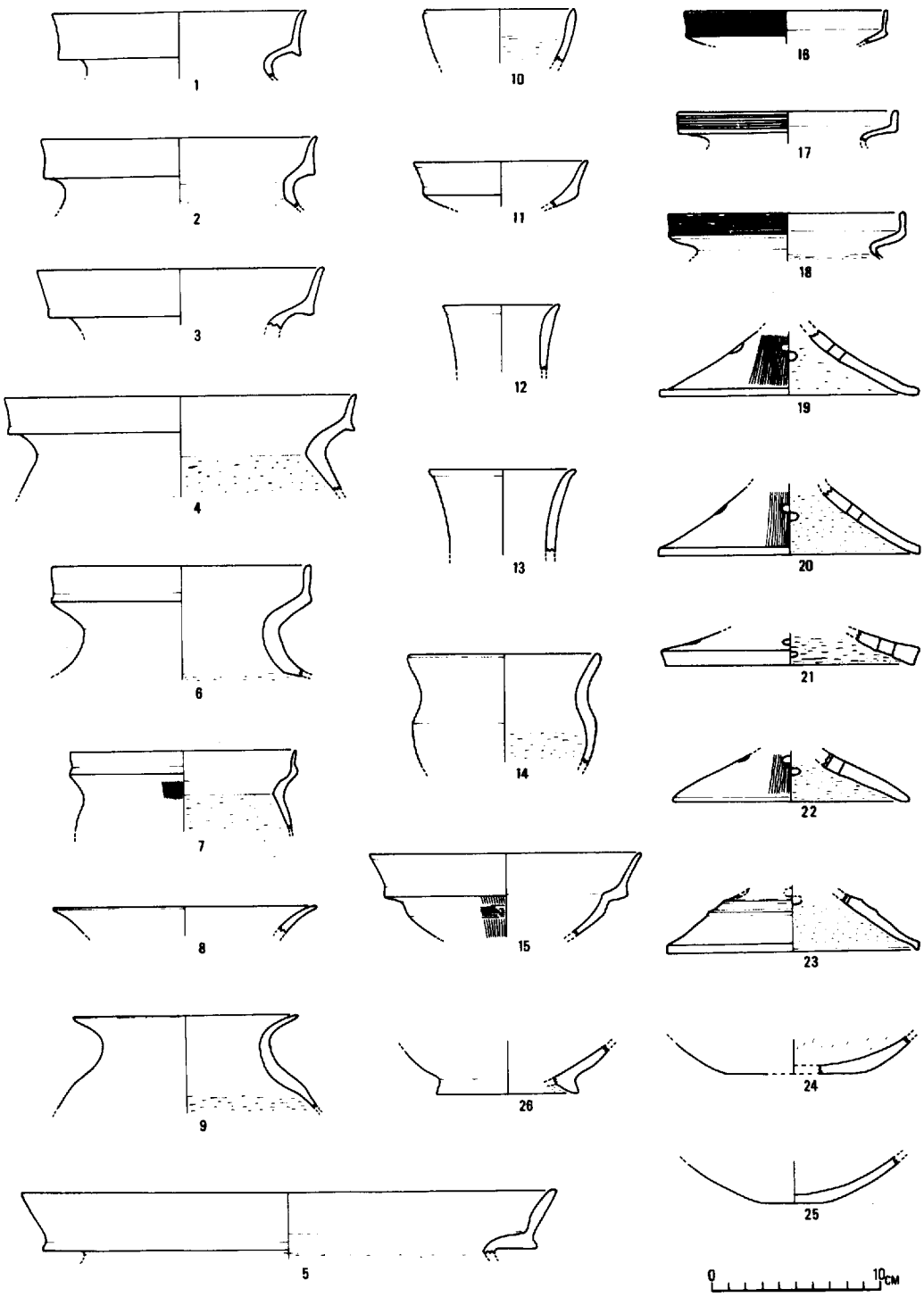
先にも説明したように，個々の遺物が何期の住居址に伴うものなのか，部分的にしか検討できなかったので，乏しい事実確認点をよりどころに，便宜的に３つに分類した。

〔**第１期出土遺物**〕（第68図）

甕は頸部から湾曲しながら外反し，端部は肥厚して上下に拡張するもの（１～５）と，上方に屈曲するもの（６）とがある。内面には，頸部直下から横位のヘラ削りが施されている（１，２）。１は壺になるかも知れない。器台の口縁部と考えられるもの（７）は，端部が肥厚して上下に拡張している。底部は小さな平底のものがある（８）。高坏の脚部は，短かい棒状部から頸部が広がり，外面に刷毛目を施しているものがある（９）。脚端部は肥厚して立ち



第68図　408号住居址（第１期）出土遺物



第69図　408号住居址（第２期）出土遺物

あがり，内面には，横方向のヘラ削りが施されている（10）。いずれも４個の円孔を配している（９，10）。小形の甕（11）は，肩部がかなり張って平底である。口縁部は「く」字状に外反し，端部はうすくなる。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は全般に良好である。９の外面には丹塗りが施され，赤褐色を呈する。11の焼成は特に良好であり，丹塗りが施されていないにもかかわらず，赤褐色に近い明るい褐色を呈する。そのほかのものは褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期後半に属すると考えられるが，10はやや古い要素を感じさせ，７は若干新しい様相を呈する。

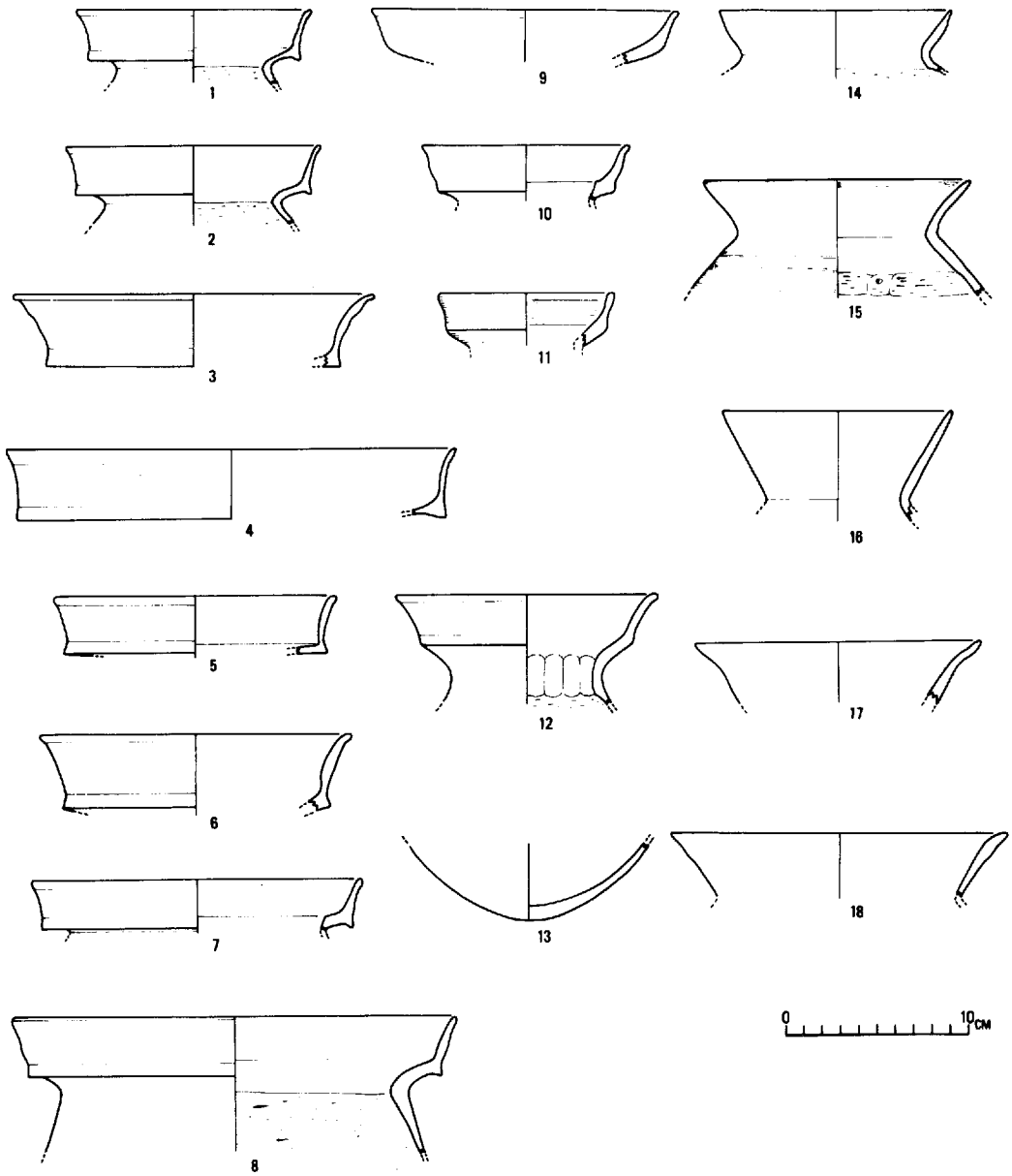
〔**第２期出土遺物**〕（第69図）

甕は，口縁部が拡張するものとしないものとがある。口縁部が拡張するものには，頸部から湾曲しながら外反し，下方へ角張った張り出しをもちながら，上方へ大きく拡張する。いずれも，端部はうすくなっておわる（１～４）。口縁部の角張らないものもある（７）。口縁部が上方に折れまがって，外面に櫛描きの沈線と，ヘラによる細い凹線との両方を施すもの（16～18）は，端部がほぼ上方に拡張し，丸くなっておわる。口縁部が湾曲しながら外反し，端部がうすくなっておわるもの（８，９）もある。内面には，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている。大形の甕（５）の口縁部は横に拡張し，斜め上方へ拡張する。内面は，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている。壷は頸部が短かく，湾曲しながら外反し，上方へ折れまがり，端部は丸くなっておわる。内面は頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている（６）。小形の鉢（10，11，14，15）は，口縁部が拡張するもの（11，15）と，丸くなっておわるだけのもの（10，14）とがある。内面には横方向へのヘラ削りの施されたもの（10，14）もある。高坏の脚部はいずれも裾部が広がり，端部はやや角張るもの（19～21，23）と，うすくなっておわるもの（22）とがある。外面には，縦方向の刷毛目を施すもの（19，20，22）があり，内面はいずれも，横方向のヘラ削りが施されている。底部は，わずかに平底を残すだけのもの（24，25）と，つまみ出してあげ底になっているもの（26）とがある。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は全般に良好である。外面に丹塗りを施すもの（８，11～15，22，26）は，赤色または赤褐色を呈するが，そのほかのものは，全体に褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期終末に属すると考えられる。

〔**第３期出土遺物**〕（第70図）

甕の口縁部は，頸部から湾曲しながら外反し，さらに斜め上方へ拡張するものが多い（１～８′，10）。口縁端部は，いずれもうすくなっておわる。小形の甕の口縁にはくせをもち，上方へ拡張するものがある（11）。また，「く」字状に湾曲しながら外反し，端部は丸くなっておわるものがある（14，15，17，18）。内面には，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている（１，２，８，14，15）。壷の頸部はきわめて短かく，頸部から斜め上方へ広がり，さらに湾曲しながら拡張する。内面の頸部にはしぼり痕がみられ，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている（12）。底部（13）は丸底で，最下部がやや厚くなっている。これらの土器の胎



第70図　408号住居址（第３期）出土遺物

土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は全般に良好である。また内外面の全体に丹塗りを施しているもの（2，4，6～11）は，赤褐色を呈するが，そのほかのものは褐色を呈する。

以上の土器は，古式の土師器に属すると考えられる。

若干の考察

以上に述べた住居址で，401号住居址内の出土遺物を，住居址とほとんど同時期のものと考え，3軒重複している408号住居址のつくられた前後関係が，出土遺物を古いものから便宜的に3つに分類したものに，それぞれ相当すると考えるならば，4区における住居址のつくられた順序は，406号住居址－402号住居址－403号住居址－405号住居址－407号住居址，408（1）号住居址－401号住居址－408（2）号住居址－408（3）号住居址，404号住居址となる。

平面形は，弥生時代後期前半から中葉にかけて，角ばった円形を呈し，弥生時代後期後半から終末にかけて，変形した形を呈する。出土遺物が古式の土師器に属するものになると，平面形が隅丸方形を呈し，規模が以前の時期のものと比較して大きくなる。

柱については，痕跡が検出できなかった住居址と，多数の痕跡が確認されたものを除くと，基本的には4本柱で，弥生時代後期前半から中葉にかけての住居址で，小規模のものに2本柱が存在する。

中央ピットについては，痕跡が検出できなかった住居址もあるが，基本的には，円形または楕円形のものを，各時期ともももっている。

壁体溝については401号住居址以外のものに存在する。

出土遺物は土器だけで，石器やそのほかのものは皆無である。

これらの住居址が，時期によって存在する位置を移動しているとは考えられず，任意の場所に構えている。

これまで住居址について述べたが，あくまで，4区という限られた範囲の，少数の軒数であり，存在する位置が沖積平野とは異なる山の斜面であるため，種々の問題点はほかの類似の遺跡と比較して，今後の検討にまちたい。

3）ピ　ッ　ト

4区には，柱穴痕跡と考えられる小規模のものから，径が1m以上あるものまで，大小多数のピットが存在する。平面形は，473号ピットを除いて，円形または楕円形を呈する。袋状になるものが6遺構確認されている。上面からの深さは，487号ピットの1m60を最高に，削平されて浅いものまで，さまざまである。ここには，図示できる遺物の出土したものだけをとりあげた。ピット番号は便宜的につけたもので，たとえば，473号ピットはP－473として記述することにした。

P－473（第71図）

北西部分は，村の共同墓地に通じる道路によって調査することができなかったが，平面形は

不整形な形を呈する。内部には，周辺の地山の土である黄褐色の砂粒を含む黒褐色土が確認され，多量の土器片が出土した。

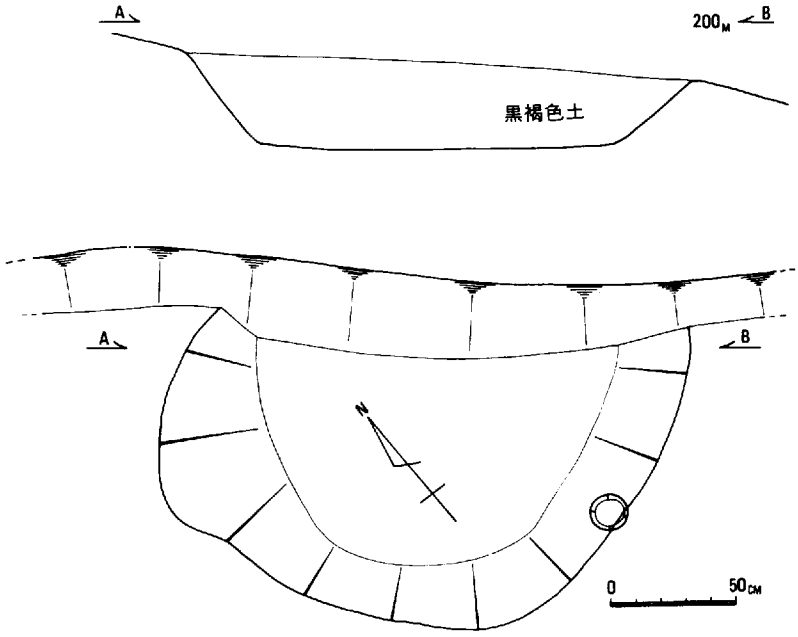
出土遺物（第72図）

甕の口縁部は小さく折れまがり，さらに上方へ外湾しながら拡張するもの（1，2）と，口縁部が上方へ立ちあがるもの（3，4）とがある。古い形の甕の口縁部は，端部が肥厚し，外面に凹線が施されている（5～8）。壷の口縁部は，頸部からゆるやかに外反し，さらに上方へ立ちあがる（9）。内面は頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている。高坏の脚は裾部が広がり，端部は肥厚しない（13）。外面には刷毛目を施し，内面には斜めの方向のヘラ削りを施している。器台と思われる脚（14）は，端部が肥厚して立ちあがる。内面には横方向のヘラ削りを施している。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含むが，10，11，13，14は少量である。焼成は全般に良好である。また外面に丹塗りを施しているもの（13，14）は，赤褐色を呈するが，そのほかのものは，褐色を呈する。

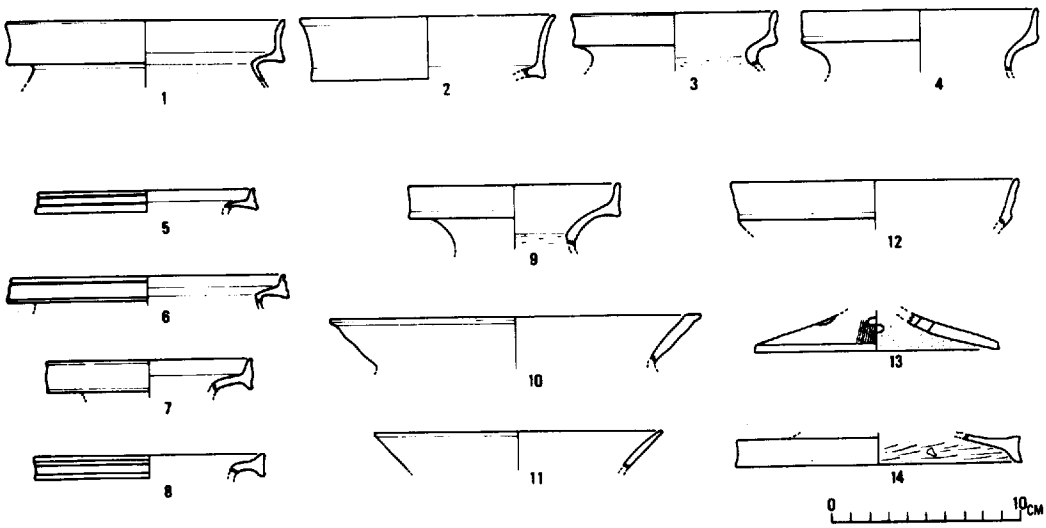
以上の土器には，各時期のものが混在していると考えられる。

P—451

この遺構は，黒褐色土内から掘り込んでつくられていたため，かなりの土器片を確認してはじめて，ピットであることがわかったものである。内部は炭化物を若干含む黒褐色土のため，精査してはじめて，全形を検出することができた。



第71図　P—473



第72図　P－473出土遺物

出土遺物（第73図）

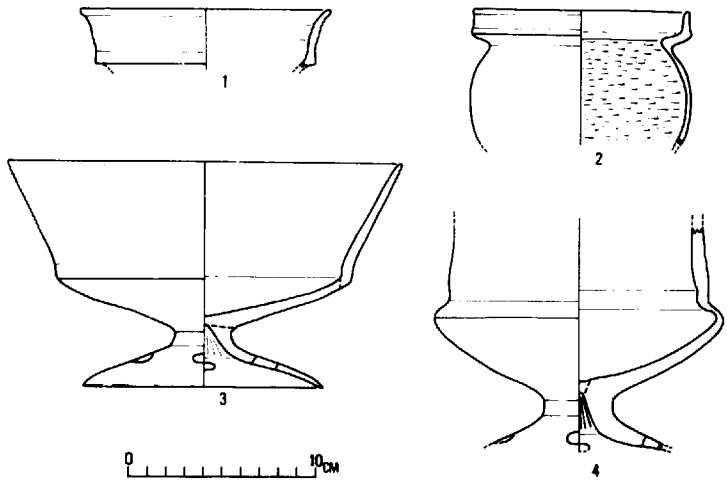
甕には口縁部が湾曲しながらやや外反し，上方に拡張するもの（1）と，口縁部が「く」字状に外反し，上方に折り曲げられるもの（2）とがある。後者の胴部は上位に最大径があり，内面には横方向のヘラ削りが施されている。高坏（3）は坏部が湾曲しながら外反し，屈曲して斜め上方へのびる。坏部は深く，脚はきわめて短かい短脚で，裾部はうすく湾曲しながら広がり，端部はうすくなっておわる。上部を欠損しているが，脚部からいちじるしく張り出し，湾曲して上方にのびる。これらの土器のうち，1と2は胎土中に細かい砂粒を多量に含み，焼成は悪く，黒っぽい褐色を呈する。3と4は胎土中にほとんど砂粒を含まず，良質の粘土を使用している。3の焼成は良好で褐色を呈している。4も焼成は良好であるが，外面全体に丹塗りを施しているため，赤褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期終末に属すると考えられる。

P－487（第74図）

本調査の初期の過程で，南北トレンチを発掘したときに，確認されていたものである。

平面形は東西方向に長い楕円形を呈し，ほぼ垂直に深く掘り込まれていた。内部には炭化物を含む黒褐色土が入っていて，底近くに甕形土器1点が確認されている。



第73図　P－451出土遺物

出土遺物（第75図，図版30－２）

口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，端部が肥厚する。外面は２個単位の円形の竹管文が施されている。頸部はやや内傾しながら立ち上がり，外面には刷毛状工具の押圧文を施し，その工具を器面から離さずにそのまま，下方になでている。内面にはしぼり痕跡の上を指圧している。胴部は最大径を中位よりやや上にもち，外面には上位に刷毛状工具で縦方向のナデを施し，下位に縦方向のヘラ磨きを施している。内面には上位に横方向のヘラ削りを施し，下位に縦方向のヘラ削りを施している。底部は欠損しているため不明である。

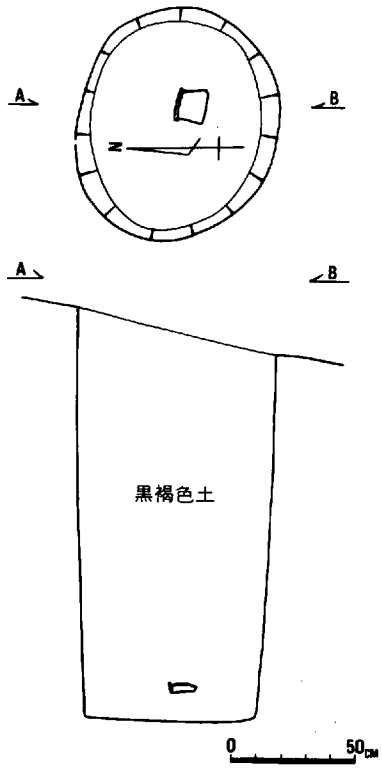
この土器は，弥生時代後期前半に属すると考えられる。

P－479（第76図，図版34－２）

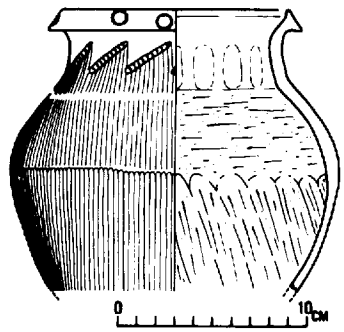
405号住居址の南西部の壁体を切った状態で確認されたものである。平面形は，南半分を畑の岸にカットされているため不明であるが，およらく楕円形に近い形になるものと考えられる。内部には黒褐色土が入っており，底近くに３個のフットボール大の配石が確認され，その中から壷形土器の口縁部が１点出土した。

出土遺物（第77図）

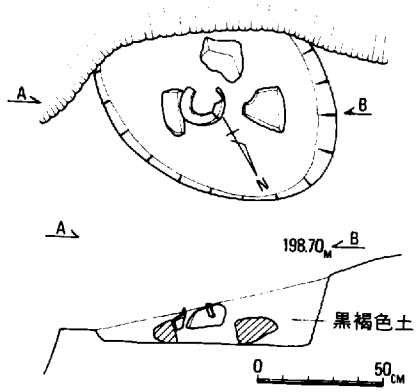
口縁部は頸部から斜めに外反し，屈曲して再び上方に外反する。内外面とも横ナデを施し，ナデによる凹凸が残っている。頸部は長く立ちあがり，外面には凹線のくずれたものが施され，内面には横方向のヘラ削りがみられる。胎土中には５㎜程度から非常に細かいものまで砂粒を多量に含む。口縁部内面には部分的に丹塗りがのこっている。焼成は良好で褐色を呈する。



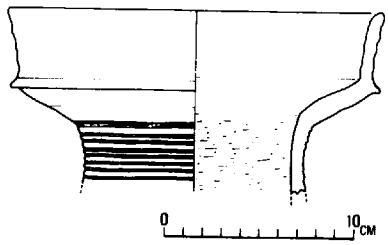
第74図　P－487



第75図　P－487出土遺物



第76図　P－479



第77図　P－479出土遺物

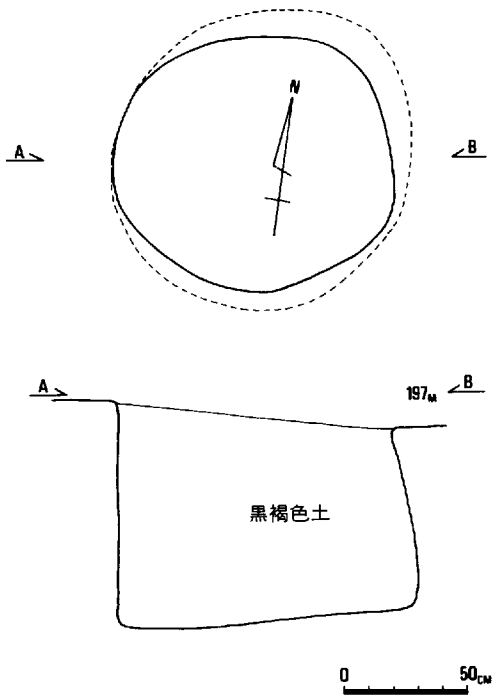
この土器は，弥生時代後期終末に属すると考えられる。

P－475（第78図）

405住居址の東部分の壁体を切った状態で確認されたものである。平面形は東西に長い変形した楕円形を呈し，袋状のものである。内部には，炭化物の多量にまじっている黒褐色土を含み，若干の土器片が出土した。

出土遺物（第79図）

甕の口縁部（1）は湾曲しながら，やや開きつつ上方に大きく拡大している。端部はうすくなっておわり，くびれの部分は下方への張り出しがみられる。内面は頸部下端から横方向のヘラ削りが施されている。また口縁部外面に凹線と沈線が混在するものもある（2）。高坏（4）の坏部は湾曲しながら外反し，屈曲して斜め上方へ拡大する。坏の端部はうすくなっておわる。脚部は短かい棒状部から屈曲して広がり，端部はうすくなっておわる。高坏の脚で裾が広がり，端部が角張ったものもある（3）。この外面には刷毛目が施され，内面には横方向のヘラ削りが施されている。4の胎土中には砂粒が少量であるが，そのほかのものには細かい砂粒を多量に含む。焼成はすべて良好である。3の外面には丹塗りが施され，赤褐色を呈するが，そのほかのものは明るい褐色を呈する。



第78図　P－475

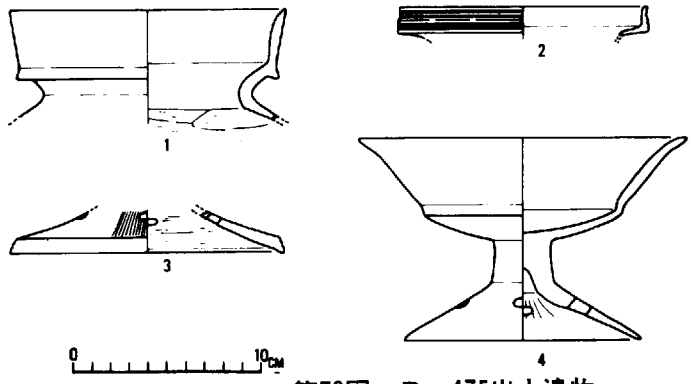
以上の土器は，弥生時代後期終末に属すると考えられる。

P－476（第80図，図版32－1）

407号住居址の北東部分の壁体を切った状態で確認されたものである。平面形はほぼ円形に近い形を呈し，部分的に袋状になっているものである。内部には黒褐色土を含み，種々の土器片が出土した。

出土遺物（第81図）

壷（1）は頸部から湾曲しながら外反し，端部が肥厚して上下に拡張がみられる（1～3）。口縁部が上方へ大きく湾曲しながら立ちあがるもの（4）もみられる。小形の鉢（5）は底部を欠損しているが，坏部はくびれをもって上方へ立ち上がり，端部は丸くなっておわる。これらの土器の胎土中には細かい砂粒を含む



第79図　P－475出土遺物

が，1は少量で2は多量である。焼成は3を除いて良好である。1と5は全体に丹塗りを施し，赤褐色を呈するが，それ以外のものは褐色を呈する。

以上の土器には，各時期のものが混在していると考えられる。

P－453

平面形はほぼ円形を呈するものである。内部には黒褐色土を含み，土器片が出土した。

出土遺物（第82図）

甕の口縁部（1～5）には，端部が上方に屈曲し，外面に櫛描き沈線を施すもの（1），胴部から急角度で外反し，屈曲して斜め上方へ大きく外反するもの（2～4），「く」字状に外反するだけのもの（5）がある。内面の頸部以下には，横方向のヘラ削りを施しているもの（2，3）がある。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含み焼成は良好で褐色呈をする。

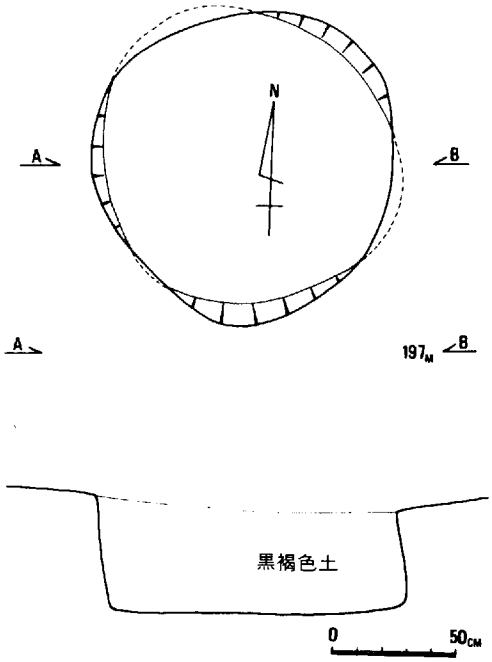
以上の土器には，各時期のものが混在していると考えられる。

P－454

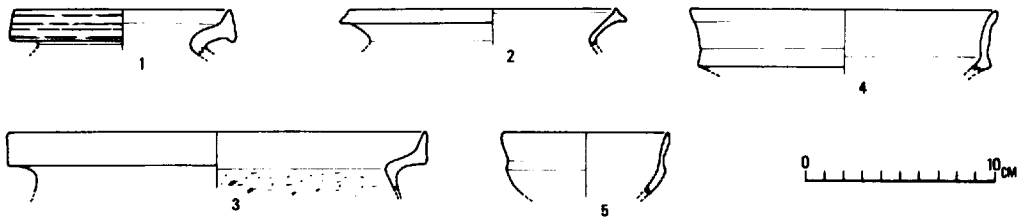
平面形がほぼ円形を呈するものである。内部には黒褐色土を含み，土器片が出土した。

出土遺物（第83図）

壷（1）は頸部からわずかに湾曲しながら外反する。内面には横方向のヘラ削りが頸部の直下からみられる。底部には平底のもの（2）と，つまみ出してあげ底になるもの（3）とがある。高坏（5，6）は短脚である。坏部の外面下位にはヘラ削りを施し，内面には縦方向の刷毛目を施したもの（6）がある。甕の口縁部は「く」字状に外反し，端部は丸くなる（7）。皿は口縁部だけであるが，端部が少し内反する（8，9）。器台は脚部のみで，裾部が広が



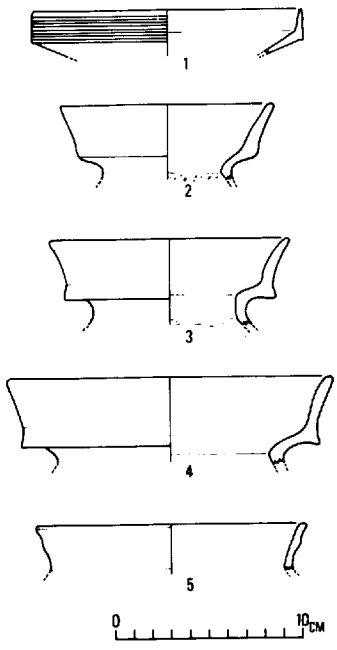
第80図　P－476



第81図　P－476出土遺物

り，端部はやや肥厚する。長方形の透しが4個配され，外面には縦の刷毛目を，内面には横方向のヘラ削りが施されている（4）。鉢の口縁部と思われるもの（10）に，口縁部がやや内傾し，端部上面には凹みがみられる。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含むが，3，4，9，10は非常に少ない。焼成はすべてのものが良好である。また，丹塗りを施しているもの（3～8，10）は赤褐色を呈するが，ほかのものは褐色を呈する。

以上の土器は，各時期のものが混在していると考えられる。



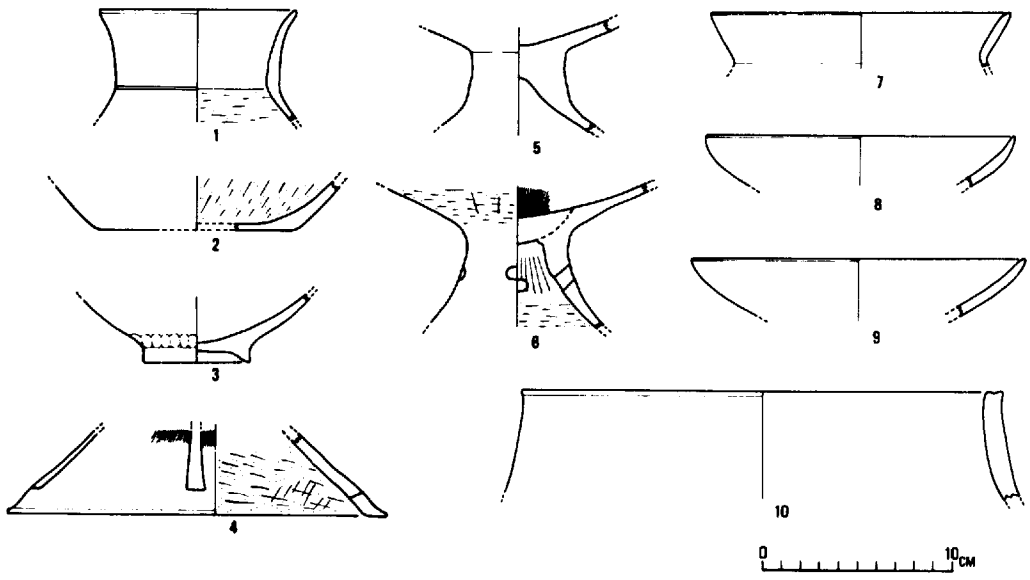
第82図　P－453出土遺物

P－484（第84図，図版34－1）

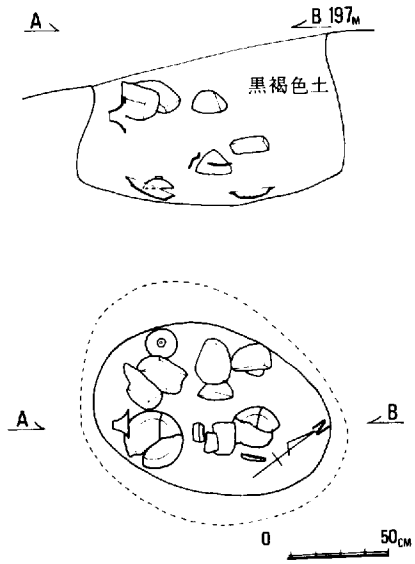
平面形は，東西に長い楕円形を呈する袋状のものである。内部には多数の炭化物まじりの黒褐色土を含み，大小の石とともに数点の土器片が出土した。

出土遺物（第85図）

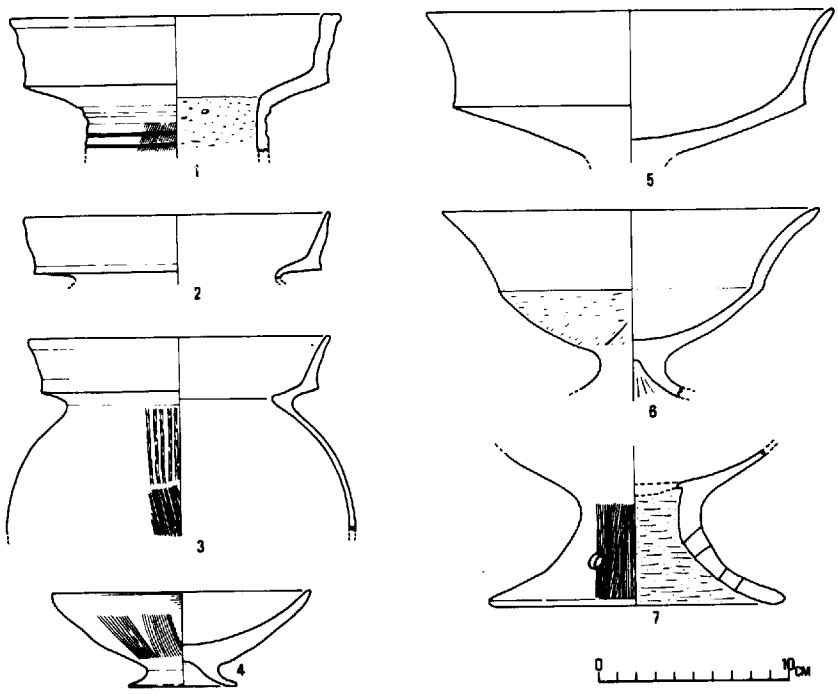
壷（1）は筒状の頸部から外反し，さらに上方に拡張する。口縁部の内外面とも横ナデを施し，ナデによる凹凸が残っている。頸部の外面には刷毛目が施され，その上から凹線のくずれたものがめぐっている。内面には横方向のヘラ削りを施している。甕（2，3）の口縁部は外反し，さらに上方へ大きく拡張する。端部はうすくなっておわる。胴部には，刷毛状工具による縦方向のナデを上位と下位にわけて施している。内面の口縁部は横



第83図　P－454出土遺物



第84図　P－484



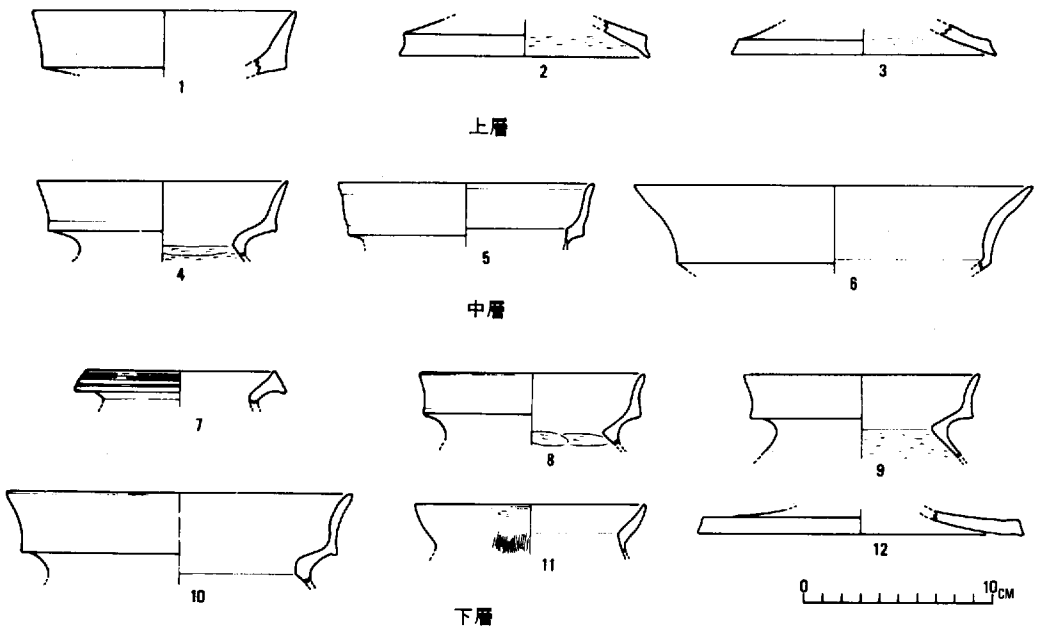
第85図　P－484出土遺物

ナデ仕上げを施し，胴部はヘラ削りの後に，不規則なナデを施している。低脚坏（4）は坏部が浅い埦形で，口縁端部はやや丸くなっておわっている。外面は横方向と縦方向の刷毛目が施され，内面は横ナデ仕上げをしている。脚端部は開き，うすくなっておわる。脚内面には横方向のヘラ削りを施している。高坏は坏部がやや浅く湾曲し，くびれて斜め上方に外反するもの（5）と，坏部が深く湾曲し，くびれてさらに斜め上方に大きく湾曲しながら外反するもの（6）とがある。前者は内外面とも横ナデを施している。後者の内面は横ナデを施しているが，外面の坏部下位はヘラ削りを施している。台付鉢の脚部と思われるもの（7）は，大きな筒状部がゆるやかに外反し，端部の器壁は変化せずに丸くなっておわる。外面には縦方向の刷毛目を施し，内面には横方向のヘラ削りを施している。円孔は外から内方向に刺突し，3等分する位置に配しているが，縦に2個のものと1個のものとがある。これらの土器の胎土中には，比較的多くの砂粒を含むが，5は砂粒をほとんど含まず，良質の粘土を使用している。3を除くすべてのものに丹塗りを施し，焼成は良好で赤褐色を呈するが，5は黒っぽい赤褐色である。5の外面全体にはすすの付着があり，黒っぽい褐色を呈する。

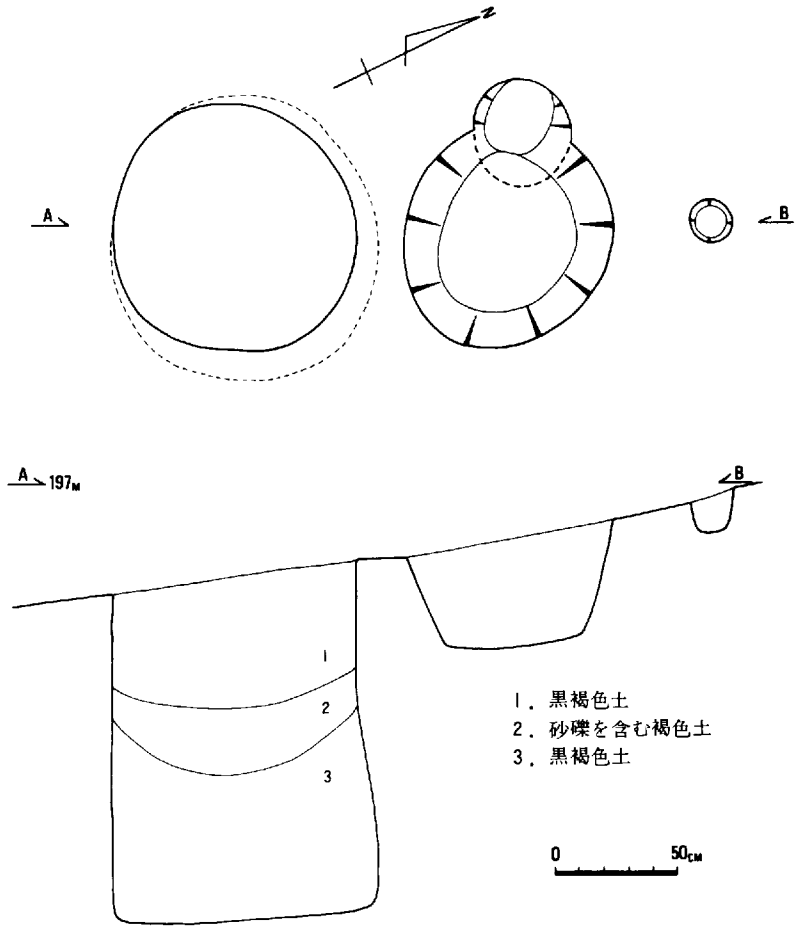
以上の土器は，弥生時代後期終末に属すると考えられる。

P—482 （第87図）

平面形は円形を呈する比較的深い袋状のものである。内部は3層にわかれ，各層から土器片が出土している。



第86図　P－482出土遺物



第87図　P－482

出土遺物（第86図）

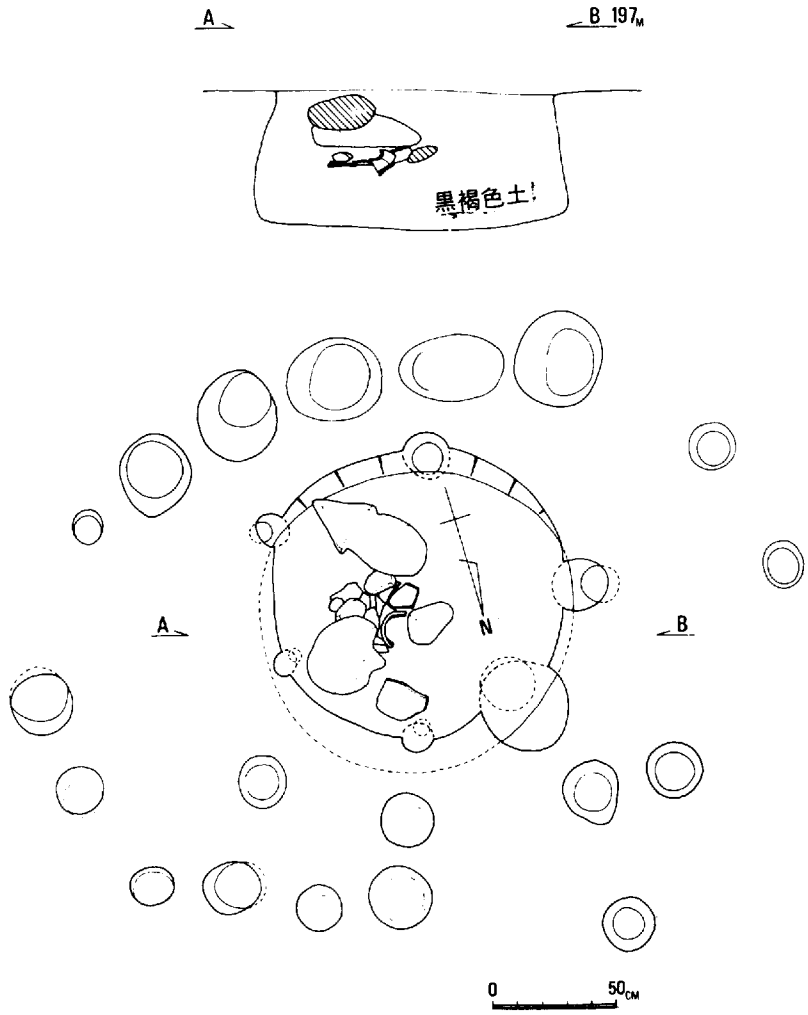
〔上層〕　甕の口縁部らしいもの（1）は，やや肥厚して外反している。高坏の脚は裾部が広がり，端部に稜線がある（2，3）。内面には横方向のヘラ削りを施している。

〔中層〕　甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，さらに上方へ拡張する（4，5）。内面の頸部直下には，横方向のヘラ削りを施している（4）。高坏の坏部は，口縁部のみしかないが，湾曲しながら上方へ拡張する（6）。

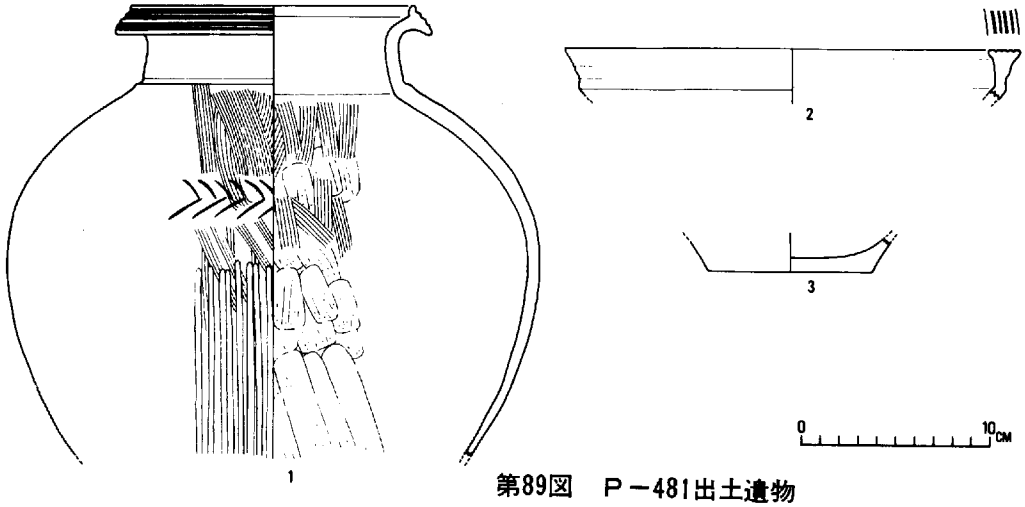
〔下層〕　甕の口縁部は，端部が肥厚し，外面に凹線を施すもの（7）と，頸部から湾曲しながら外反し，さらに斜め上方に外反するもの（8～10）と，「く」字状に外反し，端部が少

し内湾ぎみになるもの（11）との３種類がある。内面の口縁部直下には，横方向のヘラ削りを施しているもの（８，９）がある。高坏の脚（12）は，裾部が広がり，端部が肥厚するものである。

これらの土器の胎土中には，多くの砂粒を含み，焼成は良好である。また丹塗りを施しているもの（１～３，５，６）は赤褐色を呈するが，そのほかのものは明るい褐色を呈する。



第88図　P－481



第89図　P－481出土遺物

以上の土器は，3層とも各時期のものが混在していると考えられる。

P－481（第88図，図版33）

408号住居址の床面下部から確認されたものである。平面形は円形を呈し，部分的に袋状になっている。内部には黒褐色土を含み，床面から浮いた状態で大小の石とともに土器片が出土した。底からは多量の炭化物が検出された。

この遺構の縁辺部と周辺には，大小の柱穴痕跡が確認されている。遺構の内部と底部には，精査したにもかかわらず，柱穴痕跡は確認されなかった。この柱穴痕の内部にも，遺構と同じ黒褐色土を含んでいるところから，柱穴痕は遺構に伴うものと考えられる。したがって，この遺構の上面には，簡単な屋根のようなものが存在したらしい。

出土遺物（第89図，図版30－3）

壷（1）は短かい頸部がほぼ直立し，上部で湾曲しながら外反する。口縁端部は上下に拡張し，外面に凹線が施されている。胴部は肩が張って丸みをもっている。外面には肩部にヘラによる綾杉文を配し，上位に縦方向の刷毛目を施し，下位に縦方向のヘラ磨きを施している。内面には縦方向のヘラ削りが施され，上位では，その上から交差した刷毛目を施している。高坏（2）は口縁部のみであるが，口縁端部は肥厚し，上面に凹線を施している。これらの土器の胎土中には砂粒は少なく，良質の粘土を使用している。焼成は良好で明るい褐色を呈する。底部（3）の外面には黒斑がみられる。胎土中には細かい砂粒を多量に含み，焼成は良好で，黒

っぽい褐色を呈する。したがって，1とは別の個体である。

以上の土器は，弥生時代後期前半に属するものと考えられる。

P－485

408号住居址内に存在する柱穴痕と考えられる小規模のものである。内部には黒褐色土を含み，図示できる土器片が1点出土した。

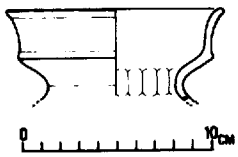
出土遺物（第90図）

この壷は頸部から上方に外湾し，さらに口縁部は上方に湾曲しながら拡張する。外面は横ナデを施しているが，内面の頸部にはしぼり痕がみられる。胎土中には，細かい砂粒を多量に含み，ざらざらした感じで吸水性がある。焼成は良好で褐色を呈する。

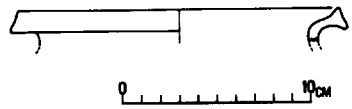
この土器は，古式の土師器に属すると考えられる。

P－486

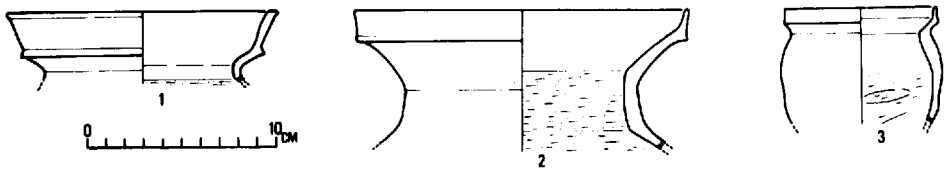
408号住居址内に存在する，柱穴痕と考えられる小規模のものである。内部には黒褐色土を含み，若干の土器片が出土している。



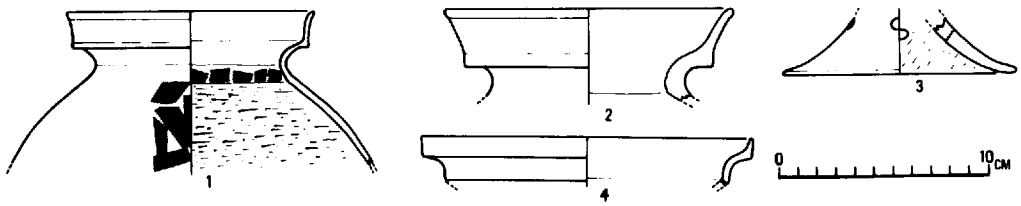
第90図　P－485出土遺物



第91図　P－490出土遺物



第92図　P－486出土遺物



第93図　P－431出土遺物

出土遺物（第92図）

壷（２）は短かい頸部から湾曲しながら外反し，端部は上方に拡張する。内面には頸部から横方向のヘラ削りが施されている。甕（１）は頸部から外反し，さらに斜め上方へ拡張する。端部はやや肥厚し，上端に面をもつ。小形の甕（３）は胴部にひずみがみられ，口縁部も小さい。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多量含み，焼成は良好である。１と３は褐色を呈するが，２は外面と口縁部内面に丹塗りが施され，赤褐色を呈する。

以上の土器は，各時期のものが混在していると考えられる。

P－490

408号住居址の北東隅に存在する，柱穴痕と考えられる小規模のものである。内部には黒褐色土を含み，図示できる土器片が１点出土した。

出土遺物（第91図）

この土器は甕形のもので，湾曲しながら小さく外反し，端部は肥厚する。内外面とも横ナデを施し，胎土中には細かい砂粒を多量に含む。焼成は良好で明るい褐色を呈する。

この土器は，弥生時代後期後半に属すると考えられる。

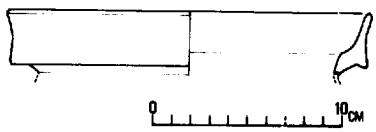
P－431

408号住居址とP－409との間に存在する，柱穴痕と考えられる小規模のものである。内部には黒褐色土を含み，４点の土器片が出土している。

出土遺物（第93図）

甕は口縁部が湾曲しながら外反し，屈曲して斜め上方に外反する。器壁のうすいもの（１）と，厚いもの（２）とがある。前者の胴部外面には，交差する刷毛目を施し，内面には，頸部直下に櫛状工具による横方向のナデがみられ，それより下半には，横方向のヘラ削りを施している。高坏の脚（３）は裾部が広がり，端部はうすくなりながら丸くなっておわる。内面にはヘラ削りが施されている。４は高坏の坏部か鉢形のものか，口縁部の破片しか残存していないために不明である。これらの土器のうち，３は胎土中に砂粒をほとんど含まず，焼成は良好で明るい褐色を呈する。それ以外のものは，胎土中に細かい砂粒を多く含み，焼成は良好で，丹塗りが施され赤褐色を呈する。

以上の土器には，各時期のものが混在しているものと考えられる。



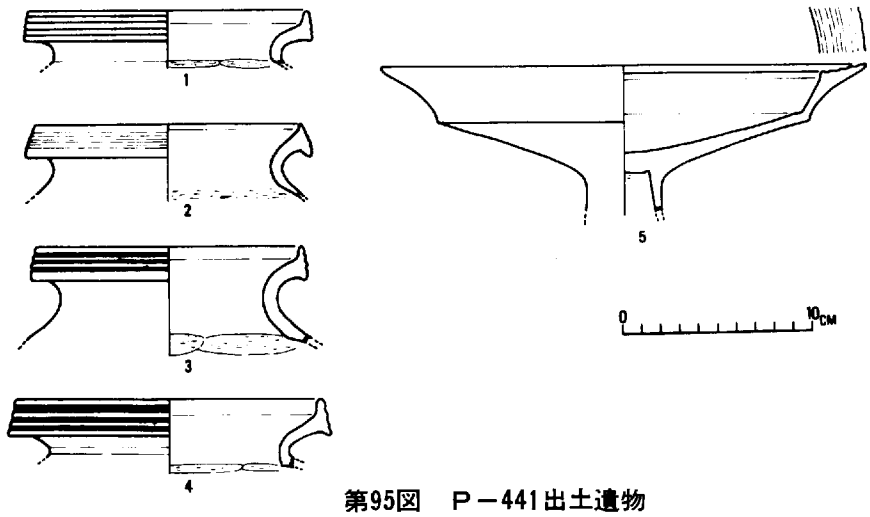
第94図　P－440出土遺物

P－440

408号住居址の南東部に存在する，柱穴痕と考えられる小規模のものである。内部には黒褐色土を含み，図示できる土器片が１点出土した。

出土遺物（第94図）

甕形土器と考えられるもので，口縁部は端部が肥厚し，上方へ拡張する。内外面とも横



第95図　P－441出土遺物

ナデを施し，全体に丹塗りがみられる。胎土中には細かい砂粒を含むが，量は少ない。焼成は良好で，丹塗りのため赤褐色を呈する。

この土器は，401号住居址の出土遺物と類似し，弥生時代後期後半でも終末に近い時期と考えられる。

P－411

平面形は南半分を畑の段にカットされているために不明であるが，楕円形に近い形になると考えられる。内部には黒褐色土を含み，多量の炭化物とともに若干の土器片が出土した。

出土遺物（第95図）

甕は上方に湾曲しながら外反し，端部は肥厚して上下に拡張する。口縁部の外面には凹線が施されている。内面には，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている（1～4）。高坏（5）は坏部が大きく開き，口縁部は斜め上方へ広がり，端部は肥厚する。端部上面には凹線状のものを施している。脚部は中空で，内面は横方向へのヘラ削りを施している。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を含み，焼成は良好である。5は脚内面を除いて，全体に丹塗りが施され，赤褐色を呈するが，ほかの甕形土器は褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期前半に属すると考えられる。

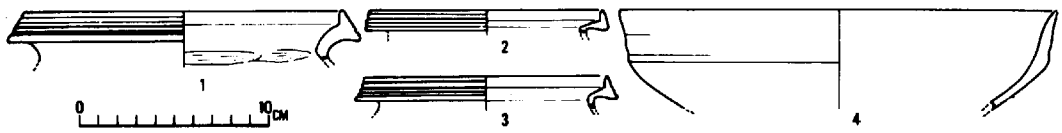
P－409

408号住居址の東側に位置し，削り出し作業の過程で，黒褐色土の平面形が住居址を想定させるものであった。しかし調査を進めると，浅い凹地になっていただけで，遺構と考えられる

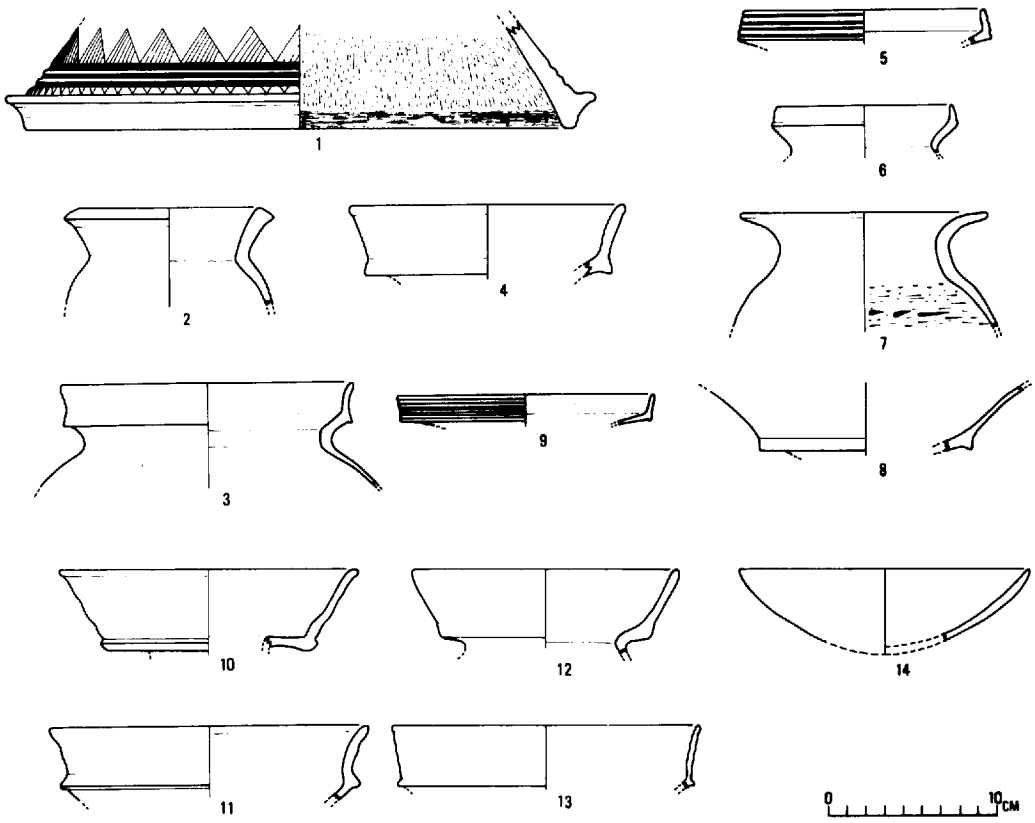
ものは何も存在しなかった。この凹地からは若干の土器片が出土している。したがって確実な遺構としてとらえることはできなかったが，このピットの項で取り扱うことにした。

出土遺物（第96図）

甕の口縁部は，頸部から湾曲しながら外反し，端部が肥厚して，上下に拡張する（１～３）。口縁部外面には，凹線を施している。内面には，頸部直下から横方向のヘラ削りを施したもの



第96図　Ｐ－409出土遺物



第97図　Ｐ－410出土遺物

（1）がみられる。高坏の坏部（4）は，上部の破片しか残っていないが，底部から上方に立ち上がり，外面にはナデによって生じた凹凸がみられる。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多く含み，焼成は良好である。1～3は褐色を呈するが，4は前者と比較して明るい褐色を呈する。

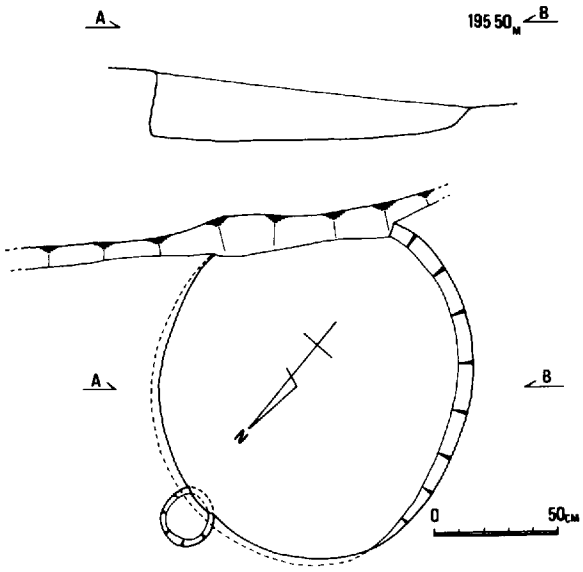
以上の土器は，各時期のものが混在していると考えられる。

P—410

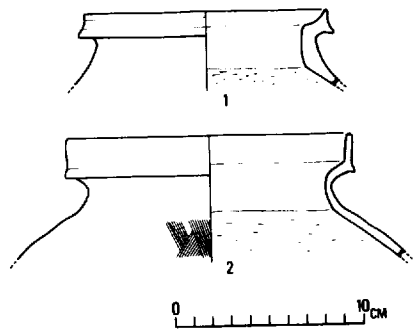
先に述べたP－409と同様に，削り出し作業の過程で，黒褐色土の平面形が住居址を想定させるものであったため，浅い凹地になっていただけで，遺構と考えられるものは何も存在しなかったが，この項で取り扱うことにした。ここからはかなりの土器片が出土している。

出土遺物（第97図）

器台の脚（1）は裾部が広がり，端部は肥厚して立ち上がる。外面には下方に凹線が施され，上方に斜線による鋸歯文を施す。下方にも鋸歯文を施しているが，上方のものとは異なり，斜線をもたず小さい。内面には縦方向のヘラ削りが施され，端部は荒い横ナデを施している。甕の口縁部は頸部から湾曲しながら外反し，端部に凹線を施しているもの（5），上方に拡張し，外面に櫛描きの沈線が施されているもの（9），さらに，上方に小さく拡張するだけのもの（6）がある。壷の口縁部（7）は湾曲しながら外反し，端部は丸くなっておわる。内面には頸部直下から，横方向のヘラ削りが施されている。高坏の坏部（8）は，口縁が斜め上



第98図　P－480



第99図　P－480出土遺物

方に拡張する。皿（14）は，内湾しながら端部が丸くなっている。これらの土器の胎土中には，細かい砂粒を多量に含み，焼成は全般に良好である。全体に丹塗りを施しているもの（4，6，11，12，14）は赤褐色を呈するが，そのほかのものは褐色を呈する。

以上の土器は，各時期のものが混在していると考えられる。

P－480（第98図）

4区の南東隅に存在する。平面形が，円形に近い形を呈し，部分的に袋状になっている。内部には炭化物まじりの黒褐色土を含み，土器片が出土した。

出土遺物（第99図）

図示できた2点は甕であるが，口縁部が肥厚し，上下にやや拡張しているもの（1）と，口縁部が湾曲しながら外反し，上方へ拡張するもの（2）とがある。どちらも，口縁外面には施文を施さず，頸部下端から横方向のヘラ削りが施されている。後者は肩が張り，外面に交差した刷毛目を施している。前者の胎土中には，荒い砂粒を多量に含み，焼成は普通で，くすんだ褐色を呈する。後者の胎土中には，ほとんど砂粒を含まず，焼成は堅く良好で，明るい褐色を呈する。

以上の土器は，弥生時代後期後半に属すると考えられる。

若干の考察

以上述べたピット内には，すべてのものが黒褐色土を含むが，炭化物の検出されているものと，そうでないものとの相違がある。図示できる遺物が1点のみ検出しているピットは別にして考えると，炭化物を含むピットは，同一時期の土器を含んでいる。炭化物を含まないものは，各時期の土器が混在している。したがって，炭化物を含むピットは，そのピットが使用されていた状態に近い様相を呈するが，炭化物を含まないものは，内部が空になっていたか，あるいは内部に若干の埋土があった状態で，周辺の土砂が流れ込んだものと考えられる。482号ピットの土層は，このことをよく示している。

481号ピットは，前述したように，上面に簡単な屋根に似た施設が存在したらしい。

住居址とピットの関係で問題にすべき点は確認できなかった。

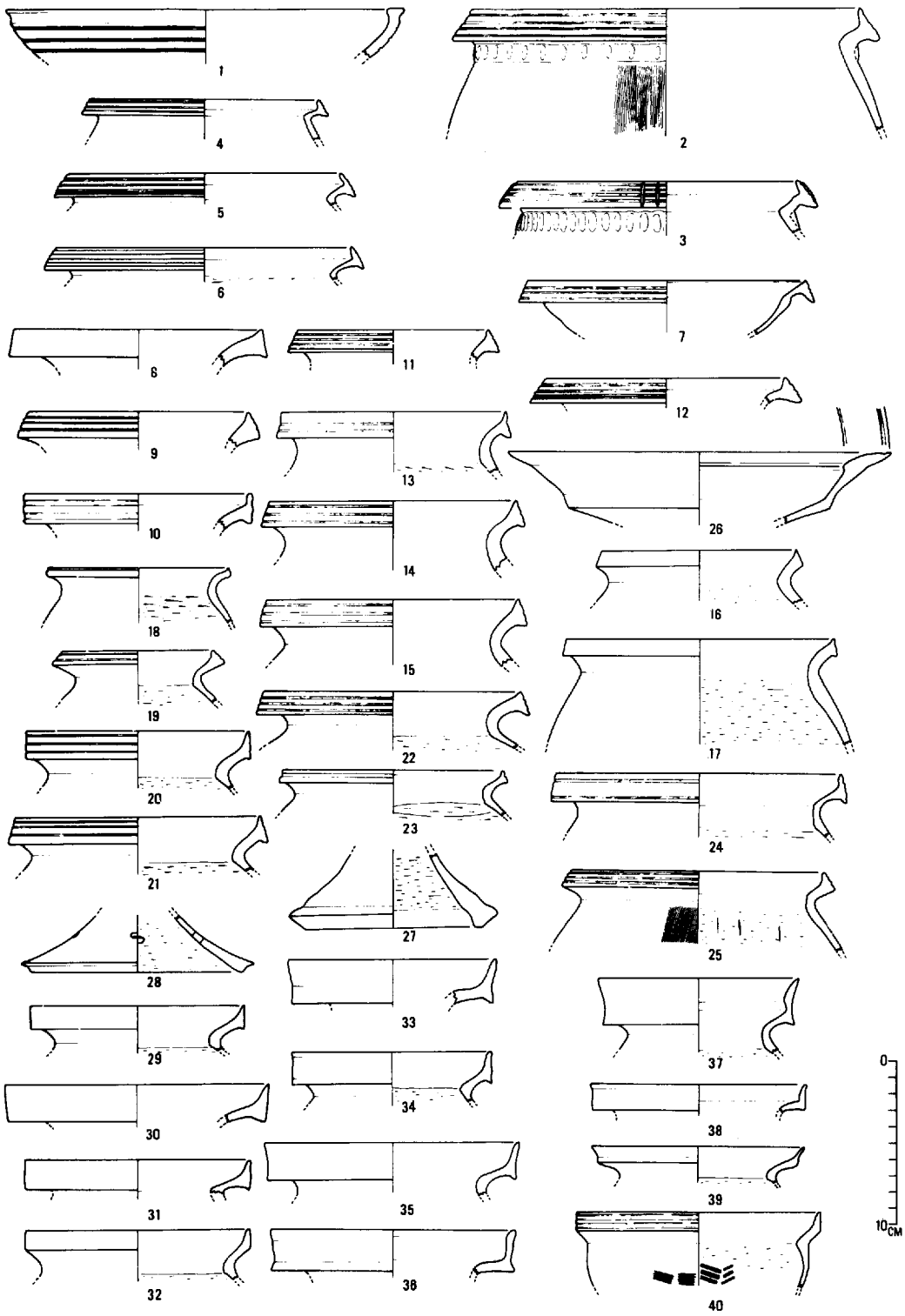
出土遺物は土器だけで，ほかの遺物は皆無である。

4）遺構に伴わない遺物

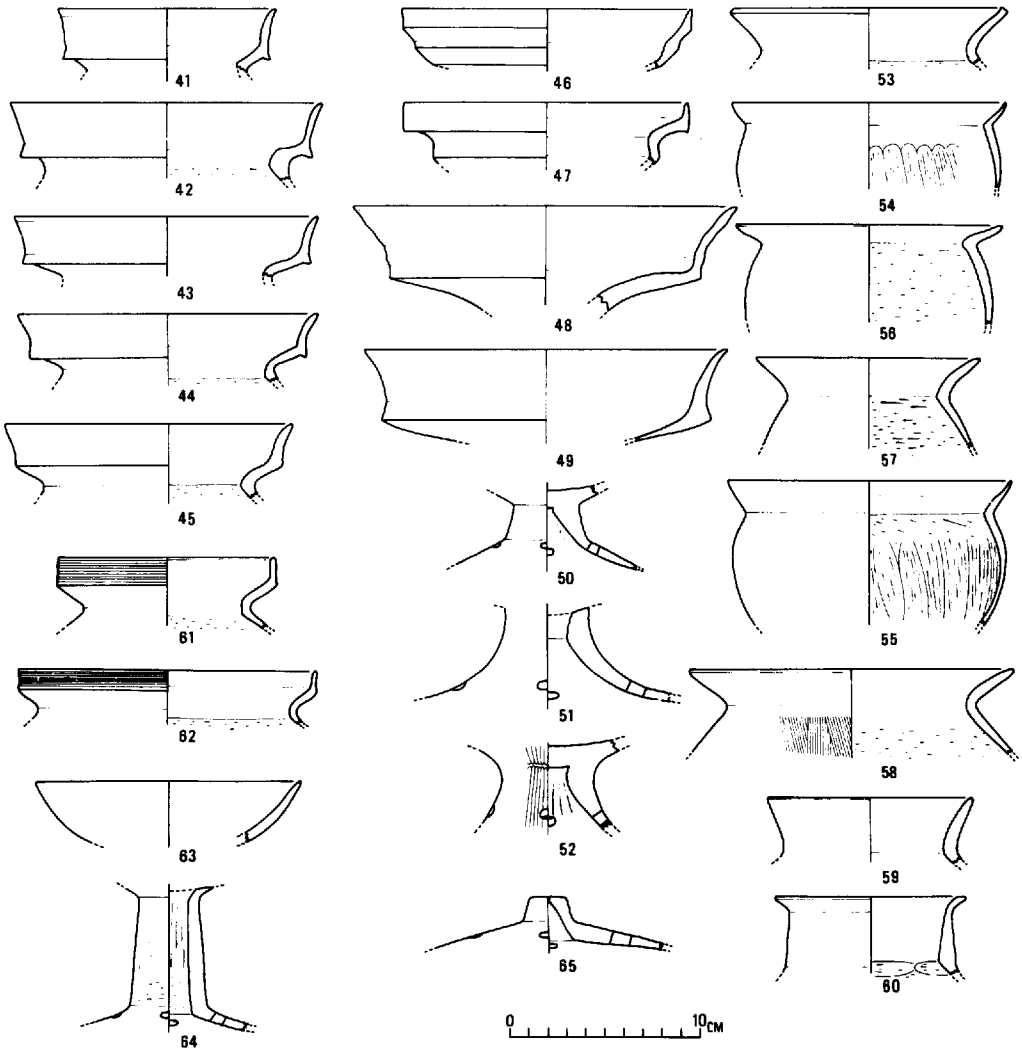
第1次調査出土遺物（第100・101図）

桃山遺跡全体にわたって第1次調査が行われたが，4区の表土中から土器片が多数出土している。

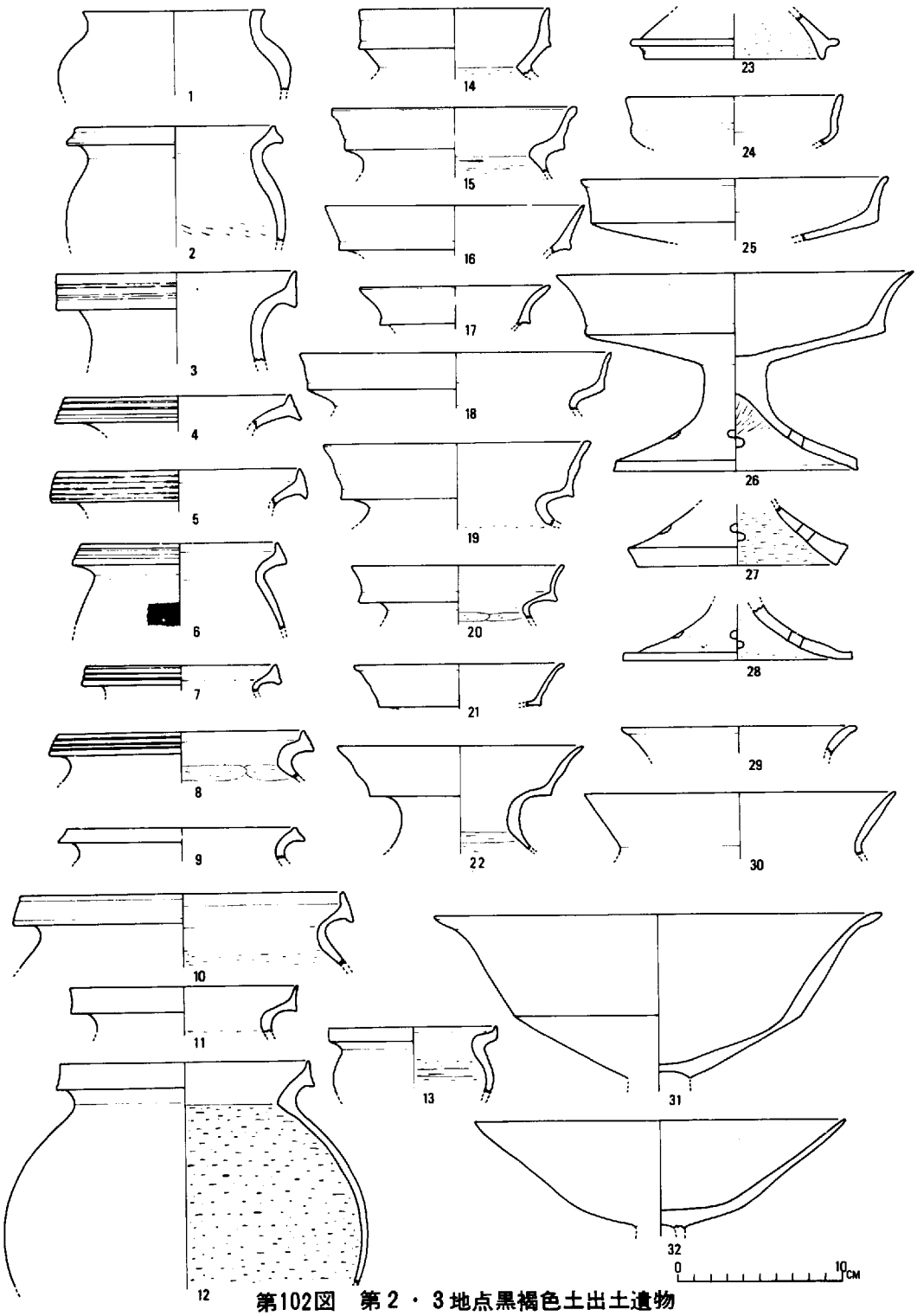
弥生時代中期の高坏の坏部（1）は，口縁部がやや肥厚し，外面には凹線を施している。甕の口縁部は，「く」字状に外反し，口縁端部は上下に拡張し，外面に凹線が施されている（2～5）。頸部には，指圧による貼りつけ文が配されたもの（2，3）がある。口縁部に棒状浮文を配したもの（3）もある。



第100図　第１次調査出土遺物



第101図　第１次調査出土遺物



第102図　第２・３地点黒褐色土出土遺物

弥生時代後期以降の土器には，以下のようなものもある。

甕はいずれも口縁端部が肥厚し，外面に凹線を施したもの（6，9～15，19～25）と無文のもの（8，16～18）とがある。頸部直下から横方向のヘラ削りが施される（6，13，16～25）。胴部上半には，縦方向の刷毛目を施したもの（25）がある。高坏の坏部は口縁部が著しく外反し，上面に広い平坦部がみられるもの（26）と，椀形のもの（63）と，口縁部に2段のくせをもつもの（46，47）と口縁部が皿部から大きく湾曲しながら外反するもの（48，49）とがある。脚は裾部がゆるやかに広がり，端部が肥厚するもの（27，28）と，うすくなるものと，短脚でくびれて裾部が広がるもの（50，65）とがある。筒状の長い脚部から急に折れて，外開きとなるもの（64）がある。4個の円孔を配したもの（28）もある。甕の口縁部の外面が無文で，上方へ拡張するものには，細部に多くの変化がみられる（29～36，41～45）。また外面に櫛描きを施したもの（61，62）がある。そのほかに折れ曲って外反するだけで，端部はうすくなっておわるだけのもの（54～59）もある。口縁端部が角ばるもの（53）がある。内面は頸部直下から，横方向のヘラ削りを施しているものが多い（41，42，44，53，55～58，61，62）が縦方向のヘラ削りを施すもの（54）もある。頸部が筒状にのびて，口縁部がわずかに広がり，端部が丸くなっておわる壷（60）がある。胎土，焼成，色調，は千差万別なのでふれないことにする。

第1次調査のときに，弥生時代中期の土器片が出土しているのにもかかわらず，本調査でその時期の遺構は確認できなかった。

第2・3地点黒褐色土出土遺物（第102図）

本調査において，4区の第2・3地点の黒褐色土中より，遺構に伴わない土器片がかなり出土している。

壷（3）は，頸部からゆるやかに外反し，口縁端部は上方に拡張する。口縁部外面には，凹線状のものが施されている。ほかの壷には，短かい頸部からゆるやかに外反し，屈曲して斜め上方へ大きく外反するものがある。口縁端部はうすくなる。内面は，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている。甕の口縁部は，頸部から湾曲しながら外反し，口縁端部の肥厚するものが多い（2，4～20）。口縁端部が肥厚して文様のないもの（2，9，11～13）もあるが，外面凹線が施されるもの（4～8）もある。口縁部が斜め上方に大きく外反するもの（14～20）がある。甕の口縁部には「く」字状に外反し，端部がうすくなっておわる単純な形のもの（29，30）もある。内面は，頸部直下から横方向のヘラ削りが施されている。高坏の脚部では，端部が肥厚し，立ちあがりのみられるもの（23）がある。高坏は浅い脚部が大きく広がり，上方へ外湾しながら拡張するもの（25，26）がある。脚は裾部がゆるやかに開き，端部に肥厚のみられるもの（26～28）がある。これらには，4個の円孔が配されている。また坏部の深いもの（31，32）もある。皿部から口縁部へ移るのに，明瞭な稜線のみられるもの（31）と，みられないもの（32）とがある。胎土・焼成，色調は，それぞれの遺物によって千差万別である。（福田）

引用文献・参考文献

小林行雄，水野清一「図解考古学辞典」　創元社　1959年

森浩一編「論集終末期古墳」　塙書房　1973年

間壁忠彦・間壁葭子「古代吉備王国の謎」　新人物往来社　1972年

西川宏「吉備の国」　学生社　1975年

和島誠一編「弥生時代」『日本の考古学Ⅲ』　河出書房　1966年

近藤義郎・藤沢長治編「古墳時代上下」『日本の考古学ⅣⅤ』　1966年

間壁忠彦・山本清「四国中国」『新版考古学講座（4）原史文化（上）』　雄山閣　1969年

杉原荘介・大塚初重編「土師式土器集成本編1・2・3」　東京堂出版　1971年

鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』　東京堂出版　1968年

坪井清足「岡山県都窪郡庄村上東遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』　東京堂出版　1968年

鎌木義昌「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』　東京堂出版　1968年

鎌木義昌「岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器」『弥生式土器集成資料編』　東京堂出版　1968年

田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」『平安学園研究論集第10号』　1966年

近藤義郎「佐良山古墳群の研究」　津山市　1952年

西谷真治・鎌木義昌「金蔵山古墳」　倉敷考古館　1959年

近藤義郎・今井尭他「津山弥生住居址群の研究」　津山市，津山郷土館　1957年

今井尭・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本4　中国四国』　角川書店　1970年

坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告書」　1956年

山陽町教育委員会「便木山遺跡発掘調査報告書」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地埋蔵文化財発掘調査概報（2）』　1972年

山陽町教育委員会「四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化発掘調査概報（3）』　1973年

太子町教育委員会「川島・立岡遺跡」　1971年

兵庫県教育委員会「播磨・権現遺跡」　1975年

津山市史編さん委員会編「原始・古代」『津山市史第1巻』　津山市　1972年

久世町史編集委員会「久世の世明け」『久世町史』　1965年

北房町教育委員会「大谷3号墳発掘調査報告」　1975年

邑久町教育委員会「新林（宮嶺）古窯址の調査報告」　1974年

倉吉市教育委員会「鳥取県倉吉市服部遺跡発掘調査報告」　1974年

東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌第57巻第1号』

近藤正・前島己基「島根県松江市的場土壙墓」『考古学雑誌第57巻第4号』

山陰考古学研究所「福市遺跡の研究」　1969年

山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』　1971年

大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」『考古学集刊第2巻第1号』　1963年

近藤正他「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化第36輯』　1965年

鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生遺跡」『吉備考古第第80号』吉備考古学会　1950年

間壁忠彦「倉敷市酒津及び新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学2号』　1958年

三杉兼行・間壁忠彦「備前原遺跡の土器」『遺跡第26号』 1957年
間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報1号』 1966年
間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告一弥生時代後期の墳墓群一」『倉敷考古館研究集報3号』 1966年
間壁忠彦・間壁葭子「岡山県美星町五万原遺跡」『倉敷考古館研究集報5号』 1968年
間壁忠彦「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報6号』 1969年
間壁葭子「倉敷市酒津一水江遺跡」『倉敷考古館研究集報8号』 1971年
間壁忠彦・間壁葭子他「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報10号』 1974年
岡山県教育委員会「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告一山陽新幹線建設に伴う調査一』 1972年
岡山県教育委員会「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1974年
岡山県教育委員会「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1974年
岡山県教育委員会「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1974年
岡山県教育委員会「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』 1973年
岡山県教育委員会「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』 1973年
岡山県教育委員会「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（4）』 1973年
岡山県教育委員会「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（4）』 1973年
岡山県教育委員会「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（6）』 1973年
岡山県教育委員会「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（6）』 1973年
岡山県教育委員会「小中古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』 1975年
岡山県教育委員会「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』 1975年
岡山県教育委員会「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（7）』 1975年
岡山県教育委員会「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』 1975年
岡山県教育委員会「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』 1975年
岡山県教育委員会「穴塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（8）』 1975年
岡山県教育委員会「門前池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（9）』 1975年
岡山県教育委員会「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書（11）』 1975年

第五節　5 区

5区は，2区の東に位置している。西は2区と接し，北は6区と接し，東は7区に接し，南は用地境界までである。5区東半分には遺構は存在せず，遺物は中近世の陶磁器が出土したのみである。5区西半分は，表土層（1層）下において若干のピットを検出した（2・3層は存在しない）。径1.0m前後のピット5個と数個の柱穴状ピットを検出したが，柱穴状ピットは建物等にはまとまらない。表土層の中には，弥生式土器（弥生時代中・後期），土師器（古墳時代前・後期・平安時代），須恵器（古墳時代後期），近世陶器等が含まれていた。

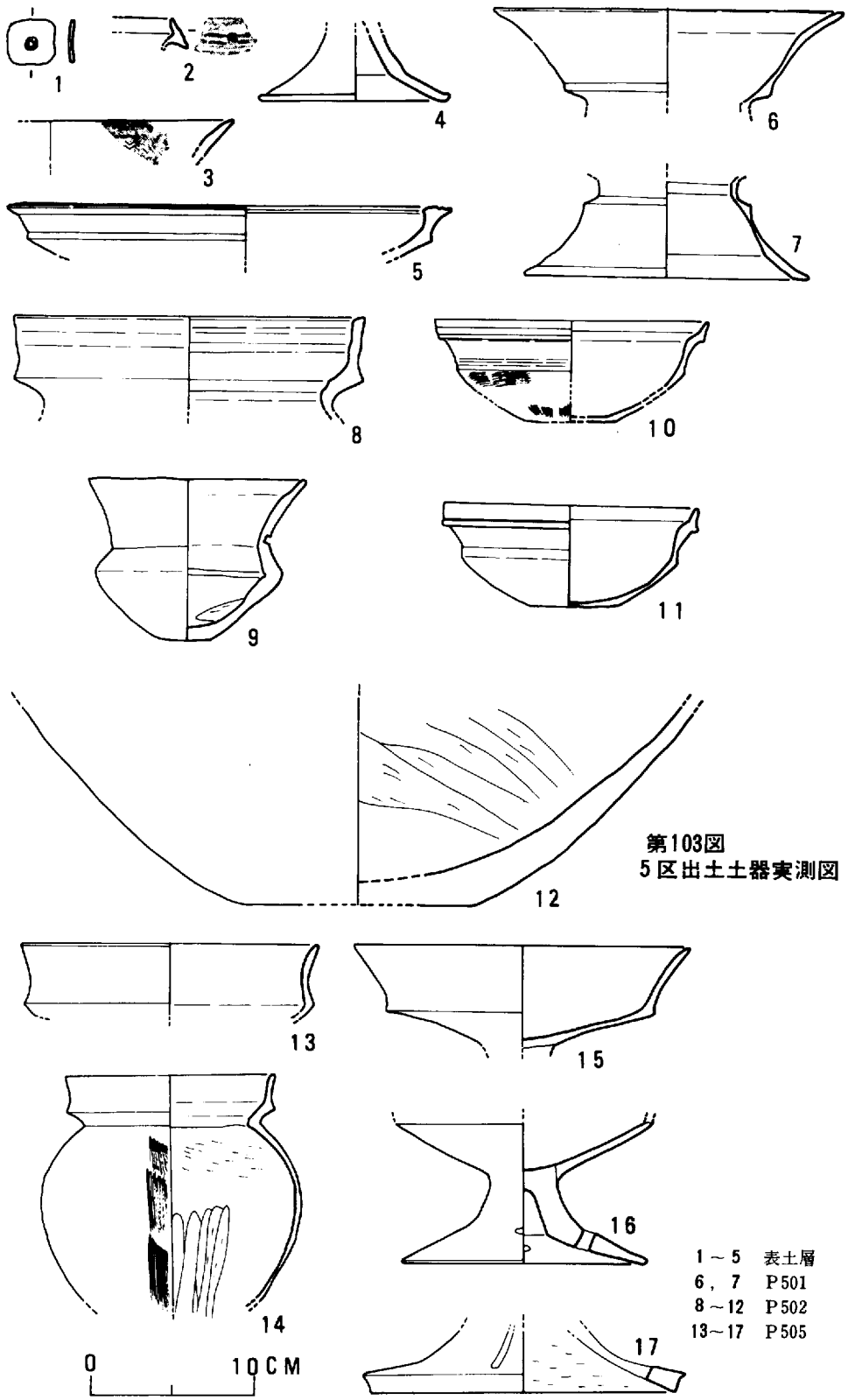
P 501は，径1.1m深さ0.7mの袋状のもので鼓形器台2個体（第103図6・7）の破片が入っていた。6はくびれ部以下を欠くもので，朝顔型に開く器受部を持ち，顎はかなりシャープにつくられている。口縁径21.4cm，顎までの高さ4.9cmを測る。内外面とも丹塗りである。7は，脚部の破片で内面はヘラ削りが行なわれている。肩はシャープに作出されており，脚径17.4cm，肩までの高さ4.4cmを測る。外面のみ丹塗りである。

P 502は，5区南端近くにあり，径1.0m・深さ0.5mのピットで，底は平坦である。第103図8～12がこのピットから出土したもので，9は完形品であるがピットの上面より出土し，他のものは床面もしくは床面近くから出土した。8は二重口縁壺の頸から口縁部にかけての破片で，10・11は良質土で緻密なつくりをしている鉢形土器であり，12は大型壺形土器の底部である。10・11は内・外面とも丹塗りで，12は外面のみ丹塗りである。

P 505は，P 501の南，P 502の東にあり，調査当初は建物の3隅の柱穴と考えていたが，調査を進めるに従ってこれは誤りであると判明し，調査の結果，貯蔵穴等のピットと断定した。

P 505は，径0.8m深さ0.5mのやや袋状となるものである。出土遺物は第103図の13～17に示すとおりである。13・15は内外とも丹塗りであり，16・17は外面のみ丹塗りである。

5区西半分の南端部の一部には3層が存在していたが，この部分のみは未掘で終らざるを得なかった。道路工事によって土砂が削り取られる本遺跡で未調査のまま残すことは，遺跡の単なる破壊につながるものではあるが，この部分は盛り土を行なって側道がとりつけられる部分にあたっている。盛土即保存とはなり得ないが，一応壊滅はまぬがれることができよう。



第103図
5区出土土器実測図

1～5　表土層
6，7　P501
8～12　P502
13～17　P505

第六節　6 区

6区は，一つの谷が押し出した土砂（その谷を埋めてしまう量）が堆積した部分である。2層・3層は流失して存在しない。南端部の一部にわずかに3層が残存していた。表土層を除去すると，弥生時代後期の建物1棟・ピット2，平安時代初期の建物1棟・土壙墓1，室町時代の土壙墓3，時期不明の建物1棟，かなり多数の柱穴を検出した。

表土層には，弥生時代後期の遺物から近世陶器まで含まれていた。第104図の1～8に図示したのはその一部である。1は建物601のすぐ東にあって，耕作のため縦半分がなくなっており，本来は完形品であって口縁を東に向けて横倒しにしていた。口縁径21.4cm・胴の最大径35.8cm・高さ33.8cmを測り，口縁部に2条の凹線をめぐらし，外面肩部は櫛でなでており，胴から底部にかけてはヘラでこまかくなでていて，内面は底から頸より少し下までヘラ削りを行なっている。弥生時代後期の壷棺であったとも思われるものである。5は，三角透しのある器台の一部である。2～5も弥生時代後期の土器片であり，一部残存する3層（弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を含む包含層）と共に考えて，かつてはこの6区にもかなりの数のこの時代の遺構も存在していたものと考えられる。6は須恵器，7は平安時代の土師器，8は鎌倉時代の軒平瓦である。8は，9区に近い所から出土し，9区で検出した版築遺構に関連のあるものであろう。同種の軒平瓦は3区の表土層から1例出土している。9・10は鉄器で，9（火打鎌）の所属する時期は不明であるが，10（鉈）は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。11は3層出土のもので，径9cm，高さ6.4cmを測る平底の埦である。

6区において検出した遺構は，第105・106図に示すとおりで，遺構の密度は小さい。遺構が存在しなかったのではなく，土砂の流失に伴って遺構も消滅し，一部のみ残存しているために遺構の密度が小さくなったのである。

建物601（第107図）

建物601は，6区南半分やや西寄りに検出された。棟行（東西）3間×梁行（南北）2間の掘立柱の建物で，南東隅の3本の柱の掘り方は，その後の土砂の流失に伴って消滅している。棟方向の柱は，西から心心距離1.5m・1.8m・1.5mであり，梁方向の柱は共に心心距離1.5mを測る。また，柱穴の径は25～55cmで一定しないが，いずれも円形に近く掘っている。柱穴のうち4個の柱穴内には弥生後期の土器片が入っており，柱穴を埋めている土砂から考えて，弥生時代後期の建物であろう。

建物602（第108図）

建物602は，6区中央西寄りに存在し，棟行（東西）3間×梁行（南北）2間の掘立柱建物である。心心間距離は，棟方向北側で西から1.5m・2.0m・1.6m，南側で西から1.9m・1.8m・1.8m，梁方向は北から1.5m・1.4mを測る。柱穴の径は35～45cmで，梁方向の中柱のものは少し小さく径20～23cmを測る。北西隅の柱穴の底には，土師器（甕）の破片が入っていた。他の柱穴からは遺物は出土しなかったが，この土器は，7区のH 701から出土したも

のと類似するものであり，この建物は古墳時代後期（６世紀後半）のものとも考えられる。

建物603（第108図）

建物603は，建物602の北側で検出された。この建物は，棟・梁とも１間の掘立て柱のものである。心心距離2.7～3.0ｍ×3.3ｍを測り，ややいびつな建物である。柱穴からの出土遺物は皆無で，時期は不明である。

P601

Ｐ601は，６区の南端部にあり，土601～土603を検出した面に存在し，隅丸方形（1.1ｍ×0.7ｍ）のピットで焼土と炭化麦粒が中に入っていた。麦粒の混ざった焼土を持ってきてピットを埋めたものであろう。また，焼土の間には須恵器片が混入していた。須恵器からみて平安時代末期のピットであり，土壙墓の可能性もある。

P602

Ｐ602は，グリッド・ポイントＨ５のすぐ西にあって，径1.2ｍ・深さ0.8ｍ・袋部の最大径は1.8ｍを測るフラスコ形の袋状ピットである。このピットの埋土は３層の土砂と同質で弥生時代後期前半の土器片が数片入っていた。弥生時代後期前半の遺構は１～３・５～６区では他には確認していない。

土601（第109図）

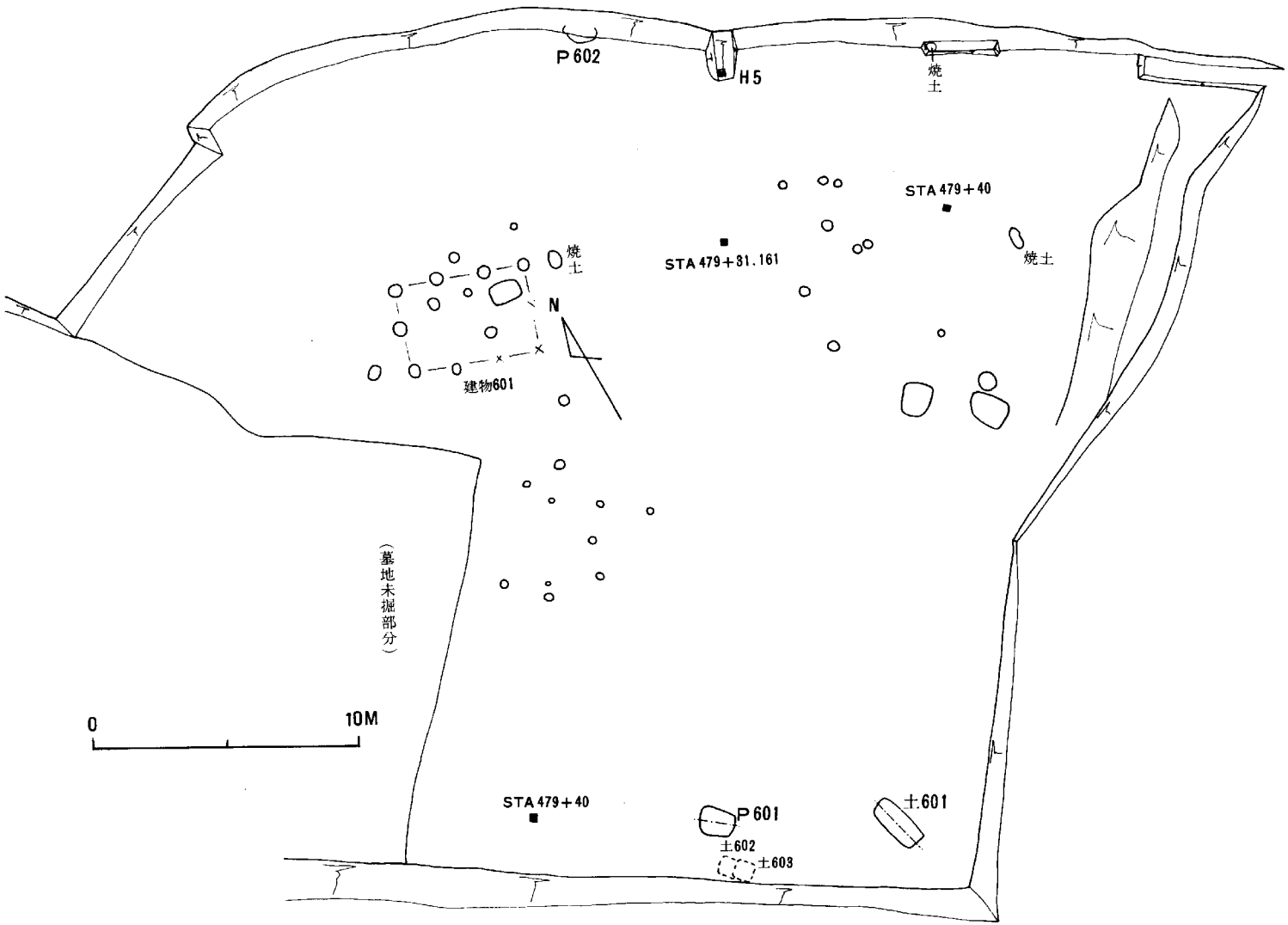
土601は，６区南東隅で検出されたもので，二つの時期を異とする土壙墓が重なっている。古い方の土壙墓（１）は，長さ2.06ｍ，巾は南側が0.74ｍ・北側が0.65ｍを測り，床のまわりには巾17～４㎝・深さ10～５㎝の溝を掘っていて，南端の溝の中には箱式石棺の小口のような板石を立てている。これに伴う遺物は皆無であり，この土壙に埋葬のなされた時期も不明である。新しい方の土壙墓（２）は，１が埋められた後に掘られたもので，図に見られるような重なりを示したのは偶然であろう。２は，径48㎝を測る円形のピットで早桶を利用した坐棺であったであろう。頭蓋骨の他に腕・脚の骨が残っており，頭蓋骨の下から６枚の古銭が重なって出土した。

開元通寶（南唐　即位４年　A．D966）
祥符通寶（北宋　大中祥符２年　A．D．1009）
嘉祐通寶（北宋　嘉祐２年　A．D．1057）
元豊通寶（北宋　元豊元年　A．D．1078）
永樂通寶（明　　永樂６年　A．D．1368）
永樂通寶（明　　永樂６年　A．D．1368）

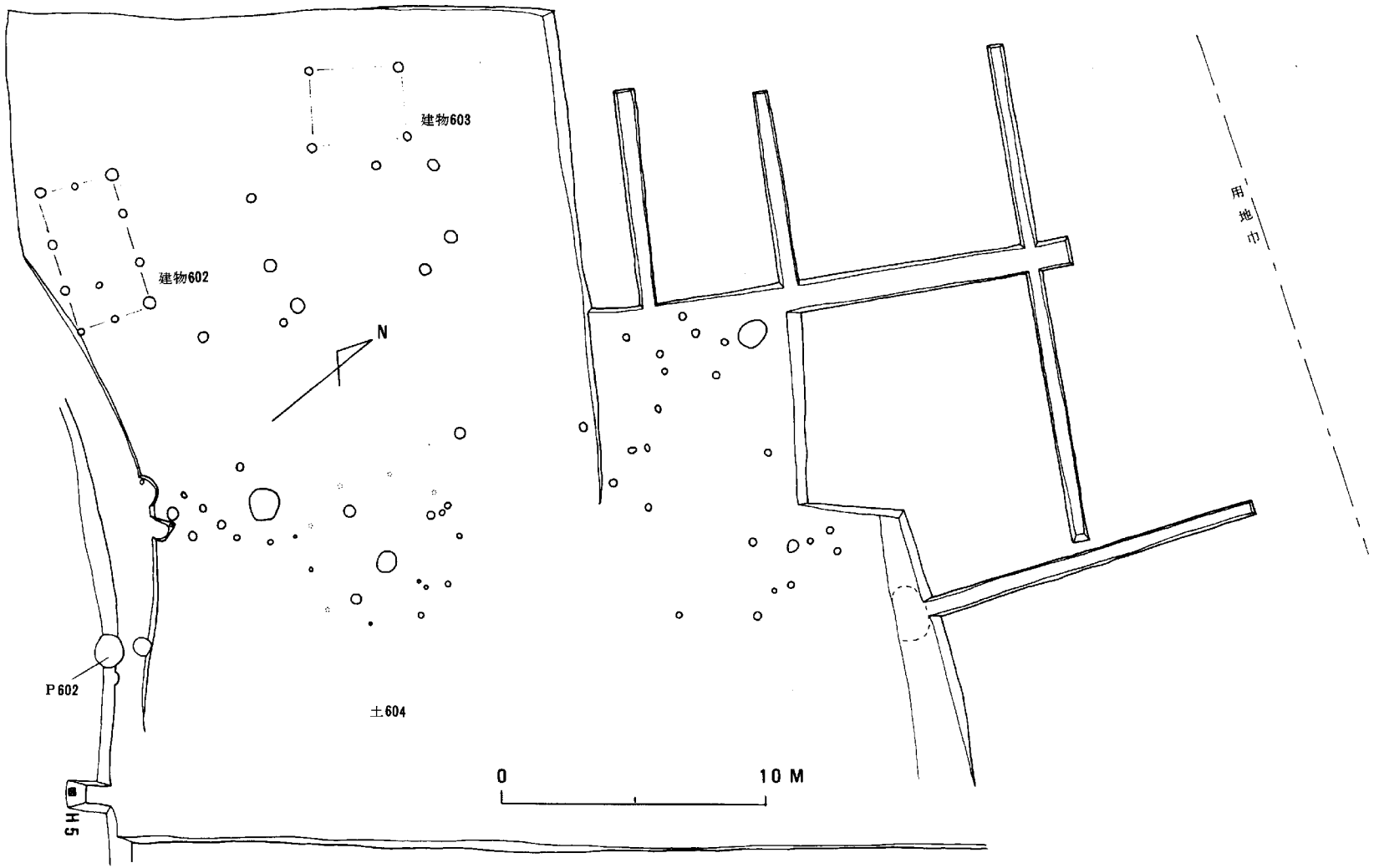
の６枚（第109図）で，南唐銭・北宋銭・明銭である。

土602

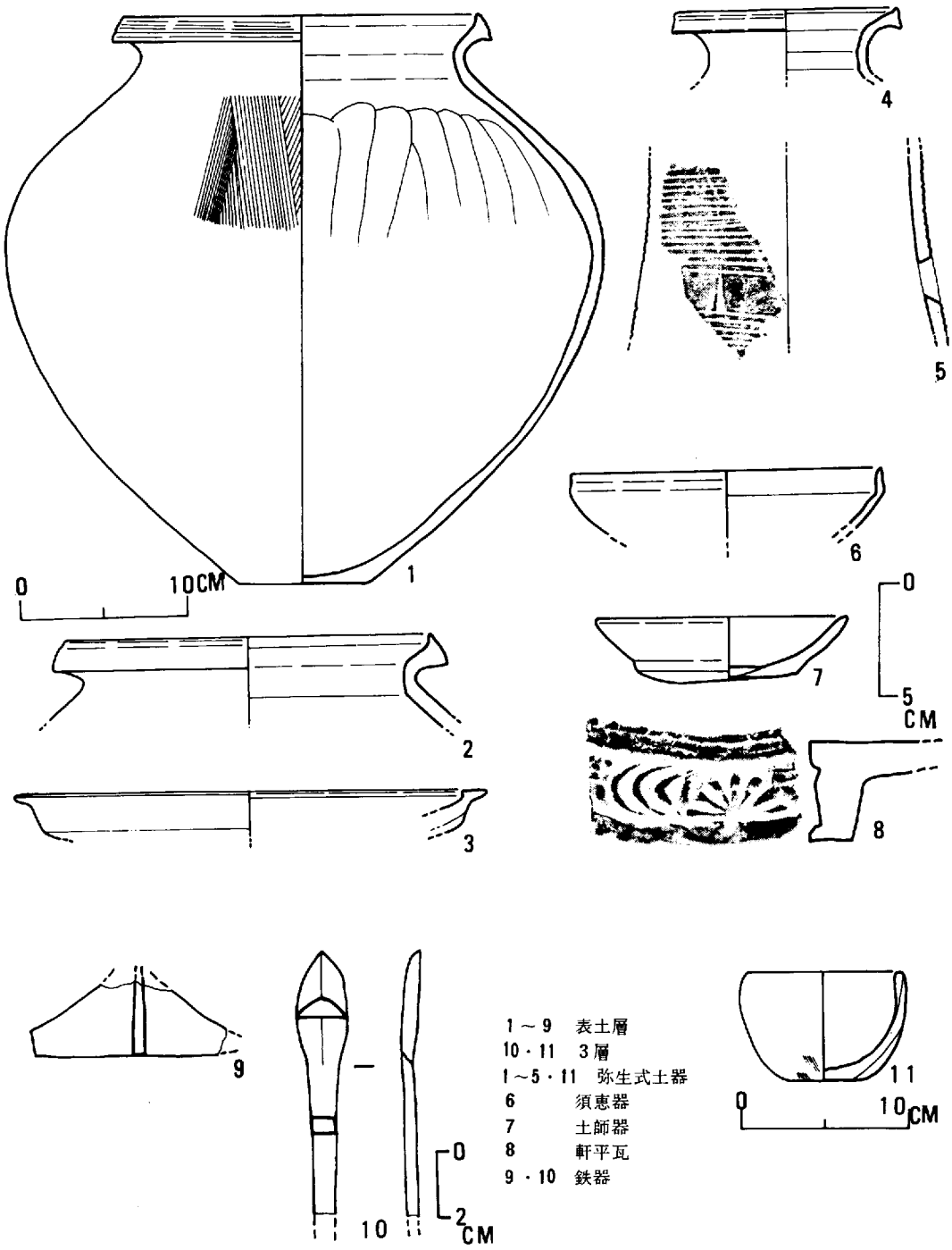
土602は，６区南端部にあり，土壙内の埋め土とまわりの土との間にほとんど差がなく，土壙の掘り方を検出することができなかった。ただ，底の60㎝角ほどのみはやや黒ずんでおり，この黒ずんだ部分から６枚の古銭（第109図）が重なって出土したために，土壙墓があったと



第105図　6区南半分遺構配置図

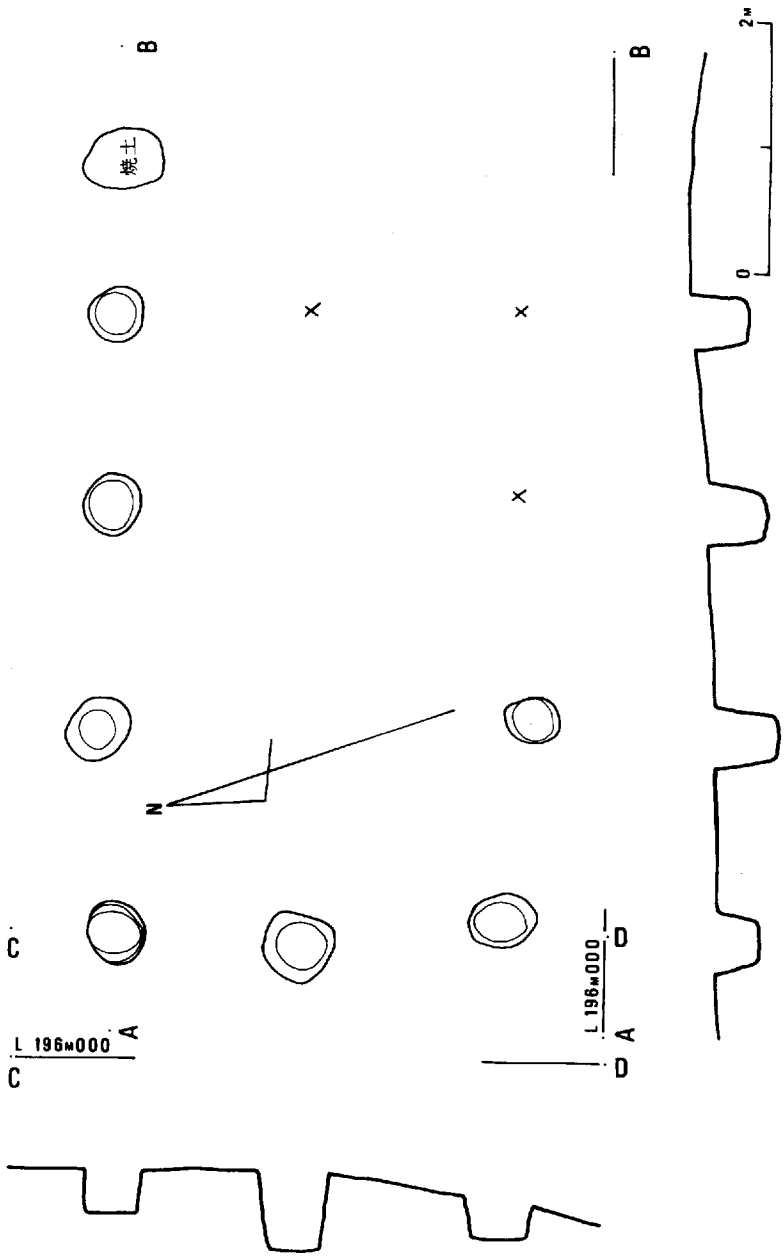


第106図　6区北半分遺構配置図



第104図　6区出土遺物実測図

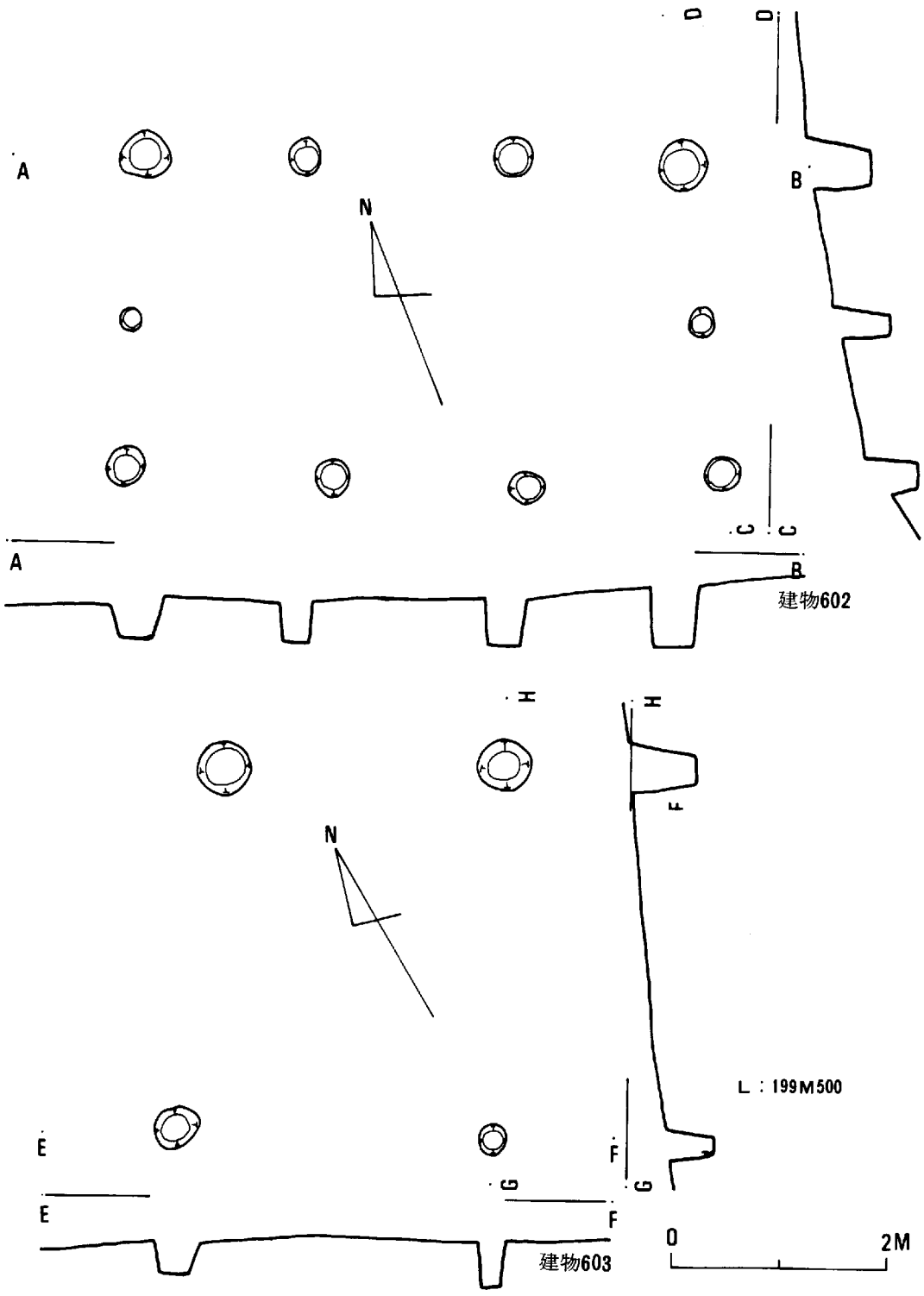
判断した。しかしすでに土壙の壁は除去した後であったため，土壙の深さ等は不明である。



第107図　建物601平面図・断面図

6枚の古銭は，

淳化元寶（北宋　淳化元年　A.D. 990）
皇宋通寶（北宋　寶元2年　A.D.1039）
嘉祐元寶（北宋　嘉祐2年　A.D.1057）
元豊通寶（北宋　元豊元年　A.D.1078）
元祐通寶（北宋　元祐8年　A.D.1093）



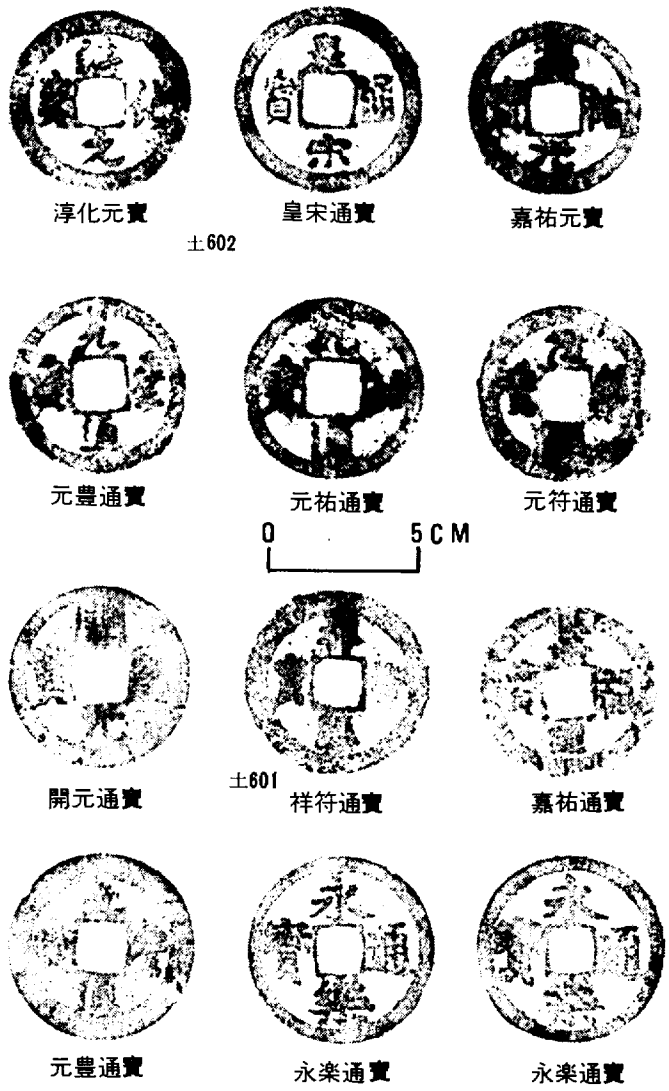
第108図　建物602・建物603平面図・断面図

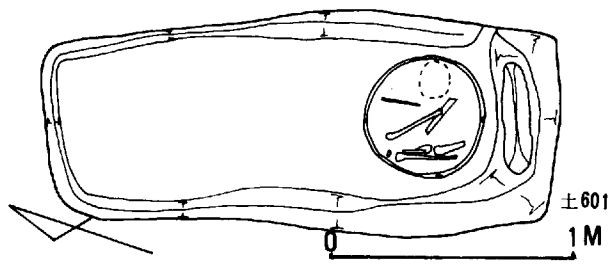
元符通寶（北宋　元符元年　A．D．1098）で，いずれも北宋で鋳造された銅銭である。

土603

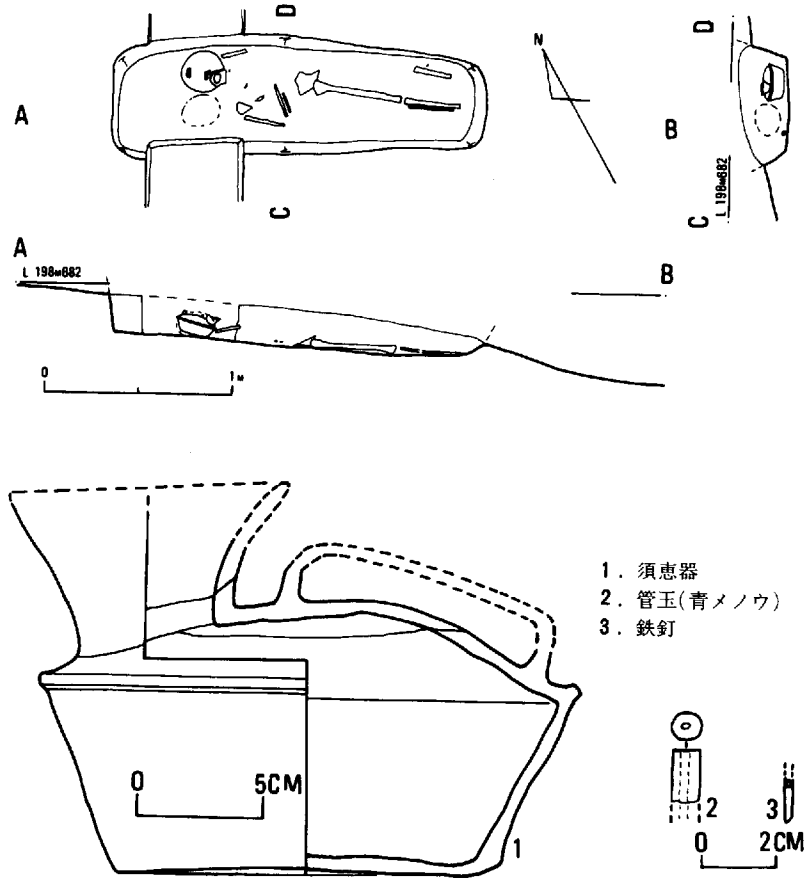
土603は，土602を切ってつくられているが土602と同様の底の部分（60㎝角に黒ずんだ所がある）のみを検出した。土602・土603は共に方形の坐棺であったと思われる。土603からの出土遺物は，底から約30㎝浮いた状態で刀の刃部の一部が出土し，床の黒ずんだ部分から木製の櫛の断片が出土した。刀の刃は，現存長15㎝，刃巾3.5㎝・峰の厚さ0.7㎝を測る。掘り方を検出したわけではないが，副葬品として刀の折れたものを入れたのであろう。櫛は，木製横櫛で，櫛の高さ3.3㎝・厚み0.8㎝・歯の長さ2.4㎝・歯の厚さ1㎜・歯と歯の間隔1.5㎜・現存巾1.8㎝を測るものである。残存状態は悪い。

古銭は，２つの土壙墓か枚ら６ずつ計12枚出土したが，南唐銭・北宋銭・明銭（永楽銭）に限られ，いずれもあまり手擦れは見られられない。これらから見





第109図　土601平面図および土601・土602出土古銭拓影



第110図　土604平面図・断面図および遺物実測図

て，土601～土603は若干差はあるが，室町時代に属するものといえよう。

土604（第110図）

これは，６区北半分中央東寄りの所で検出された。長さ２ｍ・巾47～57㎝を測り，深さ現存20㎝を測る。この土壙は長軸を北西に向けており，頭を北西にして遺体を安置しているが，頭の上に約30㎝ほどの空間ができている。人骨の保存度はよくないが，頭蓋骨・両腕・肋骨の一部・骨盤の一部・両脚の一部が残存していた。右腕は肘で曲げて胸の上に置き，左腕は頭の横に置かれた須恵器（提瓶）を抱えていたような状態で検出された。副葬の遺物は須恵器の提瓶１つである。この土壙内からは，他に青メノウ製の管玉１・釘１が出土したが，これらは埋葬時の混入であろう。

出土遺物は，第110図に示すとおりである。１は提瓶（須恵器）で，胴の高さ10.9㎝・胴の径21.6㎝・底の径14.4㎝を測り，径推定11㎝・高さ推定6.2㎝の口がつき，巾5.8㎝厚さ５㎜の粘土帯をへ状に曲げた取手が張りつけてある。肩には断面台形の凸帯がめぐらされている。出土時に口縁部および取手はすでに欠損していた。これは埋葬時に意識的にこわしたものであろう。２は，径８㎜・現存長1.4㎝・孔径1.5㎜×2.0㎜（楕円）を測る良質の青メノウ製の

管玉の一部を欠損したものである。これは古墳時代のものが埋葬時に混入したのであろう。3は，2㎜角・現存長1.4㎝の細い釘の先端部で，これも埋葬時の混入であろう。須恵器から見て平安時代初期のものであろう。

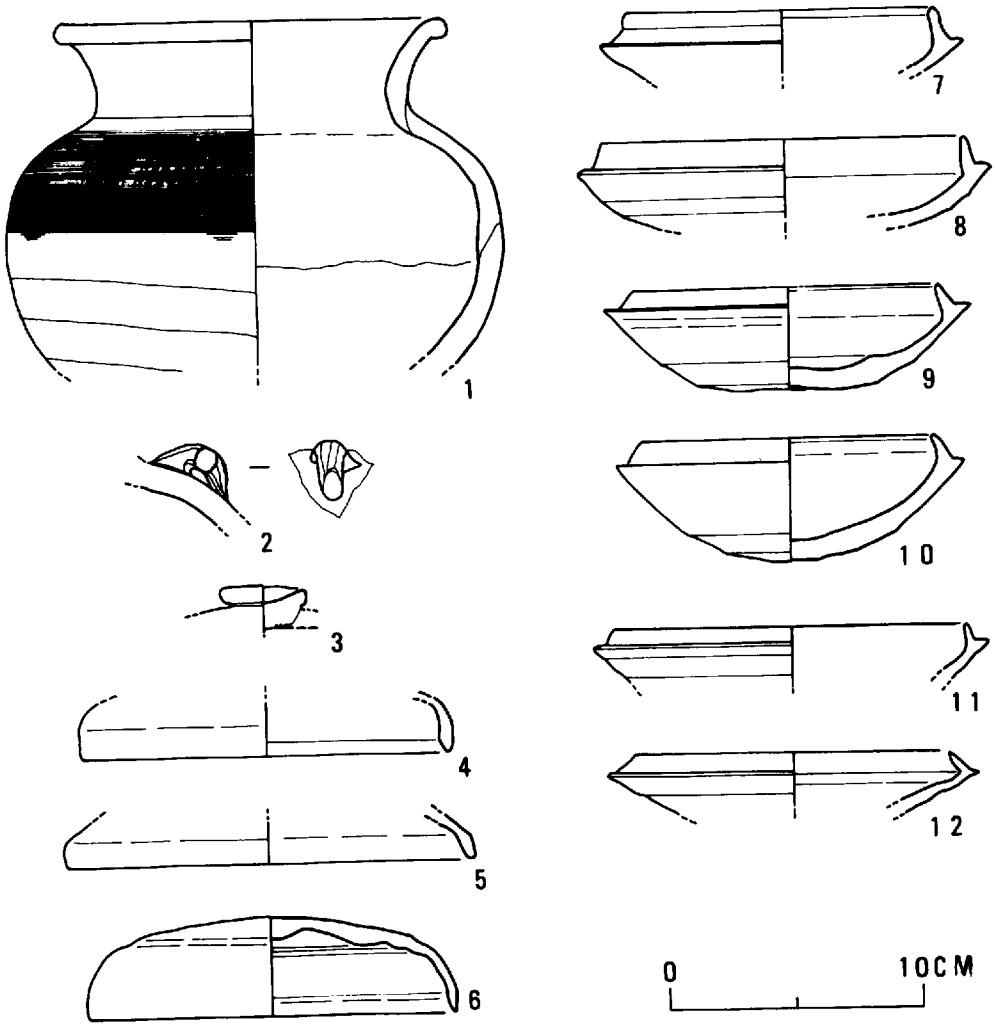
6区は，かなり土砂が流失し，また削平も受けているので遺構の残存状態は良くなかったが，6区では，弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代初期・室町時代の各遺構が確認された。しかし，それらは点在するのみで生活の場としてのまとまりは残存していなかった。

第七節　7 区

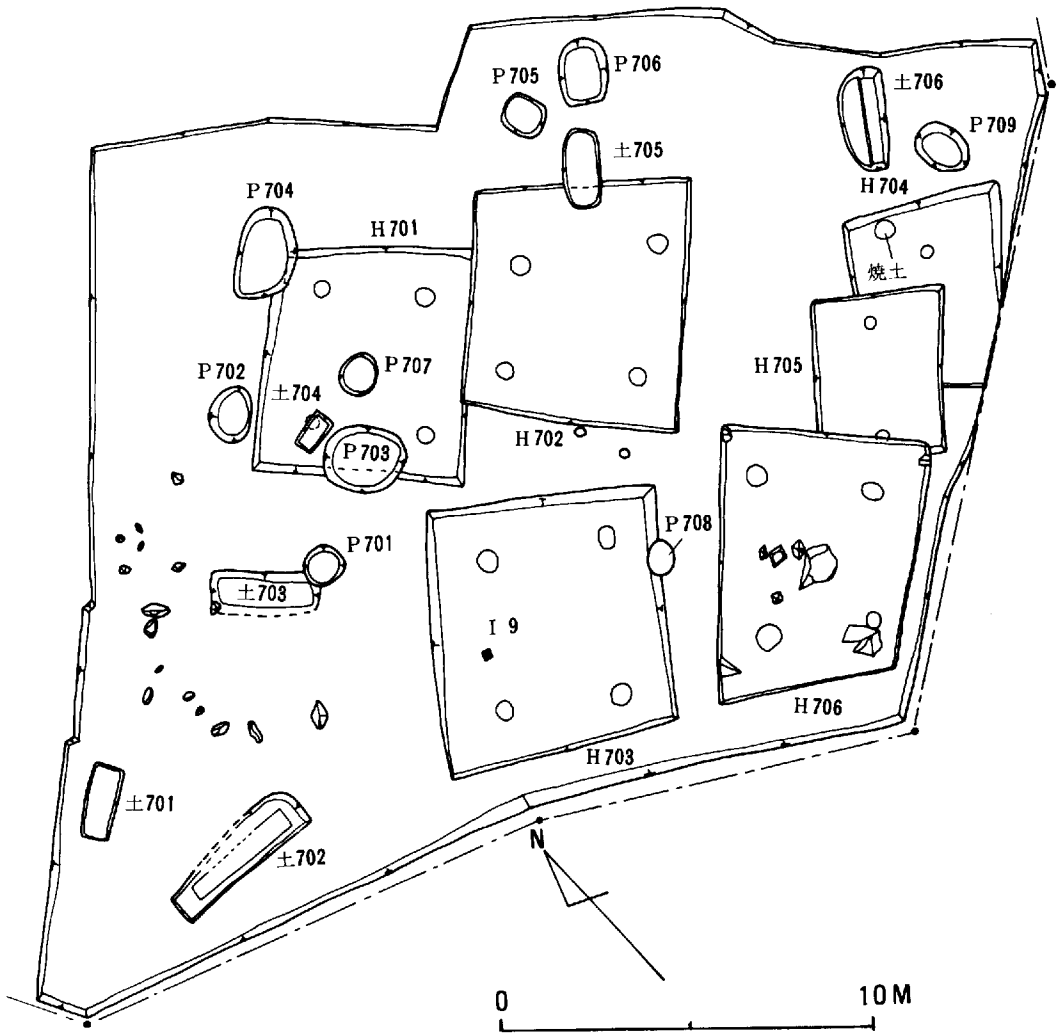
7区は，発掘対象範囲の東南隅に位置する。この部分は，縦貫道本線敷からはずれていて，桃山遺跡の北西にある共同墓地に行くための側道が来る部分で，側道は7区でカーブして陸橋で北側に抜ける。

7区では，厚さ20～25cmの表土層を除去して遺構面を検出した。表土層の中には，少量の弥生時代後期の土器・かなり多量の6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器・土師器片が包含されていた。表土層下の遺構面では，住居址6・土壙墓7・ピット9を検出した。土壙墓1基は6世紀初めのもので，他の遺構は切りあいもあるがいずれも6世紀後半につくられ埋没している。

表土層出土の遺物の一部は第111図に示すとおりである。



第111図　7区表土層出土土器実測図

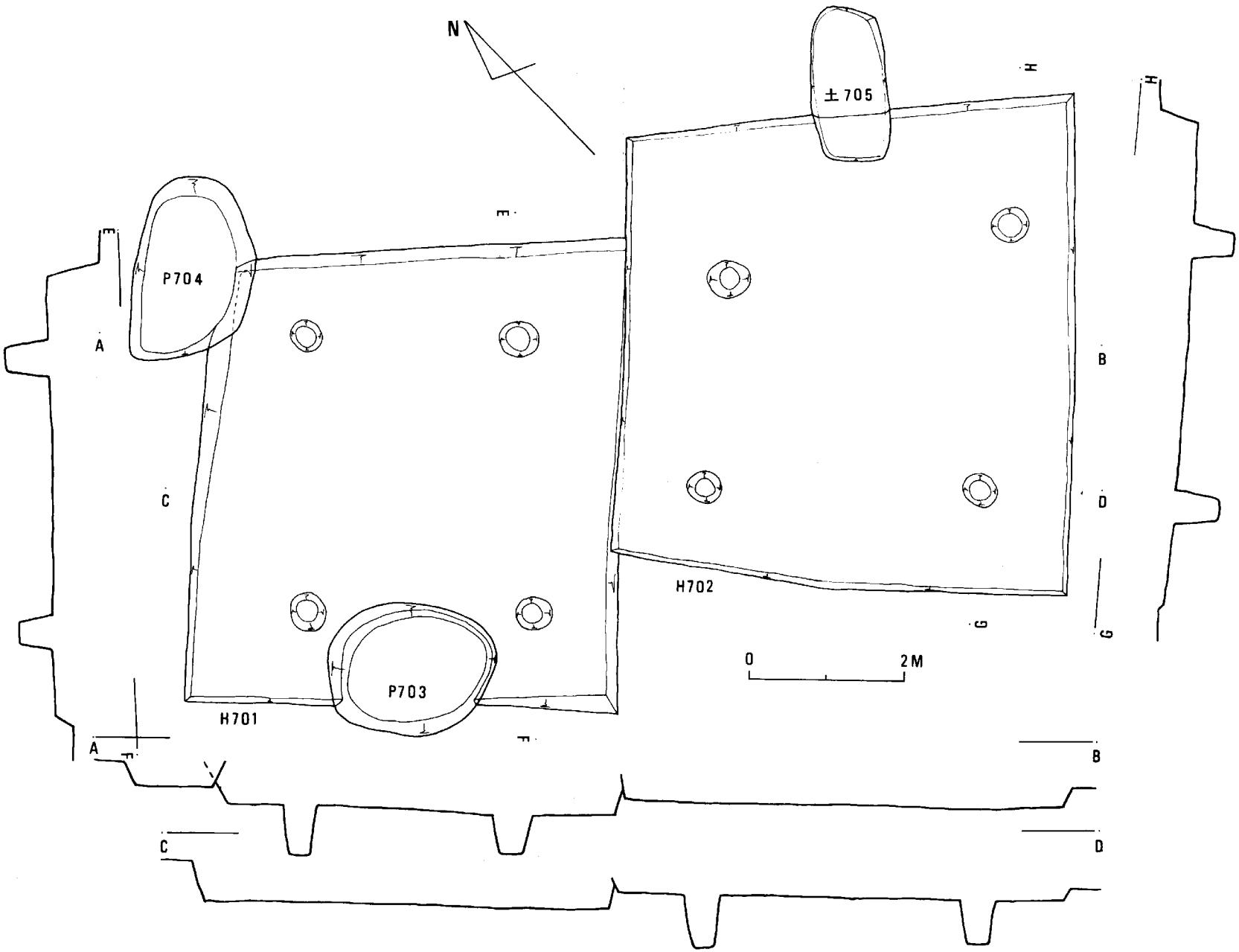


第112図　7区遺構配置図

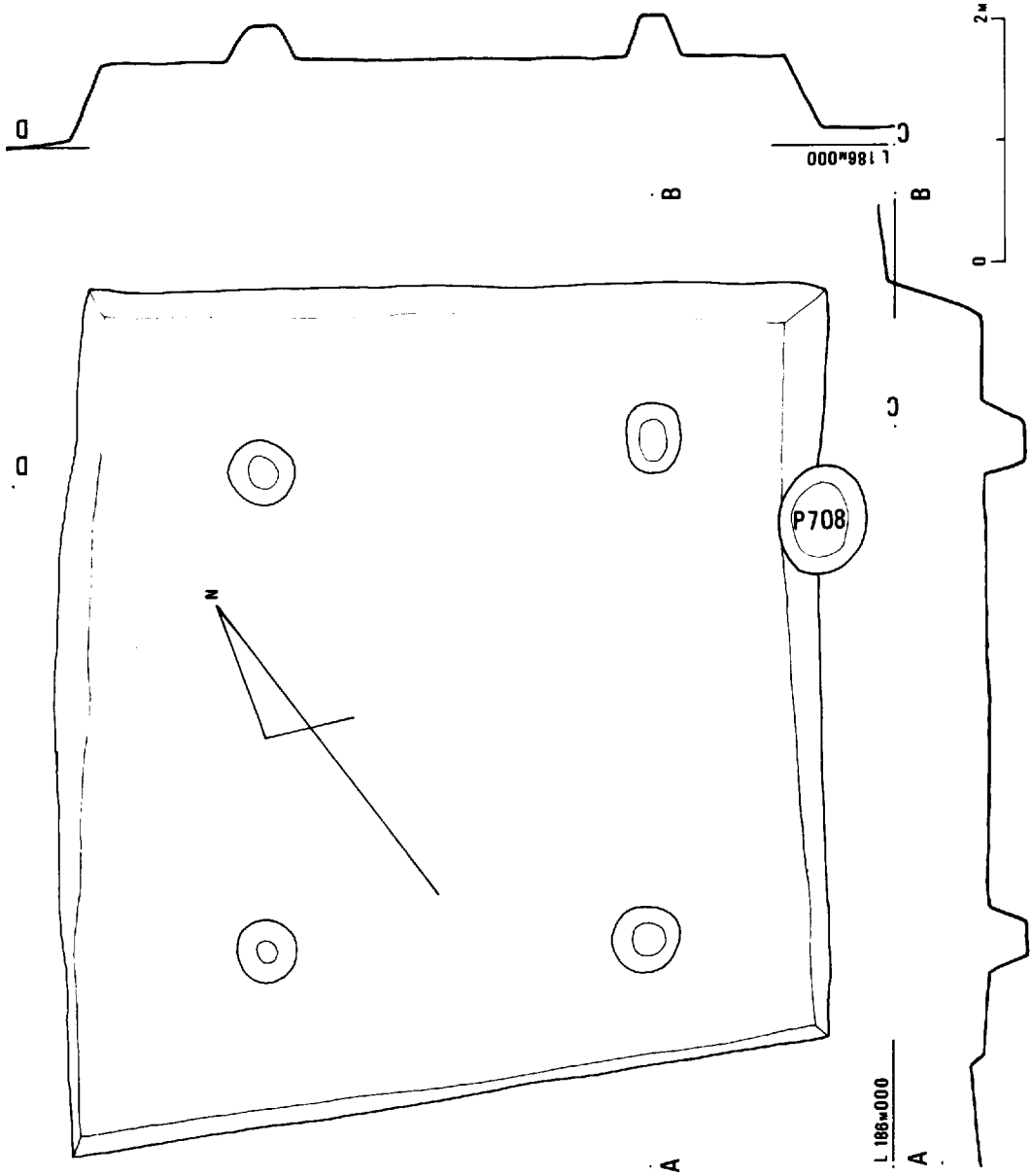
H701（第113）

H 701は，南西の辺5.6 m・北西の辺5.6 m・北東の辺5.3 m・南東の辺6.2 mを測る方形の住居址である。壁の高さは東辺で0.7 m・南西辺で0.2 m残っている。床面には4つの柱穴があり，径は40～50cm，深さ40～60cmを測る。柱穴の心心距離は，北と西の間は3.6 m・北と東の間は2.7 mmを測る。この住居埋没後，H 702・P 703・P 704・P 707によって切られているが，H 701内出土の遺物とこれを切っている遺構出土の遺物の間にほとんど時期的な差は認められない。

H 701からの出土遺物の一部は，第115図の2～7に示すとおりである。遺物全体から見



第113図　H701・H702平面図・断面図　　L=197m000



第114図　H 703平面図・断面図

て，9割は土師器で残り1割が須恵器である。須恵器は杯（身・蓋）のみで，土師器は甑・高杯・甕・坩・竈など器形も豊富である。

H702（第113図）

H 701が埋まった直後につくられたもので，台形を呈し，台形の下底6.5 m・上底5.4 m・高さ5.9 mを測る。4本柱で，南隅の柱穴は外に張り出して掘られている。H 702からは，須恵器・土師器が半半の割合で出土し，須恵器は杯（蓋・身）のみ（一部は第119図の1～3に

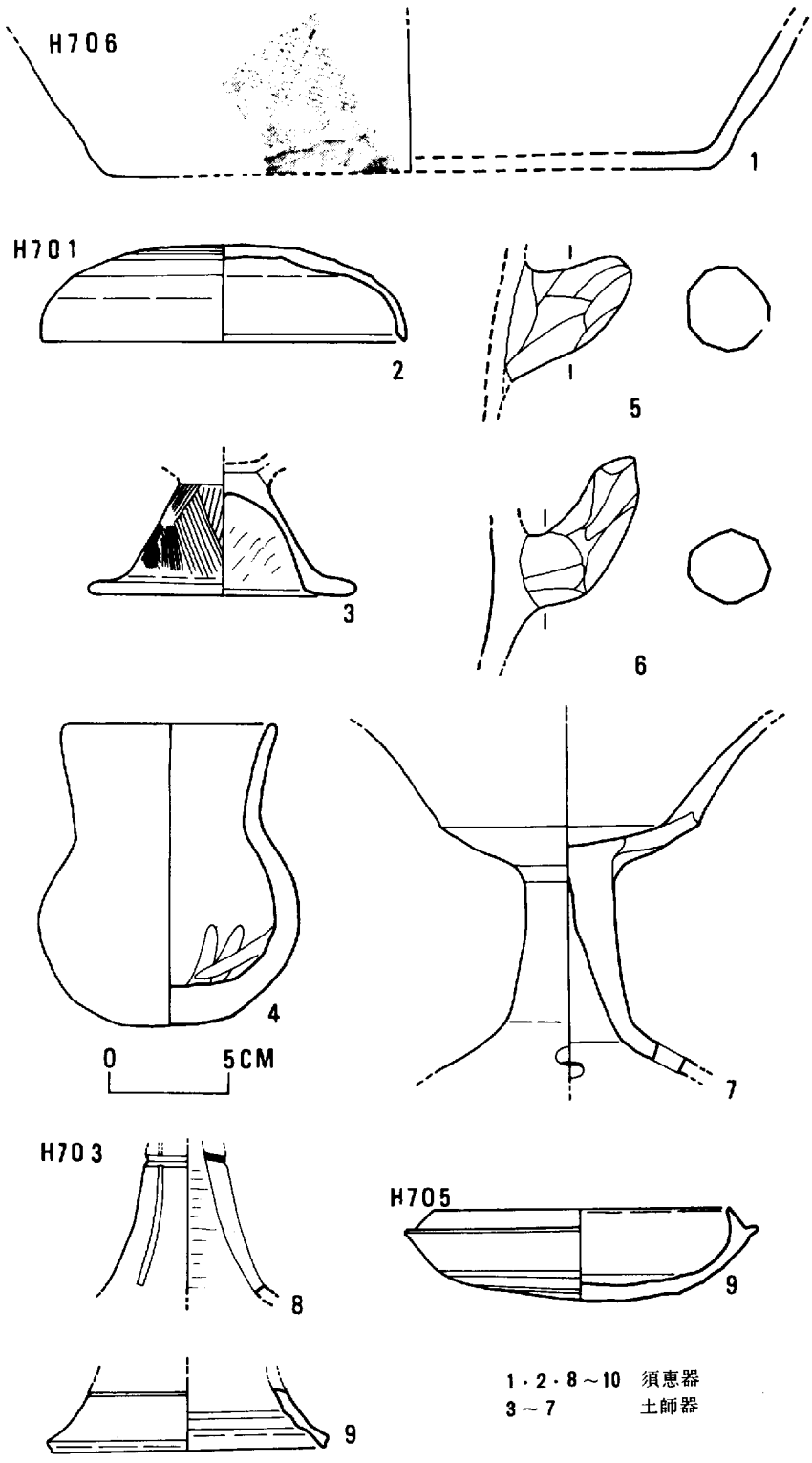
示す)であり，土師器の器形はH701と同様である。

H703（第114図）

H703もH702と同様に台形を呈する。台形の下底7.0m・上底6.1m・高さ6.1mを測る。4本柱で柱の中心間の距離は3.2mと3.9～4.1mを測る。この住居址からの出土遺物は少量の須恵器(第115図の8・9)・土師器が出土したのみである。

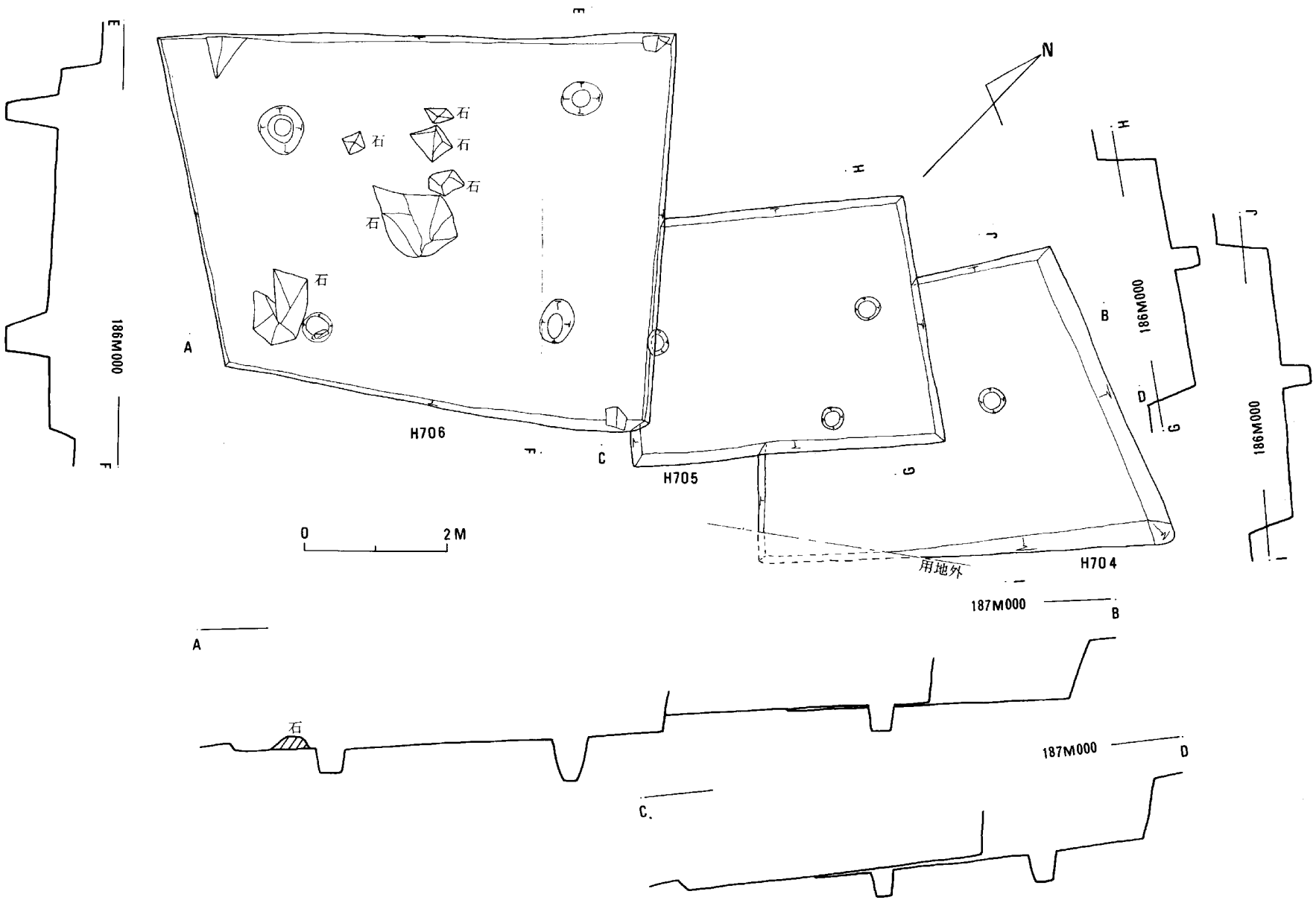
H704（第116図）

二本柱の住居址で台形を呈する。南の隅は用地外に存在する。北東辺の長さ4.5m・南東辺



1・2・8～10　須恵器
3～7　土師器

第115図　H701・H703・H705・H706出土土器実測図



第116図　H704・H705・H706平面図・断面図

の長さ5.8 m・南西辺の長さ3.5 m・北西辺の長さ4.2 m・柱穴の中心間の距離2.2 m・北東辺の壁の高さは現存0.8 mを測る。この住居の北隅の床面の一部が円形（径30cm）に焼けている。H 704からの出土遺物の量は多く，須恵器では，杯（蓋・身）・長頸壷・高杯があり，土師器では，甑・甕・坩・高杯・竈が存在する。出土遺物のうち須恵器の一部のみ第117図の4～14に示した。土師器も含めて，遺物はいずれも6世紀後半のものである。

H705（第116図）

H 705は，H 704が埋まったのちに，その西隅を切ってつくられた台形の二本柱の住居址である。台形の下底4.4 m・上底3.9 m・高さ3.4 m・柱穴の中心間の距離3.0 m・北東辺の壁の高さは現存0.6 mを測る。この住居址からの出土遺物の量は少なく須恵器・土師器あわせて数点を数えるのみである。その一部は第115図の9に示した。

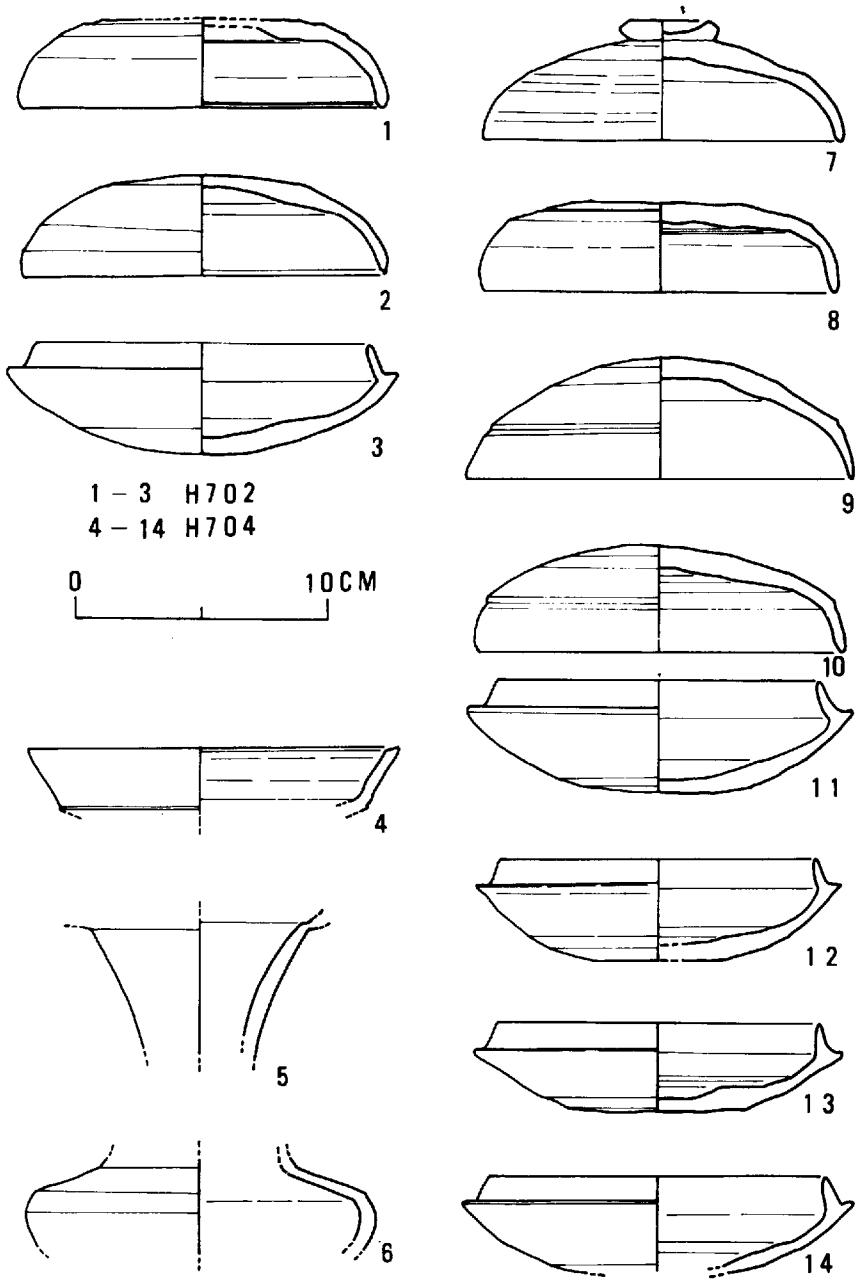
H706（117図）

H 706は，H 705が埋まったのちにその南西辺の一部を切ってつくられており，台形を呈する4本柱の住居址である。北東辺の長さ5.5 m・南東辺の長さ6.0 m・南西辺の長さ4.7 m・北東辺の長さ7.3 m，北東辺の壁の高さ現存0.6 m，柱穴の中心間距離は3.3 m・3.3 m・2.8m・4.2mを測る。この住居は，床あるいは壁に岩が頭を出しており，他に類例を見ない。H 701～H 705と同様に，淡暗褐色土層に切りこんでつくった住居で，住居内を埋めている土は黒褐色土であって，この黒褐色土を除去して床面を検出した。この床面にすでに岩が頭を出していたので，住居をつくったときから床面に岩が出ていたものと判断した。遺物の量は少なく，第115図の1に示した壷の他に数点の須恵器・土師器を見るのみである。

6軒の住居址を検出し，切りあっているものはH 701（古）とH 702（新），H704～H 706（H704が古くH705・H706と順に新しくなる）で，単独に存在するのはH 703である。これらの多くは，台形を呈し，いずれにも壁帯溝・据え付けの竈（炉）は存在しない。住居址は切り合い関係も見られるが，出土遺物の間に時期差は認められない点から考えて，いずれも短期間のうち建てられたものである。その時期は6世紀後半である。6世紀後半の住居址では，一般的に据え付け竈が存在するが，7区の住居址では据え付け竈のかわりに移動のできる竈がかなり出土している。据え付けでなくとも充分に使用に堪えるものである。また掘立て住居の場合に壁帯溝がなければ，壁から浸透して出る水の除去に支障が生じるとされているが，桃山遺跡のある場所は現在でも桃や桑が栽培されている所でもあり，水はけがよく壁から浸透して出た水も床をぬらしてしまうことはなかったのであろう。

P701（第118図）

1.2 m×1.05mの楕円形で，深さ0.3 mを測り，土703の一部を切って掘られている。遺物の量は少ない。



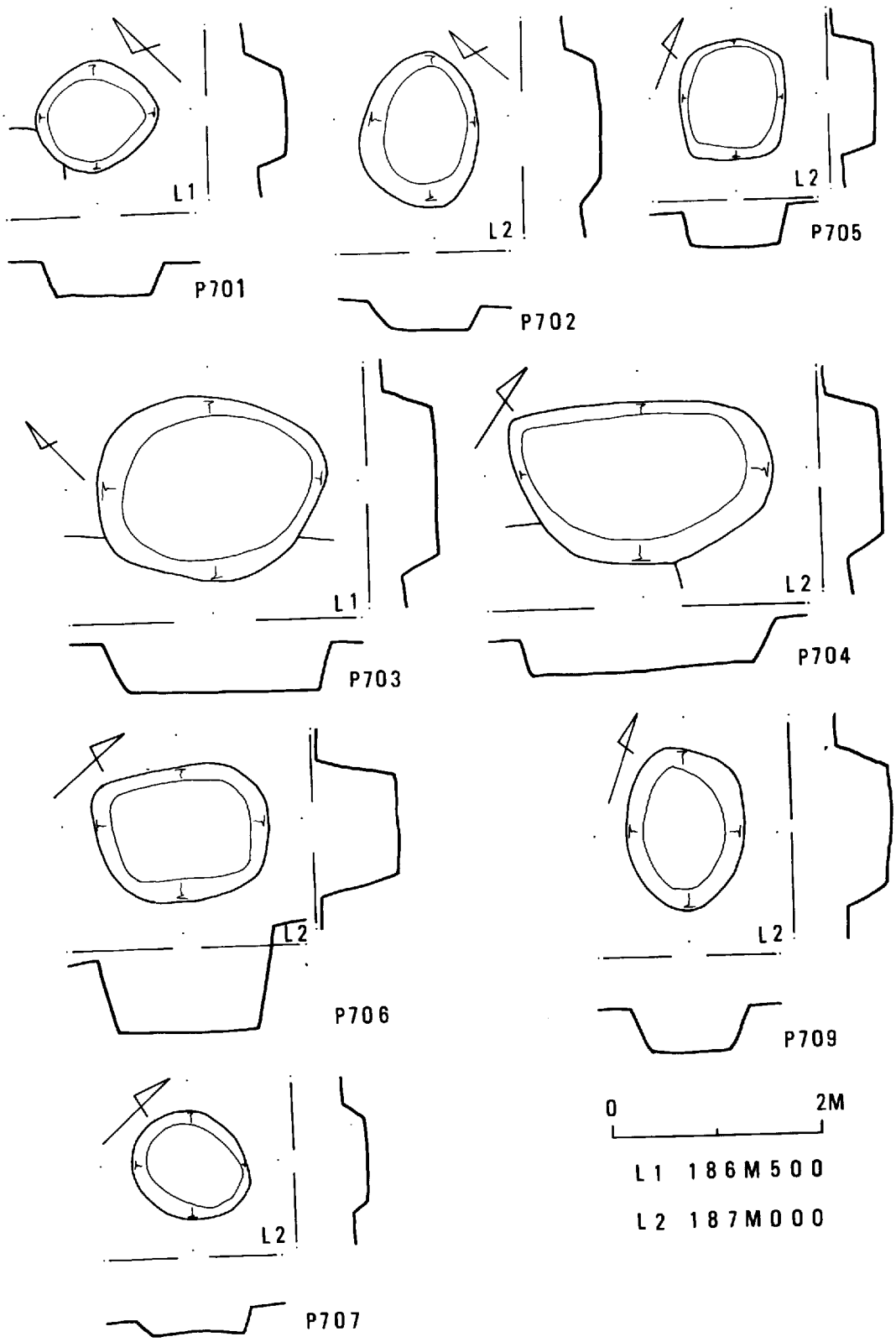
第117図　H702・H704出土土器実測図

P702（第118図）

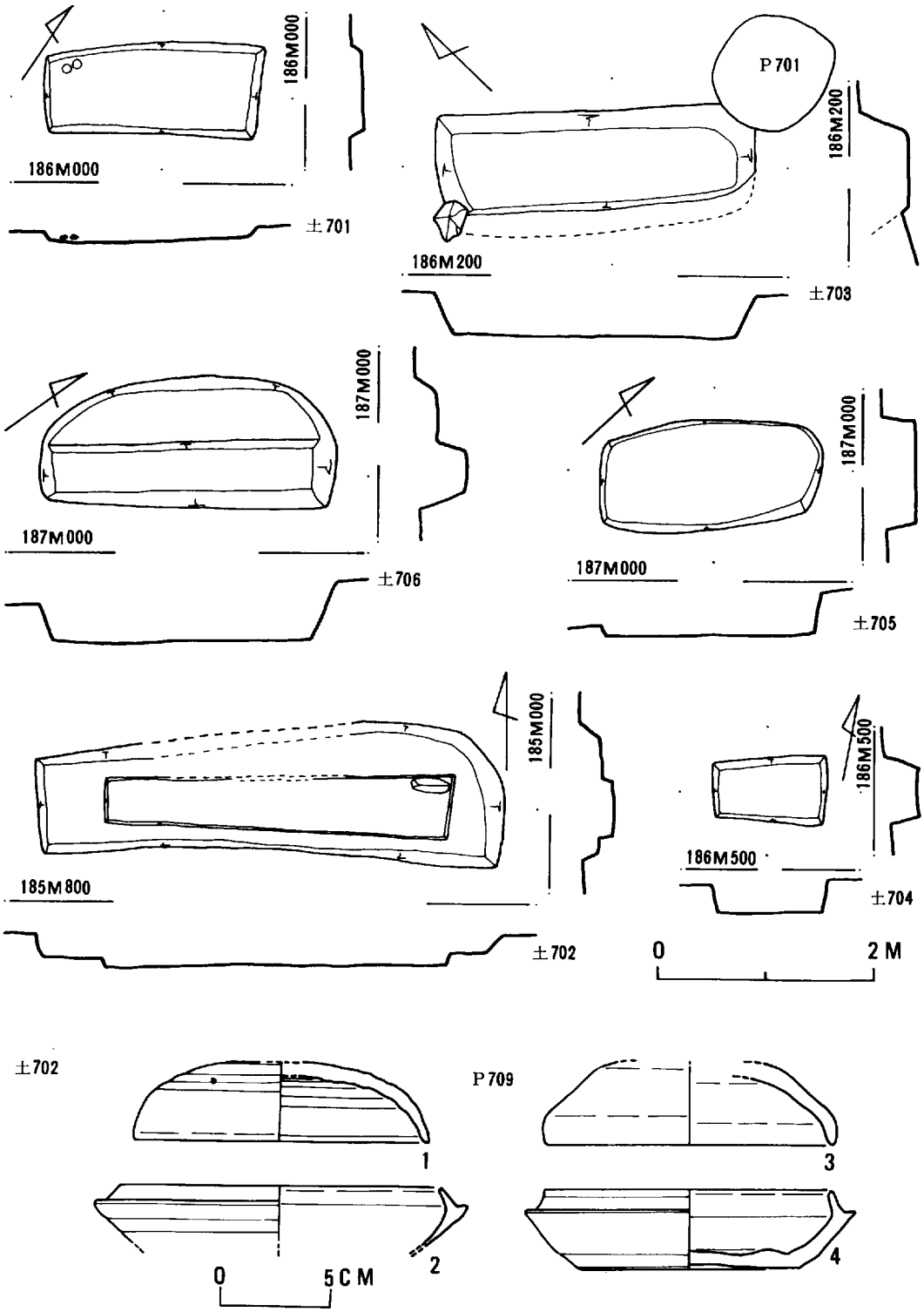
H 701 の西側にあり，1.1 m × 1.5 m の楕円形を呈し，深さ 0.3 m を測る。遺物はまったく出土しなかった。

P703（第118図）

H 701 が埋まったのちにつくられたピットで，2.2 m × 1.8 m の楕円形を呈し，深さ 0.5 m



第118図　7区 pit平面図・断面図



第119図　7区土壙墓平面図・断面図および土702・P709出土土器実測図

を測る。これも遺物は皆無であった。

P704（118図）

このピットは，P 703と同じくH 701が埋まったのちにつくられたもので，2.5ｍ×1.5ｍの楕円形で，深さ0.5ｍを測る。遺物は皆無であった。

P705（第118図）

H 702の北に掘られており，1.1ｍ×1.0ｍの隅丸方形を呈し，深さ0.4ｍを測る。遺物は土師器片が若干出土した。

P706（第118図）

H 702の北にP 705と並んで掘られており，1.7ｍ×1.3ｍの隅丸方形を呈し，深さは1.0ｍを測る。土師器片・須恵器片が若干出土した。

P707（第118図）

H 701が埋まったのちに掘られたピットで，1.1ｍ×1.0ｍの楕円形を呈し，深さ0.2ｍを測る。遺物は出土しなかった。

P708

H 703が埋まったのちに掘られたもので，0.9ｍ×0.7ｍの楕円形を呈し，深さ0.5ｍを測る。遺物は出土しなかった。

土701（第119図）

7区の西隅に存在する。1.9ｍ×0.8ｍの方形を呈し，深さは現存10㎝を測る。西隅に須恵器の杯が蓋をのせた状態で2セット置いてあった。この杯（図版38の17～9）は，6世紀初めのもので，7区では，他に例を見ない。

土702（第119図）

土701のすぐ東につくられており，長さ4.3ｍ・巾1.2ｍの土壙を掘り，その床をさらに長さ3.1ｍ・巾0.6～0.4ｍ・深さ0.1ｍ掘り下げて二段掘りになっている。中の区画には，木棺を置いたと考えられ遺物は存在しない。まわりの段状部分の上には多量の遺物が存在し，副葬の品とも考えられる。遺物には須恵器と土師器とがあり，器形も豊富である。

土703（第119図）

土703は，H 701の西にあり，P 701によって切られている。長さ3ｍ・巾推定1.1ｍ，現存する深さは0.4ｍを測る。遺物は存在しなかった。

土704（第119図）

土704は，H 701が埋まったのちにつくられた土壙墓で，長さ1.0ｍ・巾0.6～0.5ｍ現存する深さ0.3ｍを測る。7区の土壙墓の中では最小のものである。遺物は出土しなかった。

土705（第119）

土705は，H702が埋まったのちにつくられた土壙墓で，2.0ｍ×0.8ｍのやや胴のふくらんだ形（最大巾1.0ｍ）をしており，現存の深さ0.3ｍを測る。須恵器・土師器が若干出土した。

土706（第119図）

H 704の北東にあり，西壁側に段をつくっている。全体の形は半円形を呈し，長さ2.7 m・巾1.2 m・深さ0.4 mを測る。深い方（木棺の大きさ2.3 m×0.3 m×0.4 m）からは遺物の出土はなく，段状部分からのみかなり多量の須恵器・土師器が出土した。

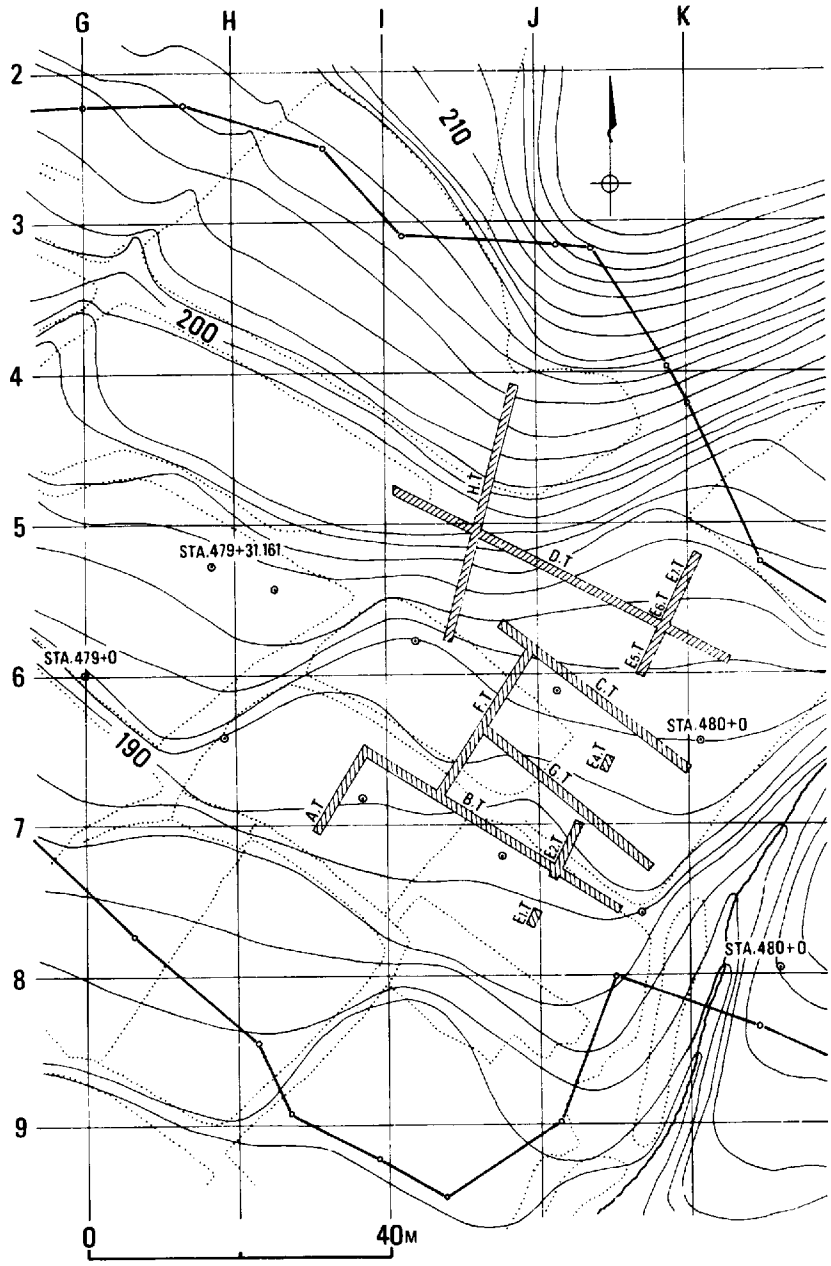
土壙墓は6基検出したが，その内土701のみは6世紀初頭のものであるが，残り5基は，住居址・ピットからの出土遺物との間に時期的な差はほとんど認められない。土701を除くその他の遺構は，6世紀後半の短期間のうちにつくられたものといえる。

住居址群等の遺構面下は，土702と土703の間を5 m×5 mのグリッド内の掘り下げを行なったが，厚さ0.6 m以上にわたって遺物はまったく出土しなかった。このために7区は，古墳時代後期の遺構面下の調査は行なわなかった。

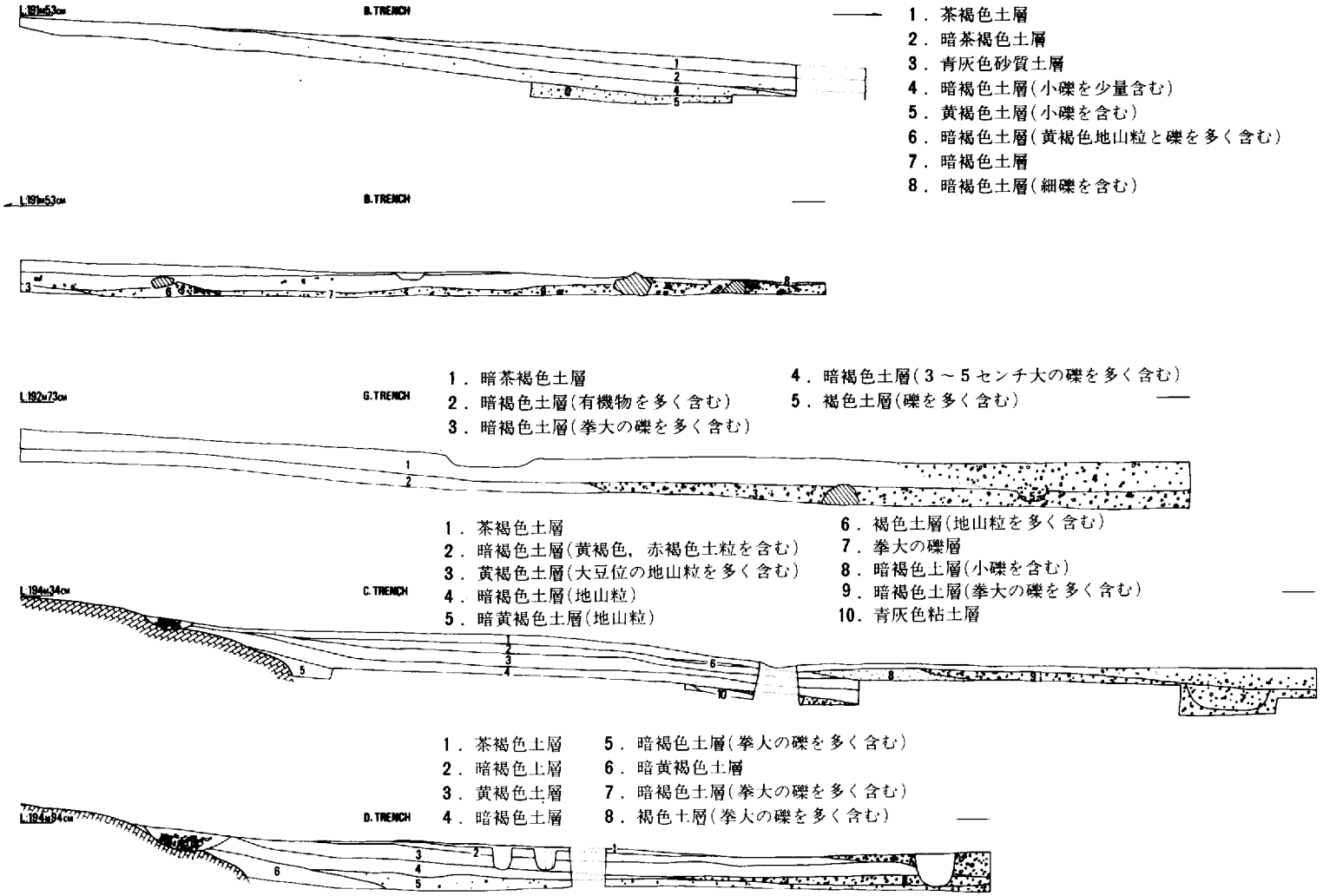
参考文献

『陶邑古窯址群Ⅰ』　田辺昭三　平安学園考古学クラブ　1966年
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告5』　岡山県教育委員会　1975年

第八節　8 区



第120図　8・9区トレンチ位置図



第121図　トレンチ土層断面図

Ⅰ　トレンチ調査

1．トレンチの設定と層位

8区におけるトレンチは，表土剥ぎ完了後，第一次調査におけるトレンチを補い，かつ正確を期するために設定したものである。

設定は地形を考え，まずAトレンチを北東一南西方向に，Bトレンチを谷に直行するように設定した。その結果時期の異なる三枚の包含層を確認した。そこで，それらの包含層や遺構の広がりを確認するため，C～Gのトレンチを設定した。また西側の尾根上にもトレンチを設定したところ，版築状の遺構が検出されたため，9区とした。

以上のトレンチ調査により，8区においては基本的に，表土下に中世の遺物を含む茶褐色土層一古墳時代後半の遺物を含む暗茶褐色土層一弥生時代の遺物を含む暗褐色土層という層位が観察できた。これら包含層中にはいずれも多くの角礫を含み，この谷地が崖錐の堆積物によって形成されたものであり，遺構の検出は難しかった。

また縄文式土器が出土しているが，弥生式土器などとともに出土し，縄文式土器だけを含む包含層は認められなかった。

2．トレンチ出土の遺物

＜土器＞（第122図）

Aトレンチ一図示したものはすべて暗褐色土層より出土したもので，弥生時代中期後半より古式土師器まで含んでいた。暗茶褐色土層からも若干の土師器が出土しているが，図示できるものはなかった。

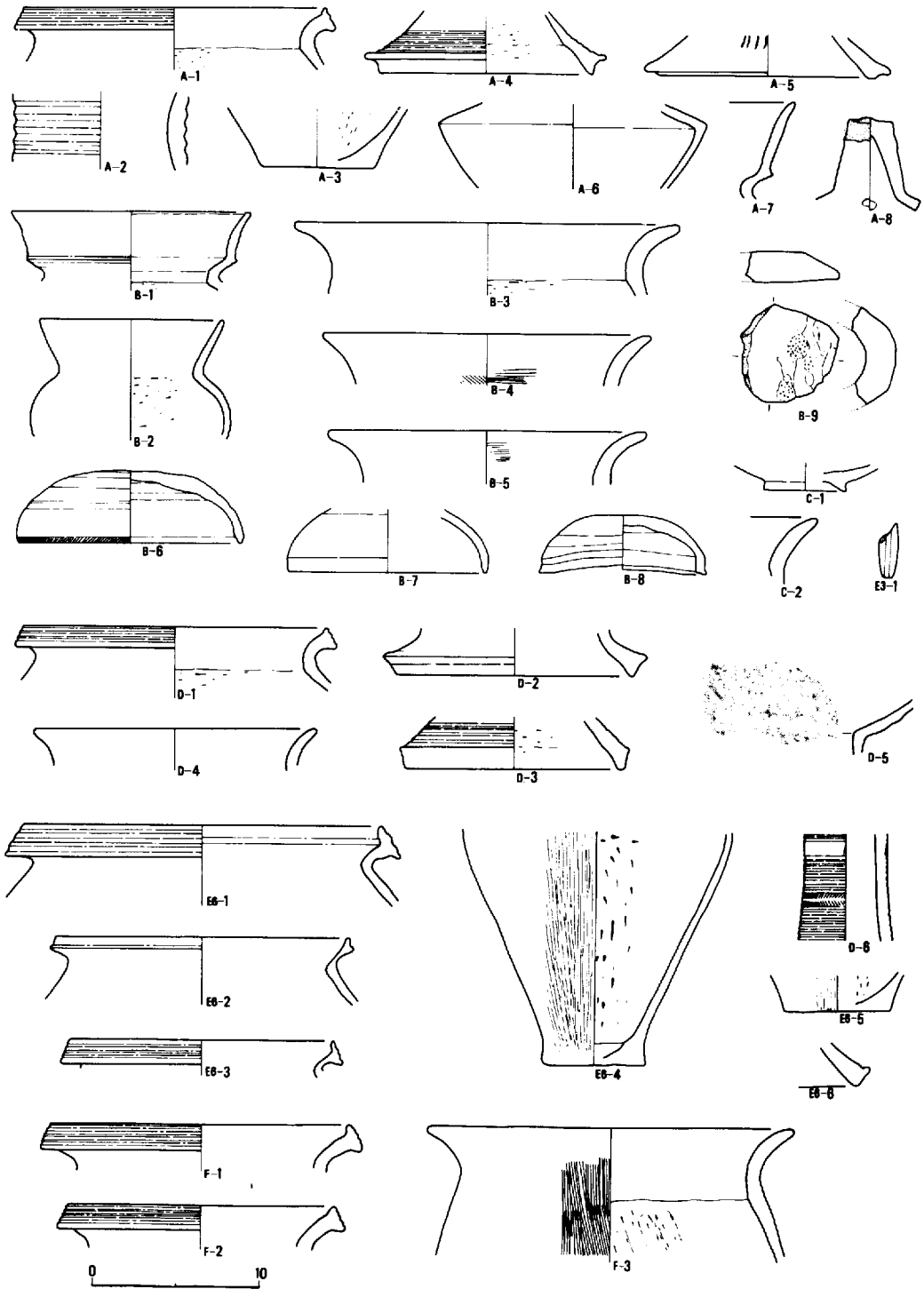
Bトレンチ一1～2は暗褐色土層から，3～8は暗茶褐色土層から出土した。3～5は土師器の甕で，口縁部は単純に外反し，端部は丸みをもっておさめている。胎土に砂粒を多く含み赤褐色を呈す。6は須恵器の杯蓋であるが，口縁端部外面に斜線状の刻目が施されている。

Cトレンチ一遺物の量は少なく，1は茶褐色土層から，2は暗茶褐色土層より出土した。1は高台のつく土師器の小皿であろう。2は土師器の甕で，胎土には砂粒を多く含む。

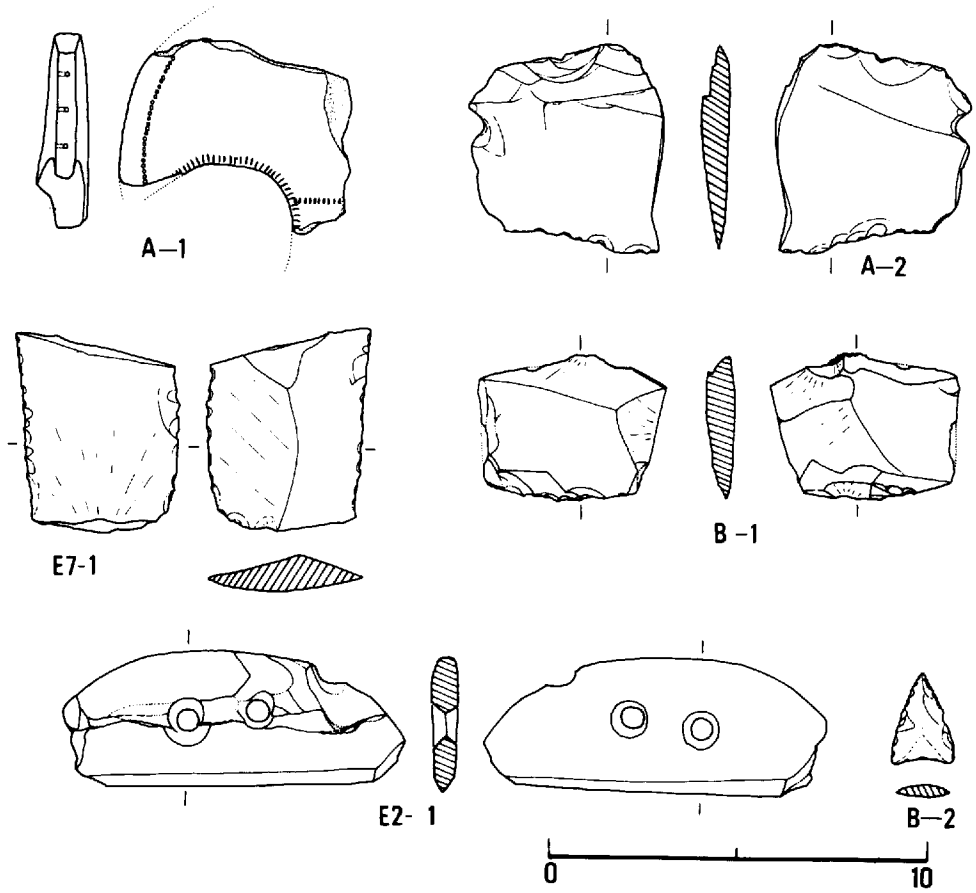
Dトレンチ一1～4は暗褐色土層，4は暗茶褐色土層より出土した。5は暗褐色土層の弥生式土器にまざって出土したものである。文様は縄文地に，曲線的な凸帯をもち，その両側を爪形の連続刺突で飾り，屈曲部にもC字形の爪形をもつ，内面は丁寧にナデられ，器壁は薄く，暗黄褐色を呈す。縄文時代前期の磯ノ森式と思われる。

Eトレンチ一いずれも暗褐色土層より出土したもので，弥生時代中期後半に属するであろう。1は口縁端部を上下に拡張し凹線をもつもので，胴内面はナデによって仕上げられている。4は外面をヘラ磨き，内面はヘラ削りで仕上げている。

Fトレンチ一1～2は暗褐色土層，3は暗茶褐色土層より出土した。1～2は口縁端を上下に拡張し，退化した凹線をもつ。弥生時代後期前半に属する。3は単純に外反する口縁をもつ土師器の甕で，胴外面は荒い刷毛目，内面はヘラ削りによって仕上げられ，胎土に砂粒を多く



第122図　トレンチ出土の遺物



第123図　トレンチ出土の遺物

含む。

＜分銅形土製品＞（第123図A－1）

Aトレンチの暗褐色土層中より，弥生時代中期後半～後期前半の土器とともに出土した。表面の文様は細い竹管状の工具により，外周を刺突しているが，頭部外周は円形，くびれ部はつぶして偏平，さらに上下の区画は楕円となっている。頭部には裏より頭端にむけて斜めに穴が穿がたれている。胎土には細砂粒を含み，暗褐色を呈す。

＜石器＞（第123図）

A－2はAトレンチの暗褐色土層より出土した打製石庖丁である。両面とも剥離面を広く残し，末端を両面からこまかく調整し，刃部を仕上げている。両端にくりこみをもつもので，石質はサヌカイトである。

E7－1は暗褐色土層より出土した。断面が偏平な三角形を呈し，両長辺にはこまかく交互剥離が施されている。石質はサヌカイトである。

B－1は不定形のスクレイパーと思われ，石質はサヌカイトである。

E2－1は暗褐色土層より出土した磨製石庖丁である。刃は両側より磨かれている。

B－2は暗褐色土層より出土した凹基無茎式石鏃である。両面とも大剥離面を残さず，こまかい仕上げをしている。石質はサヌカイトである。

Ⅱ　遺構と遺物

前述したように，8区においては遺構の検出に困難を極め，また浅学なるがゆえに検出できなかったものもあるのではないかと自戒している。遺構は弥生時代の住居址，建物，貯蔵穴などが主で，他に鍛冶炉，溝などがある。遺物はそれらの遺構に伴なうものもあるが，多くは包含層より出土したものである。

801（第125図）

一辺約5mの隅丸方形状をなす住居址である。壁体はほとんどつかめず，溝を約半分ほど検出できた。住居址内には焼土や炭化物が散在し，一見焼失した住居址のようでもあったが，建築材などのようなものはなかった。柱は4本柱と思われ，中央ピット，火所のあり方からみて2回は建替が行なわれたものと思われる。遺物は床面出土のものはなく，流入土中に含まれていたものである。これらの遺物と，住居址の形態からみて，古墳時代初期のものと思われる。

＜遺物＞　（第126図）

遺物はすべて小礫を多く含む暗褐色の流入土中より出土したもので，土器以外は見当らなかった。

器種は甕が多く，鼓形器台，高杯などがある。甕の口縁部はいずれも上方への拡張が著しく，条線の施されるものもある。底部も丸底化している。これらの土器は土師器としても初期の形態をよくあらわしている。

802（第127図）

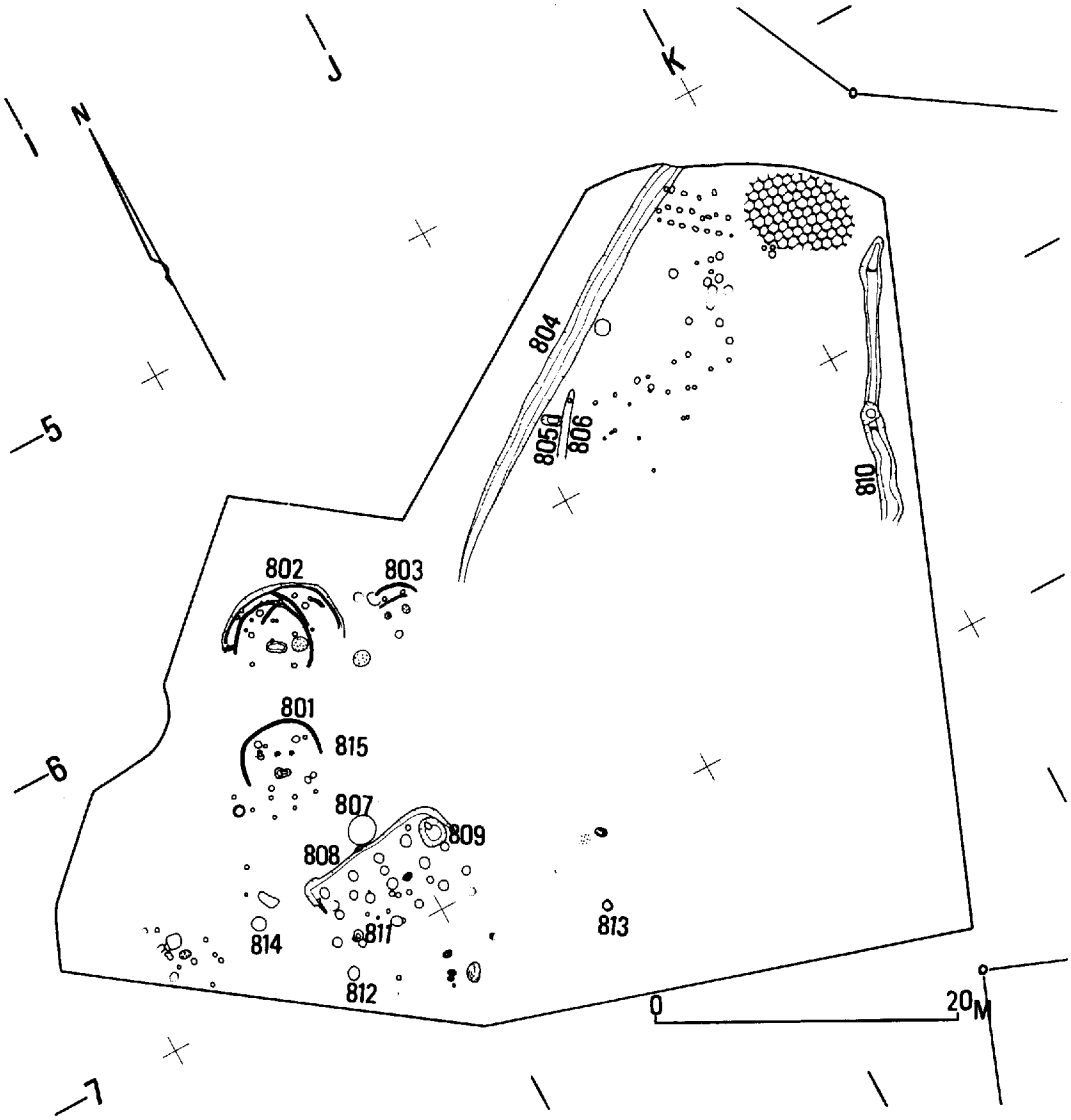
この住居址は第一次調査の時確認されていたものである。数回にわたり建替がなされているが，土層の観察では確認できなかった。床面のレベルは同じであるが，一番内側の楕円状の住居址内には焼土や炭化物が散在し，それが残っているところから，この住居址が一番新らしいものと思われる。遺物は流入土より出土したものが多いが，時期の異なる遺物もなく，この住居址は弥生時代後期初頭のものとしてよいのではなかろうか。

＜遺物＞　（第128図）

1だけが外側の住居址の床面から出土したもので，他は暗褐色の流入土中より出土した。

1は口縁端部を若干上下に拡張させ，退化した凹線を施している。胴外面は刷毛目らしいものが認められるが，はっきりしない。内面はヘラ削りで砂粒の移動痕跡が著しい。4は高杯の杯部で，口縁端を水平に拡張し，凹線を施している，5～6は高杯の脚部で，ヘラ状の工具による5本単位の切込みがある。これらの土器は弥生時代後期の初頭に位置する。

803（第129図）

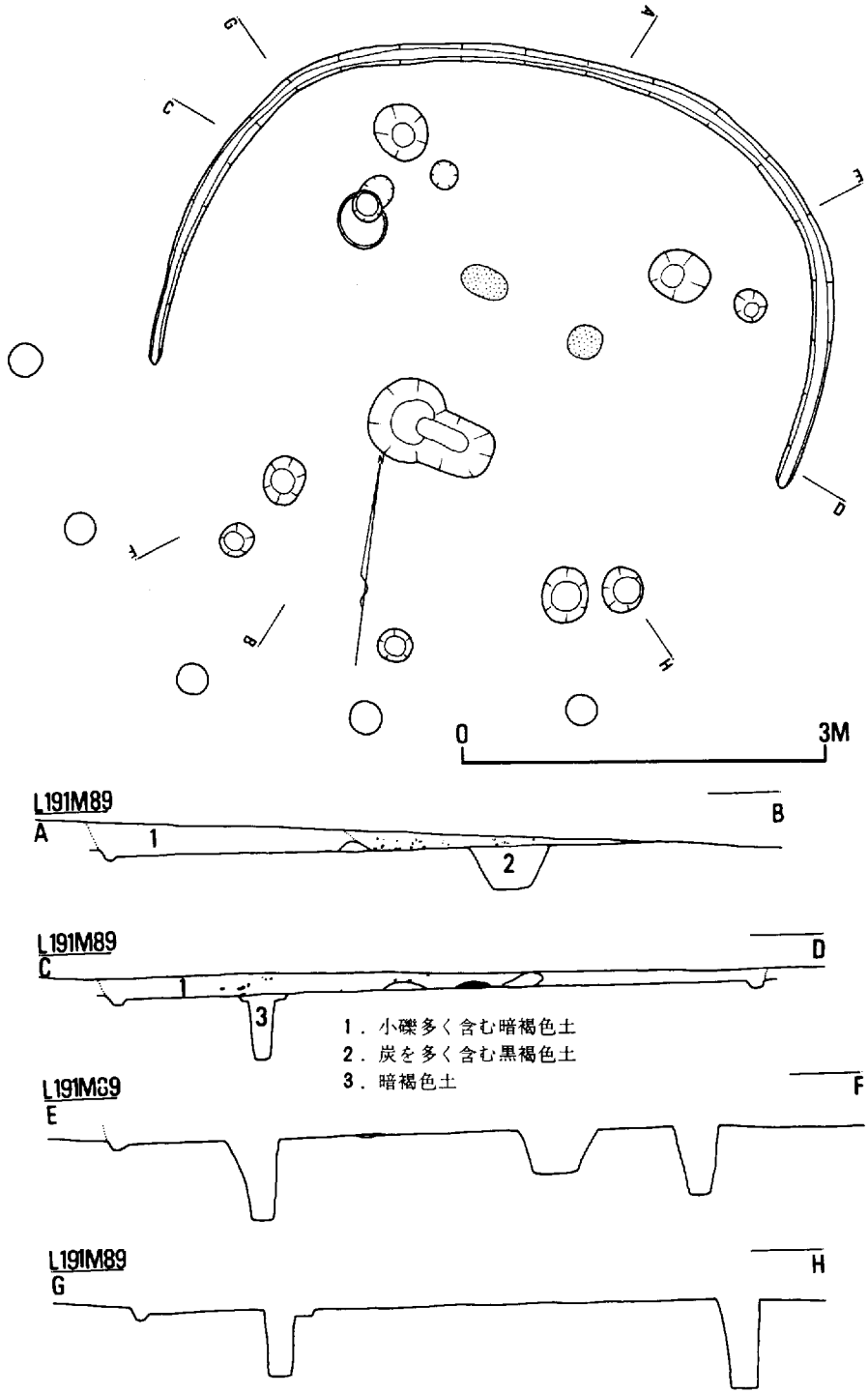


第124図　8区遺構図

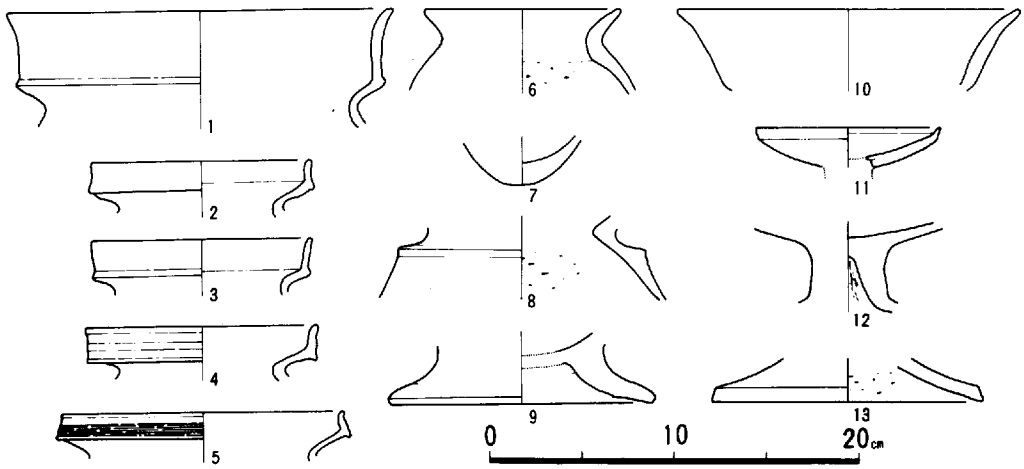
黄褐色の地山に掘り込まれた溝と柱穴が確認されたが，低い方は盛土によって床面を形成しているため，全体は不明である。柱穴としているピットも非常に浅く，はたして柱穴であるかどうか断定できないが，火所が2ケ所もあり，一応住居址とした。遺物は一片もなかったが，周囲の遺物などから見て，弥生時代のものではなかろうか。

804

礫を使用した暗渠である。表土下で検出したもので，茶褐色土層を切って作られている。溝内には大小の礫とともに砂質の茶褐色土が流入していた。遺物がないため明確な時期は不明だ



第125図　801平面図・断面図



第126図　801出土の遺物

が，中世よりは新らしく明治時代よりは古いものである。

805（第129図）

長さ1ｍ30，巾60㎝の土壙である。暗褐色土層に掘り込まれていたもので，埋土は暗茶褐色を呈していた。土壙内からは瓦片が出土した。

＜遺物＞

青灰色を呈し，須恵質の瓦である。砂粒を含むが胎土は良好で，一見古そうな感じがする。凹面は布目で，凸面は格子のタタキが施され，その後ナデて消している。

806

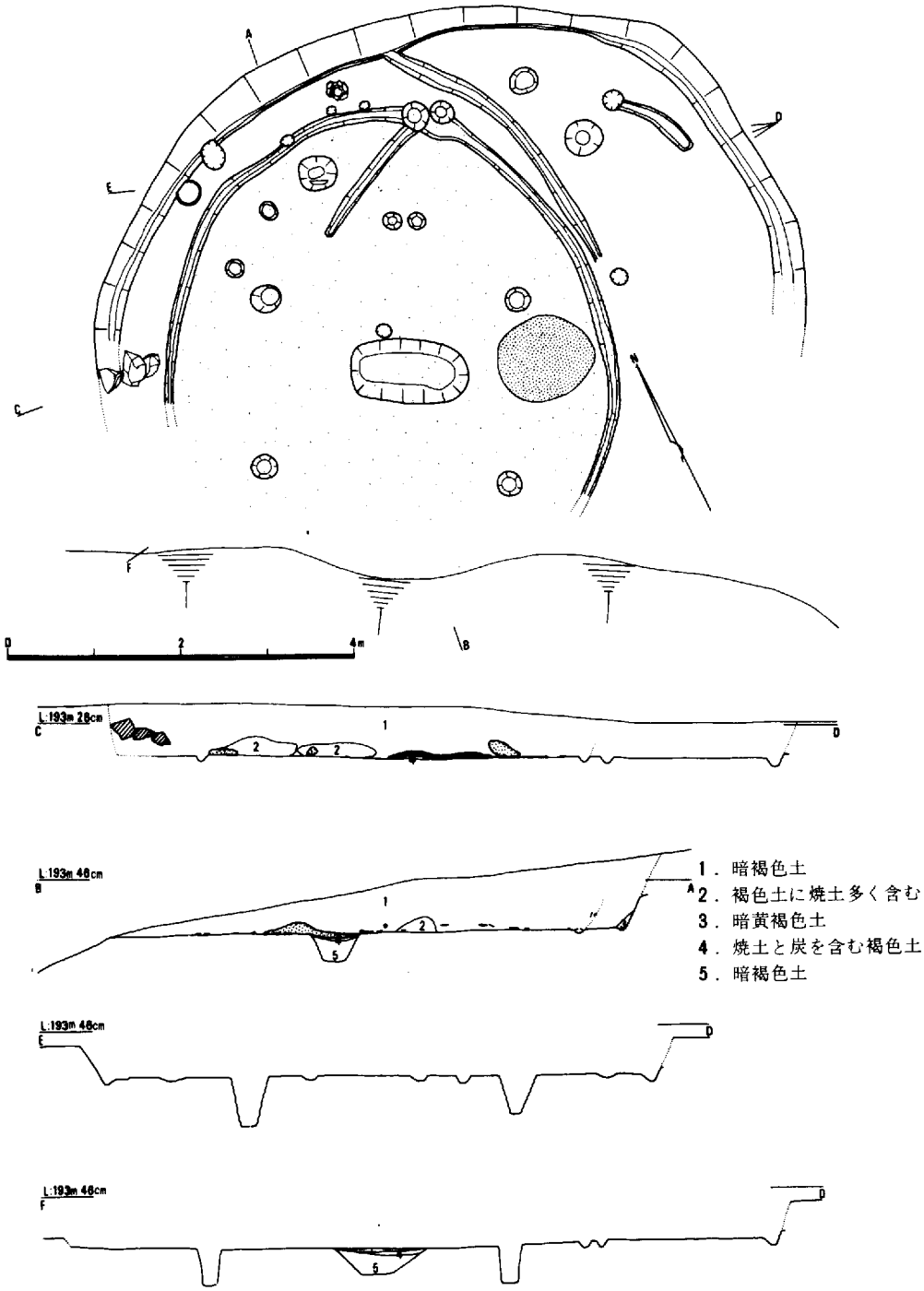
804と平行している，浅いU字形の溝である。溝内からは弥生式土器の破片が若干出土している。

807（第129図）

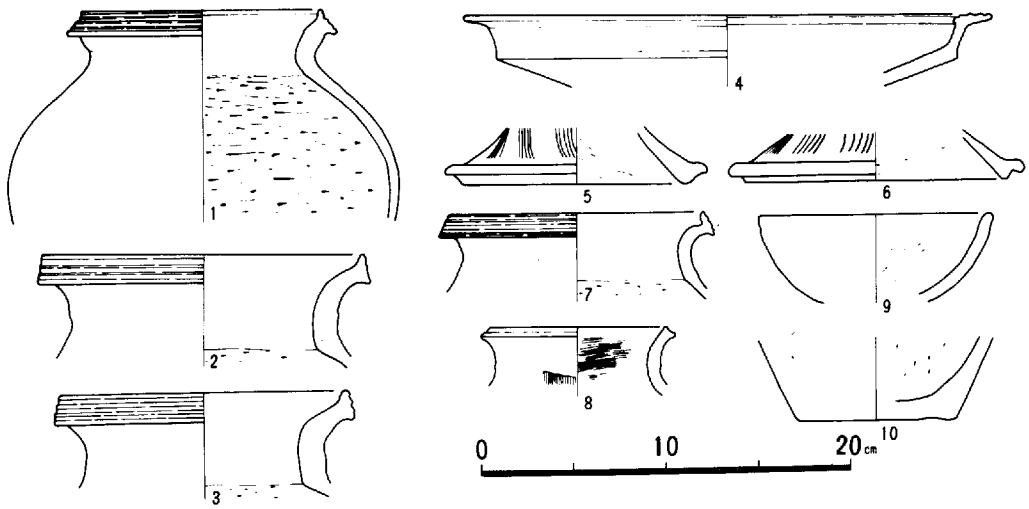
808に隣接して検出された，やや袋状をなすピットである。小礫を多く含む黄褐色土層上面で確認し，流入土は暗茶褐色を呈していた。遺物はその流入土の上層，炭を少量含む層より出土した。底部ほぼ中央に浅いピットがあり。柱を立てたかのような感じがした。

＜遺物＞

遺物は土器だけであったが，時期が異なるものも出土している。3は高杯の筒部で，櫛状の工具で沈線がめぐる。2は頸部に刻目のつく貼付の凸帯をもつものである。このような混在した遺物で，遺構の時期は決定しがたいが802などに近い時期の貯蔵穴と考えられないだろうか。



第127図　802平面図・断面図



第128図　802出土の遺物

808（第130図）

斜面を切込み，平坦面をつくり，その中に２間×５間の建物を作っている。遺構は黄褐色土層上面にて検出した。方形状の掘方の中には黒褐色土が堆積し，弥生は中期後半～後期初頭の遺物が出土する。柱穴は整然と並ばず，柱の間隔は不揃いである。

＜遺物＞　（第131図）

柱穴の中から出土した若干の土器片を除けば他はすべて黒褐色土中より出土したものである。土器の他には打製のサヌカイト製石庖丁片，分銅形土製品がある。

１～３は頸部に貼付の凸帯をもつもので，３以外は刻目が施される。胴部から「く」の字状に外反した口縁部は上下に拡張され，凹線がめぐり棒状浮文がつく。胴外面は刷毛整形，内面はナデによって仕上げられ，胎土は良好で，褐色を呈す。

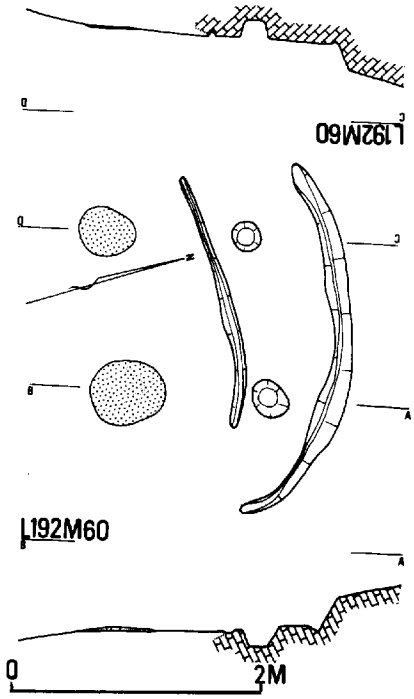
分銅形土製品は全面刺突が施されるもので，類似したものは雄町遺跡にも認められる。

809（第132図）

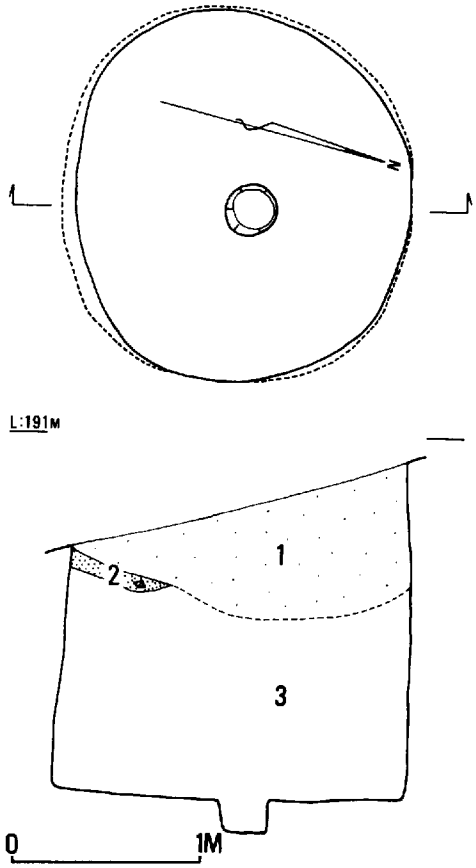
808の東端に土壙が検出され，809とした。この土壙の上部に礫群が存在するが，土壙と関係をもつものかどうかは不明である。808に堆積した黒褐色土のためセクションによる観察では確認できなかった。しかし，この礫群は808の柱穴の上にも広がっており，808よりは新しいものである。土壙と柱穴との前後関係は確認できなかった。遺物は礫などにまざって出土したもので，土壙内からは出土しなかった。

＜遺物＞

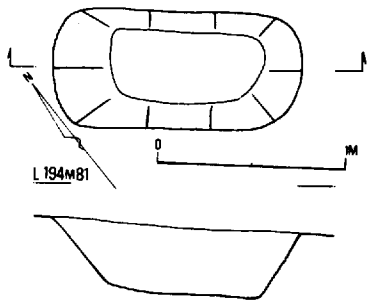
１は壷で，２～４は甕である。いずれも口縁端部を上下に拡張し，凹線を施すものである。



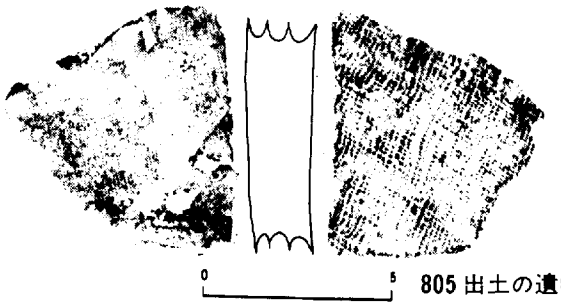
803 平面図・断面図



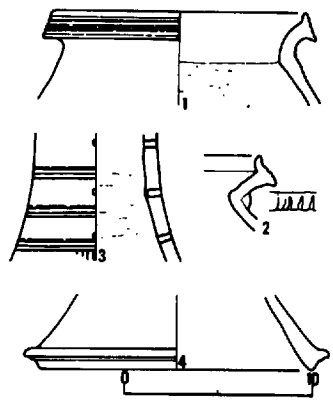
807 平面図・断面図



805 平面図・断面図

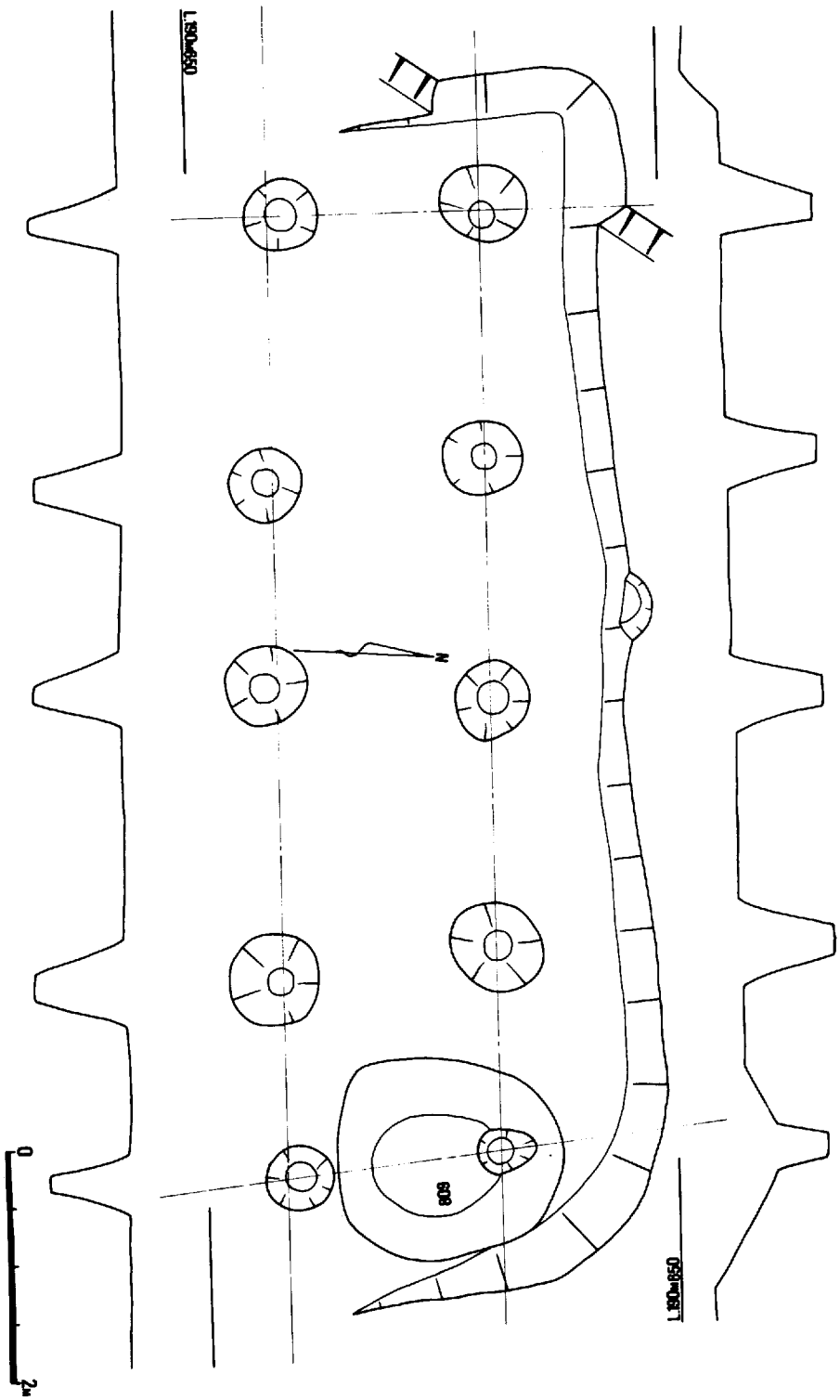


805 出土の遺物

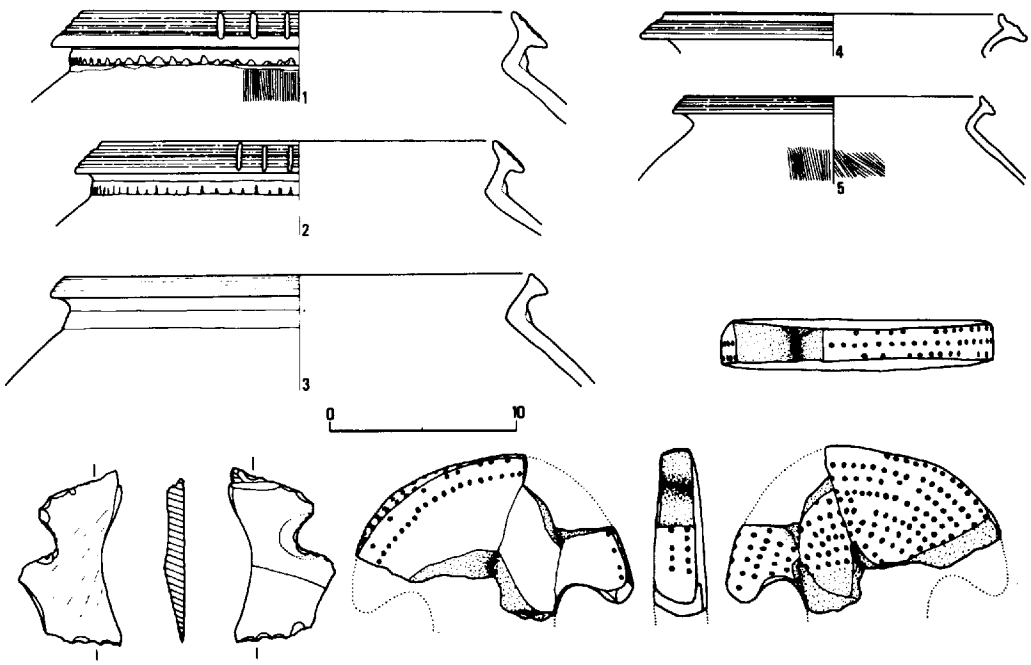


807 出土の遺物

第129図　803・805・807



第130図　808平面図・断面図



第131図　808出土の遺物

2～3は頸部に刻目をもつ貼付凸帯を施す。6は台付の鉢か，大型の高杯になると思われるが，口縁上端面には凹線上に鋸歯文が施される。これらの土器は弥生時代中期後半に属する。

810

茶褐色土層から掘り込まれているもので，溝の中は黒褐色土と多量の礫であった。溝の巾は1mから1.5mで断面はU字形をなしている。途中円形の，深さ約1mのピットがあるが，何の施設か不明である。溝への流入土の中には多くの鉄滓を含んでいるところから，製鉄関係の遺構であるかも知れない。

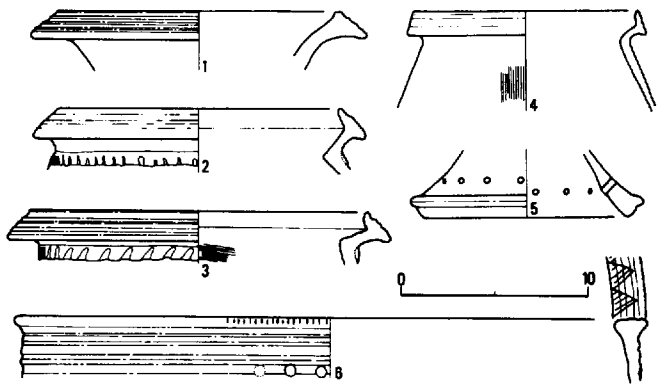
811

80cm×70cmの楕円形に焼土が検出されたので中心部の褐色土を取り除くと25cm×30cmのナベ底状の青色に焼けた部分が出てきた。断面を見ると外側に赤く焼けた部分が2～3cmあり，その内側に青灰色に焼けた部分が2～3cm認められる。このような遺構は周囲に何の施設ももたない鍛冶の炉址ではなかろうか。時期は中世の遺物を出す，茶褐色土層から掘り込まれているので，中世のものであろう。

812

95cm×1mの楕円形を呈する鍛冶炉である。これも中世の層より掘り込まれている。浅い船

809 平面図・断面図



809 出土の遺物

第132図　809と出土遺物

底状のピットで，赤く焼けているだけである。

813

古墳時代の遺物を出す暗茶褐色土層から掘り込まれていた。1辺約60cmの方形を呈し，浅い掘り込みで，赤く焼けている。

814

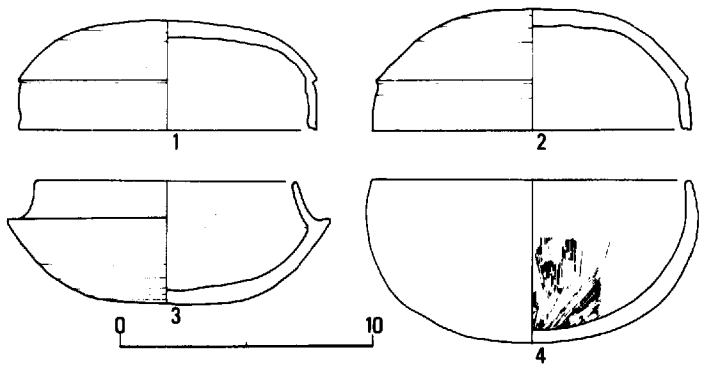
約80cmの円形を呈す鍛冶炉である。底は赤く焼けただけのものであるが，周辺からフイゴの羽口が出土している。表土下で検出され，時期は明確でないが，他の鍛冶炉と同じ中世のものではなかろうか。

815（第133図）

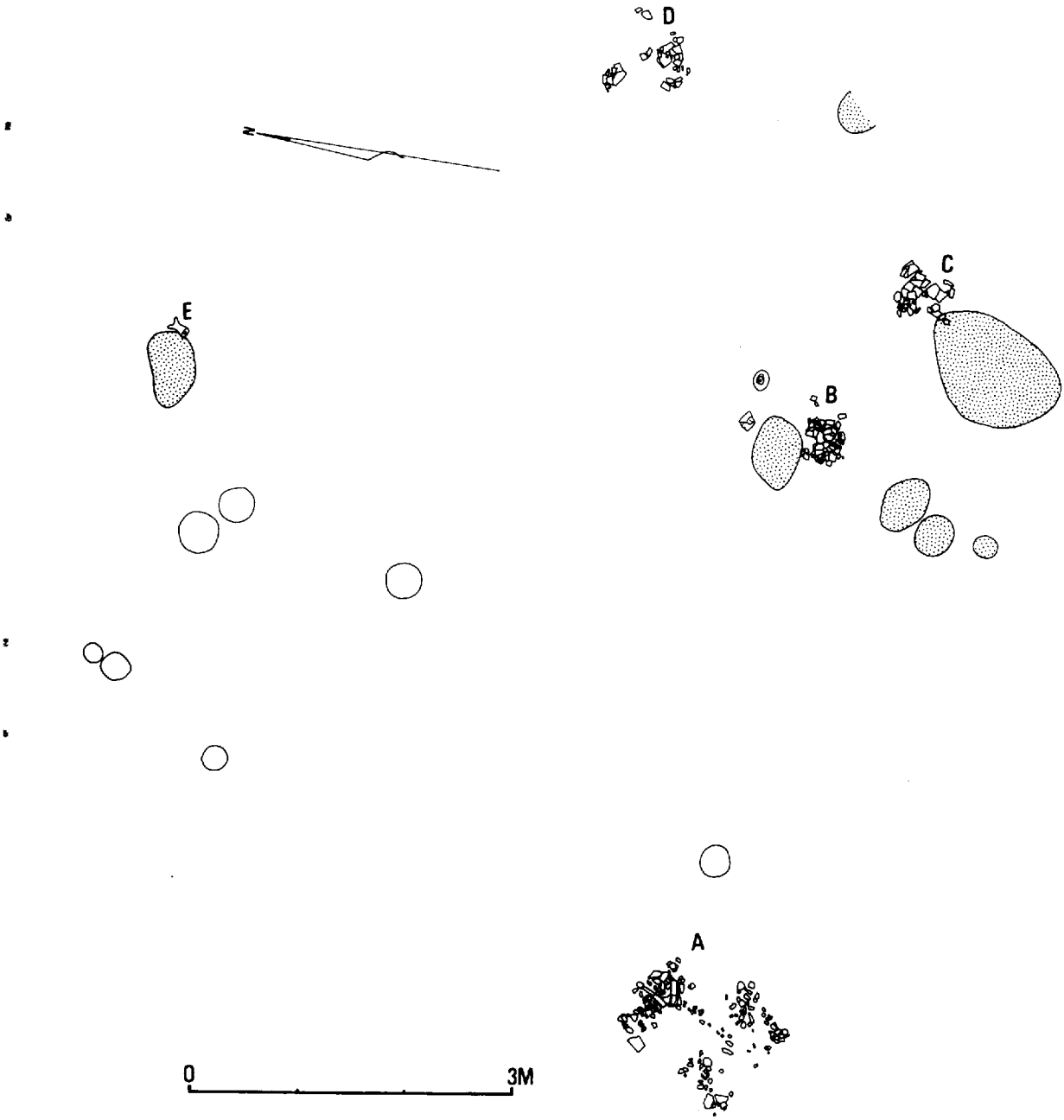
801に隣接した所より出土したもので，1と2がならんで伏せてあった。3と4はすでに取り上げられていたものであるが，同じ所より出土したものである。遺構が明確でないが，おそらく土壙があったのであろう。1は口径1.7cm，器高4.4cmを計る。口縁端部に凹部をもつ。ヘラ削りは右方向に行なわれ，胎土は良好で，青灰色を呈す。2は口径12.7cm，器高4.8cmを計る。ヘラ削りの方向は左で，胎土は良好で色調は淡青灰色を呈す。3は立上り部がやや内傾したもので，1や2にくらべやや後出のタイプである。口径10.4cm，器高4.9cmを計る。ヘラ削りは左方向で，胎土は良好，色調は淡青灰色を呈す。4は土師器で，外面はナデによって仕上げられ，内面は刷毛状工具によって調整されている。胎土に若干の砂粒を含み，色調は赤褐色を呈す。

焼土について　（第134図）

1－7周辺に古墳時代後期の焼土が検出され，それと対応するように土製の支脚や土器が一括して出土した。これらの焼土はおそらく住居址内にあったものと思われるが，それらしいものは検出できなかった。焼土は非常にしっかりと焼けており，4～5cmの厚さで固くなってい



第133図　815出土の遺物



第134図　焼土と遺物出土状態

た。遺物を見ても，土製のカマド，甕など日常生活に使用するものばかりであり，特別な出土状態もしていない所から，数軒の住居址が存在していたものと思われる。

A－土師器の甕がもっとも多く，カマド，須恵器なども認められた。1～2は単純に外反する甕で胎土に多くの砂粒を含み，赤褐色を呈する。3はカマド，4は甑と思われる。6は須恵器の甕で，外面は格子のタタキ，内面は清海波のタタキである。色調は灰白色を呈す。

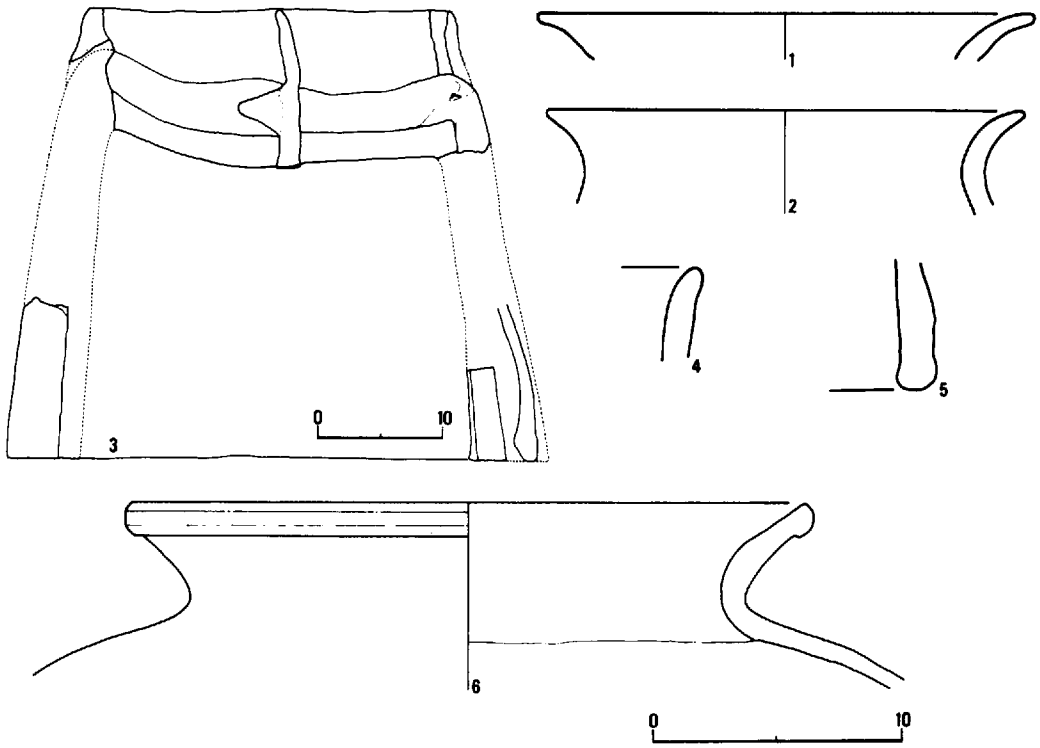
B－1はカマドで，胎土に砂を多く含み，暗褐色を呈す。3～7は甕で，外面は荒い刷毛目が残り，内面はヘラ削りと刷毛調整とがある。8は土製の支脚の脚部で赤褐色を呈す。9は須恵器の甕，10は高杯の脚部である。

C－土師器の甕の破片が多かったが図になるものはなかった。

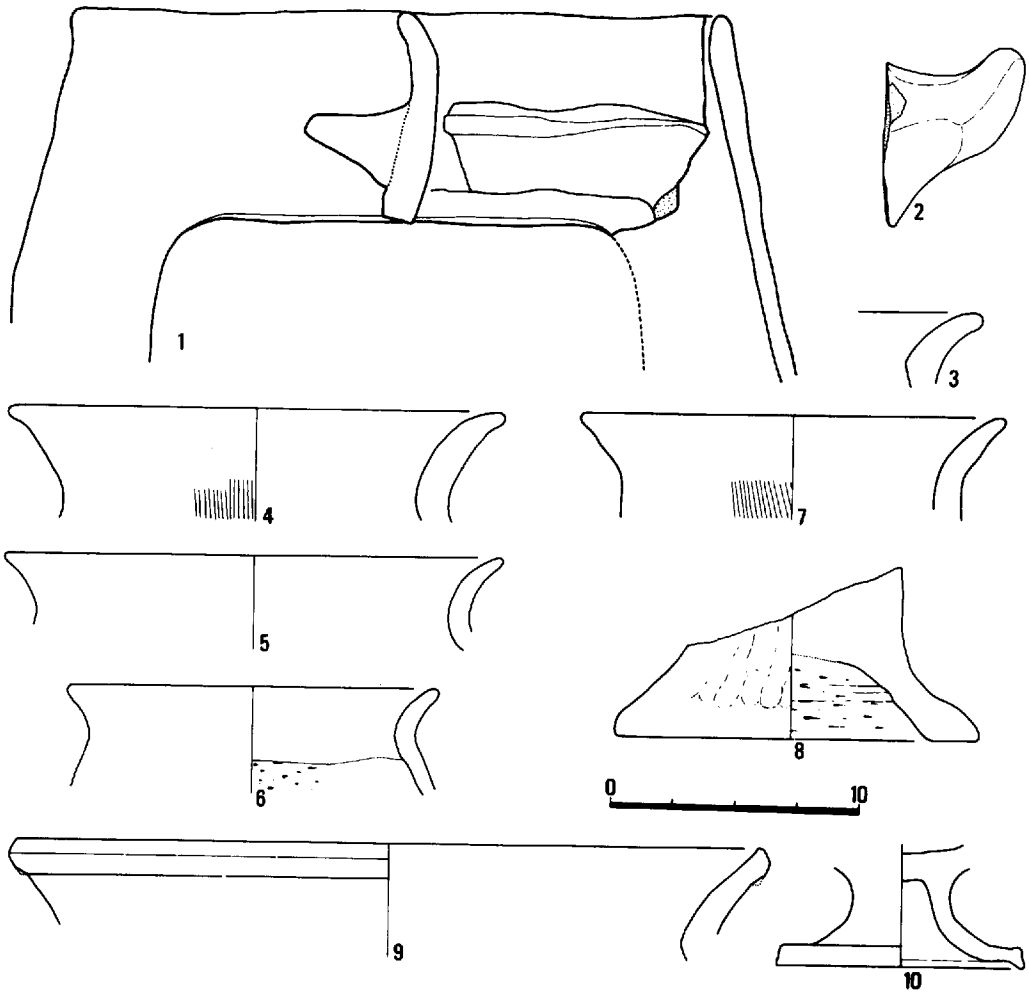
D－甕が主体であった。いずれも単純に外反する口縁をもち，胴部外面は荒い刷毛状工具で仕上げ，内面はヘラ削りである。胎土には多くの砂粒を含み，赤褐色，茶褐色を呈す。

E－土製の支脚で，胎土に砂を含み，赤褐色を呈す。

さてこれら遺物の時期であるが，須恵器の高杯，甕などからみれば，6世紀末から7世紀前半頃のものと思われる。



第135図　Aの遺物



第136図　Bの遺物

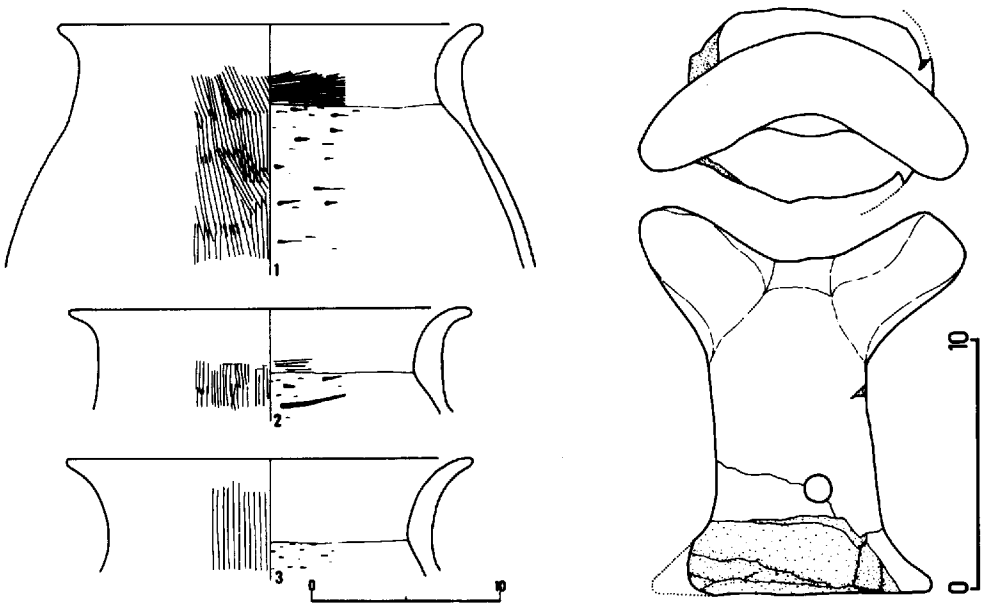
Ⅲ　包含層出土の遺物

1　土　器

＜縄文式土器＞　（第138，139図）

縄文時代の遺物は遺構全体図の網目印の所より出土したものである。

縄文式土器はその多くが，沈線文，あるいは沈線による区画をもつ磨消縄文である。16は口縁部を肥厚させ沈線を施す。津雲貝塚出土のものにもこれと似たものがある。第139図6は上げ底を呈し，足が5つある。これらの土器は胎土に若干の砂粒を含み，色調は暗褐色，暗茶褐色を呈す。これらの土器は一部中津式土器のようなものもあるが，それよりも後出的な感じが



第137図　D・Eの遺物

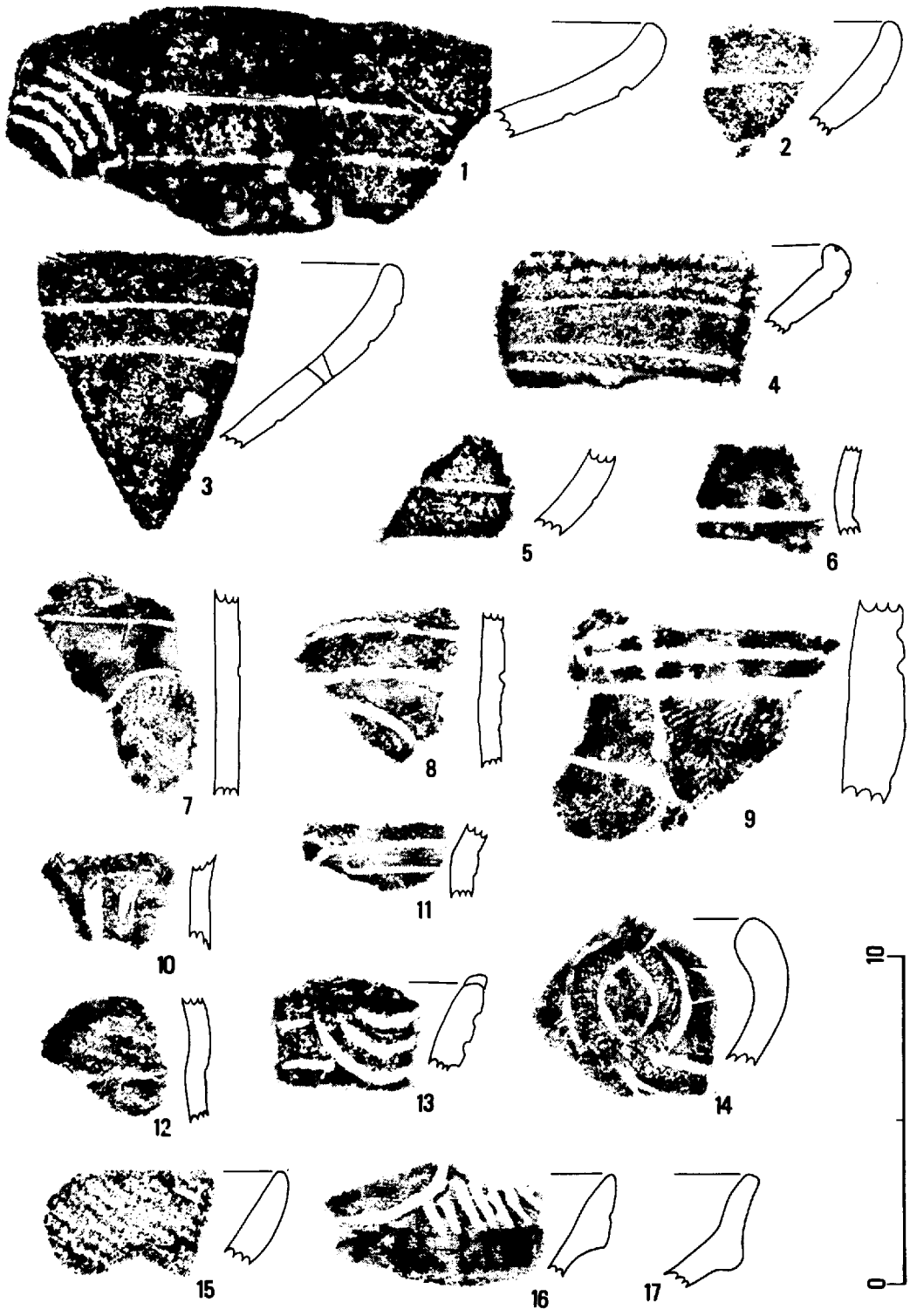
強く，後期中頃のものであろう。なお図示できなかったが，表裏を条痕，あるいは表だけ条痕を残した粗製の土器片もある。

＜弥生式土器＞　（第141図）

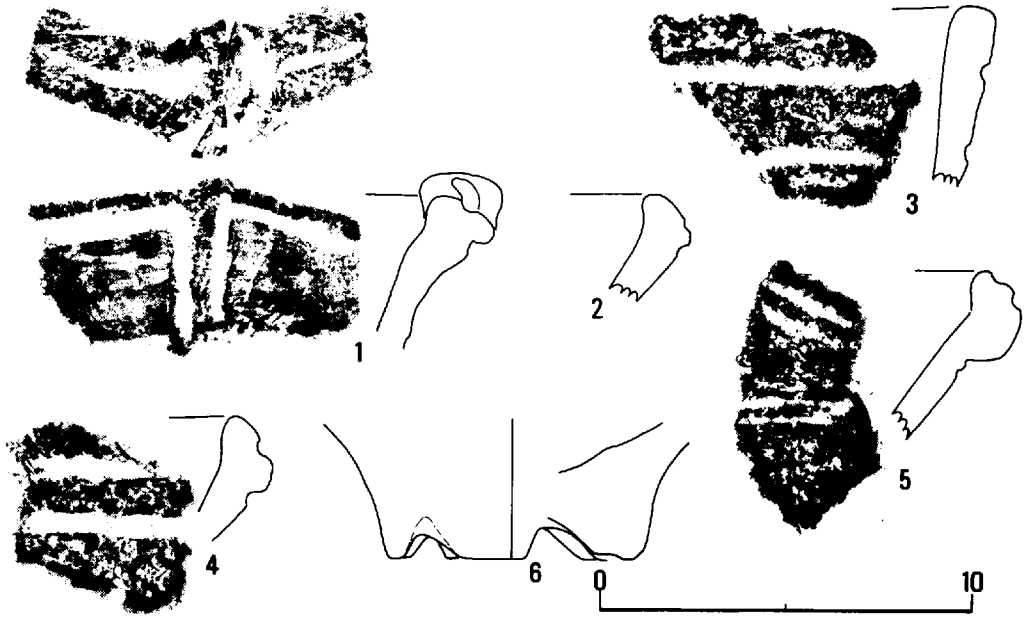
すべて暗褐色土層中より出土したものであり，弥生式土器だけでなく，古式土師器も含むものである。1～4は口線端部を肥厚，あるいは上下に拡張し，凹線文を施すもので胴内面上半は刷毛調整ないしナデによって仕上げられている。5～10，16～17，19などは上下に拡張された口縁端部に退化凹線をもち，胴内面上半までヘラ削りが施されている。色調は赤褐色ないし，茶褐色を呈す。11，15，18，20～23は上下に拡張された口縁部を強く横ナデし，その結果凹部がつくられている。胎土に砂粒を含み，淡褐色ないし赤褐色を呈す。27～37は高杯である。34～35を別にして，中期後半から後期初頭までのものである。32は櫛状の工具で波状文を施している。34，35は後期末のもので，胎土は精選されたもので，色調は赤褐色を呈す。

＜土師器＞　（第142図）

1～16は単純に外反する口縁部をもつ甕である。口縁部は厚く，外面は横ナデ調整，内面は刷毛調整の後で横ナデが施されている。胴外面は荒い刷毛状工具により調整され，内面はヘラ削りによって口縁部から急に器壁を薄くしてゆくものと，ナデによって仕上げているものがある。胎土には砂粒を多く含み，色調は赤褐色，茶褐色を呈する。17は口縁部外反の感じが他の甕と異なり，甑ではないかと思っている。18はカマドの破片である。19は甑の把手の部分であ



第138図　縄文時代の遺物



第139図　縄文時代の遺物

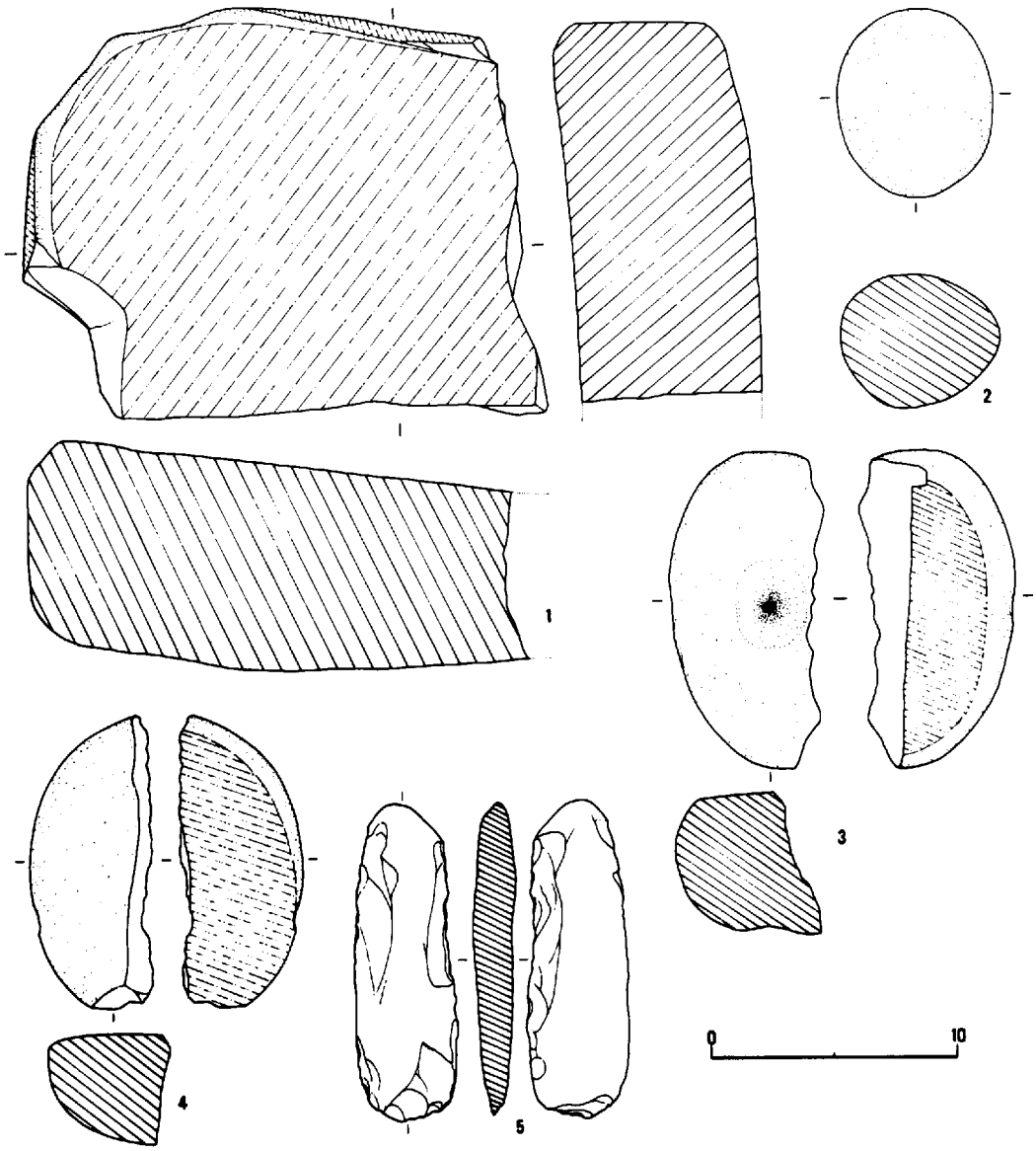
る。外面は荒い刷毛目が残り，内面は丁寧にナデて仕上げている。20～22は把手で，おそらく甑につくものであろう。23は小皿である。胎土はキメの細かいものを使用し，4ケ所に穴が穿がたれている。底部はヘラ切りである。24～25も小皿で，底部はヘラ切りである。胎土は良く赤褐色を呈す。26は高台がつくものである。27～29は土鍋の口縁部で，内外面とも荒い刷毛目がつく。器壁は薄く，しまりも良く，色調は褐色を呈す。これらの土師器の内1～22までは古墳時代後期，6世紀後半から7世紀前半にかけてのものであることは，同じ包含層より出土した須恵器から言えると思う。23～29は茶褐色土層から出土したもので，鎌倉時代のものと思われる。

＜須恵器＞　（第143図）

これらの須恵器は土師器などとともに暗茶褐色土層より出土した。

1は口径10㎝，器高4.5㎝を計る。口縁部はほぼまっすぐ立上り，端部にクセをもつ。丁寧な仕上げで，淡青灰色を呈す。2～6は杯身であるが，細片のためすべて推定の口径である。7～13は杯蓋である。7は口縁端に刻目状のものが施される。14～17は高杯である。14は灰白色を呈し，焼成が悪い。18～19は甕である。20～21は𤭯で，肩に沈線が施される。青灰色を呈し，胎土に砂粒を含む。

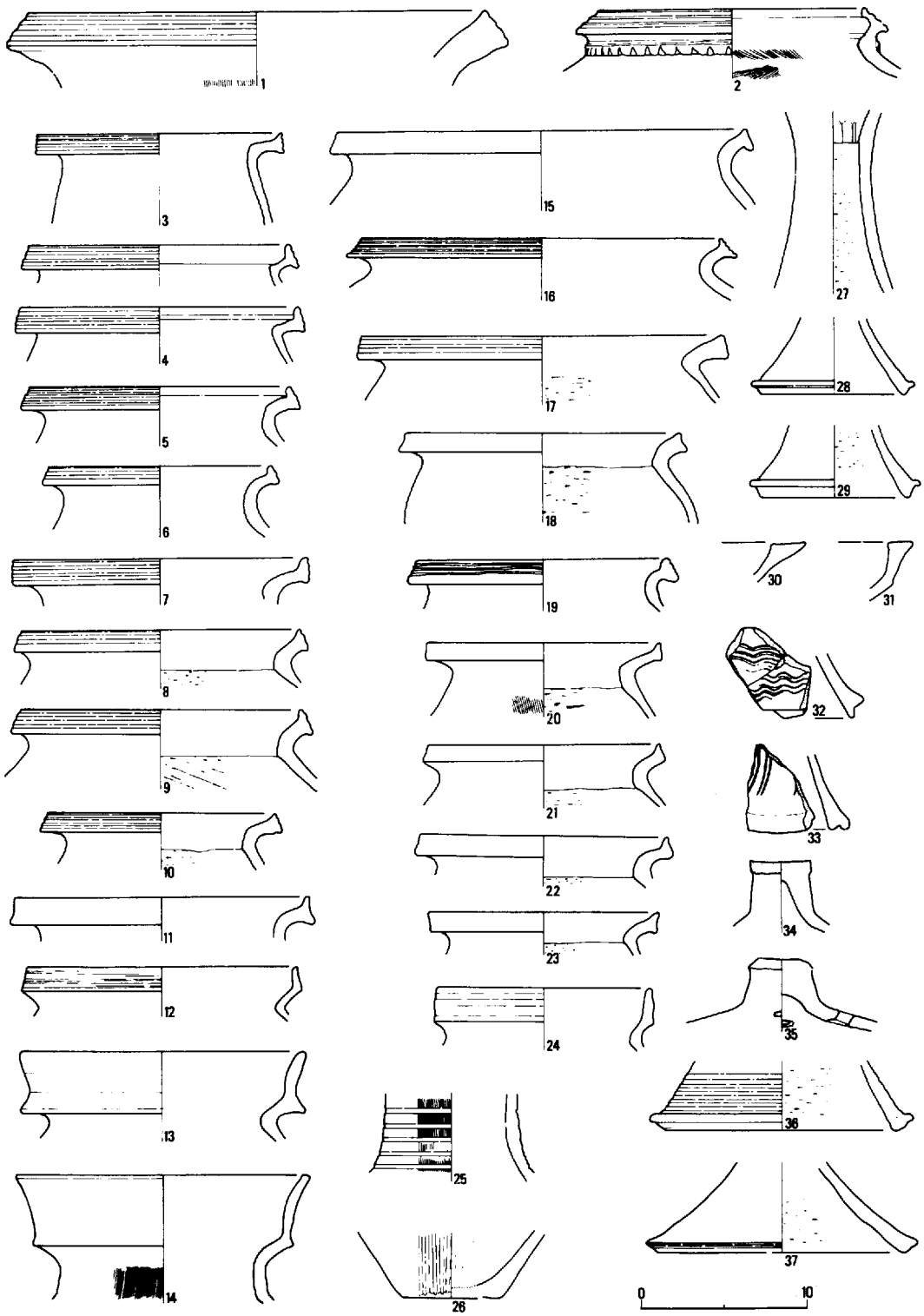
＜縄文時代の石器＞　（第140図）



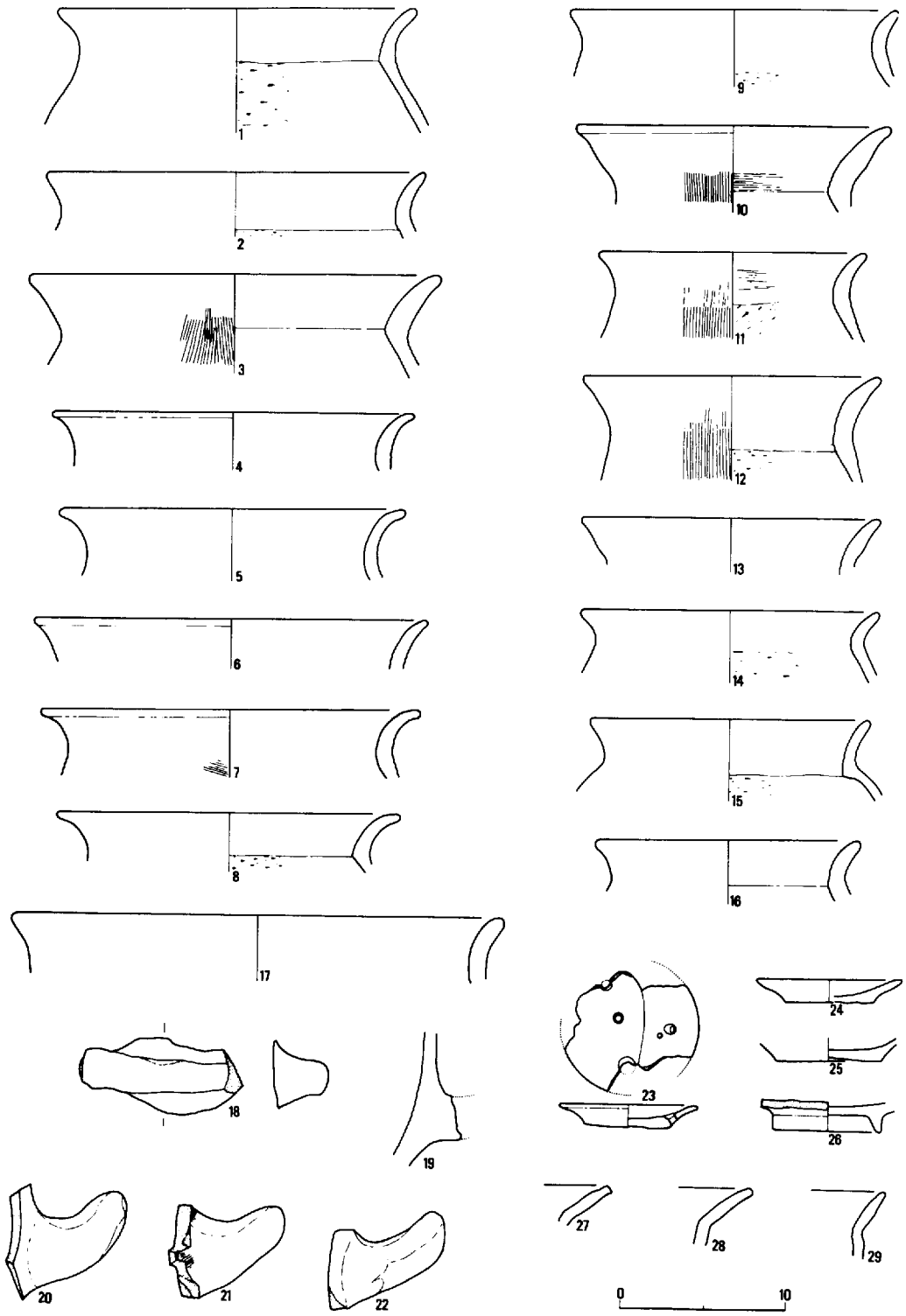
第140図　縄文時代の遺物

縄文式土器とともに出土したものである。1は石皿であるが，周囲も磨滅している。（磨滅している部分は1点斜線で示してある）2～4は磨石で，3は中央に凹みがある。5は打製石斧である。5以外は花崗岩を使用している。

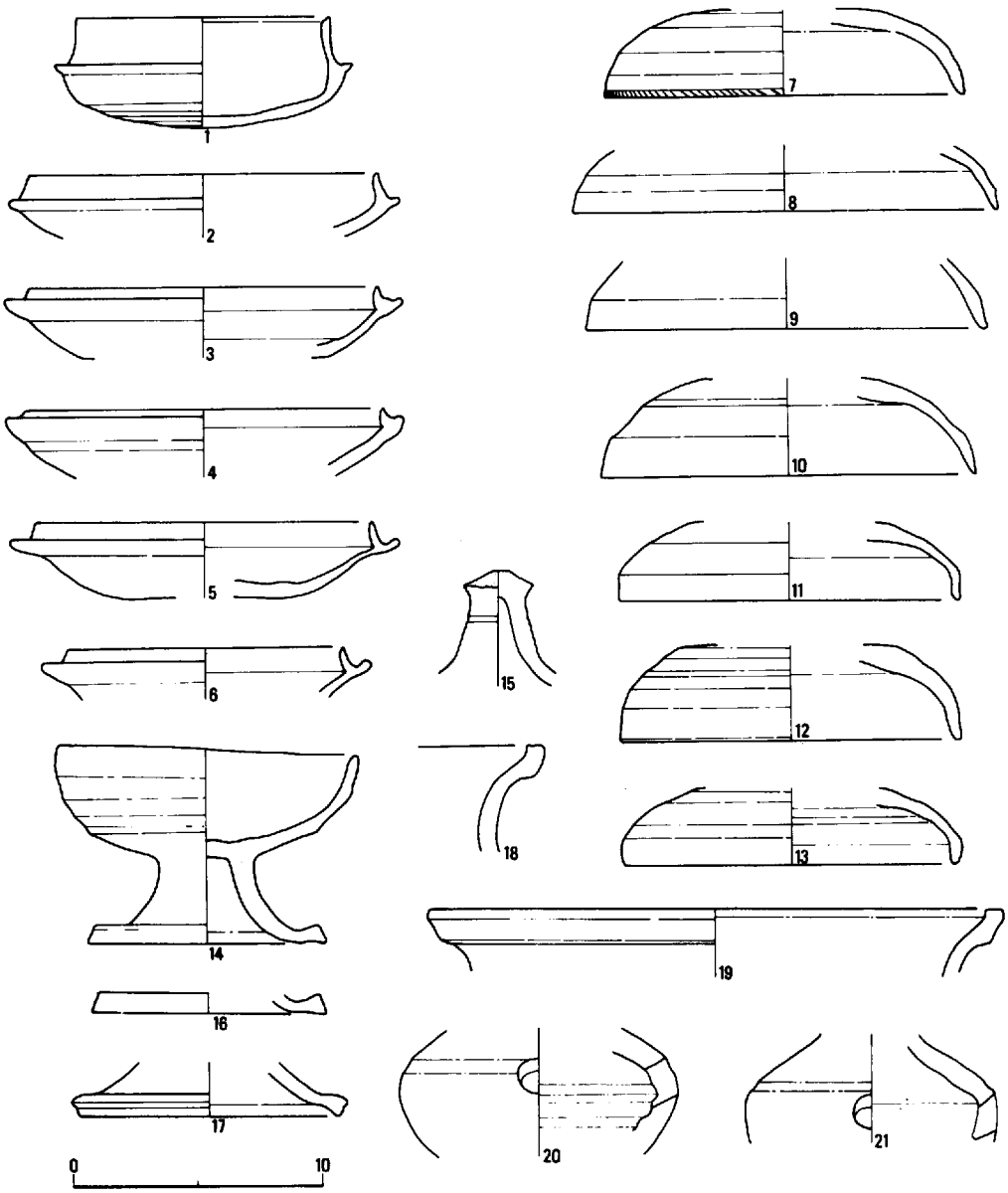
＜石器＞　（第144図）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10

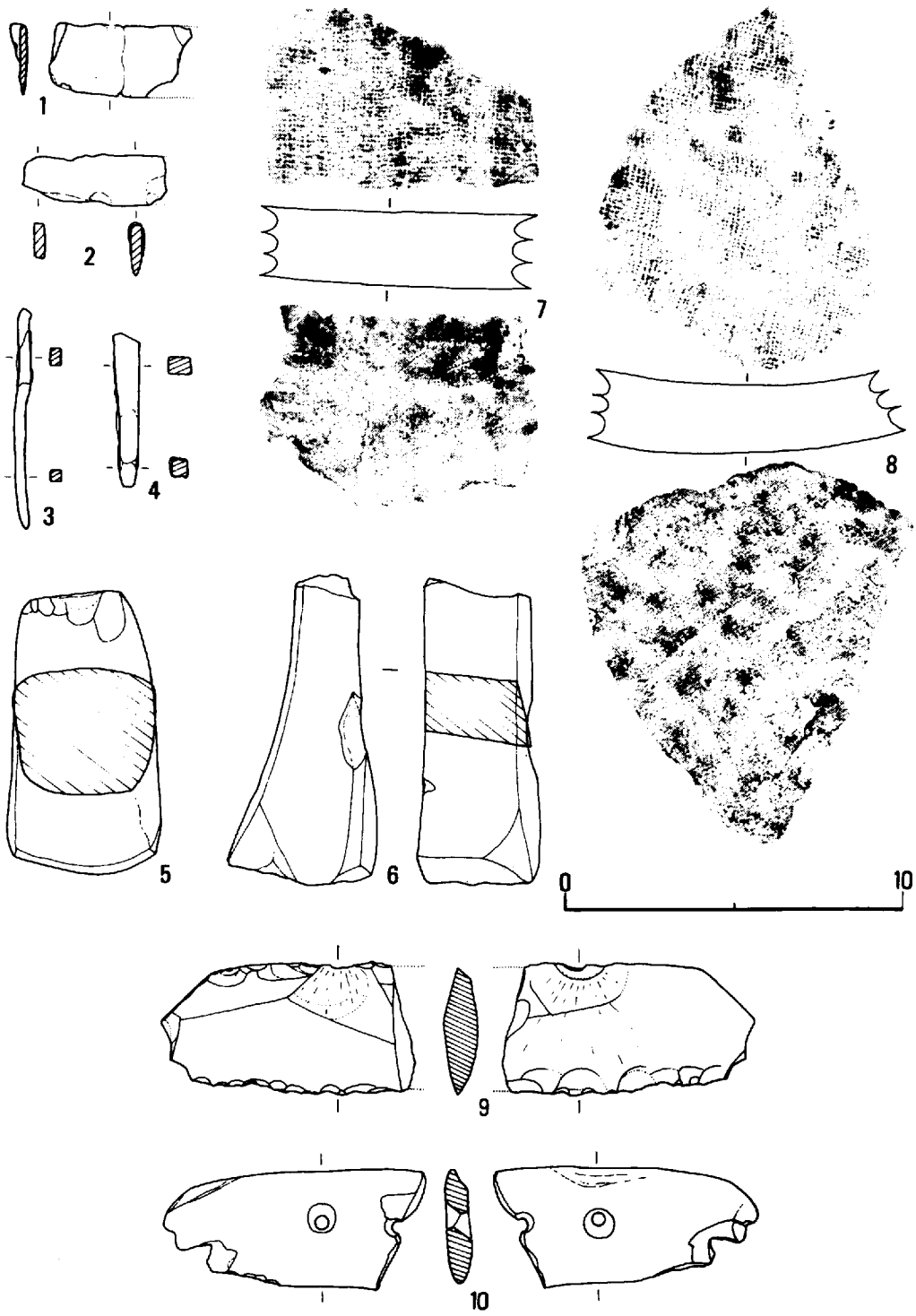
第141図　弥生式土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10

第142図　土師器



第143図　須恵器



第144図　石器・鉄器・その他の遺物

5は柱状の石斧であるが，刃部は欠損し，磨いて再利用したものであろう。6は砥石で四面を利用している。9は打製石庖丁で，石質はサヌカイトである。10は磨製石庖丁で，刃部は磨滅して丸くなっている。これらの石器は暗褐色土層より弥生式土器とともに出土した。

＜鉄器＞　(第144図)

1は暗茶褐色土層より出土したもので，小型の鎌である。2は刀子で1と同じ層から出土した。3～4は釘で，茶褐色土層より出土した。

＜その他の遺物＞　(第144図)

7と8は茶褐色土層中より出土したもので，805から出土した瓦片と同じものである。青灰色の須恵質で，胎土に砂粒を含む。凹面は布目で，凸面は格子のタタキ目がかすかに残っているが，ほとんどナデて消している。

その他，青色のガラス製小玉が1つ，暗茶褐色土層より出土している。

Ⅳ　8区のまとめ

8区における縄文時代の遺物は，前期の磯ノ森式と思われる土器が一片あるが，その他はすべて後期のものである。これら後期の土器片は時期的にばらつきはあるが，磨石，石皿，打製石斧などとともに6～7mの範囲から出土した，しかし弥生式土器なども伴出し，土器も器表が磨滅しているものが多いことなどから，原位置ではなく，近くに集落があったものと思われる。

岡山県の北部においても縄文時代の遺物が点々と出土しているが，その多くは表採であり，多くを語ることはできない。しかしその遺跡数を見ると，後期の遺跡は早期についで多い。このような遺跡の増大をもたらした要因を知る資料もないが，山間部における，櫟など果実の安定した資源とその食用処理技術の発見などが増大をもたらたのではなかろうか。

弥生時代の遺構は，建物，住居址，溝，貯蔵穴様のピットなどが検出された，遺構の807は一応貯蔵穴としたが，水気が多く，はたして物を貯蔵するにふさわしいかは疑問であるが，鳥取県青木遺跡などで，これと類似したものが検出され，貯蔵穴と想定している。もし貯蔵穴だとすれば，同時期である802住居址との関係，さらに集落全体における住居址，貯蔵穴の関係などが問題になるが，後章のまとめにゆずる。

古墳時代の明確な遺構はないが，多くの土師器，須恵器などとともに焼土が検出されている。これらの焼土は，住居址の可能性が強く，数軒の住居があったものと思う。遺物の多くは6世紀後半から7世紀前半を示すが，土製支脚などは須恵器出現以前のものであろう。

中世の遺物もかなりの量が出土しているが，見るべき遺構はない。鍛冶炉は遺物を伴なうわけではないが，中世の遺物を含む層から掘込まれている。したがってきわめて大ざっぱな時期しか知ることができないが，9区の寺址などと関係した鍛冶ではなかろうか。

(竹田)

第九節　9 区

9区はHトレンチの設定により版築状の遺構が確認されたため新たに設定した場所である。層位は基本的に表土があり，その下はすぐ岩盤か黄褐色の地山である。

1．遺構　（第145図）

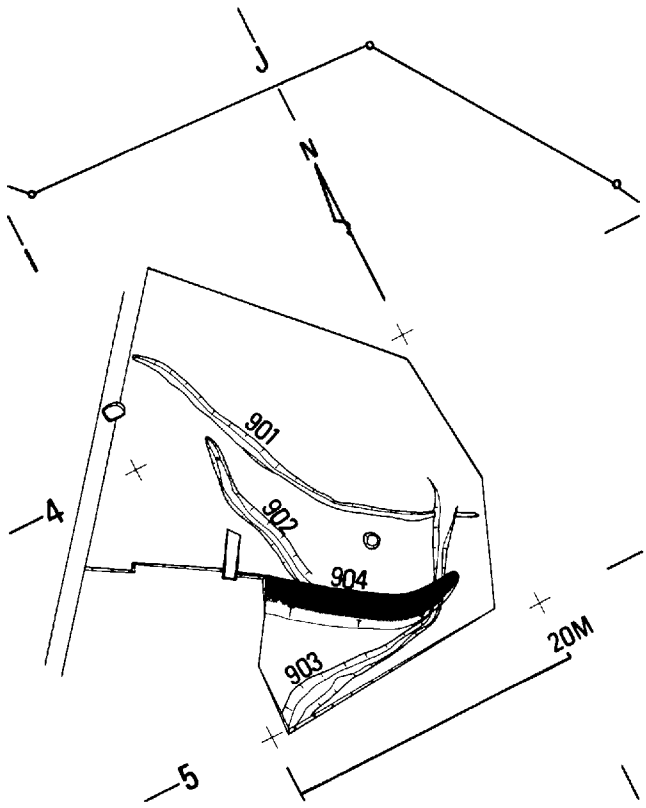
9区における遺構は，北東から南西に向って迫出した尾根に存在する。表土下はすぐ岩盤で，901，902，903などの溝は岩盤を削ってつくられていた。

901は斜面のため，低い方の肩はつかめないが，等高線に平行して溝があったものと思われる。

902は低い方へ向って延びる溝で，版築状遺構の下に入る。巾約1㎝前後で断面はU字形をなす。

903は901の溝を切って，版築の下を通り，低い方へ向って延びる溝である。遺物は土鍋の破片が少量出土したが，時期を決定できるほどしっかりしたものでない。しかし8区で出土している土鍋と似ているので，鎌倉時代のものと考えている。

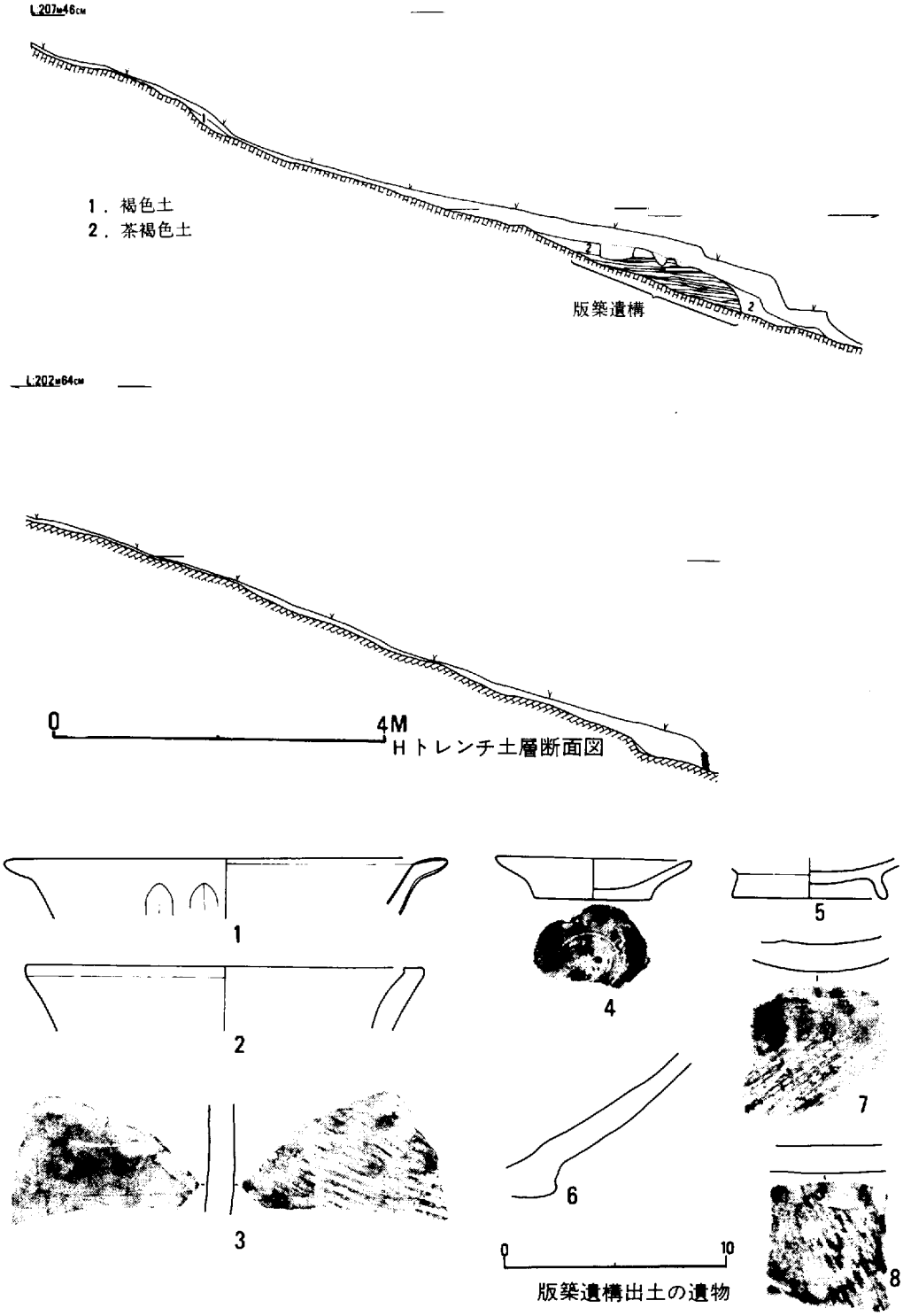
904は薄い土層がほぼ水平に，何層も確認できたので，寺院址などの版築と考えた。版築は南側が畑で削られ，上面もゴボウなどの作物のため残りはよくない。現在は土手状にしか残っていないが，もっと南西方向にあったものと思われる。



第145図　9区遺構図

2．遺物（第146図）

版築の上面から出土したもので，1は青磁，2．3は須恵器，4．5は土師器，7・8は瓦である。7・8の瓦は凹面はナデて仕上げ，凸面は細かい格子のタタキがある。色調は凸面が黒色，凹面は灰褐色を呈す。この他瑪瑙製の数珠玉も出土している。このような遺物と，版築から，鎌倉時代にこの場所に寺院があったものと思われるが，どのような建物であったのかはつかめなかった。　（竹田）



第146図　9区トレンチ土層断面と9区の遺物

第五章　まとめにかえて

◦調査の進め方について

トレンチ掘り下げ中に遺構を検出した時点で，遺構面が破壊されると考えて掘り下げをやめた。これは，遺跡の垂直的なひろがりを判断する材料を欠くこととなり，以後の調査を進めていく上で，しばしば支障をもたらした。

発掘調査の主体は県教委であるので，調査方法等に一貫した方式があるべきと思われるが現実には調査員個人にその一切を委ねられている。そのために調査方法や調査の進め方については，各調査員の間に若干の差異があり，それぞれの持ち味として生かされる場合とその逆の場合とが生じる。この点は，単に発掘中だけでなく，整理・報告書段階にも見られるものである。

◦桃山遺跡の遺構と生活面の展開について

縄文時代

縄文時代早期・中期の遺物は出土しなかった。前期の遺物は８区で１片の土器片が出土している。前期の土器片は，弥生時代後期から古墳時代後期にかけての包含層の中に混入していたものであるが，前期に桃山の地に縄文人が訪れたことを裏付けている。後期の遺物は，２・３・８区で確認されている。２区では，弥生時代後期の包含層の下の層から出土した７片（１個体）のみである。弥生時代後期以前の堆積層からの出土であるが，他には遺物も遺構も存在しない。３区では弥生時代終末期の住居址内の埋め土中から１片出土した。これは住居埋没時の混入である。８区では，縄文時代後期の生活面（遺構は検出できなかったが木炭片が若干存在した）と包含層が存在する。晩期の遺物は出土しなかった。

弥生時代

弥生時代前期の遺構・遺物は存在しない。中期の前半の遺物は出土していないが，中期後半の遺物は３・４・７・８区で若干確認されており，４・８区ではこの時期のピットが検出されている。かなり広い範囲に生活面がひろがっていたことはわかるが，その大部分は土砂の流失に伴って消滅しているため実体はさだかでない。後期の遺構は２・３・４・６・８区に存在している。この時期になると桃山遺跡のほぼ全面を生活面として利用していたと思われる。この時期に属する遺構は，住居址・ピットが見られ，住居は単独もしくは２～３軒のかたまりをつくっている。

弥生時代の墳墓は１基も検出しなかった。この時代の墳墓は，別の地点（例えば縦貫道の用地の北側の斜面など）につくられたであろう。

古墳時代

古墳時代前期に属する遺構は，３～４世紀ごろののものは，１・３・４・５区で検出されて

いる。4区にはこの時期の住居址が8軒あり，3区では4軒検出されている。しかし，古墳時代前期の墳墓は存在しない。

古墳時代後期に属するものは，横穴式石室（現状のまま保存されることになったため石室内は未調査）1・箱式石棺2・土壙墓7・住居址6が4・7区に存在する。年代的にわけると，6世紀初めの土壙墓1，6世紀後半の土壙墓6・住居址6，7世紀初めの箱式石棺1となる（横穴式石室は未調査のため時期不明）。この時期の集落の大部分は，他の地点（例えば縦貫道用地の南の斜面など）に移動したものであろう。

奈良時代

奈良時代に属する遺物は，4区の桃山1号墳（横穴式石室）の天井石の間に埋葬された蔵骨器およびこれに伴う若干の遺物（共に須恵器）のみである。奈良時代の遺構・遺物は他にはまったく検出しなかった。

平安時代

この時代に属する遺構は，建物数棟・火葬墓1・版築遺構・土壙墓数基・鍛冶炉数基を検出した。遺物はほぼ全区にみられたが，上記の遺構は3・6・8・9区で検出した。特に3区で検出した火葬墓は，上部施設や副葬遺物から，被葬者の階層・性格をかなり限定できる材料といえよう。火葬墓の副葬遺物の中に一かたまりの鉄釘（約30本）があり，数基の鍛冶炉および9区に一部残存していた版築遺構，2片だけであるが布目平瓦片の出土などからみて，桃山の地にこの時代の寺院が建立されていたとも考えられる。

鎌倉時代

鎌倉時代の遺物は，9区の版築遺構をおおう土層の中から若干出土した。その中には数珠玉とも見えるものが含まれている。平安寺院の一部が鎌倉時代にも残っていたのであろうか。

室町時代以降

室町時代以降現代までの間では，墳墓以外の遺構は検出していない。室町時代以後は墓地として利用され，集落は現在の集落と重なっているのであろう。

本項は，4名の調査担当者の討議を経ないで，弥生時代末から古墳時代初めにかけての集落構成のあり方や平安火葬墓の被葬者の性格の位置づけ等多くの問題点を残したまま，田仲がまとめたものである。今後，残された諸問題の解明される機会が訪れることを期待したい。

最後になりましたが，桃山遺跡の調査にあたり，縦貫道埋蔵文化財保護対策委員会の各委員・北房町教育委員会をはじめ地元の多くの方々のご援助・ご協力をいただき調査を終らせることができました。記して感謝の意を表します。

なお，桃山遺跡8区の住居址出土のメヒシバの育成・観察に関する岡山大学農業生物研究所笠原安夫教授の玉稿については，原稿〆切日や紙面の関係から本書に載せることができなくなり，次回刊行の第8分冊に載せるという不手際をおわびいたします。

1　桃山遺跡遠望（南上空から）

2　遺跡遠望（東上空から）

図版２

１　ＴＩ発掘風景（北東から）

２　Ｐ110土器出土状態（北から）

P 101

P 101

P 105

P 104

P 112

P 110

I 区　ピット出土土器

図版 4

1　2区遺構検出状況・全景（西より）

2　2区遺構掘り上げ・全景（西より）

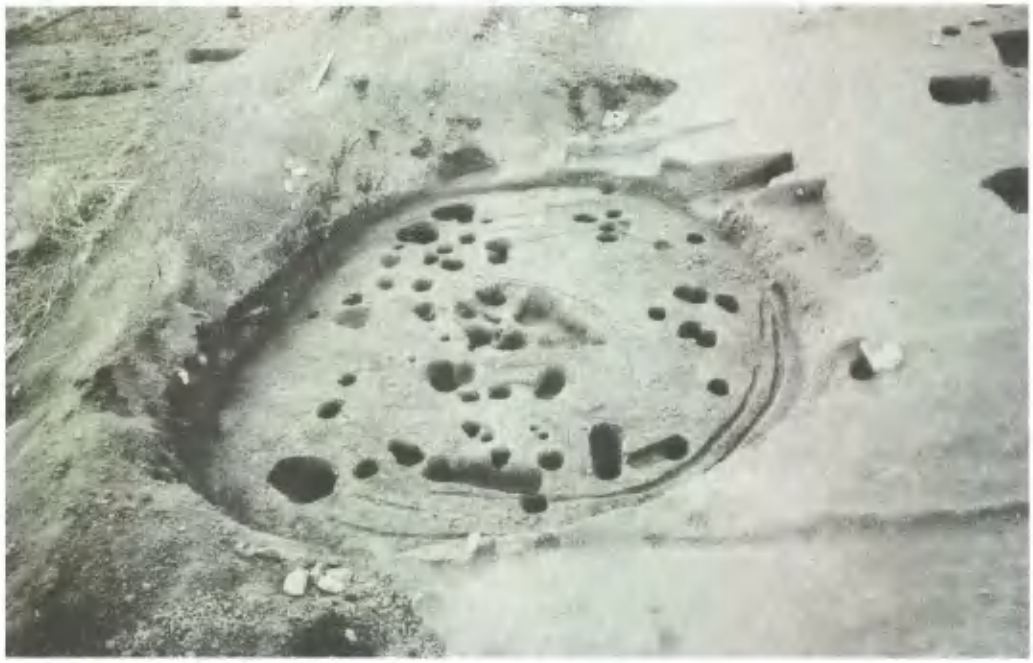
1　2区住居址(H－201)・建物・ピット・不明溝状遺構・柱穴・検出状況（南より）

2　2区住居址(H－201)・建物・ピット・柱穴・掘り上げ状況（南より）

図版 6

1　住居址(H－202)・柱穴（南より）

2　住居址(H－203)・全景（東より）



1　住居址(H－203)・掘り上げ（東より）

2　H－203内遺物出土状態

図版 8

1　Pit－203　（南より）

2　Pit－203内出土遺物近影

1

Pit－205内遺物出土状態
（南より）

2

南北トレンチ北端土層断面
（南より）

図版10

1～3・5…H－203，4…H—201，（P—1）出土遺物　6…南北トレンチ（2層），7・8…黒色有機土層（3層）

1

2

3

4

5

6

7

P－203 出土遺物

図版12

P－205 出土遺物

2区　出土遺物（1……P—208）

図版14

1　H301・H302掘り上げ状態（東から）

2　H302鉄斧出土状態（西から）

1　H305・H306・H307掘り上げ状態（北西から）

2　P311炭化米検出状態（東から）

図版16

1　火301石積状態（西から）

2　火301積み石を取り除いた状態（内側の石囲いは枡状になっている）（西から）

1　火301蔵骨器の蓋(緑釉皿)を開いた状態（西から）　上　内蓋
　　下　外蓋

2　火301蔵骨器埋納状態断面（西から）（外蓋は載せていない）

図版18

1　土303掘り上げ状態（東から）（左は土301）

2　土301人骨および鉄器出土状態（南から）

1　土302人骨および土器出土状態（南から）

2　土309人骨および土器出土状態(部分)（南から）

図版20

1　建物301掘り上げ状態（東から）

2　土304石蓋の状態（南から）

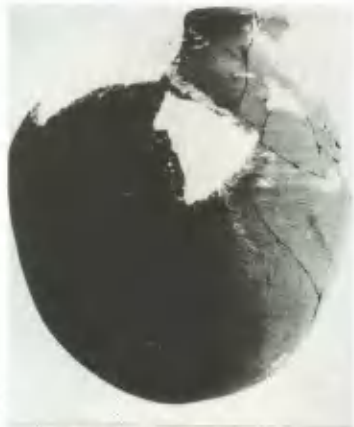
T2

3区2層

3区3層

H302

H304



土303

P310

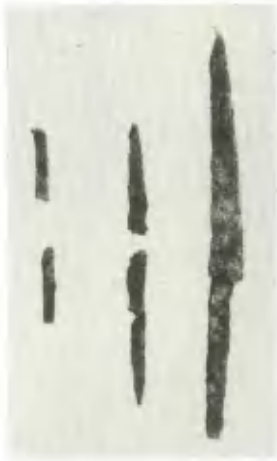
H307

土301

土309

3区　各遺構出土土器・鉄器

図版22



火301蔵骨器および副葬品

図版23

桃山　1号古墳（調査前）

図版24

桃山 1号古墳（調査後）

桃山 1号古墳（調査後）

図版25

1　C—451古墳　主体部

2　C—451古墳　遺物出土状況

図版26

1　C—452古墳　主体部
（手前はH—404 出土遺物）

2　C— 452 古墳　遺物出土状況

図版27

1

2

3

4

5

6

7

8

C—452古墳　出土遺物

図版28

1

3

2

4

1　C—451古墳　出土遺物

2　C—453墳墓　主体部

図版29

1　401号　住居址

2　401号　住居址出土遺物

図版30

1　403号　住居址

2　P—487　出土遺物

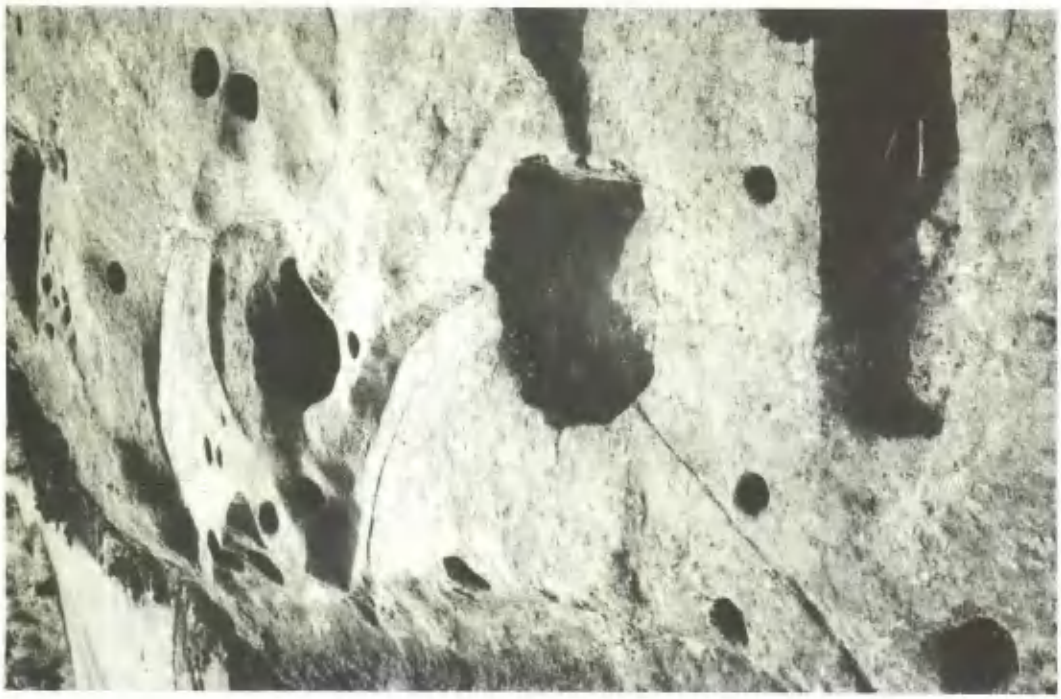
3　P—481　出土遺物

図版31

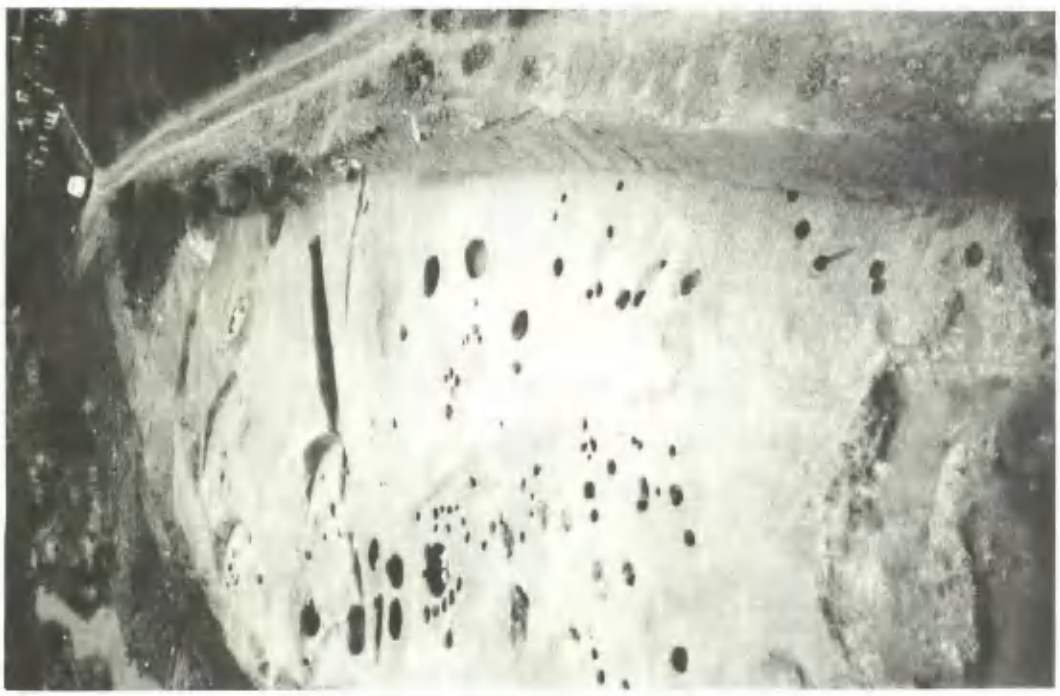
1　404号　住居址

2　406号　住居址

図版32



1　H－403　H－405　H－407　P－475　P－476



2　第2・3地点　全景

図版33

1　P－481　遠景

2　P－481　近景

図版34

1　P－484

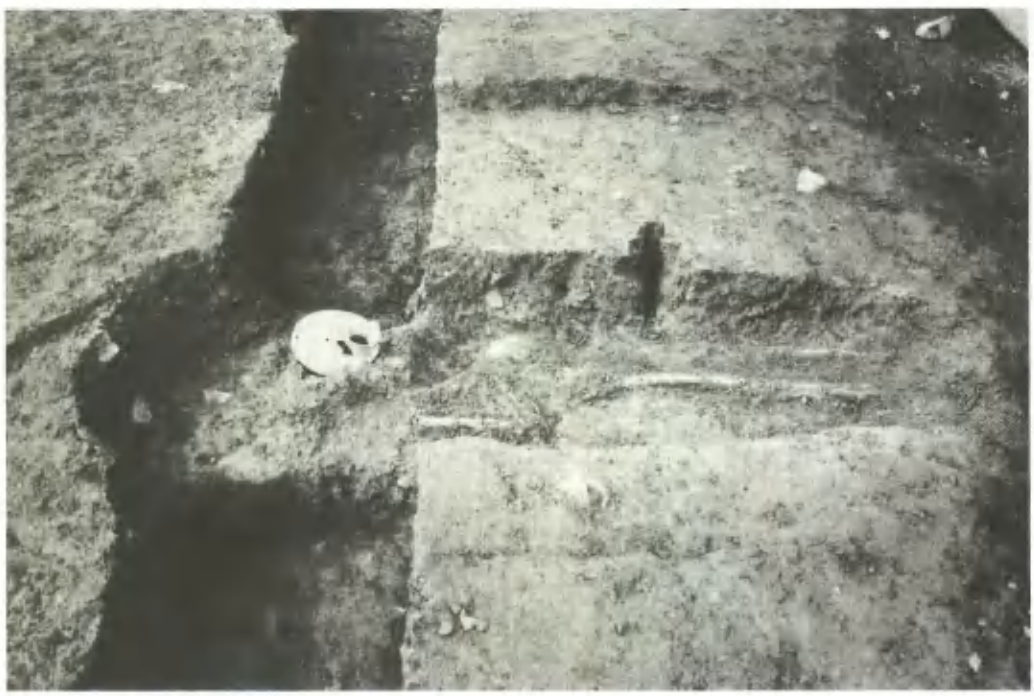
2　P－479

1　土601人骨出土状態（南から）

2　土601掘り上げ状態（北から）　左の丸い凹みの所に人骨があった

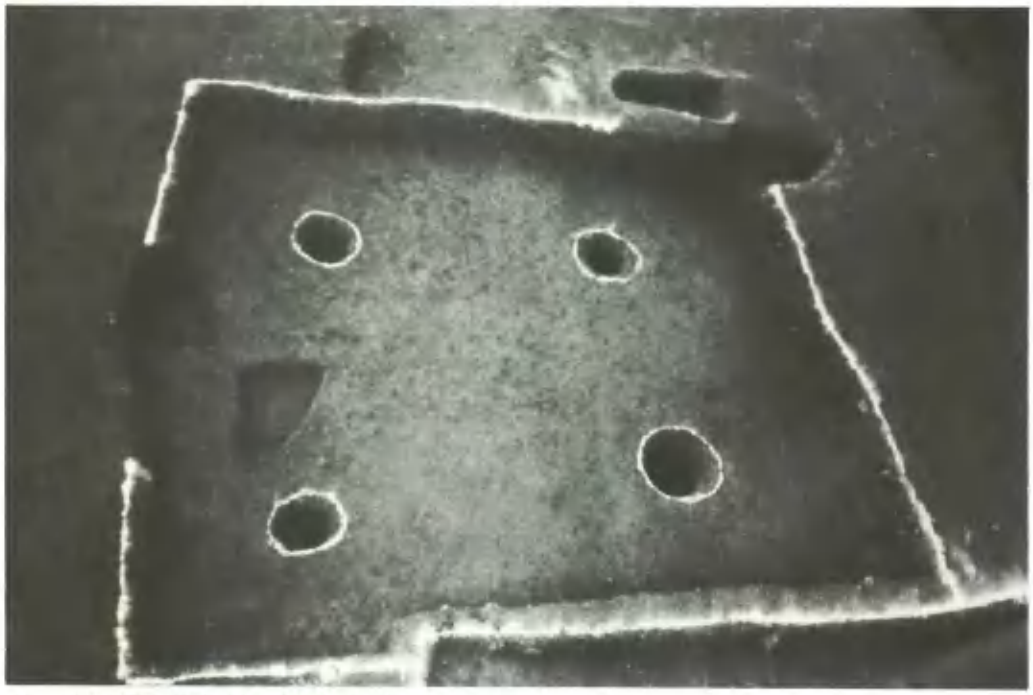
図版36

1　建物602掘り上げ状態（北から）



2　土604人骨および土器出土状態（南から）

1　7区全景（西から）



2　H701掘り上げ状態（南東から）

図版38

5区表採

P502

6区表土層

土604

土701

5～7区　出土遺物

8区縄文時代の遺物(s : $\frac{1}{2}$)

図版40

8区　分銅形土製品

8区　小玉

9区　青磁

9区　数珠玉

8区　815出土遺物

8・9区出土遺物（S：$\frac{1}{2}$）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (12)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 7

昭和51年3月 印刷
昭和51年3月 発行

発 行 岡山県教育委員会
印 刷 ニッシン印刷株式会社